岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集

清田台遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業要害地区関連発掘調査

（第２分冊　遺物編）

岩手県千厩地方振興局千厩農村整備事務所

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

清田台（きよただい）遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業要害地区関連発掘調査

（第２分冊　遺物編）

本文目次

目次
Ⅰ．出土した遺物
1．土器（遺構内・遺構外・捨て場）……1
2．土製品（遺構内・遺構外）……4
3．ミニチュア土器……4
4．石器・石製品……4
5．古銭……5
6．編物……5
Ⅱ．まとめ……260
1．土器……260
2．石鏃……260
3．特殊敲石としたものについて……263
Ⅲ．出土遺物の鑑定・分析結果……264
1．清田台遺跡出土動物遺存体について……264
2．清田台遺跡出土炭化材の樹種……281
3．清田台遺跡出土の植物遺体……282
4．清田台遺跡の石鏃の整理について……284
5．清田台遺跡出土石器の使用痕分析について……302
6．清田台遺跡出土石錐の使用痕……315
7．清田台遺跡出土アスファルトの成分分析……319
報告書抄録

図版目次

第1図　1号住居跡出土遺物・2号住居跡出土遺物(1)……6
第2図　2号住居跡出土遺物(2)・3号住居跡出土遺物(1)……7
第3図　3号住居跡出土遺物(2)・4号住居跡出土遺物……8
第4図　5・6住居跡出土遺物・7号住居跡出土遺物(1)……9
第5図　7号住居跡出土遺物(2)……10
第6図　7号住居跡出土遺物(3)・8号住居跡出土遺物(1)……11
第7図　8号住居跡出土遺物(2)……12
第8図　8号住居跡出土遺物(3)……13
第9図　8号住居跡出土遺物(4)……14
第10図　8号住居跡出土遺物(5)……15
第11図　8号住居跡出土遺物(6)……16
第12図　9号住居跡出土遺物(1)……17
第13図　9号住居跡出土遺物(2)……18
第14図　9号住居跡出土遺物(3)……19
第15図　9号住居跡出土遺物(4)・10号住居跡出土遺物(1)……20
第16図　10号住居跡出土遺物(2)・

11号住居跡出土遺物 ……21
第17図 13～16号住居跡出土遺物 ……22
第18図 17号住居跡出土遺物(1) ……23
第19図 17号住居跡出土遺物(2) ……24
第20図 18号住居跡出土遺物(1) ……25
第21図 18号住居跡出土遺物(2) ……26
第22図 19号住居跡出土遺物(1) ……27
第23図 19号住居跡出土遺物(2)・
21号住居跡出土遺物(1) ……28
第24図 21号住居跡出土遺物(2) ……29
第25図 21号住居跡出土遺物(3) ……30
第26図 22号住居跡出土遺物(1) ……31
第27図 22号住居跡出土遺物(2) ……32
第28図 22号住居跡出土遺物(3) ……33
第29図 23号住居跡出土遺物(1) ……34
第30図 23号住居跡出土遺物(2) ……35
第31図 23号住居跡出土遺物(3) ……36
第32図 23号住居跡出土遺物(4)・
24号住居跡出土遺物(1) ……37
第33図 24号住居跡出土遺物(2) ……38
第34図 24号住居跡出土遺物(3)・
25号住居跡出土遺物(1) ……39
第35図 25号住居跡出土遺物(2)・
26号住居跡出土遺物(1) ……40
第36図 26号住居跡出土遺物(2)・
28号住居跡出土遺物(1) ……41
第37図 28号住居跡出土遺物(2) ……42
第38図 28号住居跡出土遺物(3) ……43
第39図 28号住居跡出土遺物(4) ……44
第40図 28号住居跡出土遺物(5) ……45
第41図 28号住居跡出土遺物(6) ……46
第42図 28号住居跡出土遺物(7) ……47
第43図 28号住居跡出土遺物(8) ……48
第44図 29号住居跡出土遺物・
30号住居跡出土遺物(1) ……49
第45図 30号住居跡出土遺物(2) ……50
第46図 30号住居跡出土遺物(3)・
31号住居跡出土遺物(1) ……51
第47図 31号住居跡出土遺物(2)・
32号住居跡出土遺物 ……52
第48図 33号住居跡出土遺物・
34号住居跡出土遺物(1) ……53
第49図 34号住居跡出土遺物(2) ……54
第50図 35・37号住居跡出土遺物・
38号住居跡出土遺物(1) ……55
第51図 38号住居跡出土遺物(2) ……56
第52図 38号住居跡出土遺物(3) ……57
第53図 39号住居跡出土遺物・
40号住居跡出土遺物(1) ……58
第54図 40号住居跡出土遺物(2)・
41号住居跡出土遺物(1) ……59
第55図 41号住居跡出土遺物(2)・
44号住居跡出土遺物・
46号住居跡出土遺物(1) ……60
第56図 46号住居跡出土遺物(2)・
47号住居跡出土遺物(1) ……61
第57図 47号住居跡出土遺物(2) ……62
第58図 47号住居跡出土遺物(3) ……63
第59図 47号住居跡出土遺物(4) ……64
第60図 47号住居跡出土遺物(5) ……65
第61図 48号住居跡出土遺物(1) ……66
第62図 48号住居跡出土遺物(2) ……67
第63図 49～51号住居跡出土遺物・
53号住居跡出土遺物(1) ……68
第64図 53号住居跡出土遺物(2) ……69
第65図 1・3・4号炉出土遺物 ……70
第66図 8・9・11号炉出土遺物 ……71
第67図 5号焼土出土遺物 ……72
第68図 7・11号焼土出土遺物、
1号埋設土器 ……73
第69図 3号埋設土器、配石遺構出土遺物、
1号住居状遺構出土遺物(1) ……74
第70図 1号住居状遺構出土遺物(2) ……75
第71図 1号住居状遺構出土遺物(3)・
2号住居状遺構出土遺物 ……76
第72図 3号住居状遺構出土遺物、

1～3・5・7号土坑出土遺物 ……77
第 73図 9・10・15号土坑出土遺物・16号土坑出土遺物(1) ……78
第 74図 16号土坑出土遺物(2)・17～20・23号土坑出土遺物 ……79
第 75図 24～27号土坑出土遺物 ……80
第 76図 28号土坑、柱穴群出土遺物 ……81
第 77図 Ⅰ・Ⅱ－1・Ⅱ－2(1)類 ……82
第 78図 Ⅱ－2(2)・Ⅱ－3・Ⅲ－1－A(1)類 ……83
第 79図 Ⅲ－1－A(2)類 ……84
第 80図 Ⅲ－1－A(3)・Ⅲ－1－B(1)類 ……85
第 81図 Ⅲ－1－B(2)類 ……86
第 82図 Ⅲ－2・Ⅲ－2－A類 ……87
第 83図 Ⅲ－2－B(1)類 ……88
第 84図 Ⅲ－2－B(2)類 ……89
第 85図 Ⅲ－2－B(3)類 ……90
第 86図 Ⅲ－2－B(4)・Ⅲ－2－C類 ……91
第 87図 Ⅲ－3(1)類 ……92
第 88図 Ⅲ－3(2)類 ……93
第 89図 Ⅲ－3(3)・Ⅲ－4・Ⅲ－6類 ……94
第 90図 Ⅲ－5(1)類 ……95
第 91図 Ⅲ－5(2)・Ⅳ－1－A(1)類 ……96
第 92図 Ⅳ－1－A(2)類 ……97
第 93図 Ⅳ－1－A(3)・Ⅳ－1－B・Ⅳ－2－A類 ……98
第 94図 Ⅳ－2－B・Ⅳ－3(1)類 ……99
第 95図 Ⅳ－3(2)類 ……100
第 96図 Ⅳ－4(1)類 ……101
第 97図 Ⅳ－4(2)・Ⅳ－5(1)類 ……102
第 98図 Ⅳ－5(2)類 ……103
第 99図 Ⅳ－5(3)類 ……104
第100図 Ⅳ－5(4)類 ……105
第101図 Ⅳ－5(5)・Ⅴ－1－A(1)類 ……106
第102図 Ⅴ－1－A(2)類 ……107
第103図 Ⅴ－1－B(1)類 ……108
第104図 Ⅴ－1－B(2)・Ⅴ－2－A類 ……109
第105図 Ⅴ－2－B・Ⅴ－2－C類 ……110
第106図 Ⅴ－3・Ⅴ－4・Ⅵ－1(1)類 ……111
第107図 Ⅵ－1(2)・Ⅵ－2・Ⅶ－1(1)類 ……112
第108図 Ⅶ－1(2)・Ⅶ－2・Ⅶ－3類 ……113
第109図 Ⅶ－1・Ⅶ－2(1)類 ……114
第110図 Ⅶ－2(2)類 ……115
第111図 Ⅶ－2(3)・Ⅶ－3(1)類 ……116
第112図 Ⅶ－3(2)・Ⅶ－4(1)類 ……117
第113図 Ⅶ－4(2)・Ⅶ－5・Ⅶ－6・Ⅸ－1・Ⅸ－2・Ⅸ－5・Ⅸ－6類 ……118
第114図 Ⅹ(1)類 ……119
第115図 Ⅹ(2)類 ……120
第116図 1層出土遺物(1) ……121
第117図 1層出土遺物(2) ……122
第118図 1層出土遺物(3) ……123
第119図 1層出土遺物(4) ……124
第120図 1層出土遺物(5) ……125
第121図 1層出土遺物(6) ……126
第122図 1層出土遺物(7) ……127
第123図 1層出土遺物(8) ……128
第124図 1層出土遺物(9) ……129
第125図 1層出土遺物(10) ……130
第126図 1層出土遺物(11) ……131
第127図 1層出土遺物(12) ……132
第128図 1層出土遺物(13) ……133
第129図 1層出土遺物(14) ……134
第130図 1層出土遺物(15) ……135
第131図 1層出土遺物(16) ……136
第132図 1層出土遺物(17)・2層出土遺物・3a層出土遺物(1) ……137
第133図 3a層出土遺物(2) ……138
第134図 3a層出土遺物(3) ……139
第135図 3a層出土遺物(4) ……140
第136図 3a層出土遺物(5) ……141
第137図 3a層出土遺物(6) ……142

第138図　3 a層出土遺物(7)　……143
第139図　3 a層出土遺物(8)　……144
第140図　3 a層出土遺物(9)・
3 b層出土遺物(1)　……145
第141図　3 b層出土遺物(2)　……146
第142図　3 b層出土遺物(3)　……147
第143図　3 b層出土遺物(4)　……148
第144図　4層出土遺物(1)　……149
第145図　4層出土遺物(2)　……150
第146図　4層出土遺物(3)　……151
第147図　4層出土遺物(4)　……152
第148図　4層出土遺物(5)　……153
第149図　4層出土遺物(6)　……154
第150図　4層出土遺物(7)　……155
第151図　4層出土遺物(8)　……156
第152図　4層出土遺物(9)　……157
第153図　4層出土遺物(10)　……158
第154図　4層出土遺物(11)　……159
第155図　4層出土遺物(12)　……160
第156図　4層出土遺物(13)　……161
第157図　4層出土遺物(14)　……162
第158図　4層出土遺物(15)　……163
第159図　4層出土遺物(16)　……164
第160図　4層出土遺物(17)　……165
第161図　4層出土遺物(18)・5層出土遺物　‥166
第162図　2・7号住居跡出土遺物・
8号住居跡出土遺物(1)　……167
第163図　8号住居跡出土遺物(2)・
9・14・17～19号住居跡出土遺物・
21号住居跡出土遺物(1)　……168
第164図　21号住居跡出土遺物(2)・
22号住居跡出土遺物　……169
第165図　23号住居跡出土遺物・
24号住居跡出土遺物(1)　……170
第166図　24号住居跡出土遺物(2)・
25号住居跡出土遺物・
28号住居跡出土遺物(1)　……171
第167図　28号住居跡出土遺物(2)・30・32・
33号住居跡出土遺物　……172
第168図　34・35・38・39号住居跡出土遺物・
40号住居跡出土遺物(1)　……173
第169図　40号住居跡出土遺物(2)・
46・53号住居跡出土遺物、
7・11号炉出土遺物、
1・2号住居状遺構出土遺物　……174
第170図　3号住居状遺構出土遺物、5・7・8・
28号土坑出土遺物、柱穴群6P5・
柱穴群11P8出土遺物　……175
第171図　土偶(1)　……176
第172図　土偶(2)　……177
第173図　土偶(3)　……178
第174図　耳栓、垂飾品、腕輪　……179
第175図　耳栓、鐸形、動物形土製品等　……180
第176図　土玉等、円盤状土製品(1)　……181
第177図　円盤状土製品(2)　……182
第178図　土製品(不明)　……183
第179図　遺構内外出土ミニチュア土器(1)‥‥184
第180図　1・2号住居跡出土遺物・
3号住居跡出土遺物(1)　……185
第181図　3号住居跡出土遺物(2)・
4～6号住居跡出土遺物・
7号住居跡出土遺物(1)　……186
第182図　7号住居跡出土遺物(2)・
8号住居跡出土遺物(1)　……187
第183図　8号住居跡出土遺物(2)　……188
第184図　8号住居跡出土遺物(3)　……189
第185図　8号住居跡出土遺物(4)　……190
第186図　9号住居跡出土遺物(1)　……191
第187図　9号住居跡出土遺物(2)　……192
第188図　10・11・13号住居跡出土遺物・
14号住居跡出土遺物(1)　……193
第189図　14号住居跡出土遺物(2)・
15・16号住居跡出土遺物・
17号住居跡出土遺物(1)　……194
第190図　17号住居跡出土遺物(2)・
18号住居跡出土遺物　……195

第191図　19号住居跡出土遺物（1）　……196
第192図　19号住居跡出土遺物（2）・
21号住居跡出土遺物（1）　……197
第193図　21号住居跡出土遺物（2）・
22号住居跡出土遺物（1）　……198
第194図　22号住居跡出土遺物（2）・
23号住居跡出土遺物（1）　……199
第195図　23号住居跡出土遺物（2）　……200
第196図　23号住居跡出土遺物（3）　……201
第197図　23号住居跡出土遺物（4）・
24号住居跡出土遺物（1）　……202
第198図　24号住居跡出土遺物（2）　……203
第199図　24号住居跡出土遺物（3）　……204
第200図　25・26号住居跡出土遺物・
28号住居跡出土遺物（1）　……205
第201図　28号住居跡出土遺物（2）　……206
第202図　28号住居跡出土遺物（3）　……207
第203図　28号住居跡出土遺物（4）　……208
第204図　28号住居跡出土遺物（5）　……209
第205図　28号住居跡出土遺物（6）　……210
第206図　28号住居跡出土遺物（7）・
29号住居跡出土遺物・
30号住居跡出土遺物（1）　……211
第207図　30号住居跡出土遺物（2）・
31号住居跡出土遺物　……212
第208図　32・33号住居跡出土遺物・
34号住居跡出土遺物（1）　……213
第209図　34号住居跡出土遺物（2）・
35・37号住居跡出土遺物　……214
第210図　38号住居跡出土遺物　……215
第211図　39号住居跡出土遺物・
40号住居跡出土遺物（1）　……216
第212図　40号住居跡出土遺物（2）　……217
第213図　41・44号住居跡出土遺物・
47号住居跡出土遺物（1）　……218
第214図　47号住居跡出土遺物（2）　……219
第215図　47号住居跡出土遺物（3）　……220
第216図　48・49・53号住居跡出土遺物・
1～3・7・9・10号炉出土遺物
……221
第217図　11号炉出土遺物、
1号住居状遺構出土遺物（1）　……222
第218図　1号住居状遺構出土遺物（2）　……223
第219図　2・3号住居状遺構出土遺物、
1・7号焼土出土遺物、1号埋設土器
……224
第220図　石斧埋納遺構出土遺物、配石遺構
出土遺物、2～9号土坑出土遺物
……225
第221図　10・11・16・20・24・27・28号土坑
出土遺物、柱穴群1・4・5出土遺物
……226
第222図　柱穴群6P・7P・14出土遺物　……227
第223図　遺構外出土石器（1）　……228
第224図　遺構外出土石器（2）　……229
第225図　遺構外出土石器（3）　……230
第226図　遺構外出土石器（4）　……231
第227図　遺構外出土石器（5）　……232
第228図　遺構外出土石器（6）　……233
第229図　遺構外出土石器（7）　……234
第230図　遺構外出土石器（8）　……235
第231図　遺構外出土石器（9）　……236
第232図　遺構外出土石器（10）　……237
第233図　遺構外出土石器（11）　……238
第234図　遺構外出土石器（12）　……239
第235図　遺構外出土石器（13）　……240
第236図　遺構外出土石器（14）　……241
第237図　遺構外出土石器（15）　……242
第238図　遺構外出土石器（16）　……243
第239図　遺構外出土石器（17）　……244
第240図　遺構外出土石器（18）　……245
第241図　遺構外出土石器（19）　……246
第242図　遺構外出土石器（20）　……247
第243図　遺構外出土石器（21）　……248
第244図　遺構外出土石器（22）　……249
第245図　遺構外出土石器（23）　……250

第246図　遺構外出土石器(24) ……251
第247図　遺構外出土石器(25) ……252
第248図　遺構外出土石器(26) ……253
第249図　遺構外出土石器(27) ……254
第250図　遺構外出土石器(28) ……255
第251図　遺構外出土石器(29) ……256
第252図　遺構外出土石器(30) ……257
第253図　古銭 ……258
第254図　編物の付着した礫 ……259
第255図　石鏃重量分布 ……262
第256図　石錐拡大写真の部位 ……316
第257図　清田台遺跡No.5のパラフィン成分のマススペクトル ……322
第258図　過去に分析の行われたアスファルトの分布図 ……323

写真図版目次

写真図版1　動物遺存体(1) ……269
写真図版2　動物遺存体(2) ……270
写真図版3　動物遺存体(3) ……271
写真図版4　動物遺存体(4) ……272
写真図版5　動物遺存体(5) ……273
写真図版6　動物遺存体(6) ……274
写真図版7　清田台遺跡出土の植物遺体 ……283
写真図版8　石器写真(1) ……308
写真図版9　石器写真(2) ……309
写真図版10　石器写真(3) ……310
写真図版11　石器写真(4) ……311
写真図版12　石器写真(5) ……312
写真図版13　石器写真(6) ……313
写真図版14　石器写真(7) ……314
写真図版15　石錐の使用痕拡大写真1 ……317
写真図版16　石錐の使用痕拡大写真2 ……318
写真図版17　出土アスファルト ……324

表目次

表1　各遺跡の完形石鏃の重量分布と百分率 ‥261
表2　動物遺存体(1) ……275
表3　動物遺存体(2) ……276
表4　動物遺存体(3) ……277
表5　動物遺存体(4) ……278
表6　動物遺存体(5) ……279
表7　動物遺存体(6) ……280

Ⅰ．出土した遺物

1．土器

土器は調査区全体から大コンテナ320箱（約6000kg）出土している。特に北側調査区の南側での出土が多く、遺構も多数検出されている。遺構出土土器については、遺構の重複が多く、平面形を把握することが困難であったことから、他の遺構の土器の混入も考慮に入れなければならない。そのため遺構と土器の共伴関係が明確ではない。また、遺構外包含層中からの出土についても、他年度にわたる調査のため年度ごとの層位の捉え方に相違があり、層位からの新旧関係は把握できなかった。また、北側調査区中央から検出された土器捨て場（中期前葉から中葉期）と見られる包含層については、層位把握後遺物を取り上げたが、旧沢に近いグリッドでは、下位の層から上位の層と同じ時期の土器が出土したりしているが、これは沢に近い部分に斜面上位から転落した層があり、大量の湧水の為に確認できなかったものと見られる。

本報告書の第Ⅰ～Ⅳ群の土器の分類については、北上市鳩岡崎遺跡（岩手県教育委員会1982）、盛岡市大館町遺跡（(1978）北上市滝ノ沢遺跡（1983,90,91）を参考にした。

○第Ⅰ群土器（大木５式と見られる土器）

口縁部に細い隆帯で鋸歯状文を描くものである。

○第Ⅱ群土器（大木６式と見られる土器）

第１類　体部中位で膨らんだ後一度くびれて頸部から外傾する深鉢。体部中央で屈曲するものも含む。全体的に口縁部の幅は狭い。口縁部から体部まで文様体がある。縦位の沈線や隆帯の斜行沈線文あるいは曲線文を描く。施文具は半截竹管、隆帯。交互刺突も見られる。

A　波状口縁のもの。

B　平口縁のもの。

第２類　第１類で体部文様帯をもたないもの。

A　波状口縁のもの。

B　平口縁のもの。

第３類　金魚鉢形を呈するもの。

○第Ⅲ群土器（大木７a式と見られる土器）

口縁部に最大径をもち、口縁が開く深鉢。第Ⅰ群の深鉢に比べ細長い円筒形を呈する。口縁が内湾するものや口縁が開かないバケツ形、金魚鉢形もある。地文は縦、横回転。綾絡文を伴うものが多い。

第１類　体部中央で膨らみ、頸部から屈曲して外反する深鉢。本群を代表する器形。

A　大波状、大型の突起をもつものと波状、小型の突起をもつものがある。

頸部に沈線または刺突を伴う隆帯が巡る。４単位の波頂部から隆帯が垂下し区画する。区画内は平行沈線文、列点文、波状文　鋸歯状文、円文、同心文、原体圧痕文が施文されるものと無文のものがある。

B　平口縁のもの。文様帯等については、第１類と同様である。

C　地文のみのもので、口縁部は肥厚している。口縁部下端に突起状の貼付を伴う。

第２類　体部から口縁にかけて緩やかに外反するため、口縁と体部の境界が不明瞭なもの。口縁部は折

り返し肥厚するもの、沈線や隆帯、原体の圧痕で区画するものがある。刻みや圧痕のある横長あるいは突起状貼付をするものもある。

A　波状口縁をもつもの。文様帯等については、第１類と同様である。

B　平口縁のもの。文様帯等については、第１類と同様である。

C　地文のみのもので、口縁部は肥厚している。口縁部下端に突起状の貼付を伴う。

第３類　体部から口縁部にかけての傾きに変化がなくそのまま立ち上がるバケツ形の深鉢。口縁部は肥厚し折り返し口縁になっている。やや内湾するものを含む。沈線または刺突を伴う隆帯で口縁部を区画し、垂下する隆帯で４等分する。Y字状、逆V字状、釣り針形の貼付をするものがある。

第４類　金魚鉢形の器形をもつもの。

第５類　本群に相当すると見られる浅鉢。

第６類　第１～５類に分類できないもの。

○第Ⅳ群土器（大木７ｂ式と見られる土器）

第Ⅱ群土器と器形は類似するが、口縁部区画が不明瞭になってくる。連弧文、原体圧痕を多用する。

第１類　口縁が外傾する深鉢。頸部を沈線、隆帯で区画し口縁部文様帯を形成する。頸部沈線の下部に連弧文を伴うことが多い。

A　突起、波状口縁をもつもの。

連弧文から先端が釣り針形の沈線、波状文が垂下する例もある。稀に体部まで文様が広がるものもある。口縁部文様帯は沈線で矢羽文、弧状文、波状文、原体圧痕が見られる。長楕円形区画をもつものもある。

B　平口縁のもの。文様帯等はＡ類と同様である。

C　地文のみのもので、口縁部は肥厚している。口縁部下端に突起状の貼付を伴う。

第２類　口縁が僅かに外反する深鉢。口縁部は肥厚し折り返し口縁になっている。

A　波状口縁のもの。

B　平口縁のもの。

C　地文のみのもので、口縁部は肥厚している。口縁部下端に突起状の貼付を伴う。

第３類　体部から口縁部にかけての傾きに変化がなくそのまま立ち上がるバケツ形の深鉢。口縁部は肥厚し折り返し口縁になっている。やや内湾するものを含む。

第４類　口縁が内湾気味に立ち上がる深鉢。キャリパー形に変化するもの。文様は第１類に類似する。連弧文、交互刺突文、原体側面圧痕による施文が目立つ。

第５類　本群に相当すると見られる浅鉢。

○第Ⅴ群土器（大木８a式と見られる土器）

文様帯によって２類に分けた。器形は口縁が内湾気味に立ち上がるもの、口縁部が内湾するいわゆるキャリパー形と体部から緩やかに外反するタイプがある。波状口縁、平口縁のいずれもあり、１～４単位の突起が付くものもある。

第１類　口縁部文様帯のみの深鉢。

A　波状口縁。横S字状、C字状、あるいは貫通孔のある台状の突起をもつもの。

頸部は隆帯で区画し、区画の中に渦巻文、波状文を施文する。三角形の区画のものは、区画の連

結部分に刻みのある貼付をする例もある。キャリパー形を呈するものが多い。貼り付けされている隆帯は調整されているものと未調整のものがある。調整されているものは竹管状の工具で行われるため隆沈線を呈する。

B　平口縁のもの。複合口縁で波状、C字状、ブリッヂ状貼付をしている。文様はAと同様である。

第２類　体部文様体までもつ深鉢。

A　波状口縁。第１類のAと同様の文様をもつ。文様に原体圧痕、交互刺突による波状文、連弧文といったものがある。波頂部に渦巻文、不整の横S字文をもつ。平行沈線による直線文、波状文を施文している。口縁部文様帯に原体圧痕のみのものもある。

B　平口縁のもの。文様はAと同様である。

第３類　地文のみのもの

第４類　本群に相当すると見られる浅鉢。

第５類　本群に相当すると見られる壺。

○第Ⅵ群土器（大木９式と見られる土器）

渦巻文、楕円文、逆U字文がモチーフの深鉢で、全体的に内湾する器形が多く、外反するものは少ない。

第１類　深鉢

第２類　浅鉢

第３類　壺

○第Ⅶ群土器（大木10式と見られる土器）

体部でふくらみをもち一度くびれた後口縁が外反する器形が多い。

第１類　隆帯及び沈線で区画した内部を磨消している。文様連結部や端部に鰭状の隆帯が付く例が多い。波状口縁、平口縁の両方あり、波状口縁の場合、中空になるものや貫通孔をもつものがある。器種には、深鉢のほか壺、浅鉢がある。浅鉢には、１単位の注口を飾りにもつものもある。

第２類　口縁部や円形の区画内に刺突文をもつもの。

第３類　文様帯をもたない口縁部を沈線で区画し、磨り消しているもの。

○第Ⅷ群土器（後期と見られる土器）

第１類（後期初頭の門前式と見られるもの）

連鎖状隆帯、刺突列点文をもつもの。

A　器形は第Ⅳ群１類と同じだが、沈線や隆帯の代わりに刺突のある隆帯（連鎖状隆帯）や刺突列点文で施文。

B　平口縁で口縁部から体部中央までを隆帯方形区画で４つに分ける。縦位の隆帯の上下端部に１ないし２個の刻みをもつ。

第２類（堀之内１式、宮戸Ⅰｂ式、新山権現社Ⅰ群と見られるもの）

器形はいろいろあるが、文様のモチーフとしては縦長の楕円形である。連続するものもある。目立つのは丸みを帯びた体部の上位に、短く僅かに外反する口縁部がのる器形である。口縁部は無文で４単位の突起をもち、頸部とは沈線または橋状の把手で連絡する。突起には円文、同心文を施文している。

第３類（堀之内２式、新山権現社Ⅱ群と見られるもの）

数条の平行沈線文を主体にした土器で、波状口縁、平口縁のいずれもある。

第４類　本群にともなう地文のみのもの。波状口縁が多い。

○第Ⅸ群土器（晩期と見られる土器）

第１類　三叉文をもつもの。

第２類　羊歯状文をもつもの。

第３類　平行沈線をもつもの。

第４類　工字文をもつもの。

第５類　第１～４類に分類できなかったもの。

○第Ｘ群土器

第Ⅰ群～第Ⅸ群に含まれると思うが分類不能なもの。

２．土製品

出土した土製品は317点で、主なものとしては、土偶48点、耳栓12点、垂飾品５点、鐸形土製品６点、動物形土製品２点、斧状土製品３点、腕輪４点などである。用途等が不明なものも含まれている。

３．ミニチュア土器

37点のミニチュア土器が出土している。土器として使用された痕跡があるものも含まれるが、使用については疑問なものも含まれる。

４．石器・石製品

清田台遺跡から出土した石器・石製品は大コンテナで30箱で、登録したのは5111点（剥片は除く）、その内2042点を掲載した。内訳は、石鏃1381点、尖頭器18点、石錐182点、石匙65点、石篦７点、掻削器114点、楔形石器４点、磨製石斧84点、磨石類81点、石皿類18点、石棒類15点、石刀類８点、石錘２点、浮子６点、その他としては石鍬、異形石器、玦状耳飾り、垂飾品とみられる有孔石製品、特殊敲石、線刻石などである。これらの石器・石製品を形態若しくは使用した痕跡等から次のように分類した。

（１）　石鏃　Ａ　凹基無茎

Ｂ　平基無茎

Ｃ　入凹基

Ｄ　凹基有茎

Ｅ　平基有茎

Ｆ　凸基有茎

Ｇ　尖基

Ｈ　円基

Ｉ　未製品及び断片（Ａ～Ｈに分類できない破損品？）

（２）　尖頭器（石鏃様でも大型のもの）

（３）　石錐　Ａ１　つまみ部と長い錐部をもつもの

Ａ２　つまみ部と錐部の境が不明瞭なもの

B　剥片の端部を利用したもの

C　棒状のもの（A１の破損品の可能性があるものを含む）

（4）　石匙　A１　縦型両側調整

A２　縦型片側調整

A３　縦型未調整

B１　横型両側調整

B２　横型片側調整

B３　横型未調整

（5）　石篦　A　端部両側調整

B　端部片側調整

（6）　掻削器　A　両側調整がなされているもの

B　片側調整がなされているもの

C　円形で全周に調整がなされているもの

（7）　楔形石器（両側面に階段状剥離痕）

（8）　磨製石斧

（9）　磨石類（磨石A・敲石B・凹石Cとしての要素をもつもの）

（10）　石皿類（石皿A・台石B・砥石Cとしての要素を含むものも）

（11）　石棒類（加工A・未加工B）

（12）　石剣・石刀類

（13）　石錘（切目・有溝）

（14）　浮子　軽石製で貫通孔のあるもの

（15）　石鍬

（16）　異形石器

（17）　状耳飾り

（18）　垂飾品（含有孔石製品）

（19）　特殊敲石（細長い円礫の先端近くを敲打し、両端または片一方の端を角錐状にしたもの。）

※名称は宝ヶ峯遺跡（1991）齋藤報恩会編『特殊な叩き石』を参考にした。

（20）　線刻石

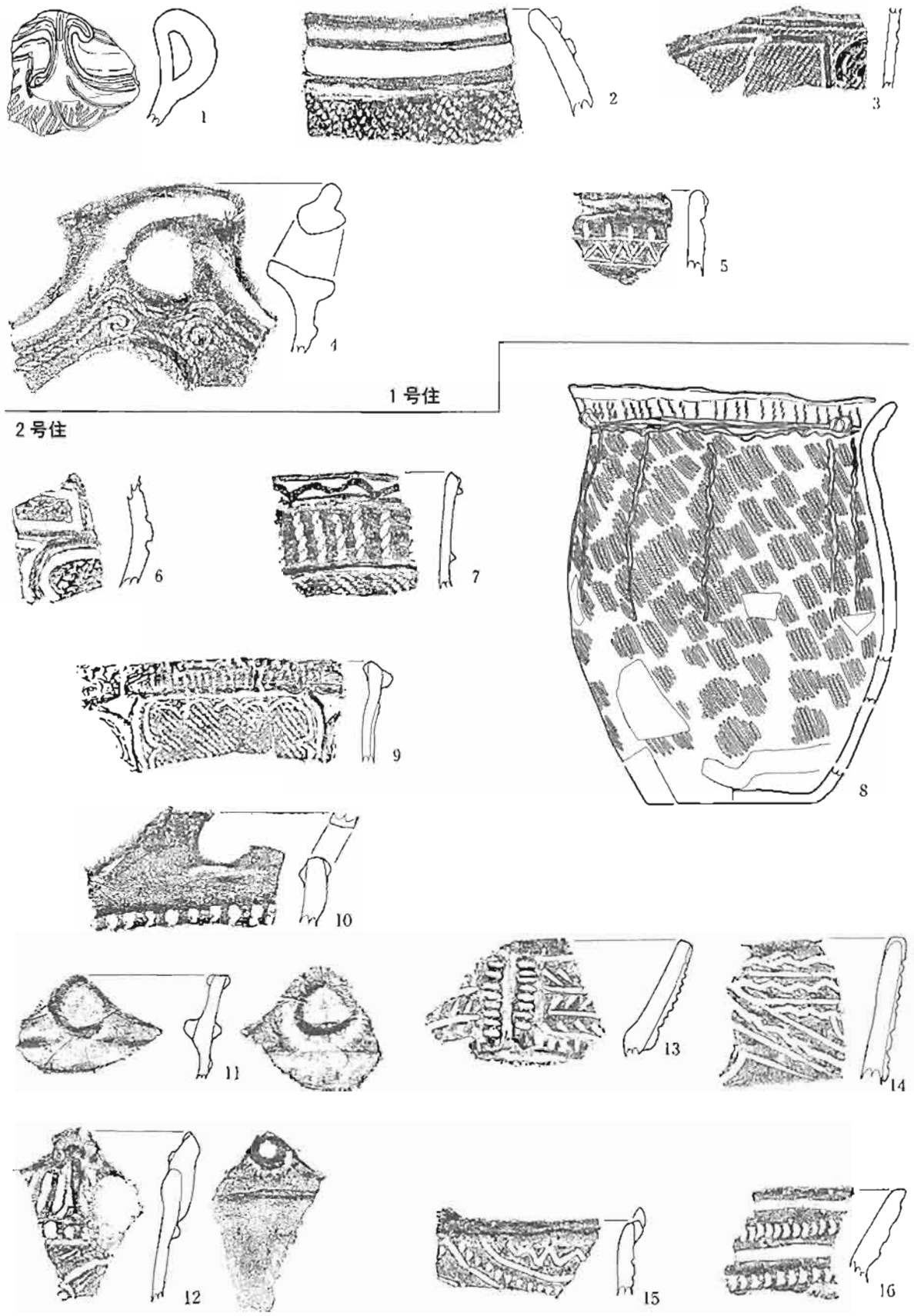
（21）　その他

5．古銭

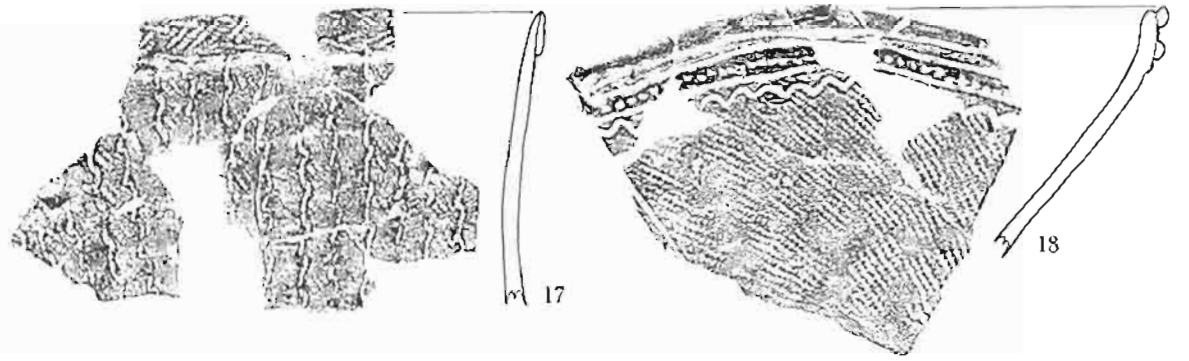
3枚の古銭が出土している。4199と4200は寛永通宝、4201は文久永寶である。表土中からの出土である。

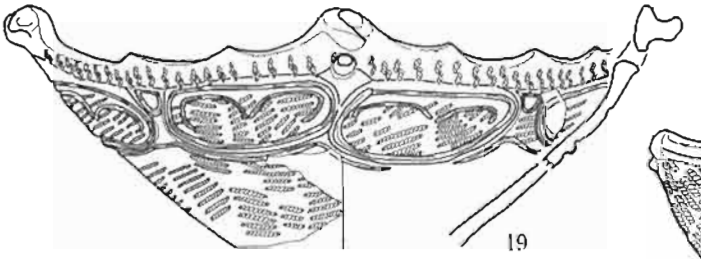
6．編物

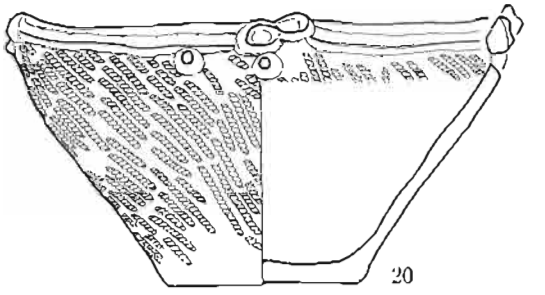
47号住居跡床面直上の扁平な円礫の裏側に貼り付いた状態で検出した。約6.5×5cmの大きさである。幅3～4cmの植物と見られる繊維が縦横に編まれ、土器底部に痕跡として検出されるいわゆる網代様をなしている。網代であるのか篭状のものかは不明である。本住居跡焼失時に床面に置かれていたものの上に円礫が載っていたために炭化し残存したものと見られる。



第1図　1号住居跡出土遺物・2号住居跡出土遺物(1)

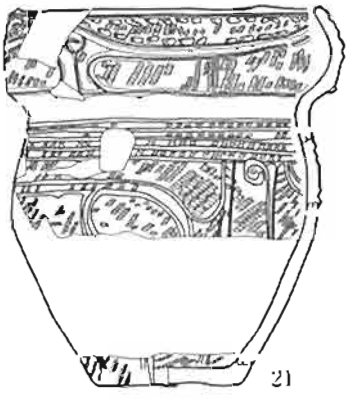


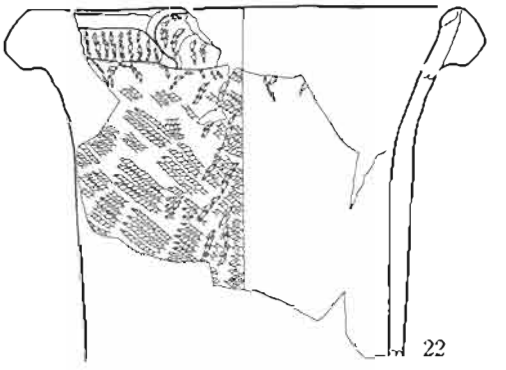


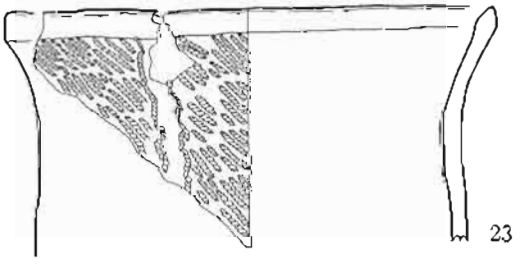


2号住

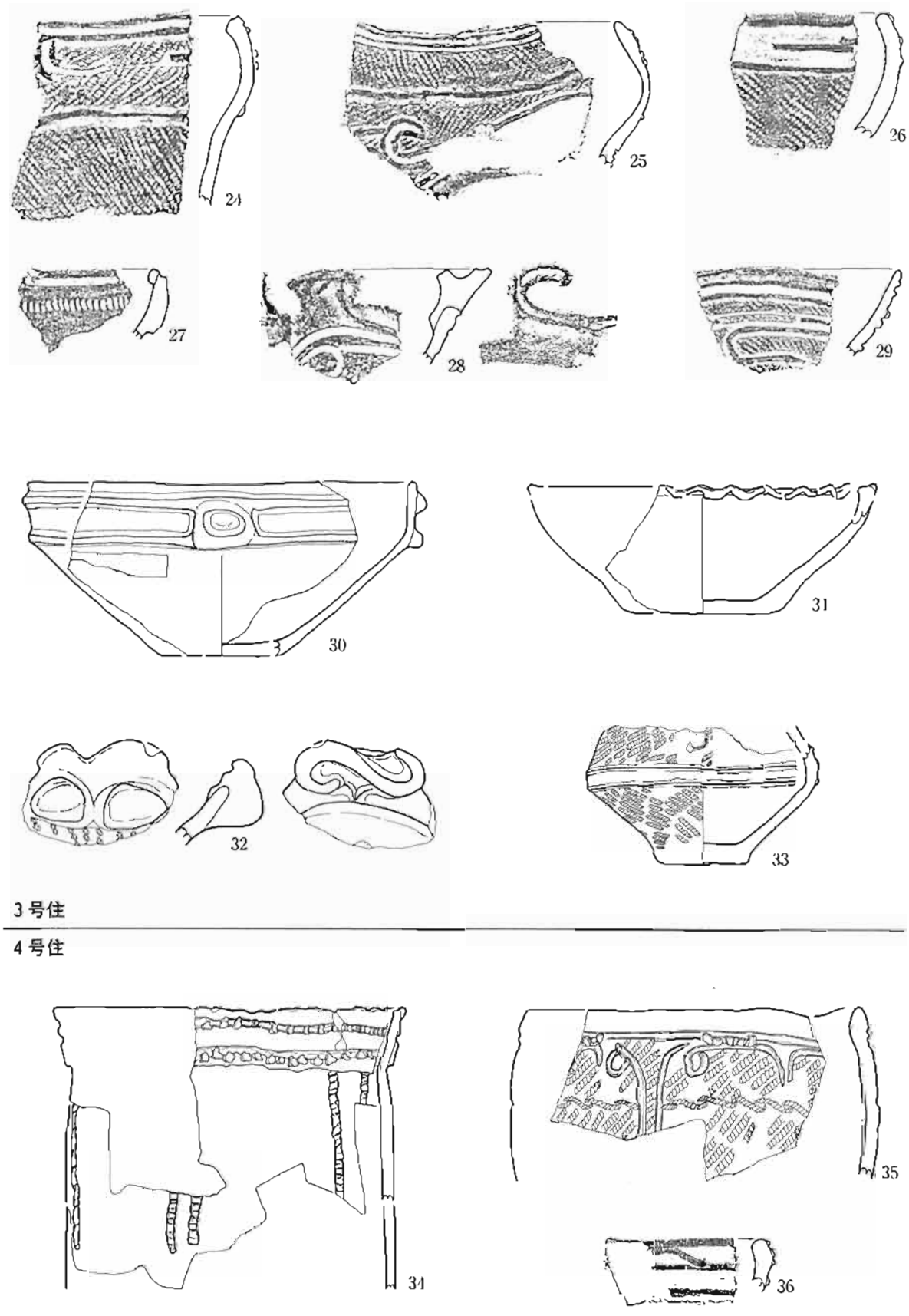
3号住





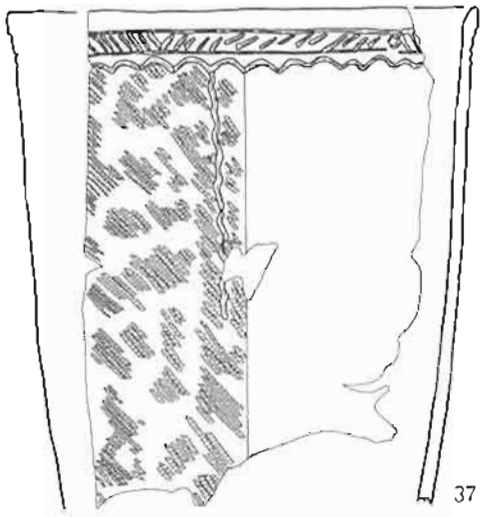


第2図　2号住居跡出土遺物(2)・3号住居跡出土遺物(1)

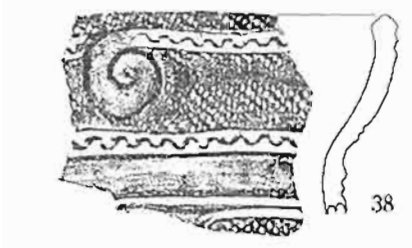


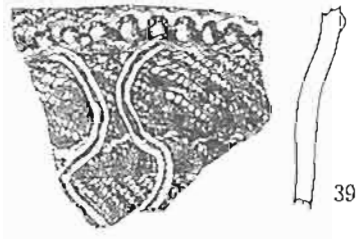
第3図　3号住居跡出土遺物(2)・4号住居跡出土遺物

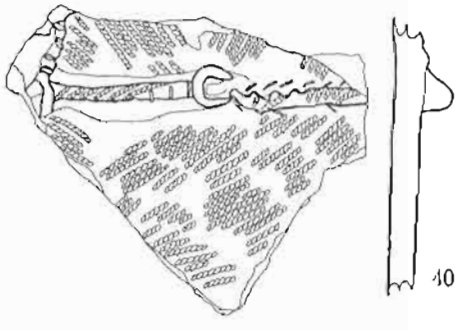
5号住

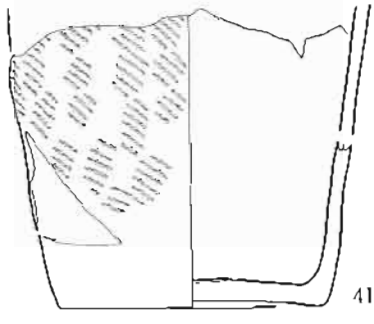


6号住

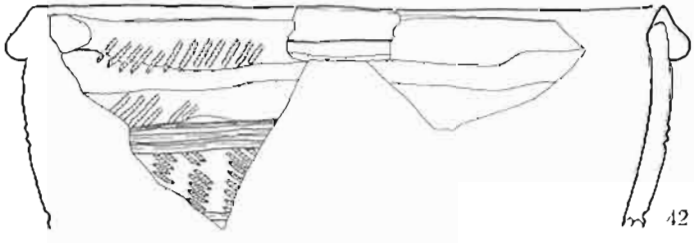


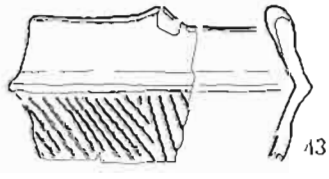






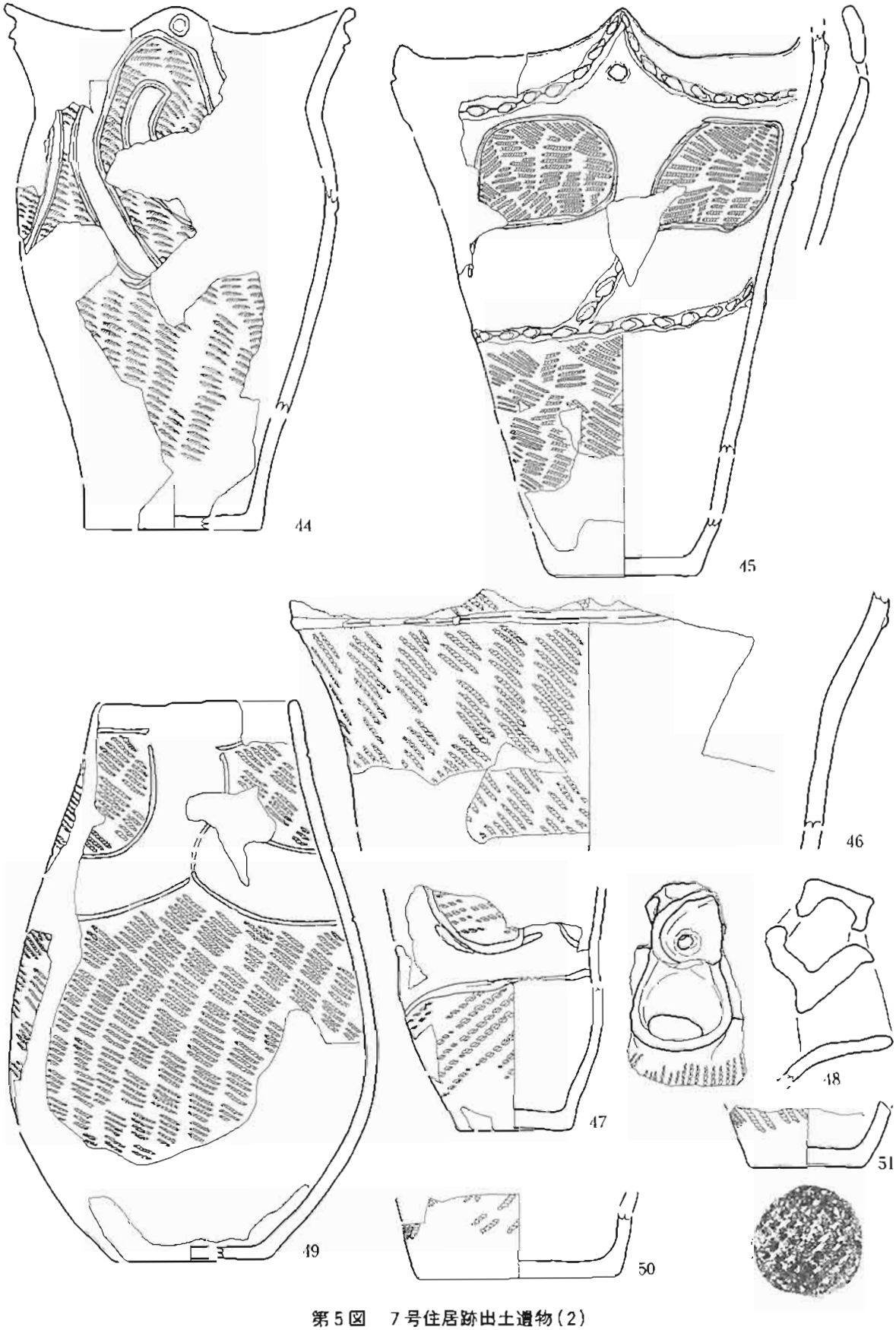
7号住





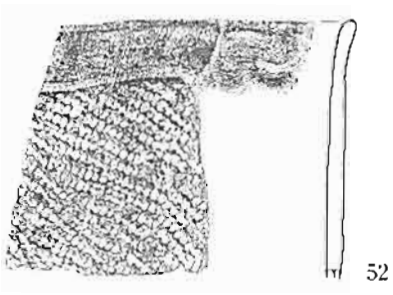
第4図　5・6住居跡出土遺物・7号住居跡出土遺物(1)

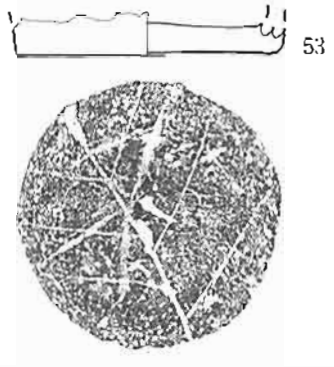
7号住



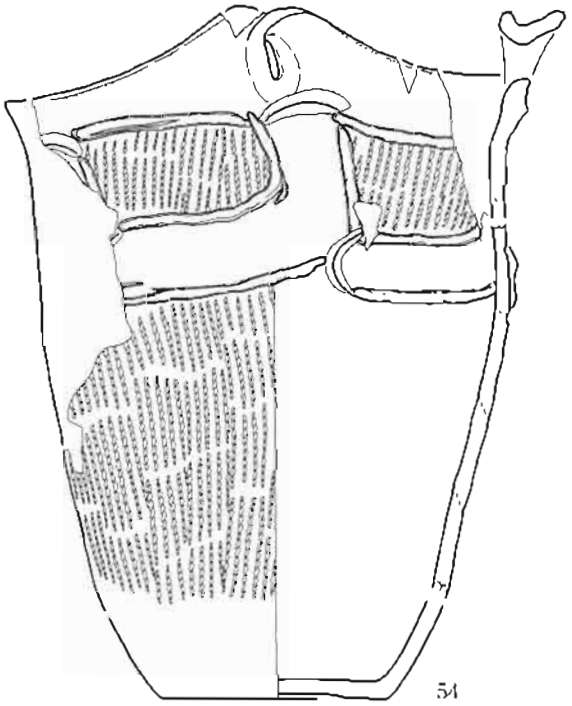
第5図　7号住居跡出土遺物(2)

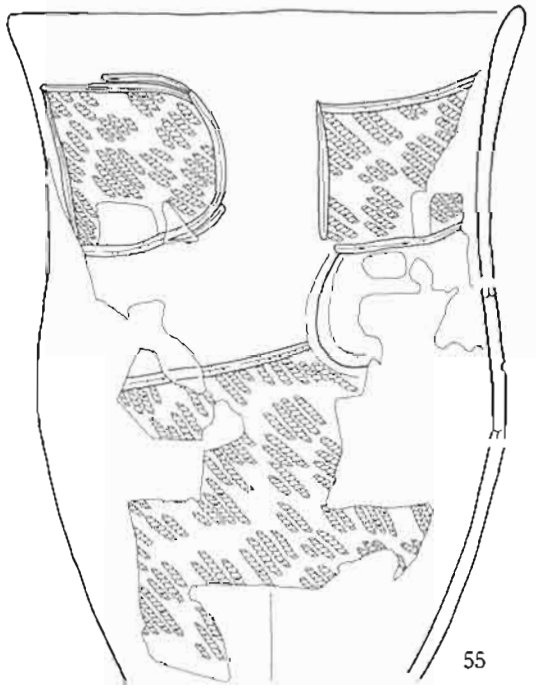
7号住

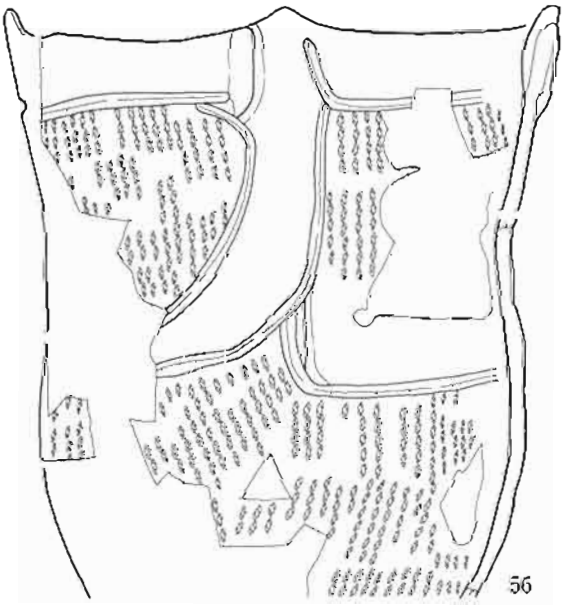


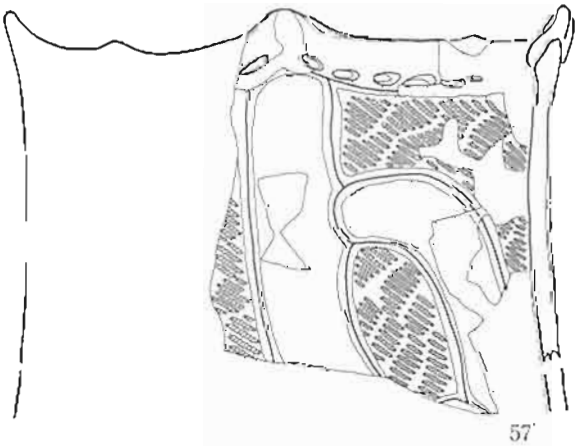


8号住



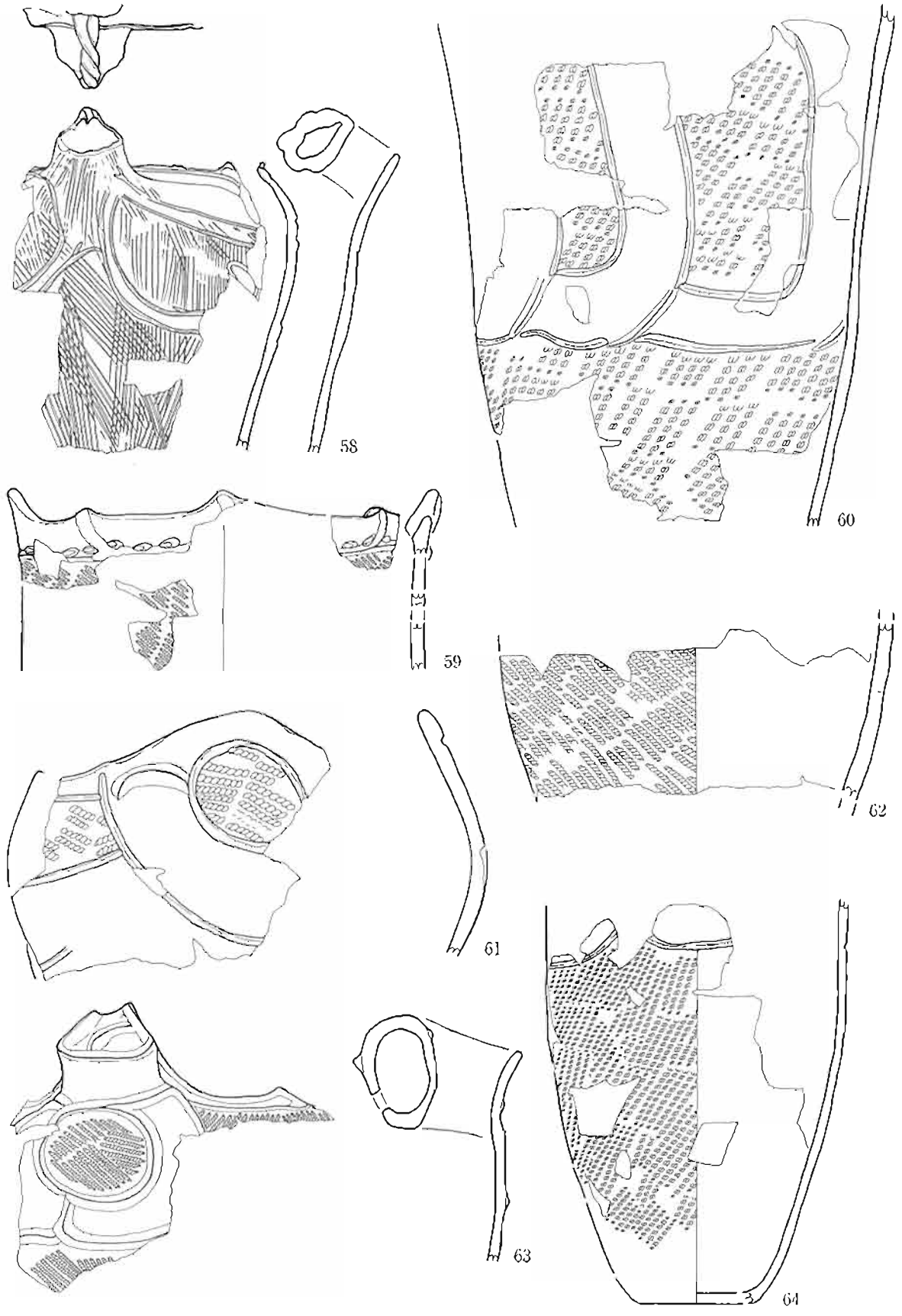






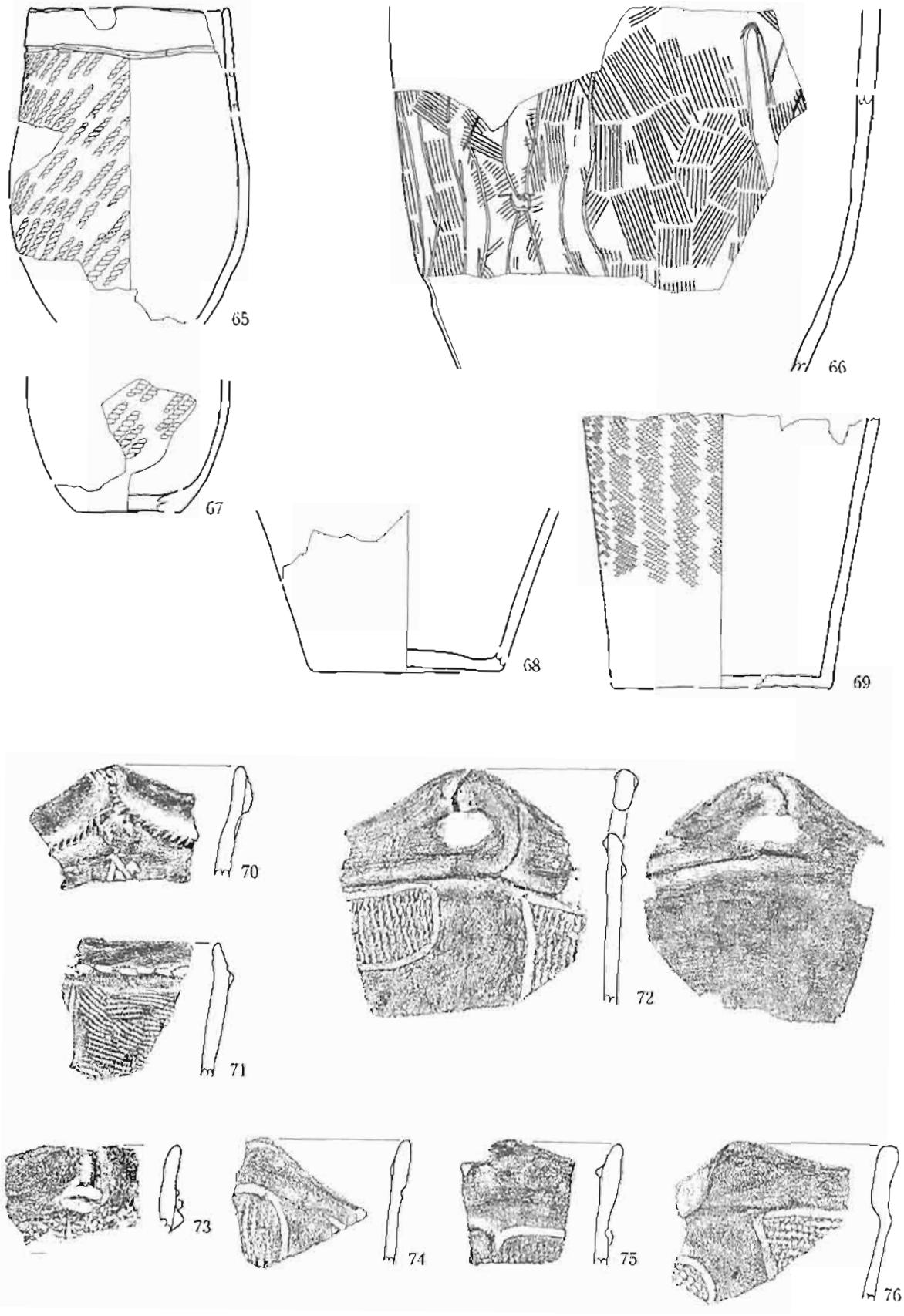
第6図　7号住居跡出土遺物(3)・8号住居跡出土遺物(1)

8号住



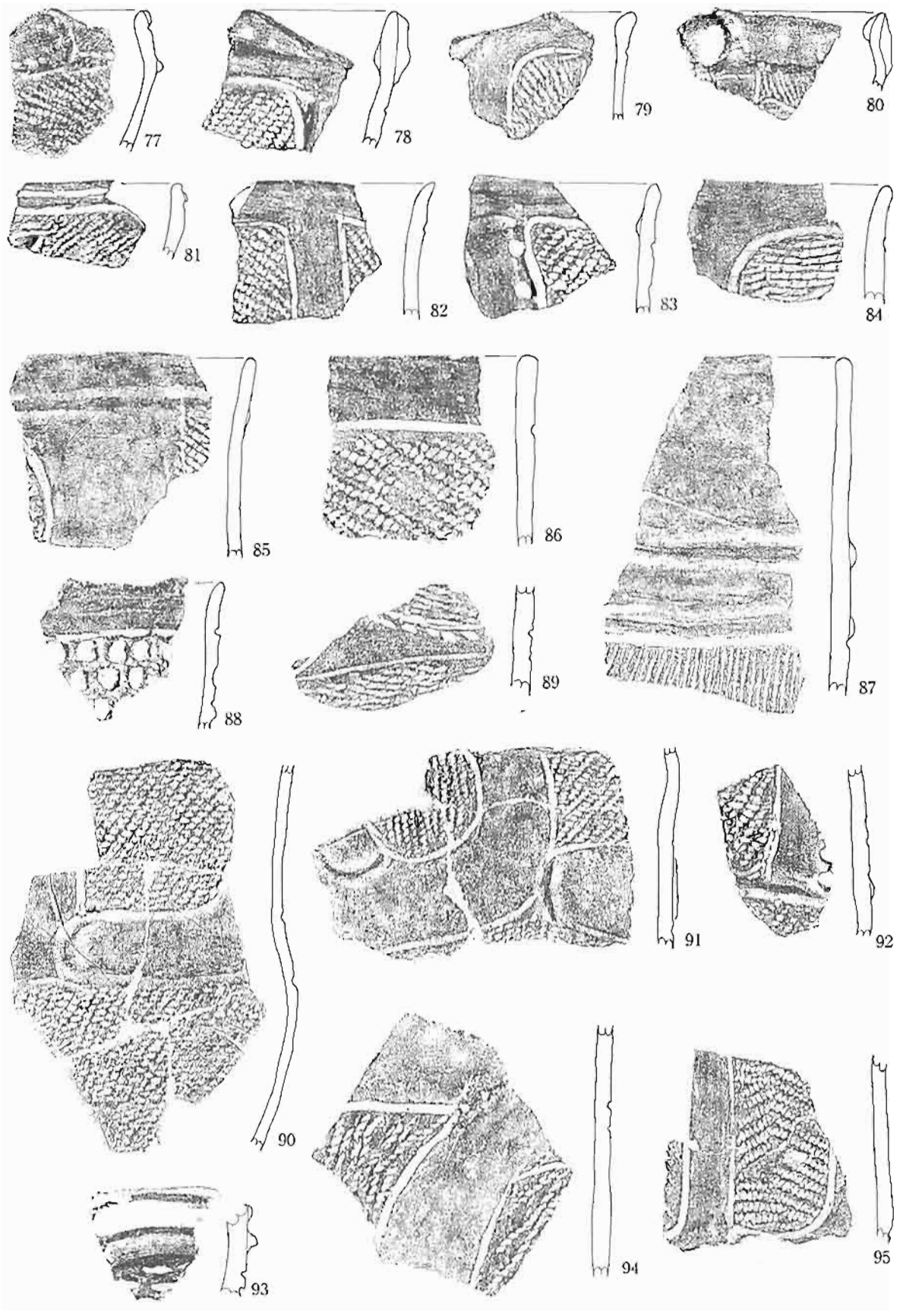
第7図　8号住居跡出土遺物(2)

8号住



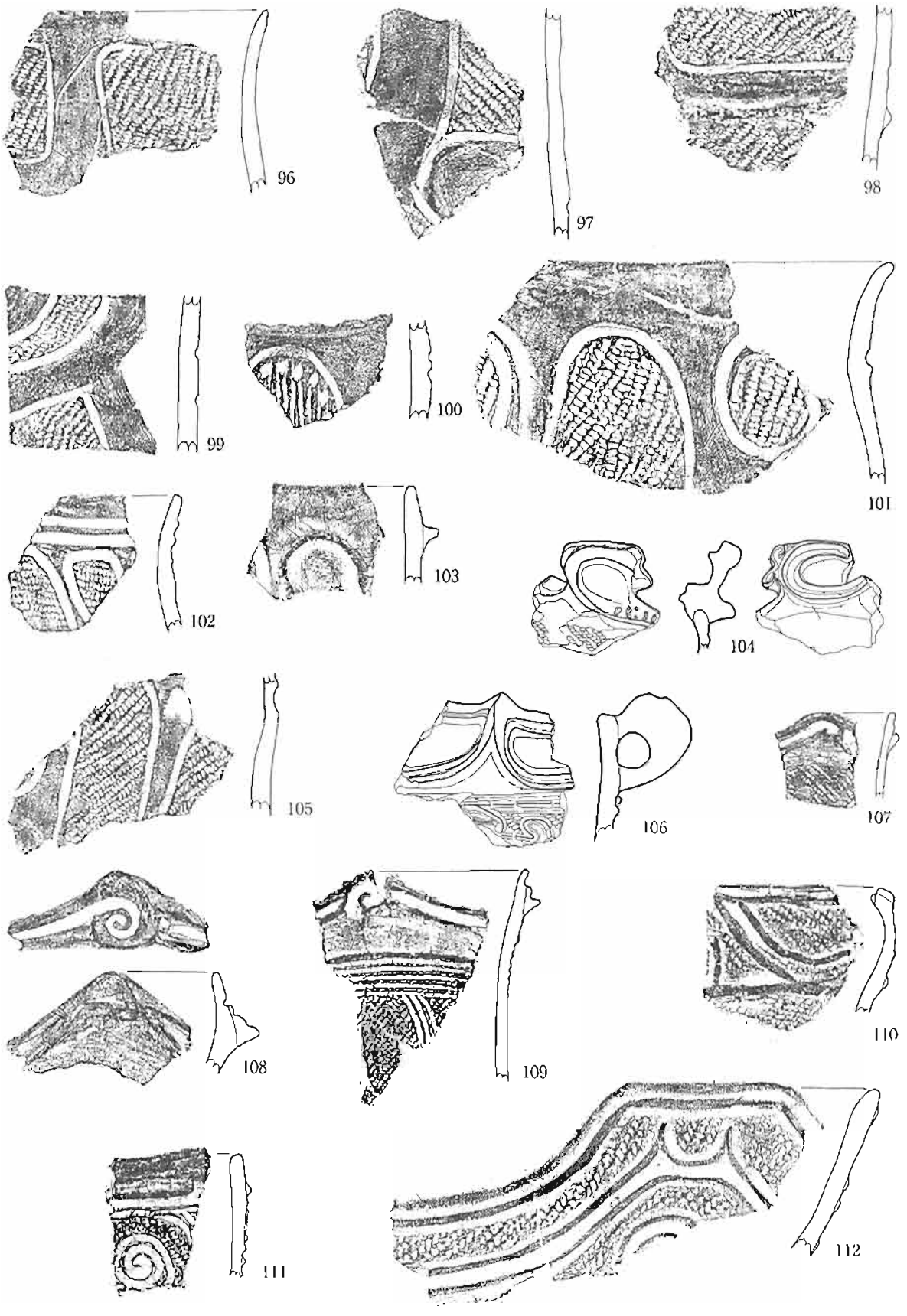
第8図　8号住居跡出土遺物(3)

8号住



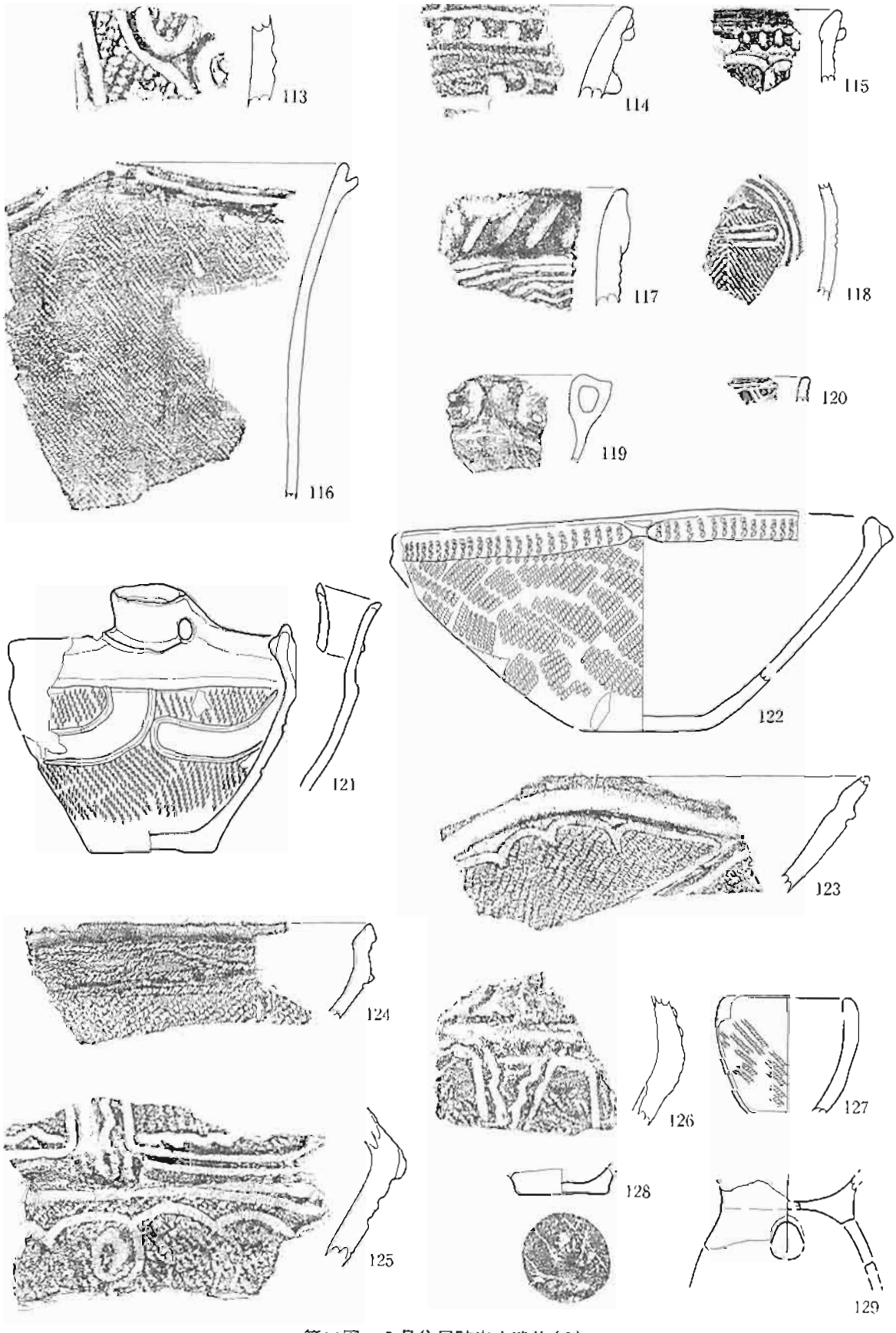
第9図　8号住居跡出土遺物(4)

8号住



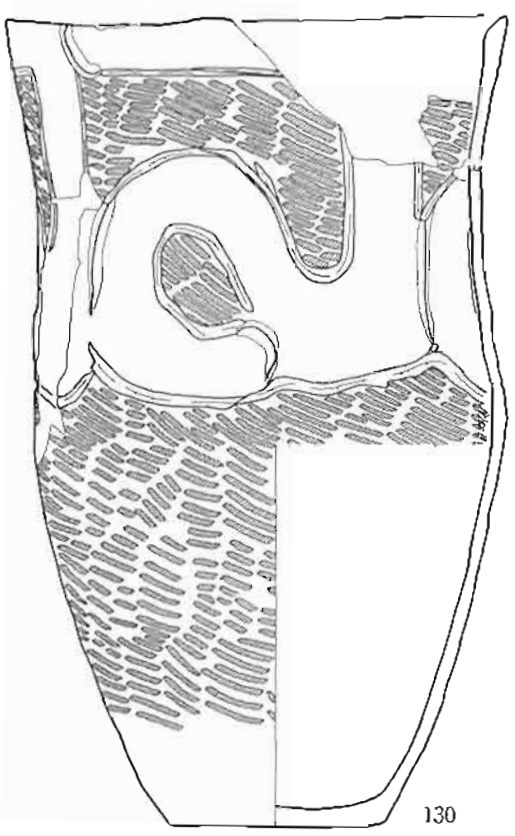
第10図　8号住居跡出土遺物(5)

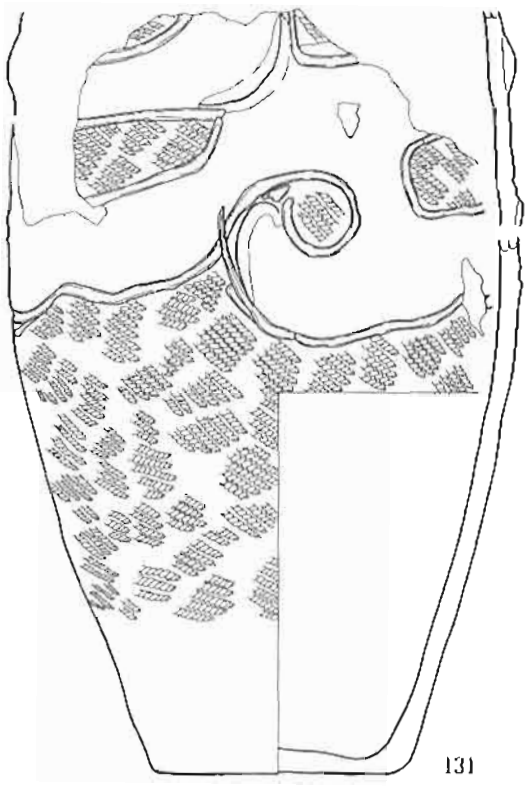
8号住

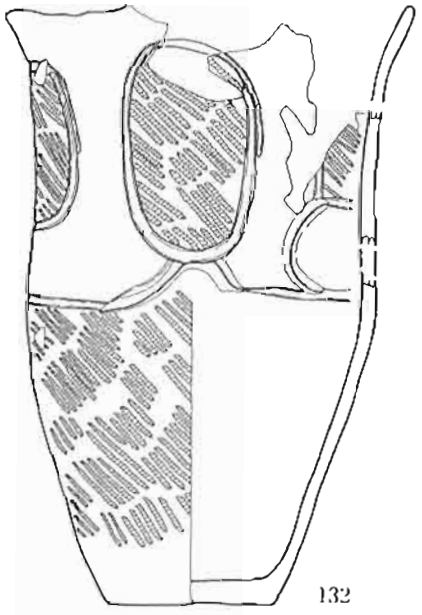


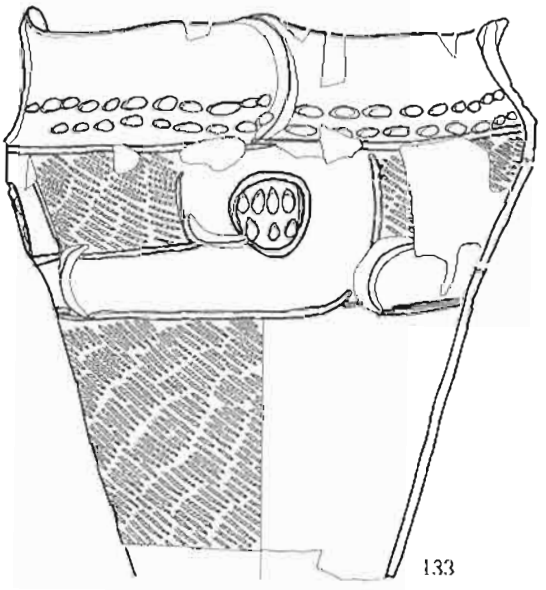
第11図　8号住居跡出土遺物(6)

9号住



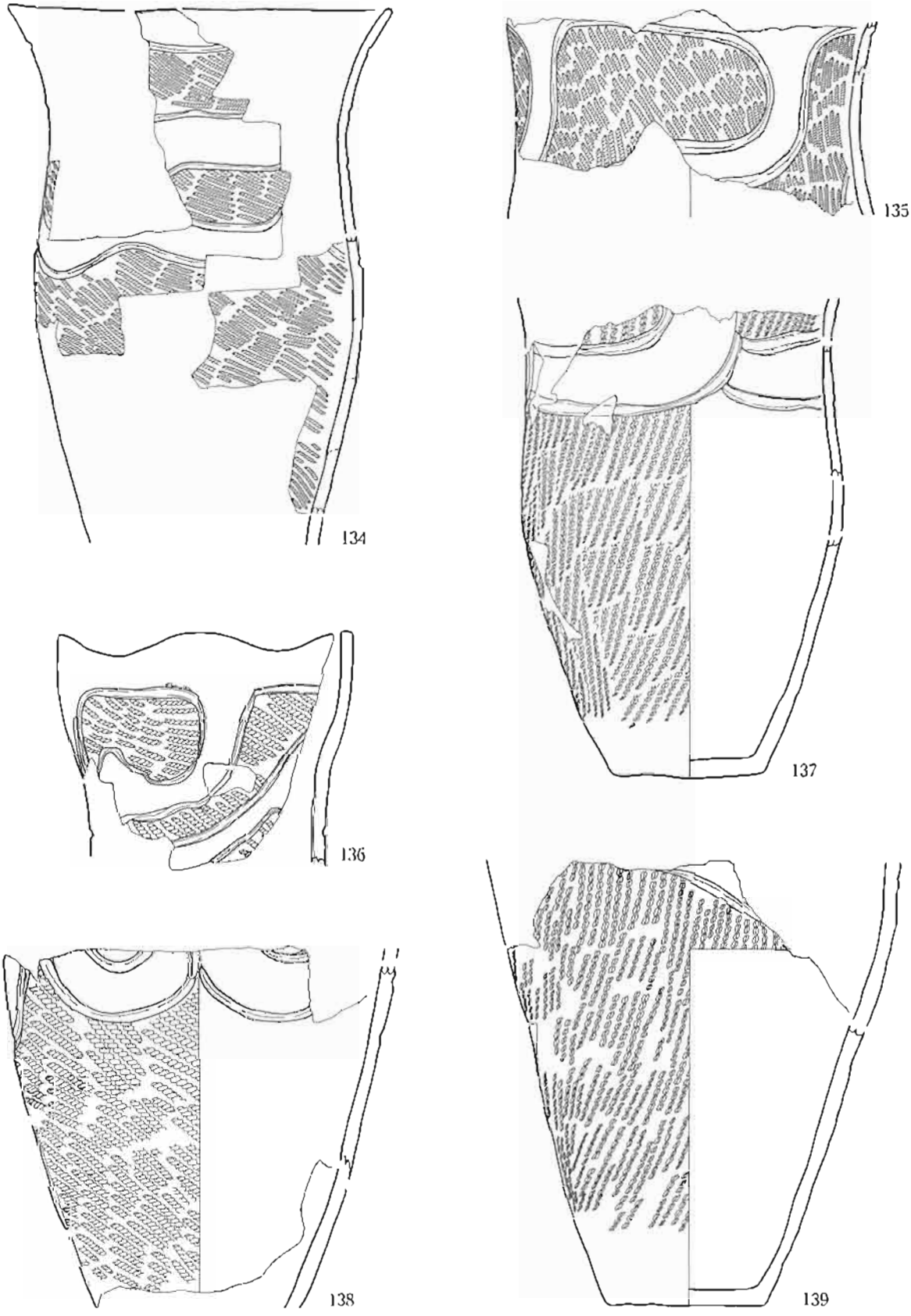






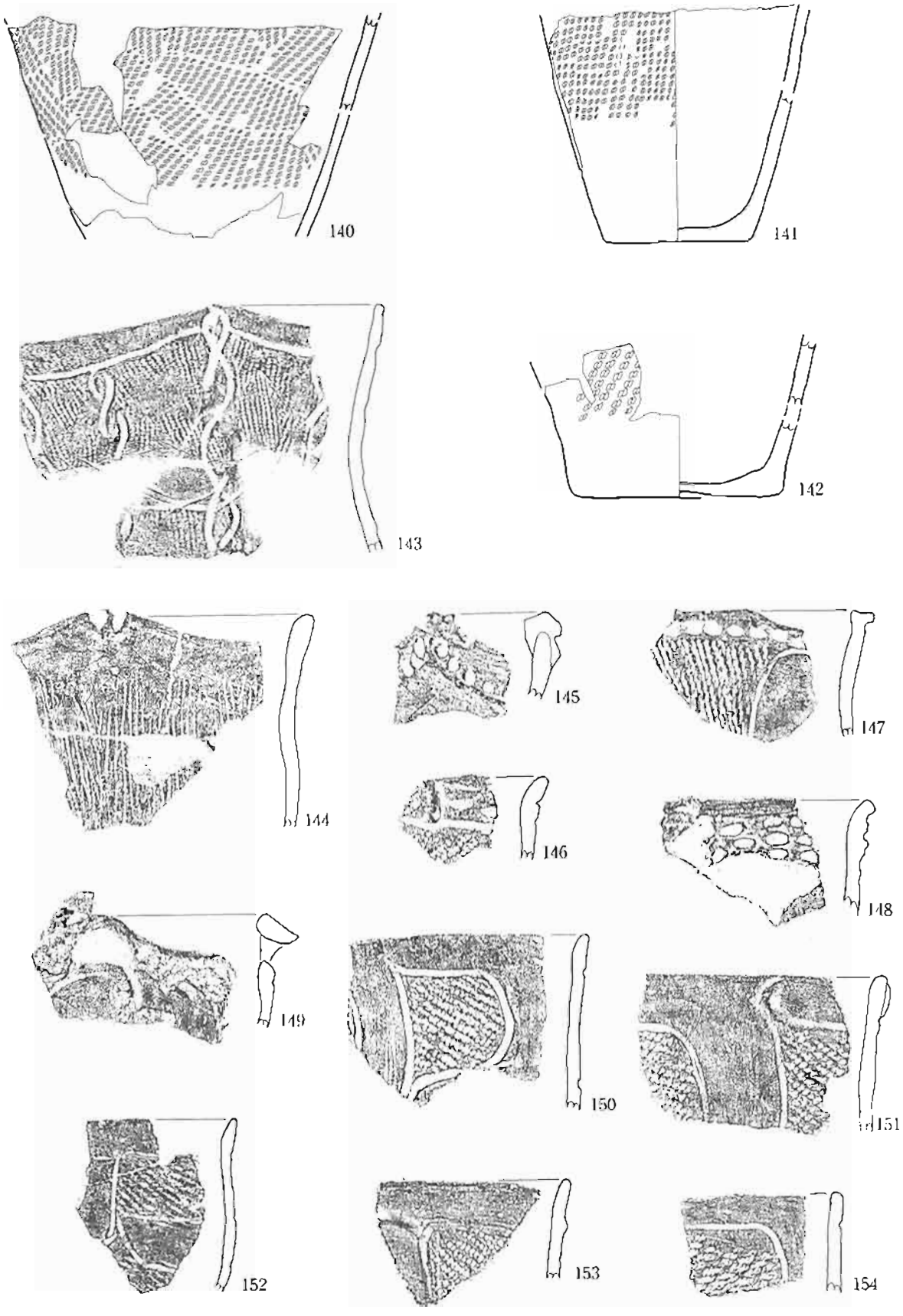
第12図　9号住居跡出土遺物(1)

9号住



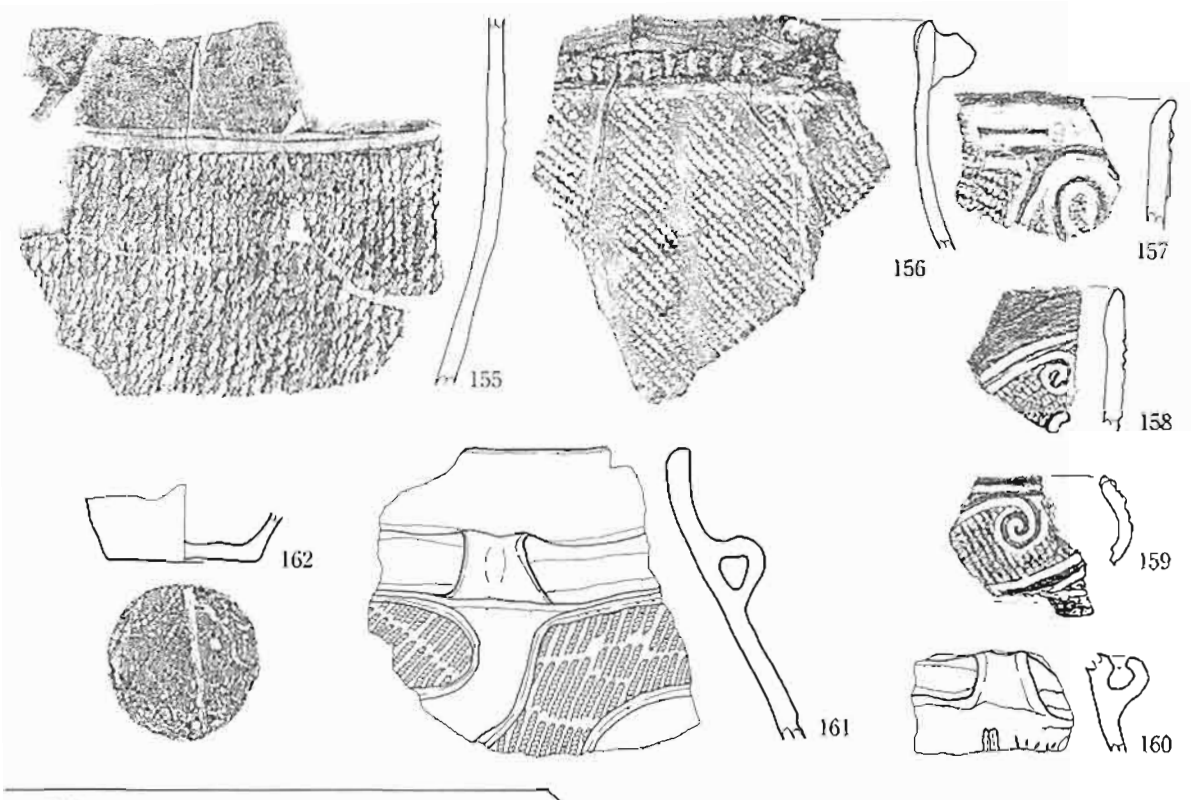
第13図　9号住居跡出土遺物(2)

9号住

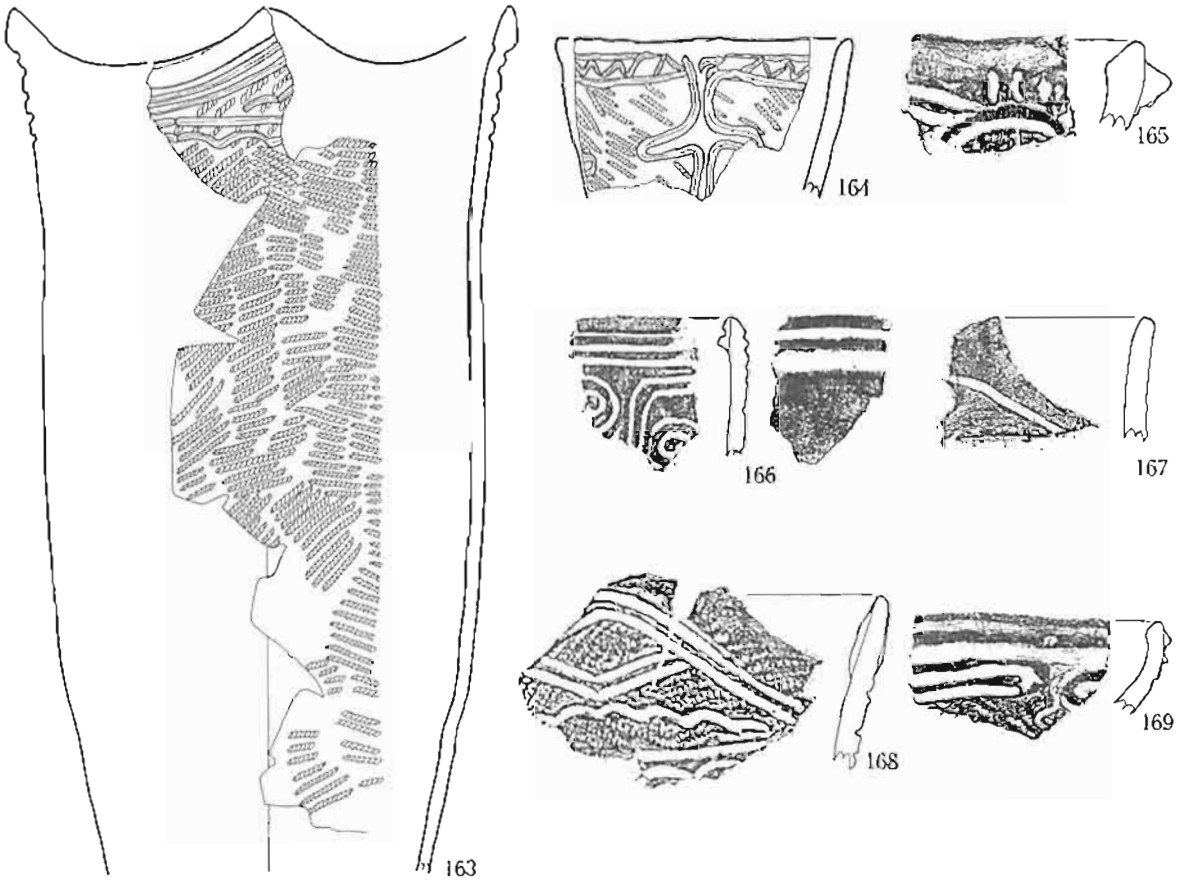


第14図　9号住居跡出土遺物(3)

9号住

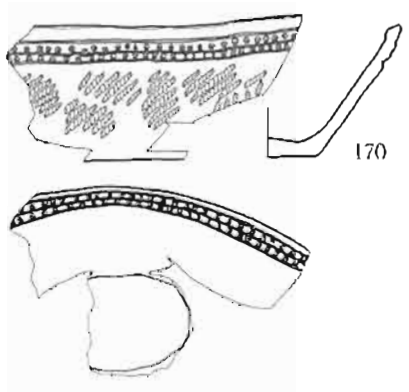


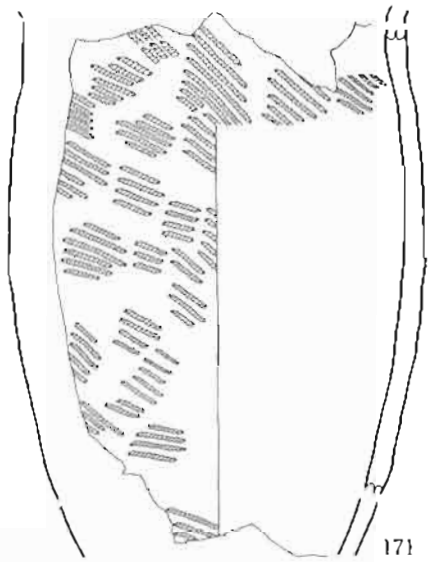
10号住



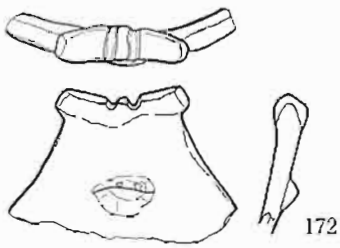
第15図　9号住居跡出土遺物（4）・10号住居跡出土遺物（1）

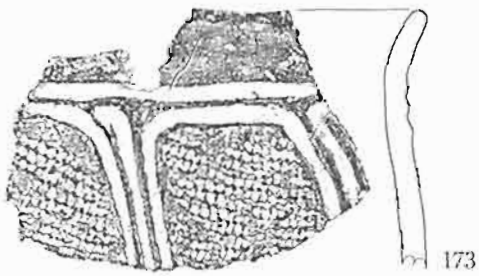
10号住

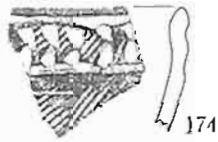


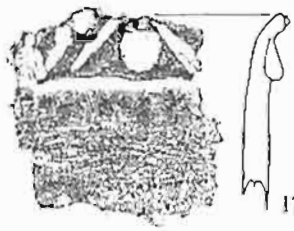


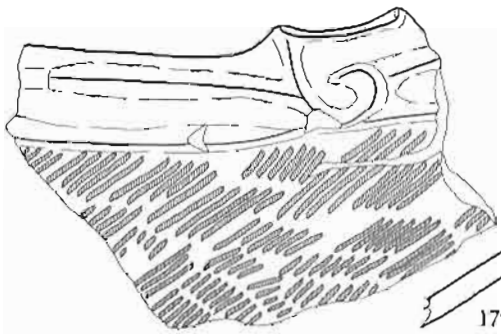
11号住

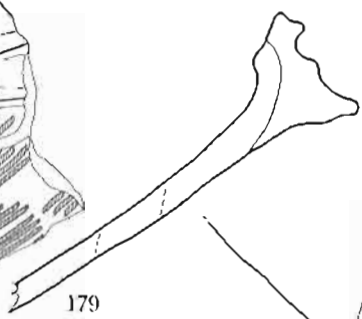




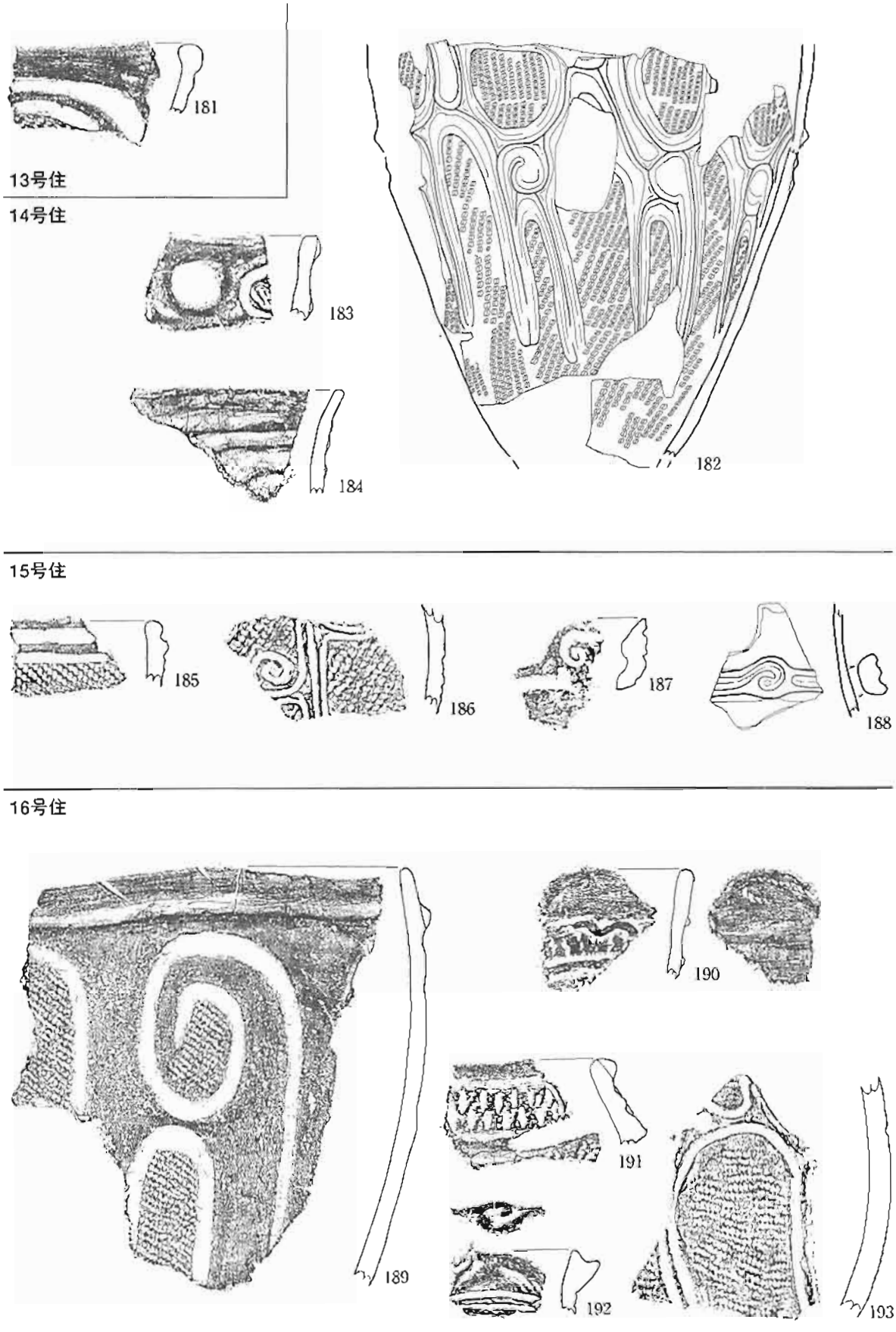






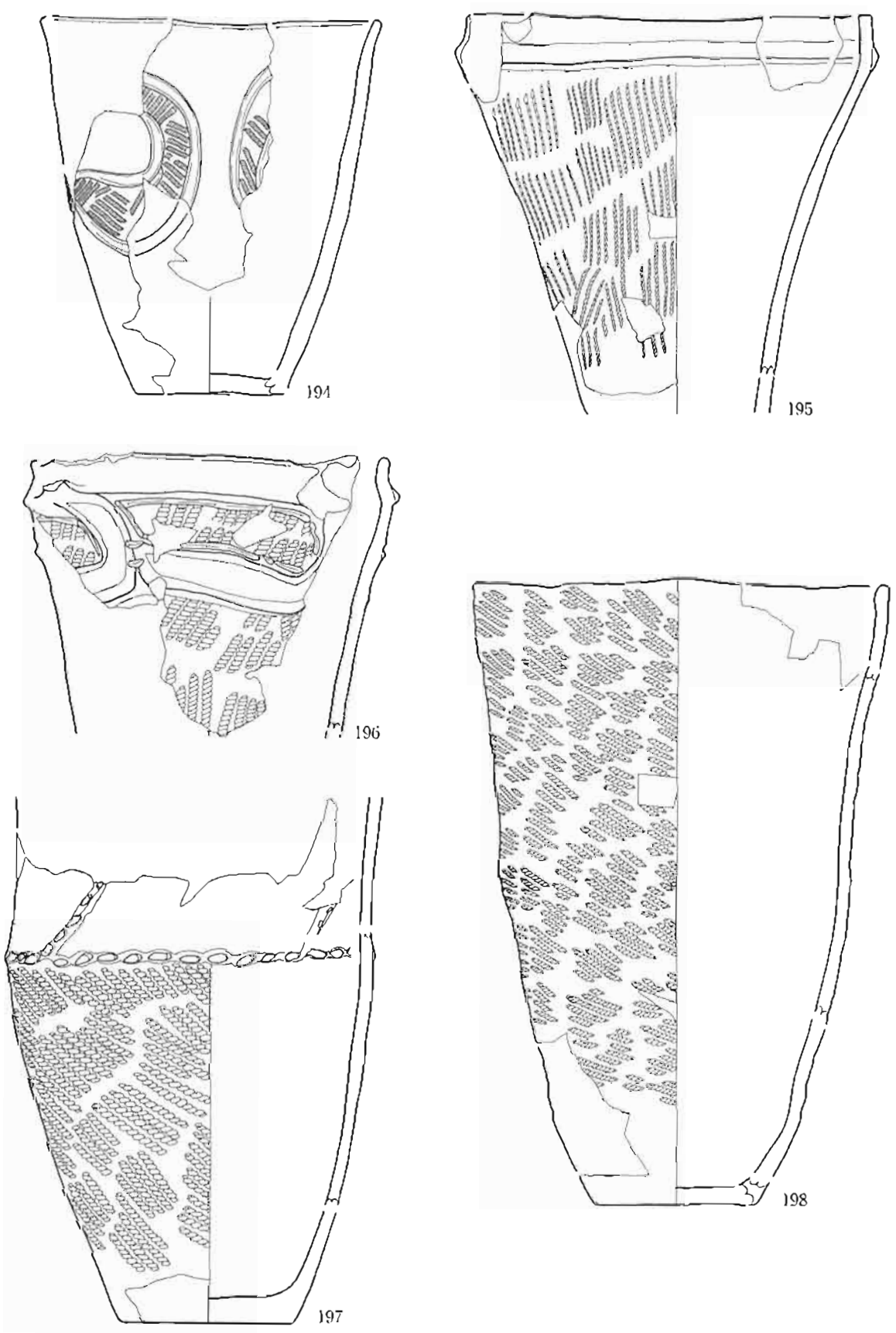


第16図　10号住居跡出土遺物（2）・11号住居跡出土遺物



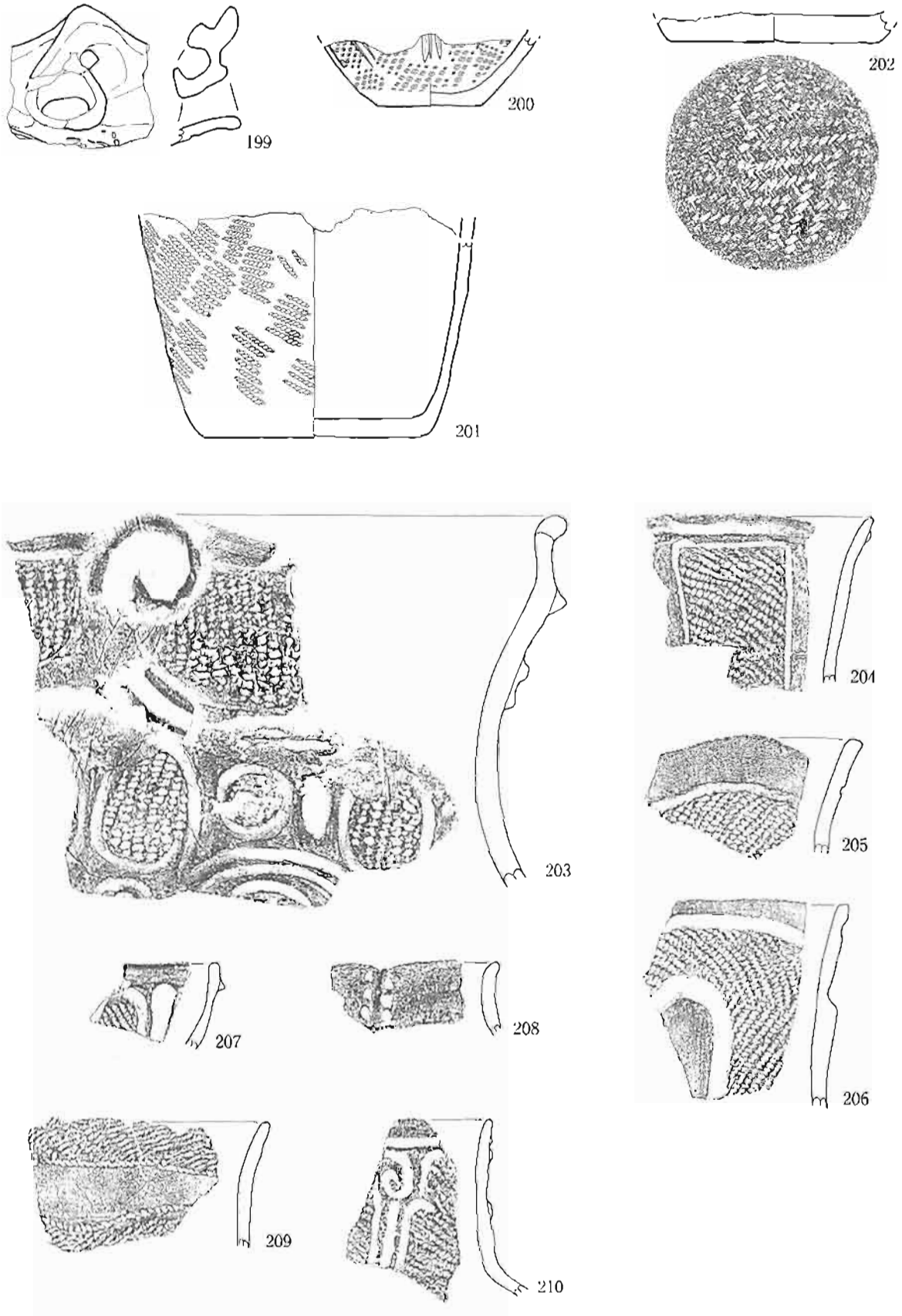
第17図　13～16号住居跡出土遺物

17号住



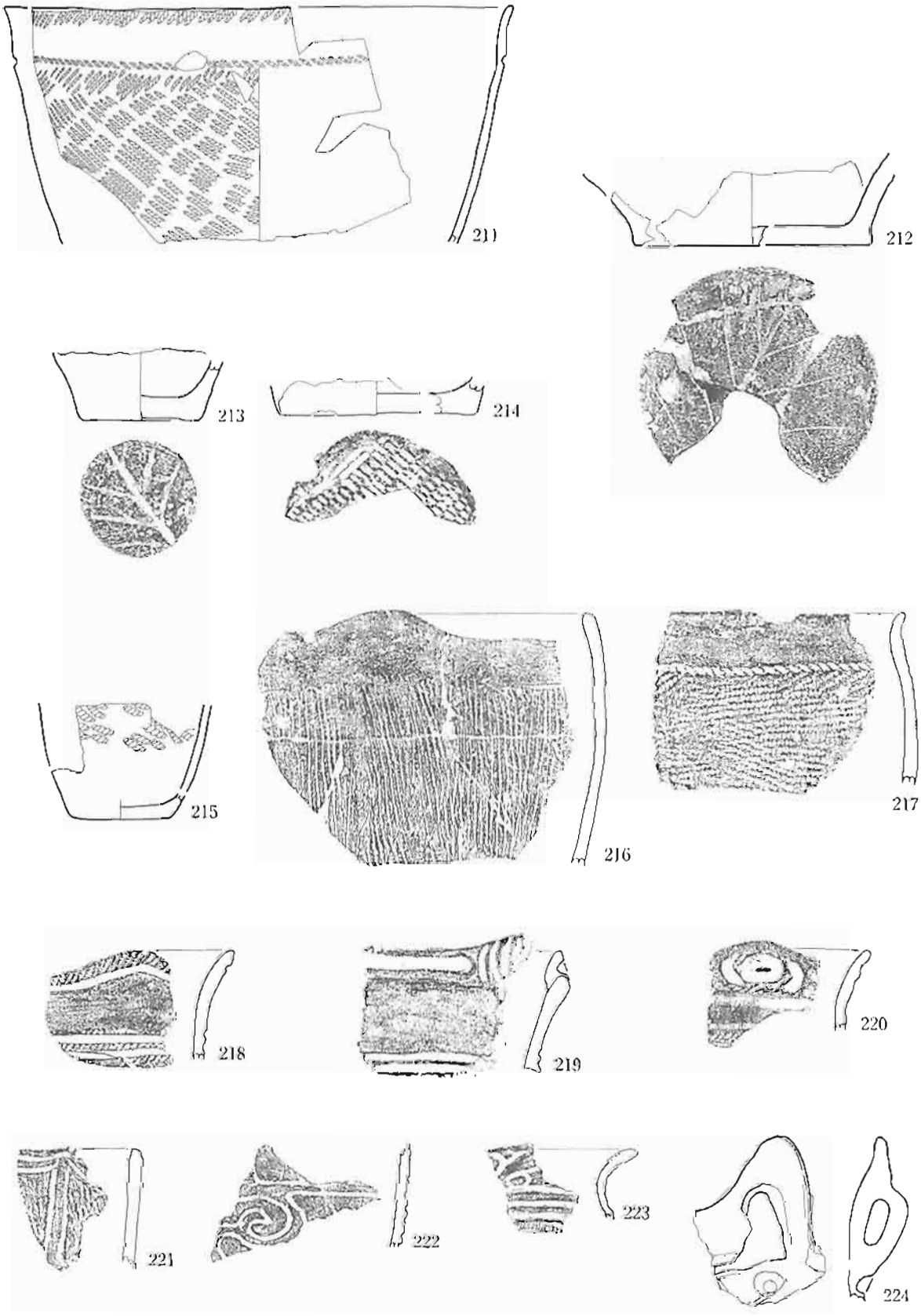
第18図　17号住居跡出土遺物（1）

17号住



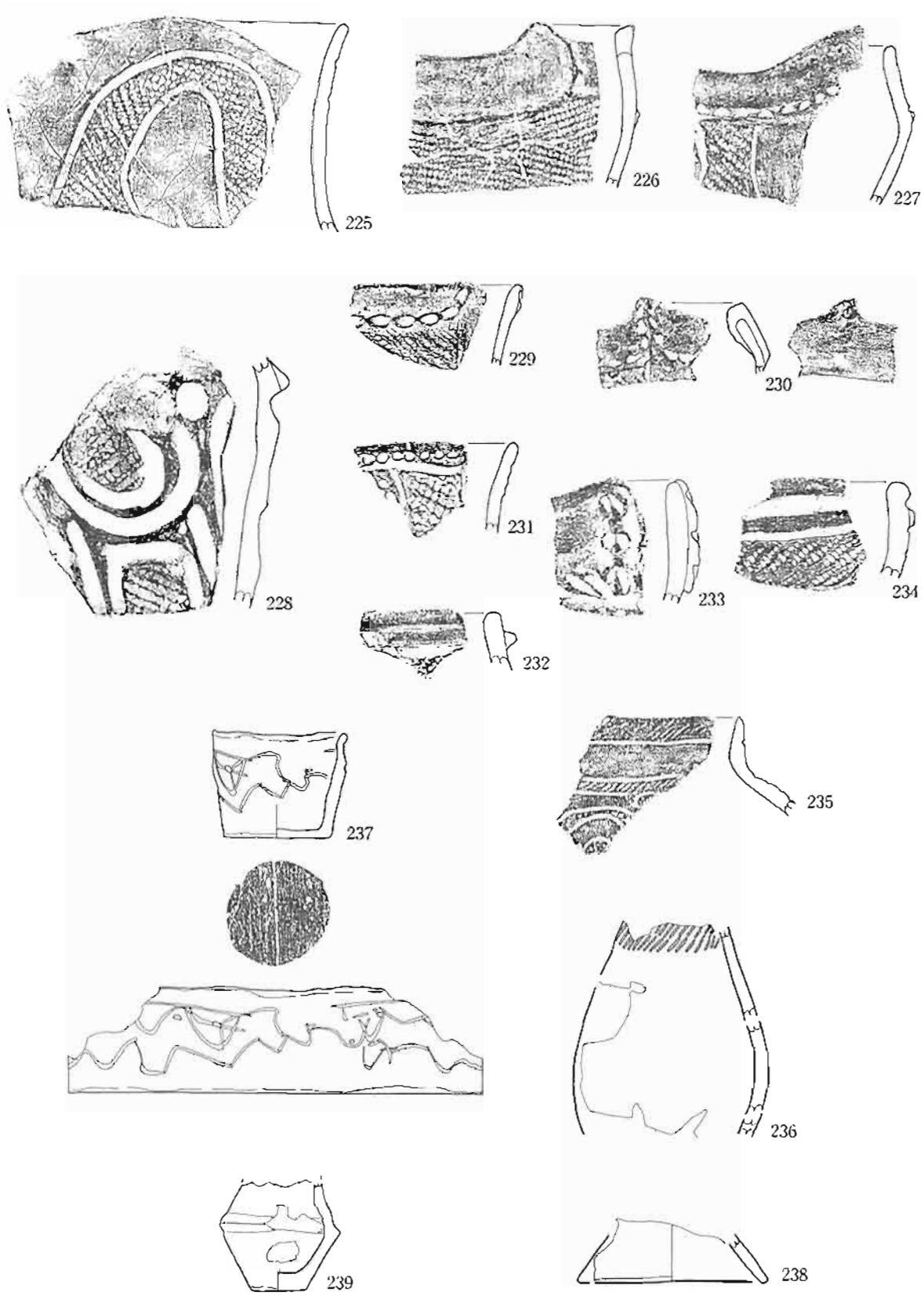
第19図　17号住居跡出土遺物（2）

18号住



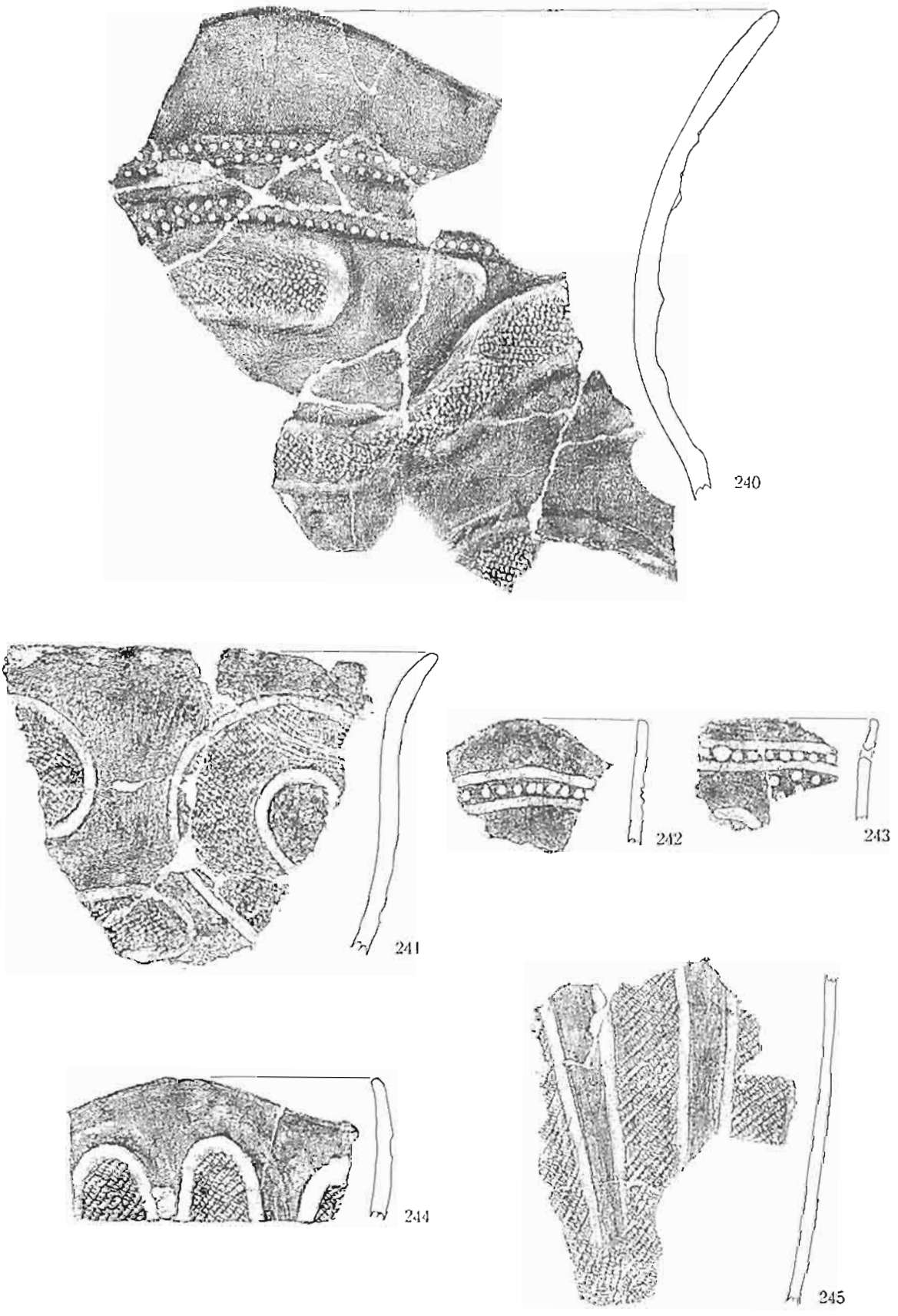
第20図　18号住居跡出土遺物（1）

18号住



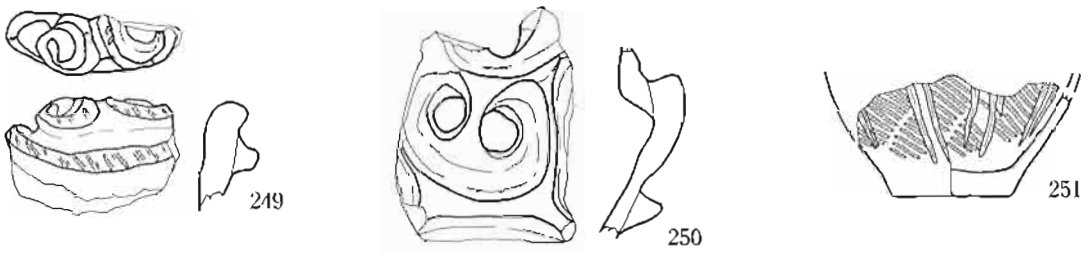
第21図　18号住居跡出土遺物（2）

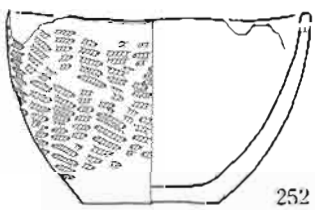
19号住



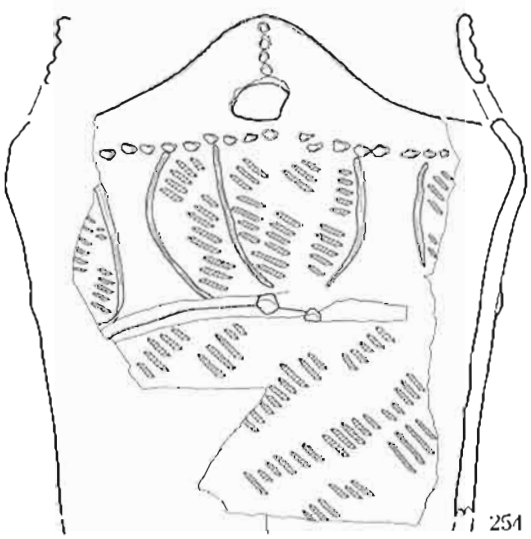
第22図　19号住居跡出土遺物（1）

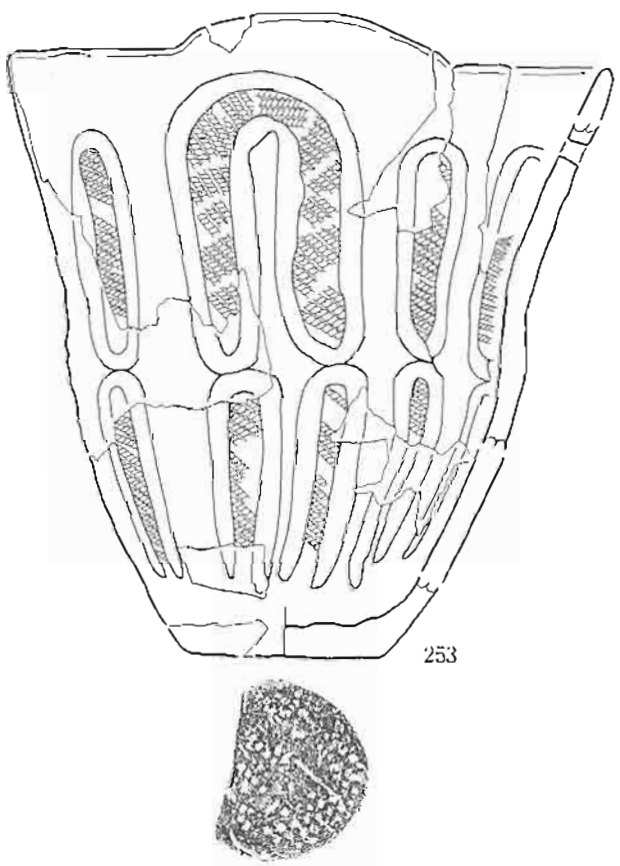
19号住





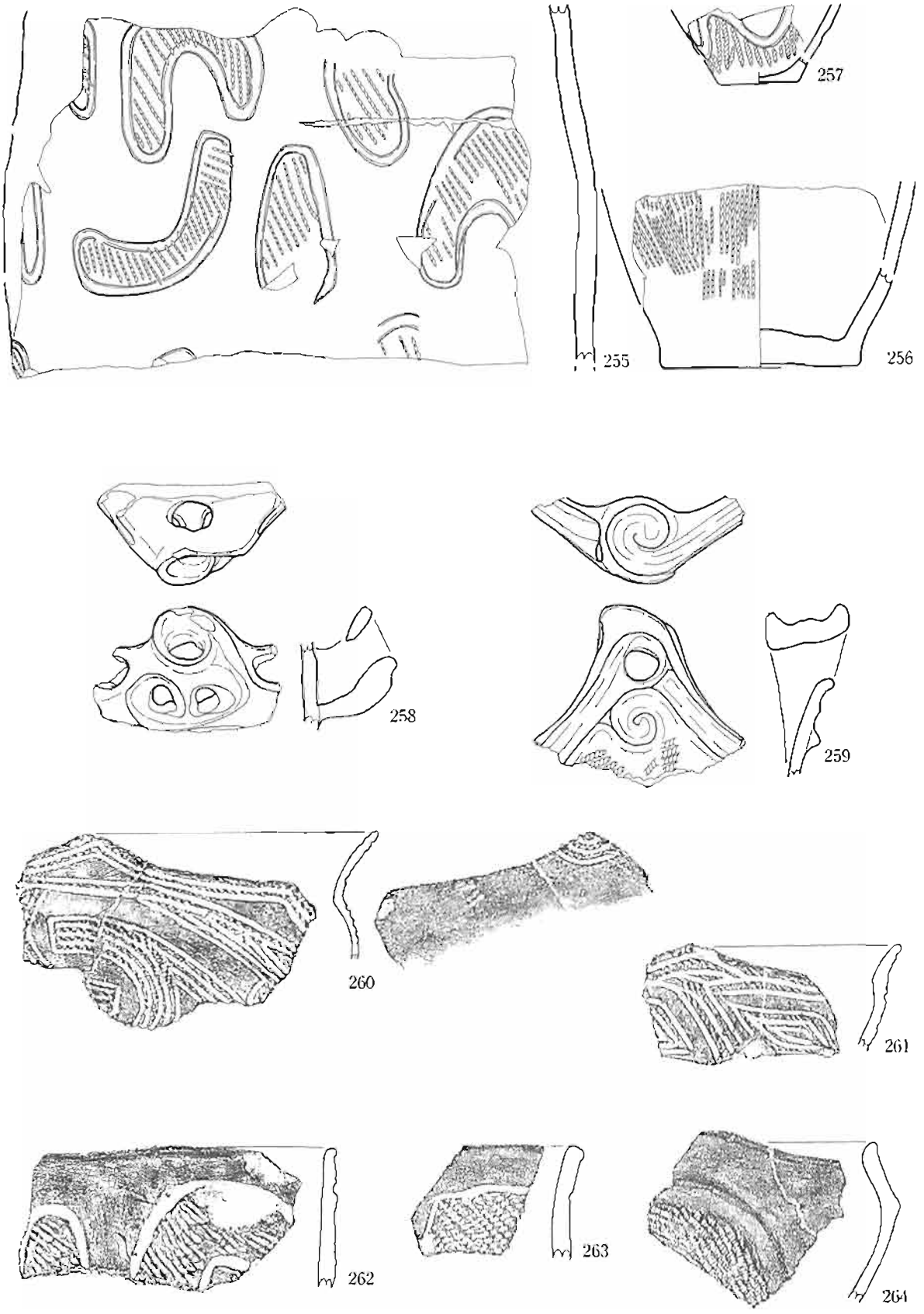
21号住





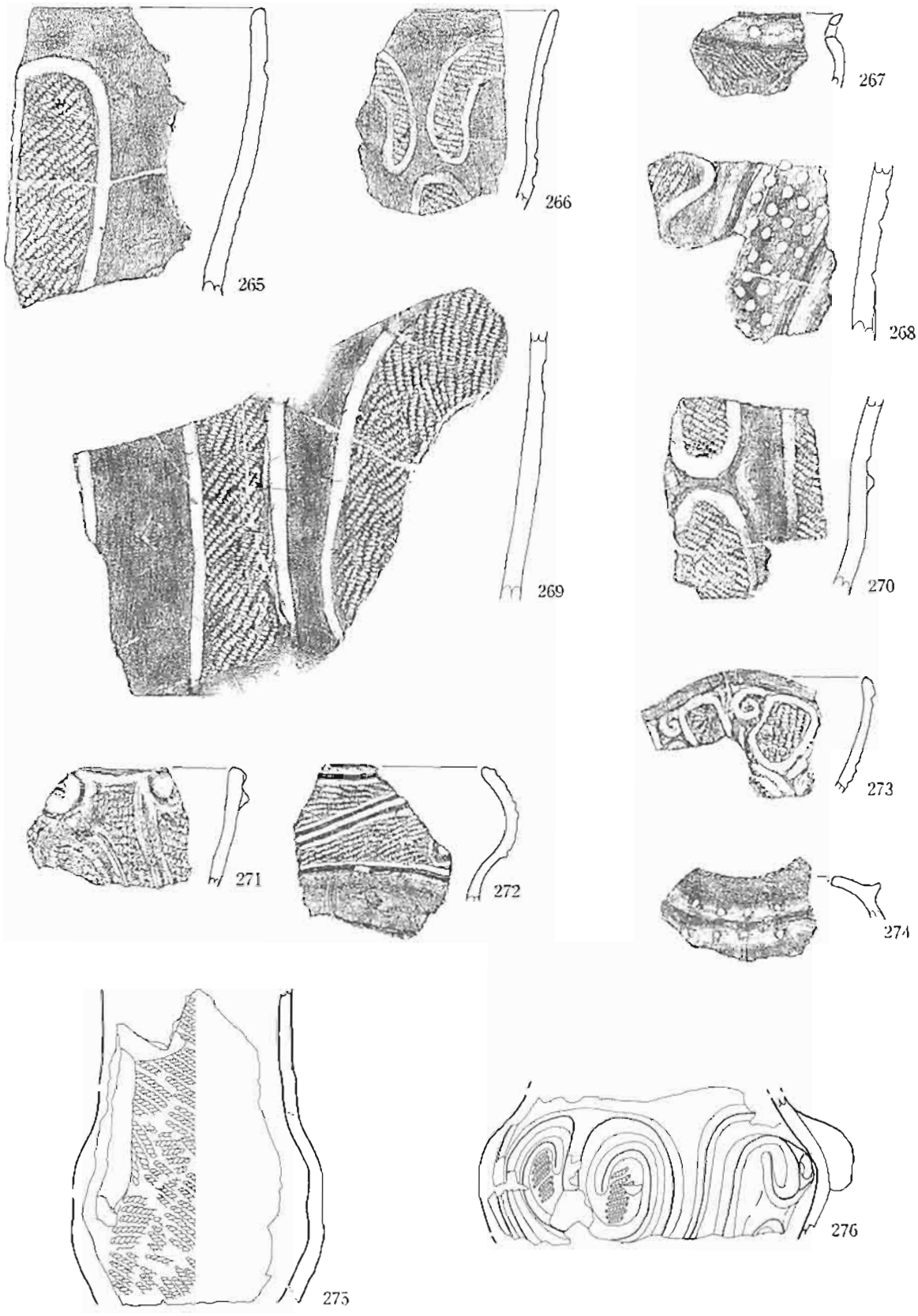
第23図　19号住居跡出土遺物（2）・21号住居跡出土遺物（1）

21号住



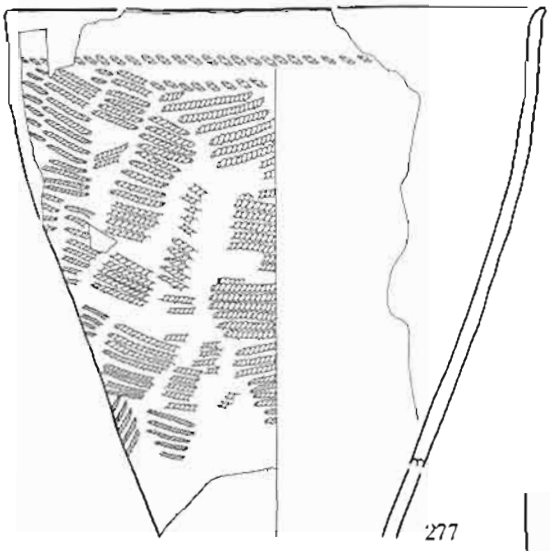
第24図　21号住居跡出土遺物（2）

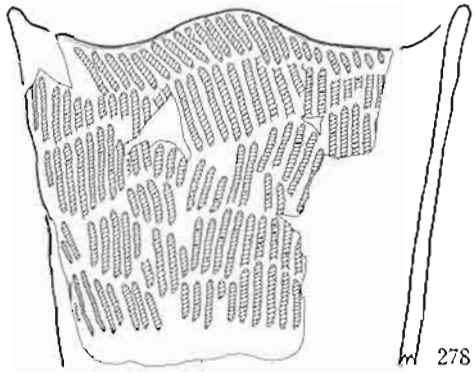
21号住

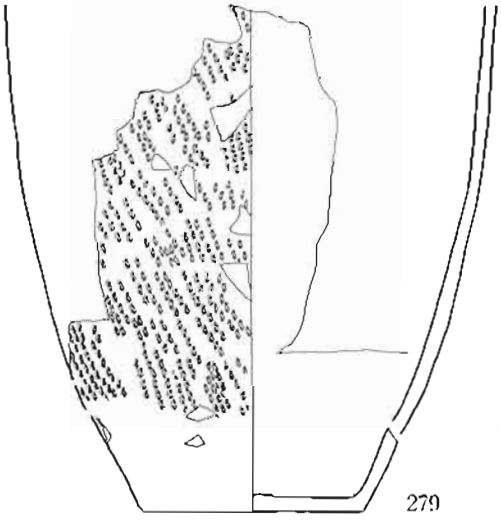


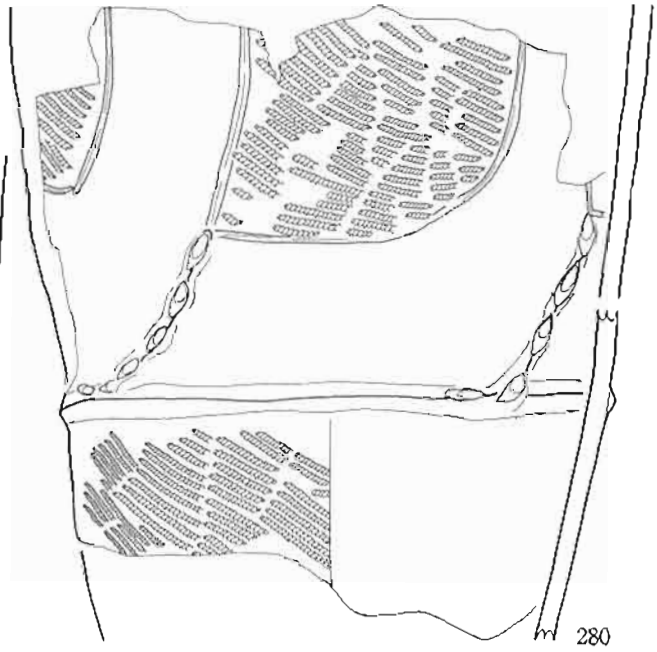
第25図　21号住居跡出土遺物（3）

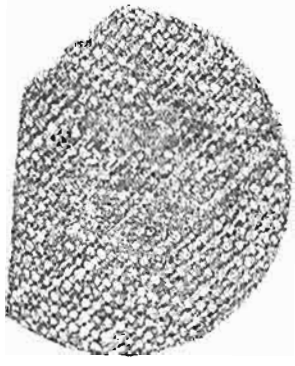
22号住

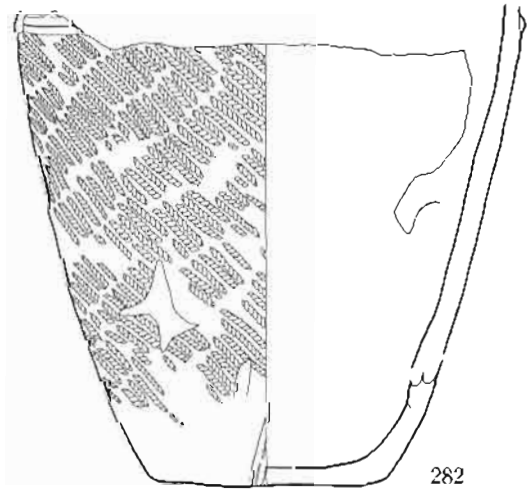






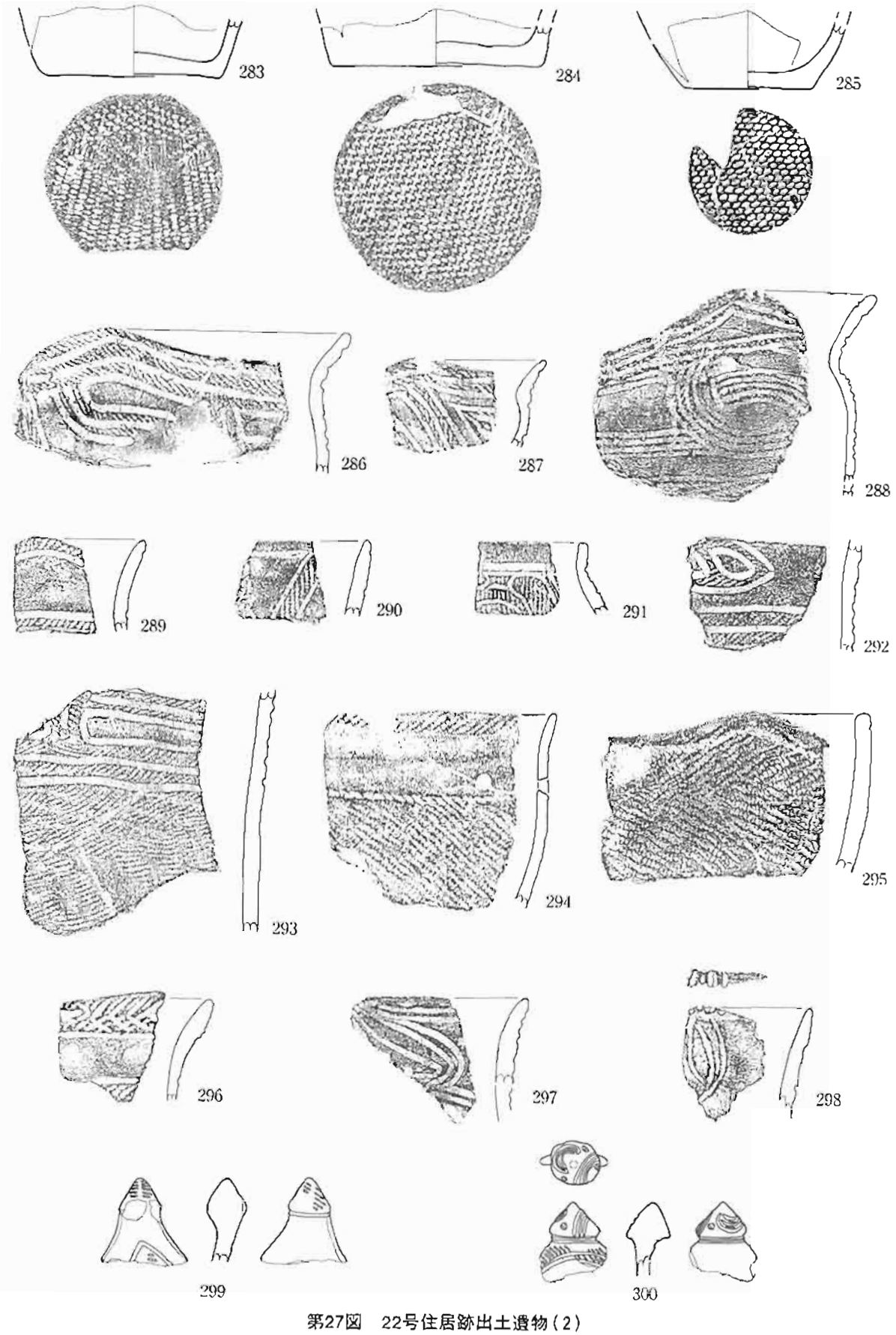






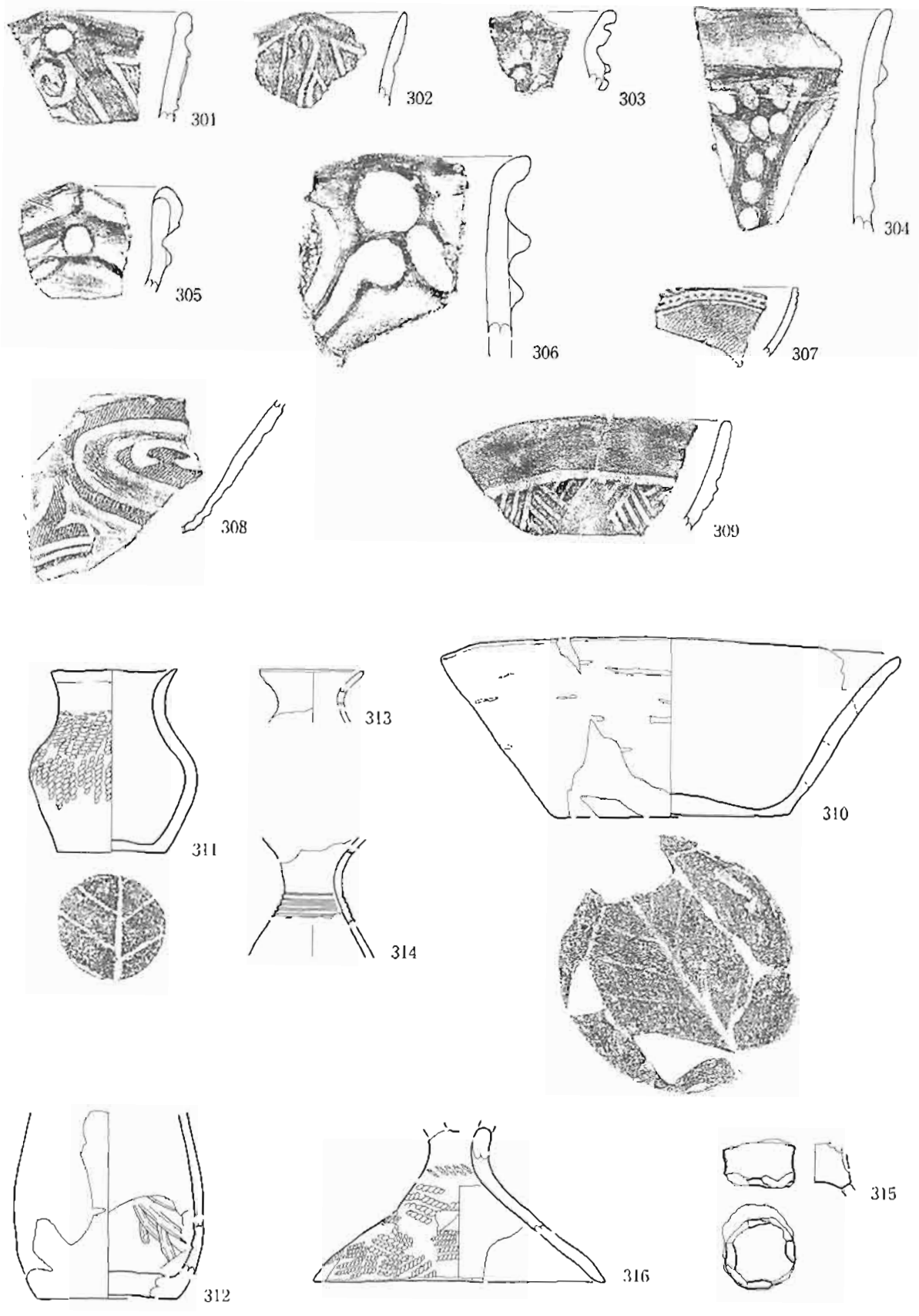
第26図　22号住居跡出土遺物（1）

22号住



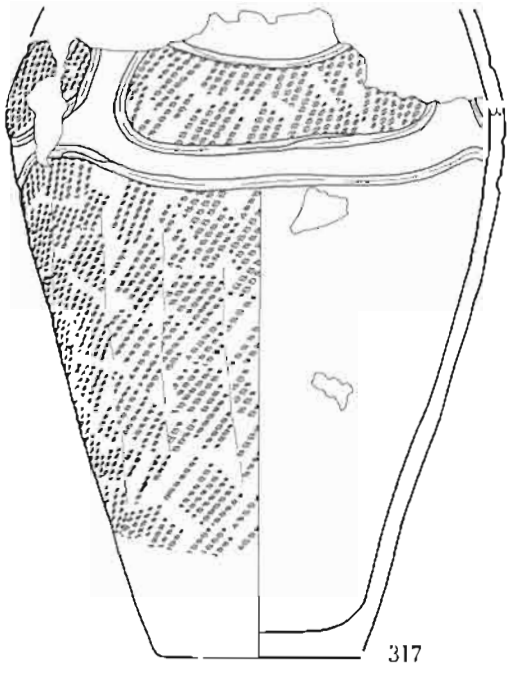
第27図　22号住居跡出土遺物（2）

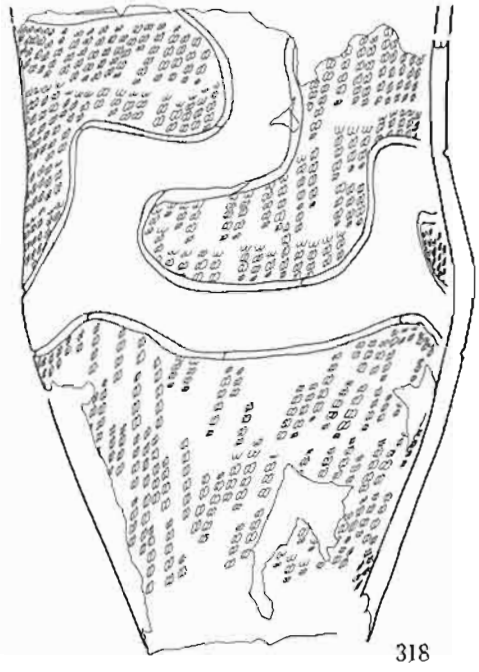
22号住

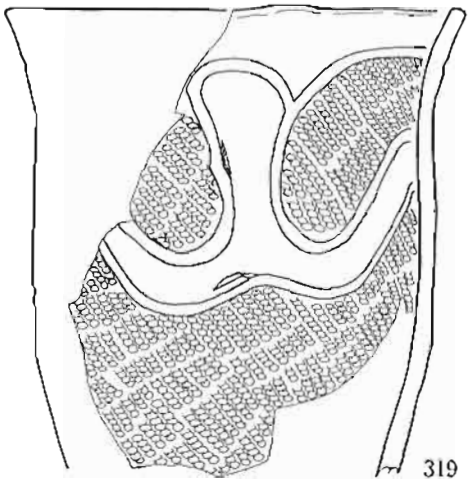


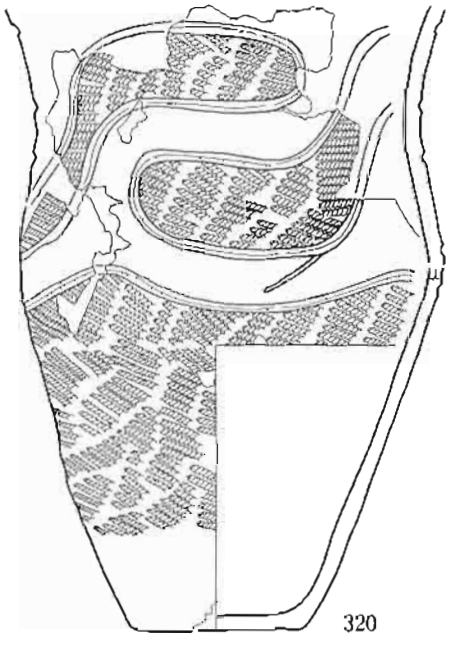
第28図　22号住居跡出土遺物（3）

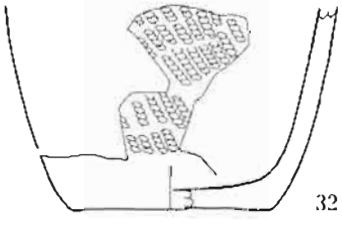
23号住

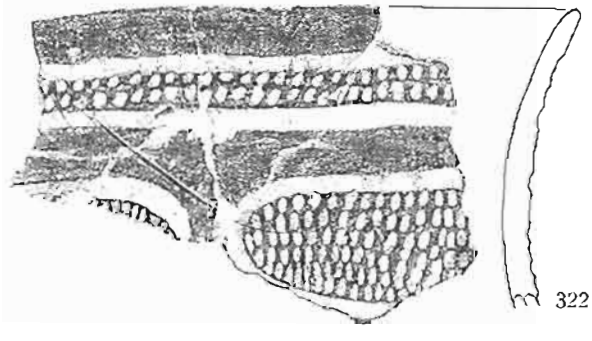






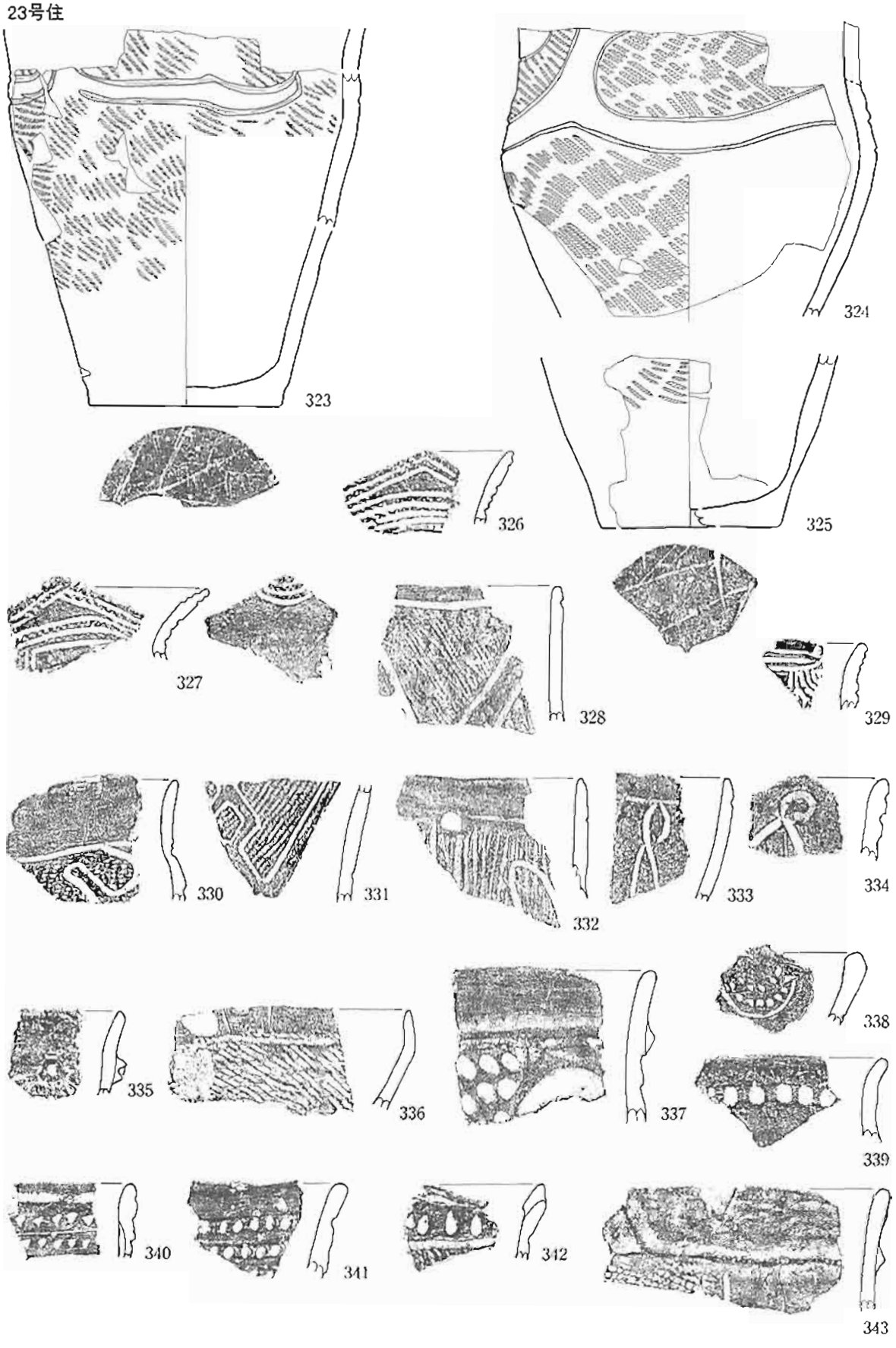






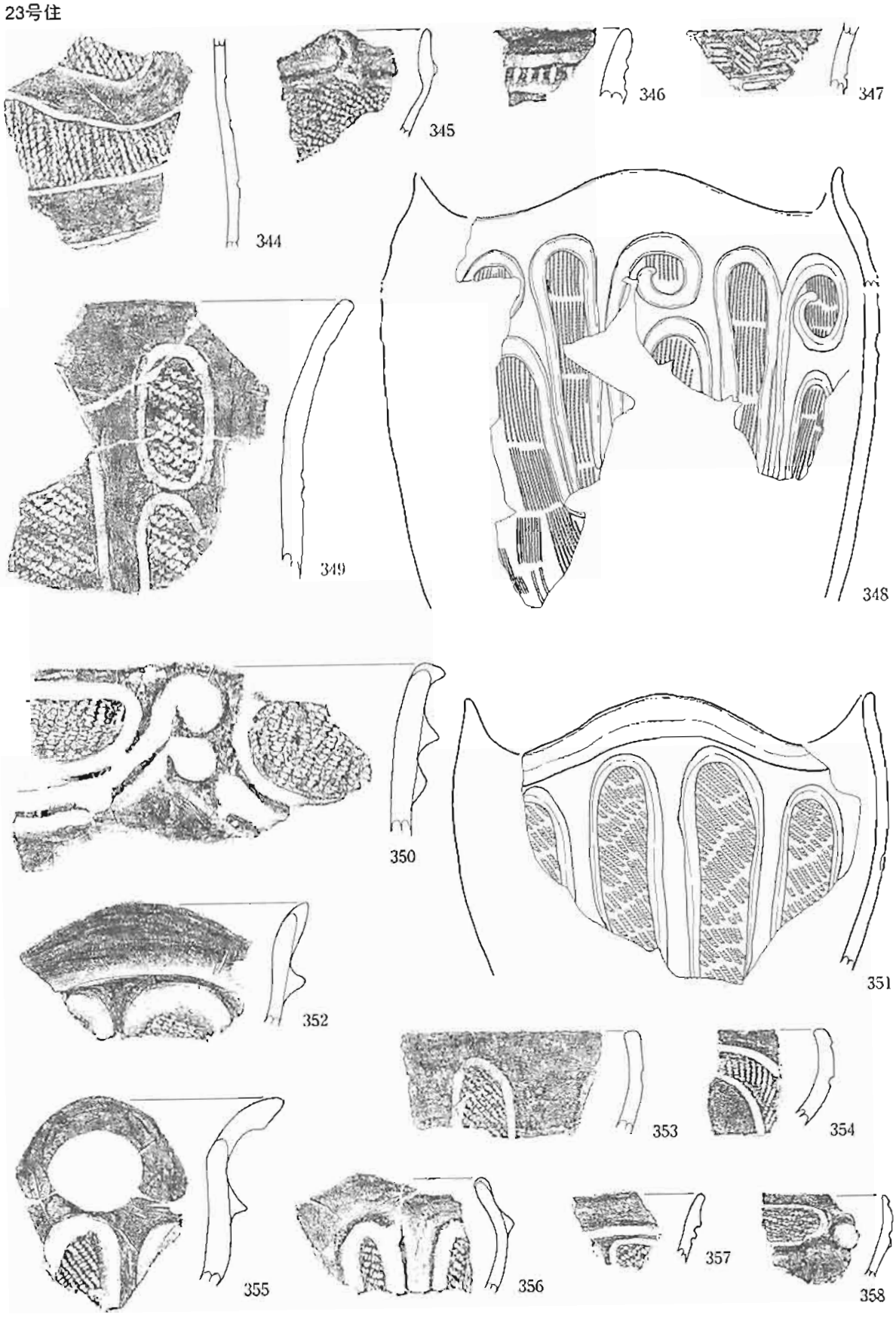
第29図　23号住居跡出土遺物（1）

23号住

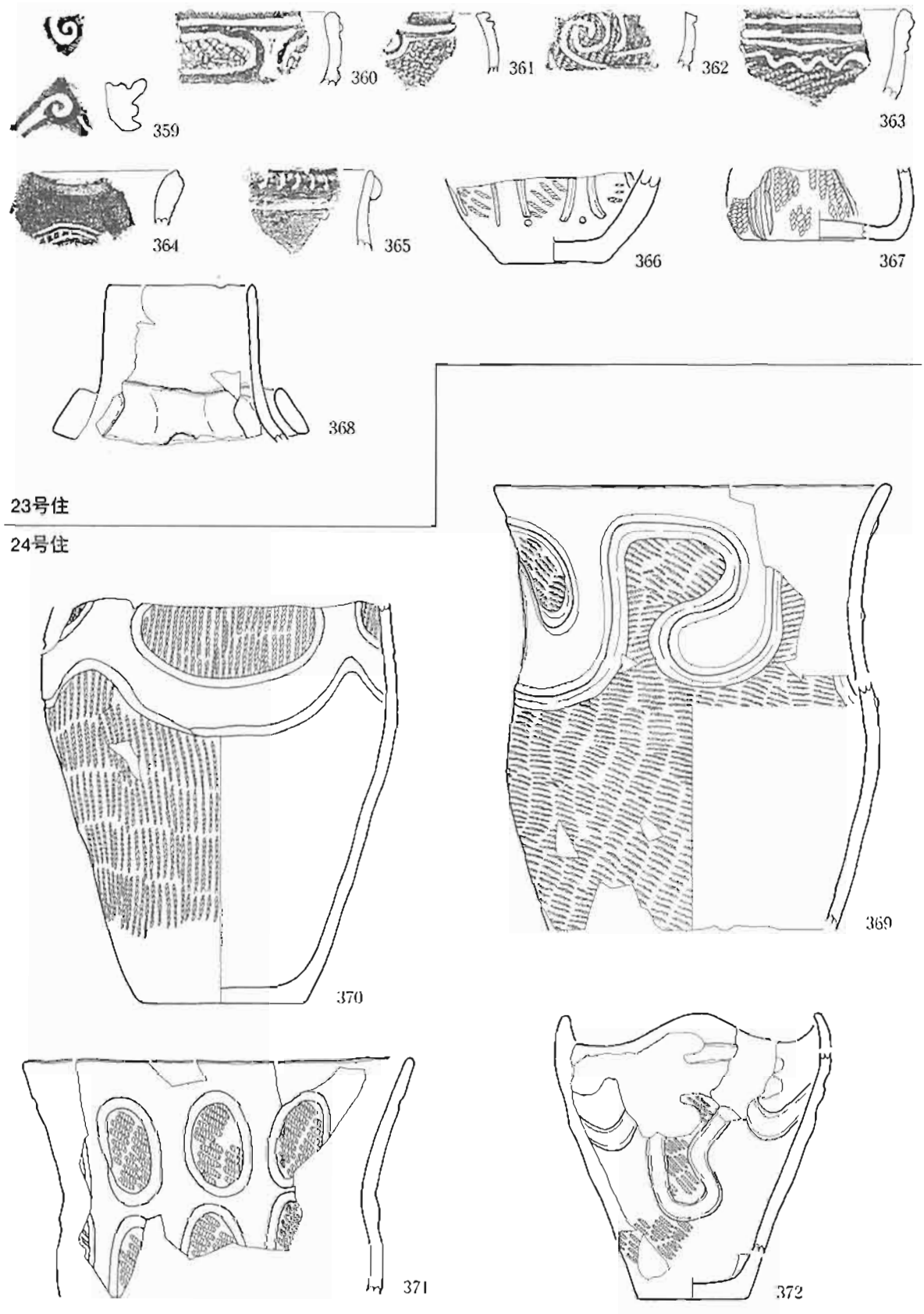


第30図　23号住居跡出土遺物（2）

23号住

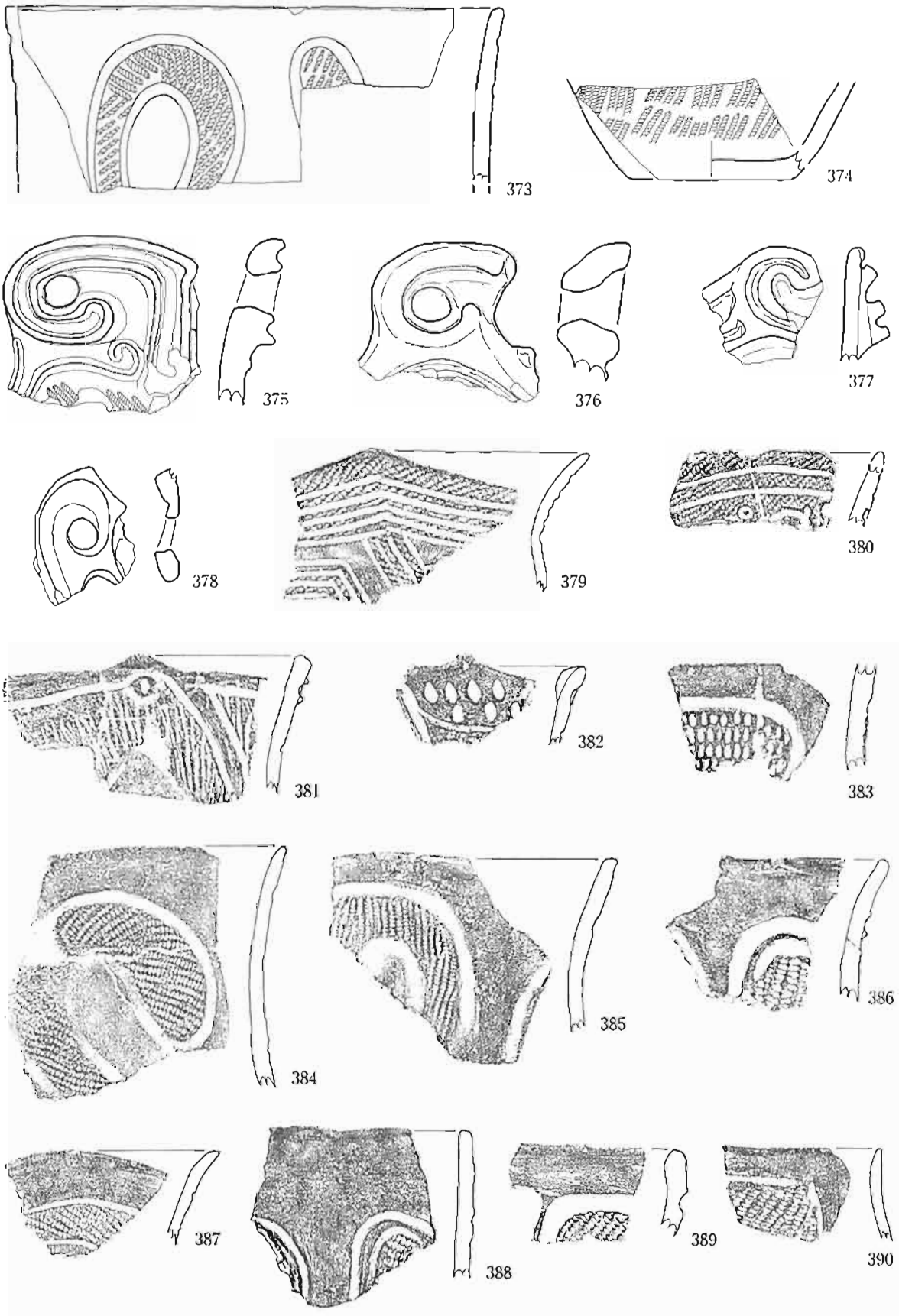


第31図　23号住居跡出土遺物（3）



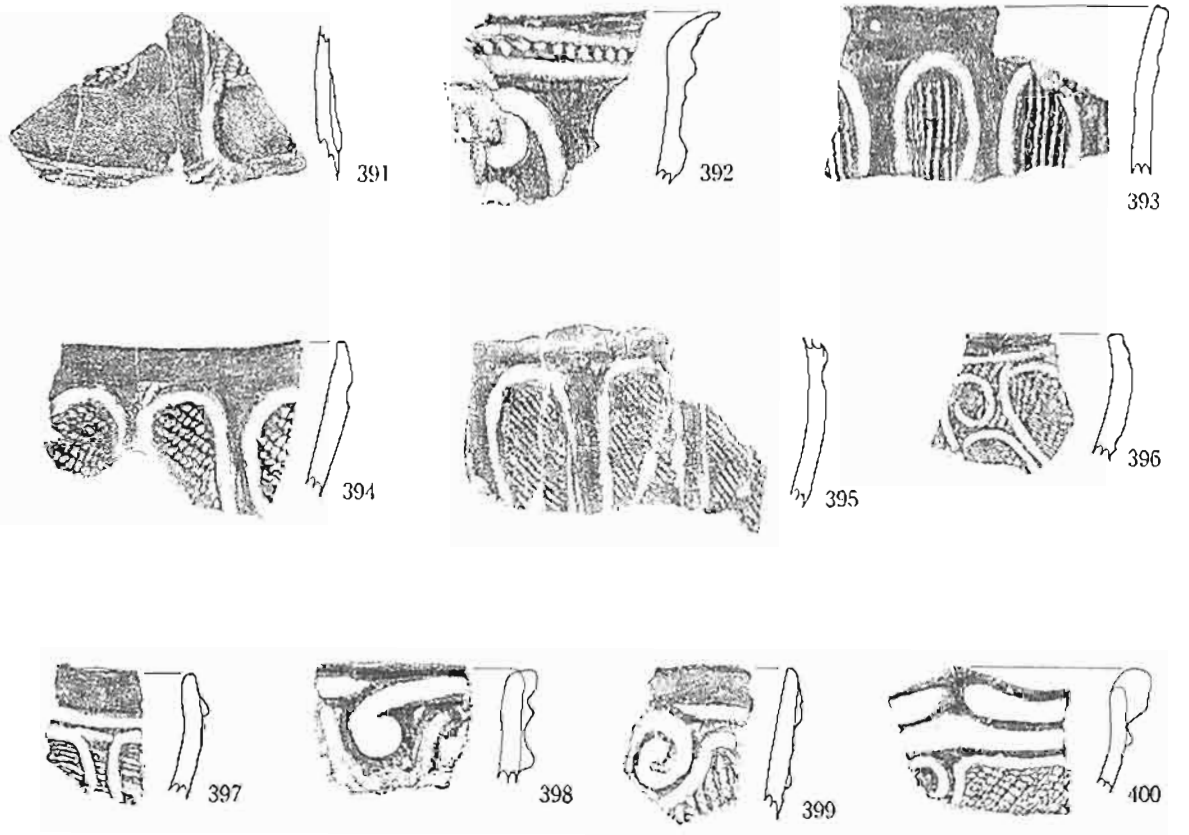
第32図　23号住居跡出土遺物（4）・24号住居跡出土遺物（1）

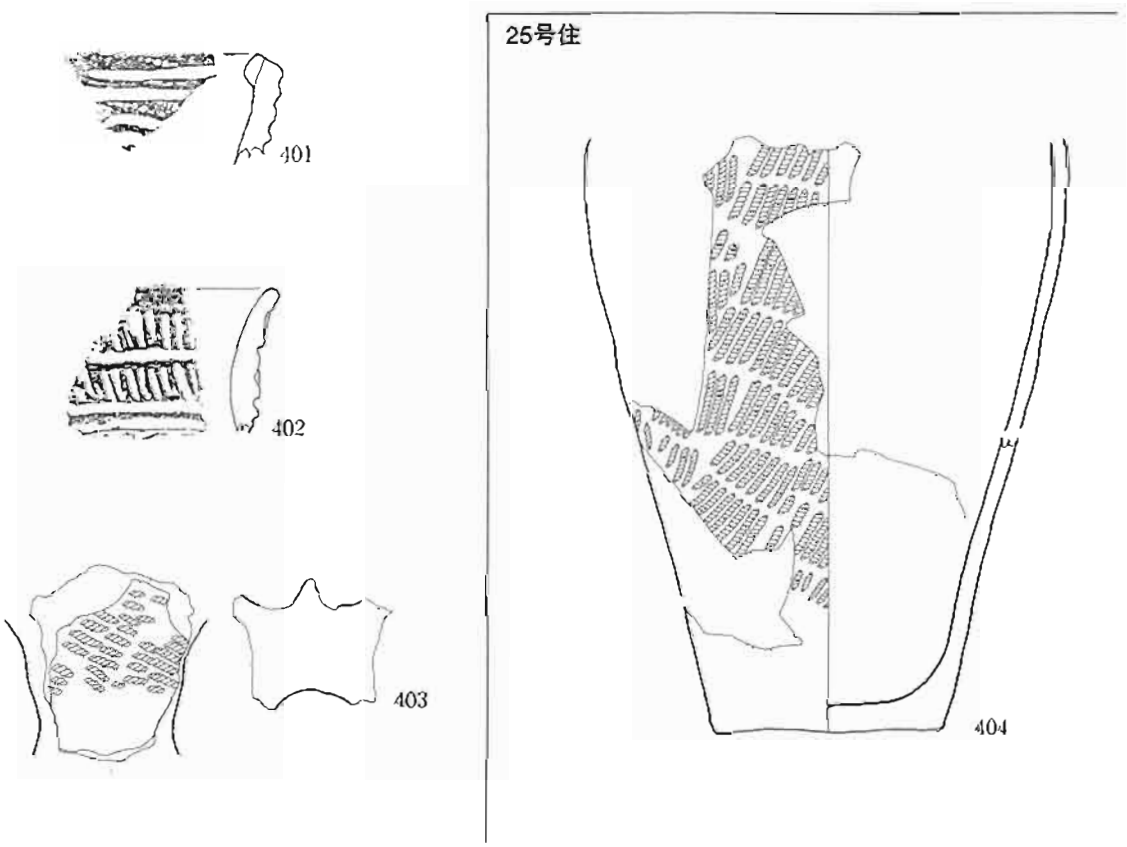
24号住



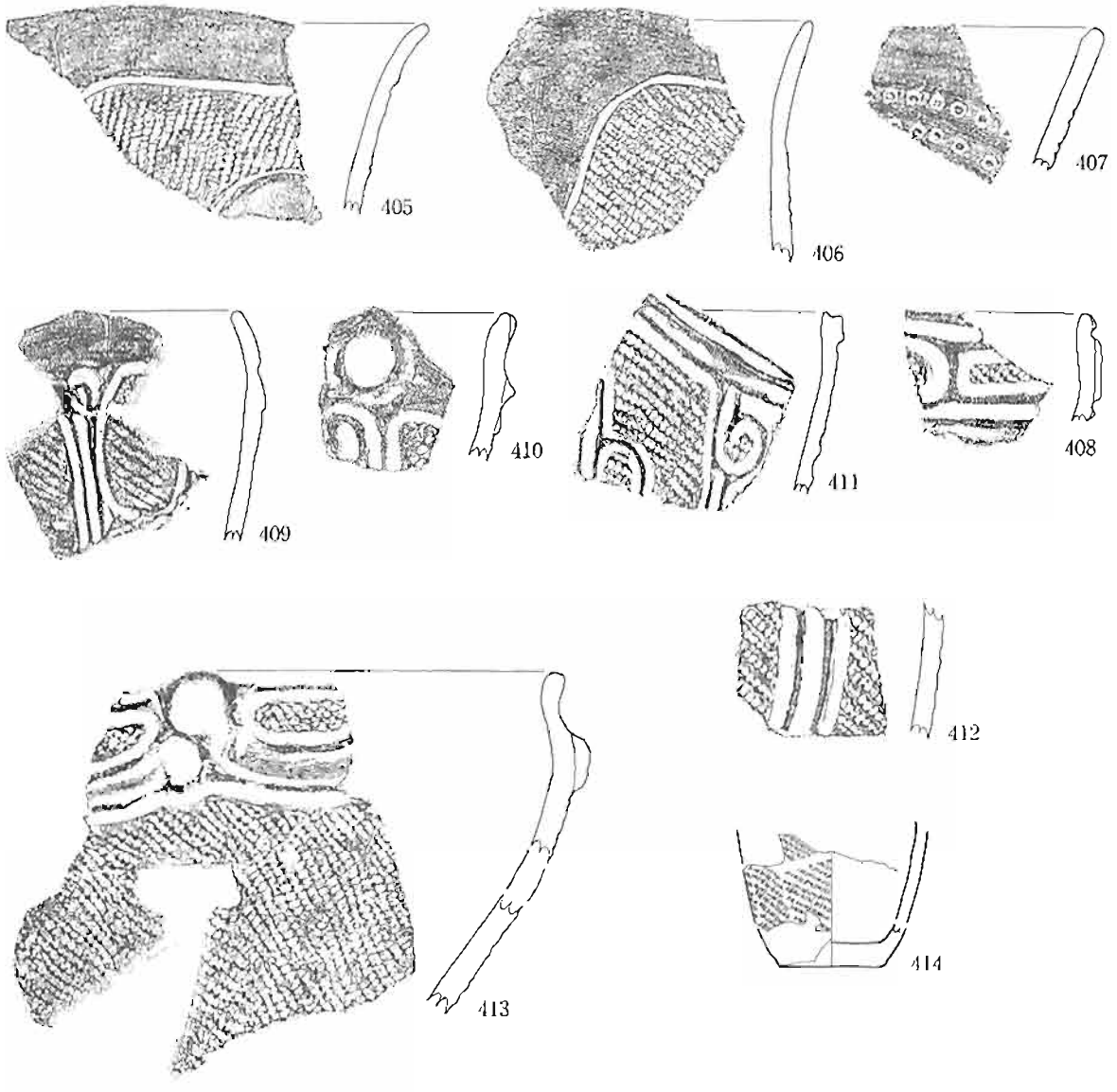
第33図　24号住居跡出土遺物（2）

24号住



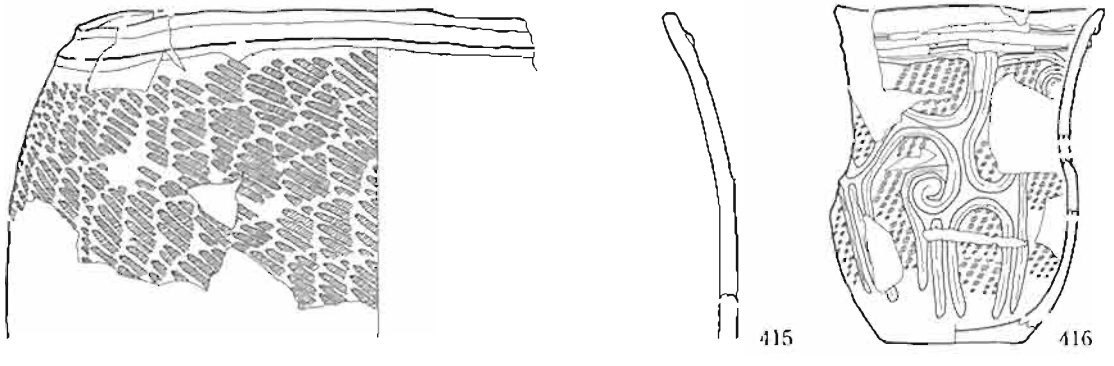


第34図　24号住居跡出土遺物（3）・25号住居跡出土遺物（1）



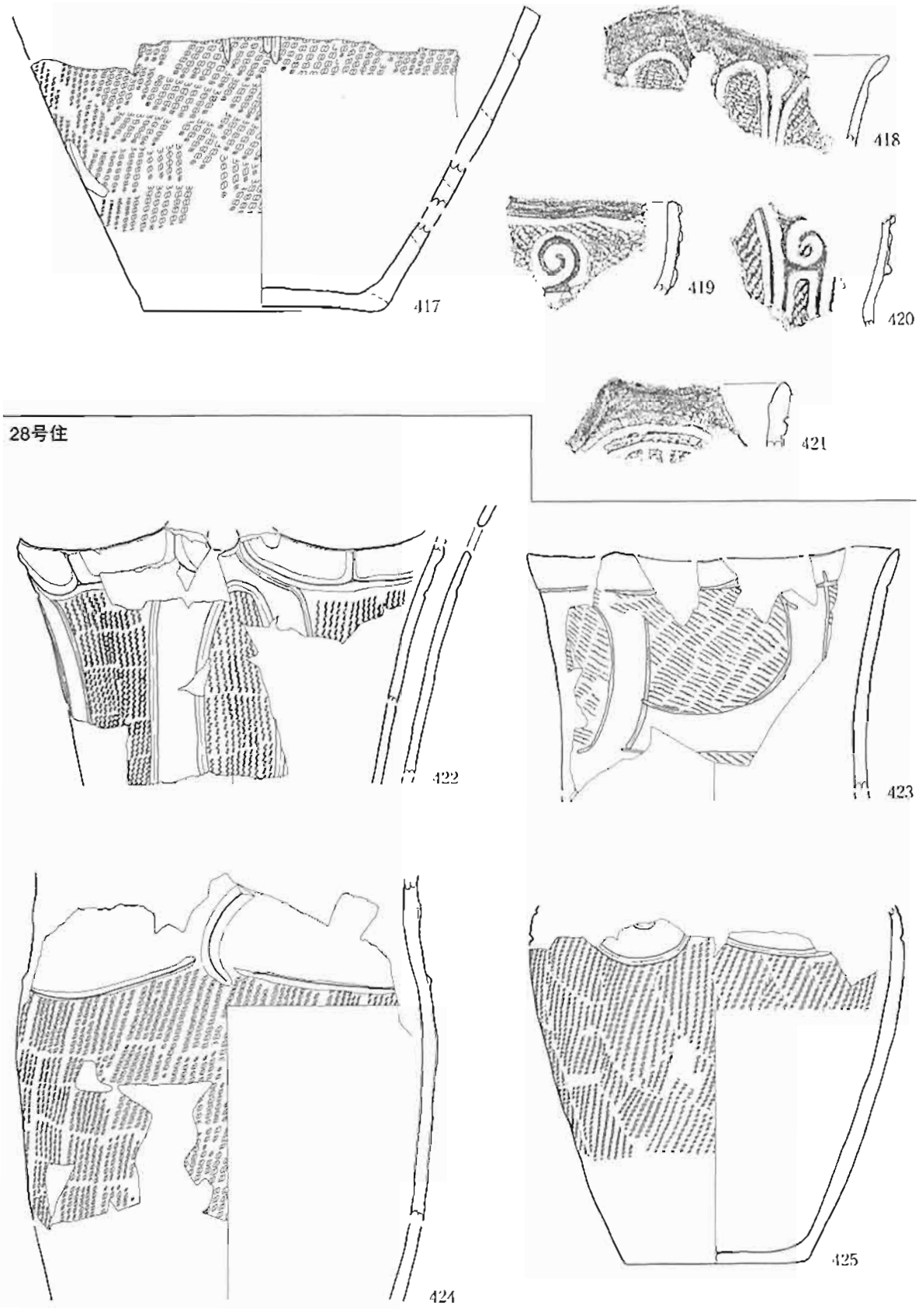
25号住

26号住



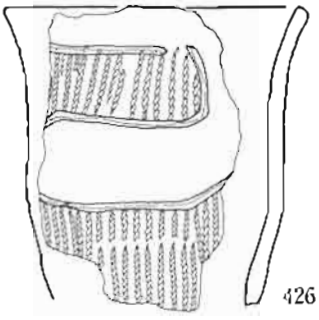
第35図　25号住居跡出土遺物（2）・26号住居跡出土遺物（1）

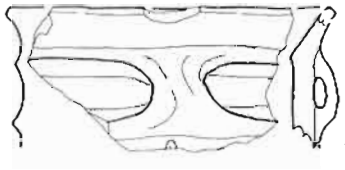
26号住

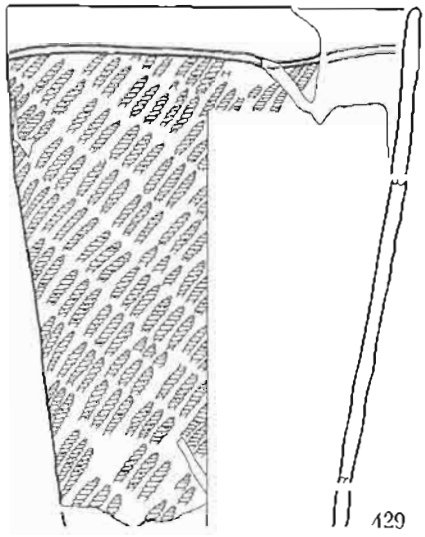


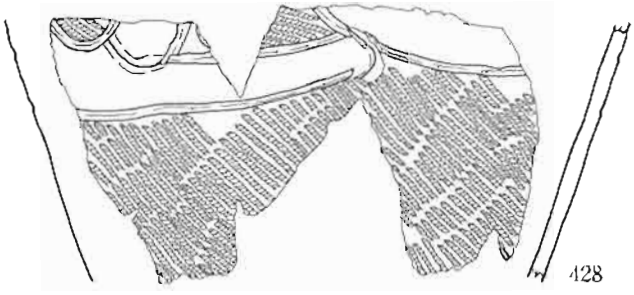
第36図　26号住居跡出土遺物（2）・28号住居跡出土遺物（1）

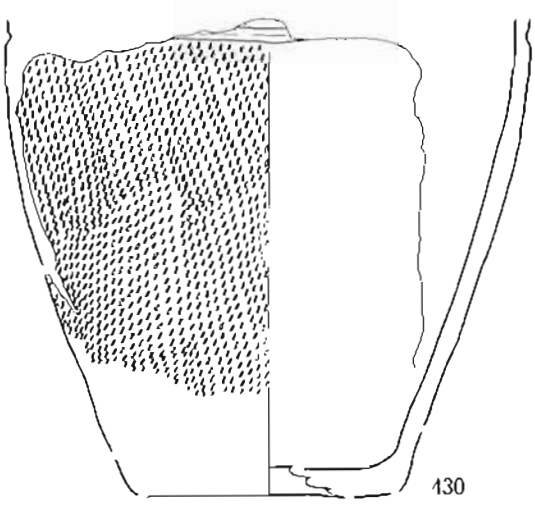
28号住

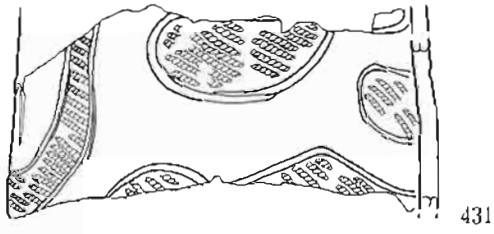


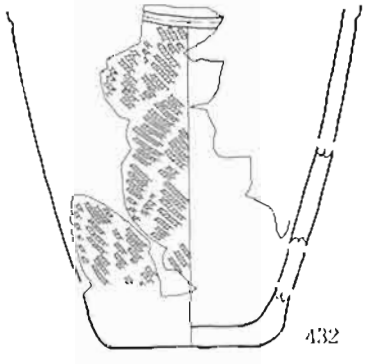


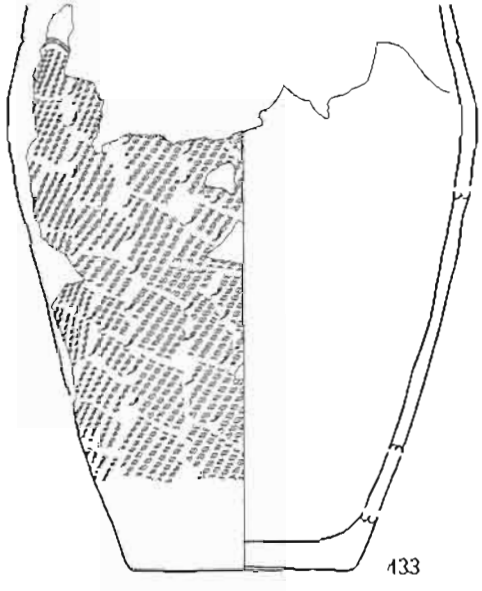






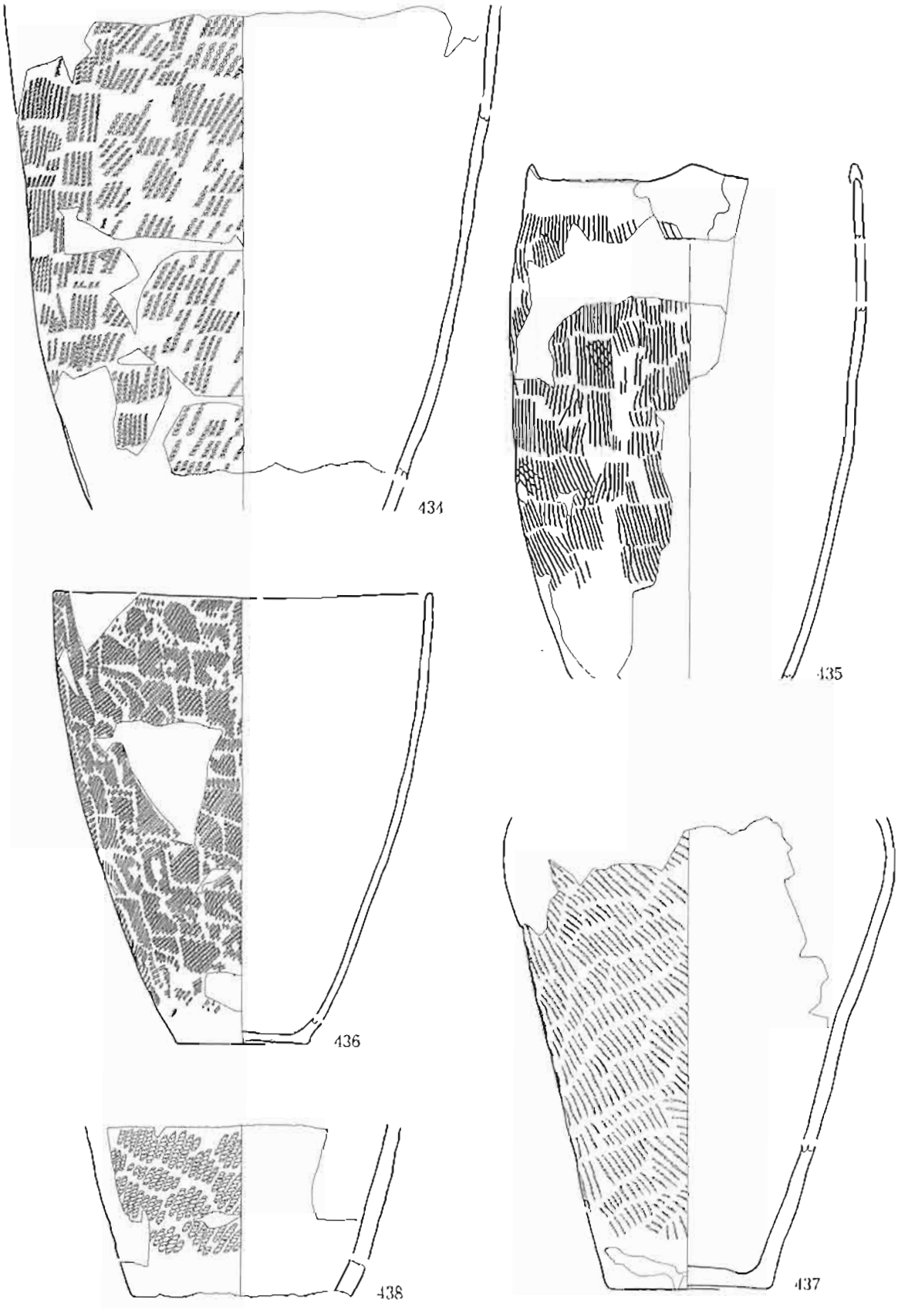






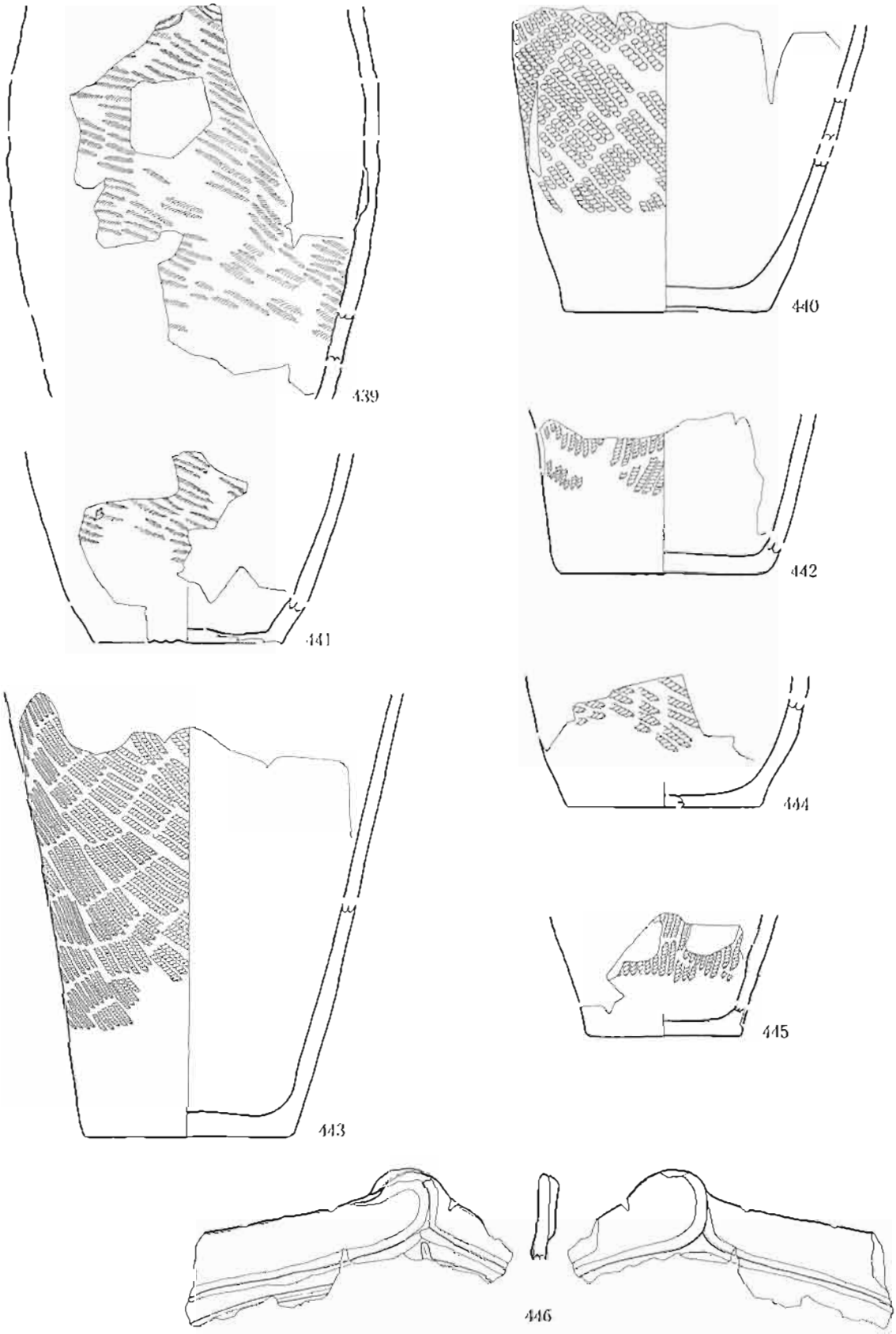
第37図　28号住居跡出土遺物（2）

28号住



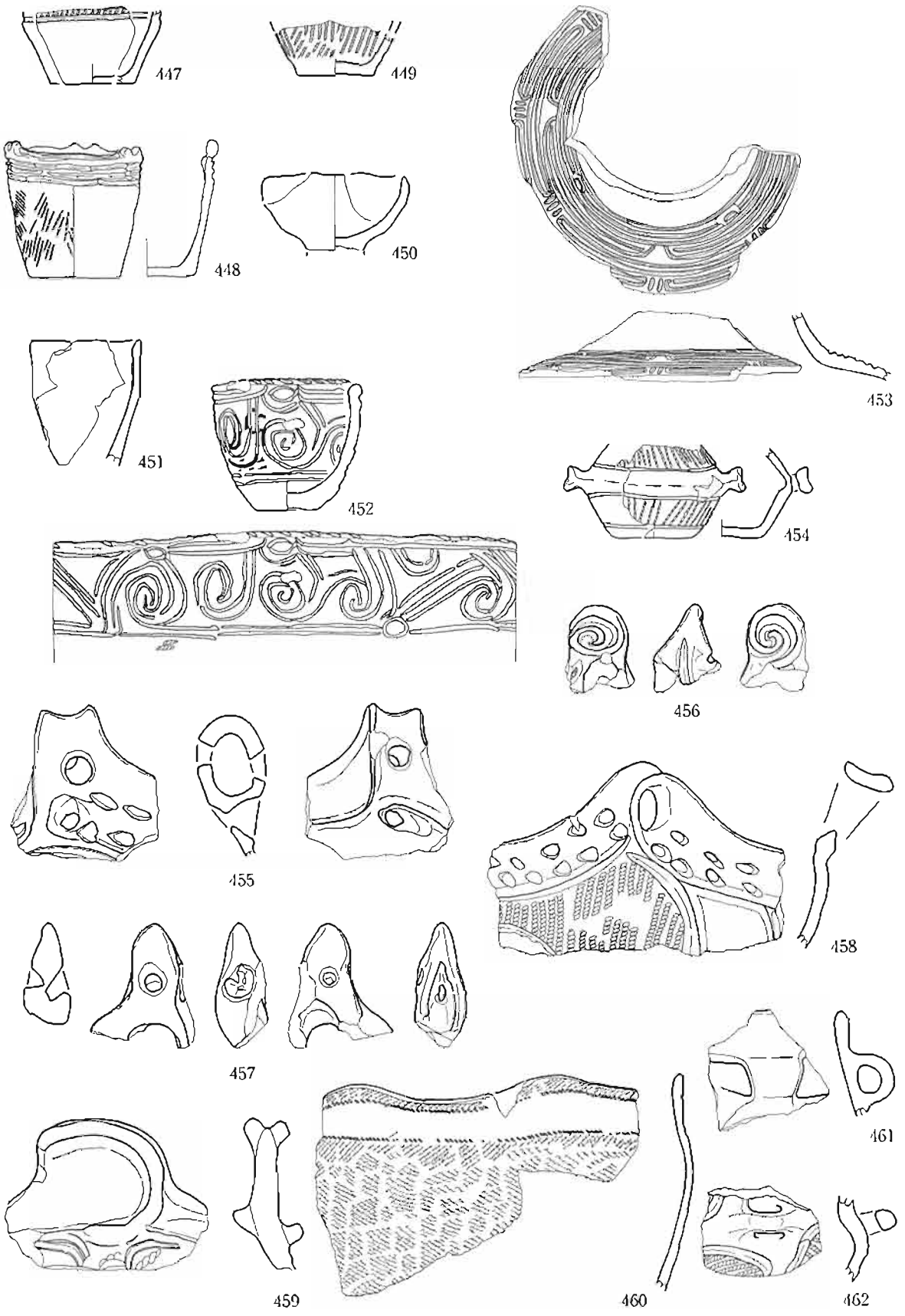
第38図　28号住居跡出土遺物（3）

28号住



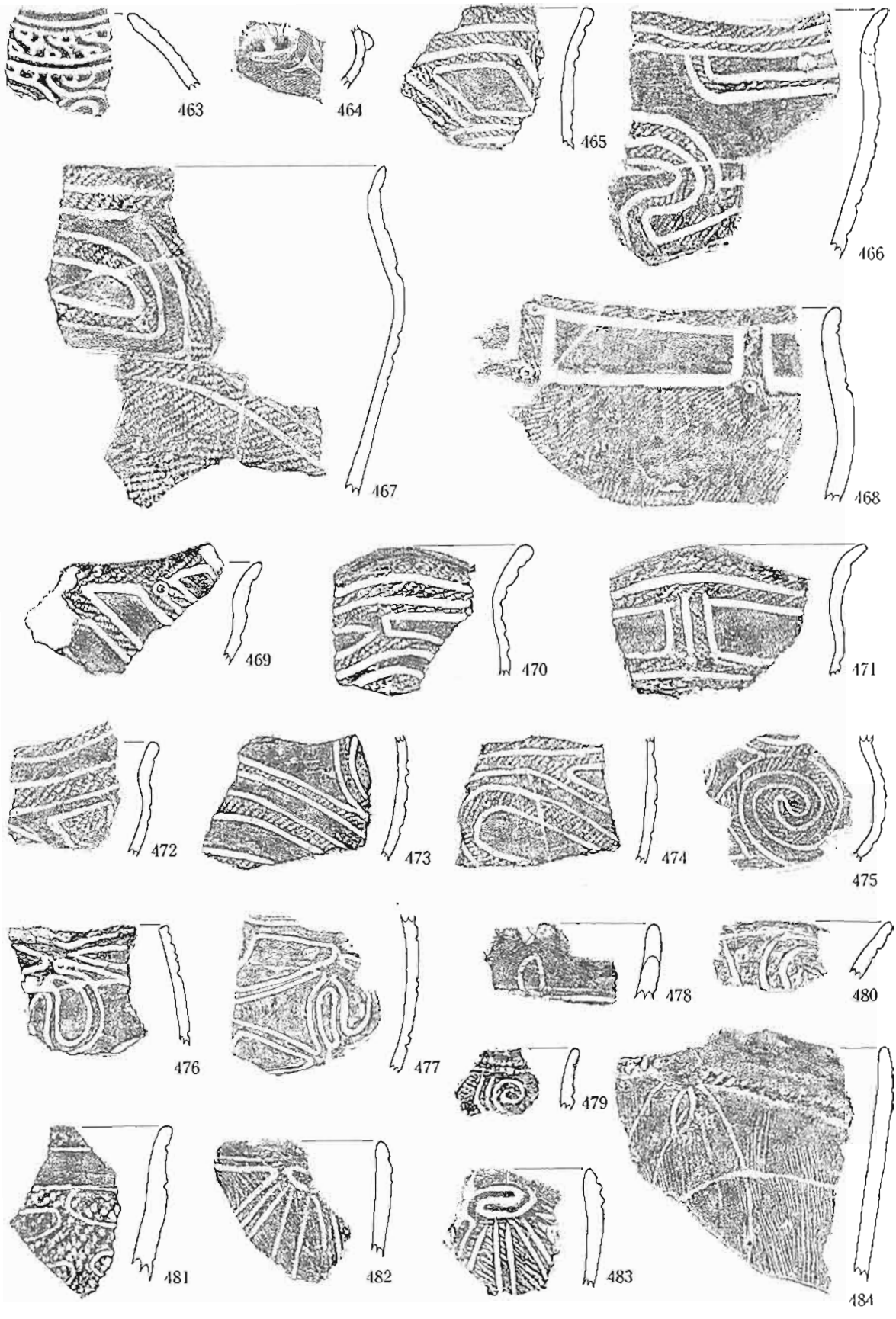
第39図　28号住居跡出土遺物（4）

28号住



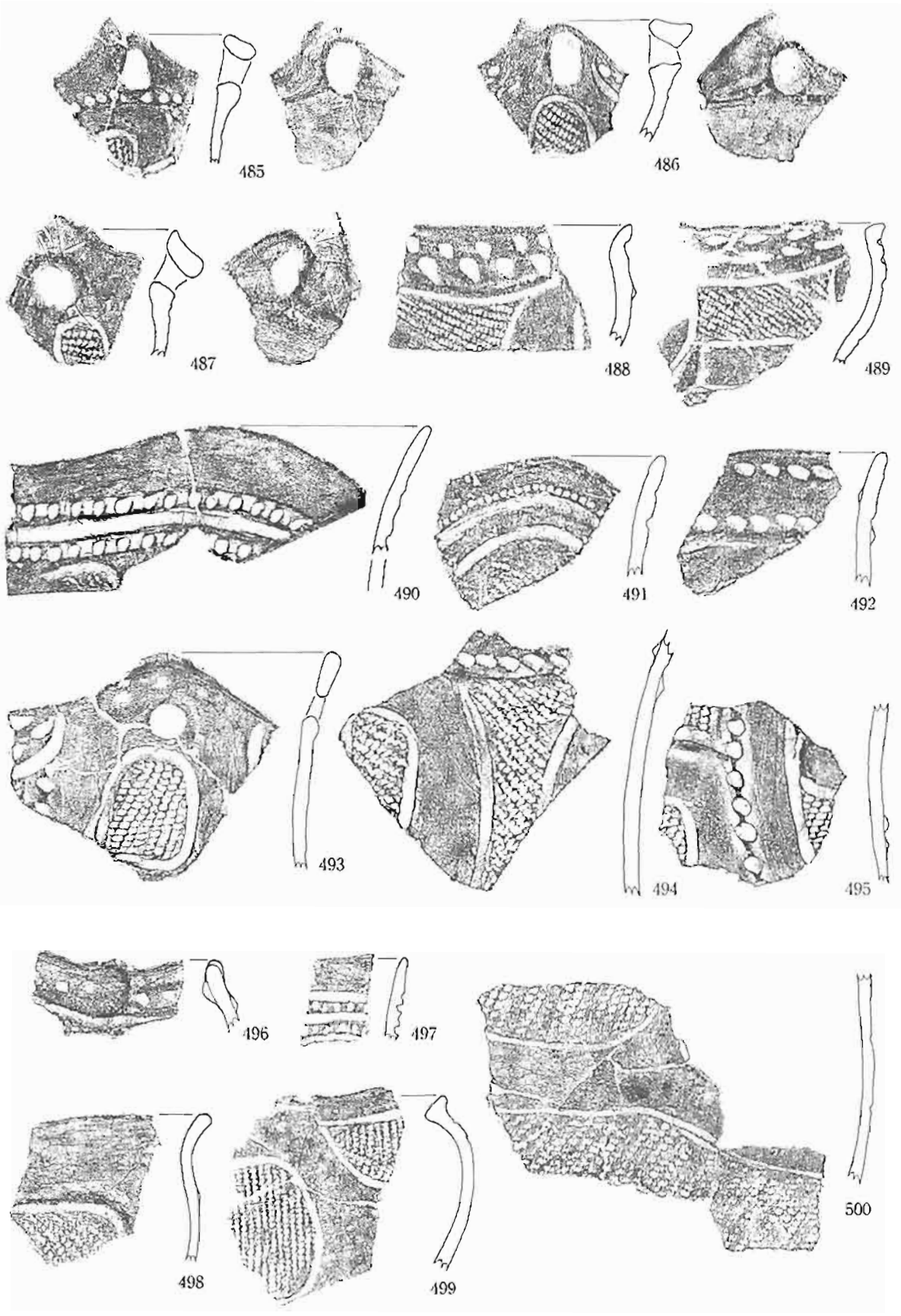
第40図　28号住居跡出土遺物（5）

28号住



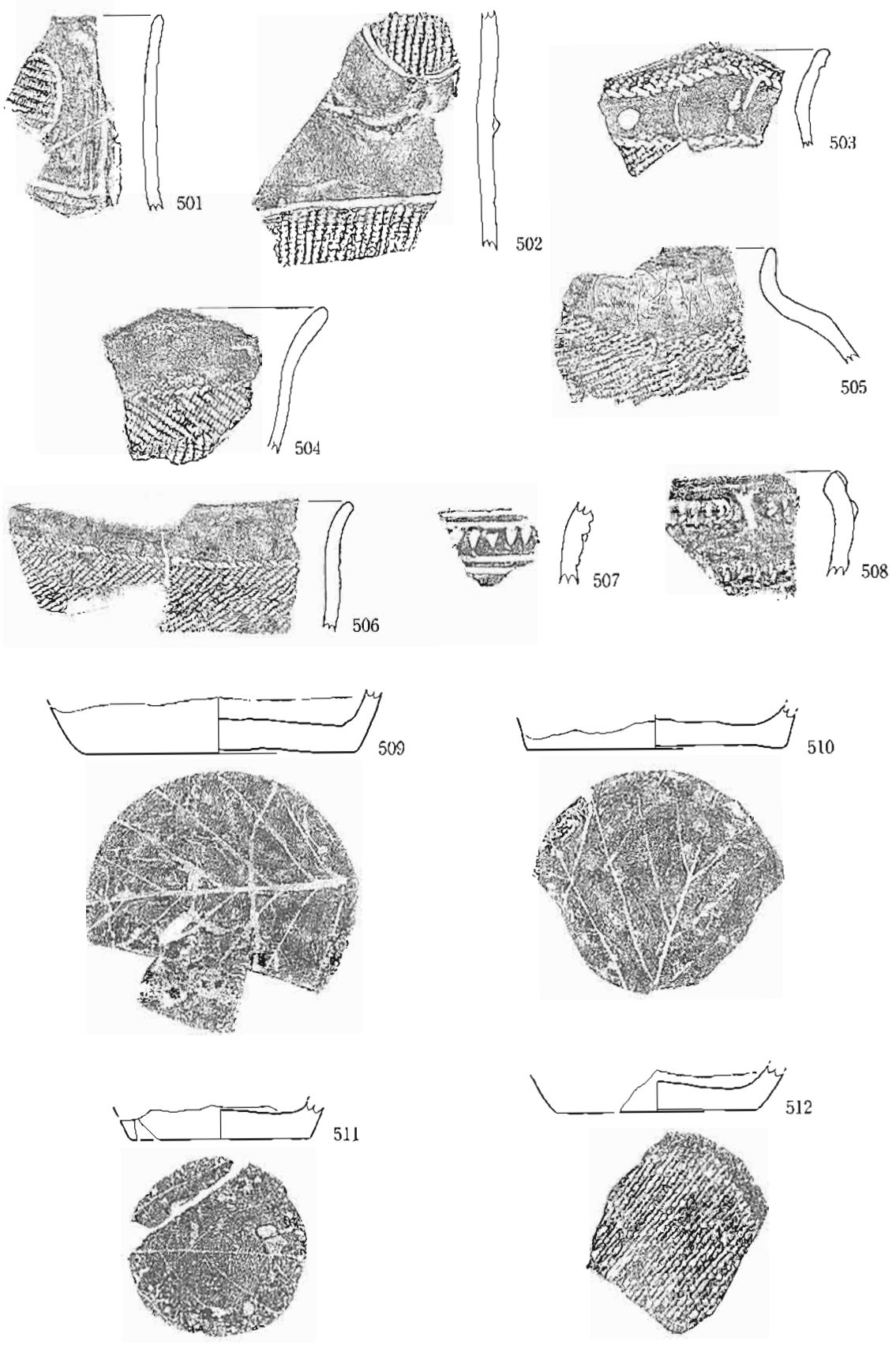
第41図　28号住居跡出土遺物（6）

28号住



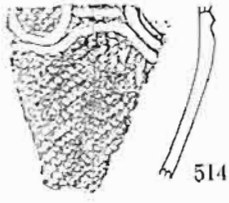
第42図　28号住居跡出土遺物（7）

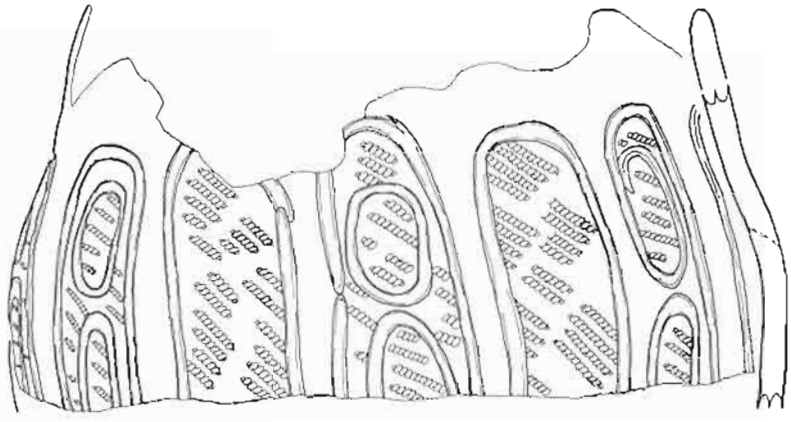
28号住



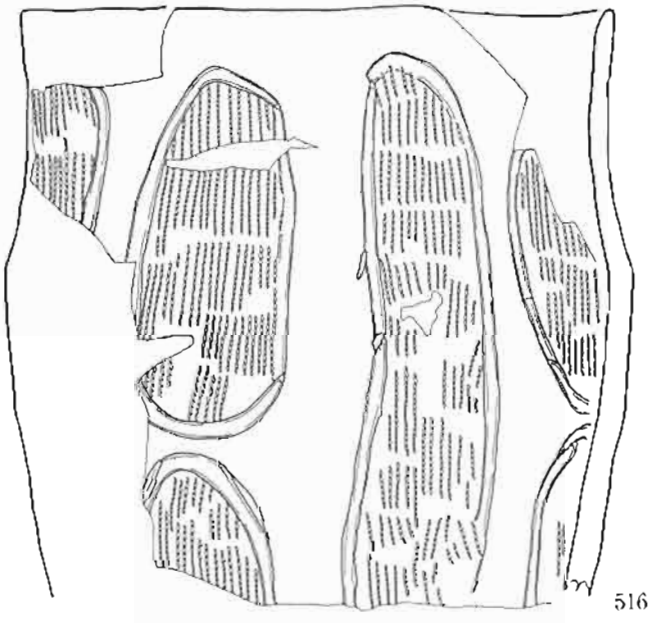
第43図　28号住居跡出土遺物(8)

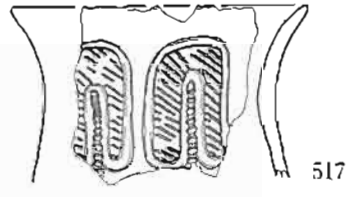
29号住

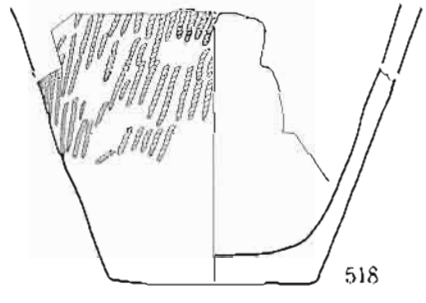


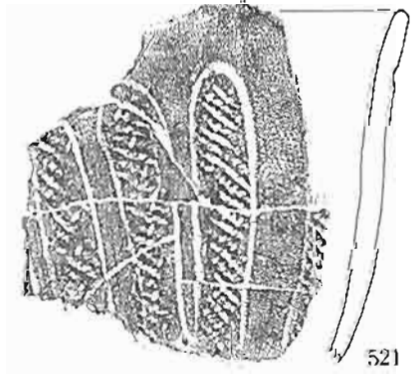


30号住



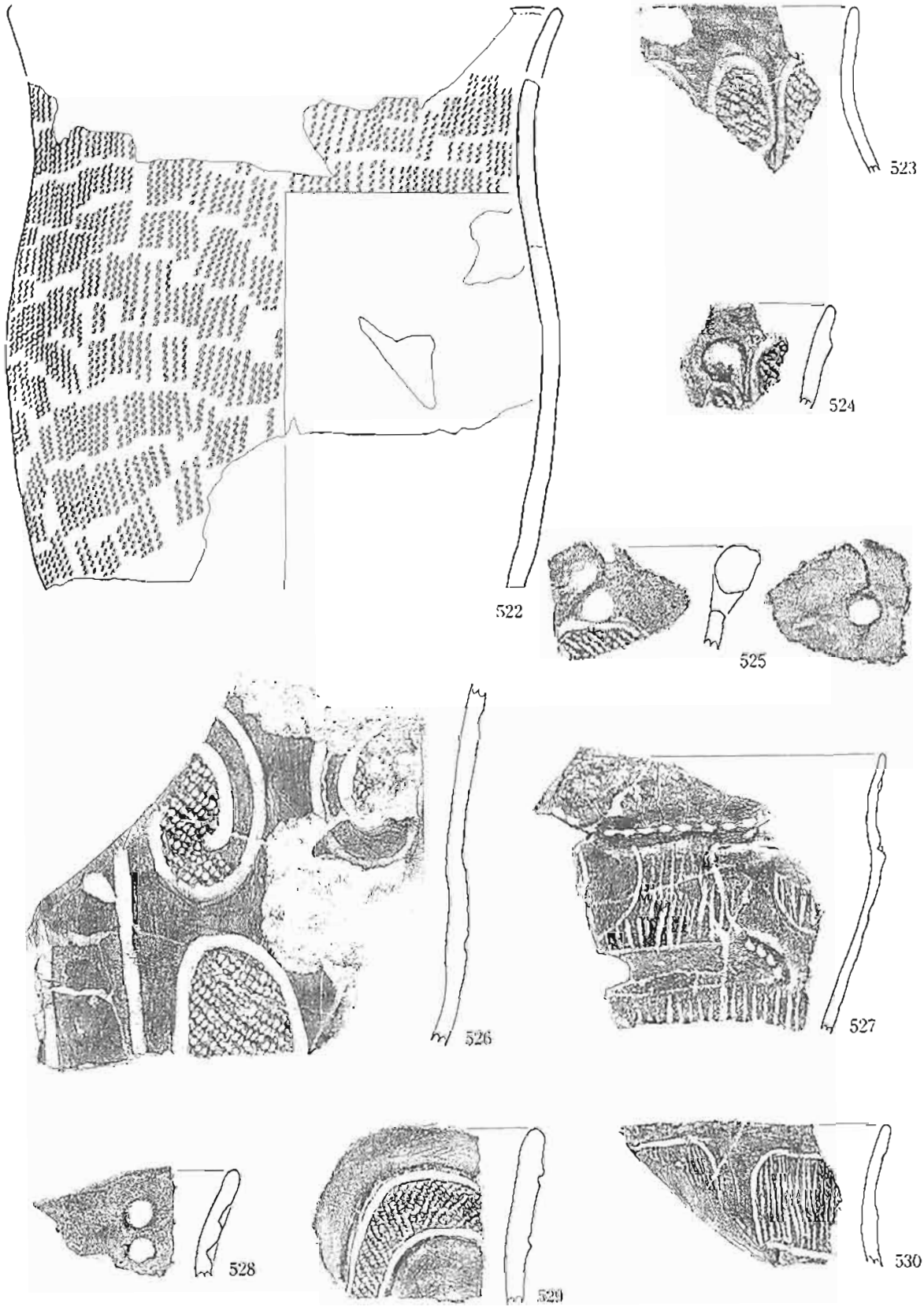




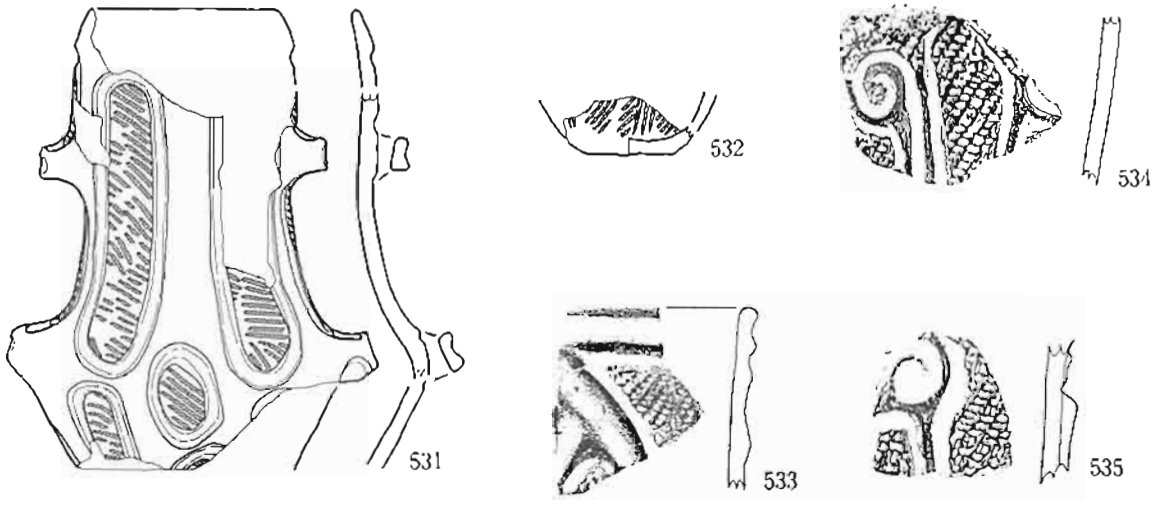


第44図　29号住居跡出土遺物・30号住居跡出土遺物（1）

30号住

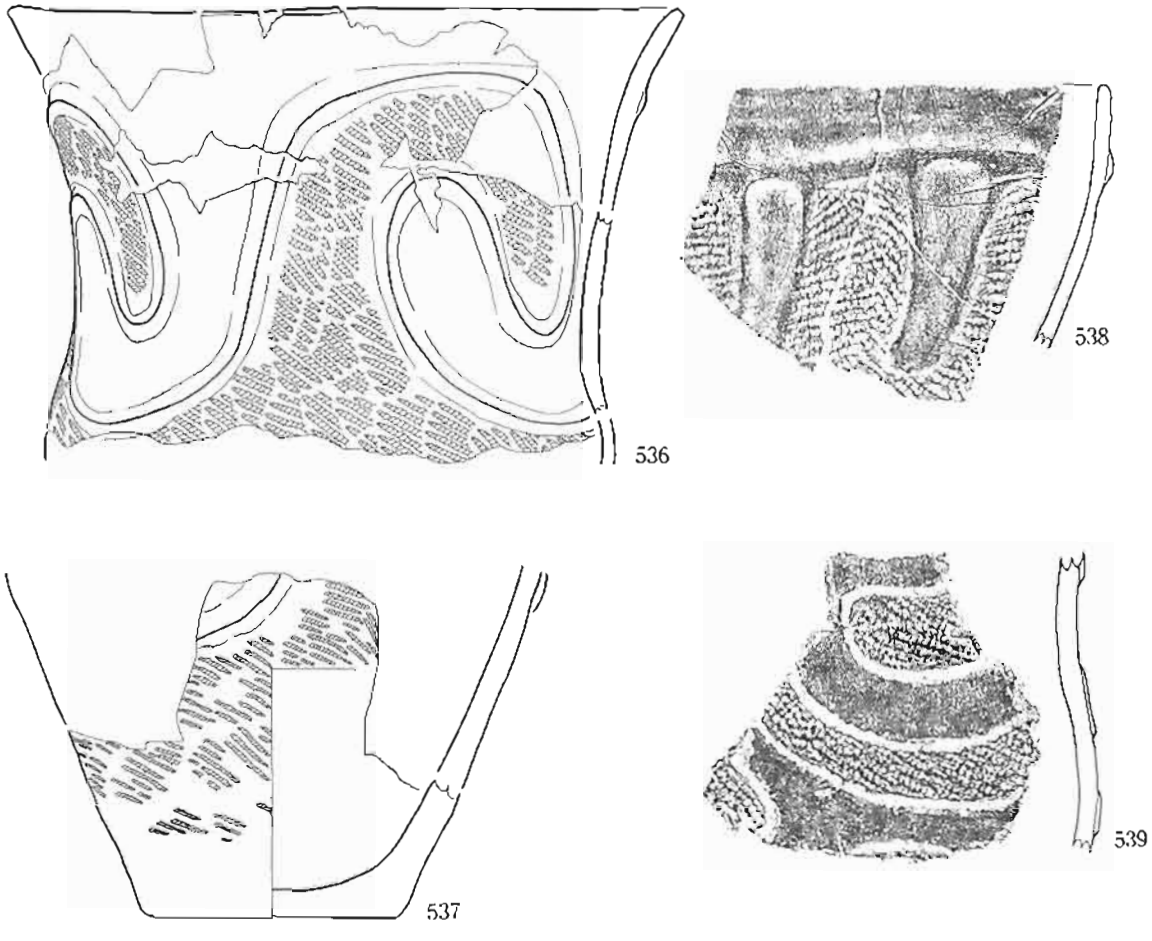


第45図　30号住居跡出土遺物（2）

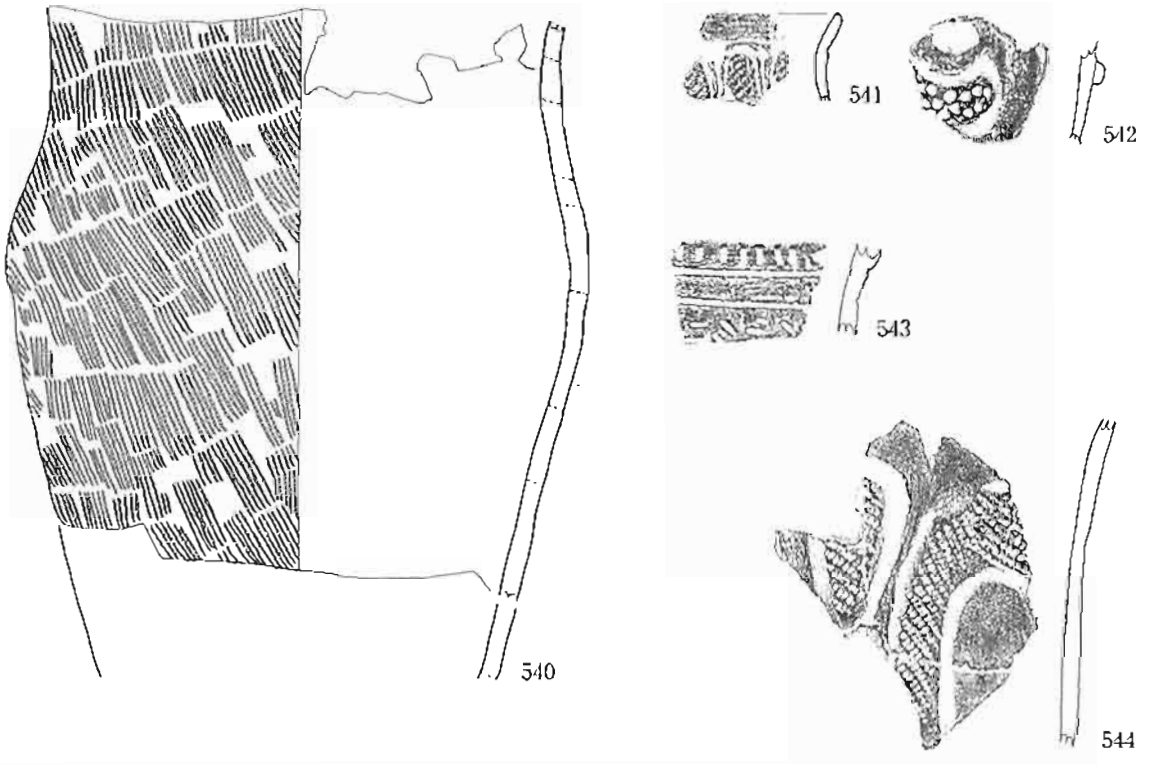


30号住

31号住

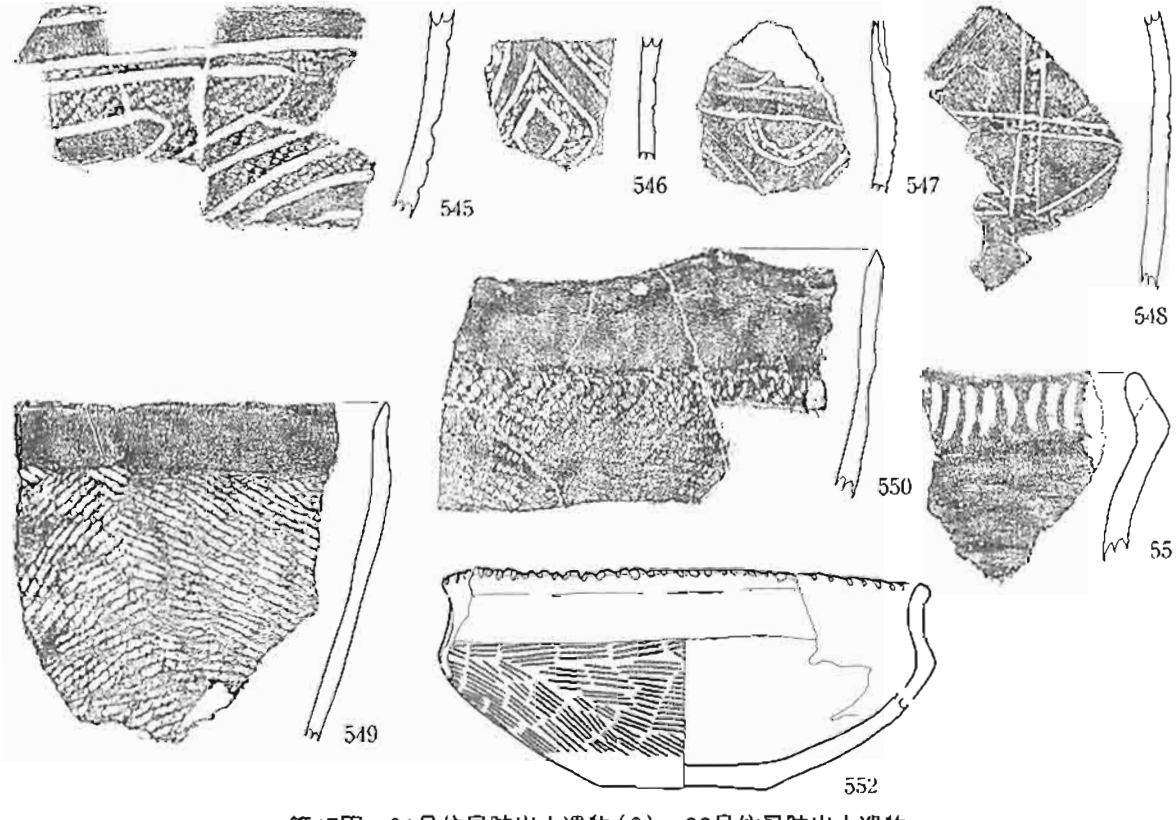


第46図　30号住居跡出土遺物（3）・31号住居跡出土遺物（1）



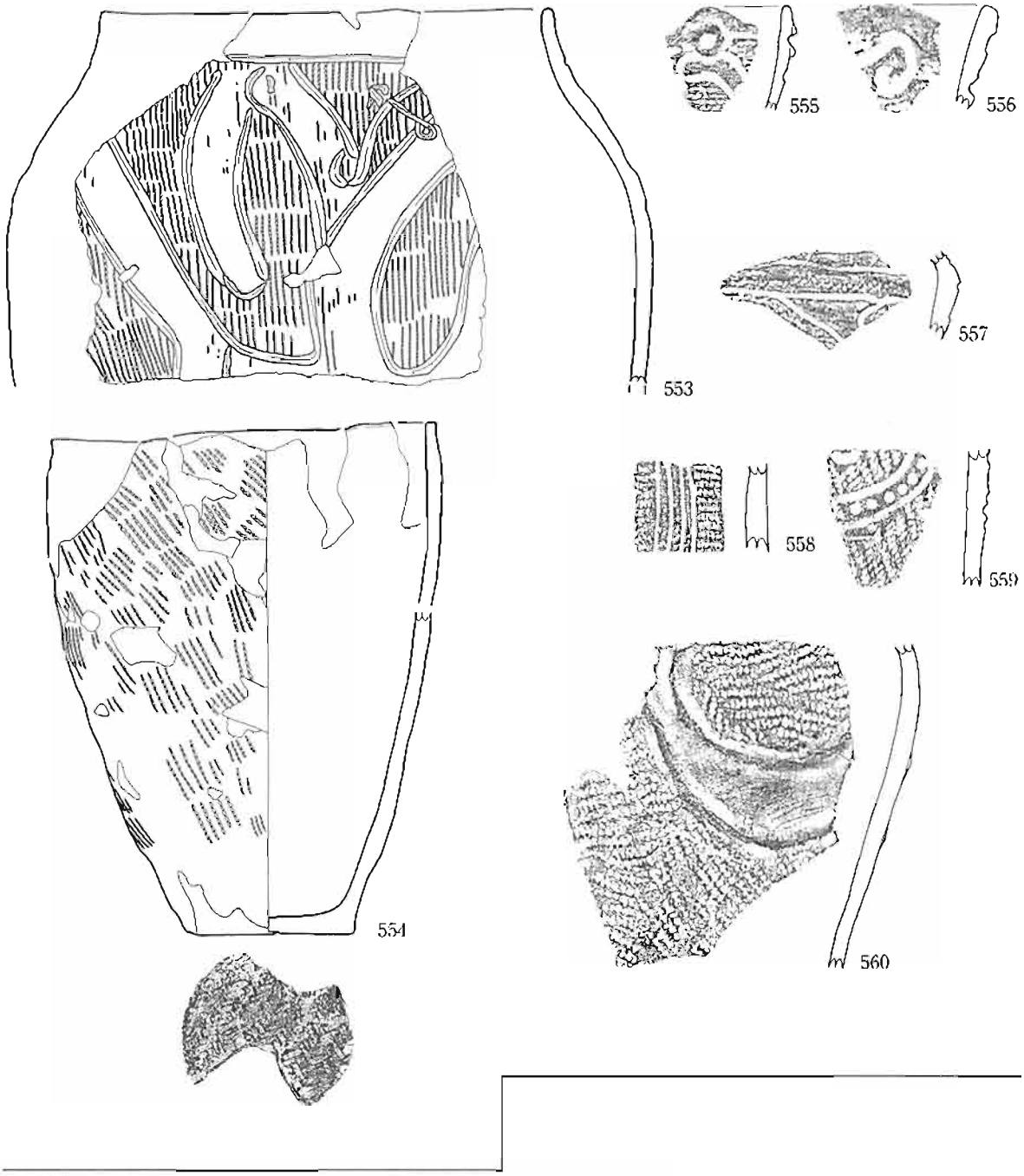
31号住

32号住

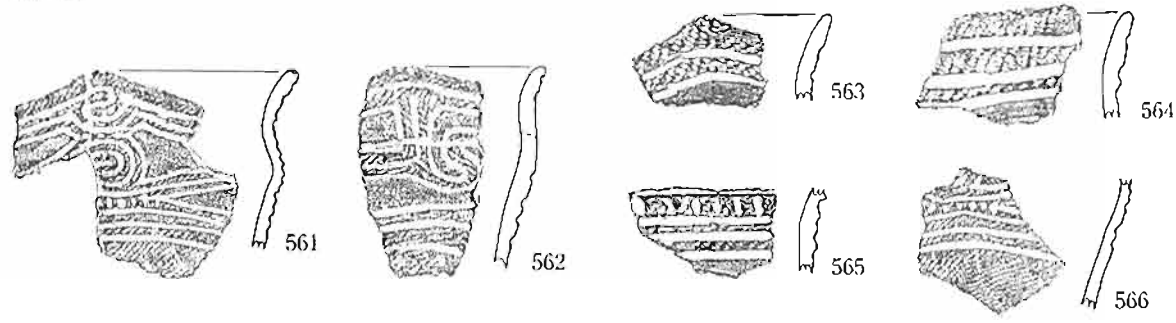


第47図　31号住居跡出土遺物（2）・32号住居跡出土遺物

33号住

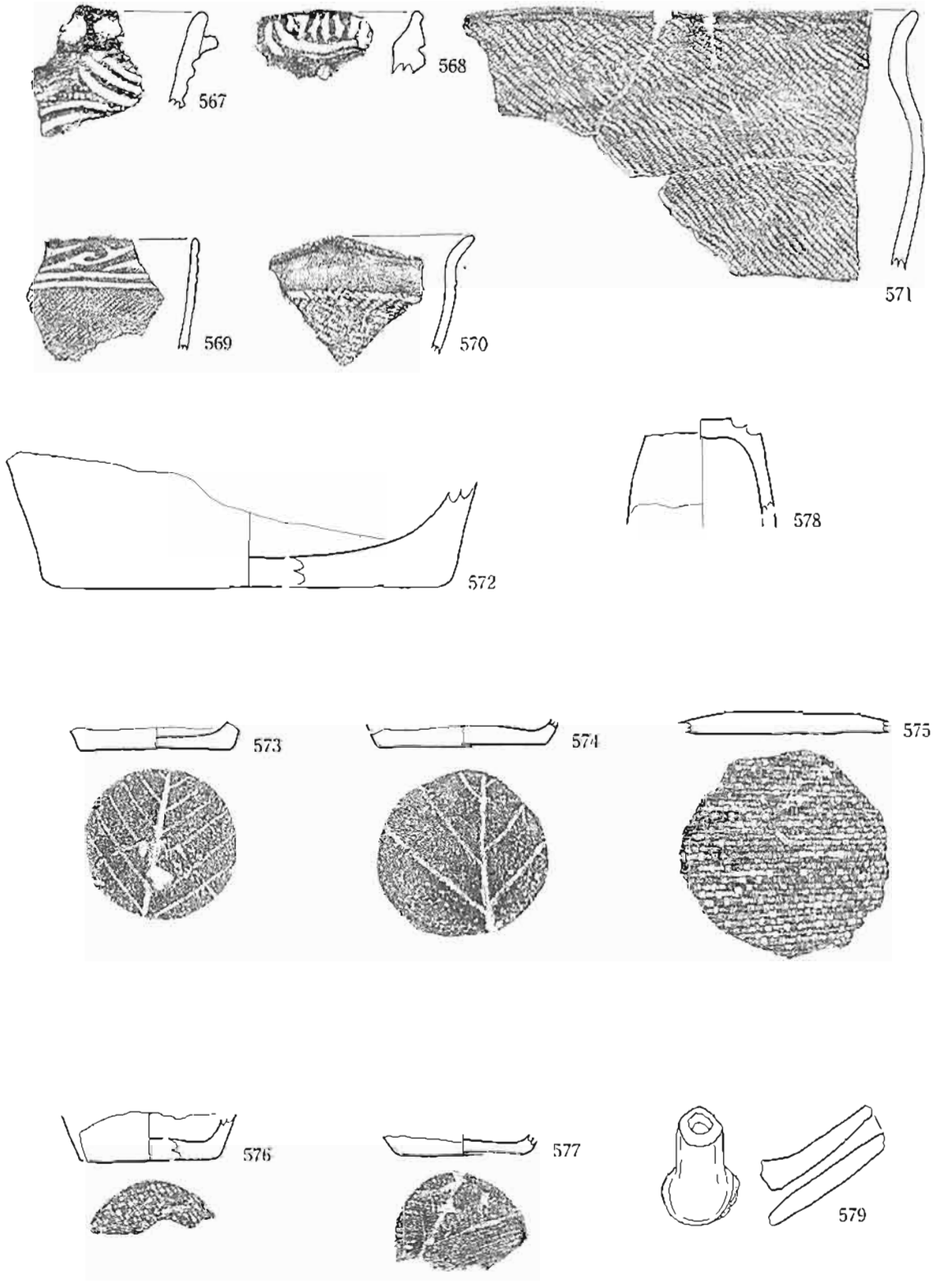


34号住



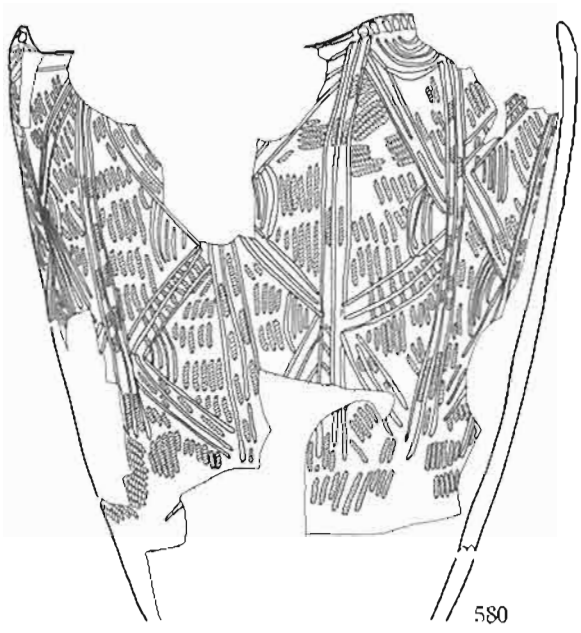
第48図　33号住居跡出土遺物・34号住居跡出土遺物（1）

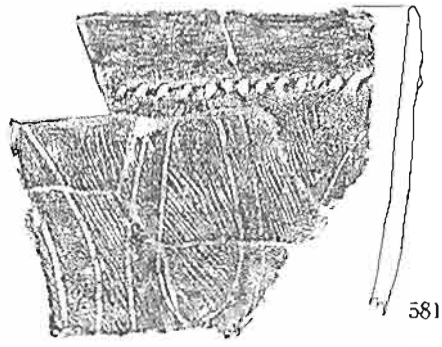
34号住

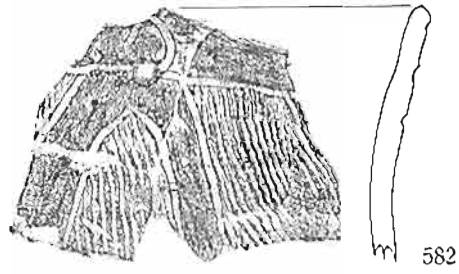


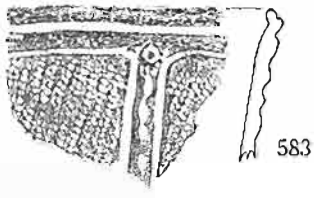
第49図　34号住居跡出土遺物（2）

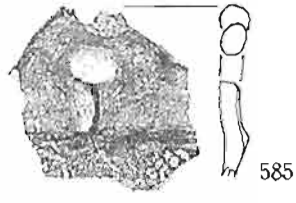
35号住



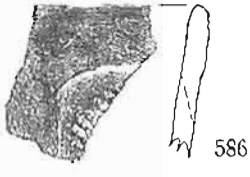




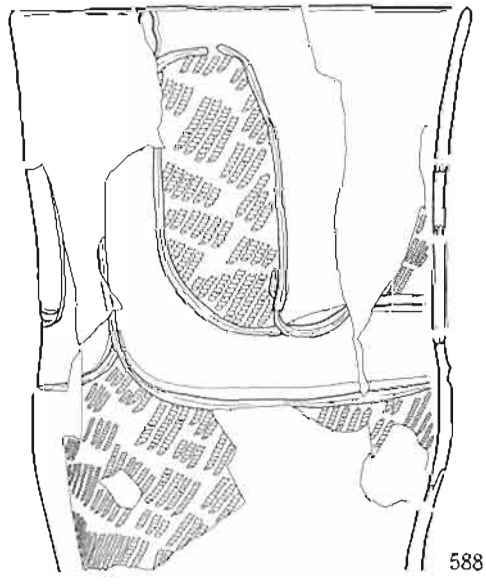




37号住

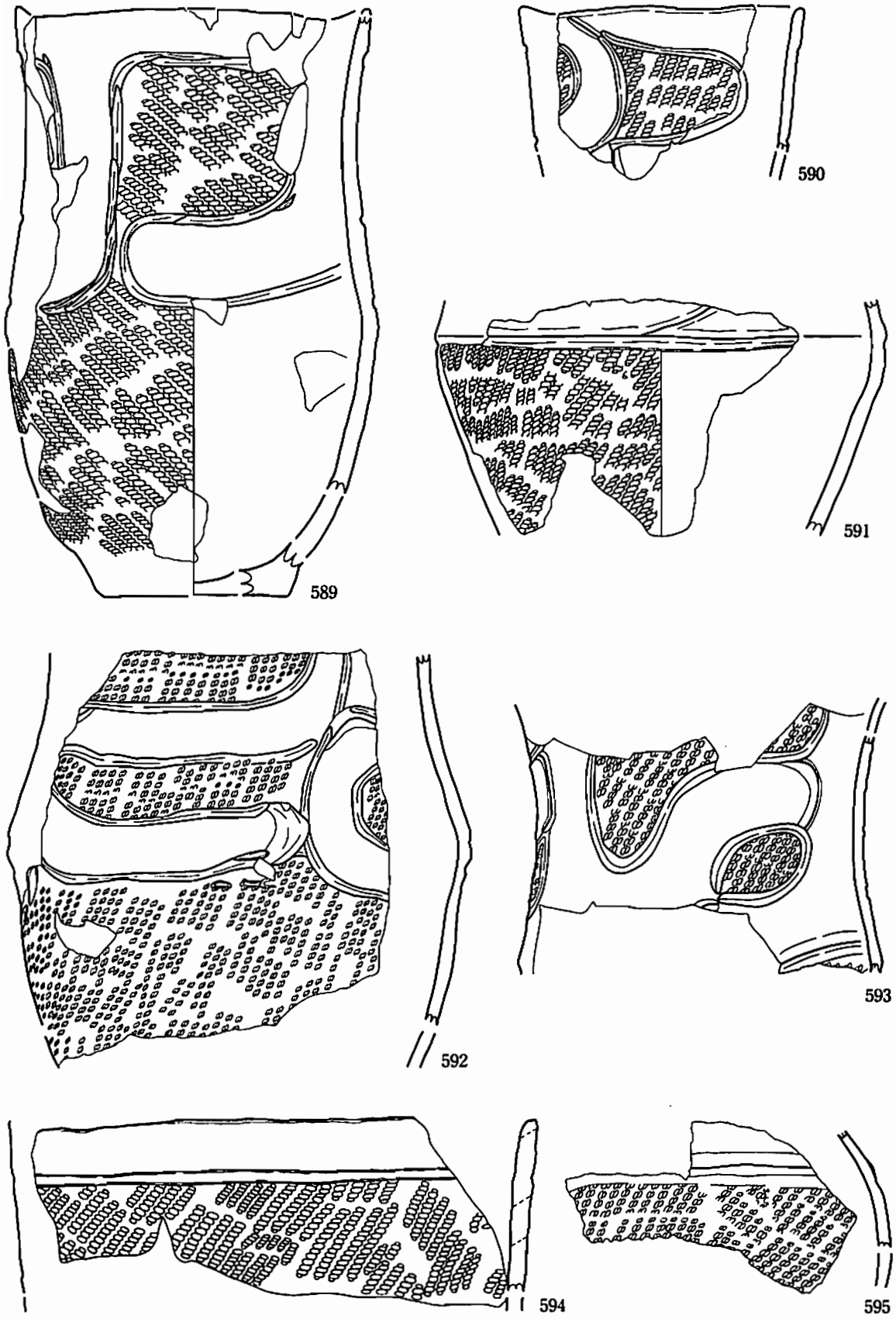


38号住



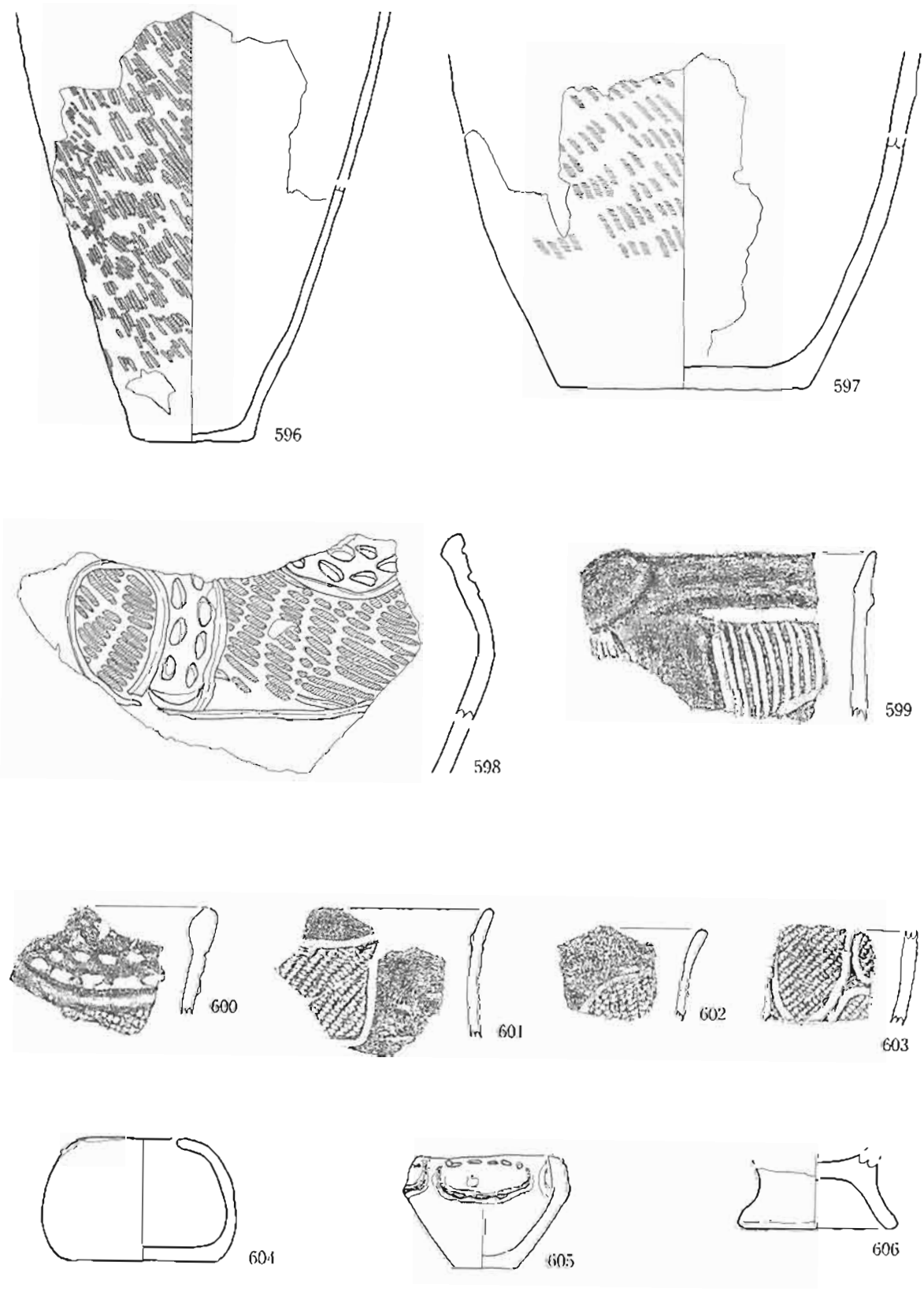
第50図　35・37号住居跡出土遺物・38号住居跡出土遺物（1）

38号住

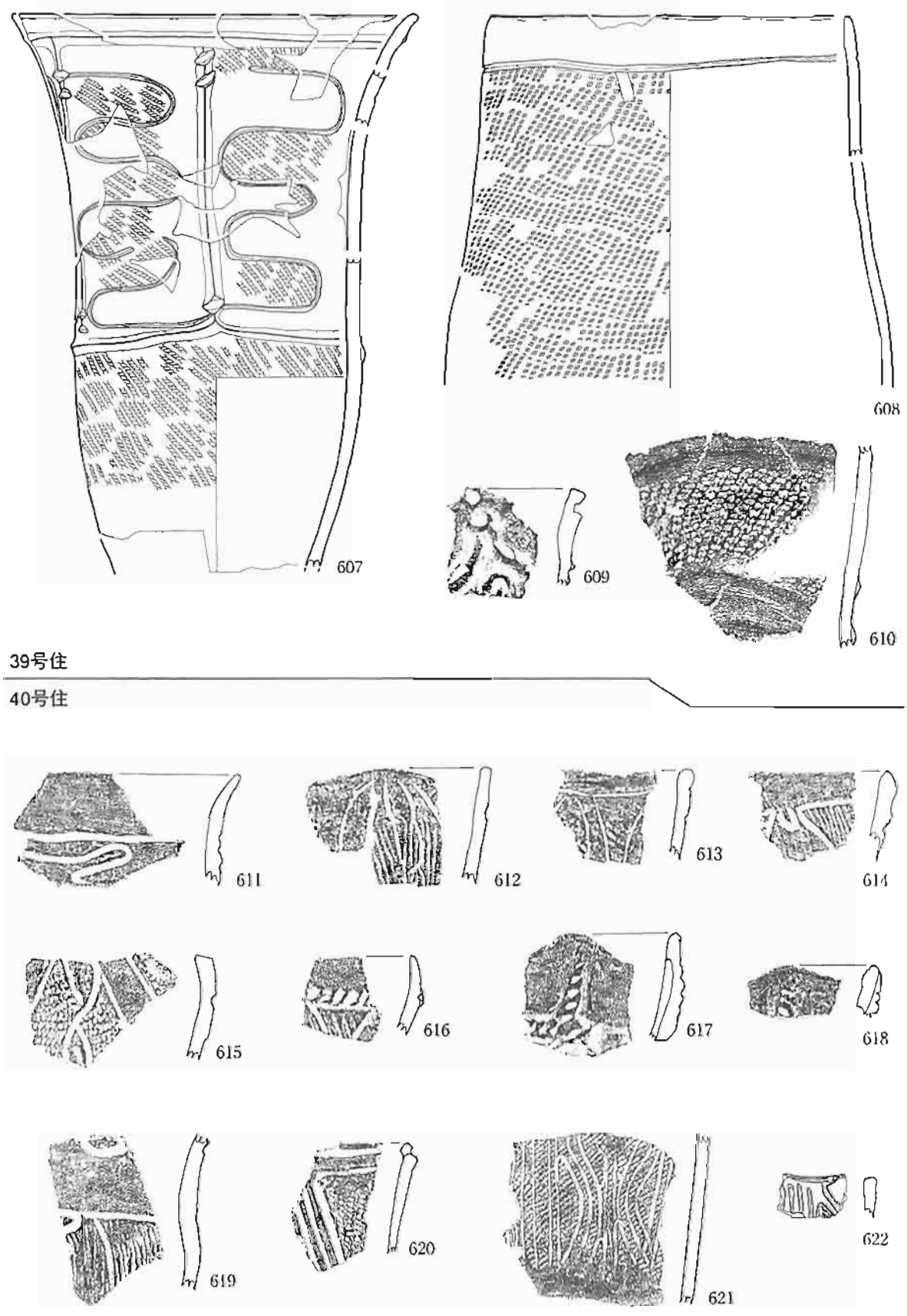


第51図　38号住居跡出土遺物（2）

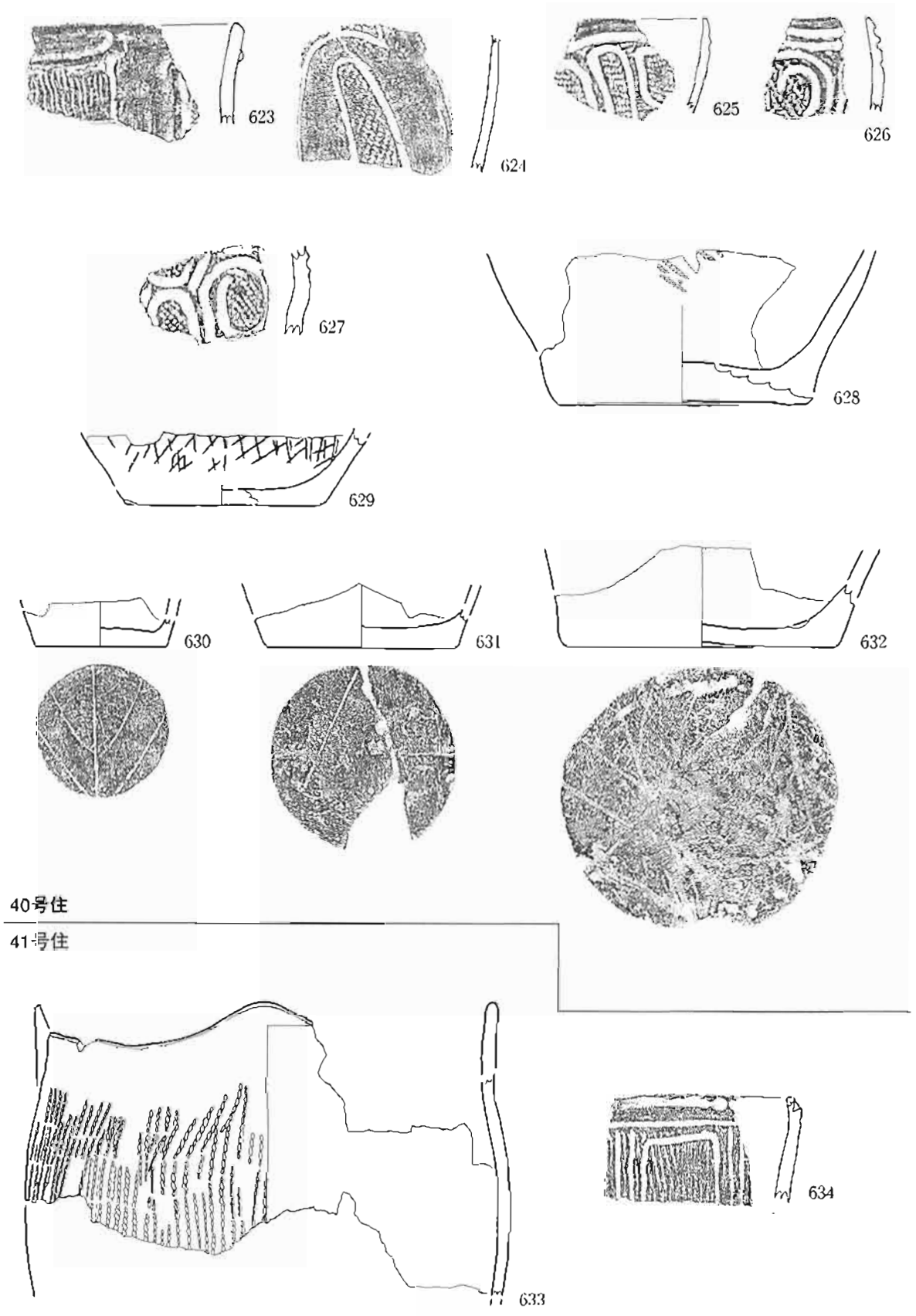
38号住



第52図　38号住居跡出土遺物(3)

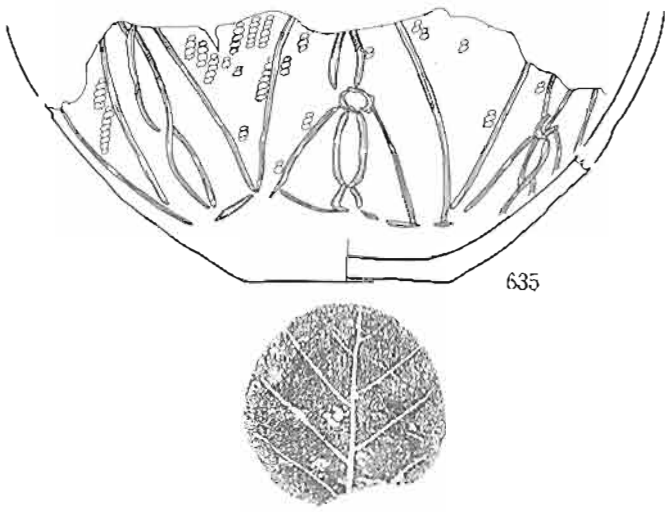


第53図　39号住居跡出土遺物・40号住居跡出土遺物（1）

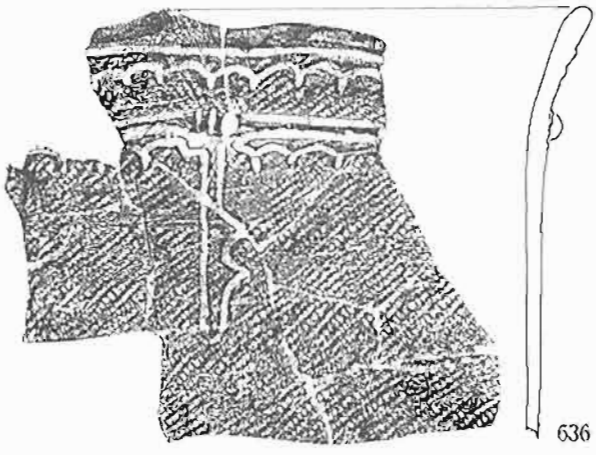


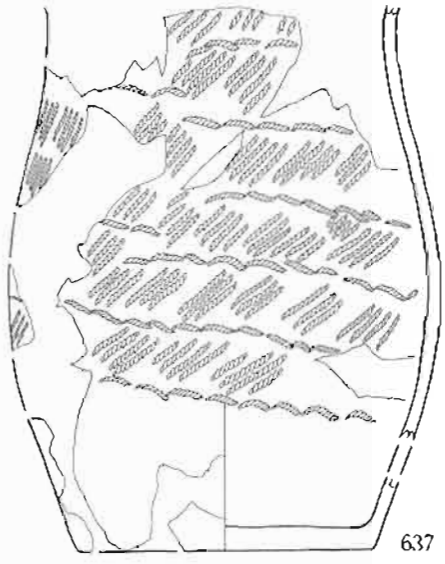
第54図　40号住居跡出土遺物（2）・41号住居跡出土遺物（1）

41号住

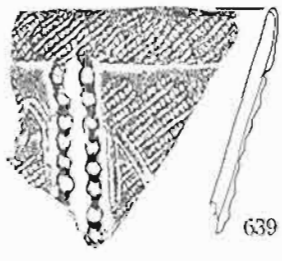


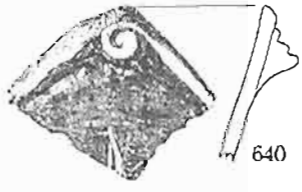
44号住





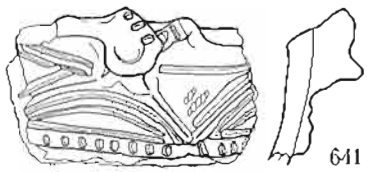
46号住

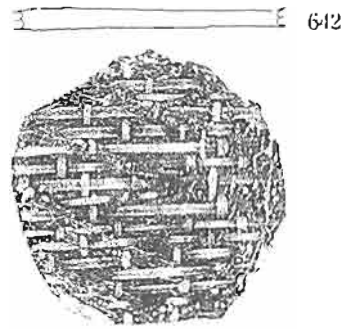




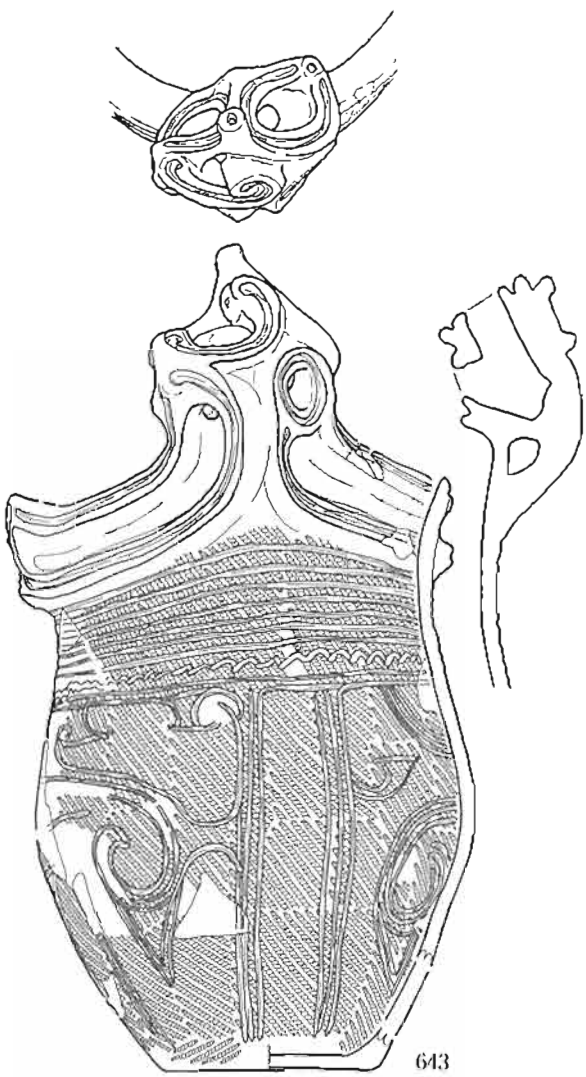
第55図　41号住居跡出土遺物（2）・44号住居跡出土遺物・46号住居跡出土遺物（1）

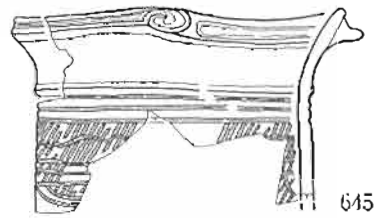
46号住

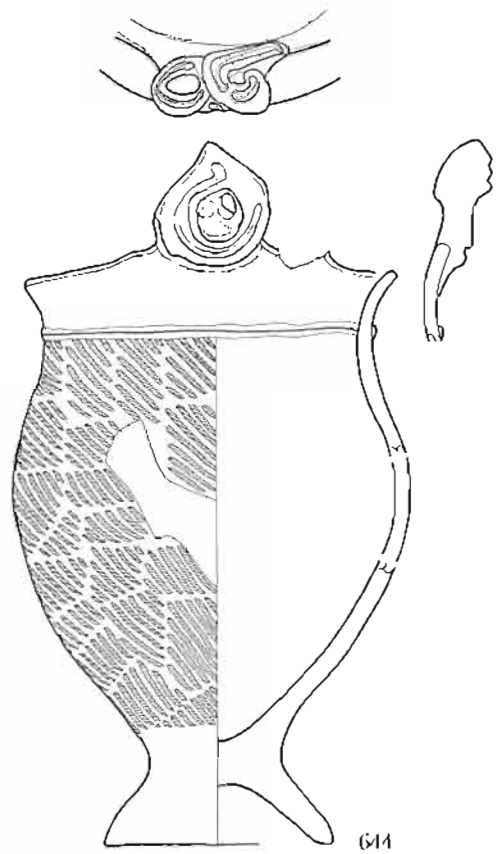




47号住

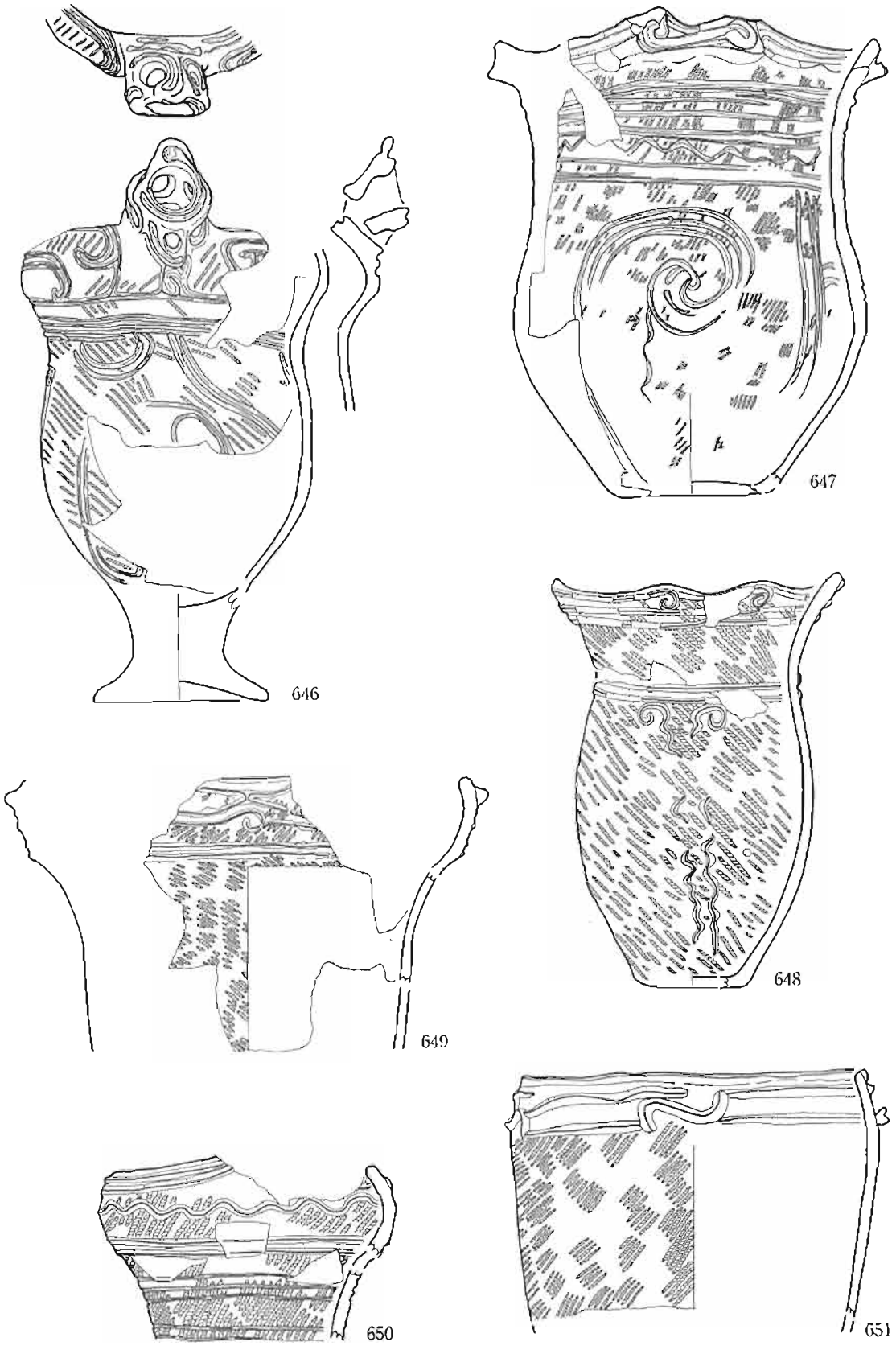






第56図　46号住居跡出土遺物（2）・47号住居跡出土遺物（1）

47号住

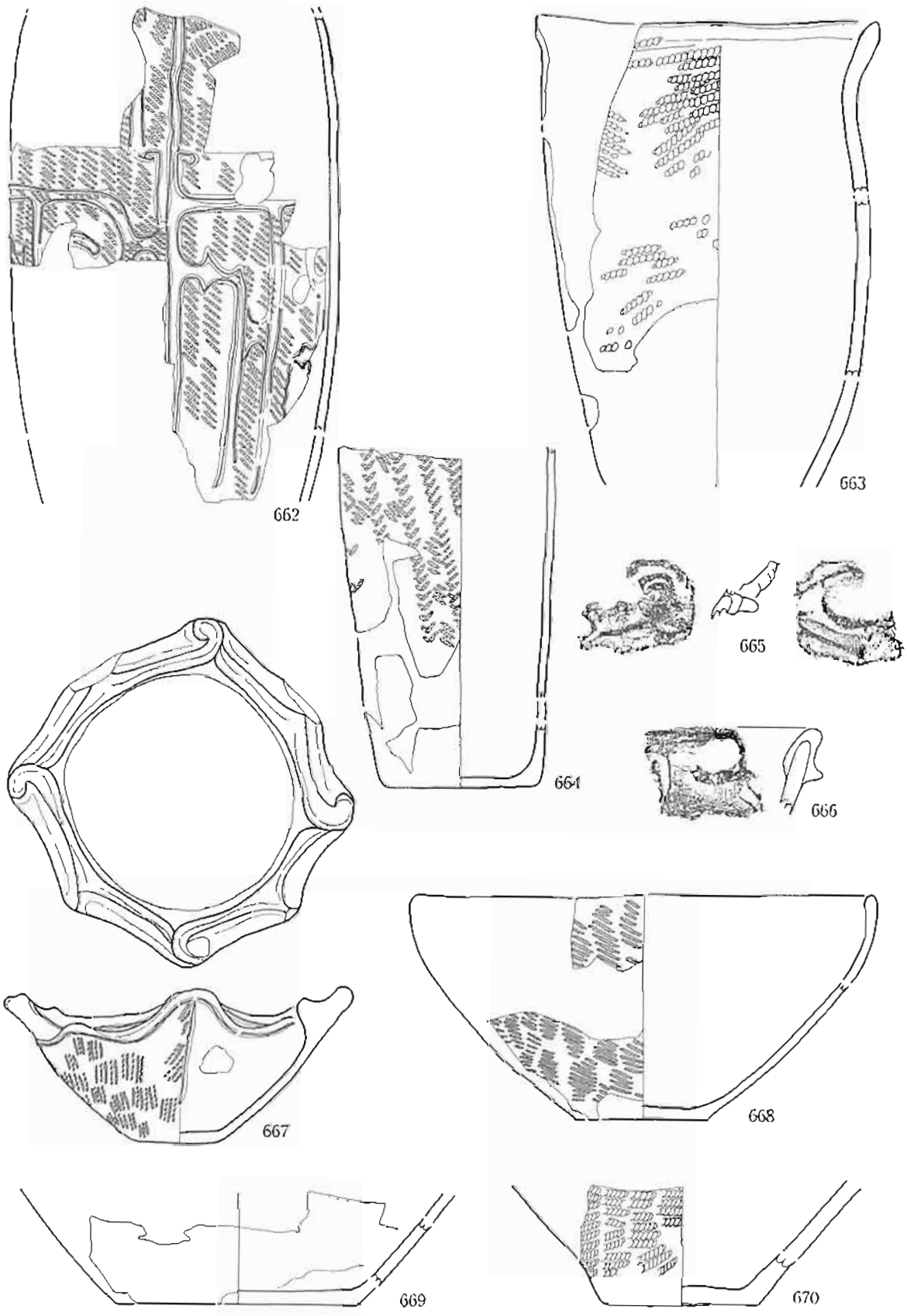


第57図　47号住居跡出土遺物（2）

47号住

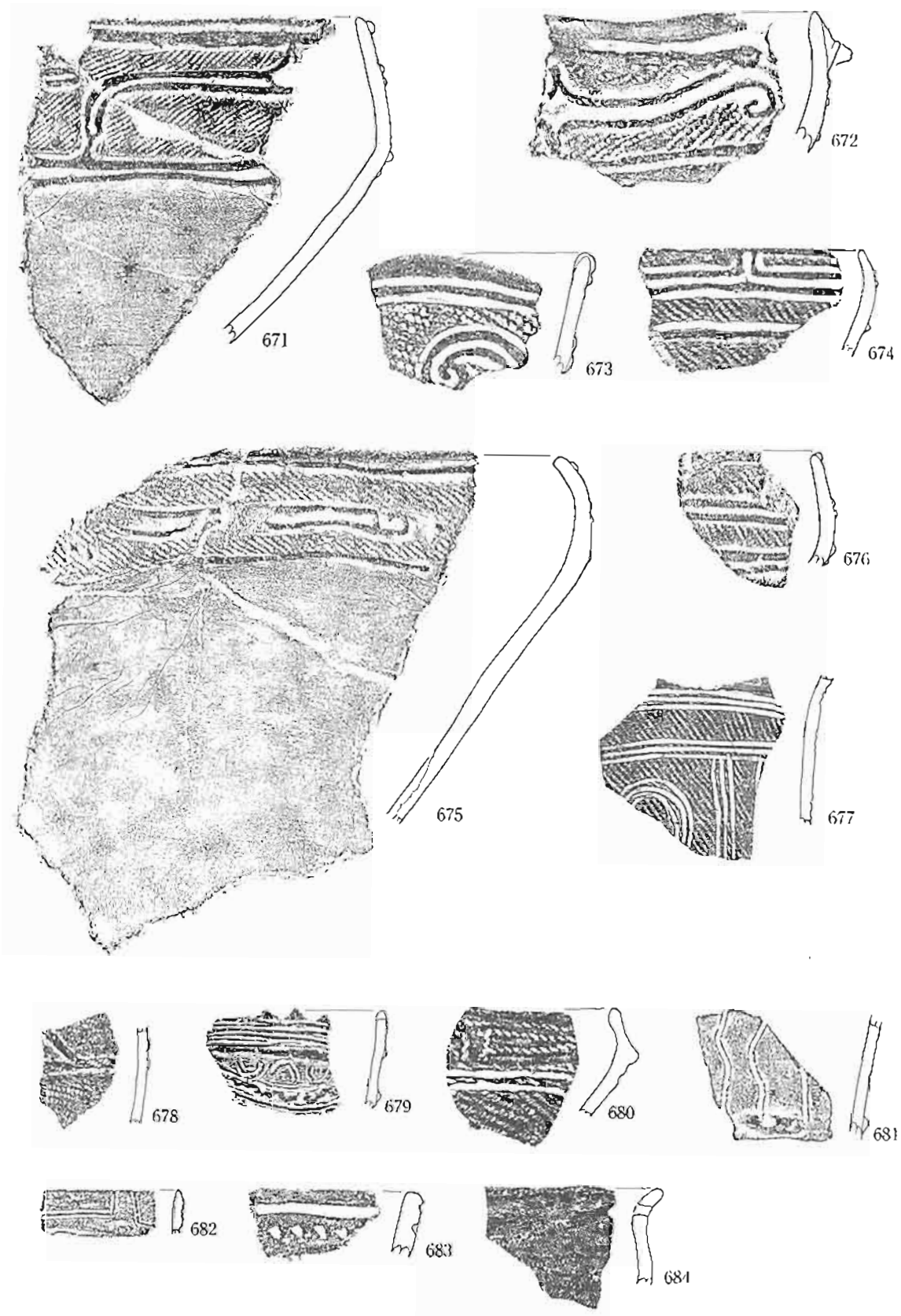
第58図　47号住居跡出土遺物（3）

47号住



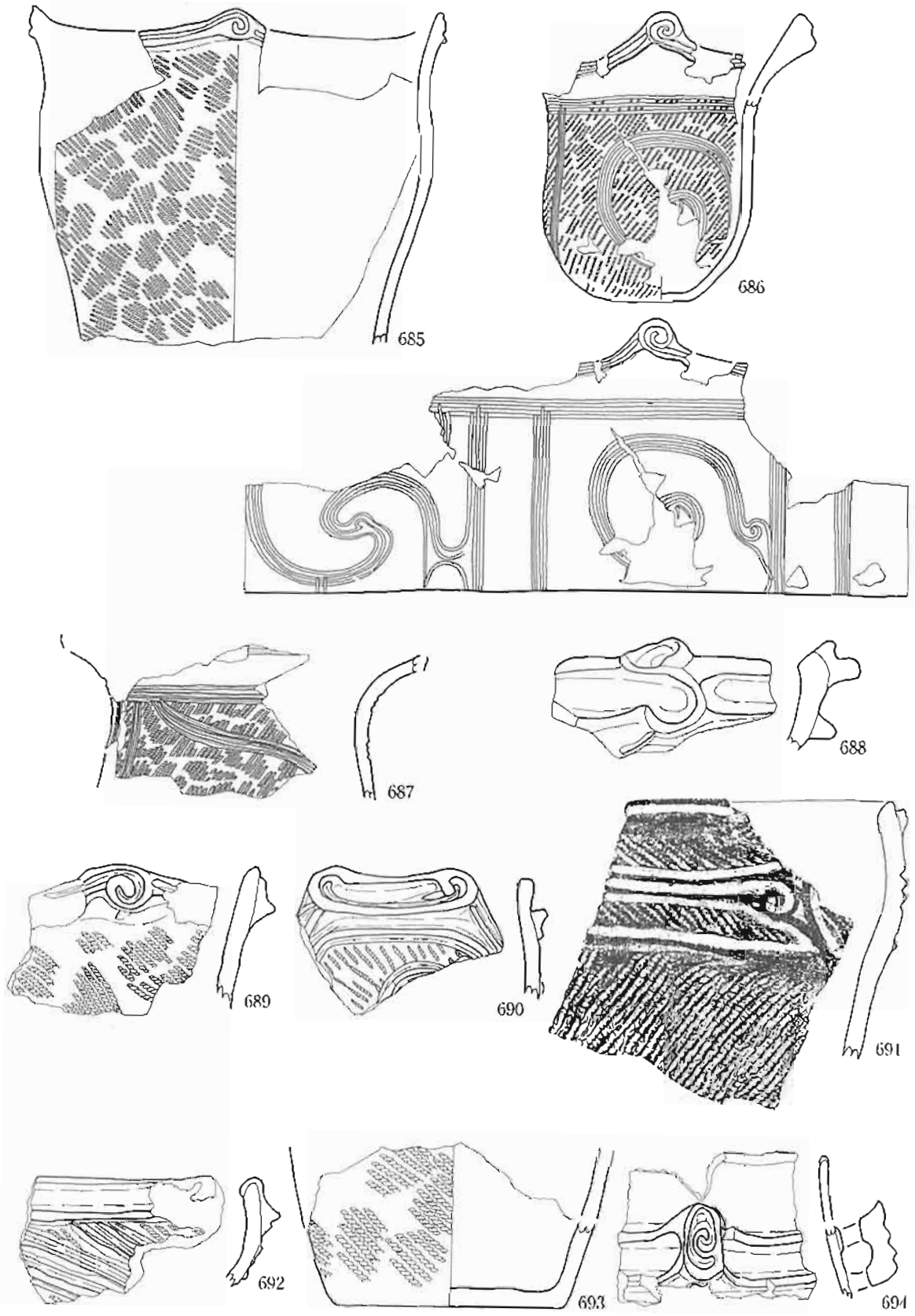
第59図　47号住居跡出土遺物（4）

47号住



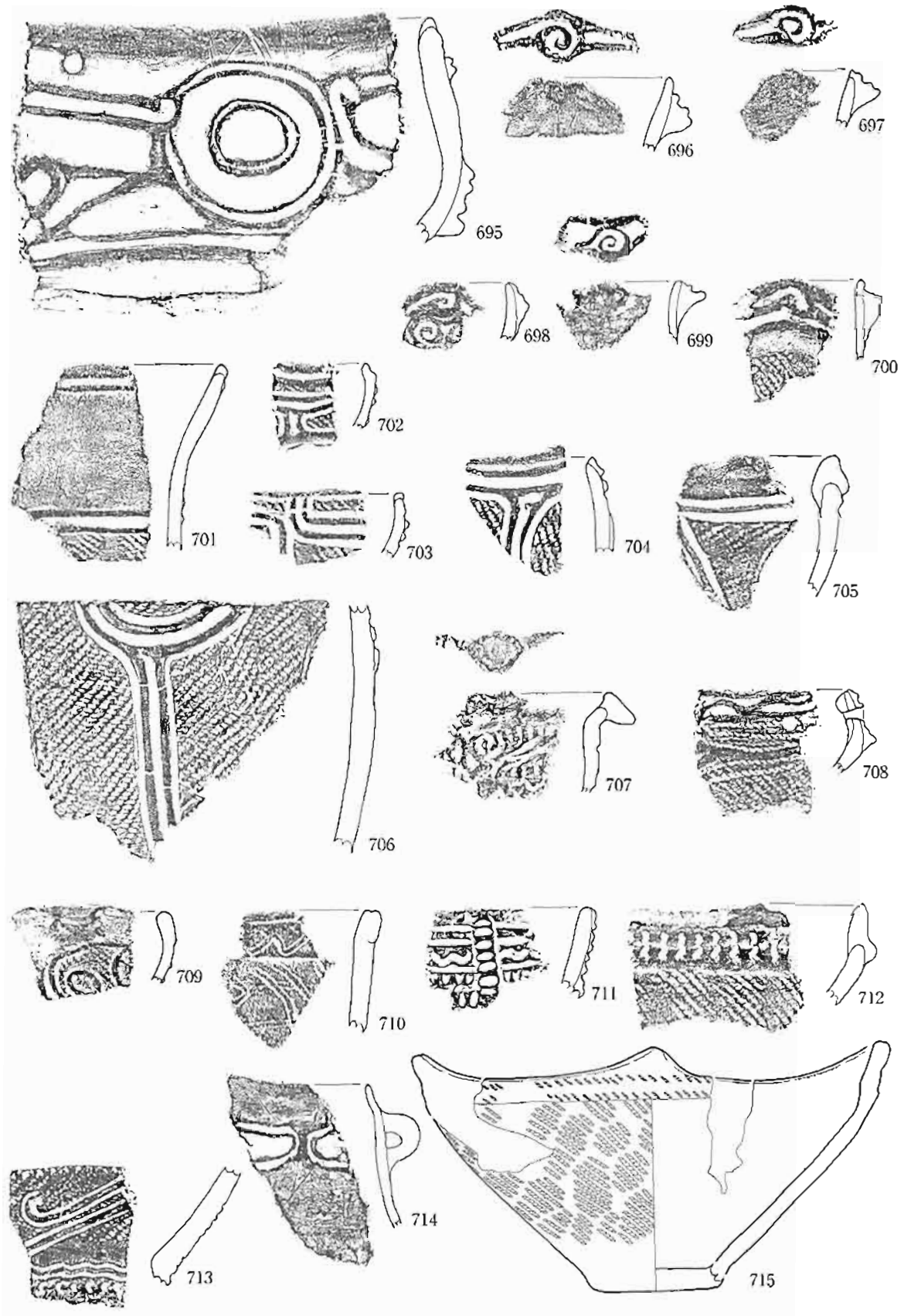
第60図　47号住居跡出土遺物(5)

48号住

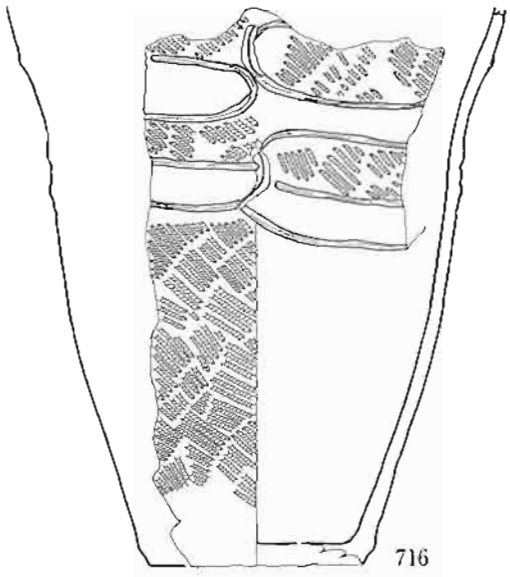


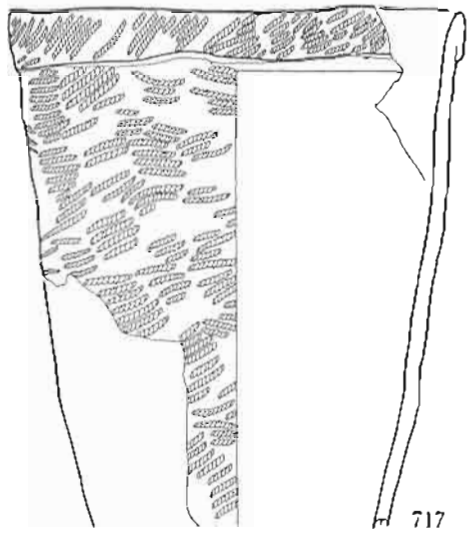
第61図　48号住居跡出土遺物（1）

48号住

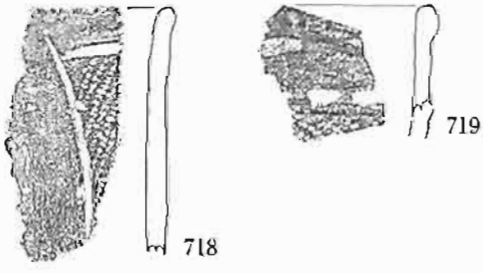


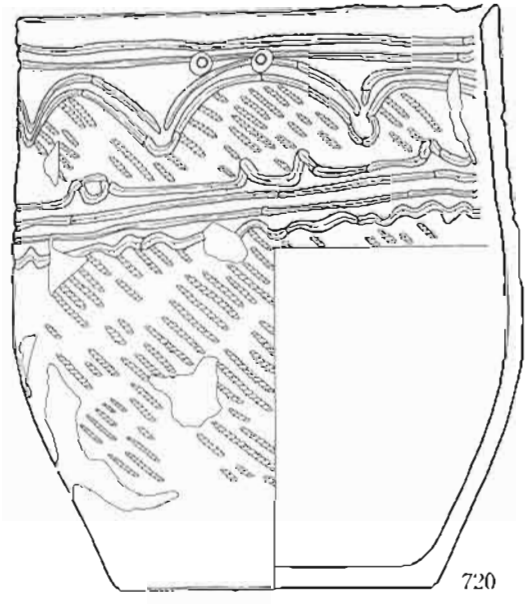
第62図　48号住居跡出土遺物（2）





49号住

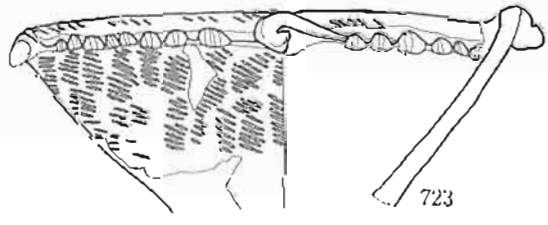




50号住

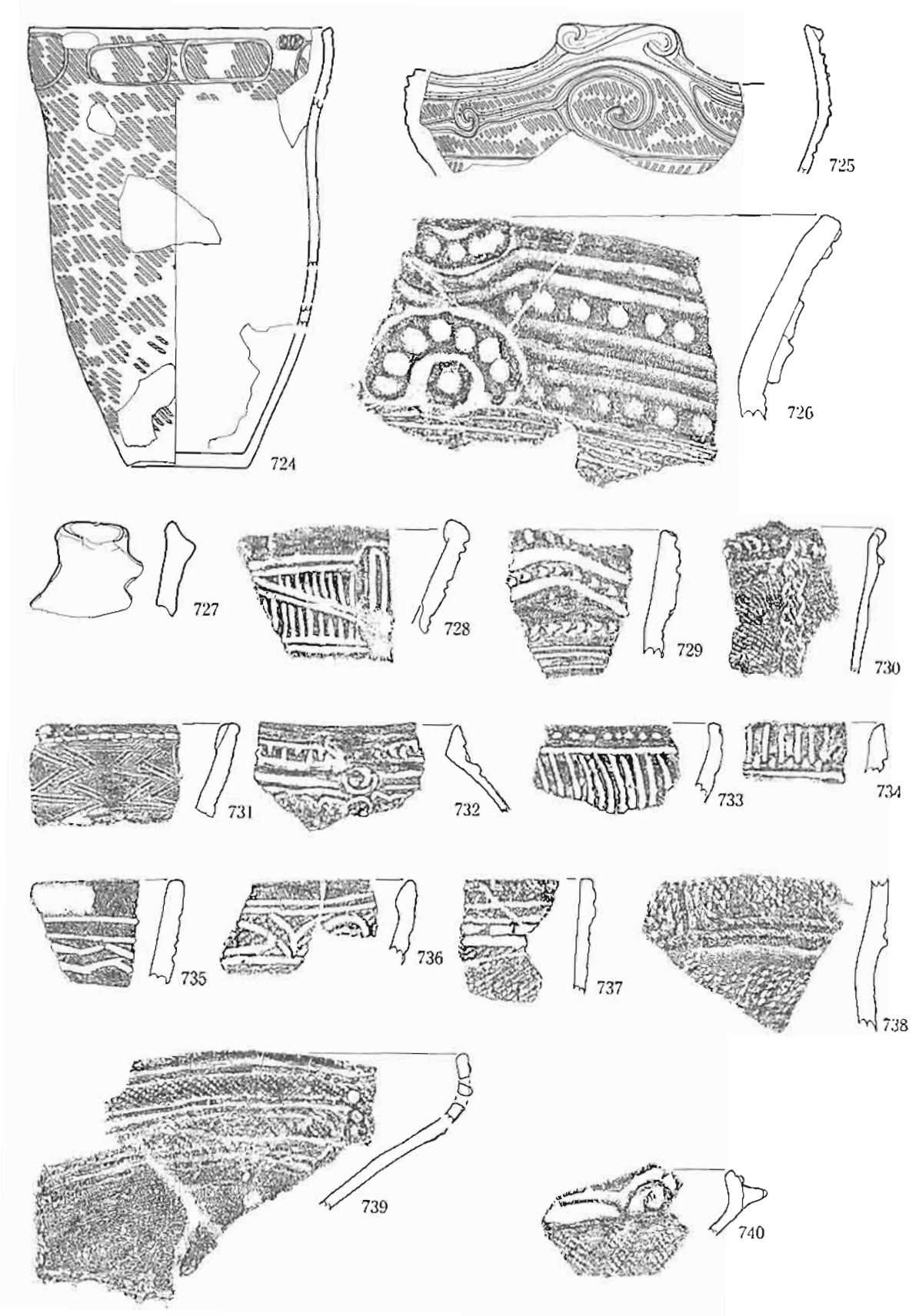
51号住

53号住

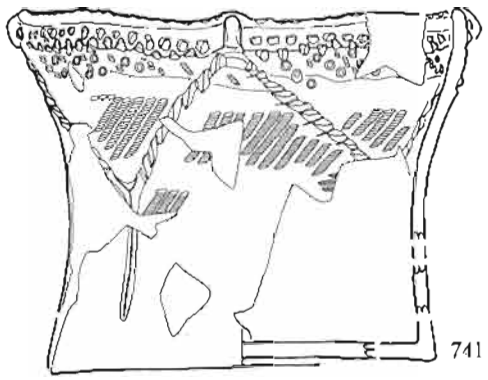


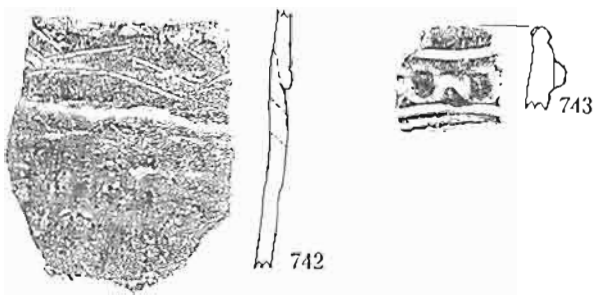
第63図　49～51号住居跡出土遺物・53号住居跡出土遺物（1）

53号住



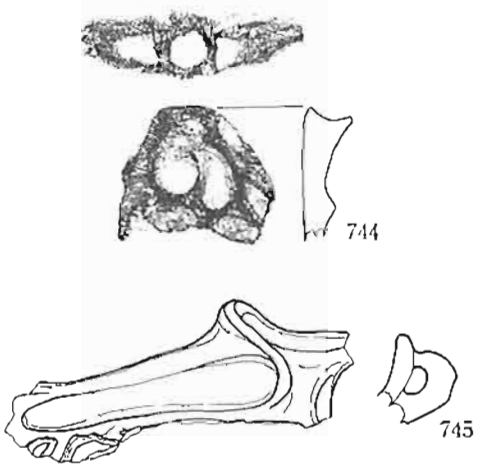
第64図　53号住居跡出土遺物(2)

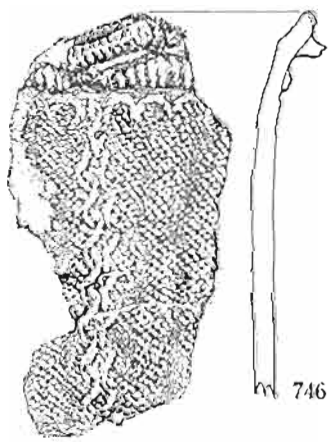




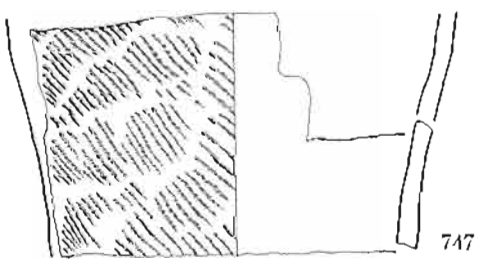
1号炉

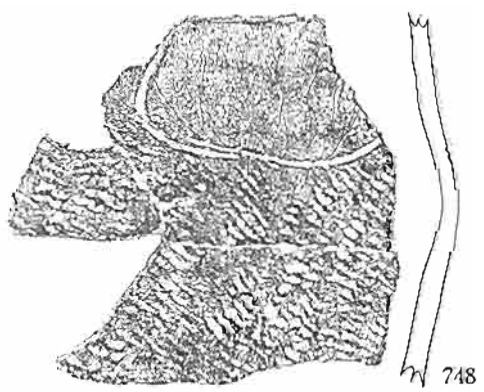
3号炉





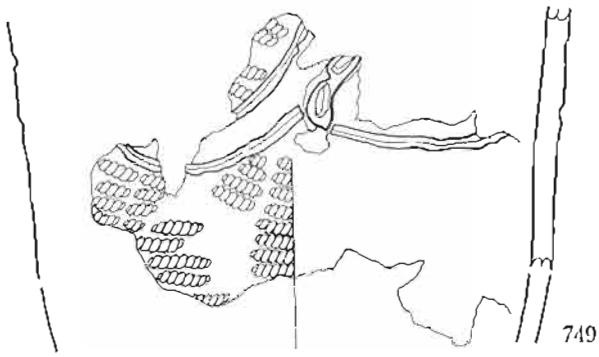
4号炉



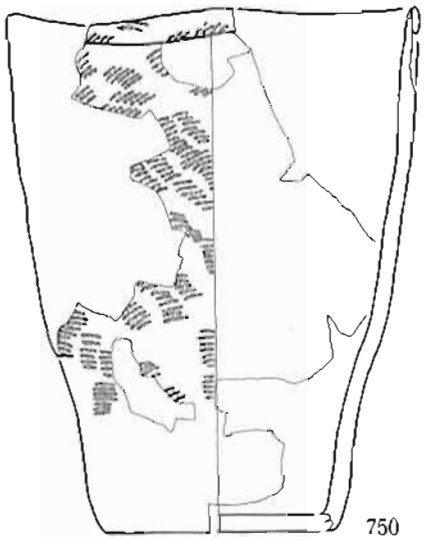


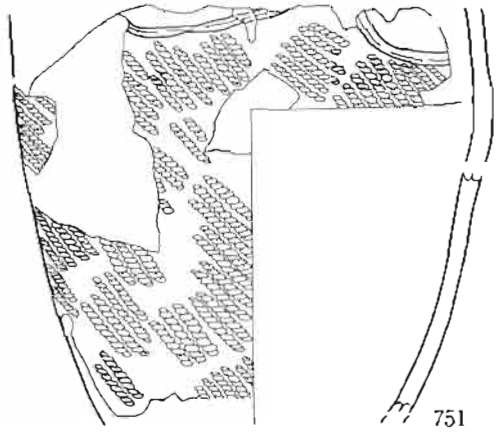
第65図　1・3・4号炉出土遺物

8号炉

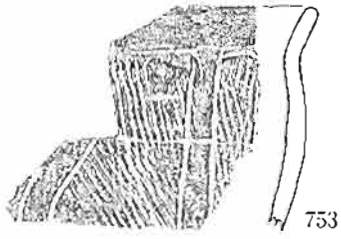


9号炉



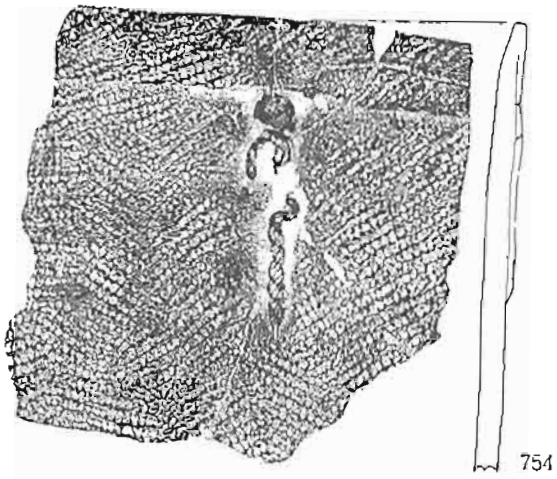


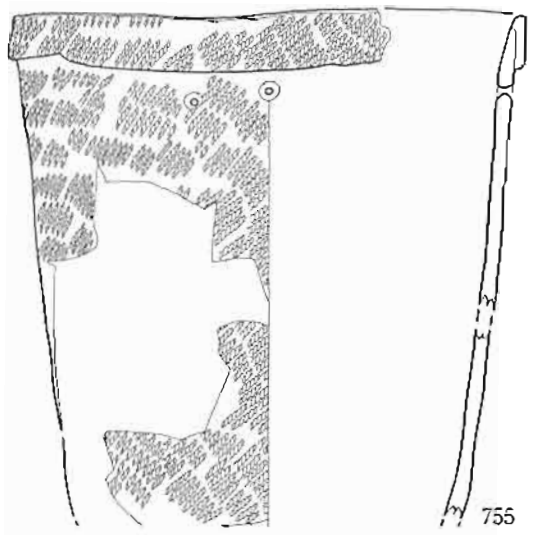
11号炉

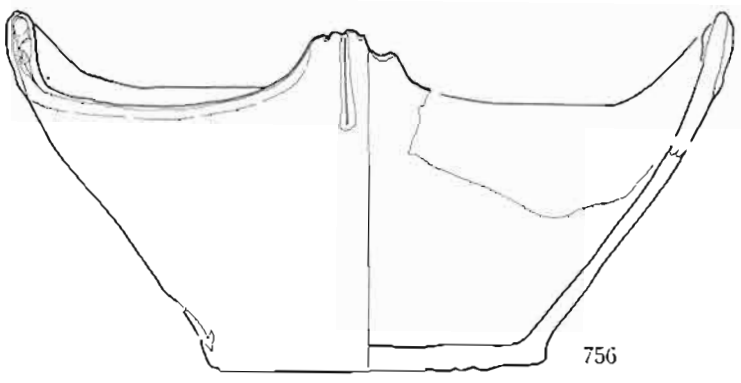


第66図　8・9・11号炉出土遺物

5号焼土

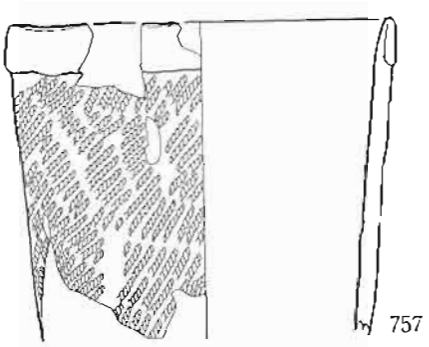


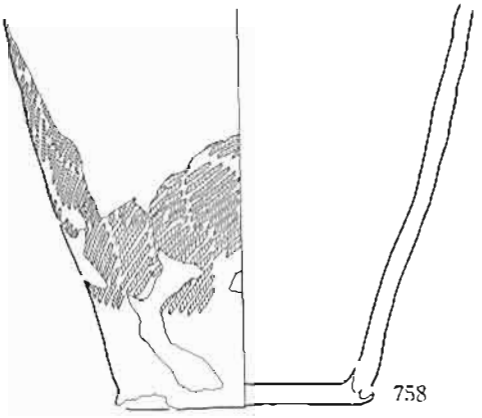


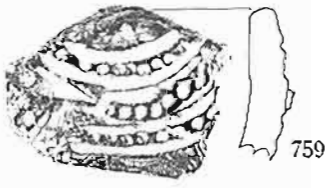


第67図　5号焼土出土遺物

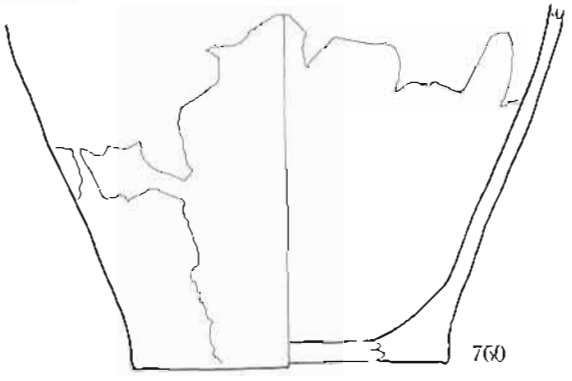
7号焼土



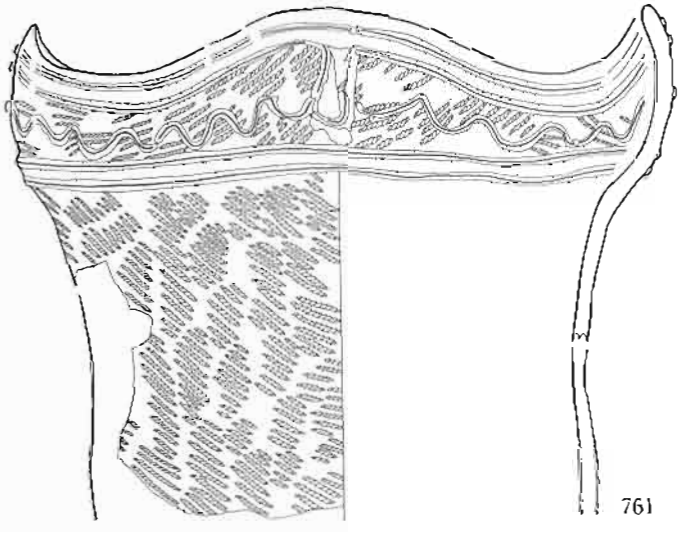




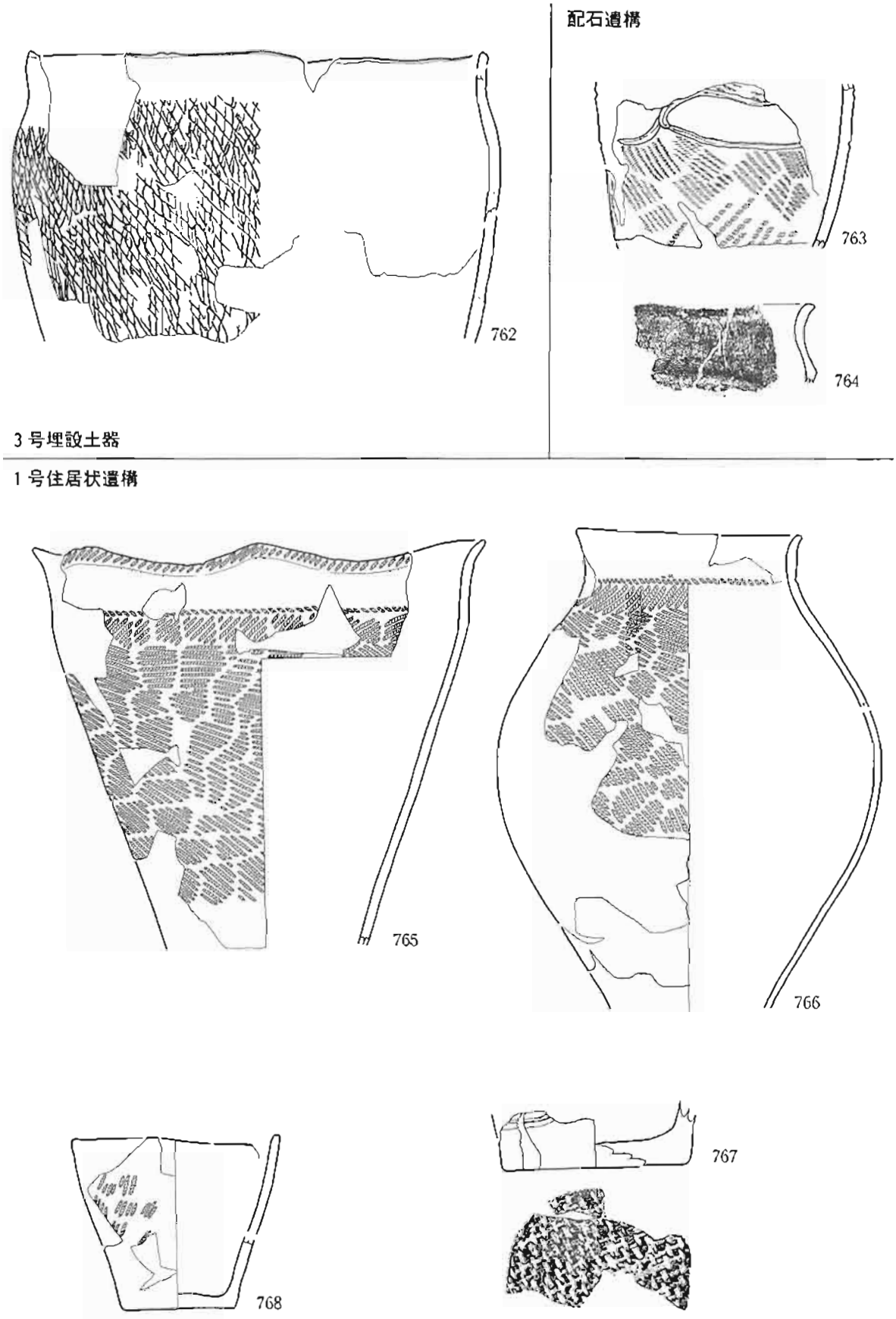
11号焼土



1号埋設土器

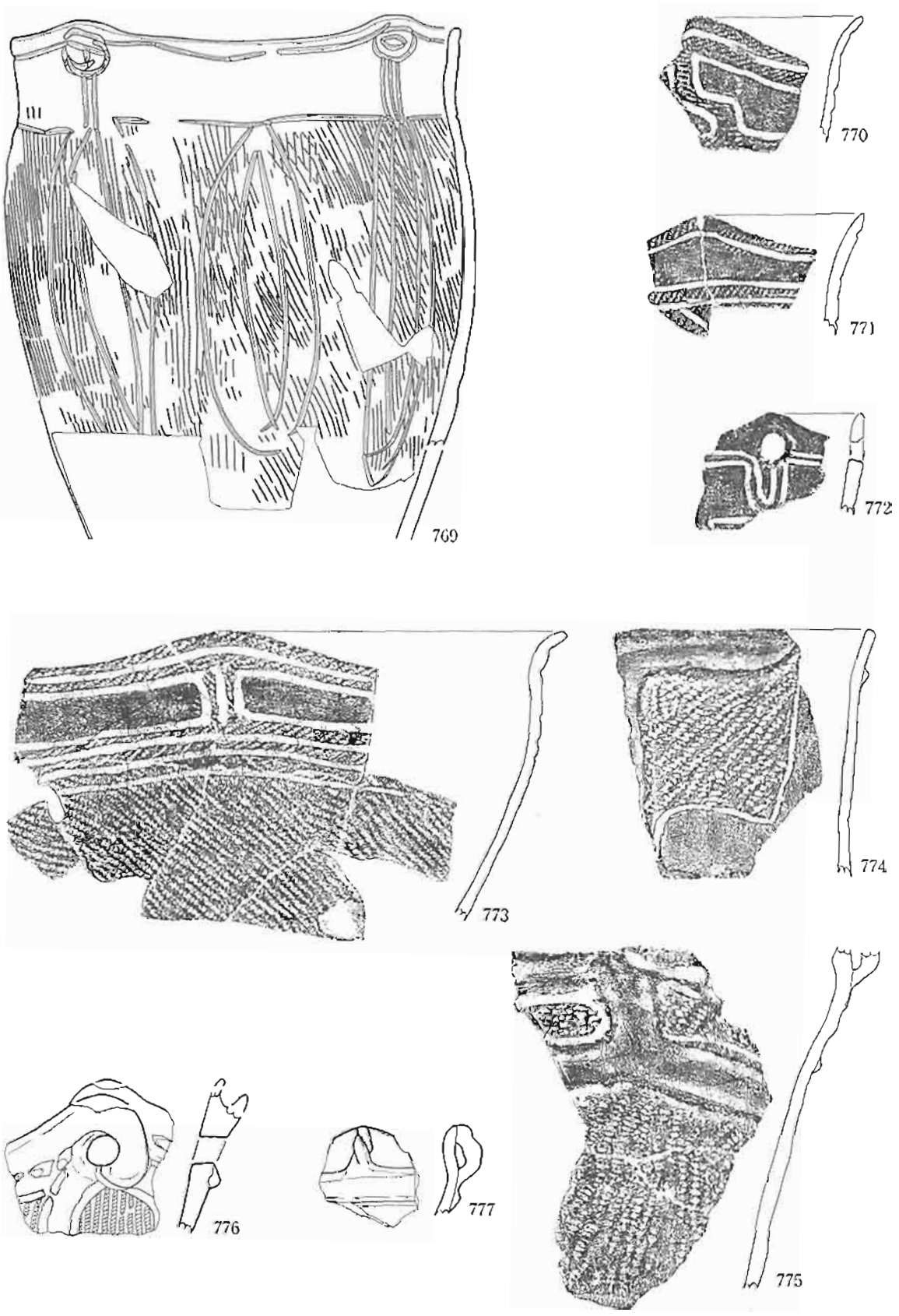


第68図　7・11号焼土出土遺物、1号埋設土器

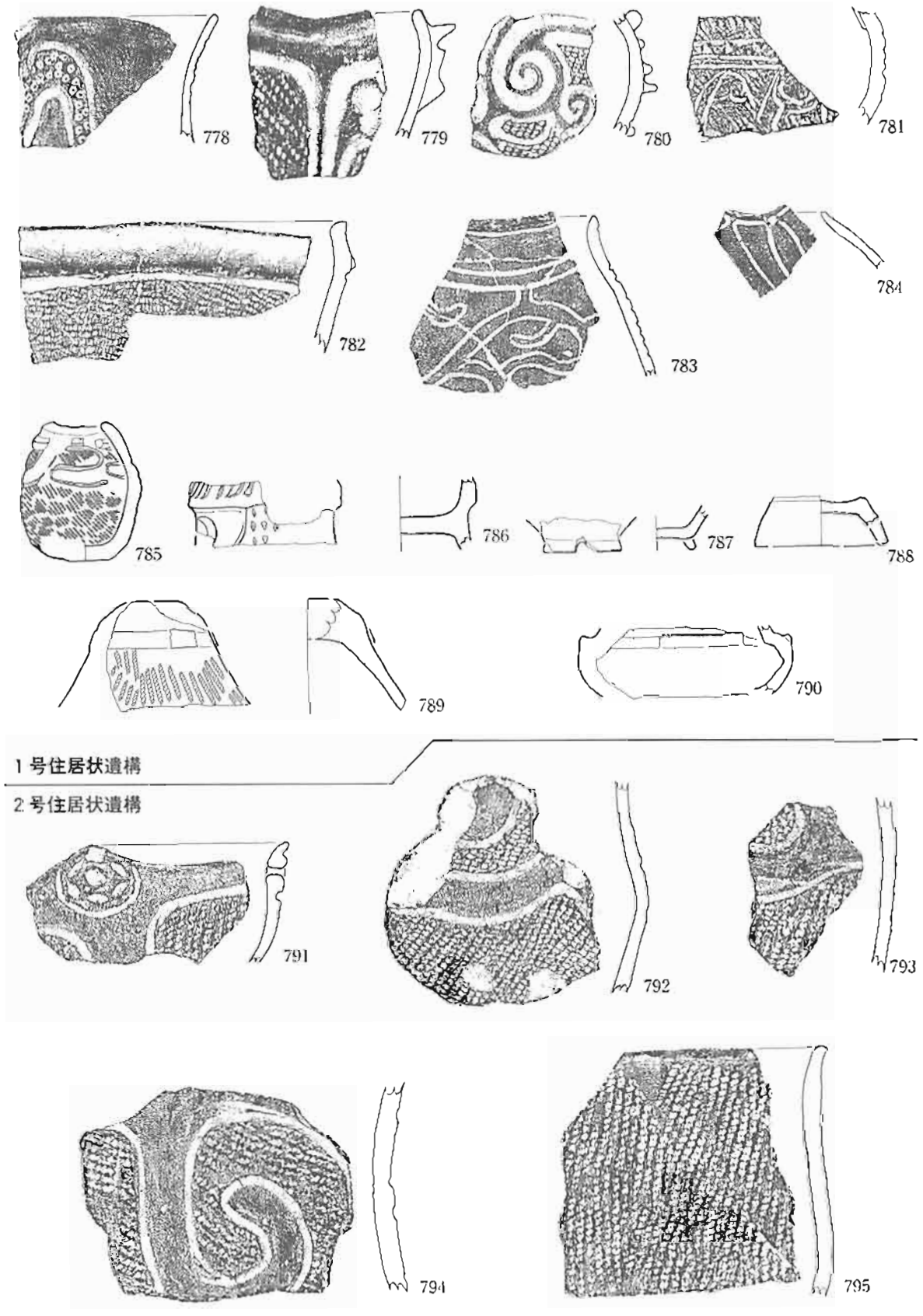


第69図　3号埋設土器、配石遺構出土遺物、1号住居状遺構出土遺物(1)

1号住居状遺構

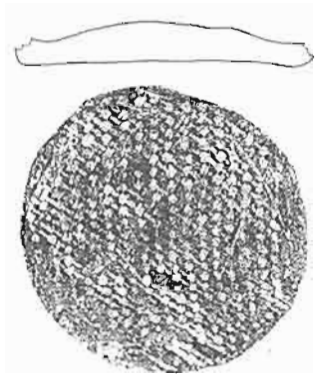


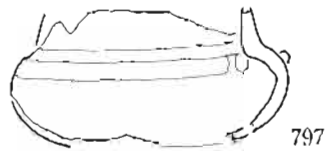
第70図　1号住居状遺構出土遺物(2)



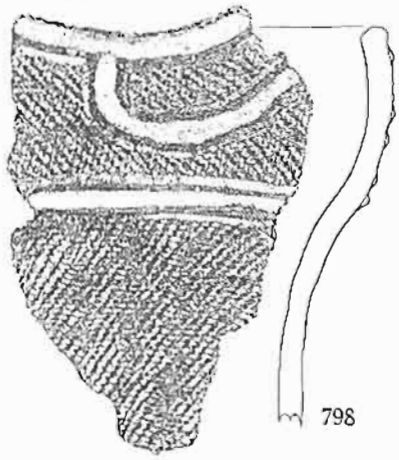
第71図　1号住居状遺構出土遺物(3)・2号住居状遺構出土遺物

3号住居状遺構



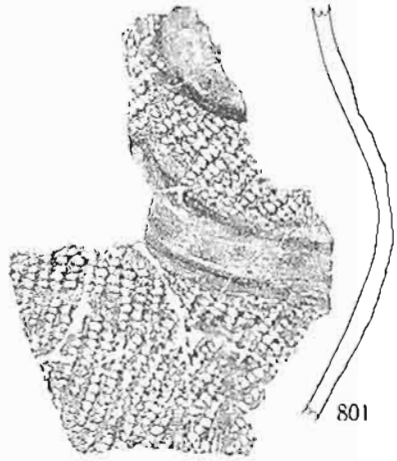


1号土坑

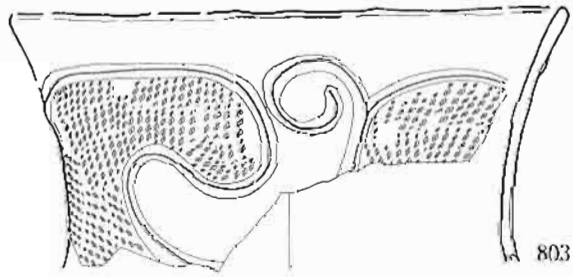


2号土坑

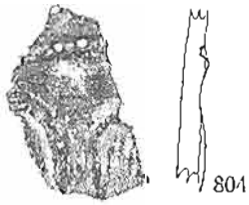
3号土坑

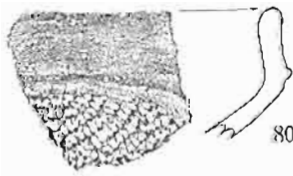


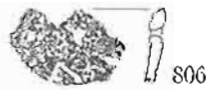
5号土坑



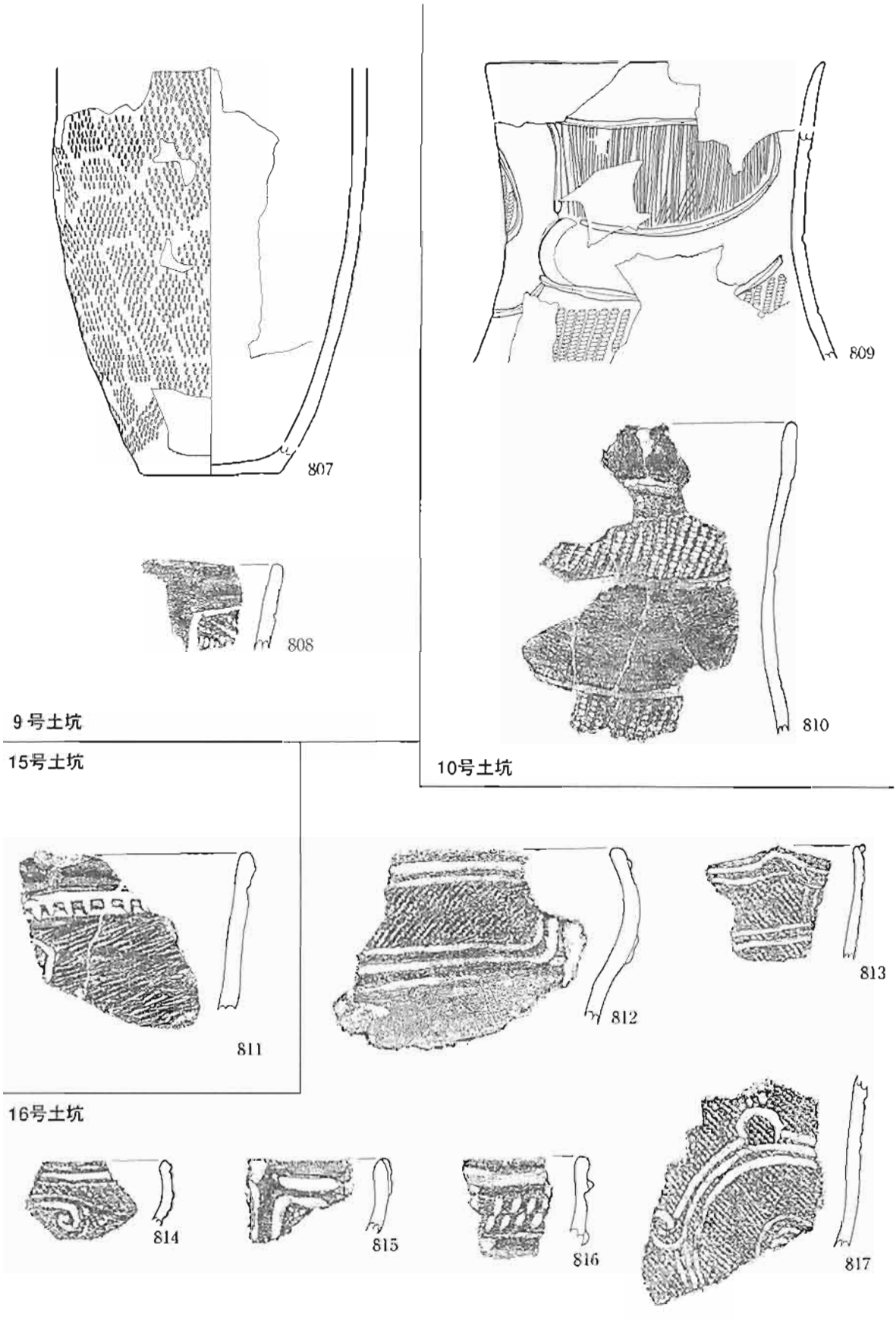
7号土坑





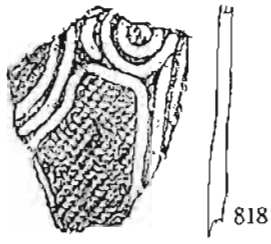


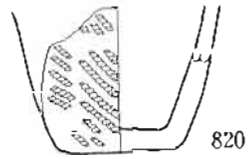
第72図　3号住居状遺構出土遺物、1～3・5・7号土坑出土遺物



第73図　9・10・15号土坑出土遺物・16号土坑出土遺物(1)

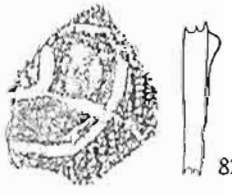
16号土坑

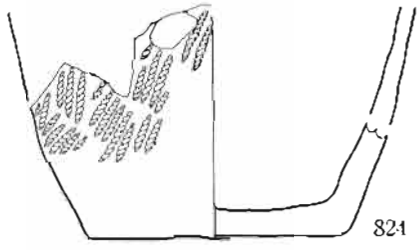




17号土坑

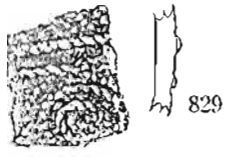
18号土坑

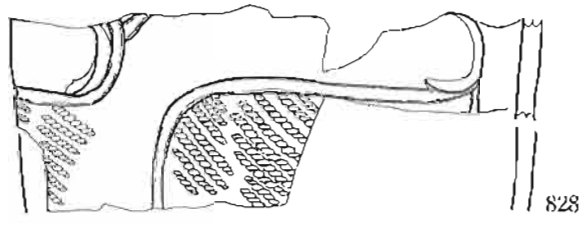




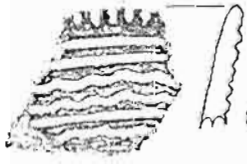
19号土坑

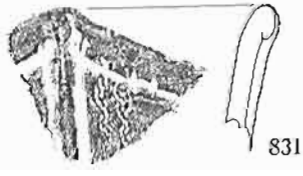
20号土坑





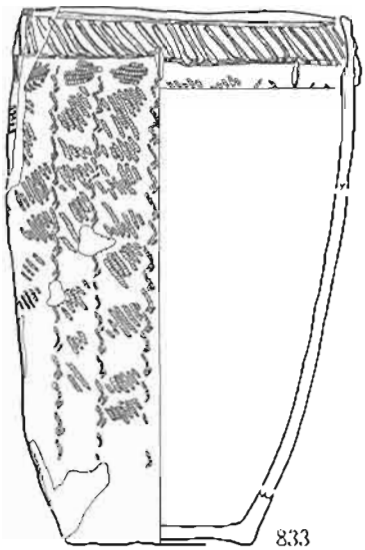
23号土坑

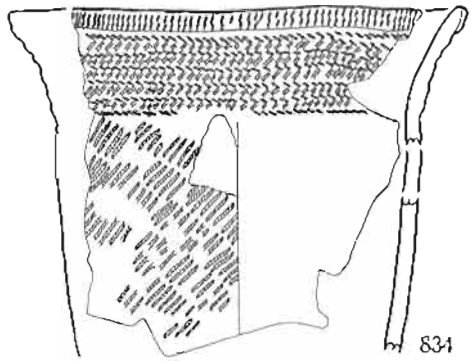


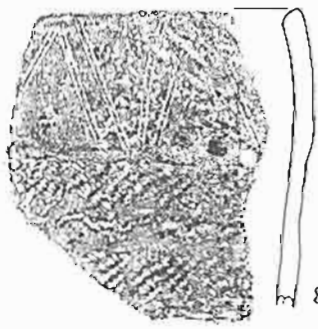


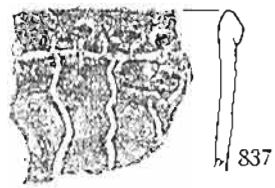
第74図　16号土坑出土遺物（2）・17～20・23号土坑出土遺物

24号土坑





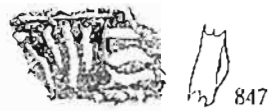




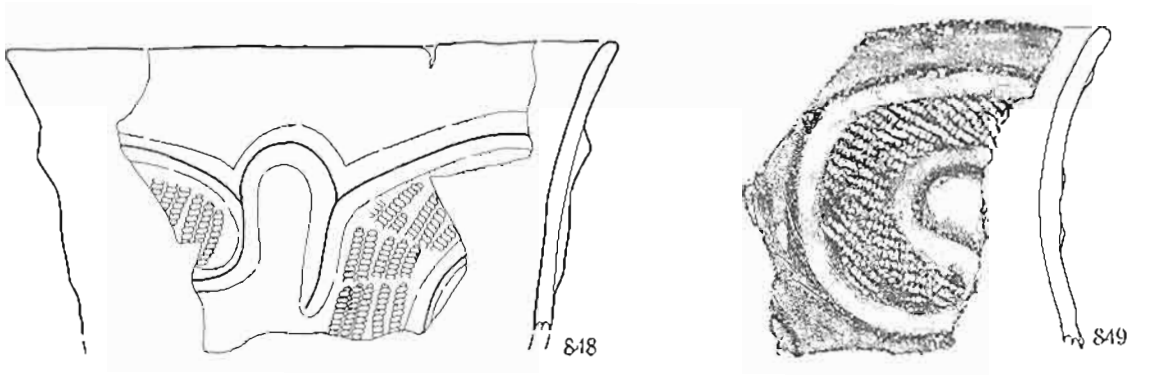
25号土坑

26号土坑

27号土坑

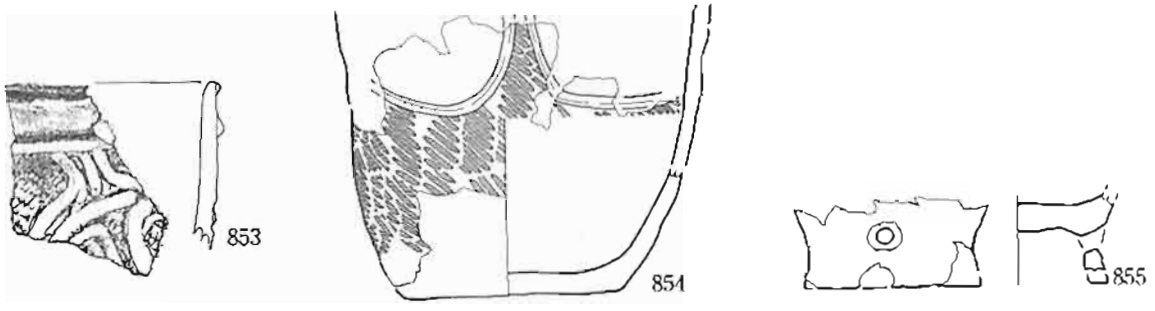


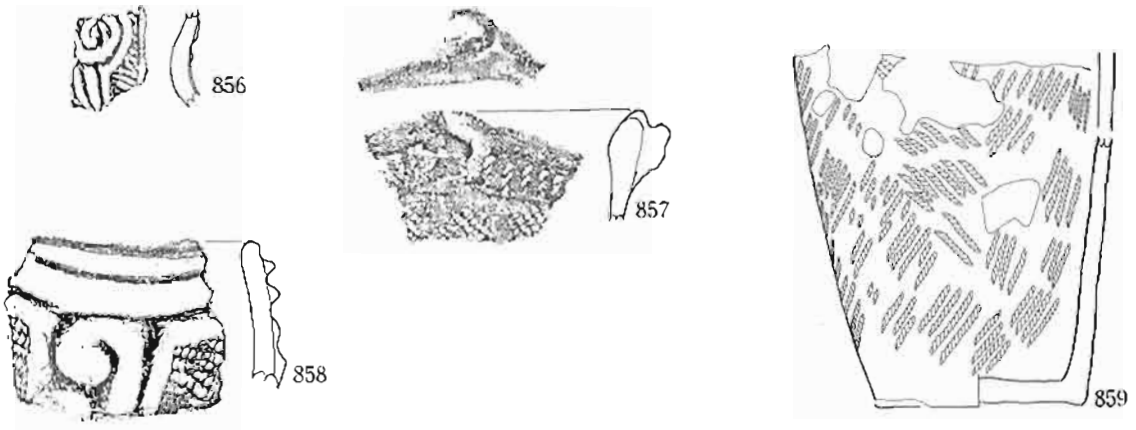
第75図　24～27号土坑出土遺物



28号土坑

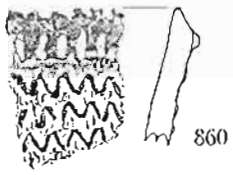
柱穴群



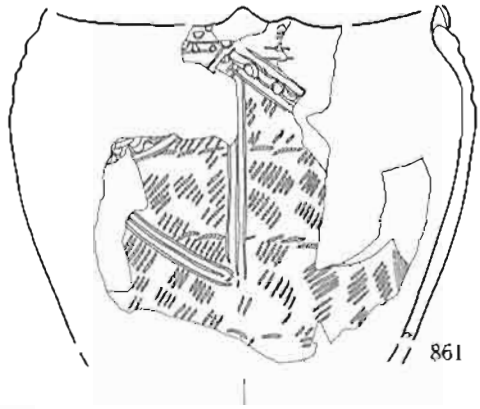


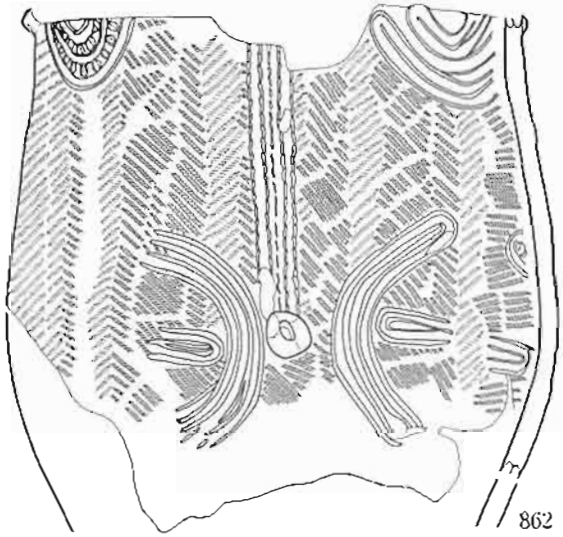
第76図　28号土坑、柱穴群出土遺物

Ⅰ類

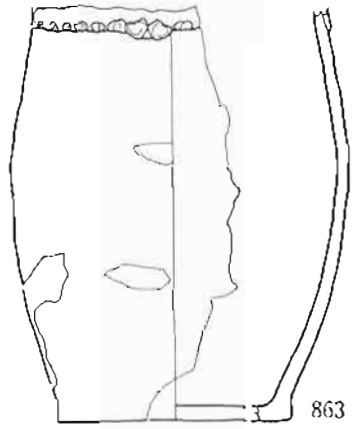


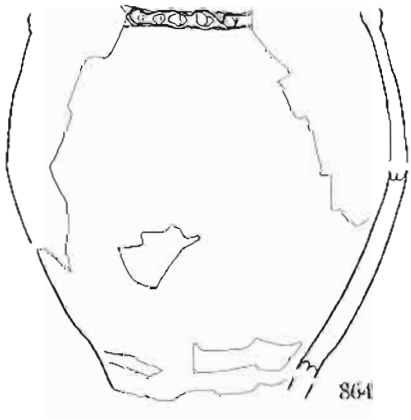
Ⅱ－1類

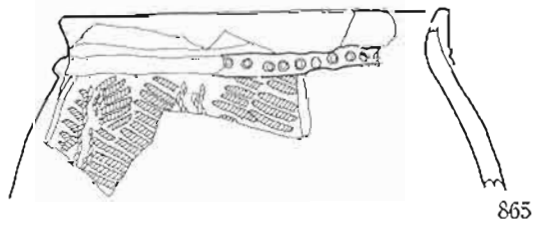




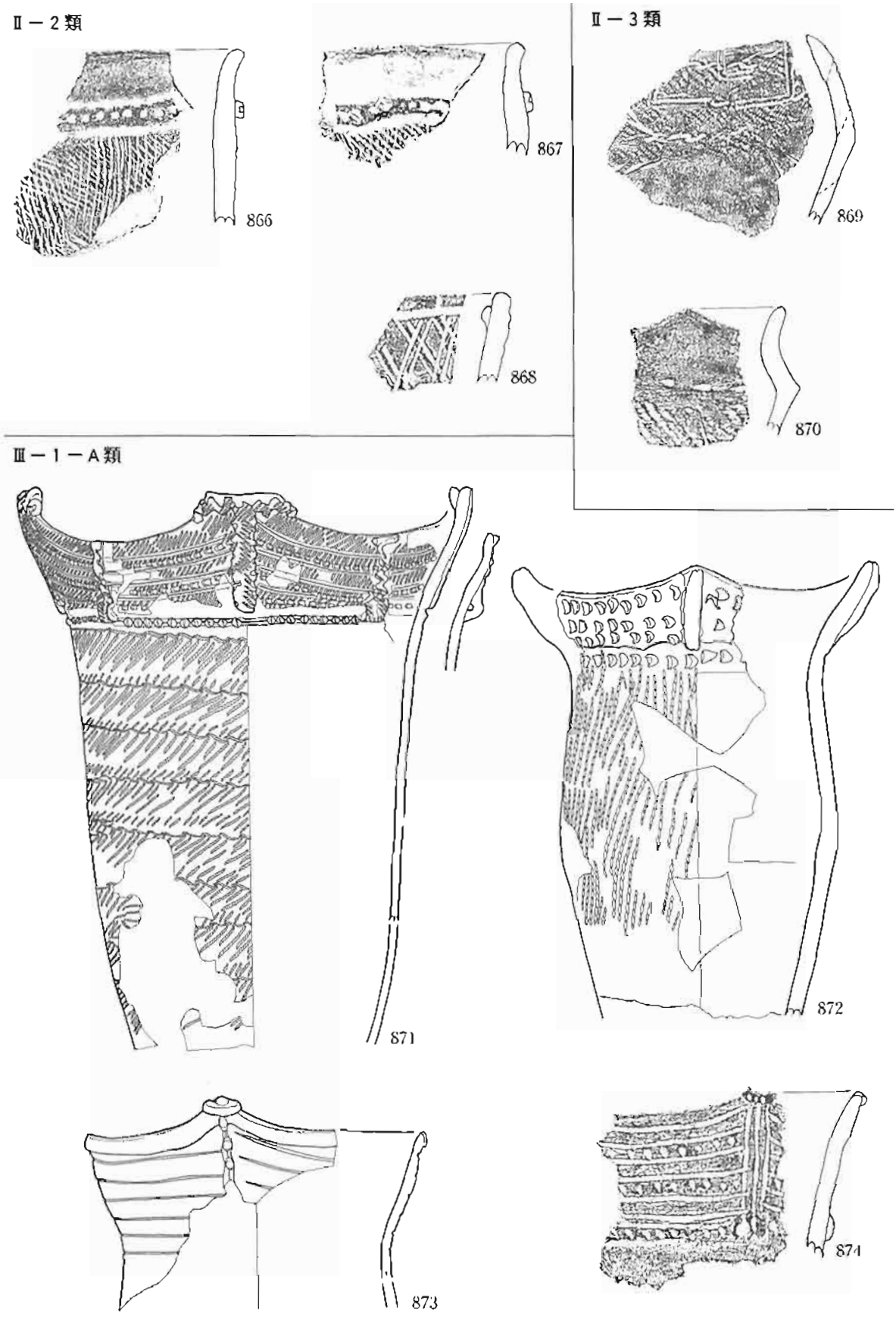
Ⅱ－2類





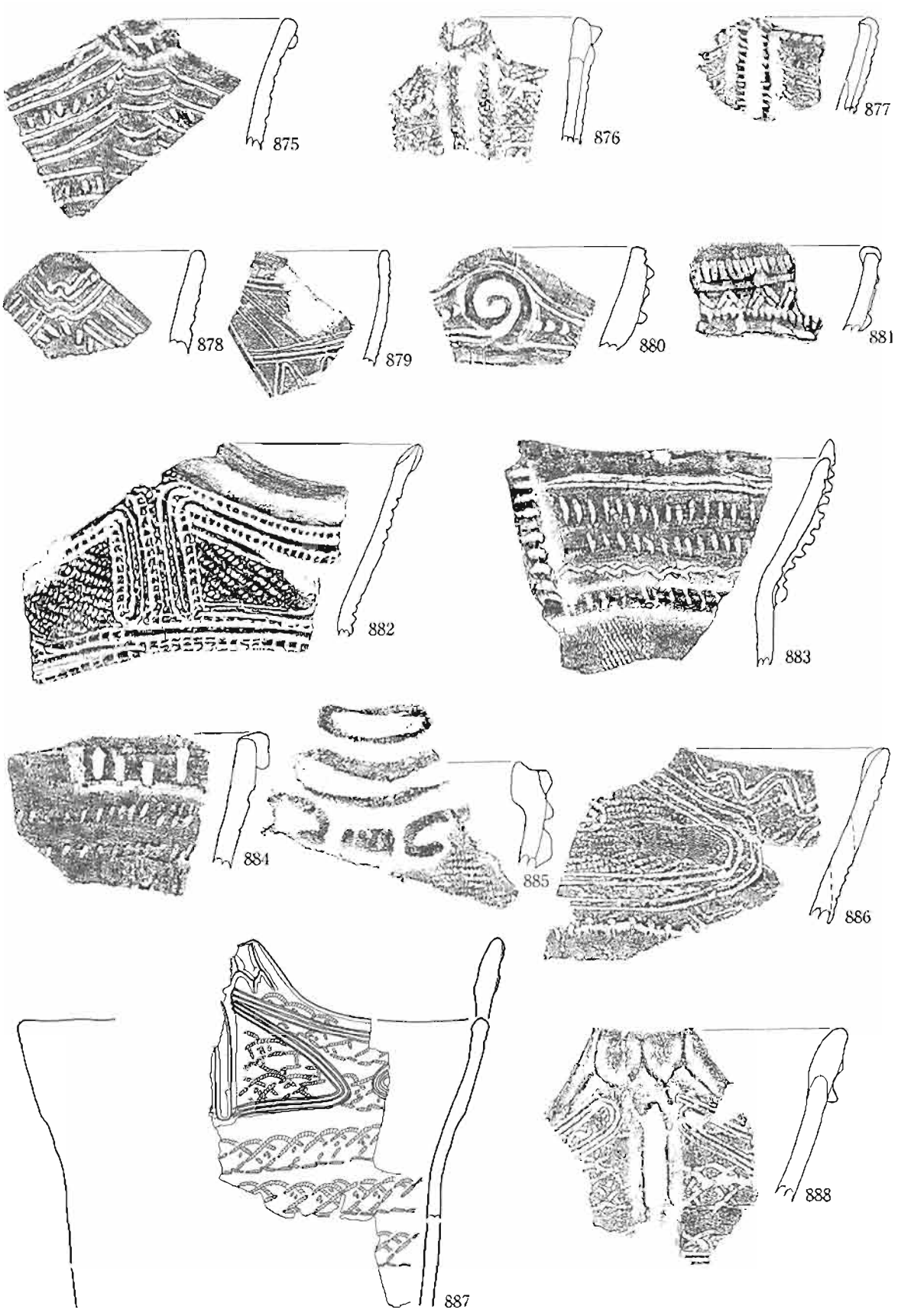


第77図　Ⅰ・Ⅱ－1・Ⅱ－2(1)類



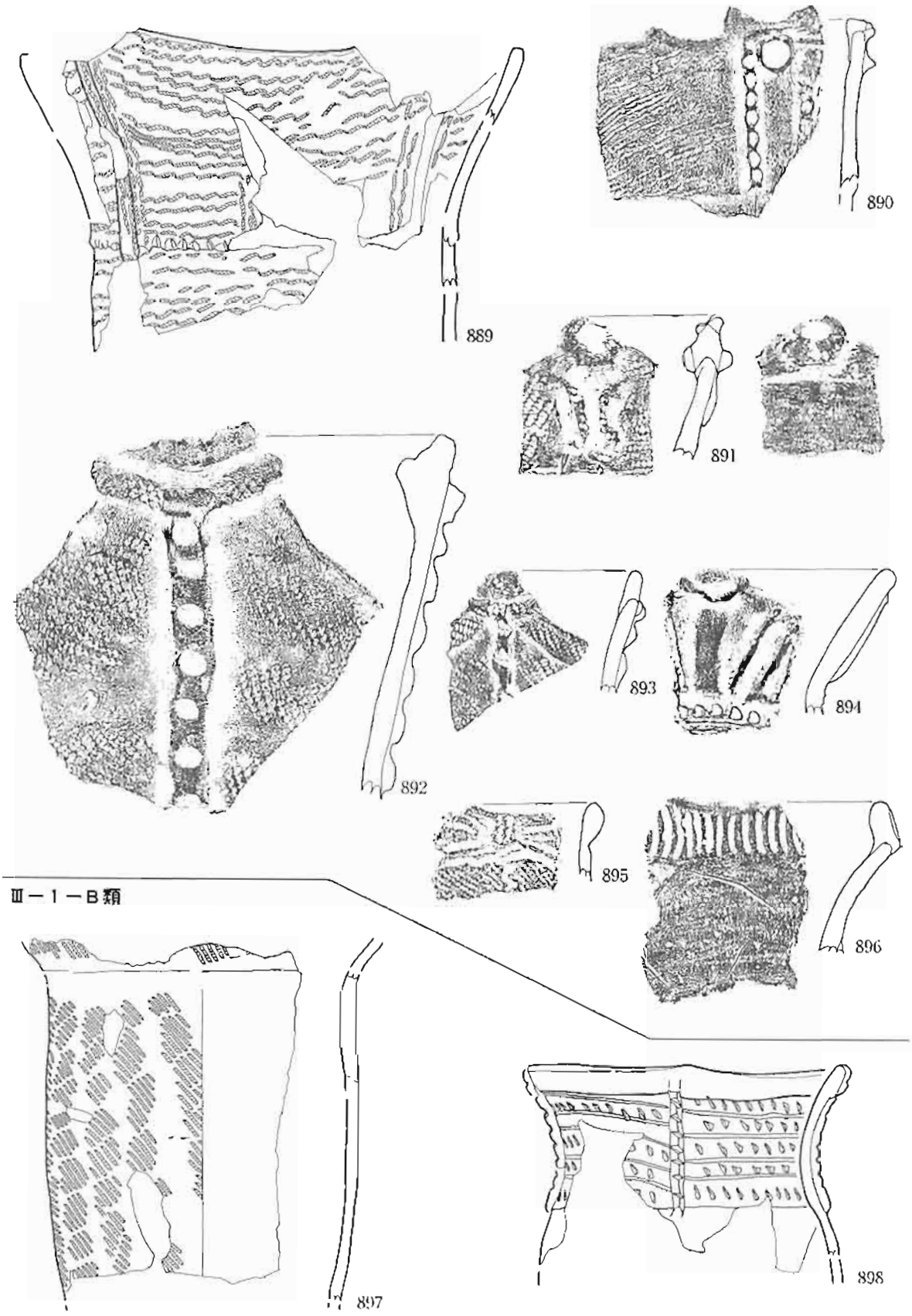
第78図　Ⅱ－2(2)・Ⅱ－3・Ⅲ－1－A(1)類

Ⅲ－1－A類



第79図　Ⅲ－1－A(2)類

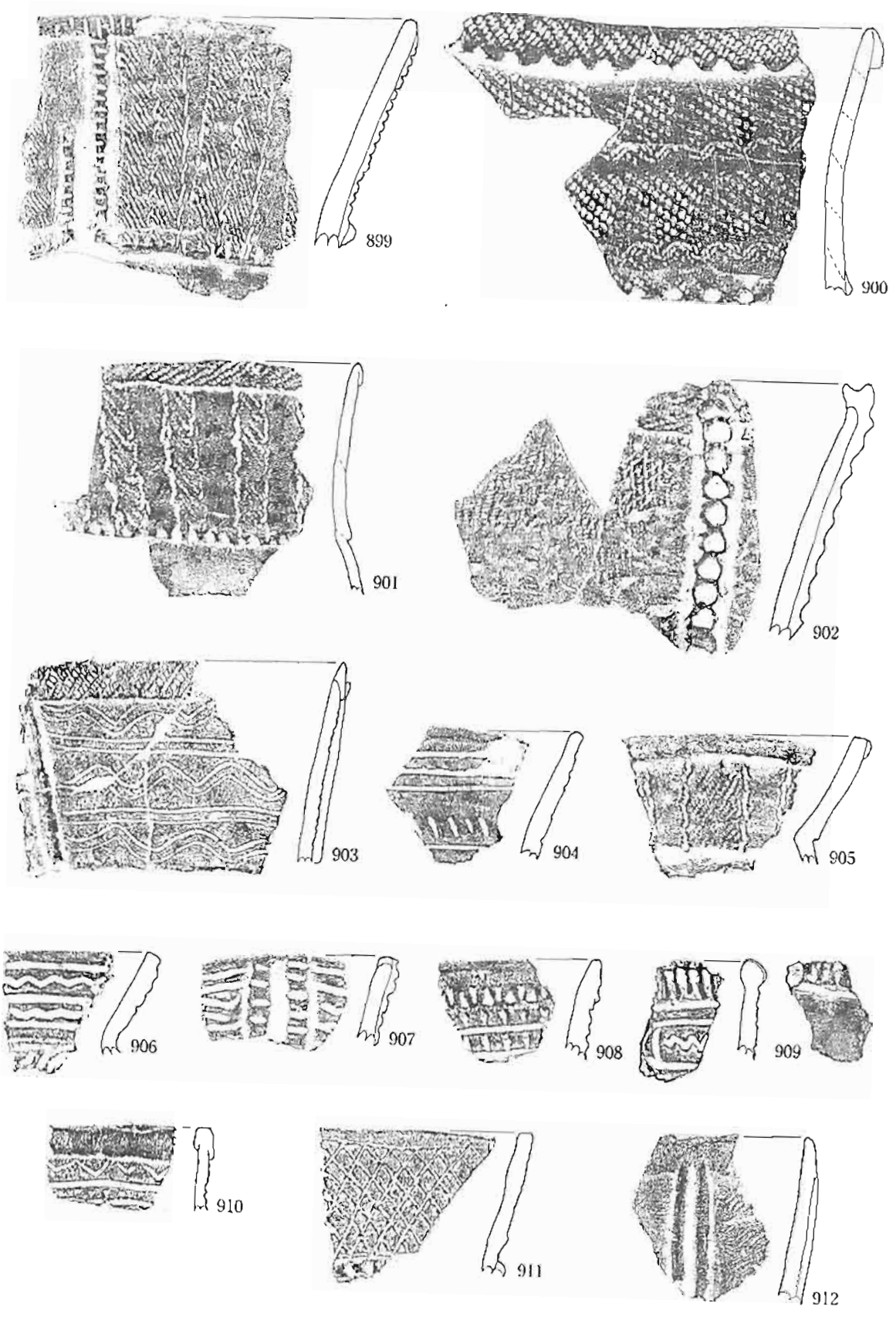
Ⅲ－１－Ａ類



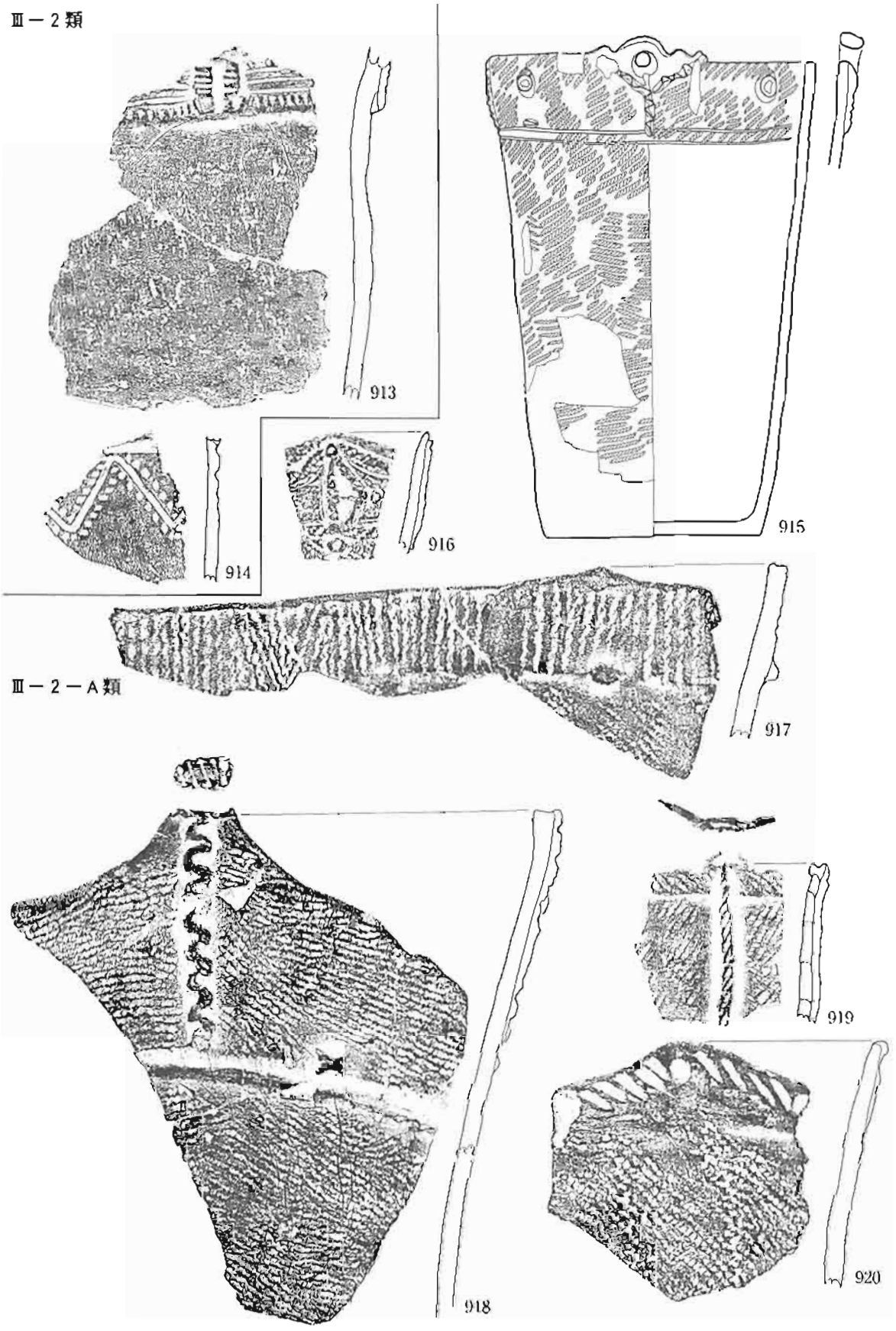
Ⅲ－１－Ｂ類

第80図　Ⅲ－１－Ａ(3)・Ⅲ－１－Ｂ(1)類

Ⅲ－１－Ｂ類

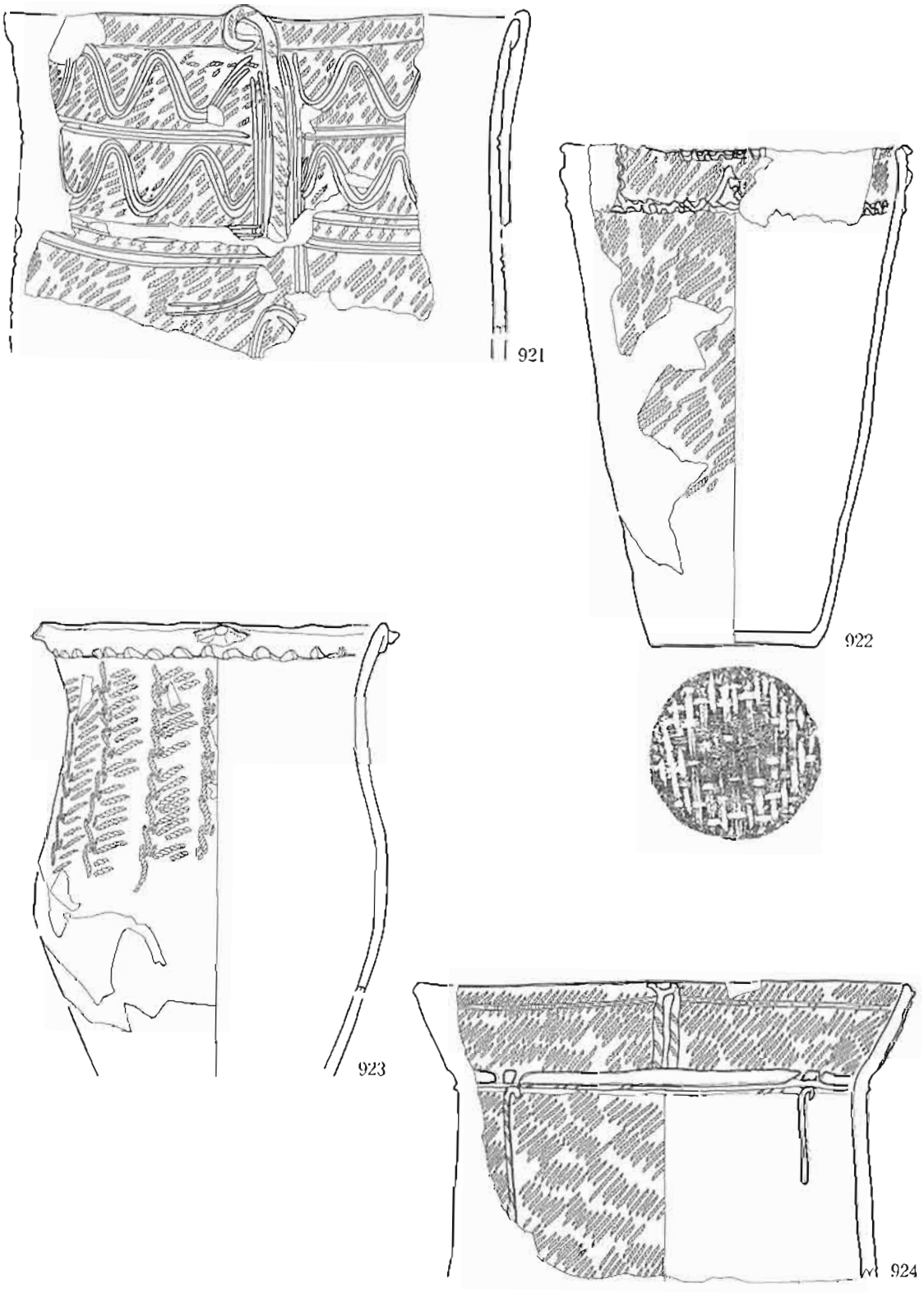


第81図　Ⅲ－１－Ｂ(２)類



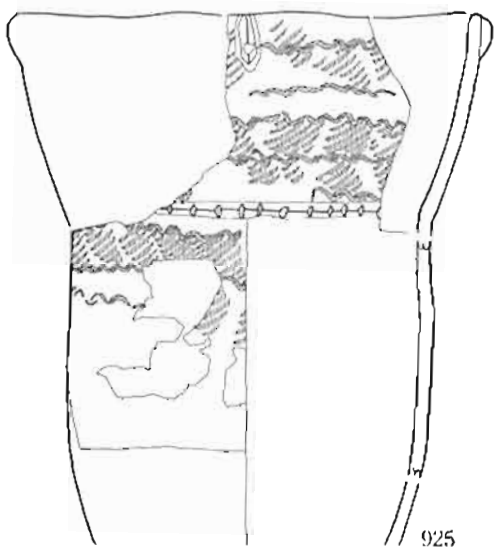
第82図　Ⅲ－2・Ⅲ－2－A類

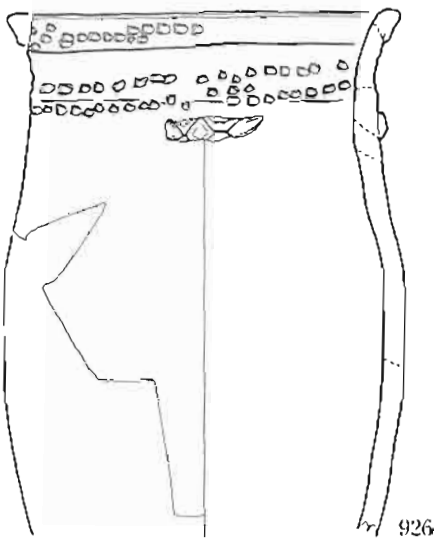
Ⅲ－２－Ｂ類

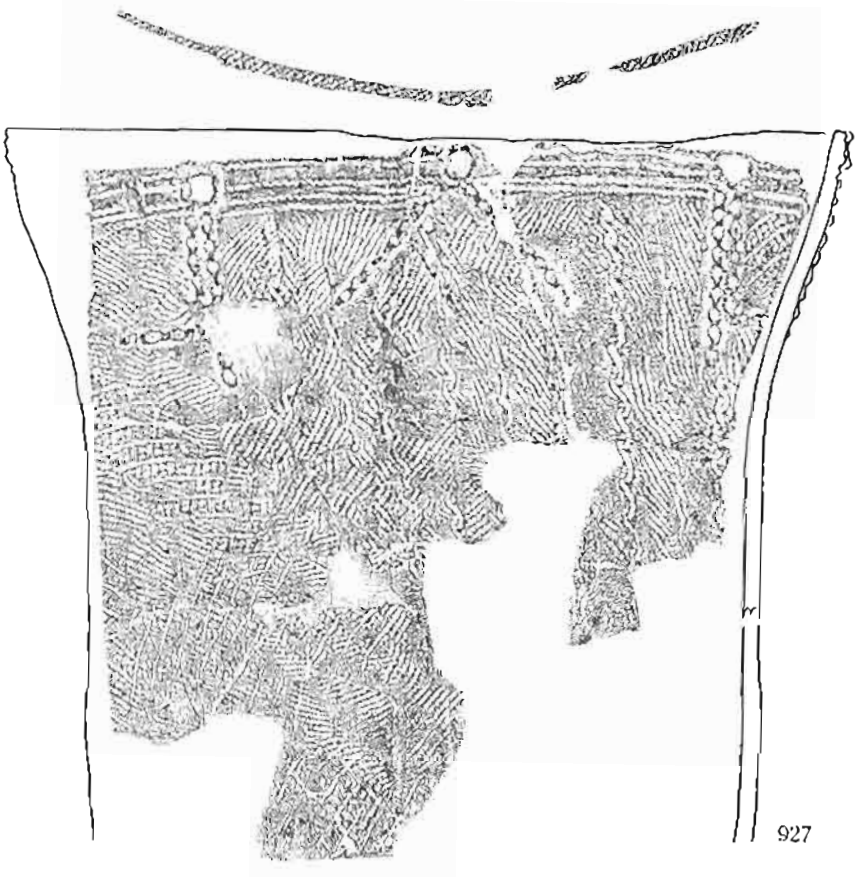


第83図　Ⅲ－２－Ｂ(１)類

Ⅲ－2－B類

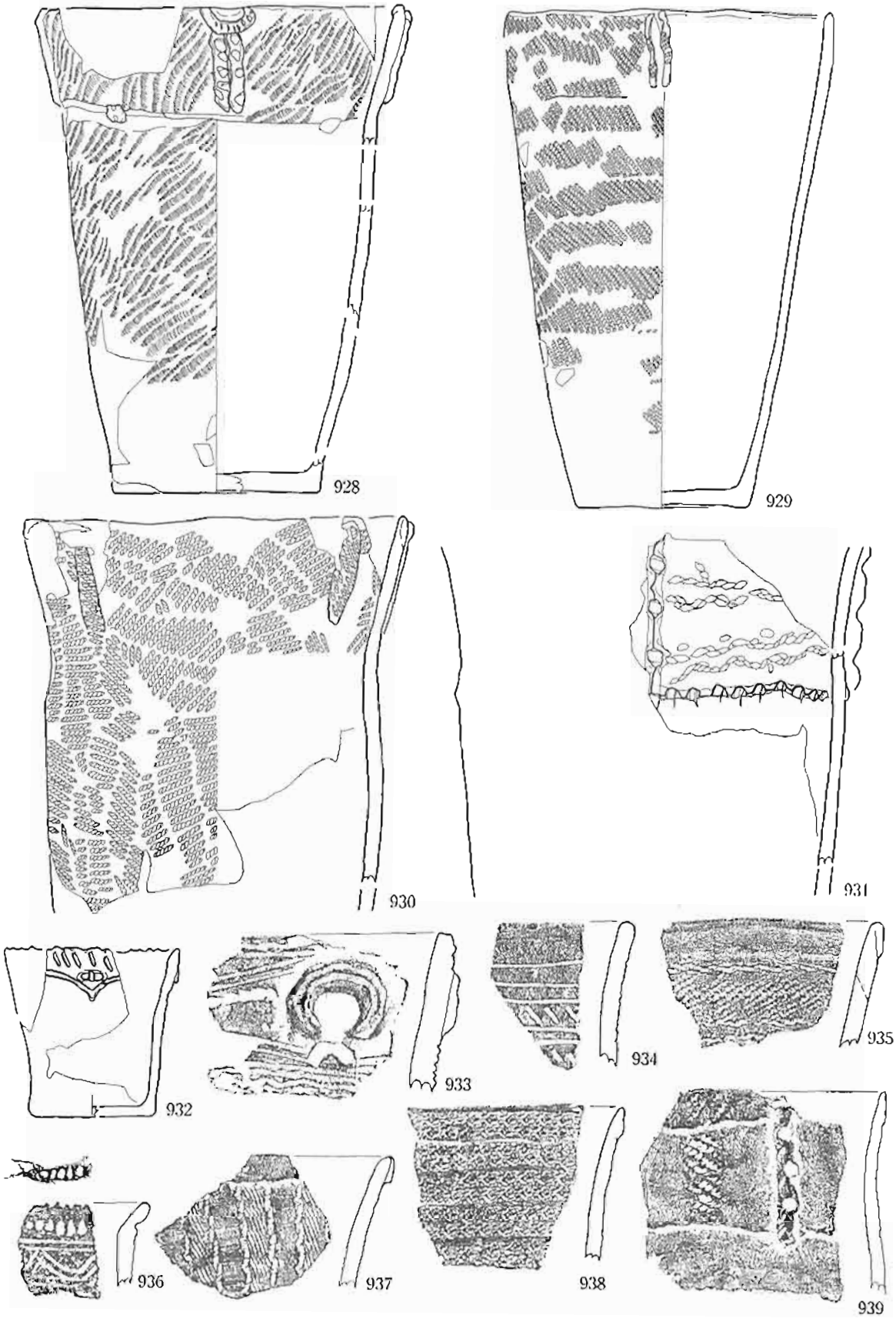






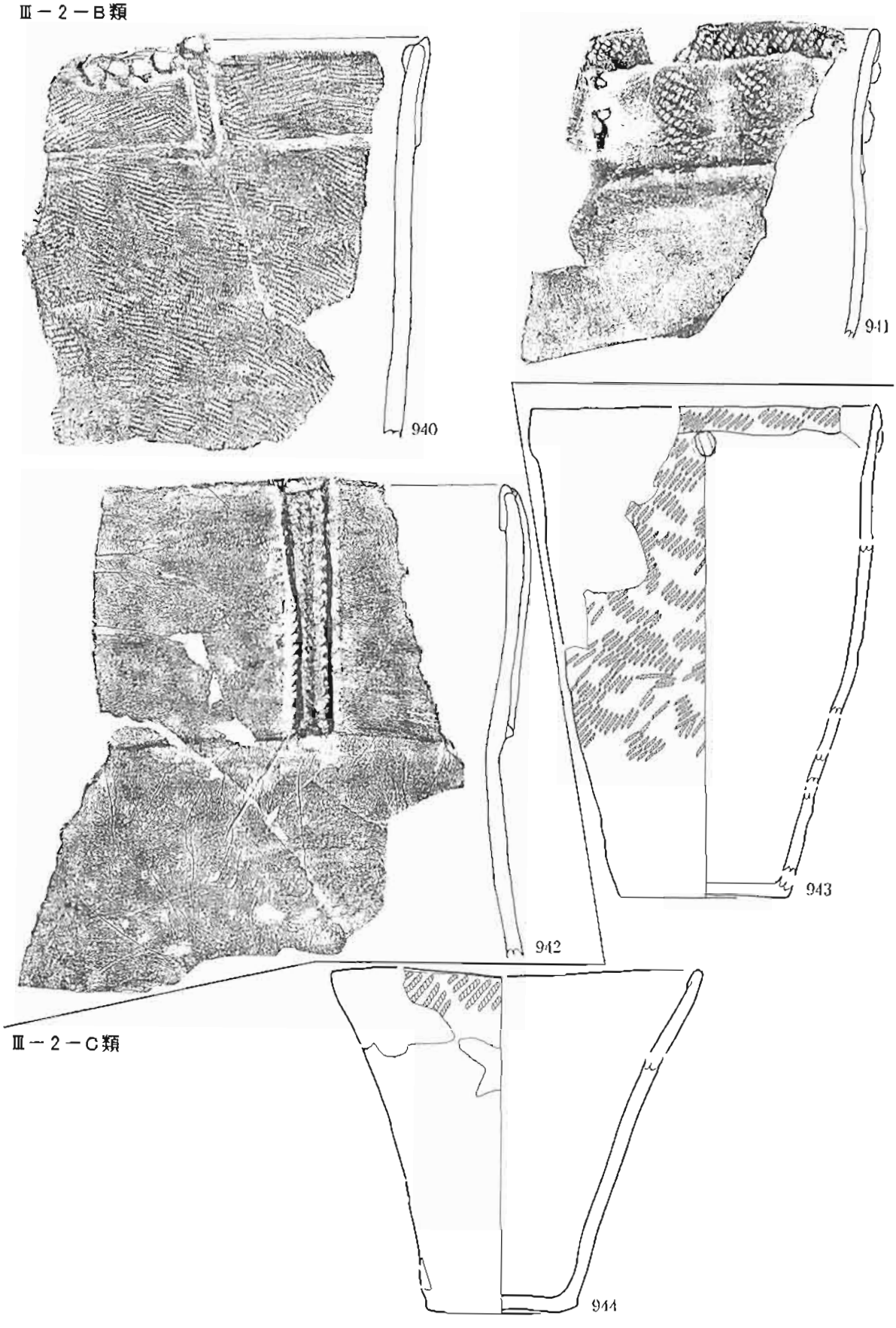
第84図　Ⅲ－2－B(2)類

Ⅲ－2－B類



第85図　Ⅲ－2－B(3)類

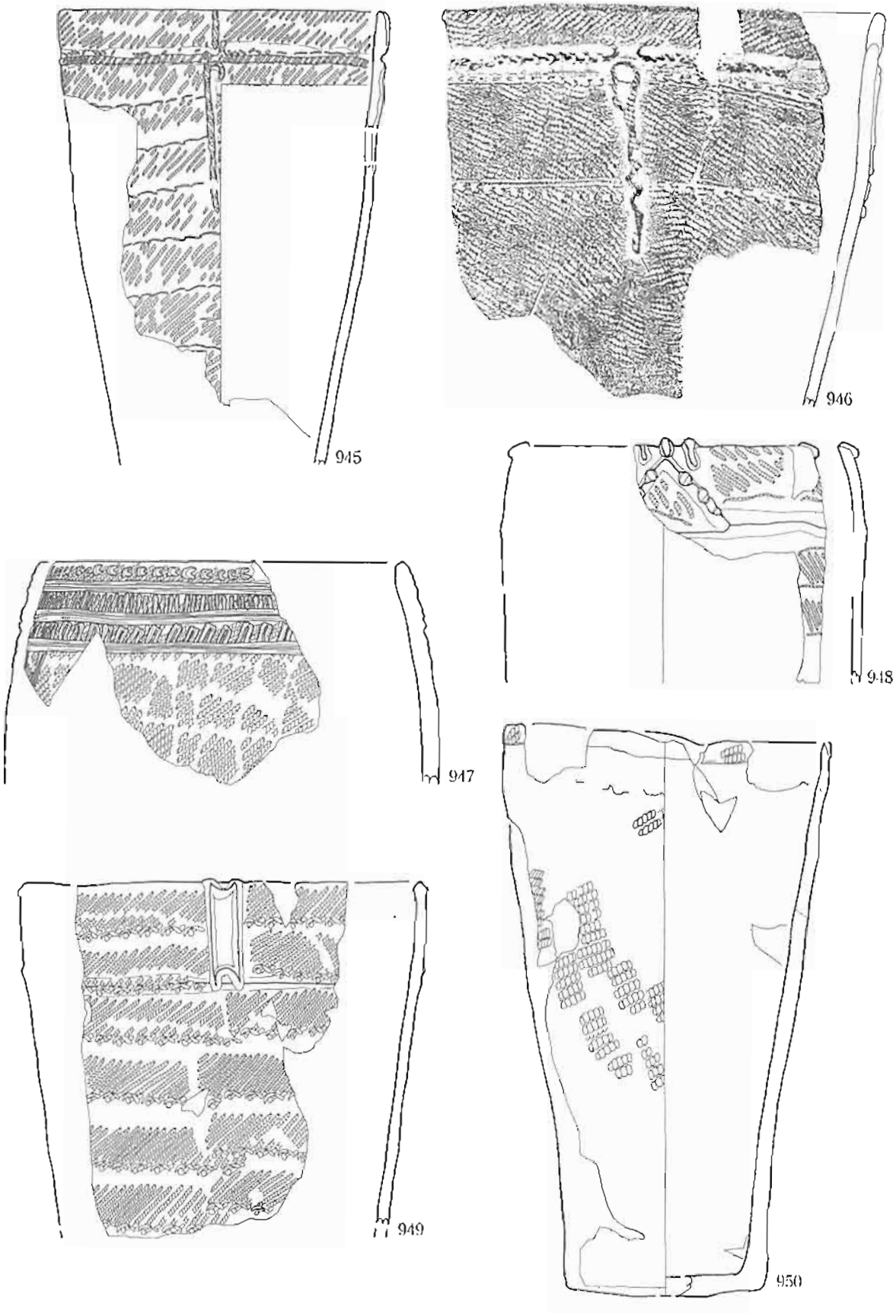
Ⅲ－２－Ｂ類



Ⅲ－２－Ｃ類

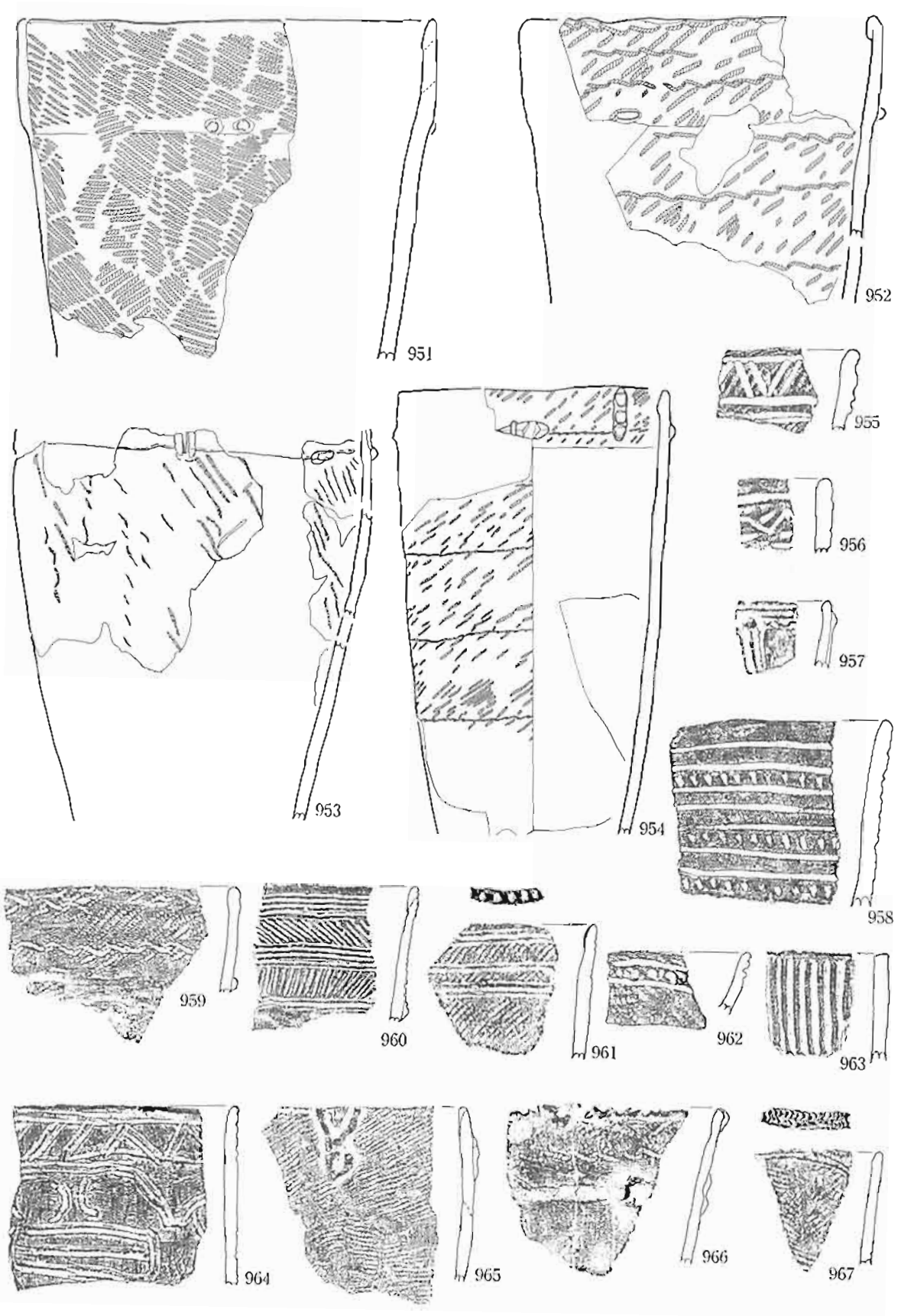
第86図　Ⅲ－２－Ｂ(４)・Ⅲ－２－Ｃ類

Ⅲ－3類



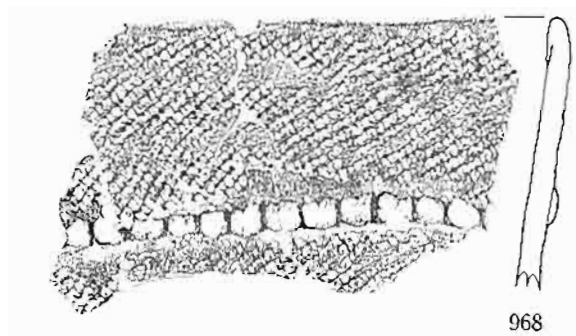
第87図　Ⅲ－3（1）類

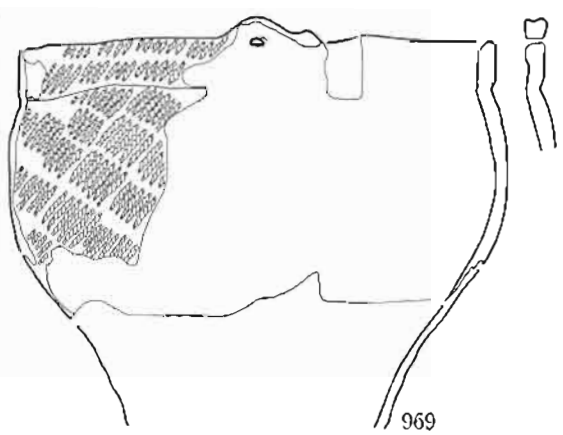
Ⅲ－3類



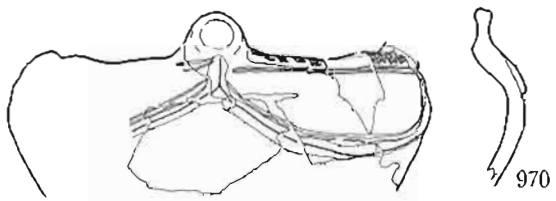
第88図　Ⅲ－3（2）類

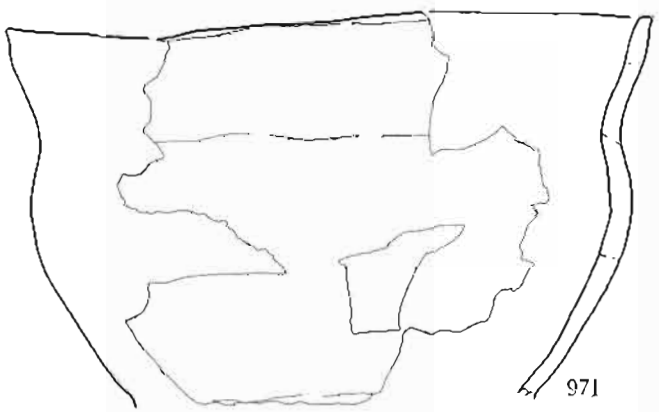
Ⅲ－3類

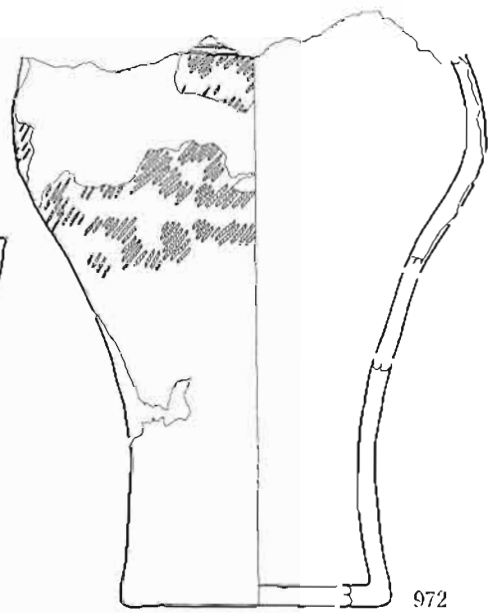




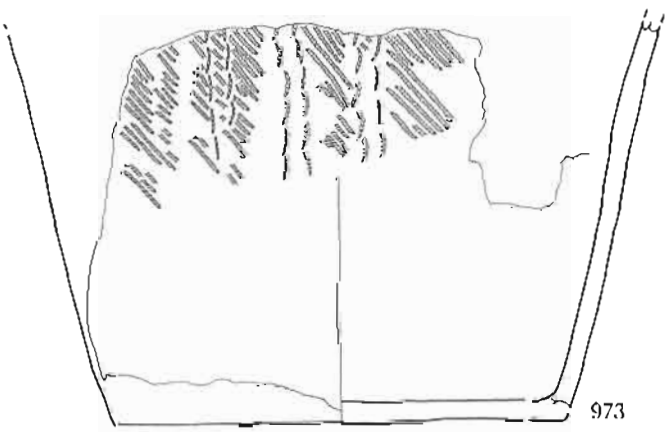
Ⅲ－4類





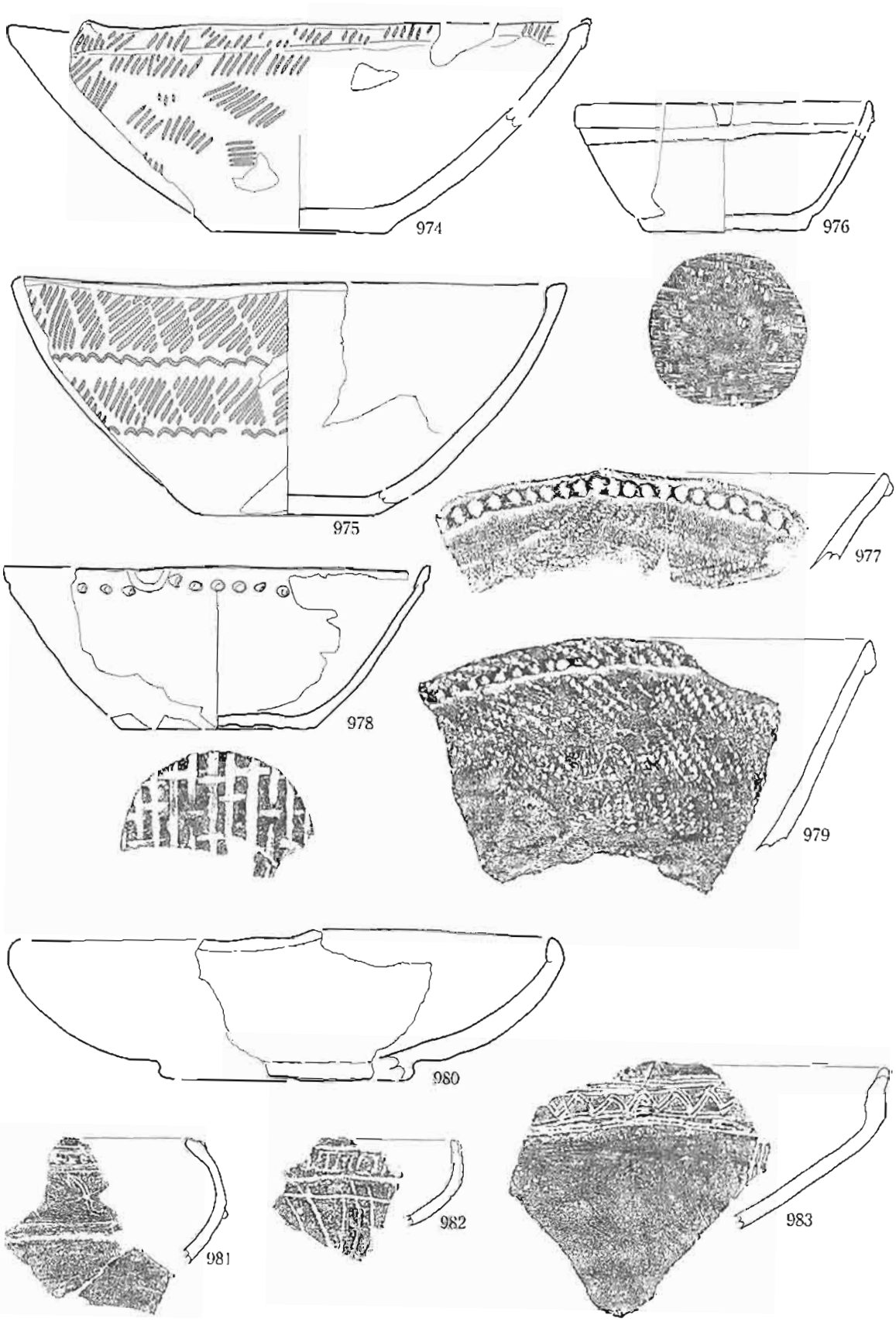


Ⅲ－6類



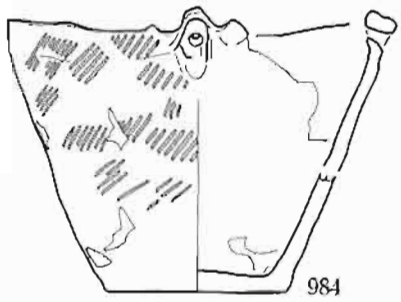
第89図　Ⅲ－3(3)・Ⅲ－4・Ⅲ－6類

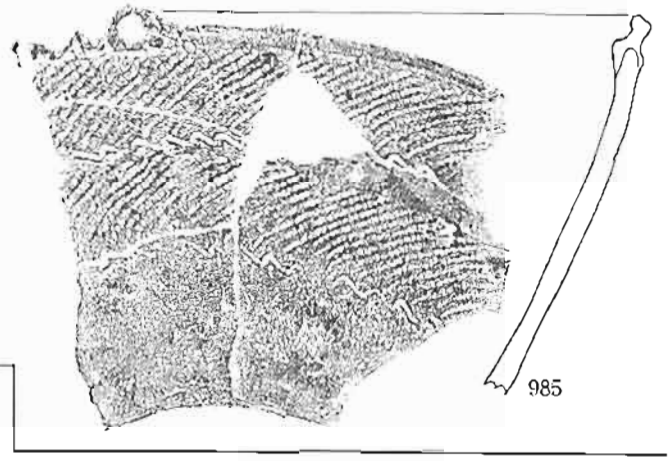
Ⅲ－5類



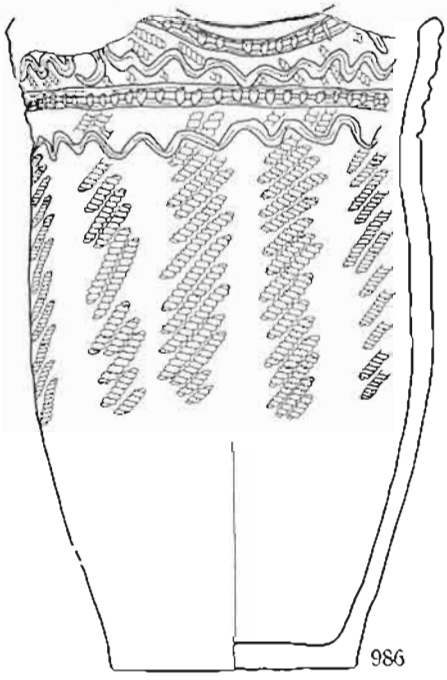
第90図　Ⅲ－5（1）類

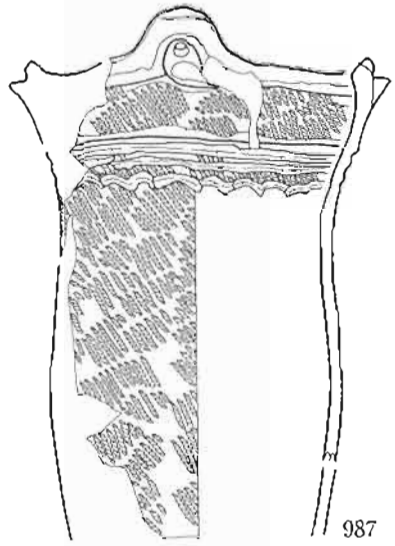
Ⅲ－5類

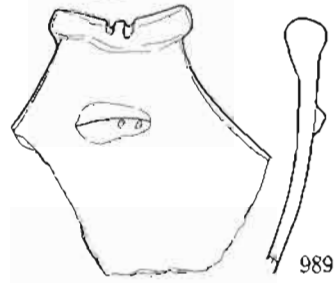


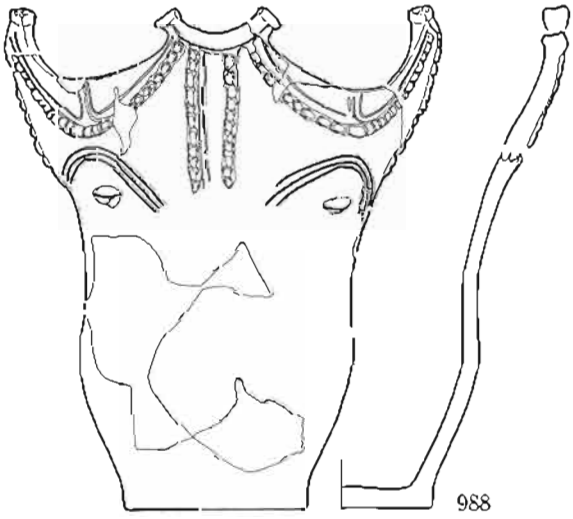


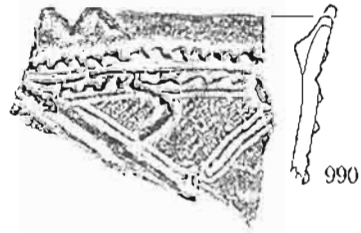
Ⅳ－1－A類





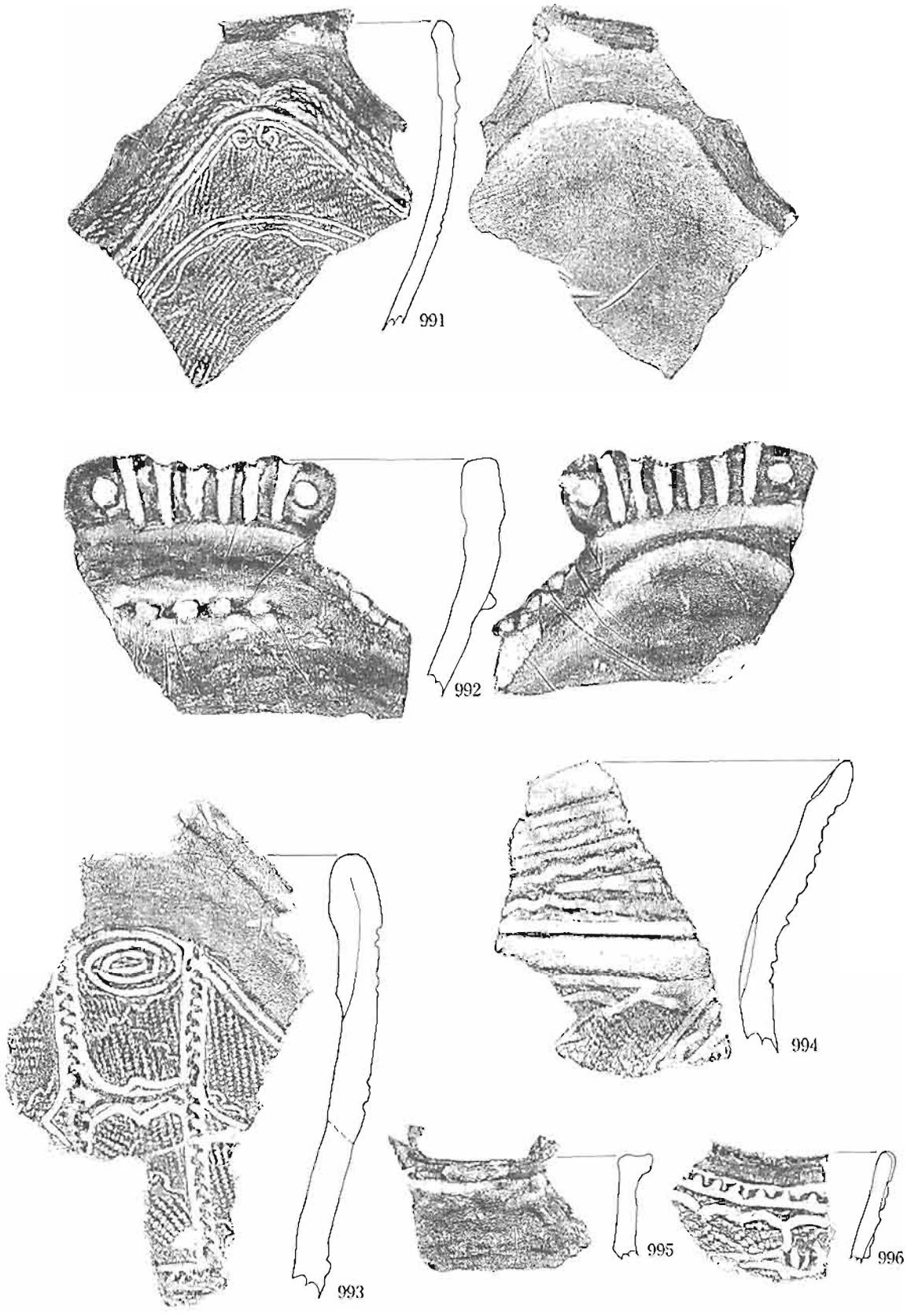




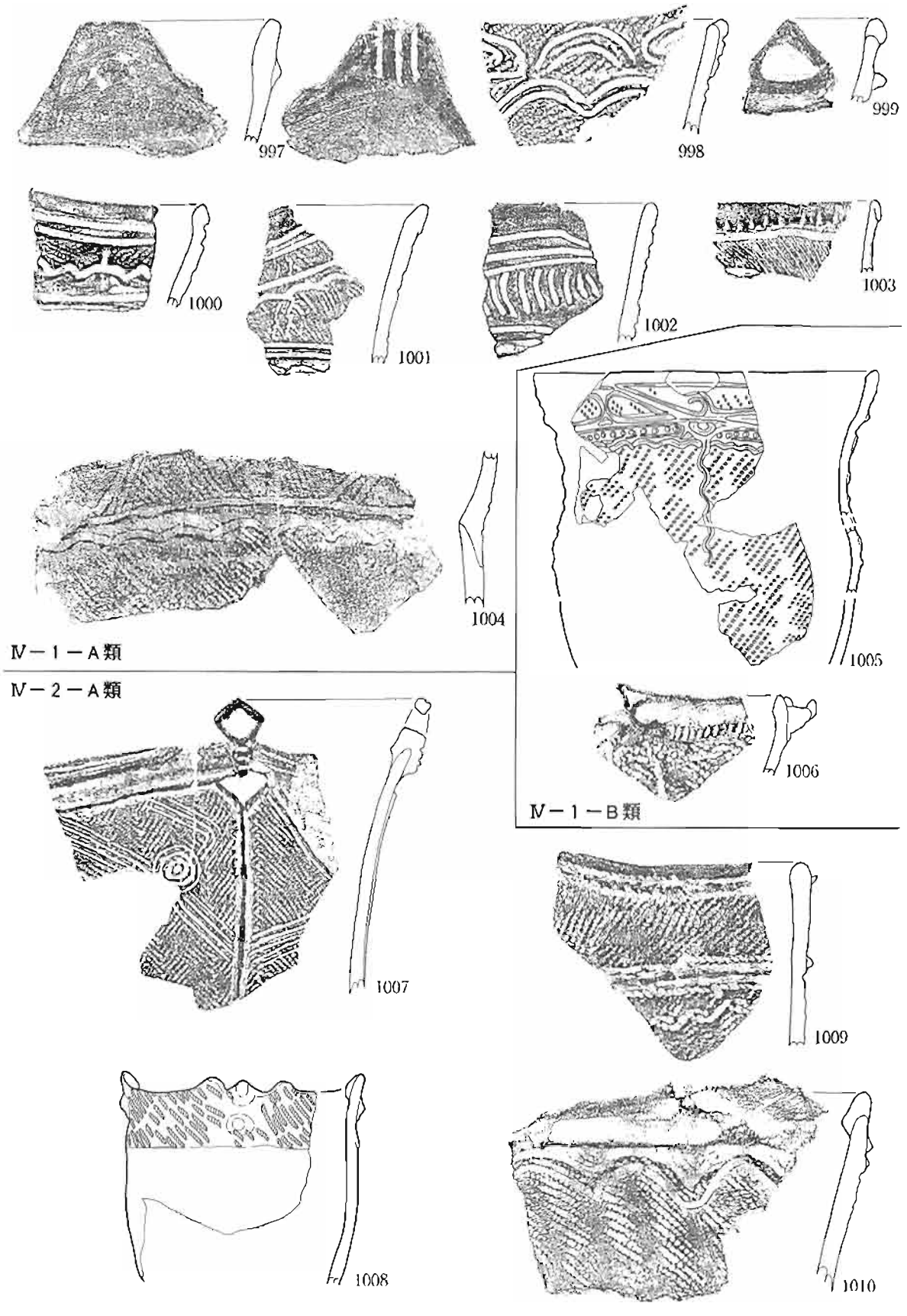


第91図　Ⅲ－5(2)・Ⅳ－1－A(1)類

Ⅳ－１－Ａ類

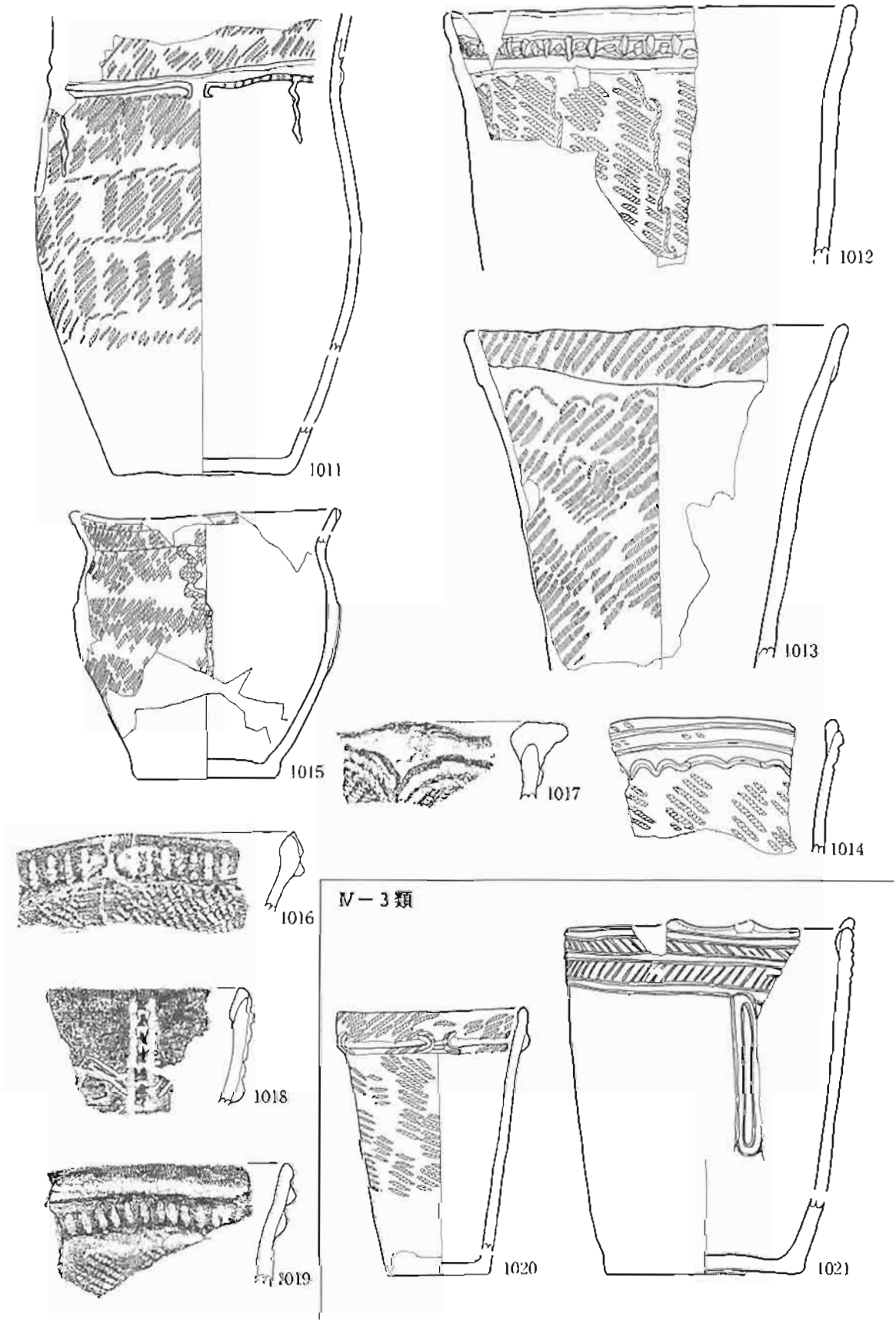


第92図　Ⅳ－１－Ａ（２）類

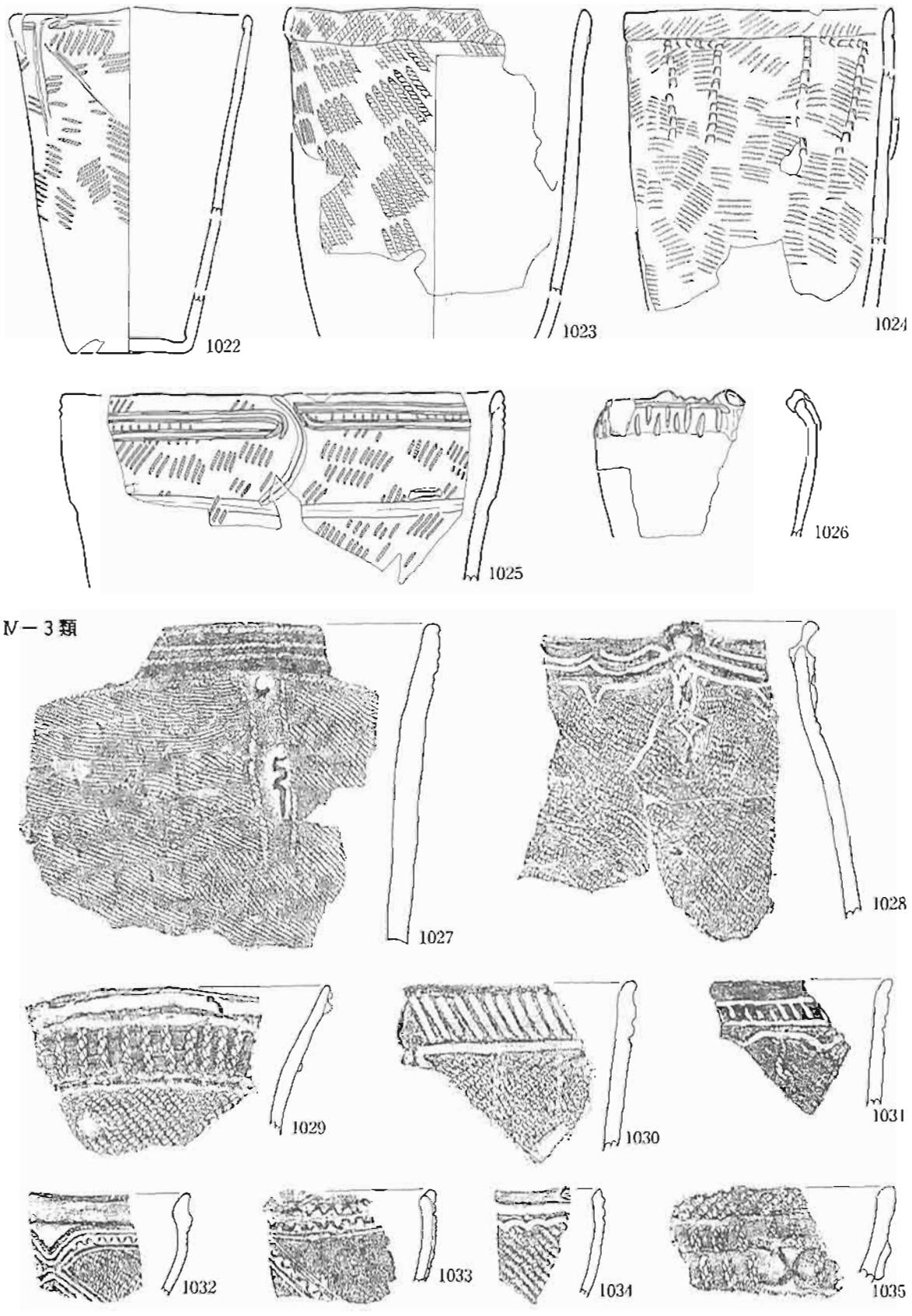


第93図　Ⅳ－1－A(3)・Ⅳ－1－B・Ⅳ－2－A類

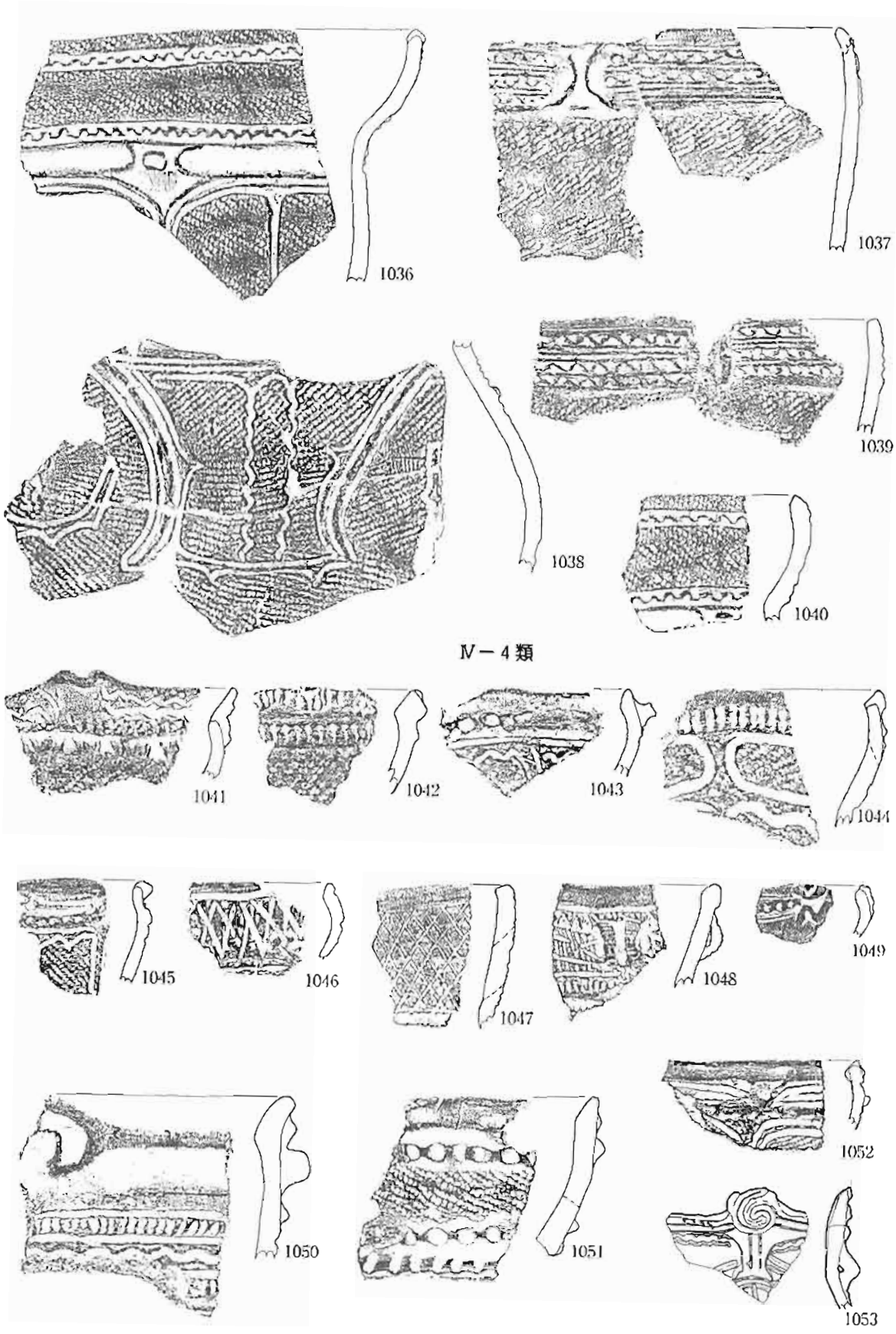
Ⅳ－２－Ｂ類



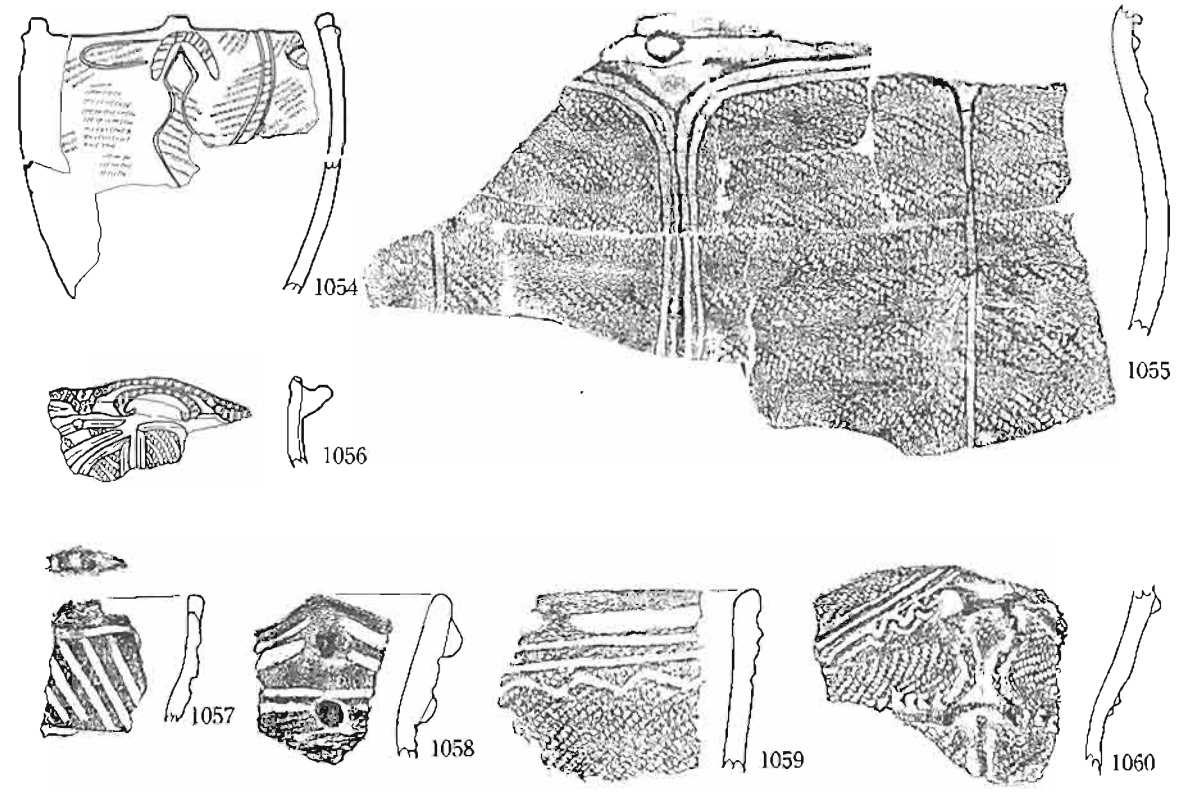
第94図　Ⅳ－２－Ｂ・Ⅳ－３（１）類


1022
1023
1024
1025
1026
Ⅳ－3類
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035

第95図　Ⅳ－3（2）類

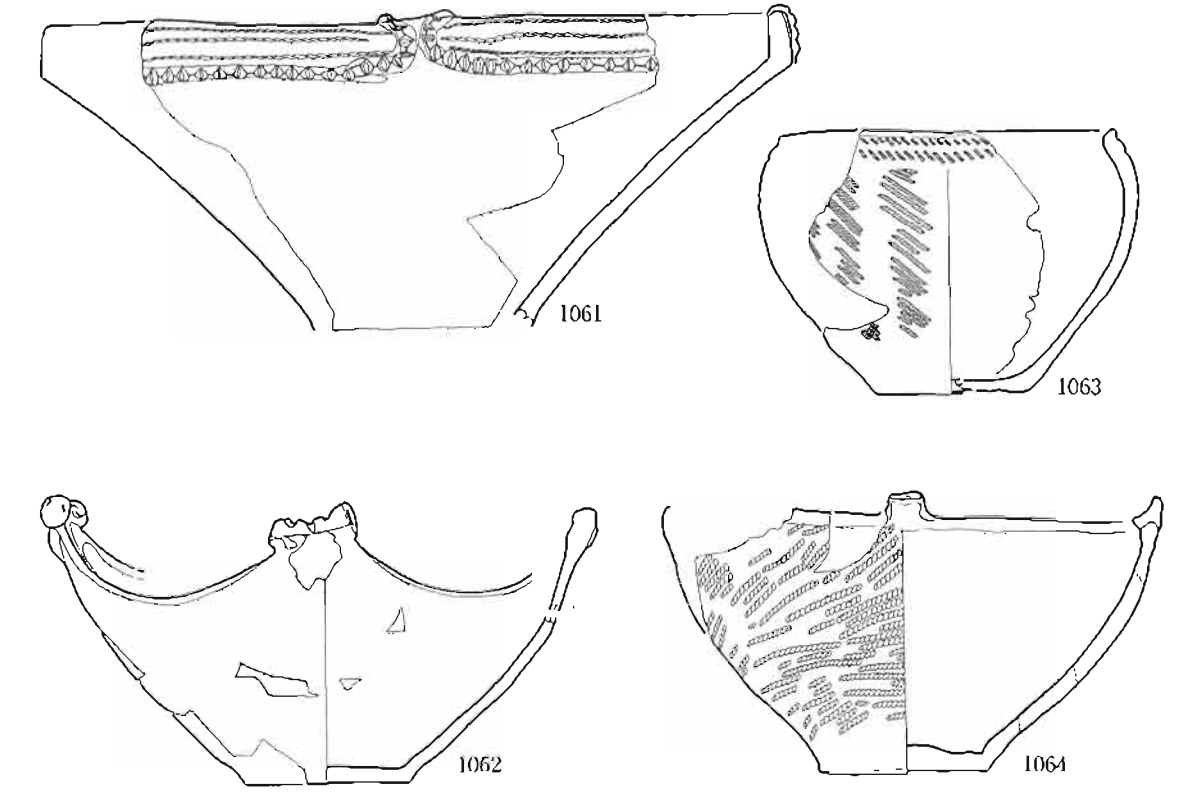

1036
1037
1038
1039
1040
Ⅳ－4類
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053

第96図　Ⅳ－4（1）類



Ⅳ－4類

Ⅳ－5類

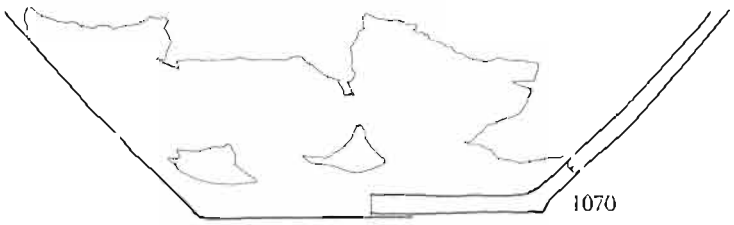


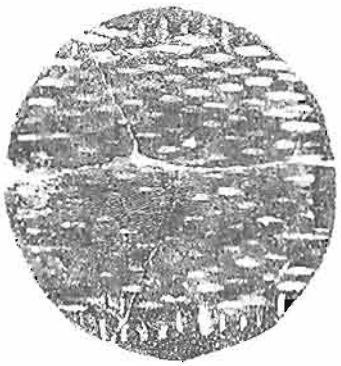
第97図　Ⅳ－4（2）・Ⅳ－5（1）類

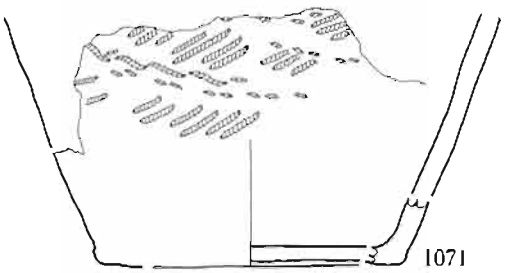
Ⅳ－5類

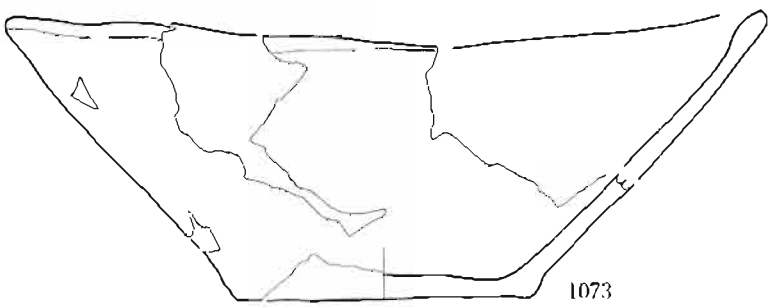
第98図　Ⅳ－5（2）類

Ⅳ－5類



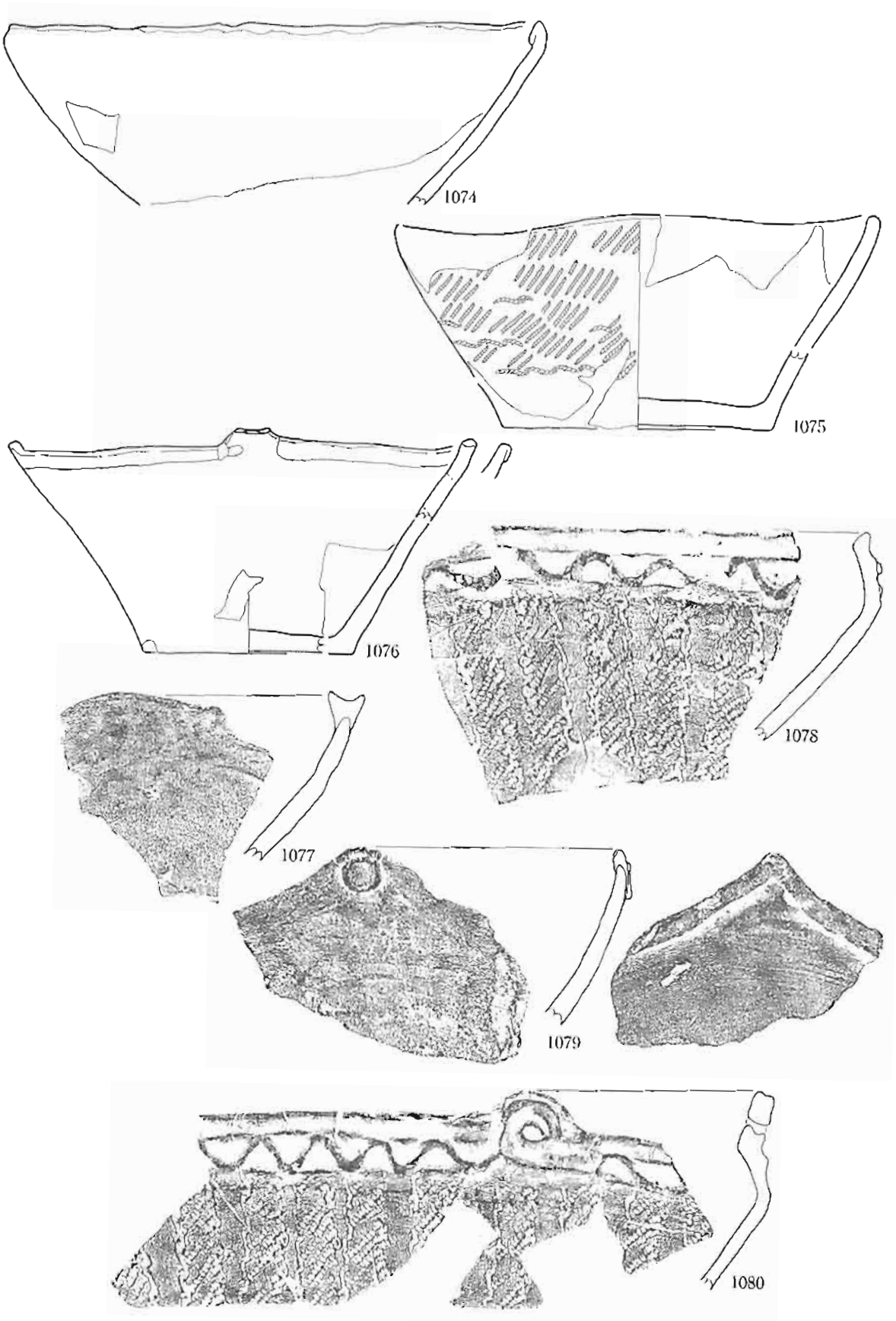






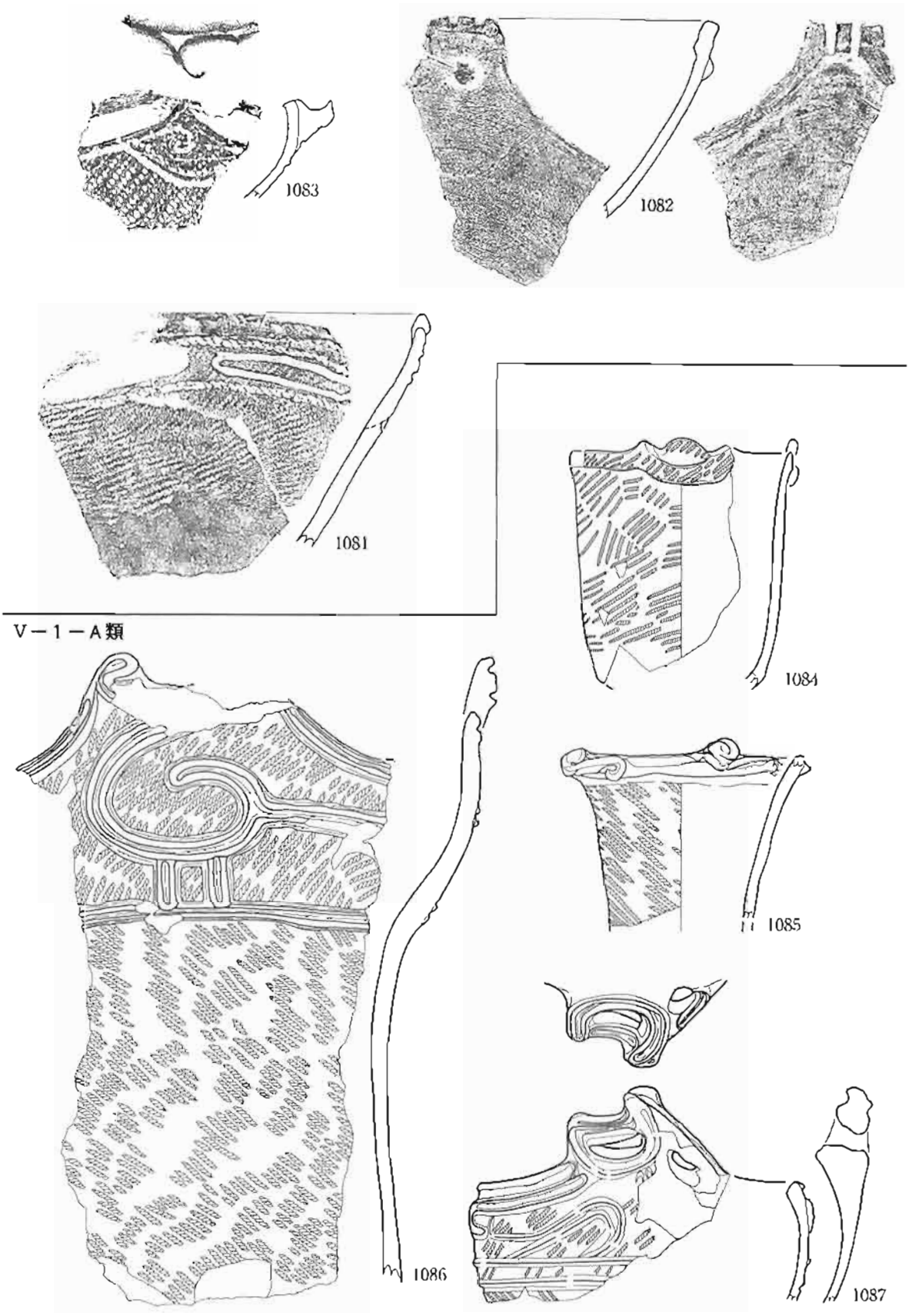
第99図　Ⅳ－5（3）類

Ⅳ－5類



第100図　Ⅳ－5（4）類

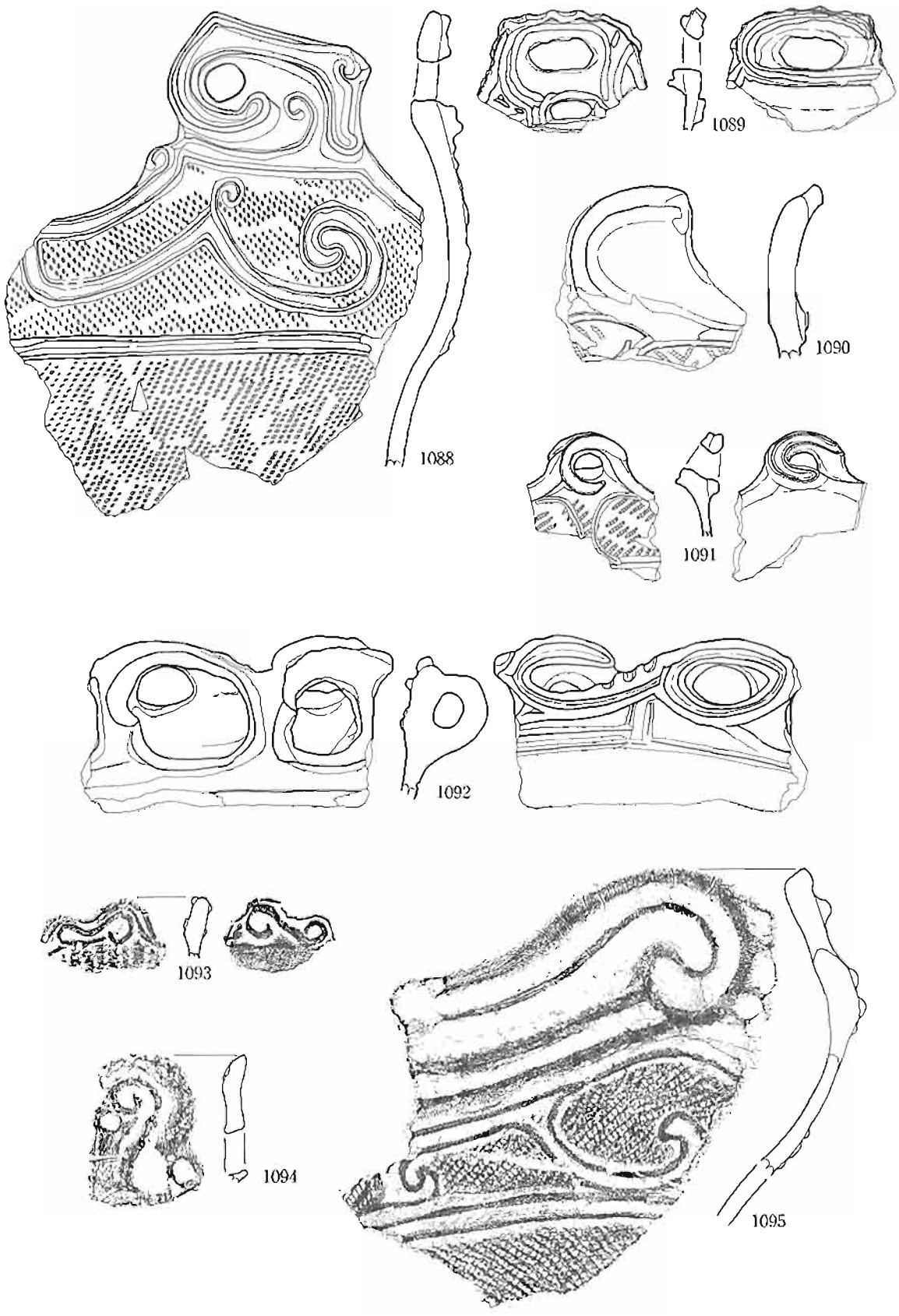
Ⅳ－5類



Ⅴ－1－A類

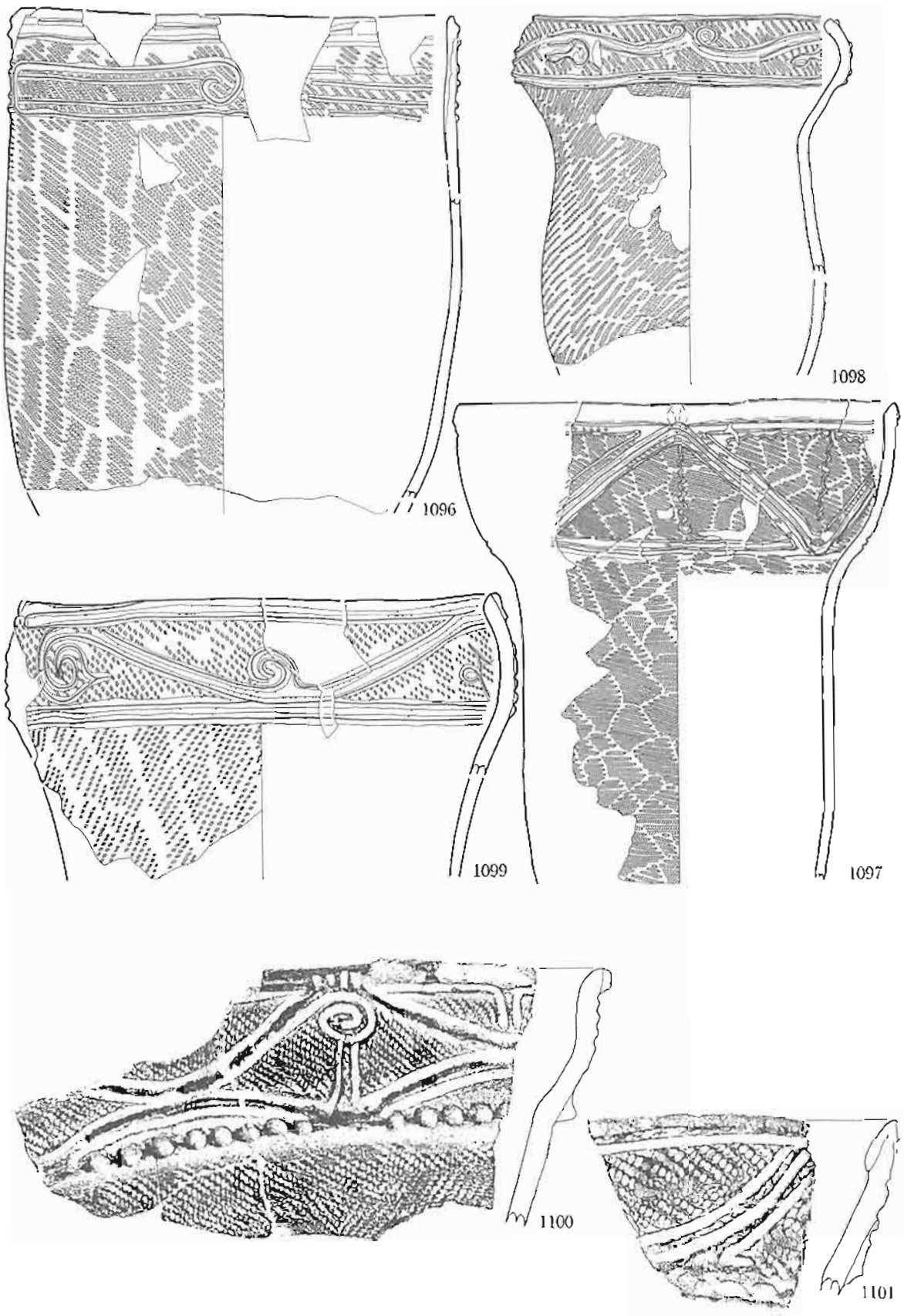
第101図　Ⅳ－5(5)・Ⅴ－1－A(1)類

V－1－A類



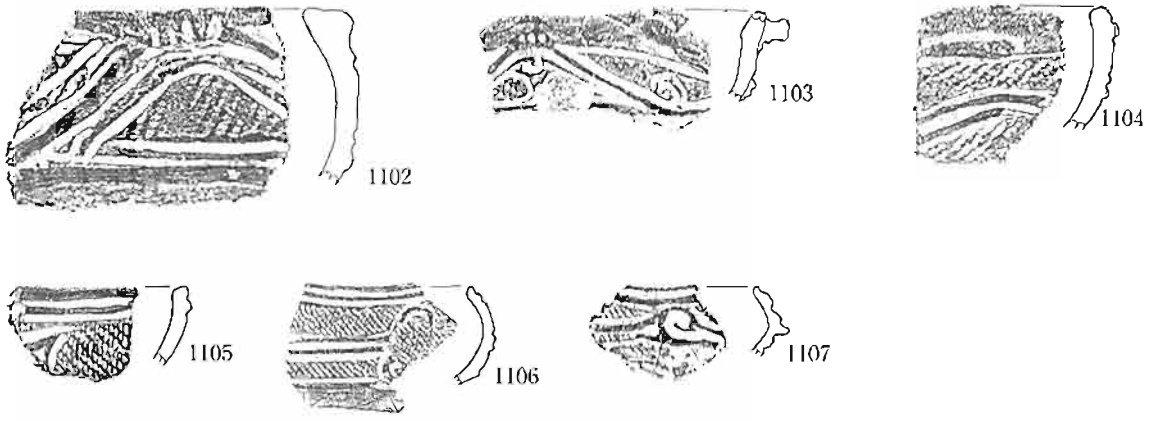
第102図　V－1－A（2）類

V－1－B類

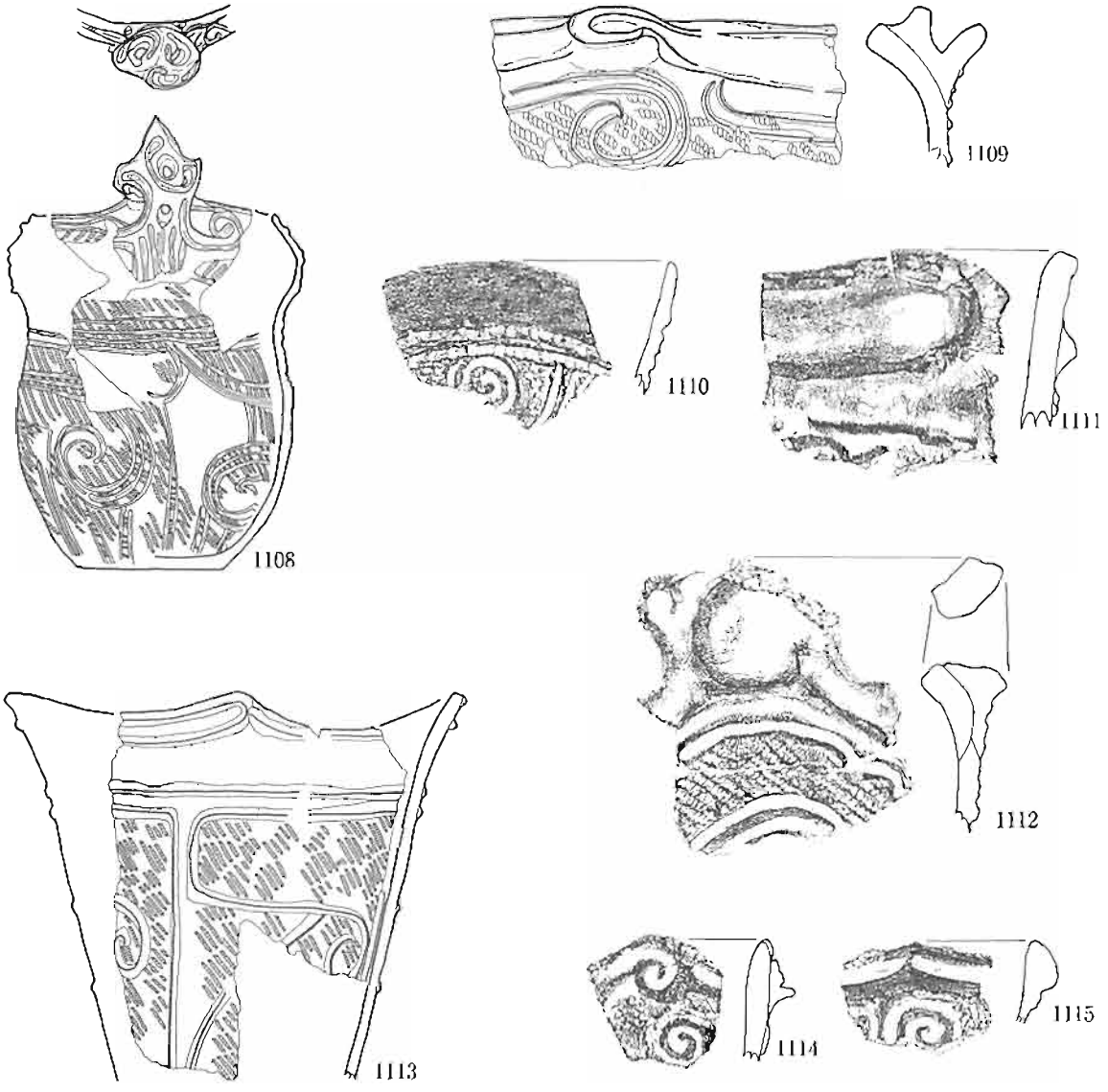


第103図　V－1－B（1）類

V－1－B類

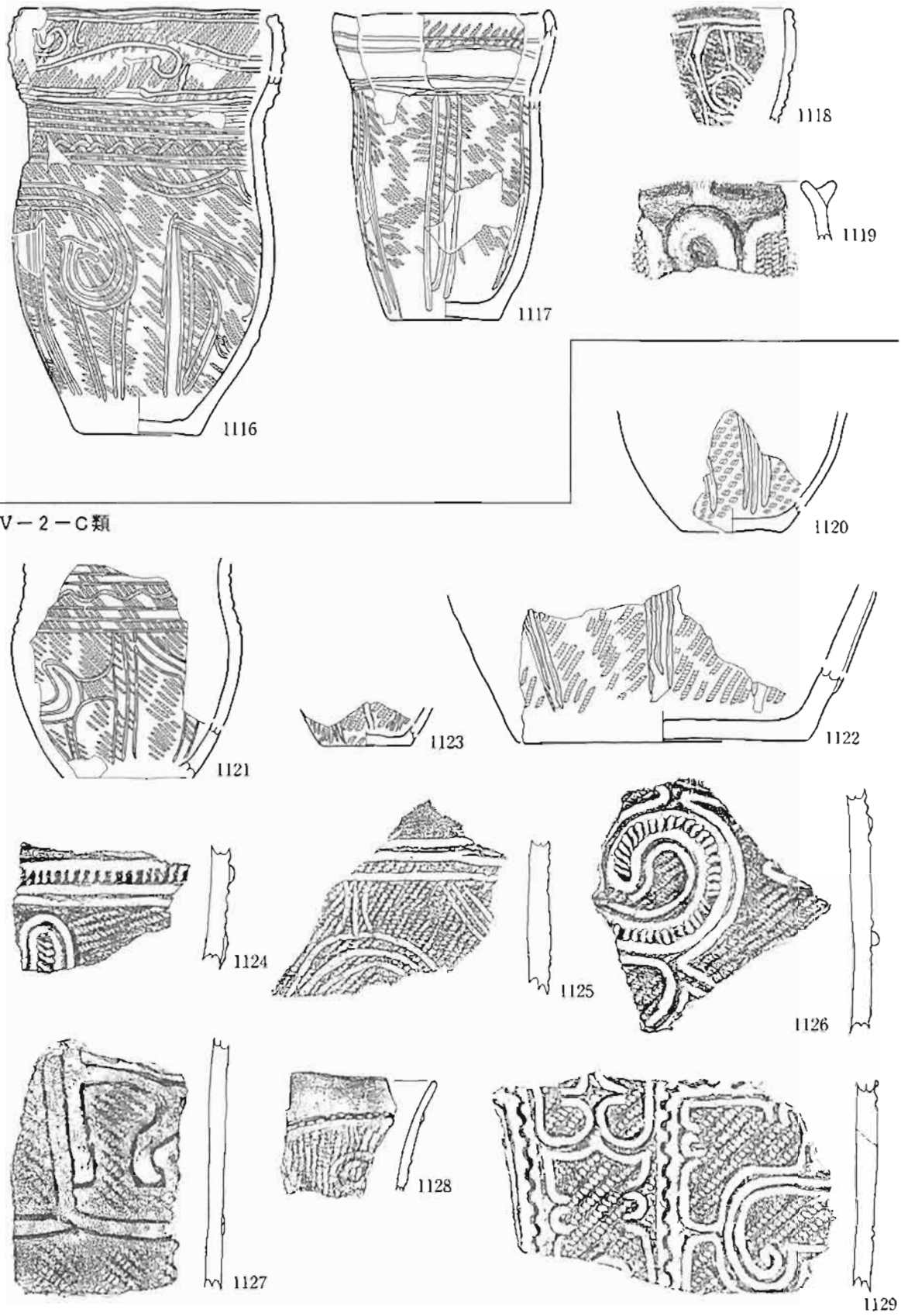


V－2－A類



第104図　V－1－B(2)・V－2－A類

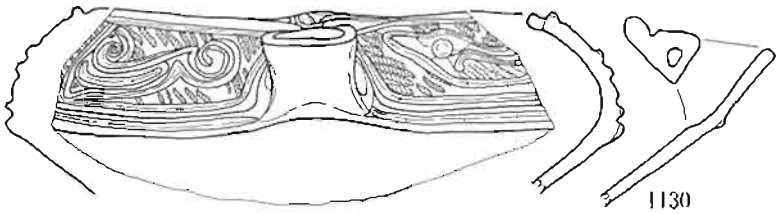
V－2－B類

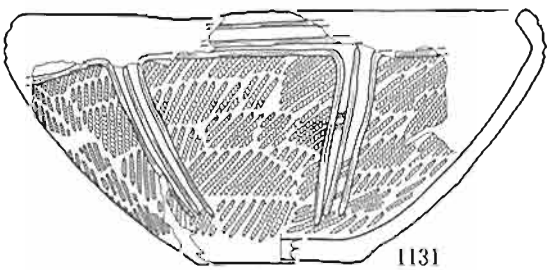


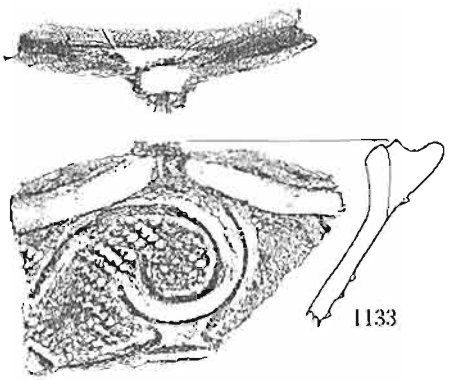
V－2－C類

第105図　V－2－B・V－2－C類

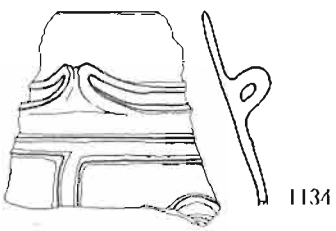
Ⅴ－３類

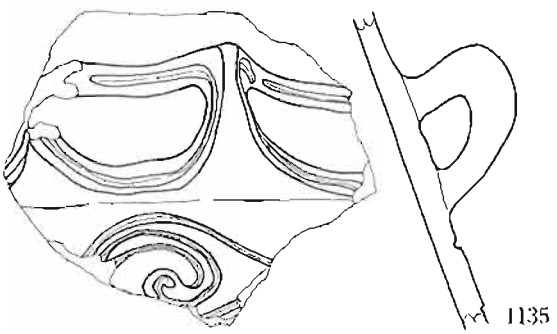




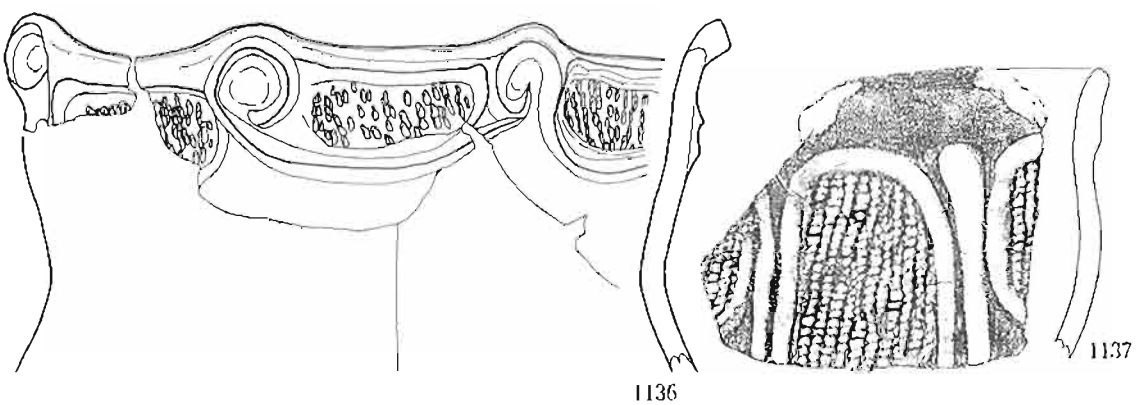


Ⅴ－４類



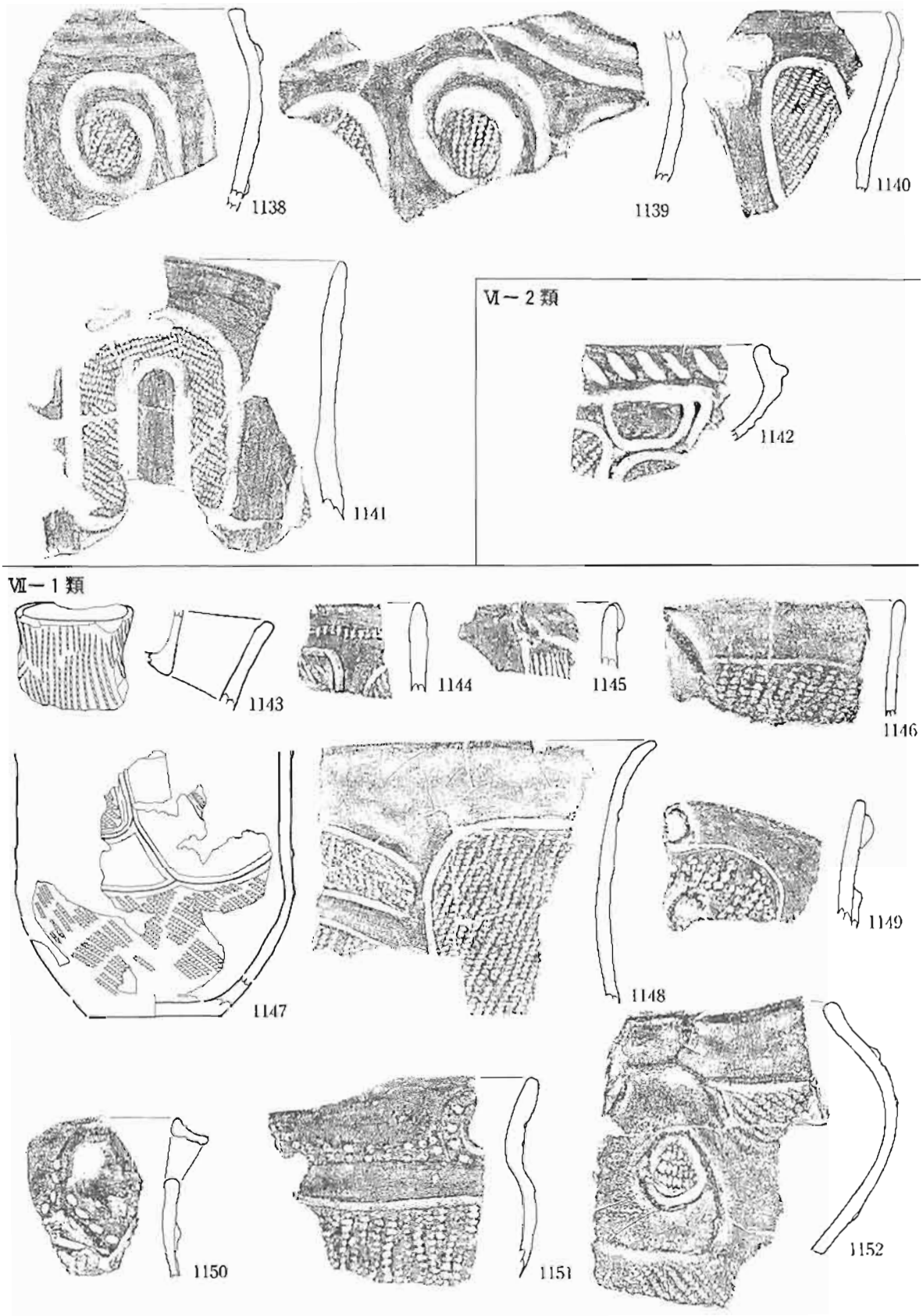


Ⅵ－１類

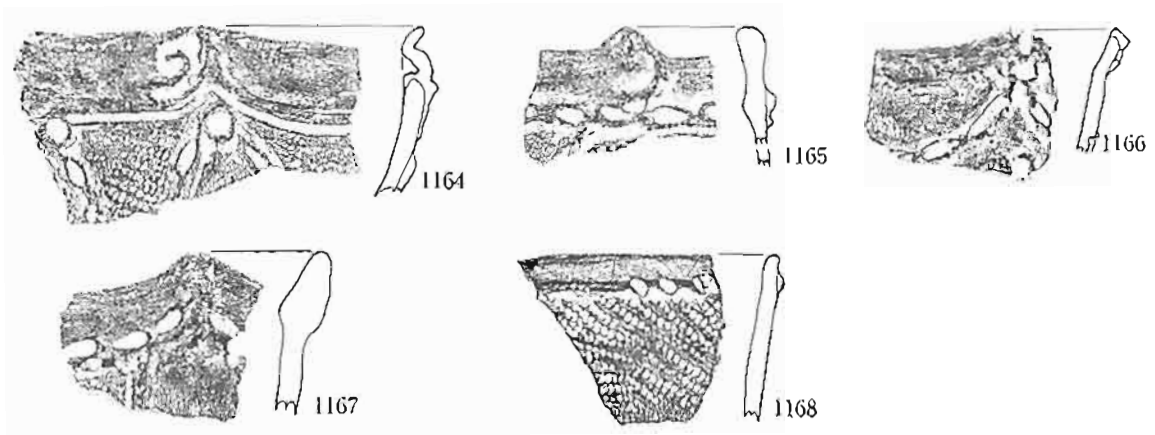


第106図　Ⅴ－３・Ⅴ－４・Ⅵ－１(１)類

Ⅵ－１類

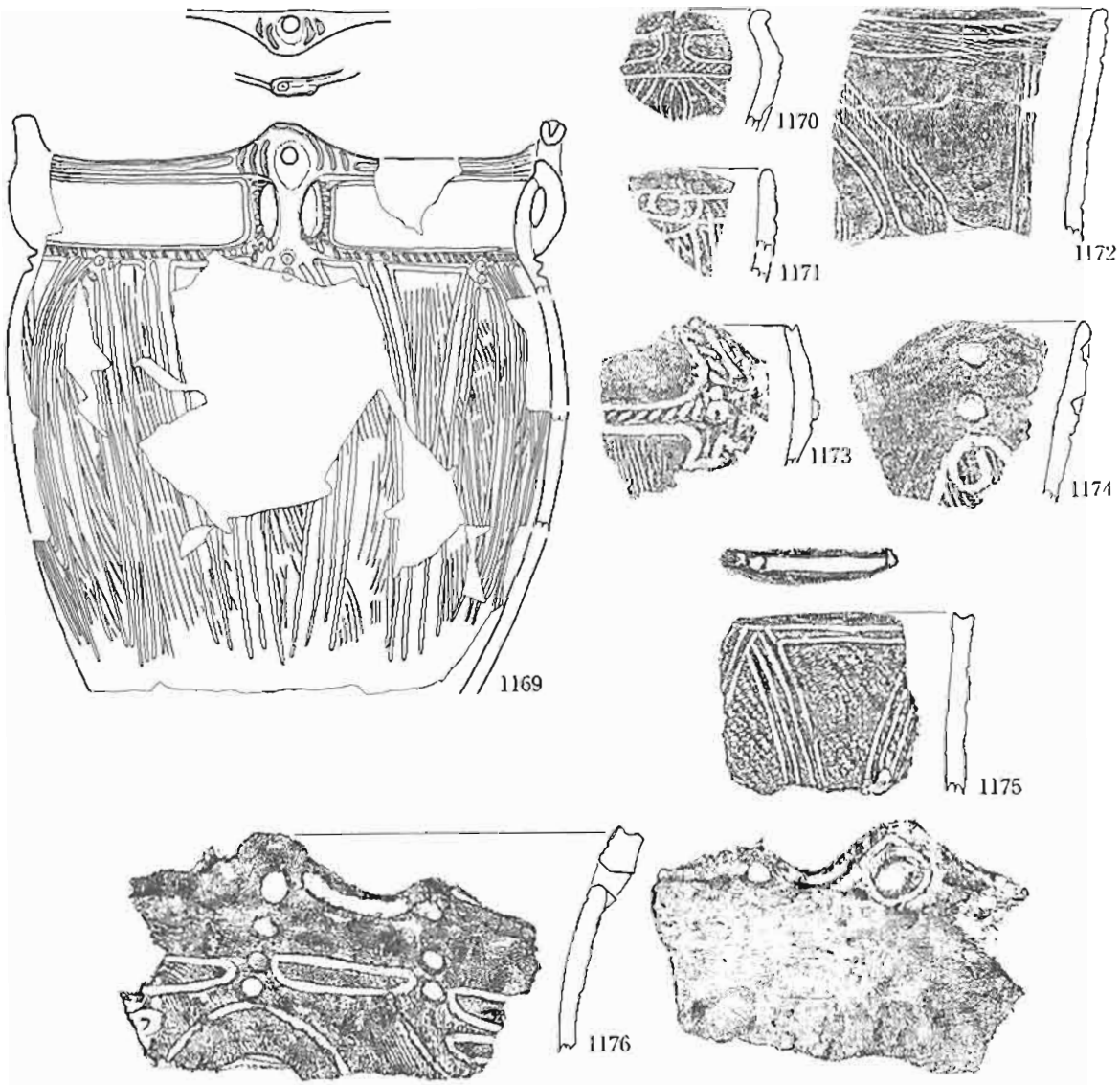


第107図　Ⅵ－１（２）・Ⅵ－２・Ⅶ－１（１）類

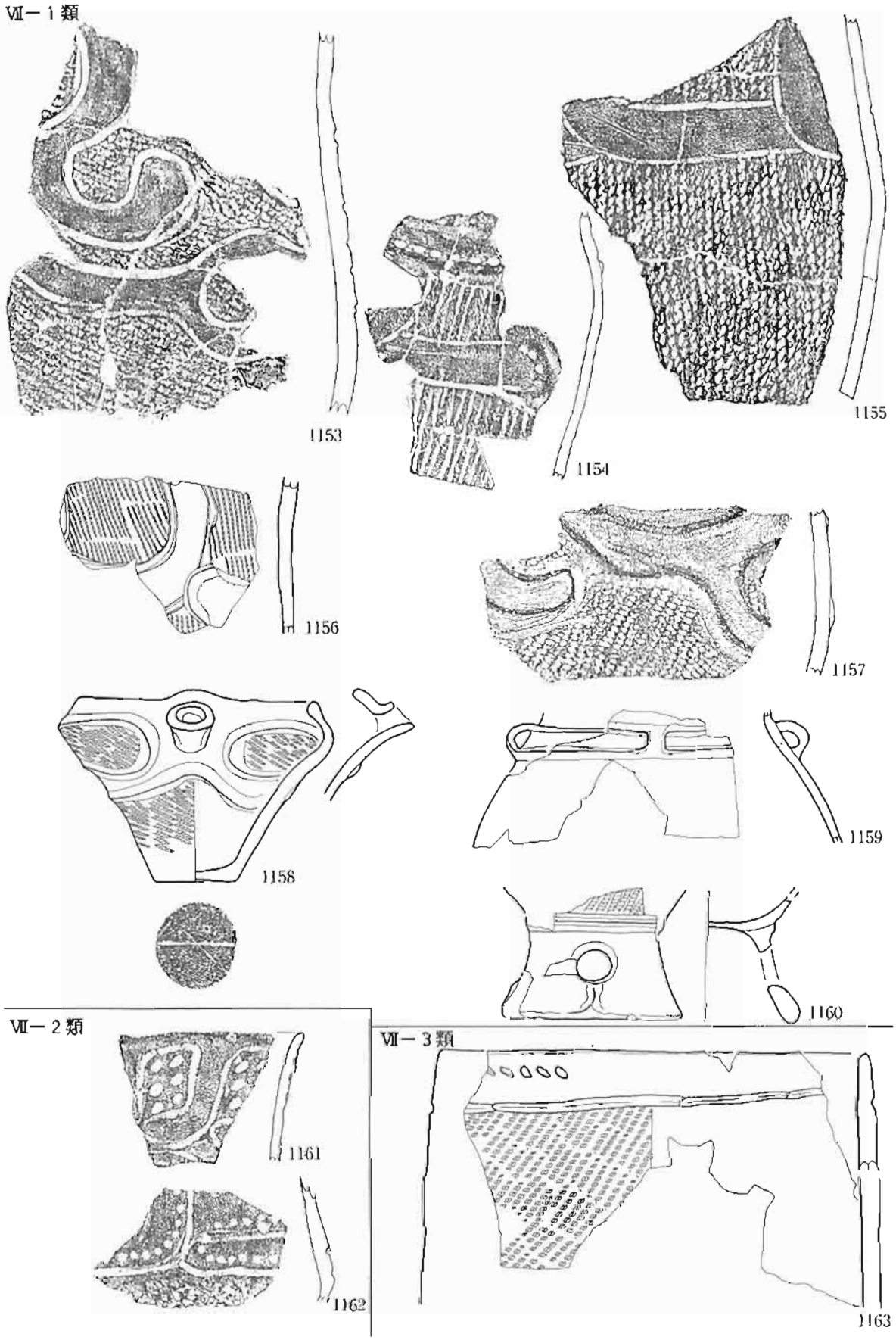


Ⅷ－１類

Ⅷ－２類

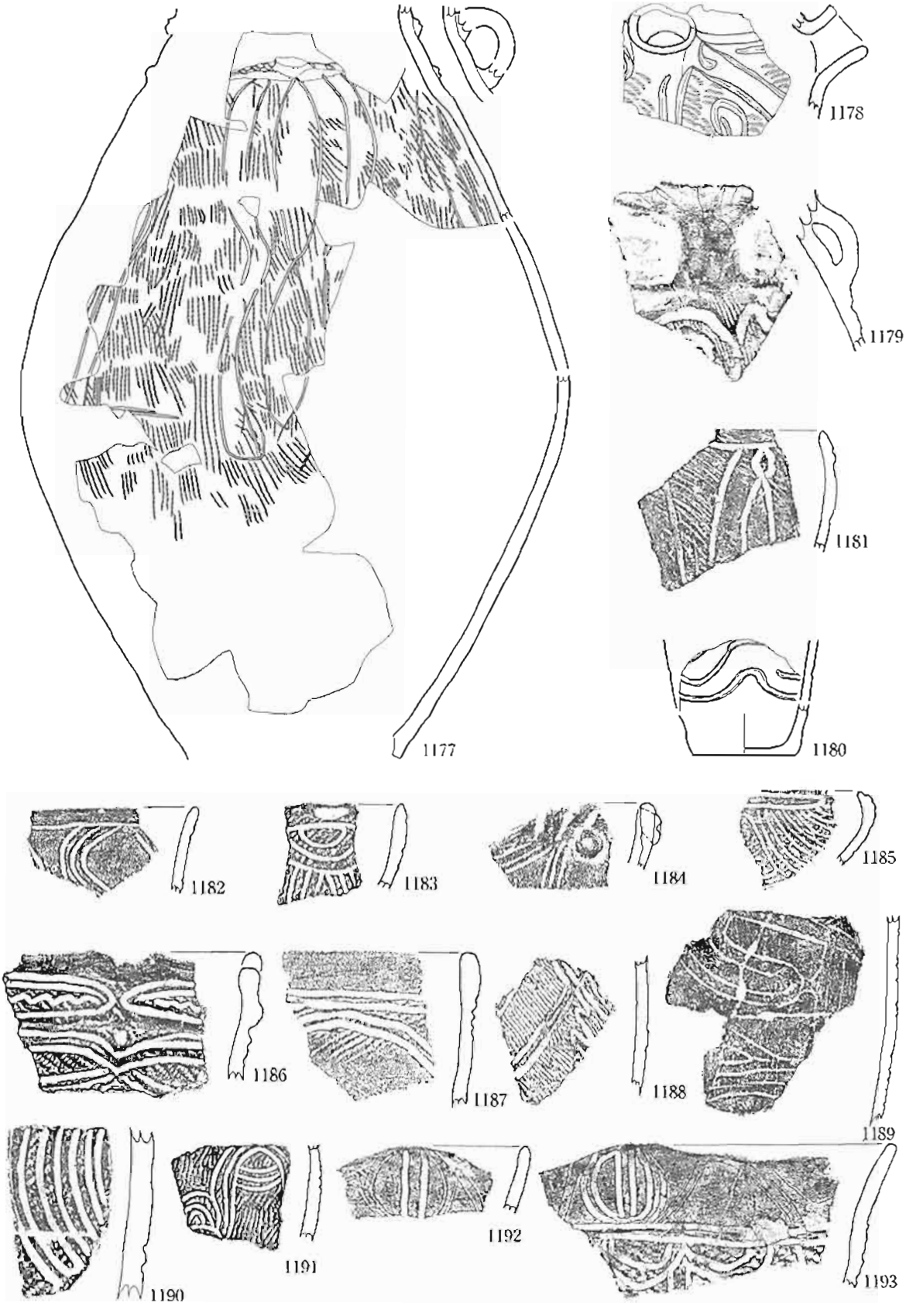


第109図　Ⅷ－１・Ⅷ－２(1)類



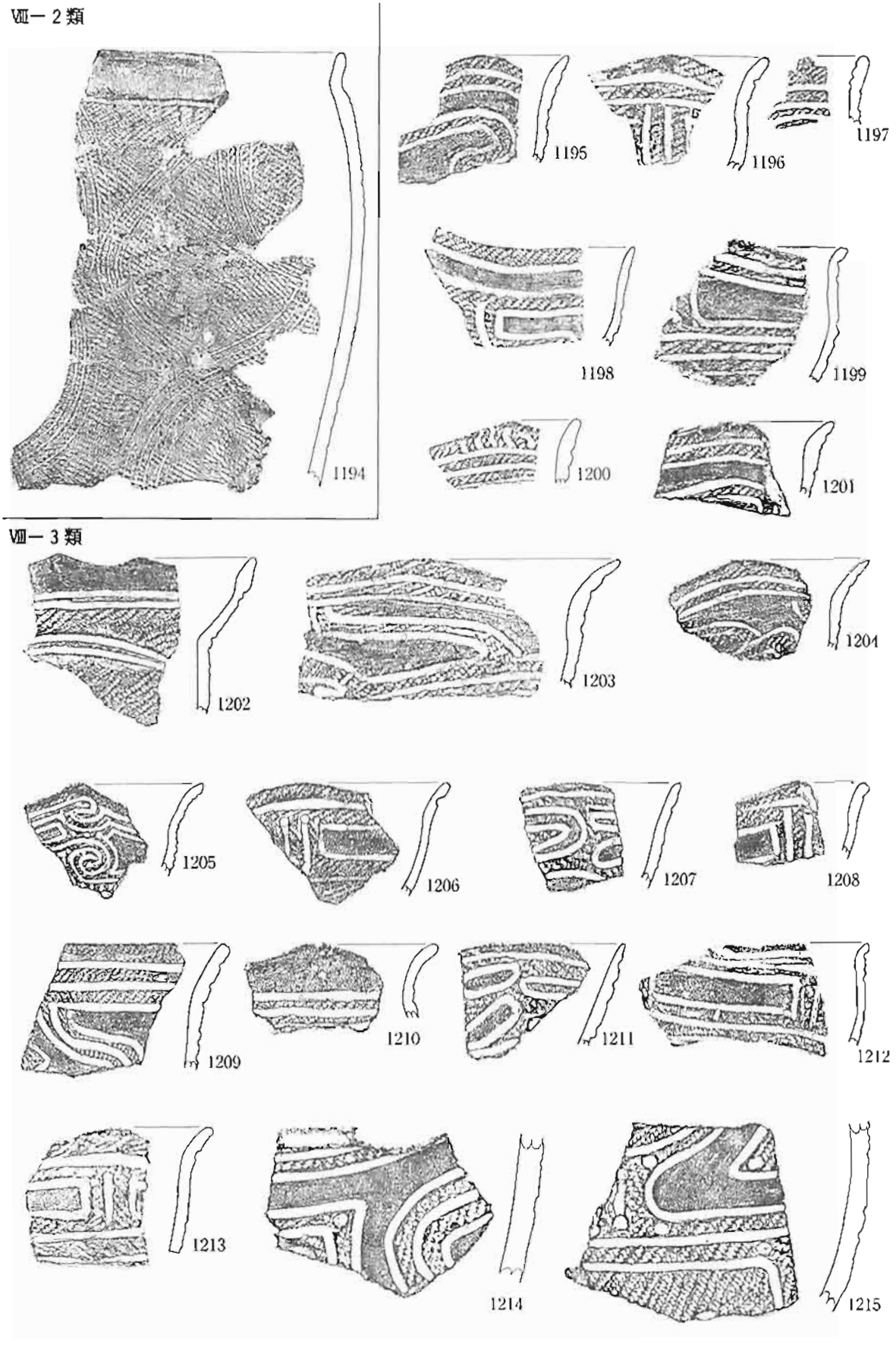
第108図　Ⅶ－１(２)・Ⅶ－２・Ⅶ－３類

Ⅷ－２類



第110図　Ⅷ－２(２)類

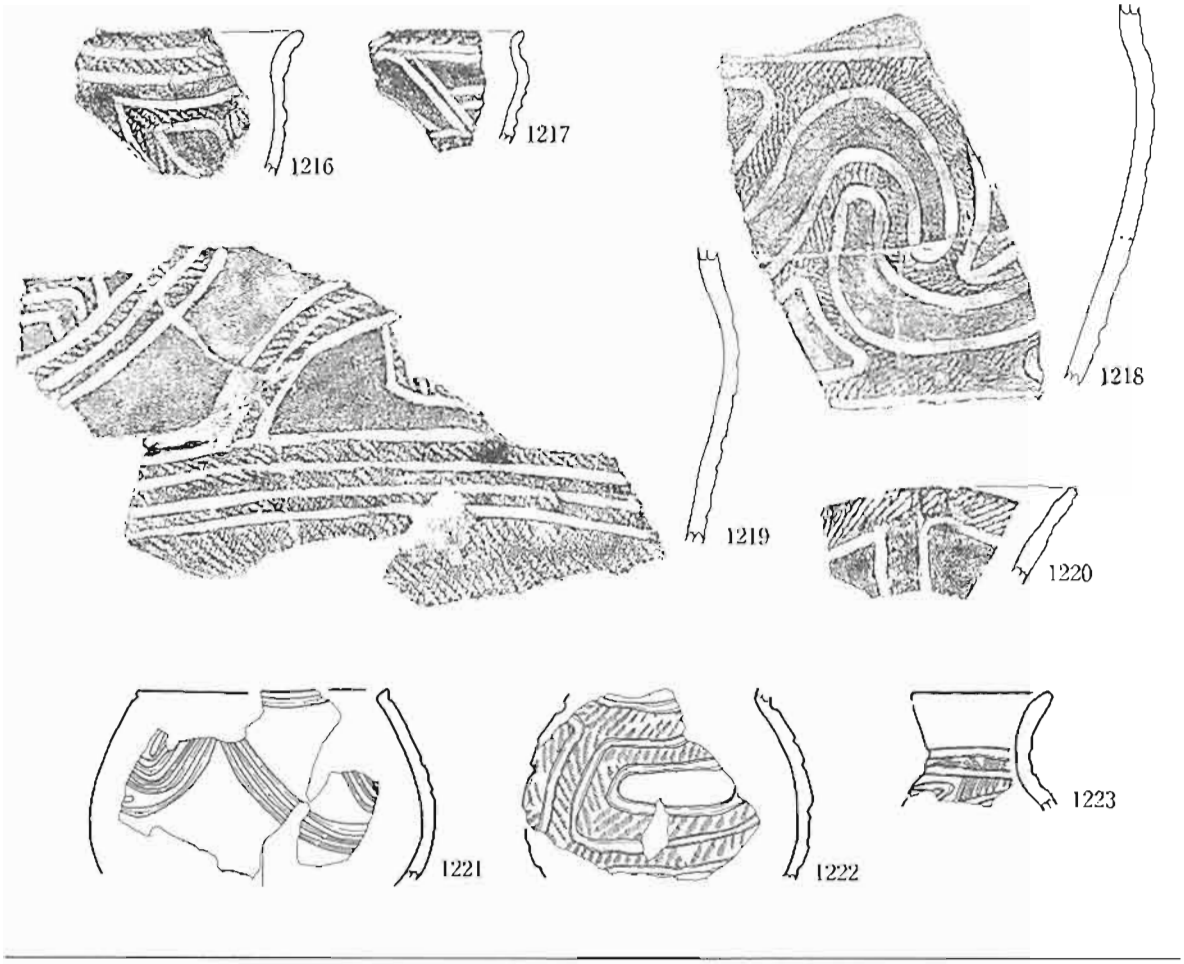
Ⅷ－２類



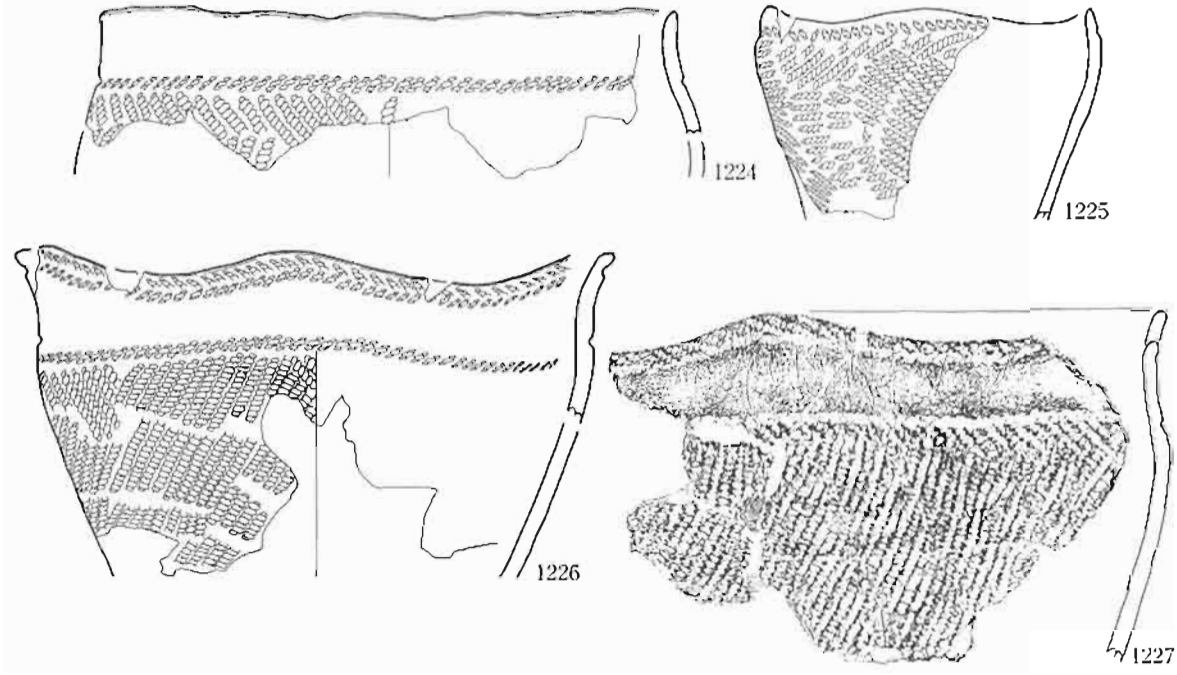
Ⅷ－３類

第111図　Ⅷ－２(３)・Ⅷ－３(１)類

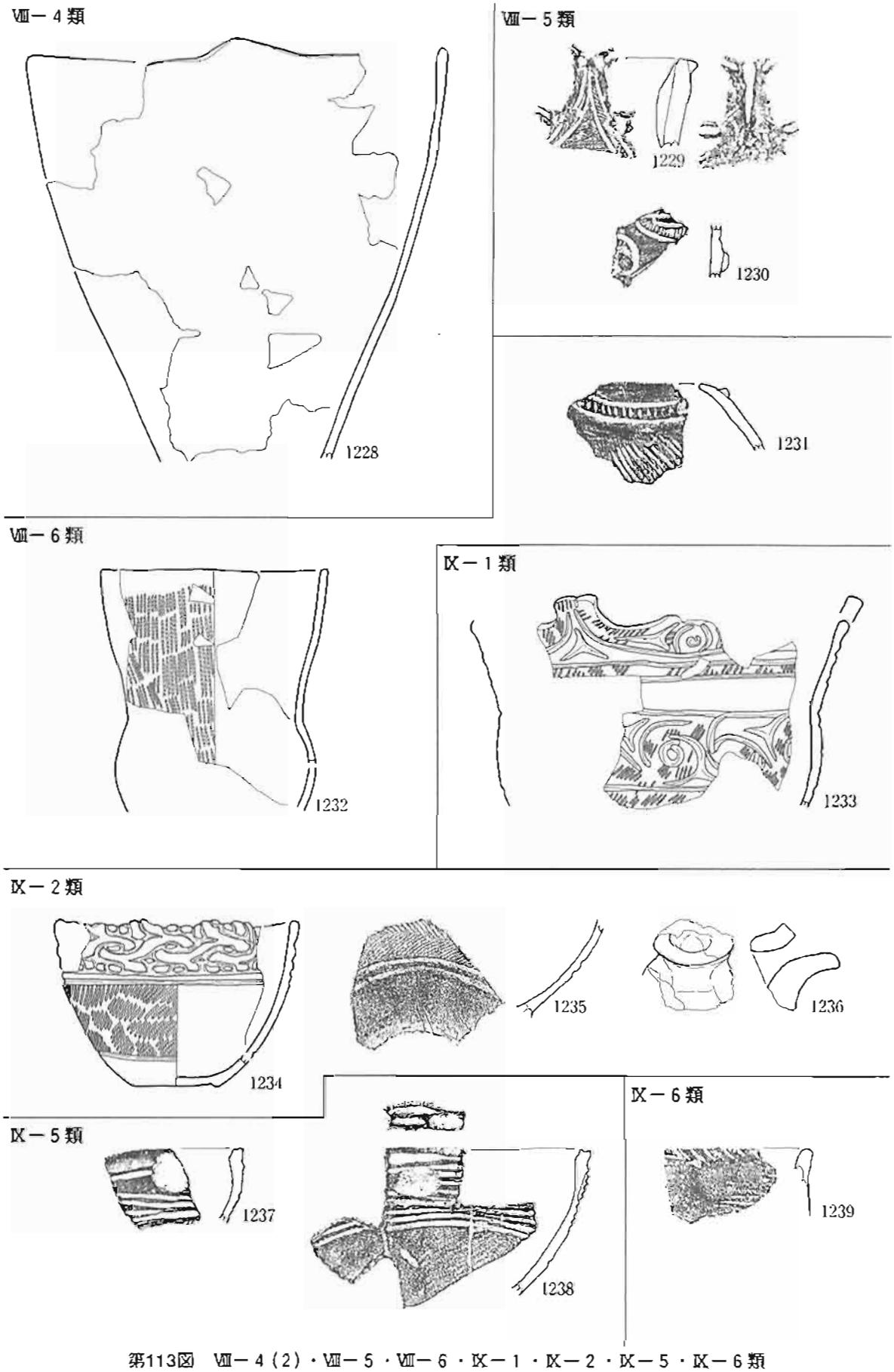
Ⅷ－3類



Ⅷ－4類

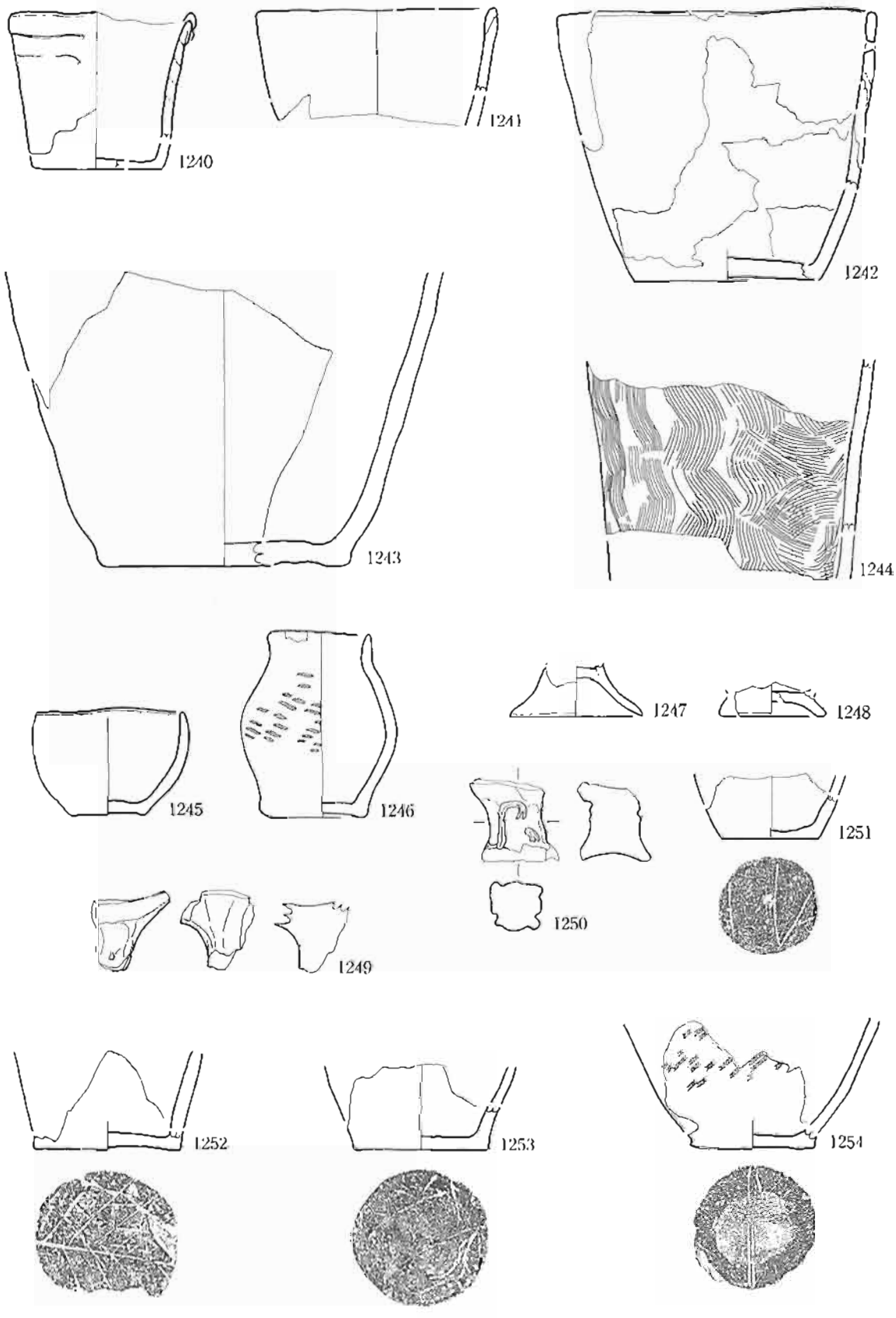


第112図　Ⅷ－3（2）・Ⅷ－4（1）類



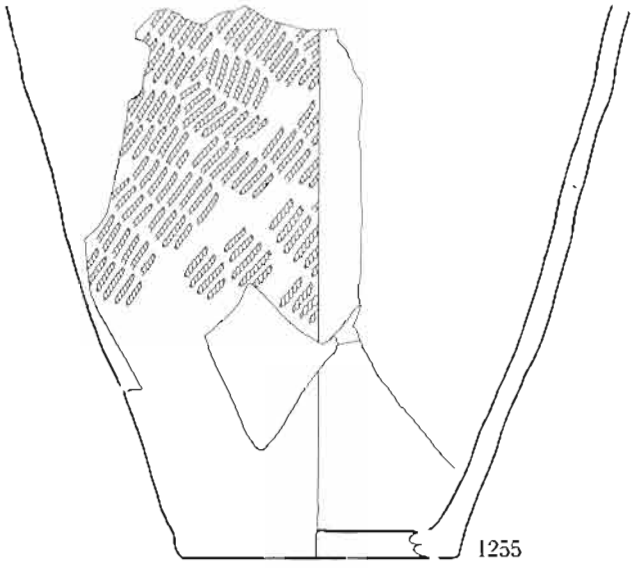
第113図　Ⅷ－4(2)・Ⅷ－5・Ⅷ－6・Ⅸ－1・Ⅸ－2・Ⅸ－5・Ⅸ－6類

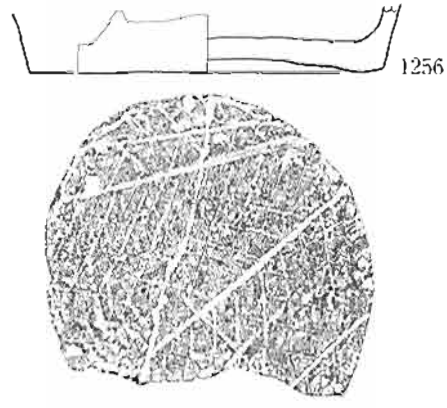
X類

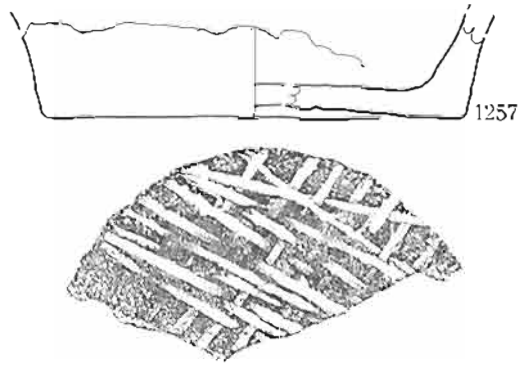

1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254

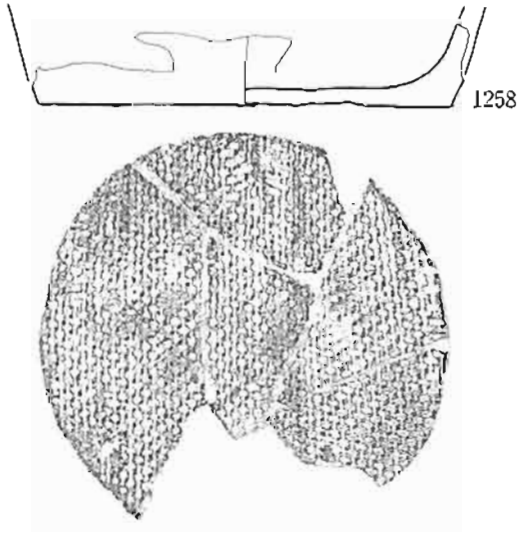
第114図　X（1）類

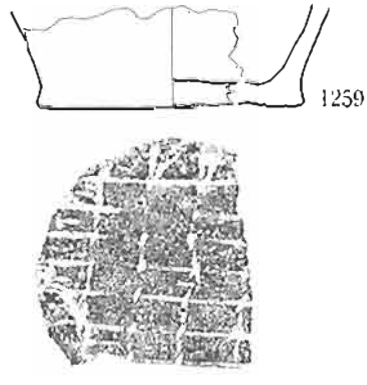
X類



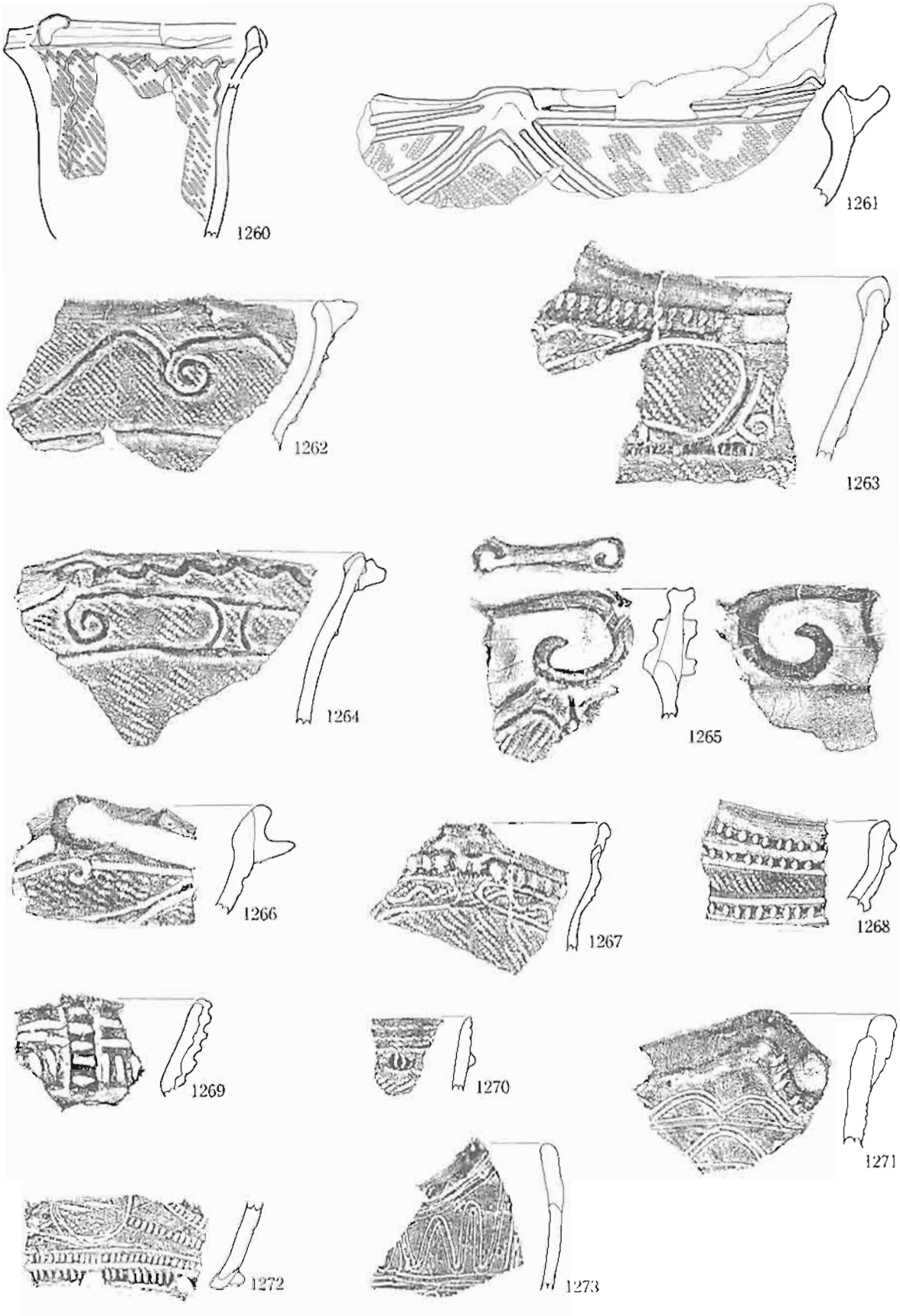




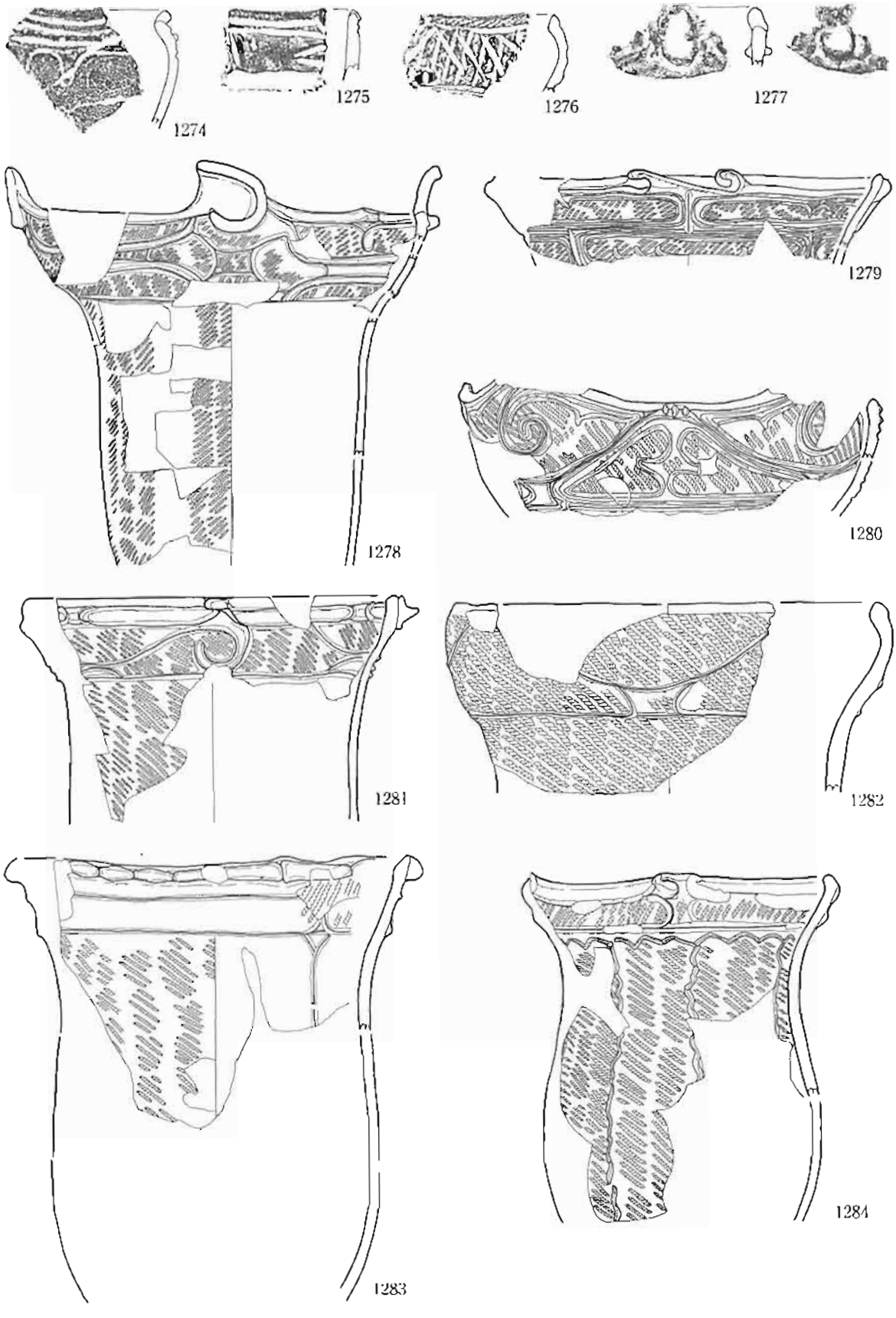




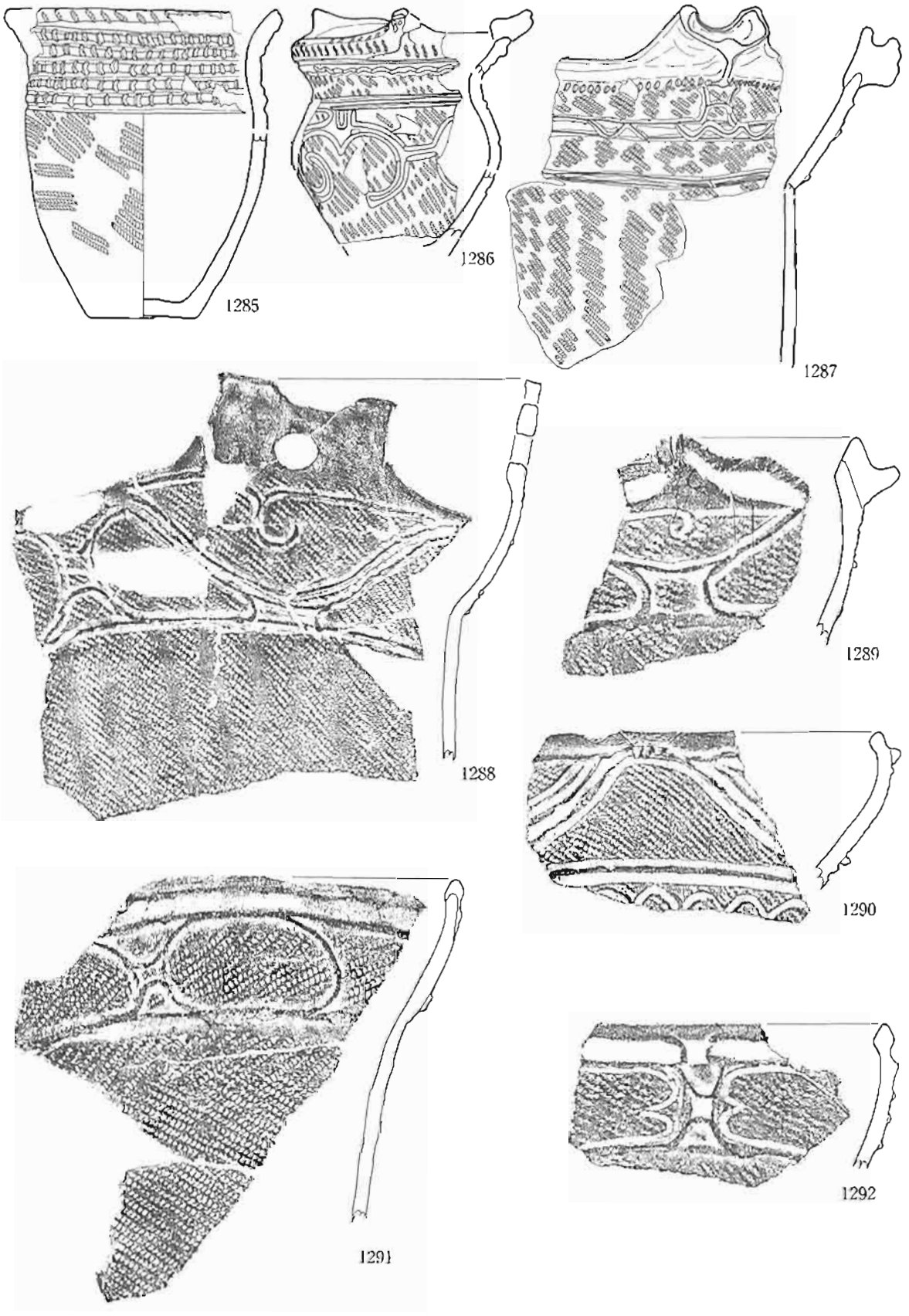
第115図　X（2）類



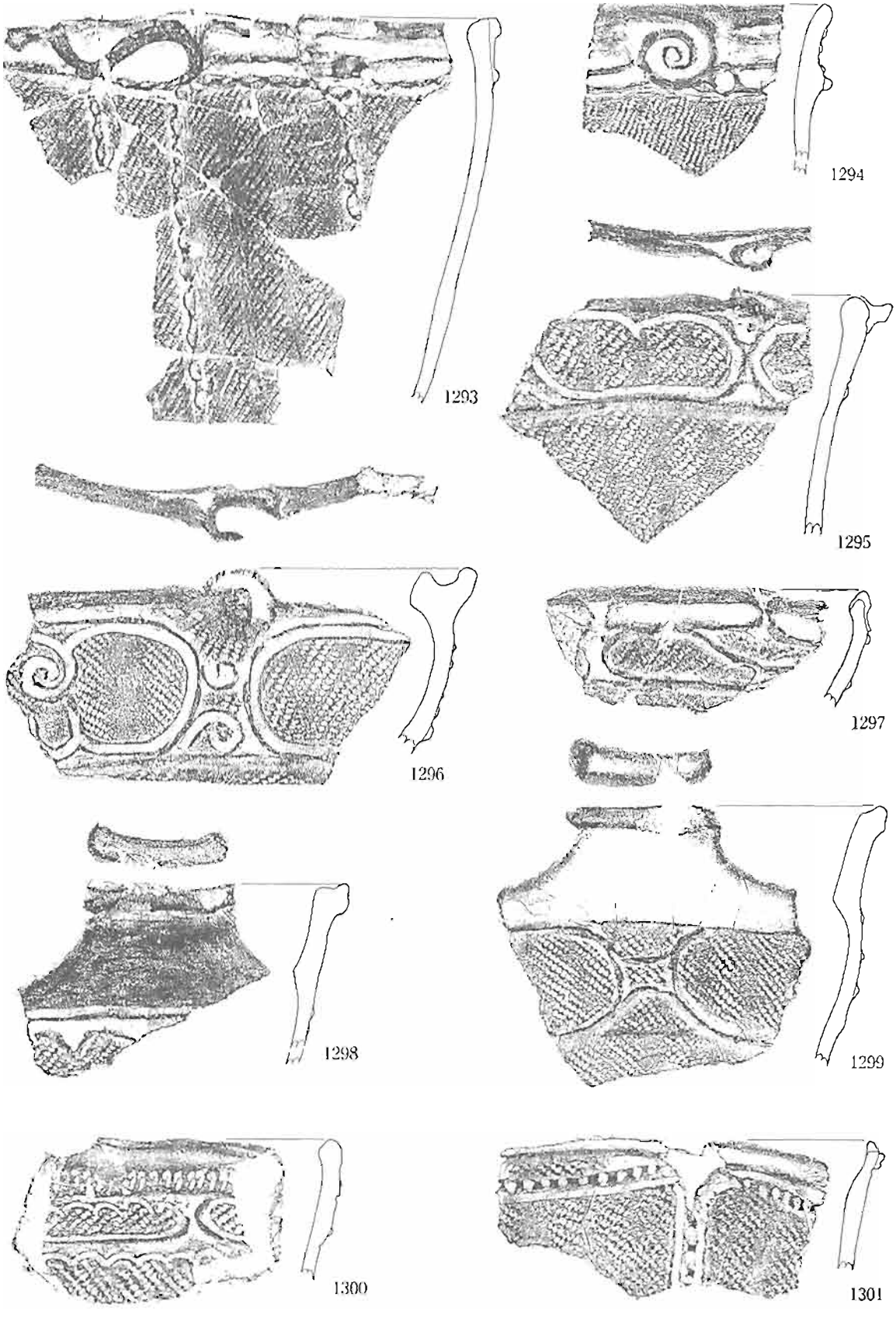
第116図　1層出土遺物（1）



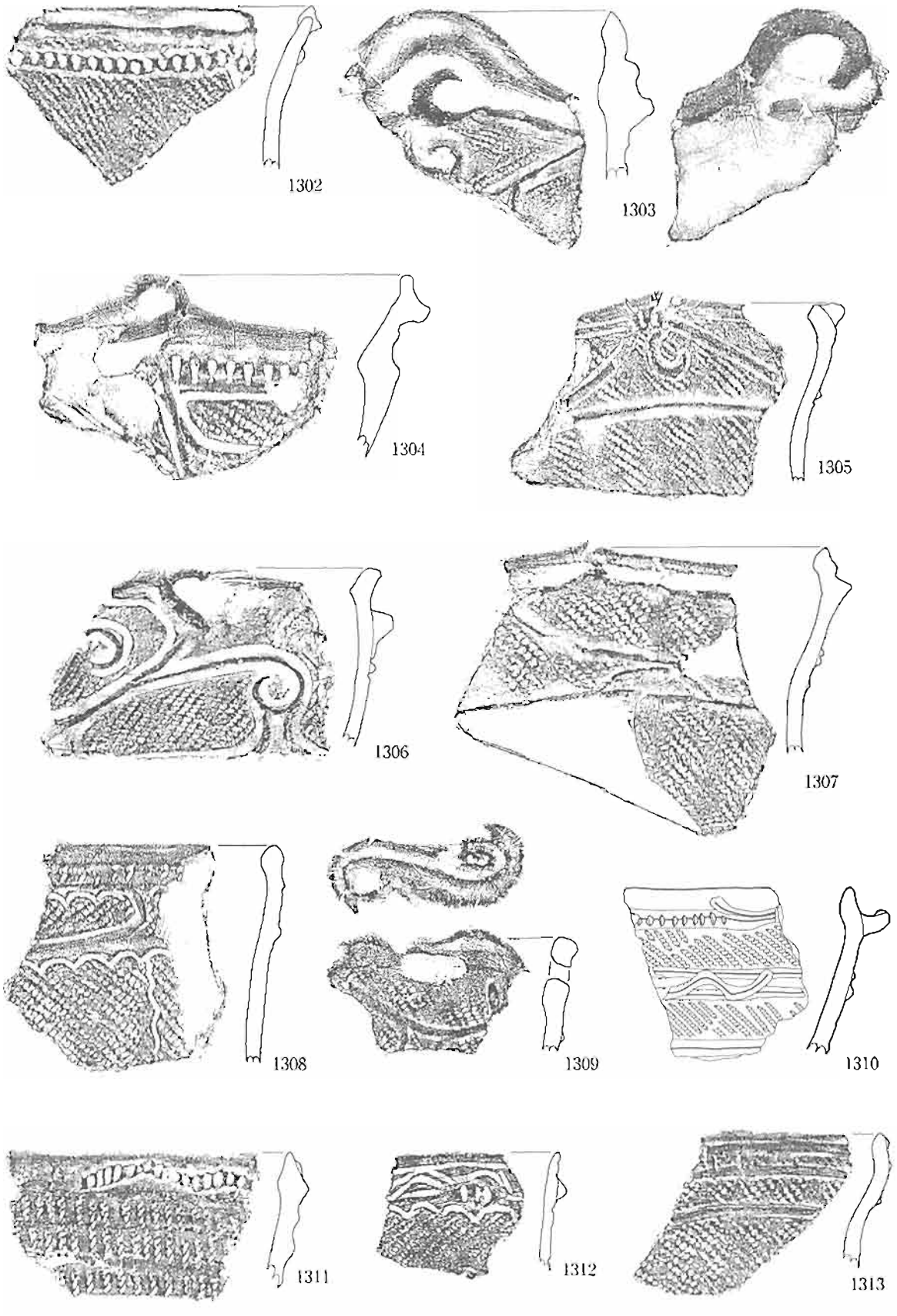
第117図　1層出土遺物(2)



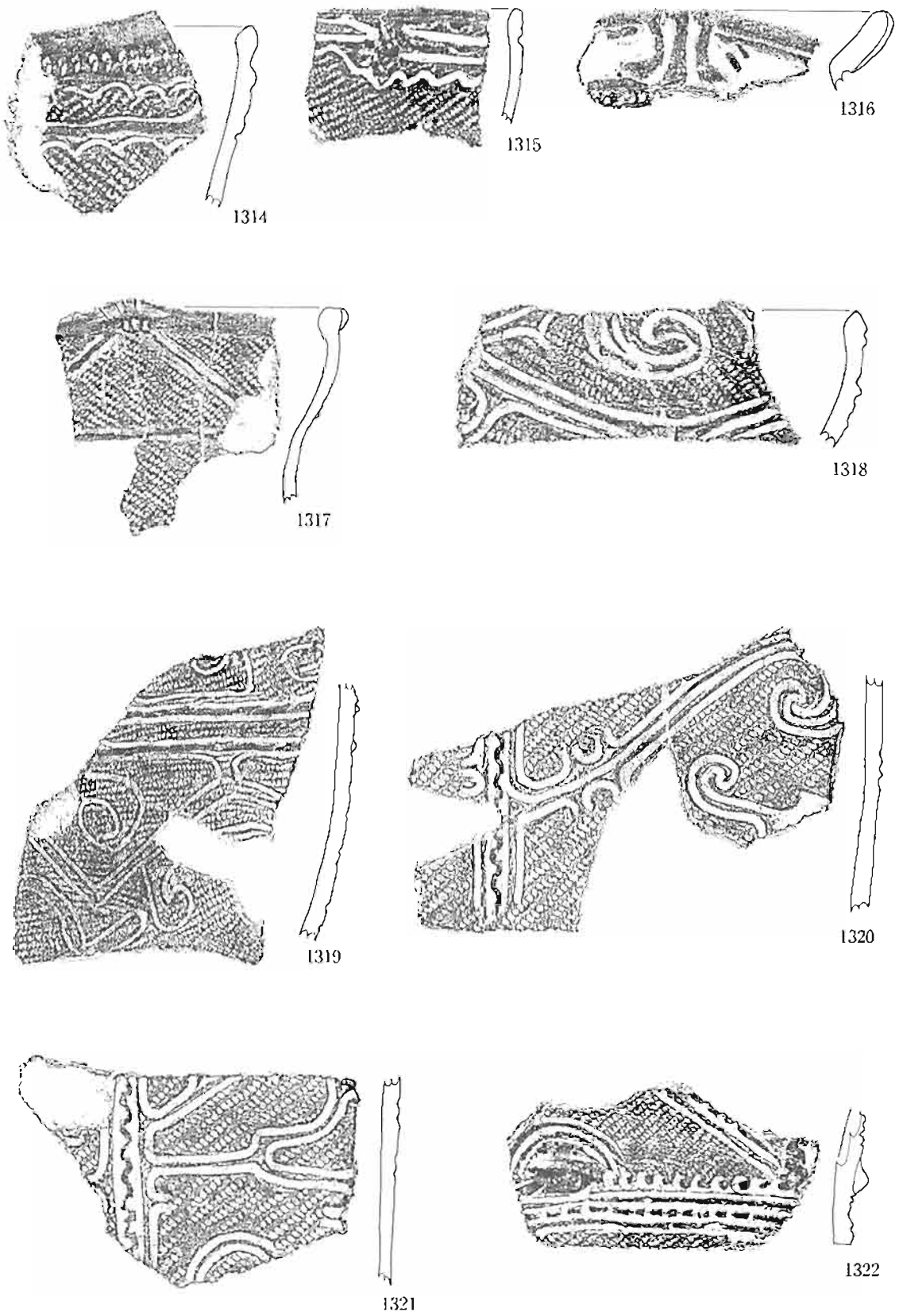
第118図　1層出土遺物(3)



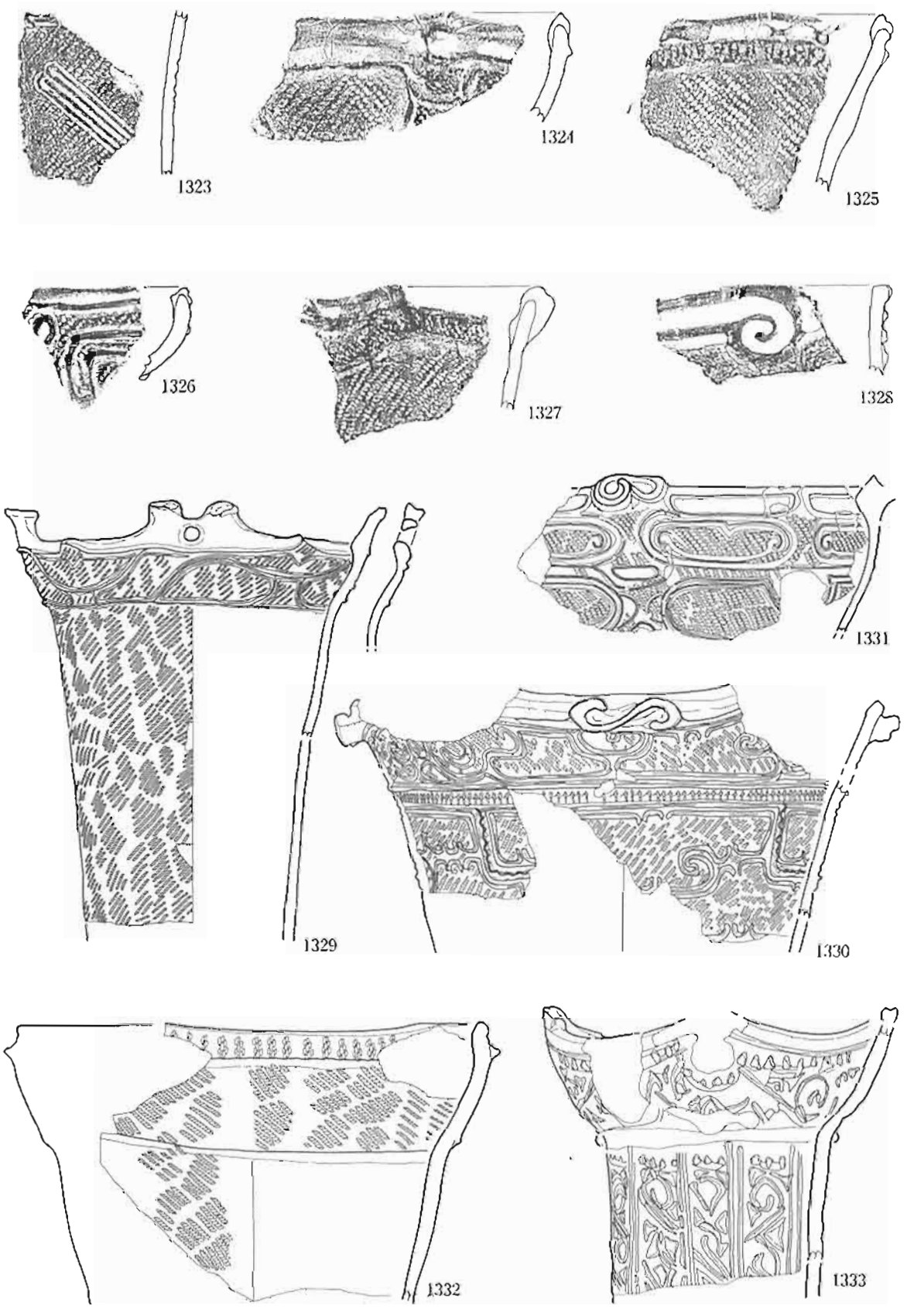
第119図　1層出土遺物（4）



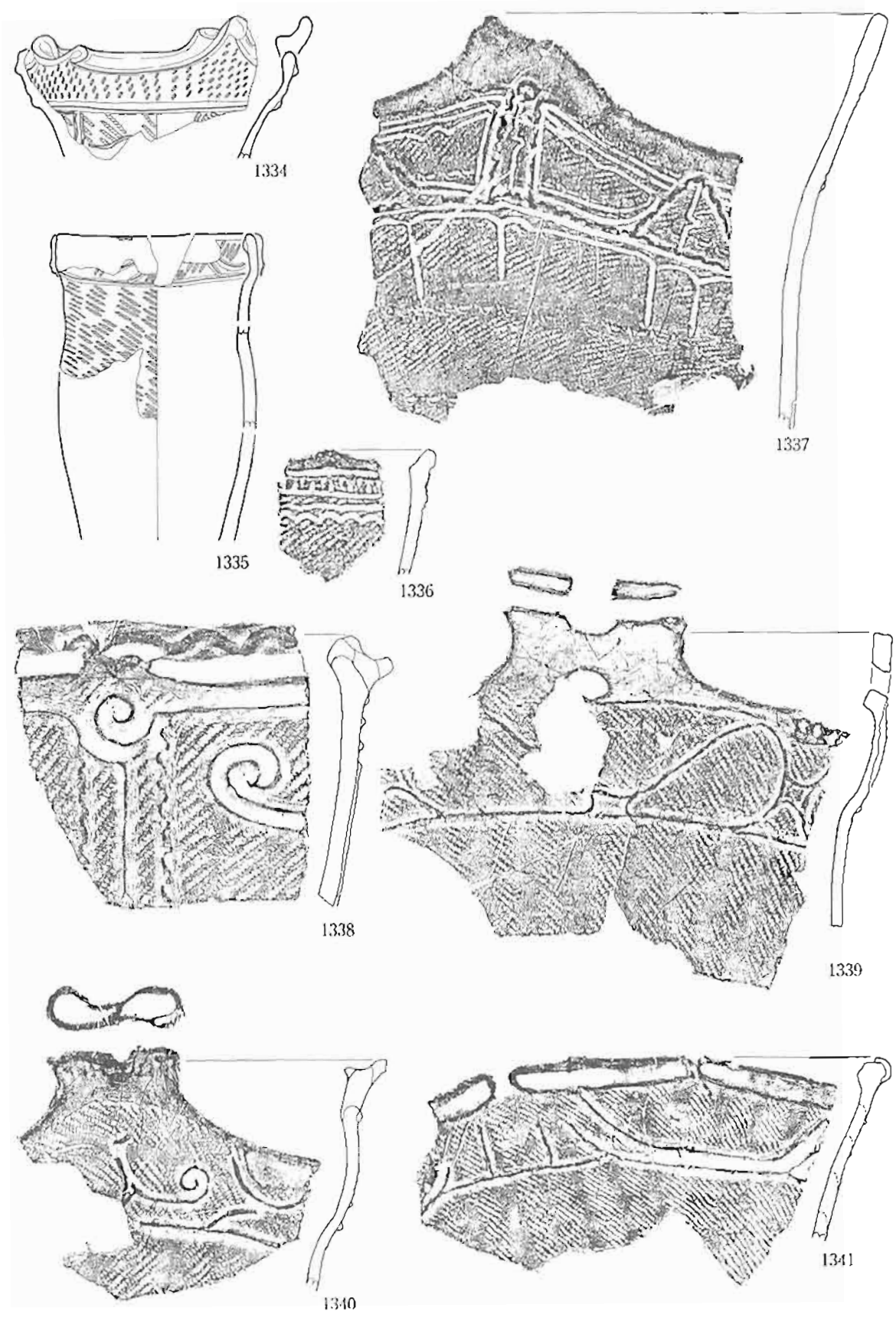
第120図　1層出土遺物（5）



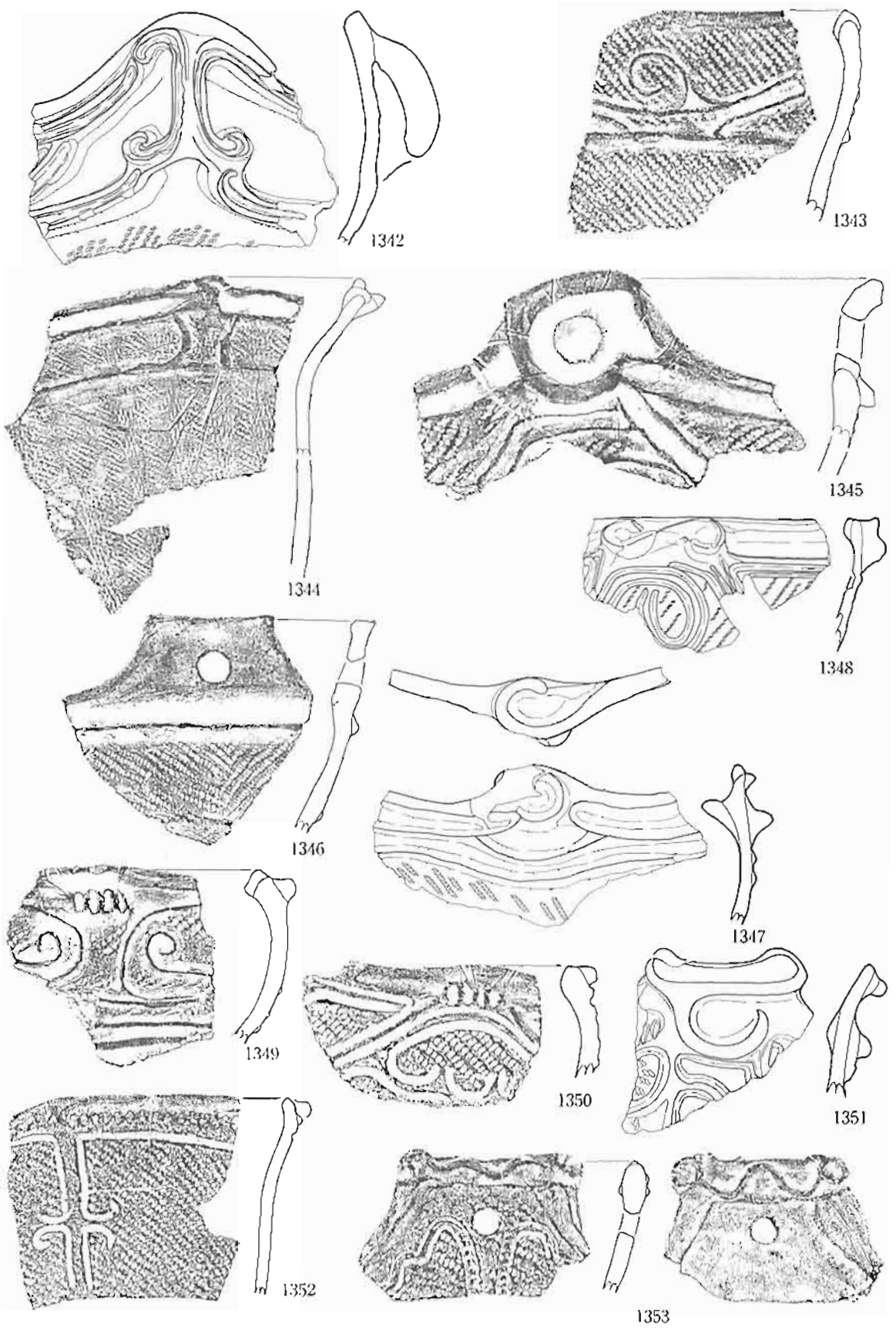
第121図　1層出土遺物(6)



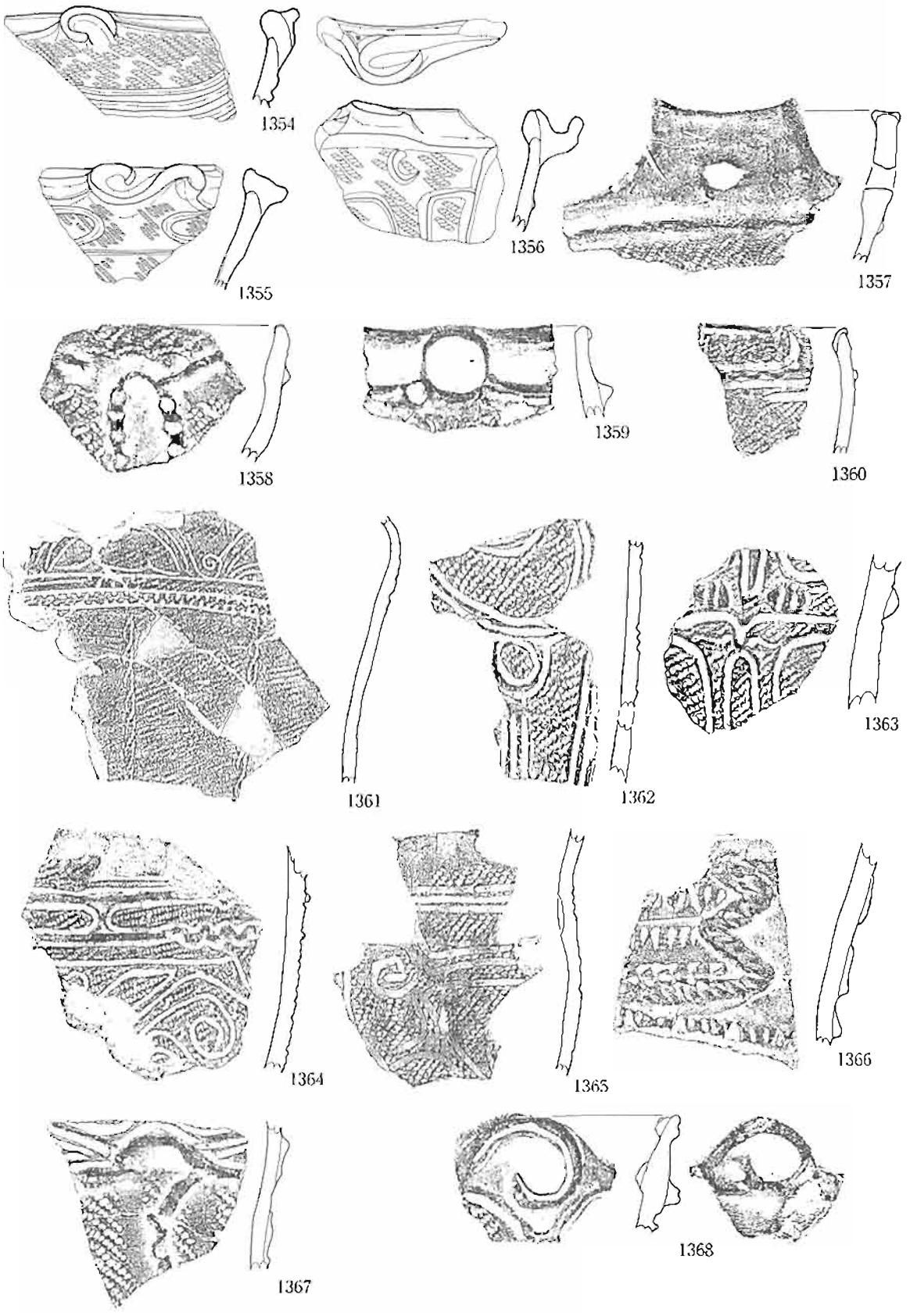
第122図　1層出土遺物（7）



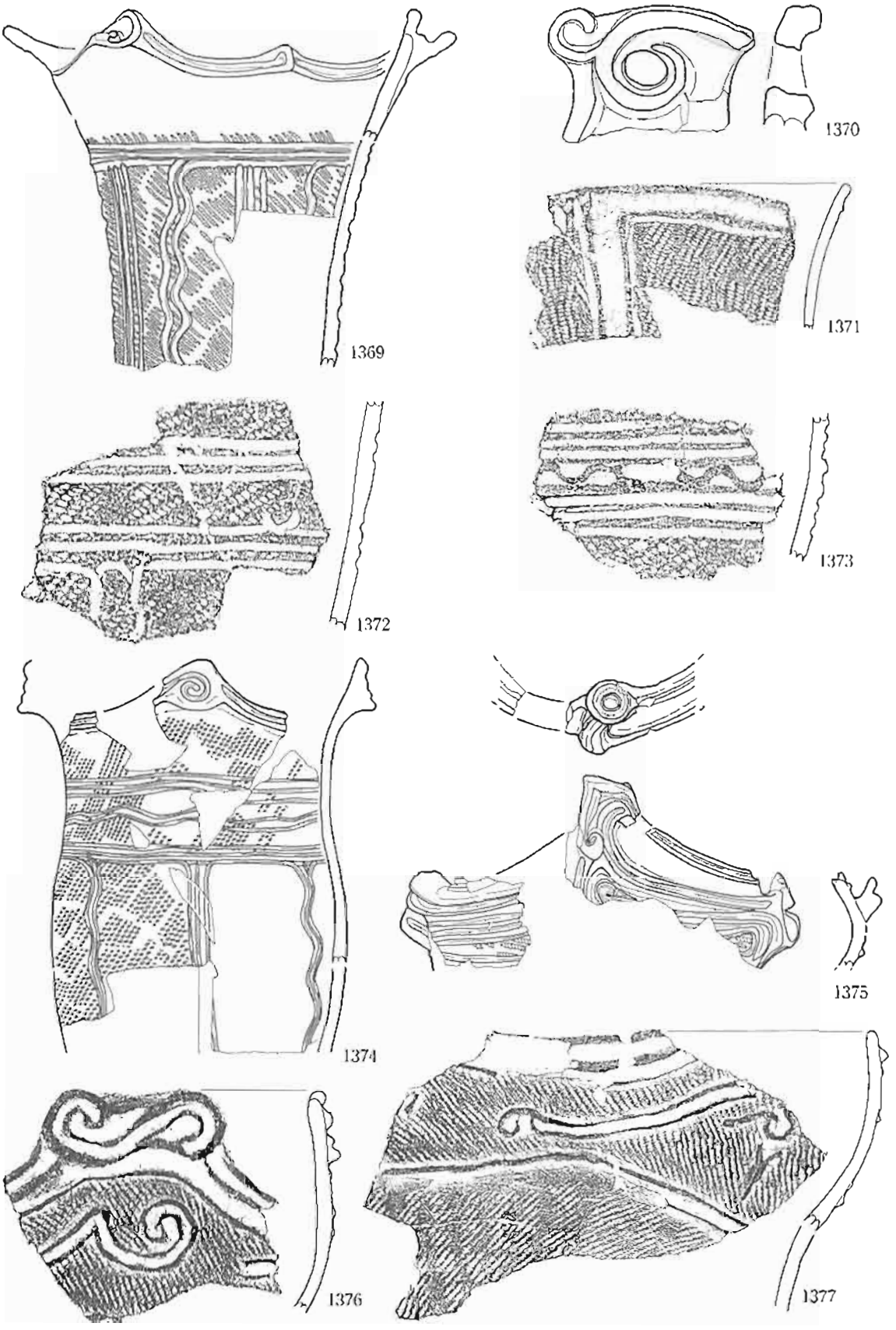
第123図　Ⅰ層出土遺物（8）



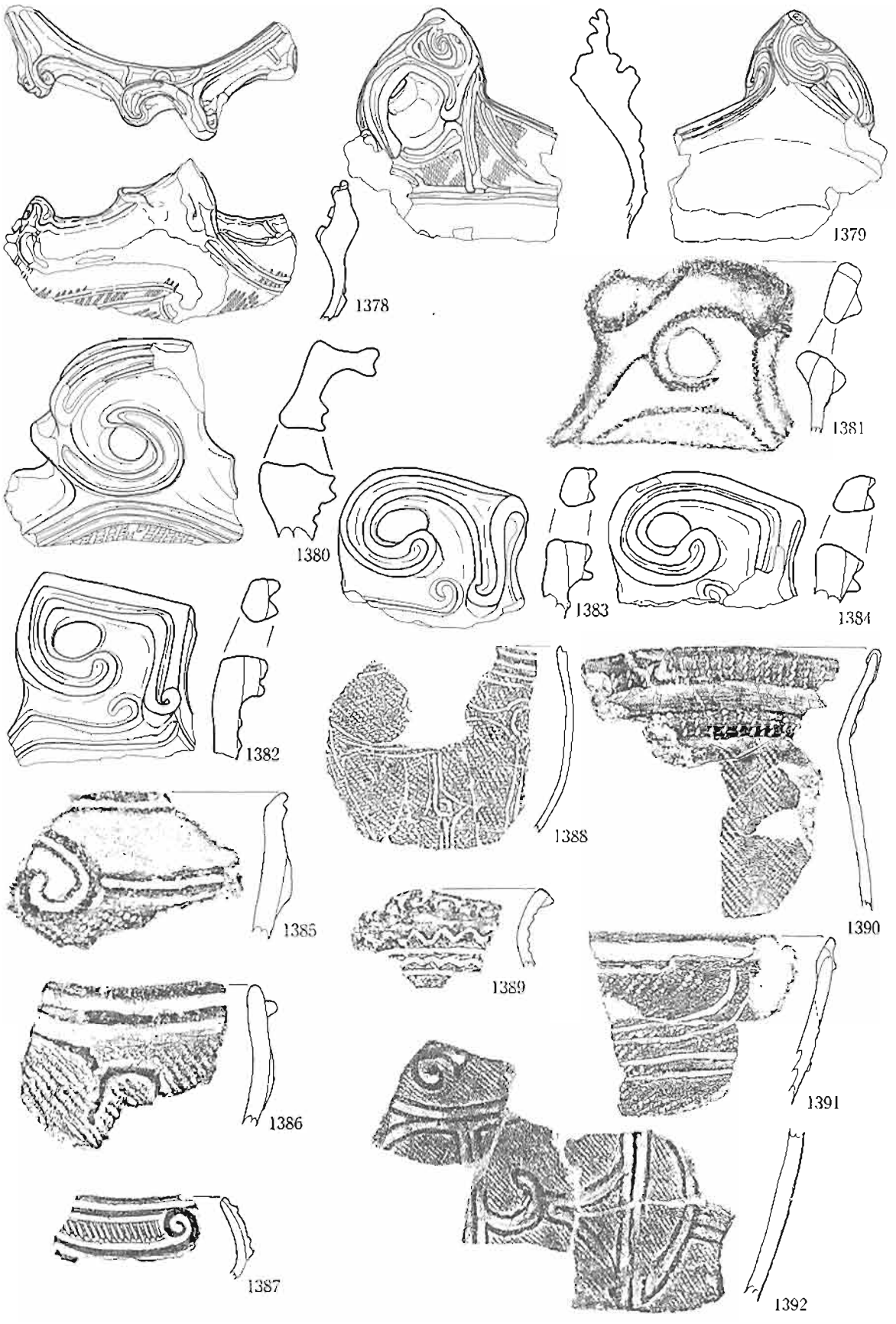
第124図　1層出土遺物(9)



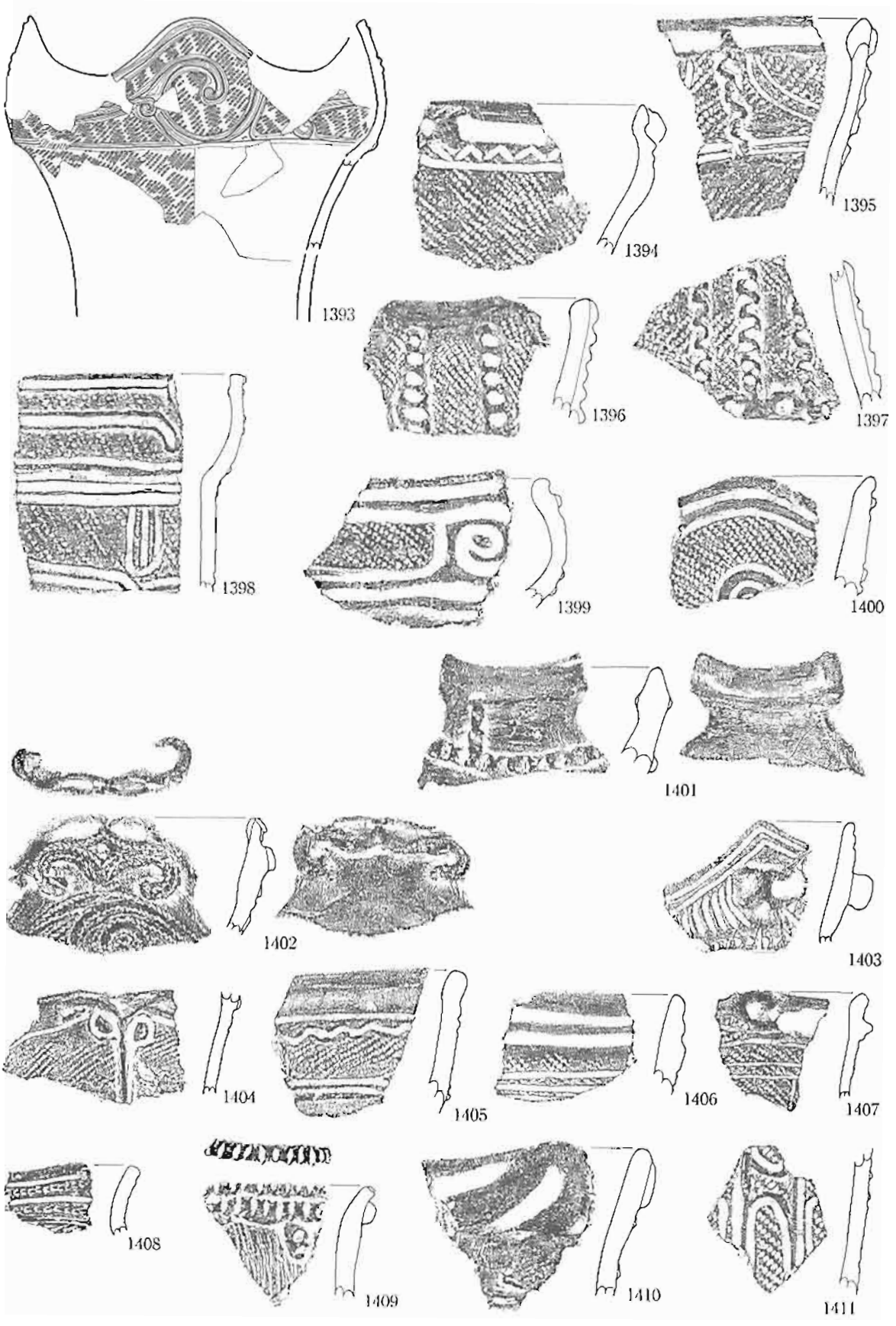
第125図　1 層出土遺物(10)



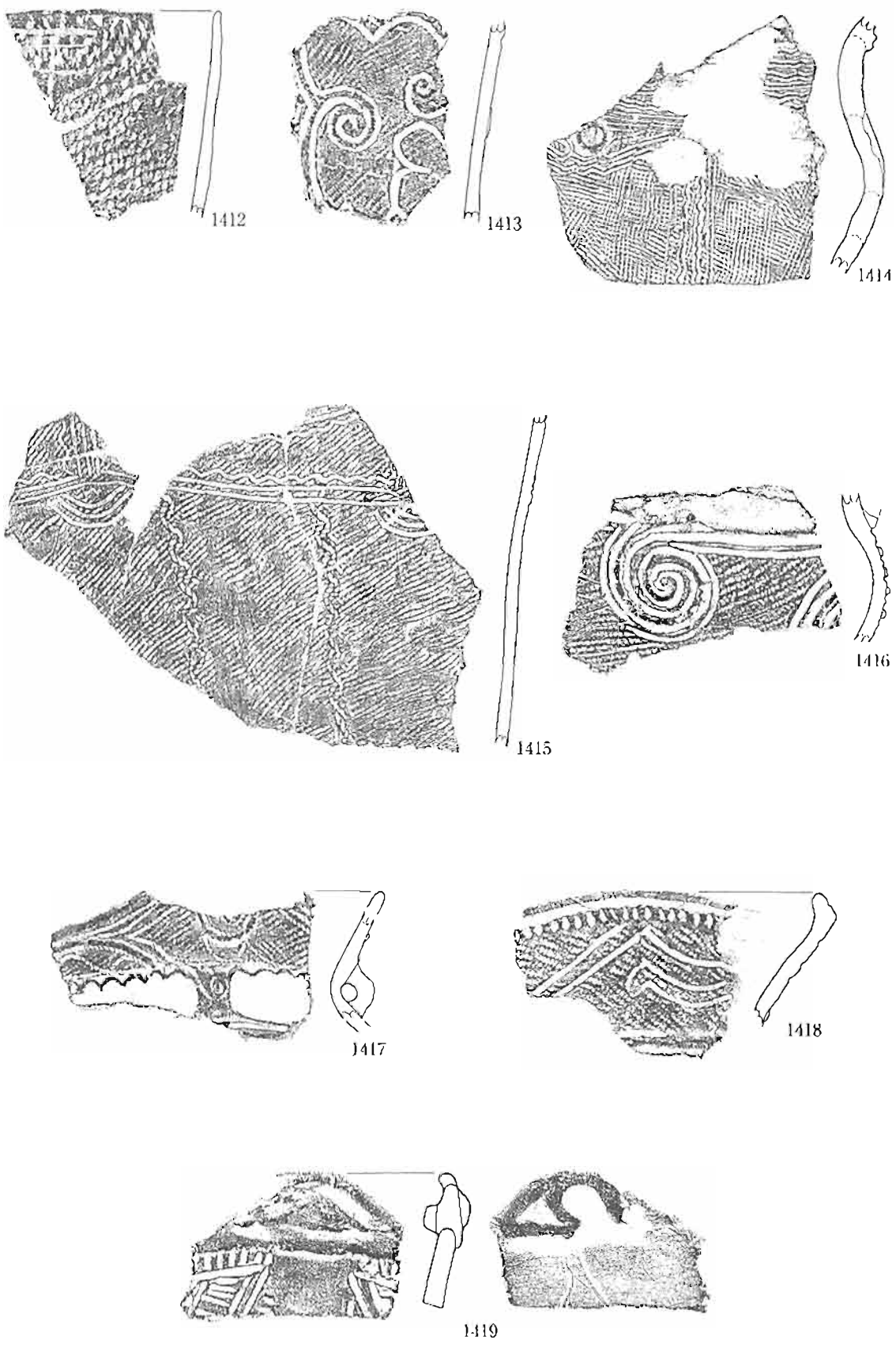
第126図　1層出土遺物(11)



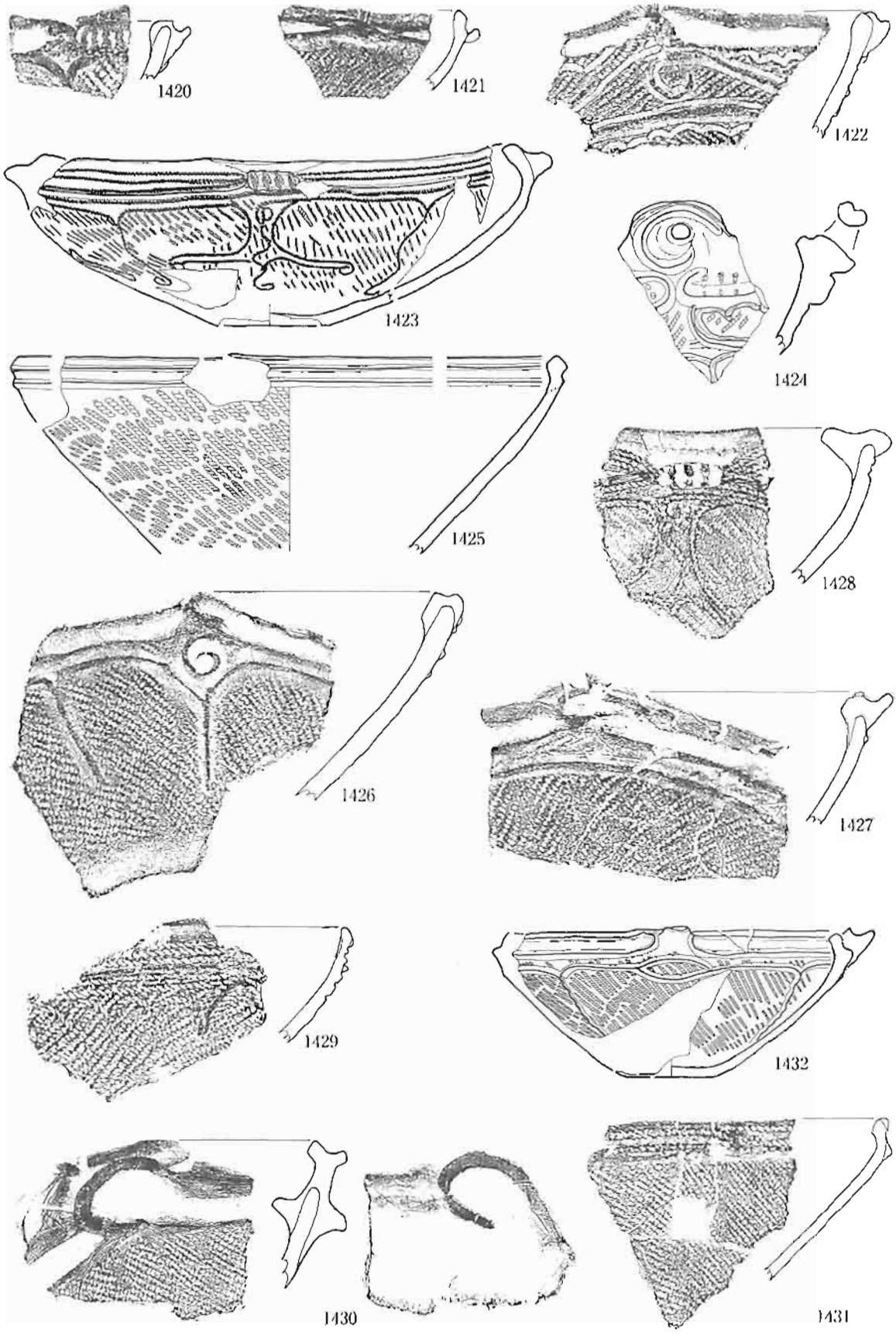
第127図　1層出土遺物(12)



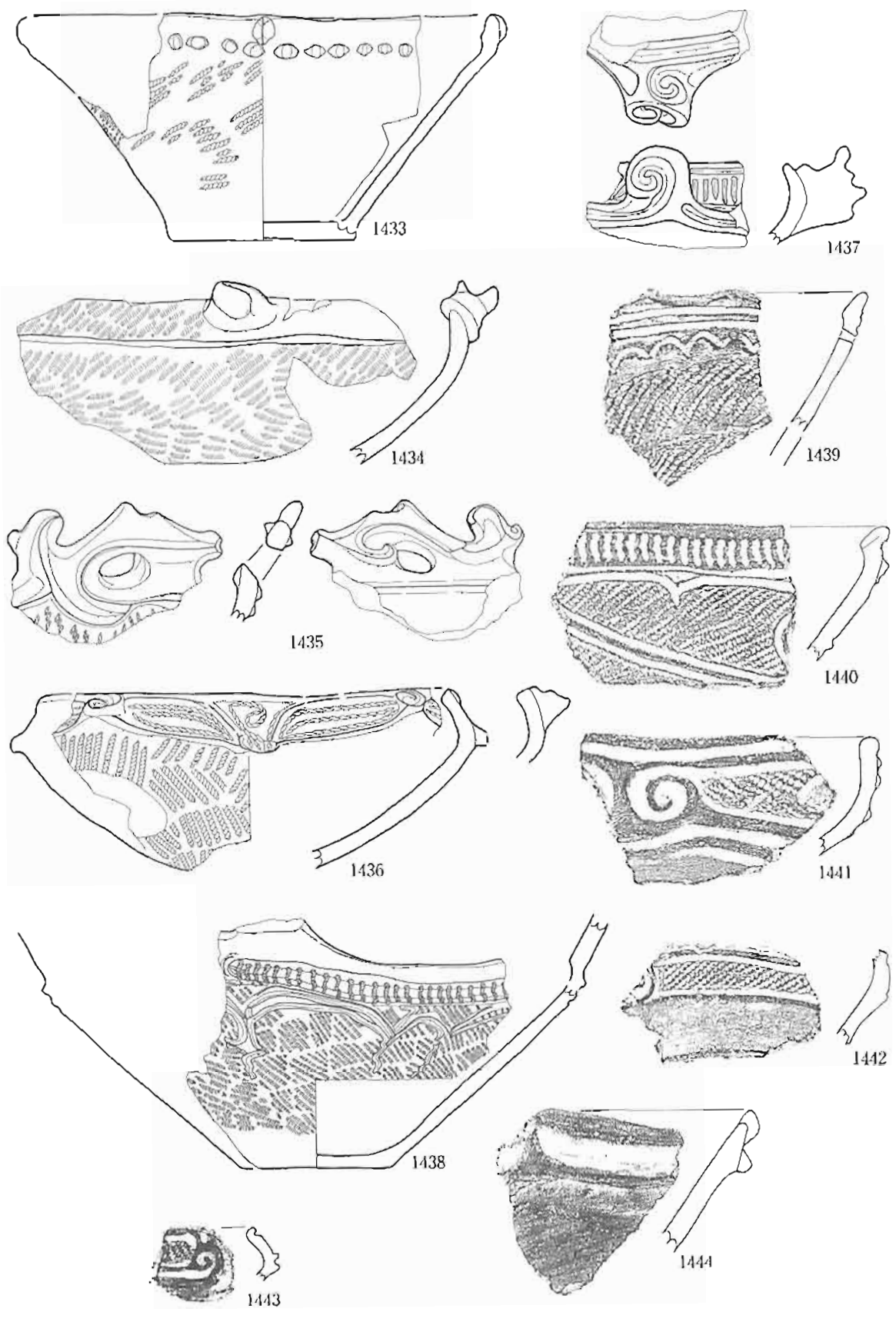
第128図　1層出土遺物(13)



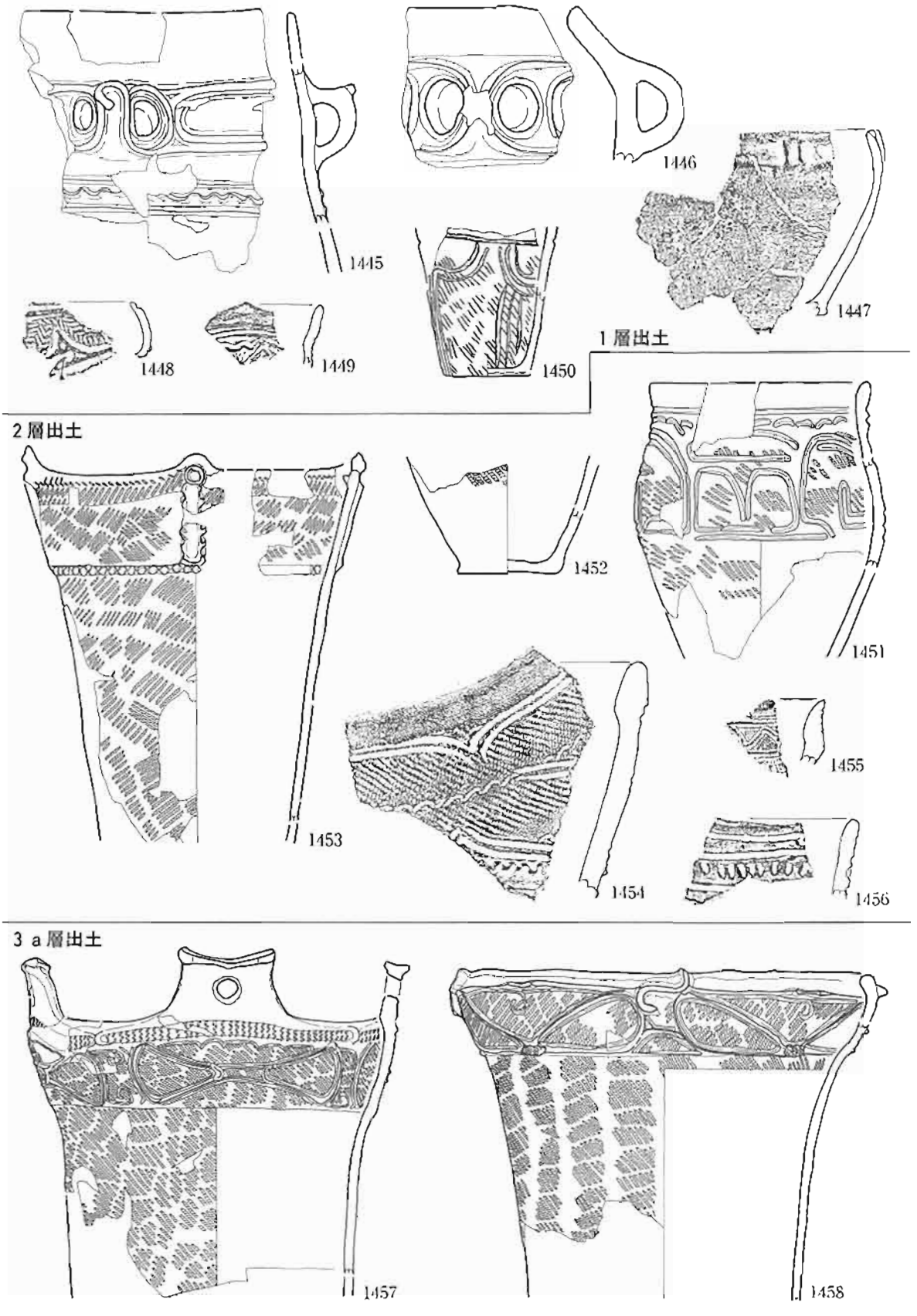
第129図　1層出土遺物(14)



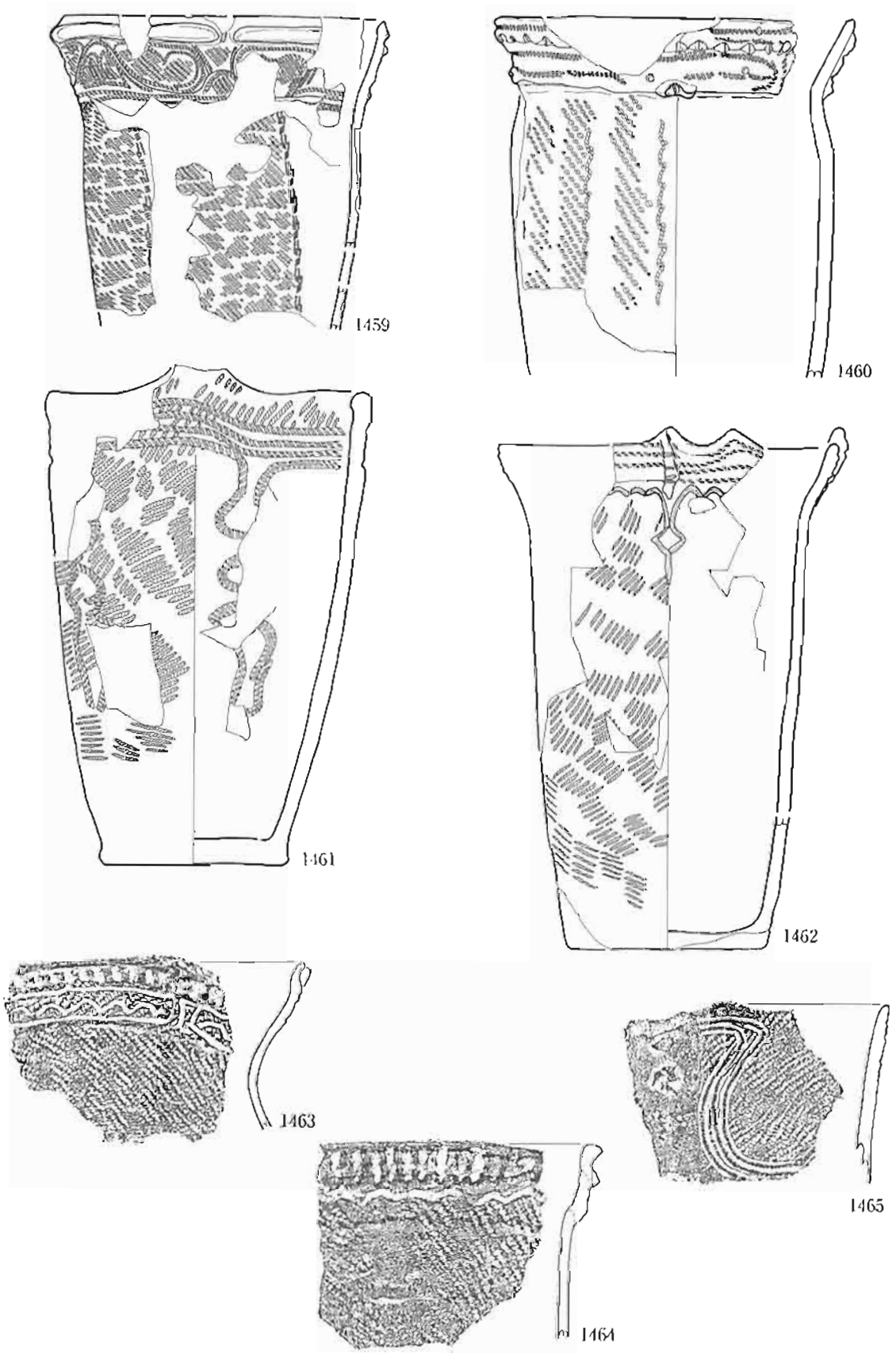
第130図　1層出土遺物(15)



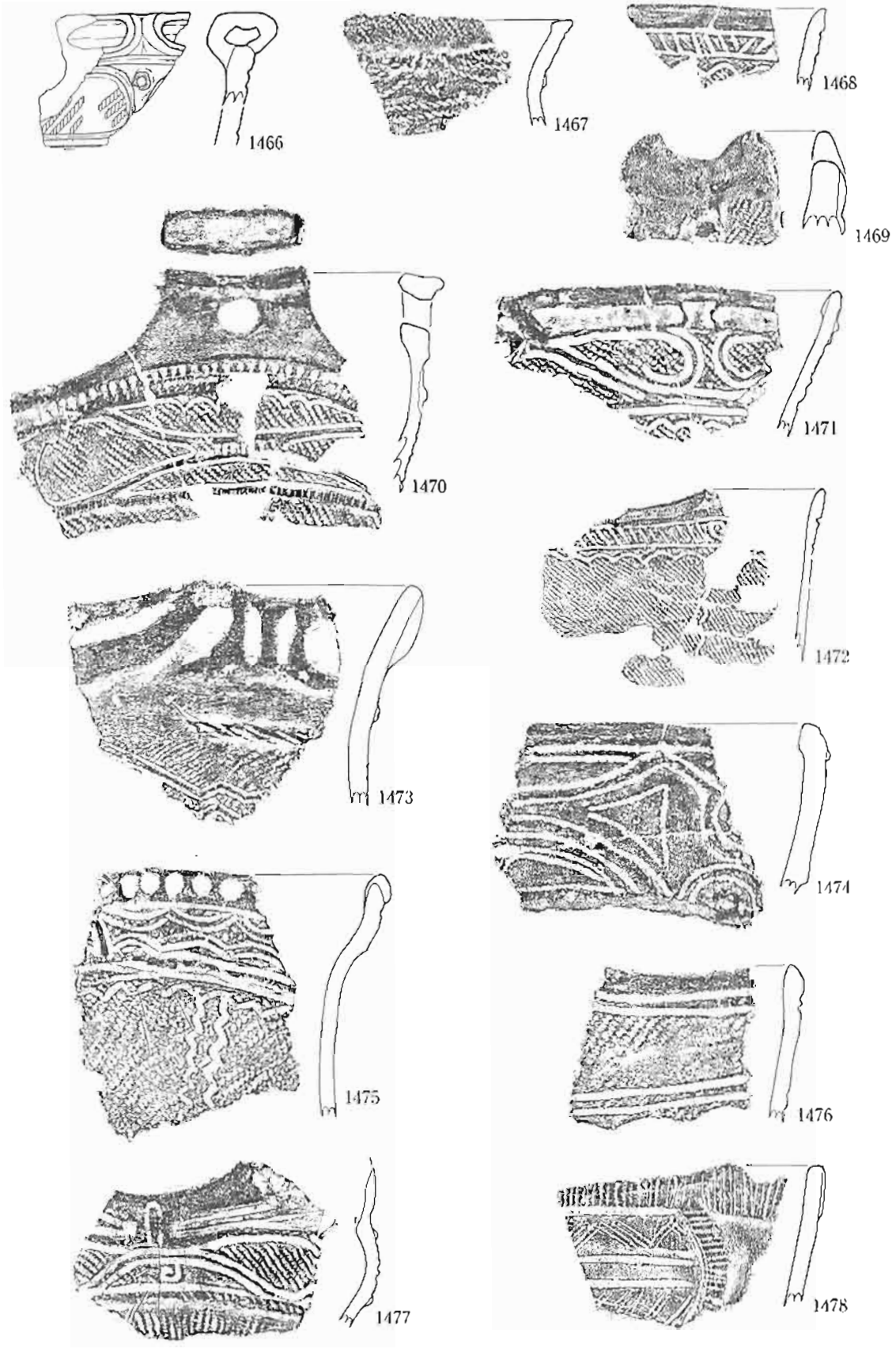
第131図　1層出土遺物(16)



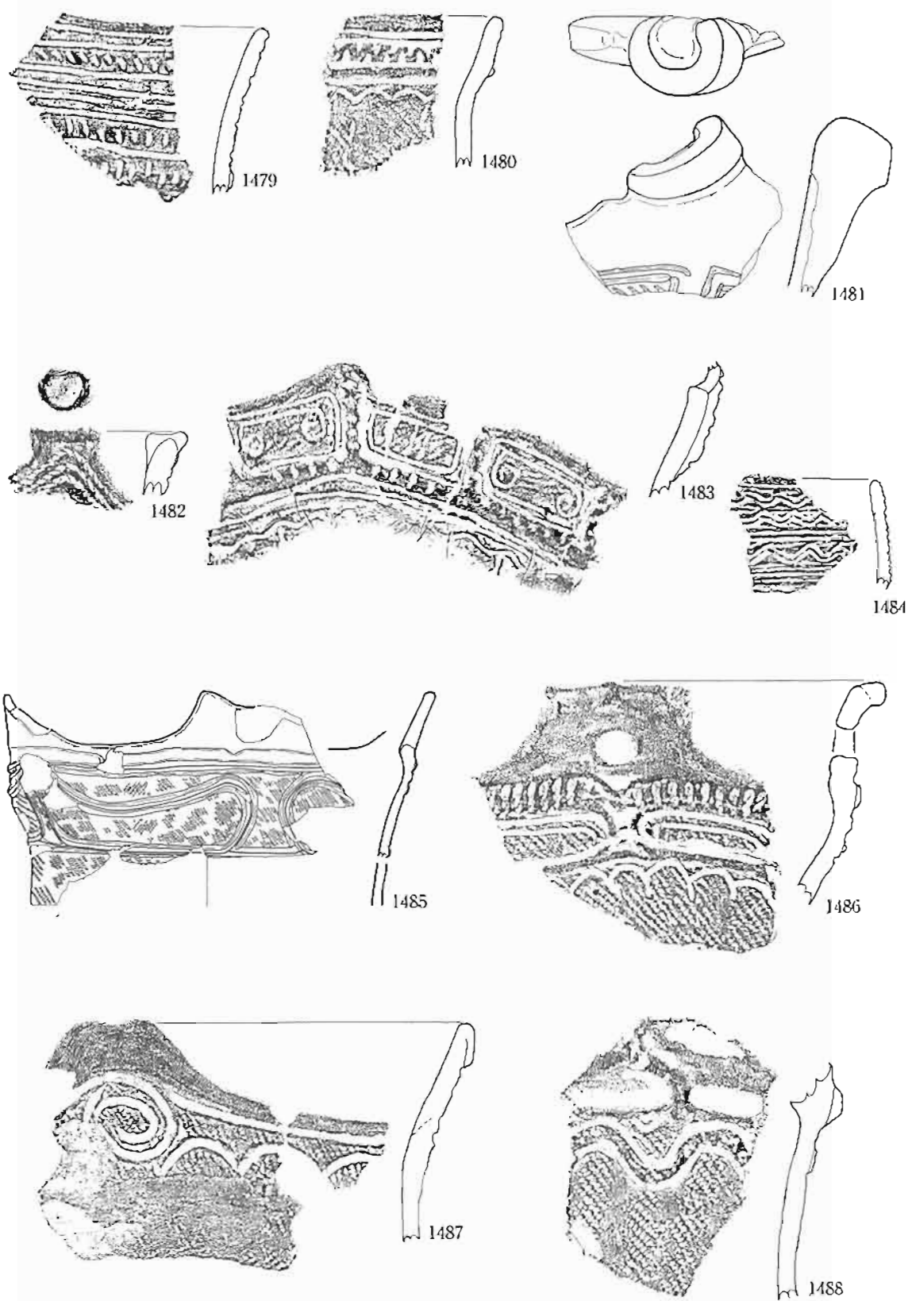
第132図　1 層出土遺物(17)・2 層出土遺物・3 a 層出土遺物(1)



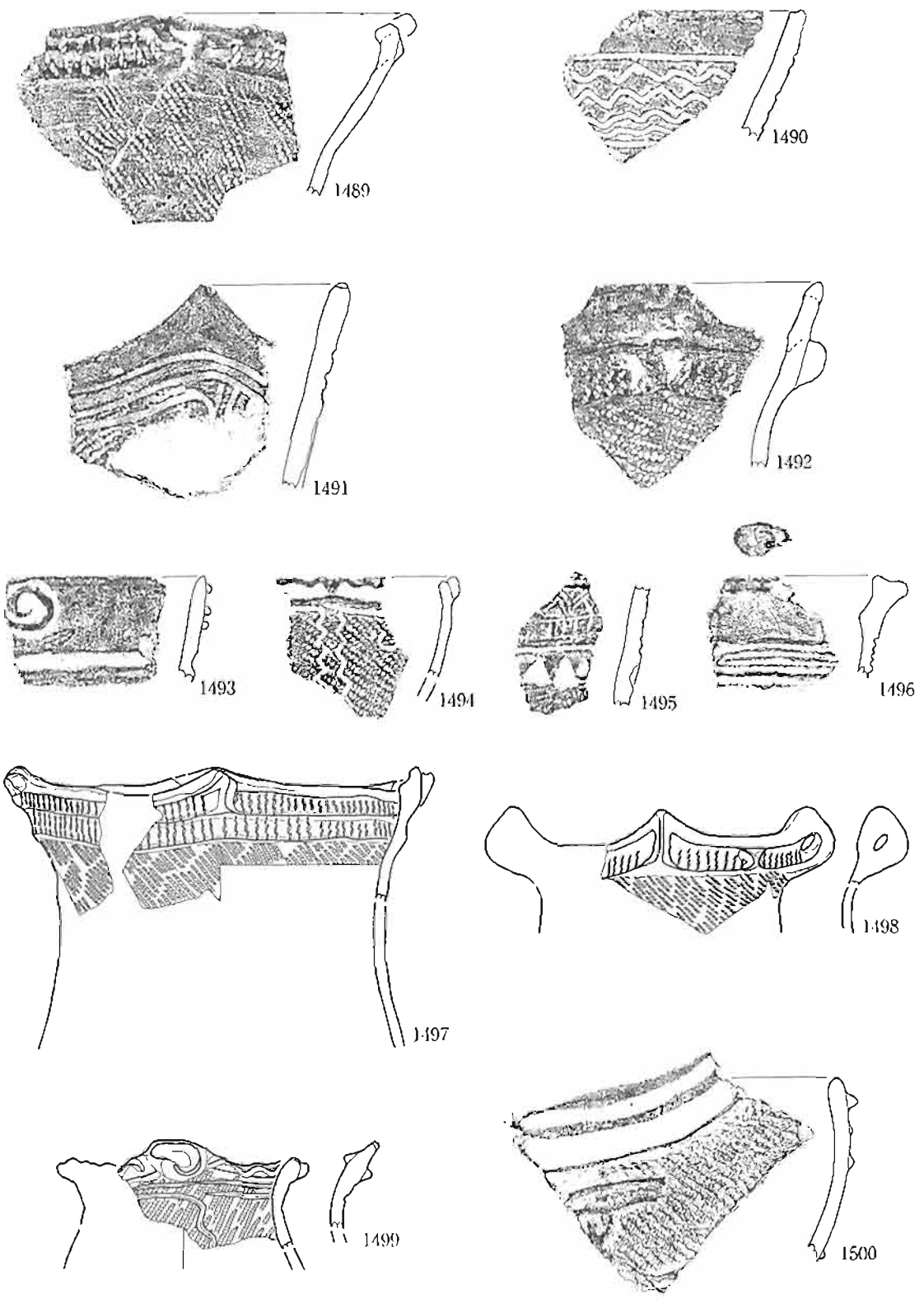
第133図　3 a 層出土遺物（2）



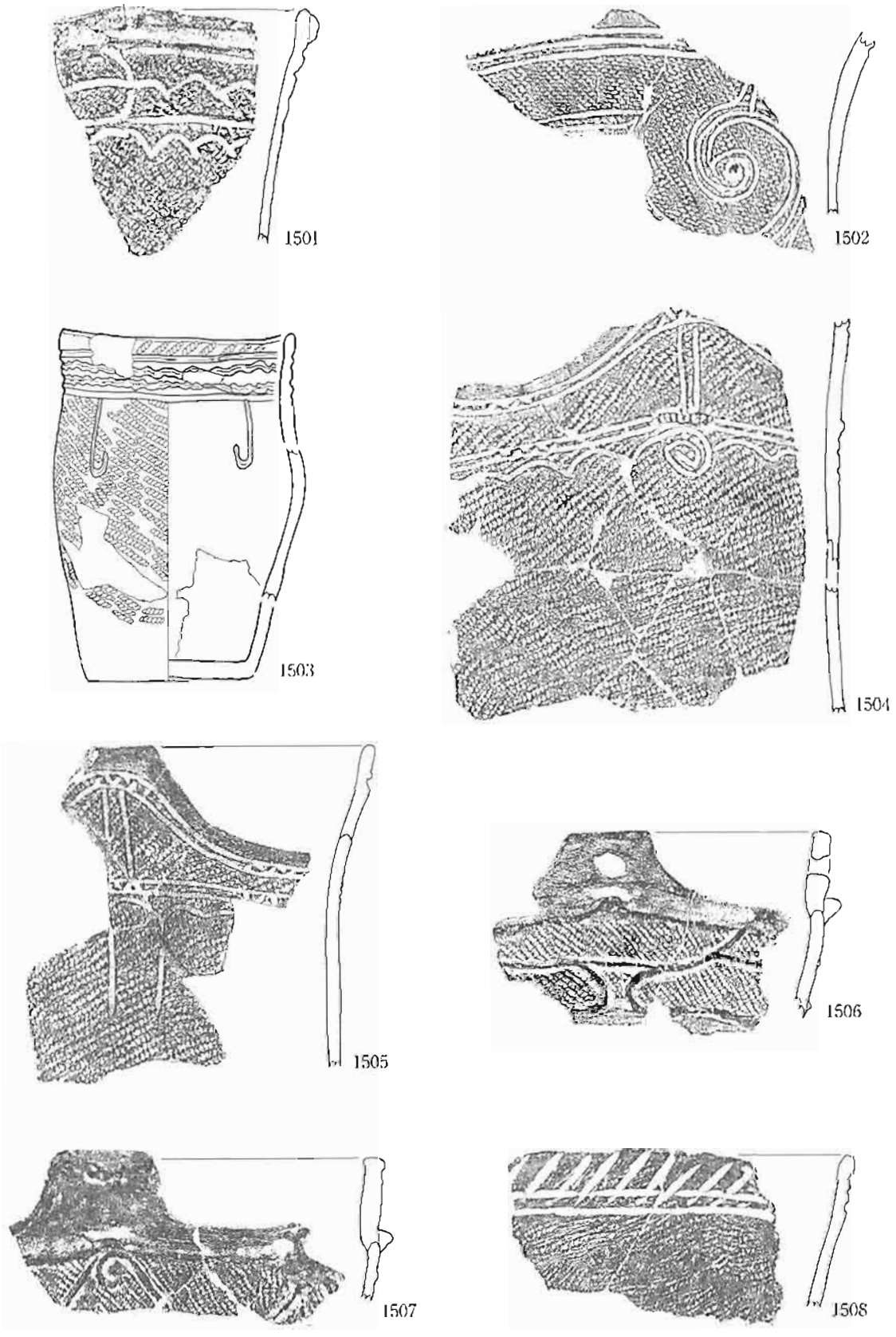
第134図　3 a 層出土遺物（3）



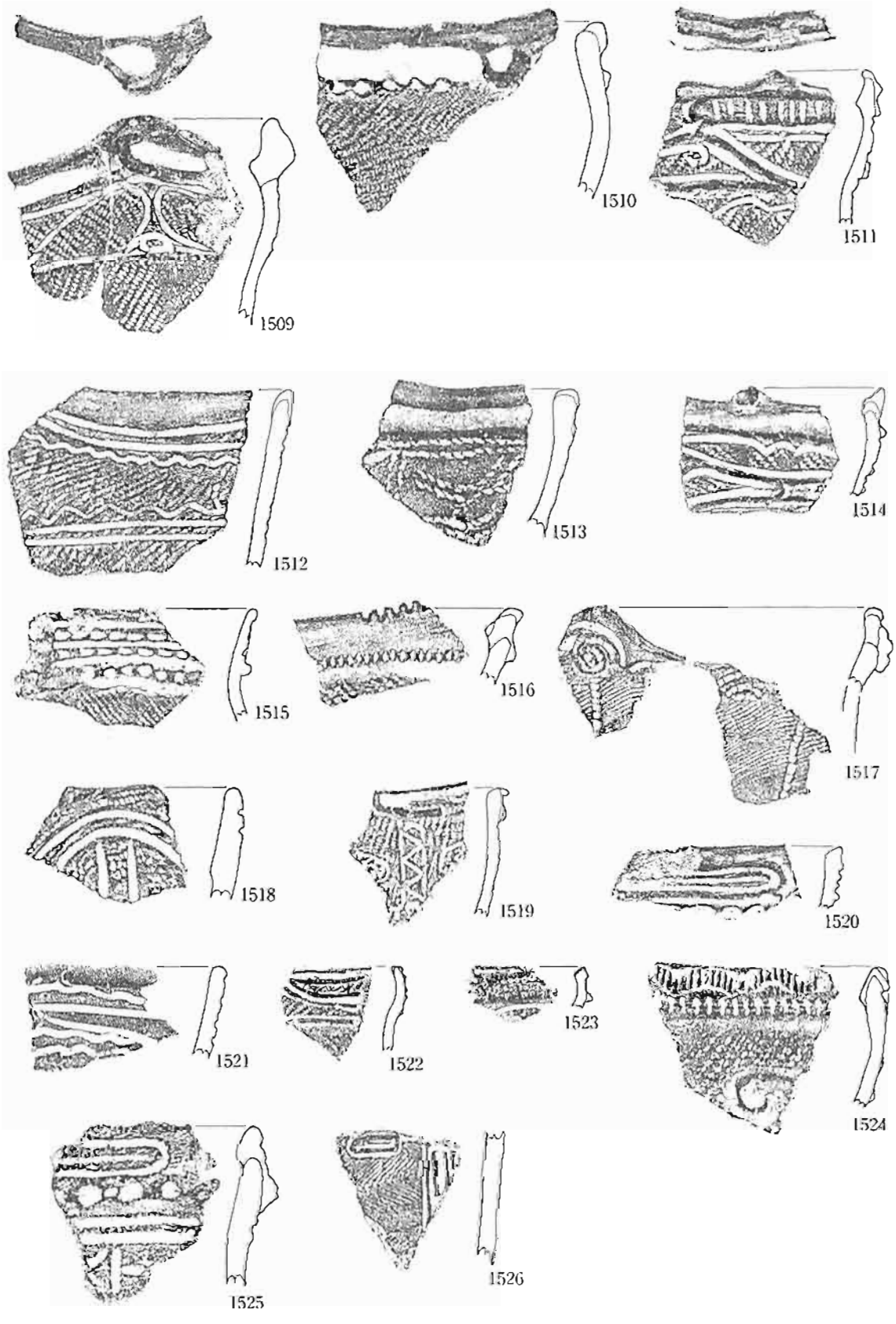
第135図　3 a 層出土遺物（4）



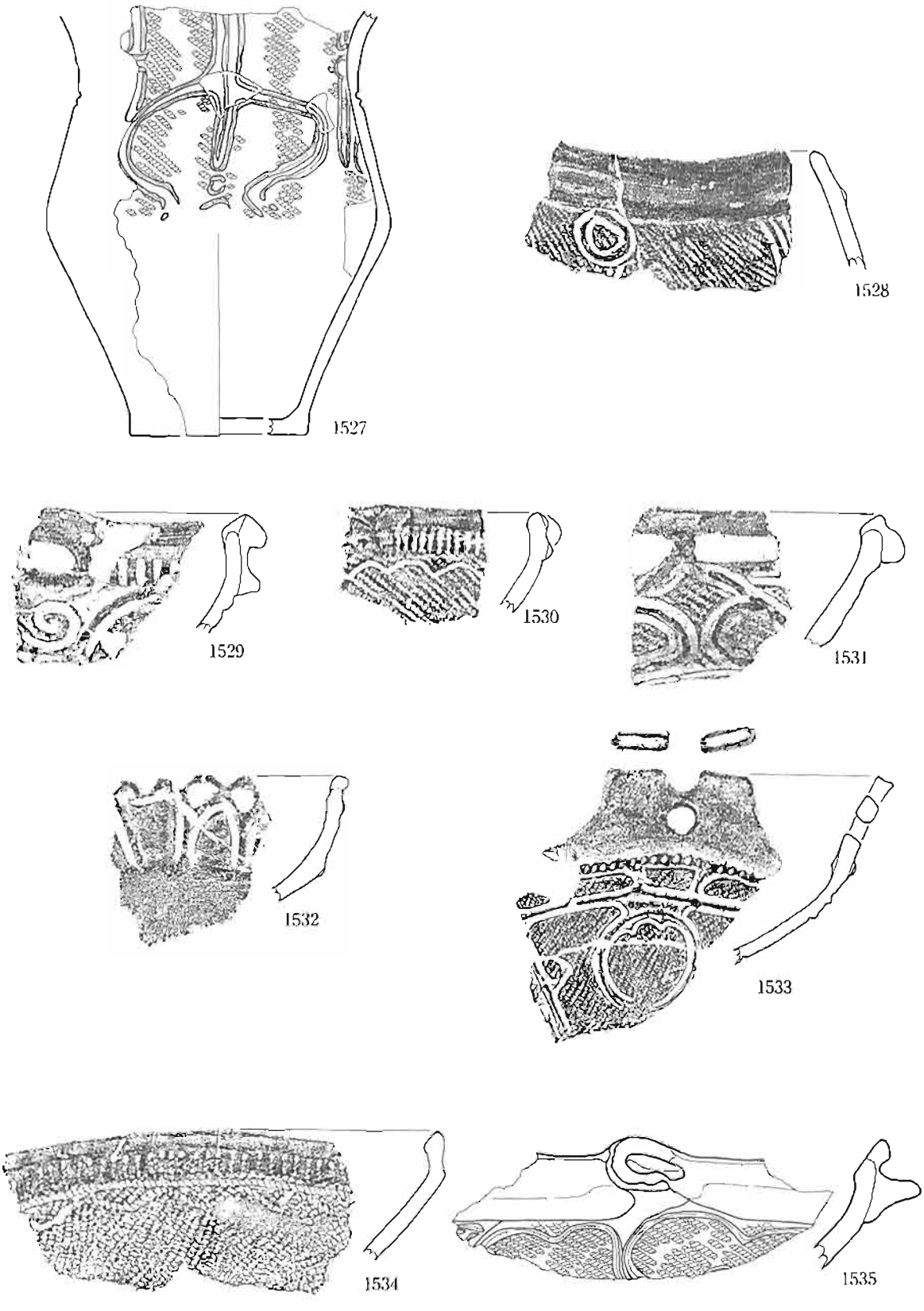
第136図　3ａ層出土遺物（5）



第137図　3 a 層出土遺物(6)

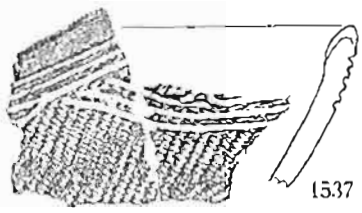


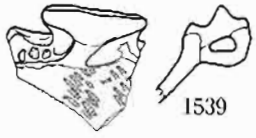
第138図　3 a 層出土遺物（7）

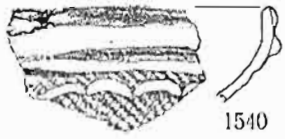


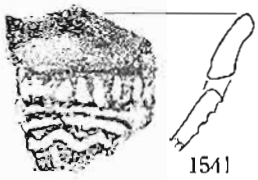
第139図　3 a 層出土遺物(8)

3 a 層出土

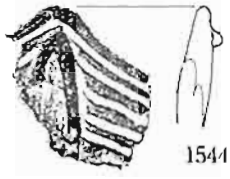


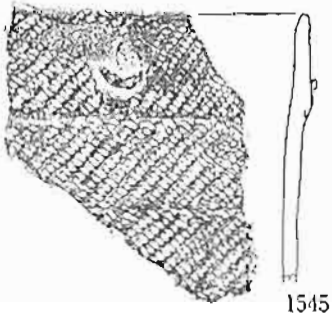


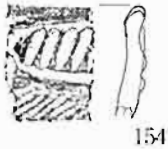


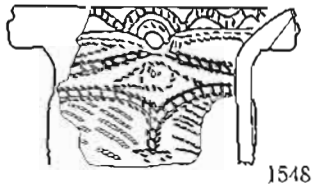


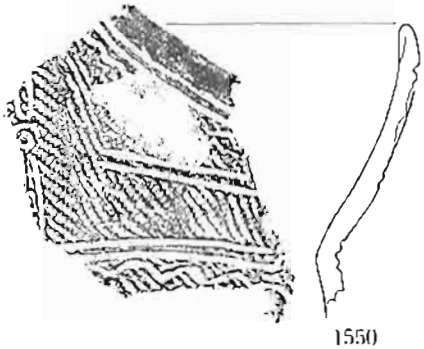
3 b 層出土



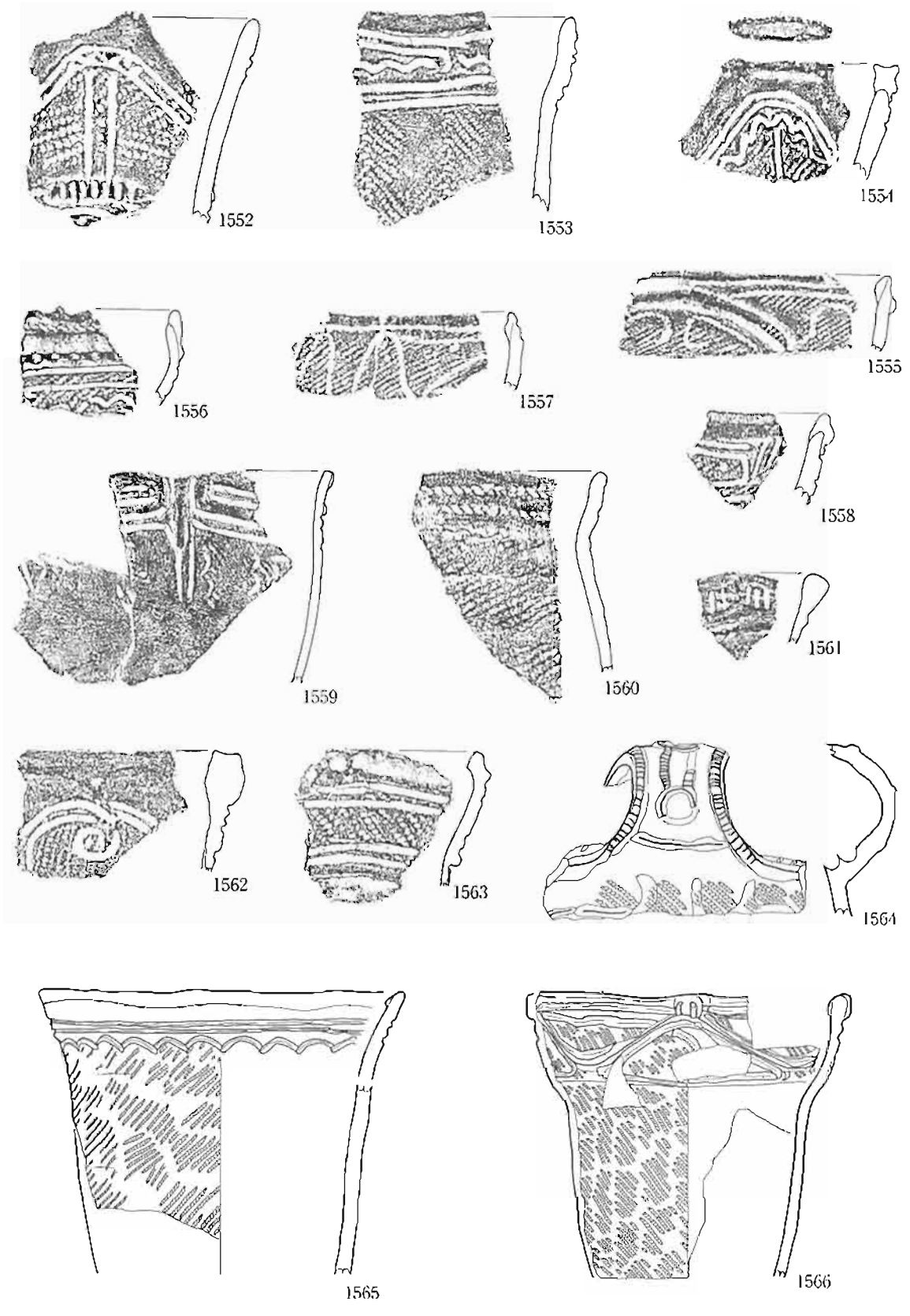




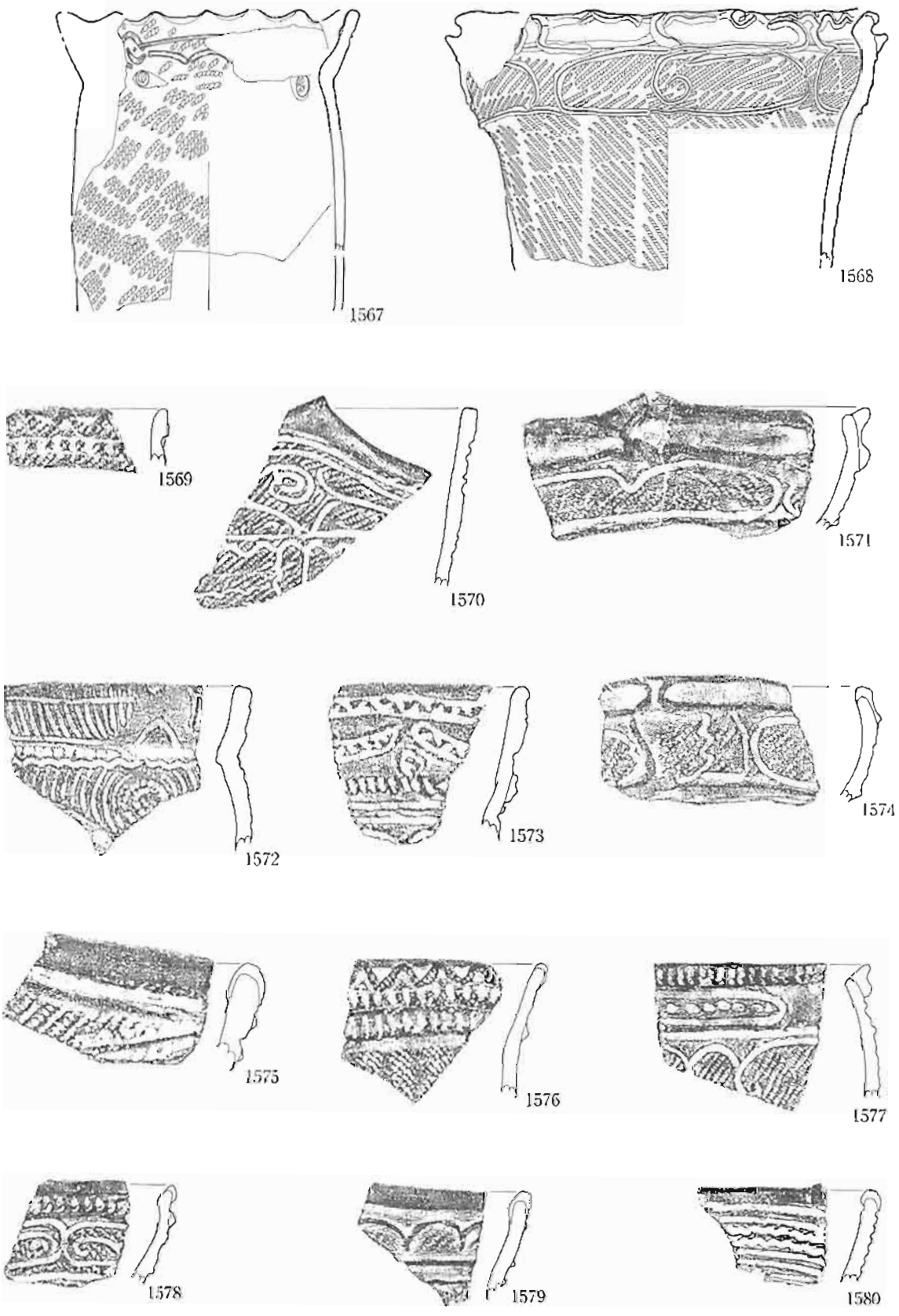




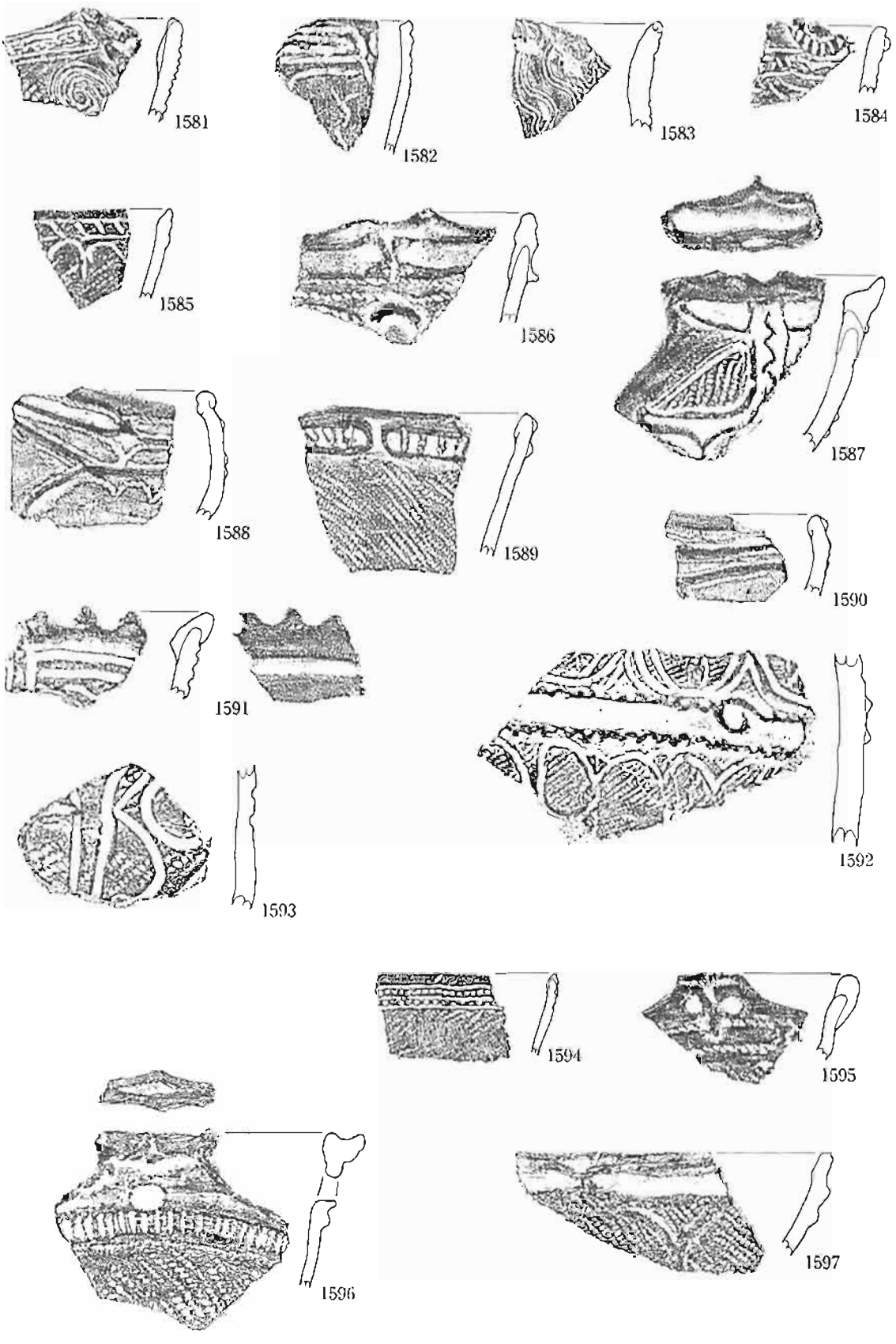
第140図　3 a 層出土遺物(9)・3 b 層出土遺物(1)



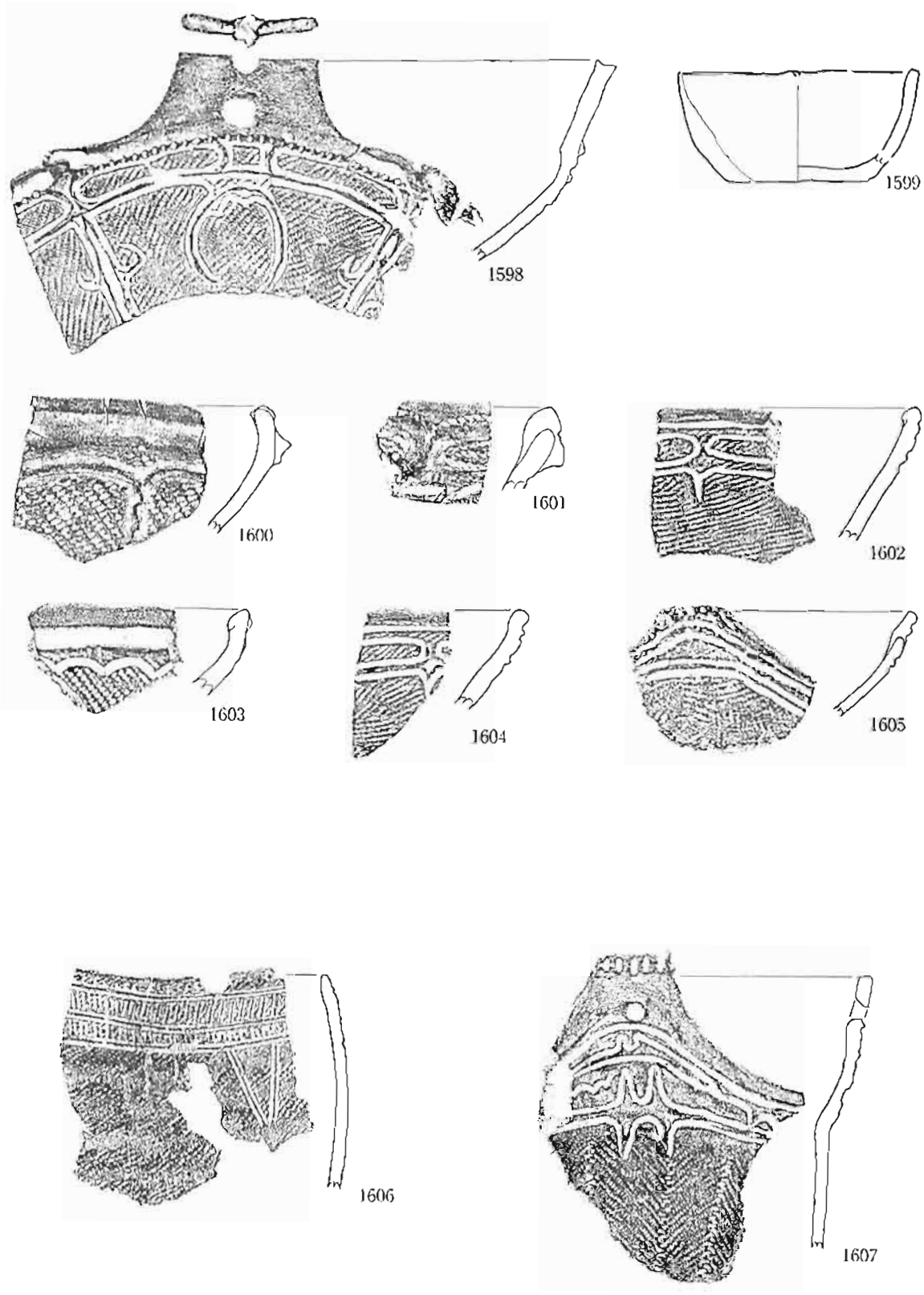
第141図　３ｂ層出土遺物（２）



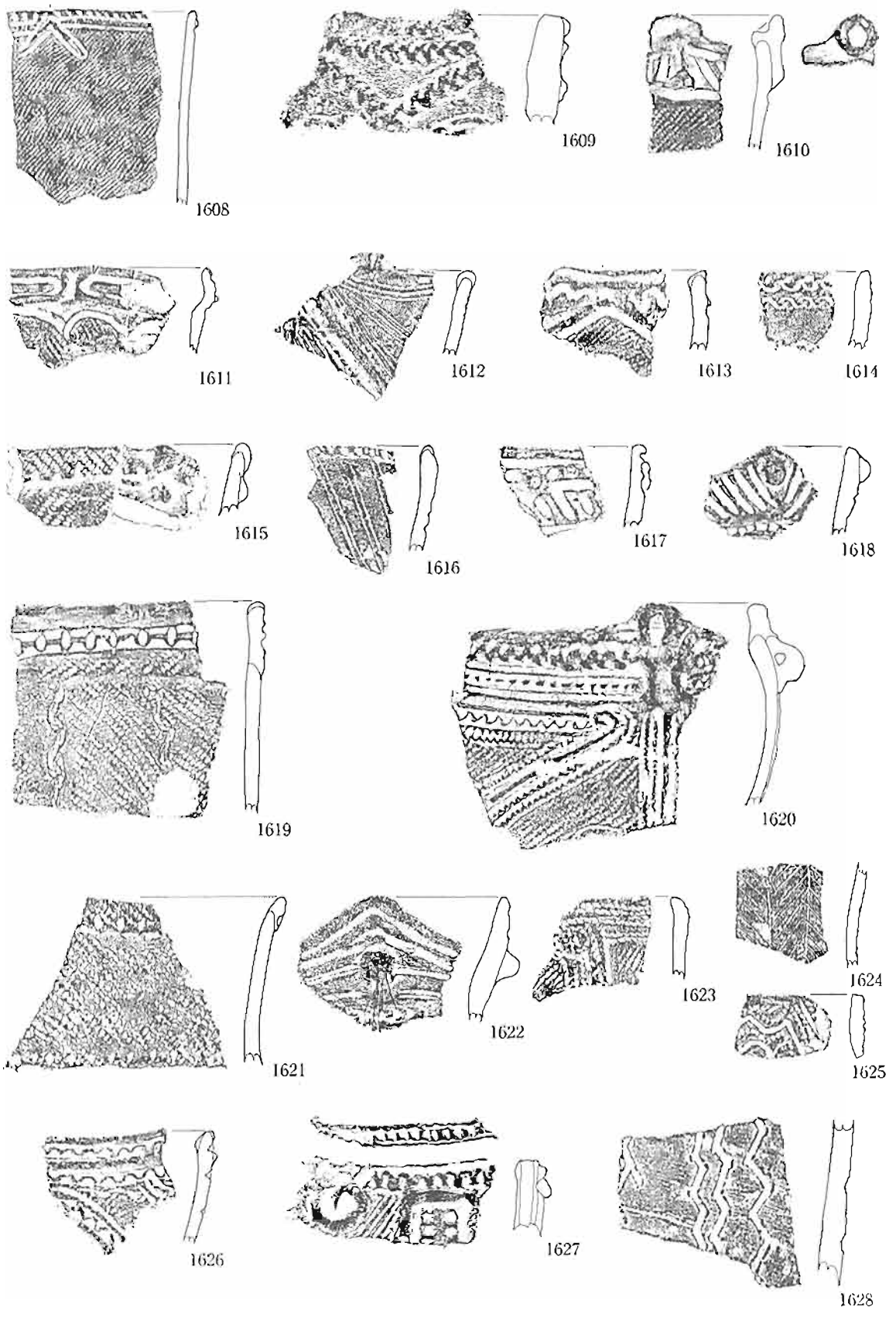
第142図　３６層出土遺物（３）



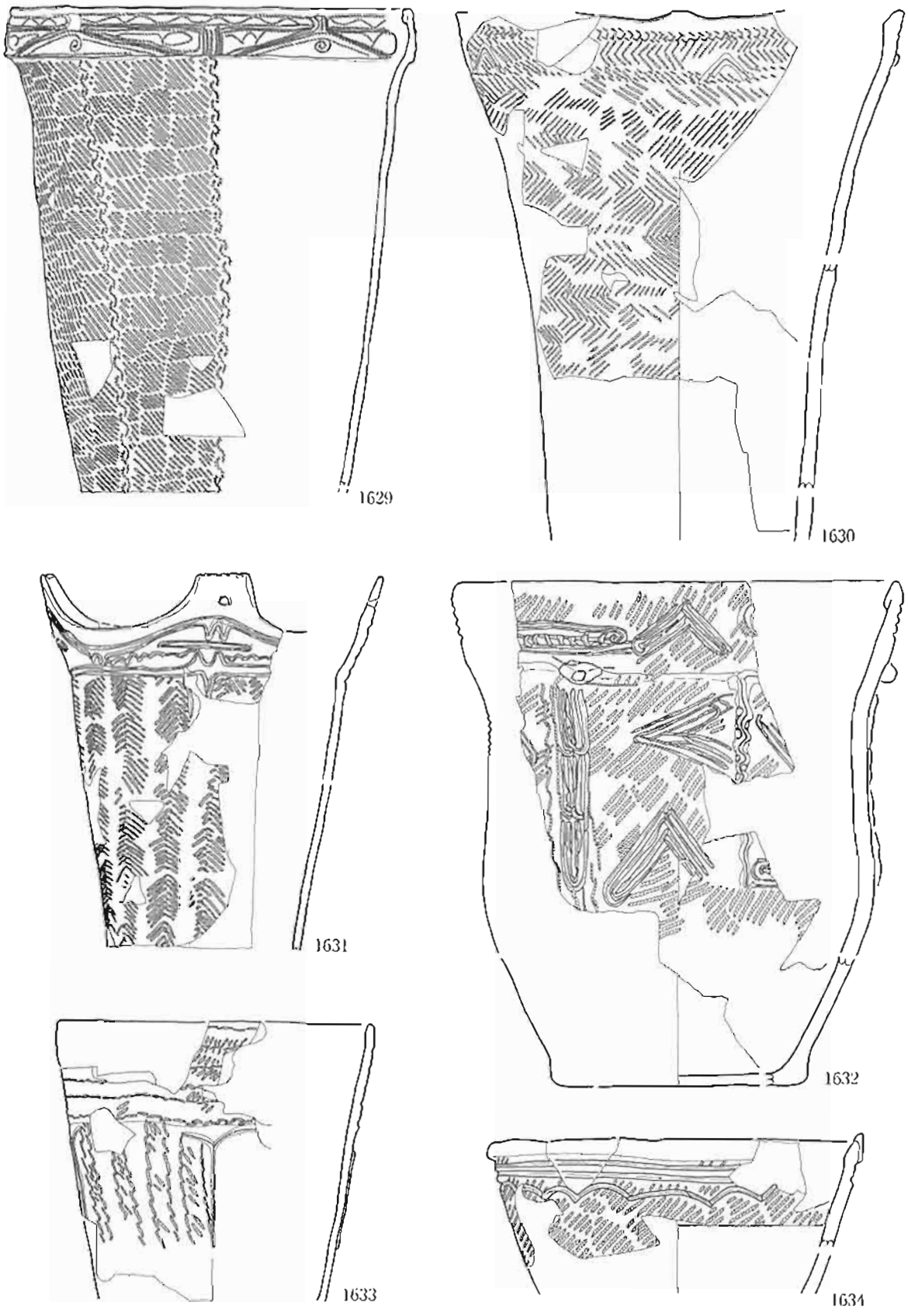
第143図　3ｂ層出土遺物（4）



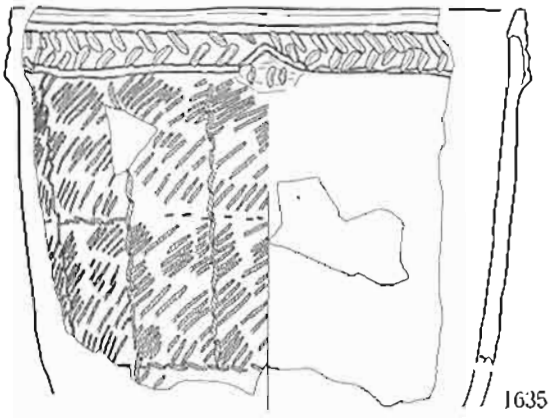
第144図　4層出土遺物（1）

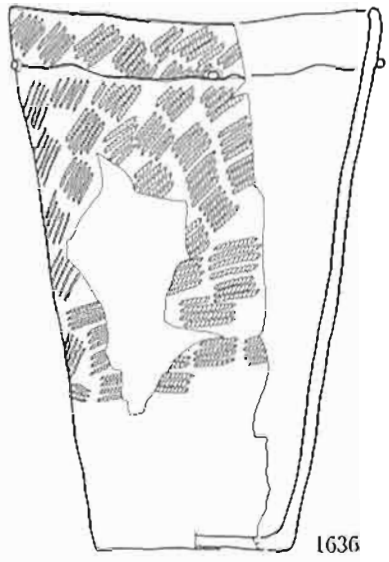


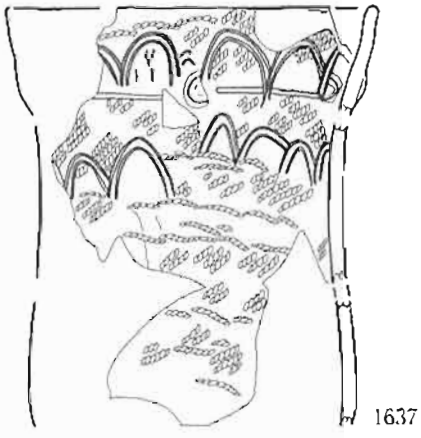
第145図　4層出土遺物(2)

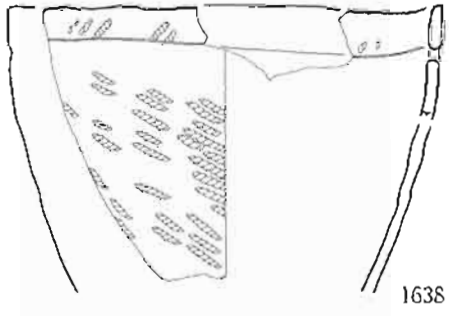


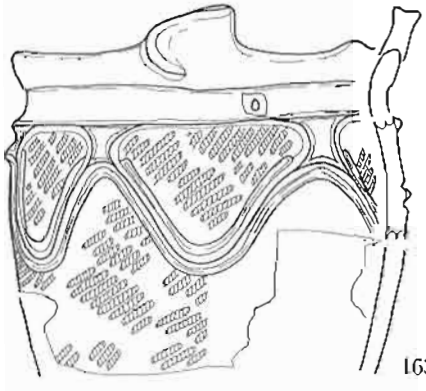
第146図　4層出土遺物(3)

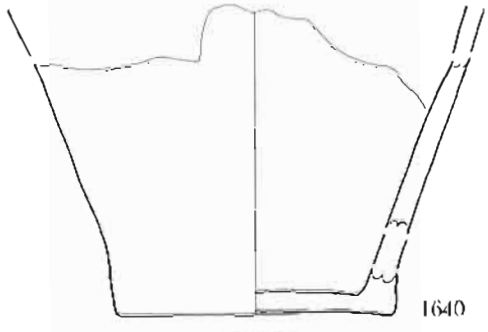


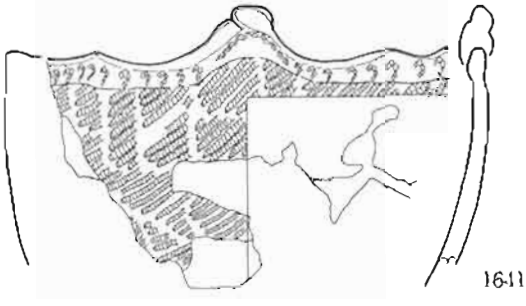




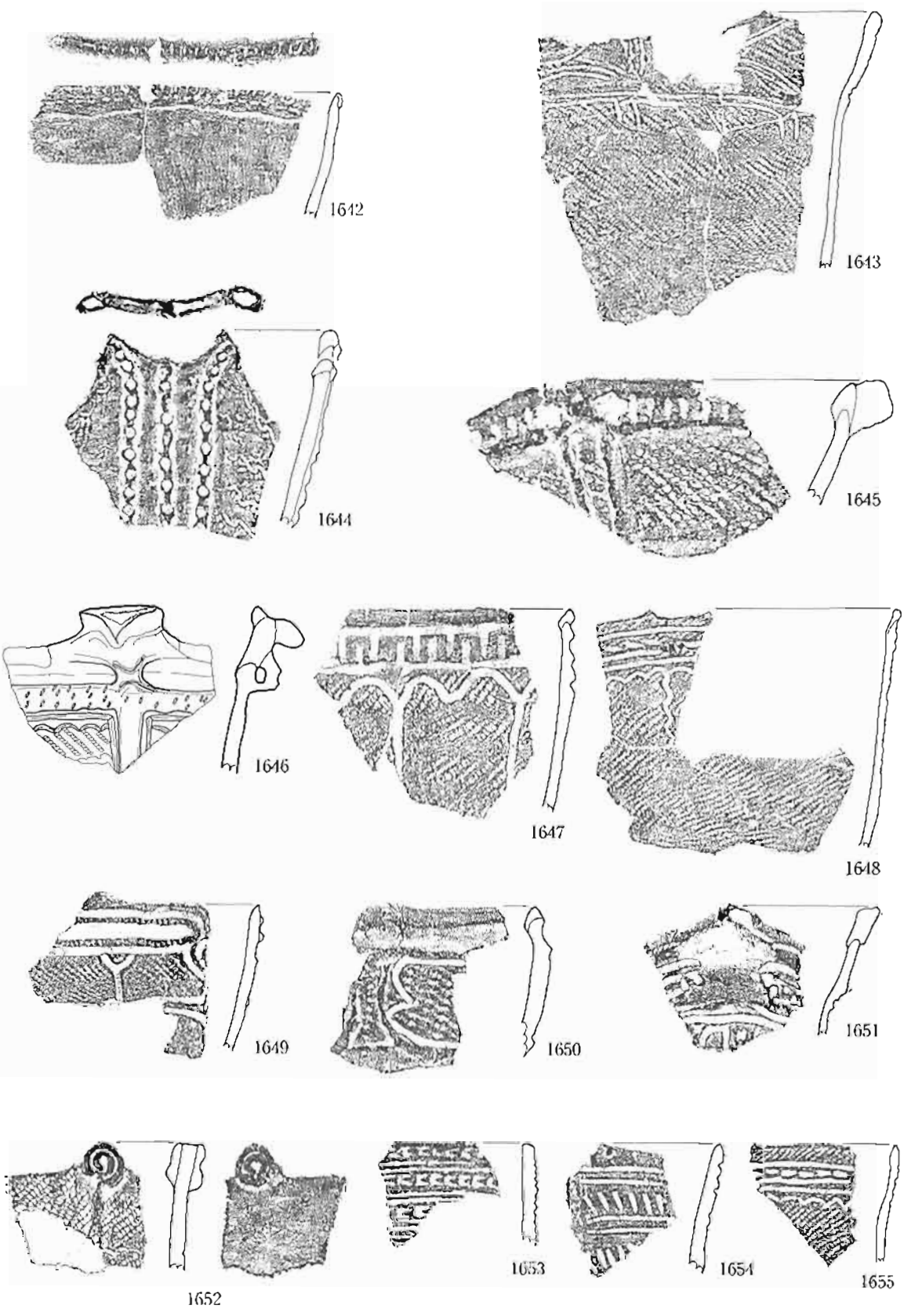




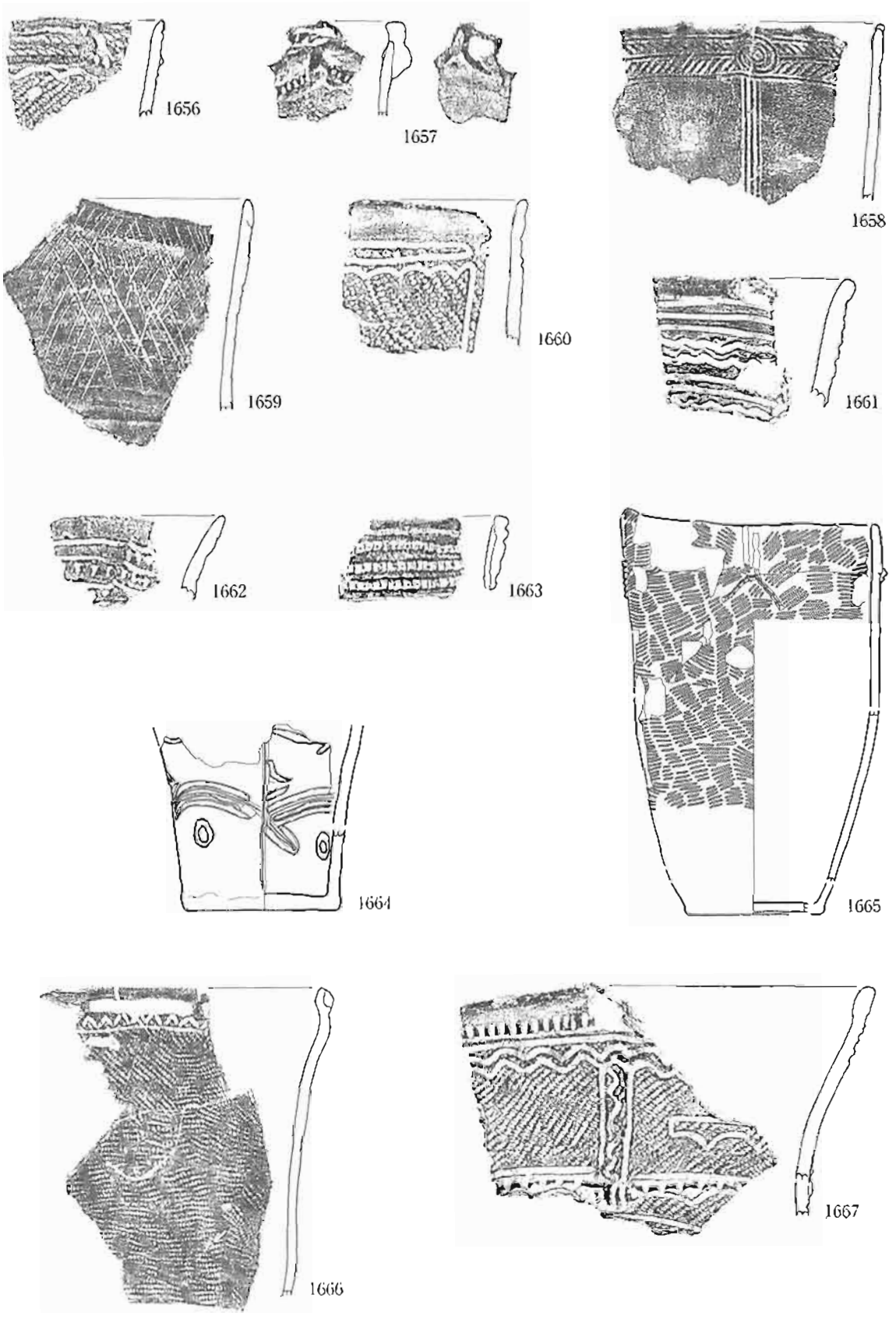




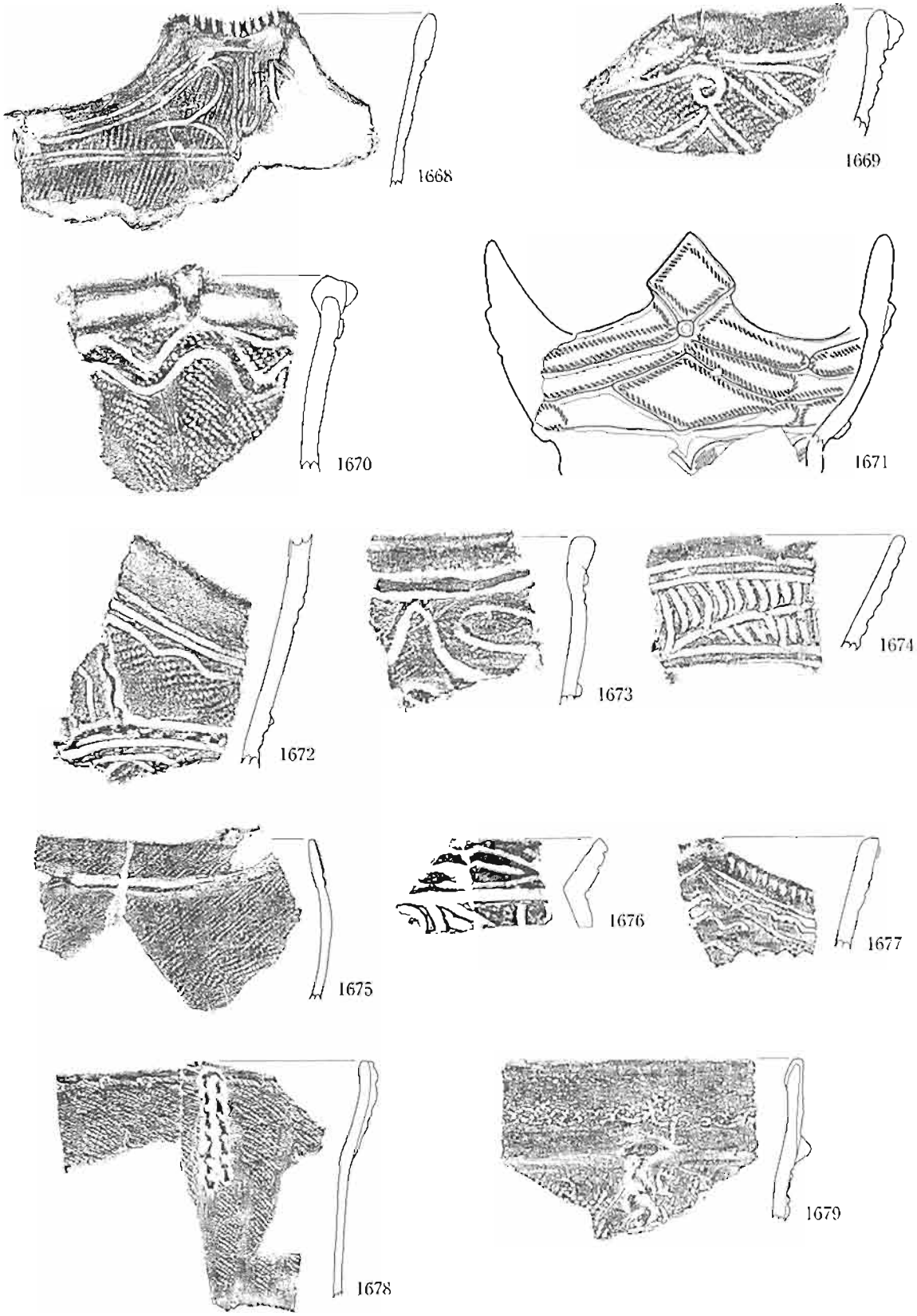
第147図　4層出土遺物（4）



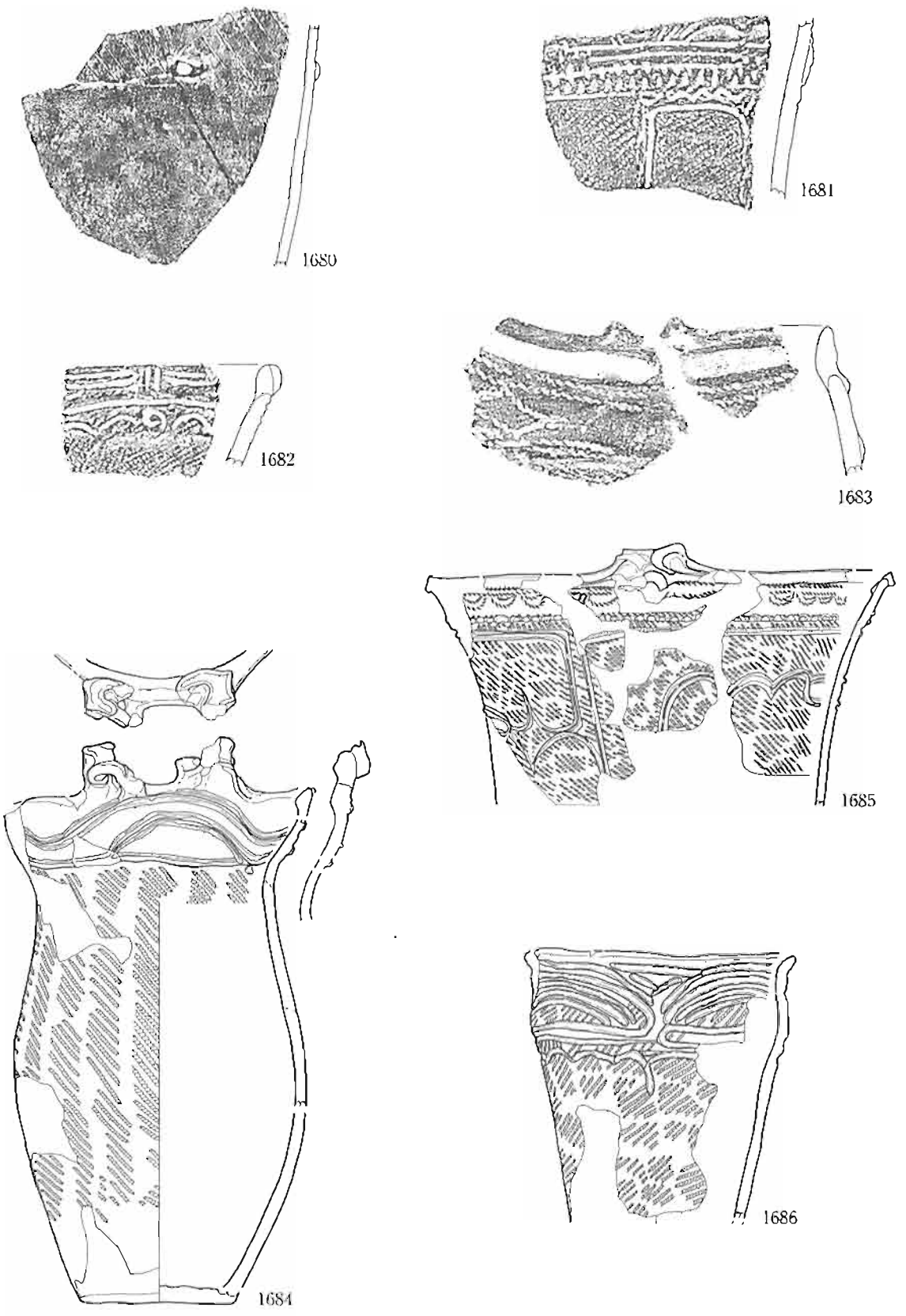
第148図　4層出土遺物（5）



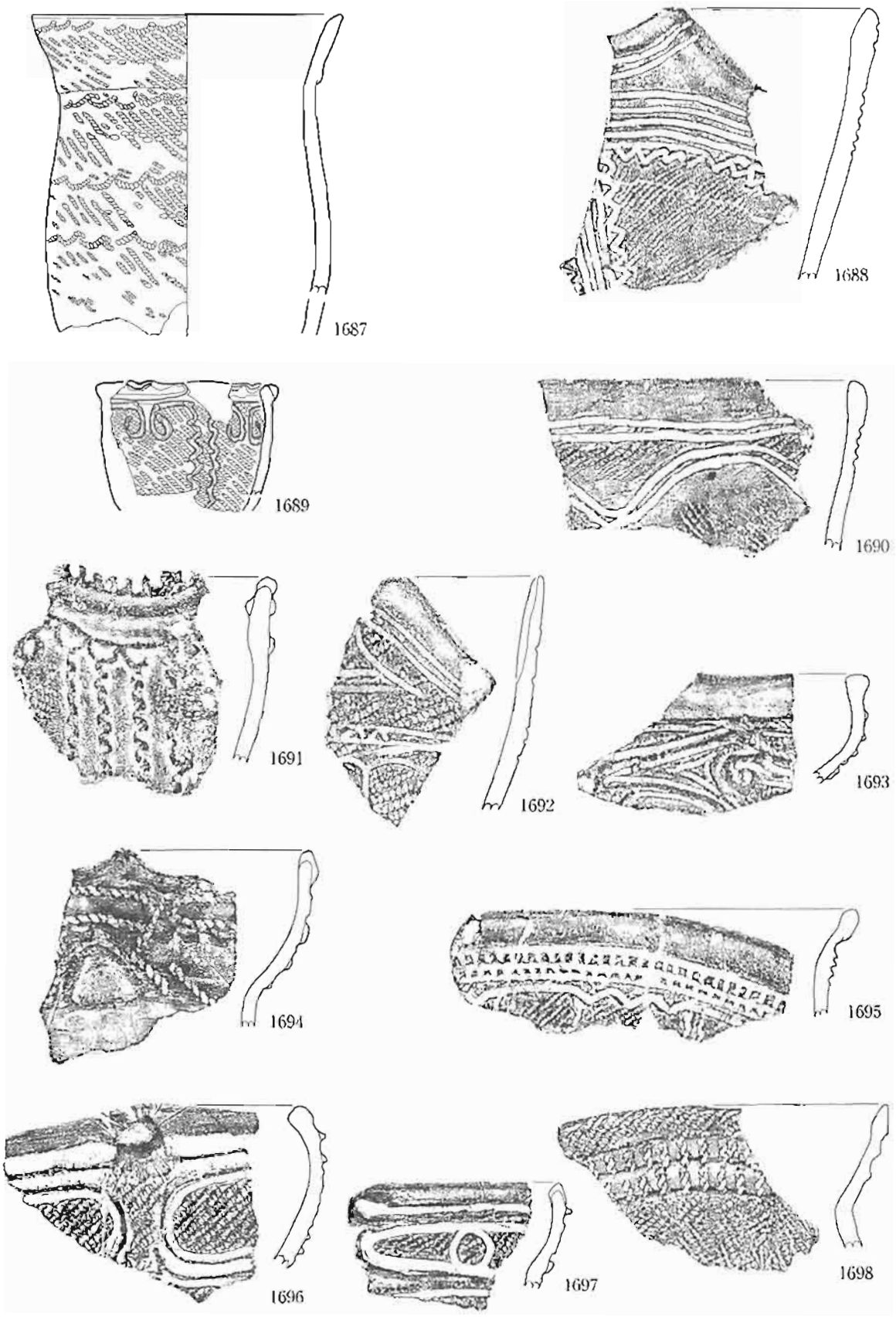
第149図　4層出土遺物(6)



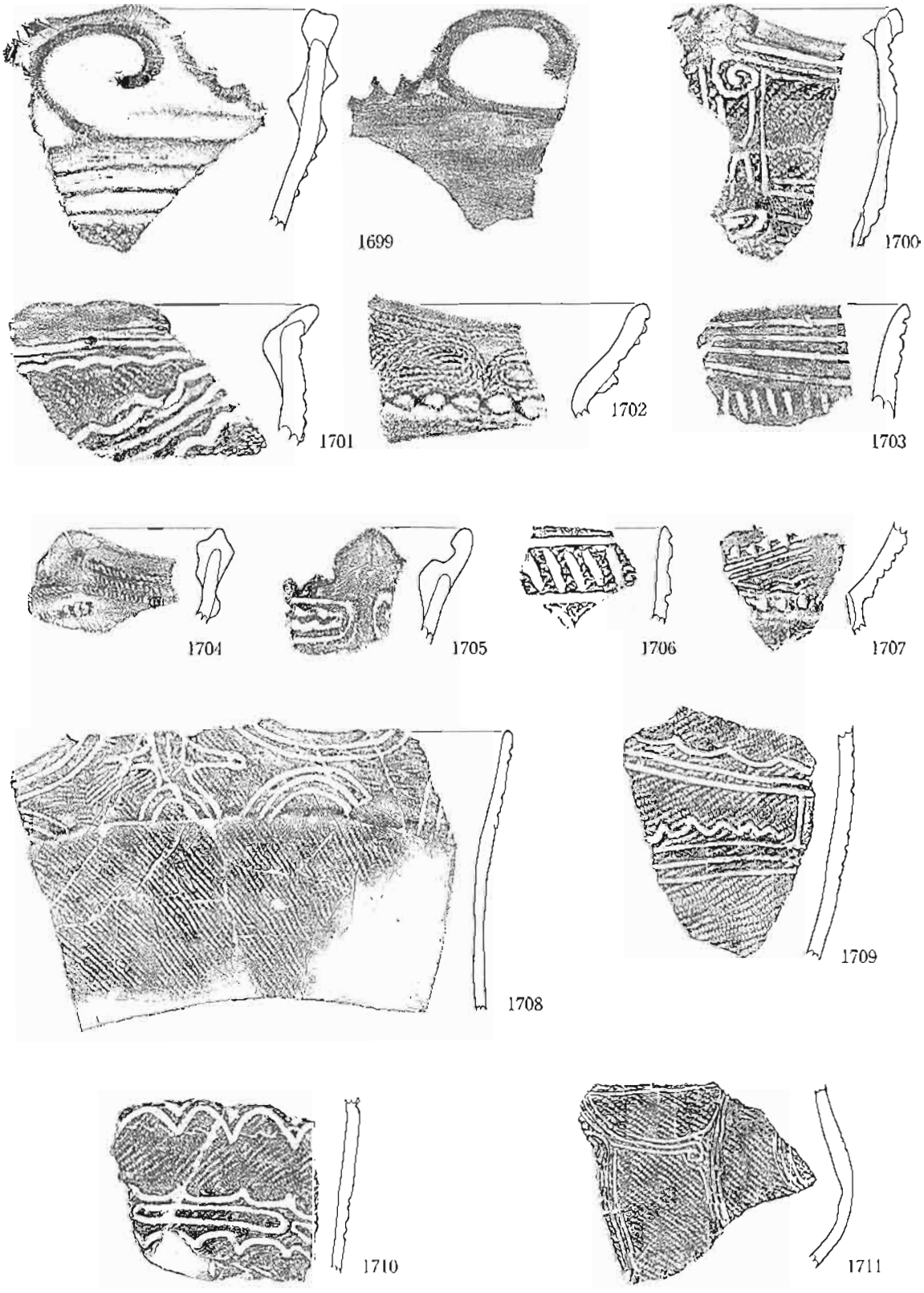
第150図　4層出土遺物(7)



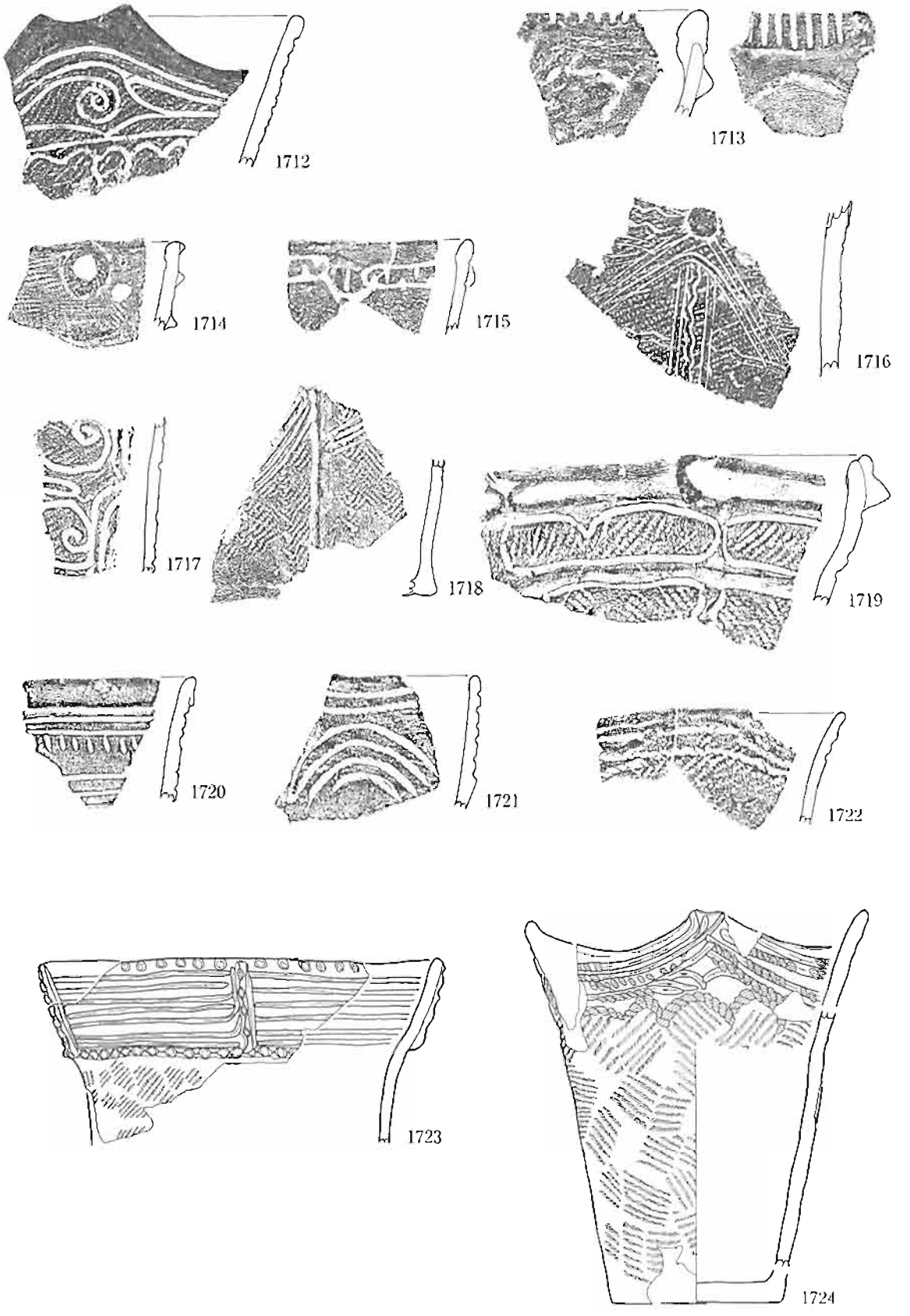
第151図　4層出土遺物(8)



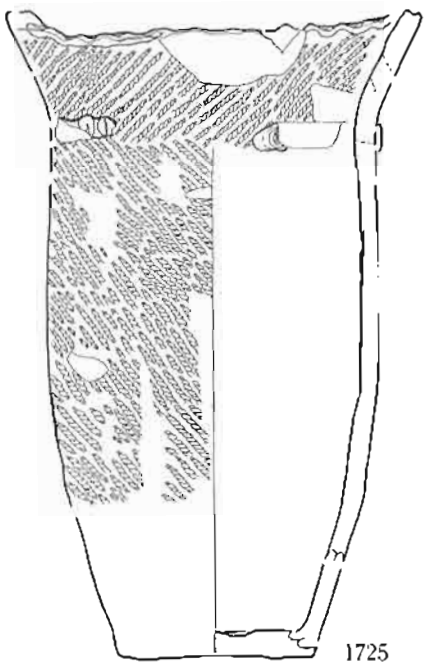
第152図　4層出土遺物(9)

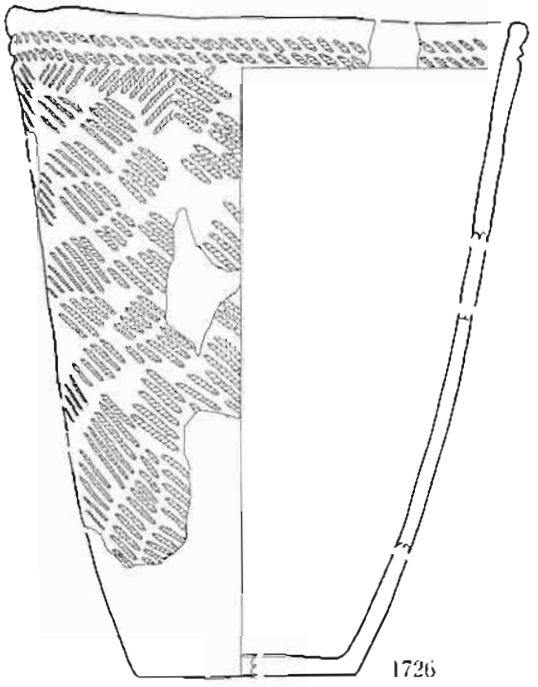


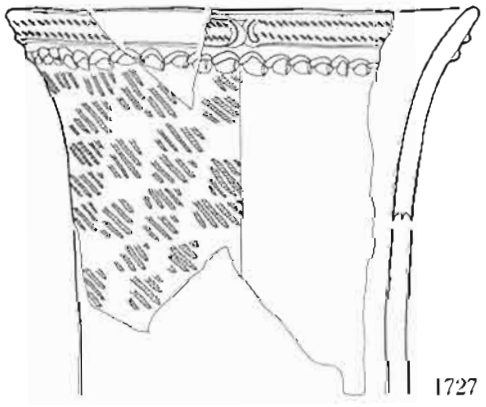
第153図　4層出土遺物(10)

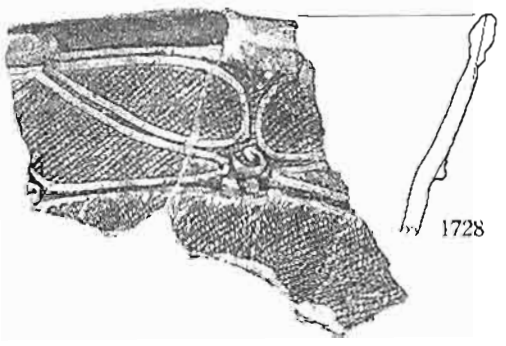


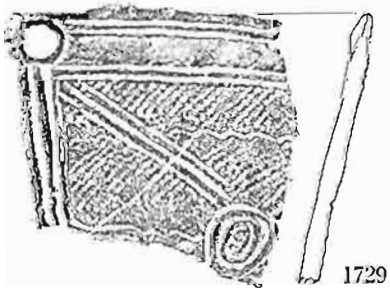
第154図　4層出土遺物(11)

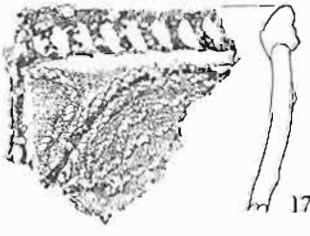


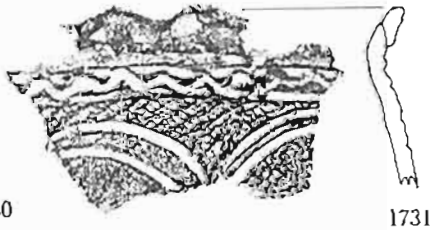




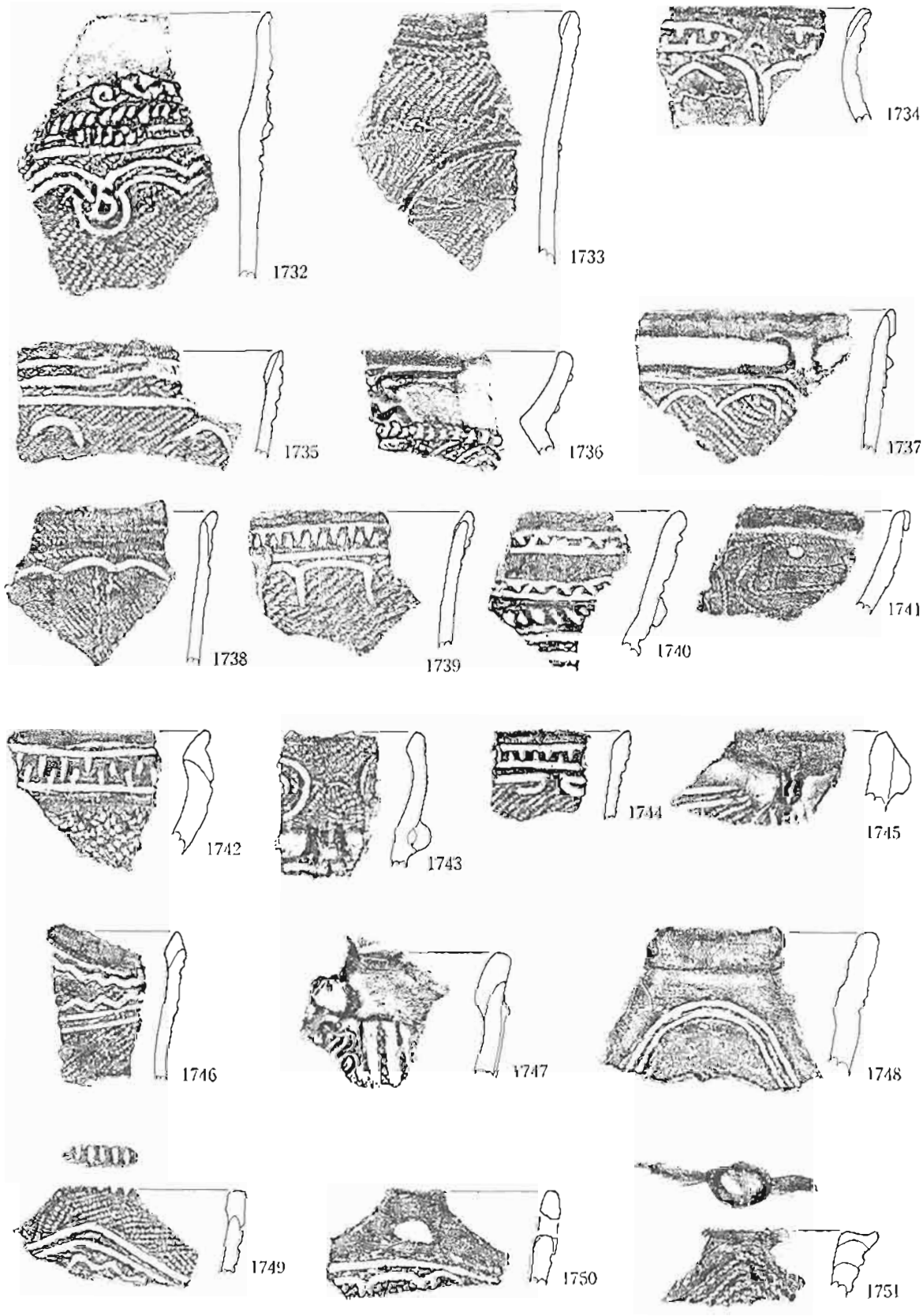




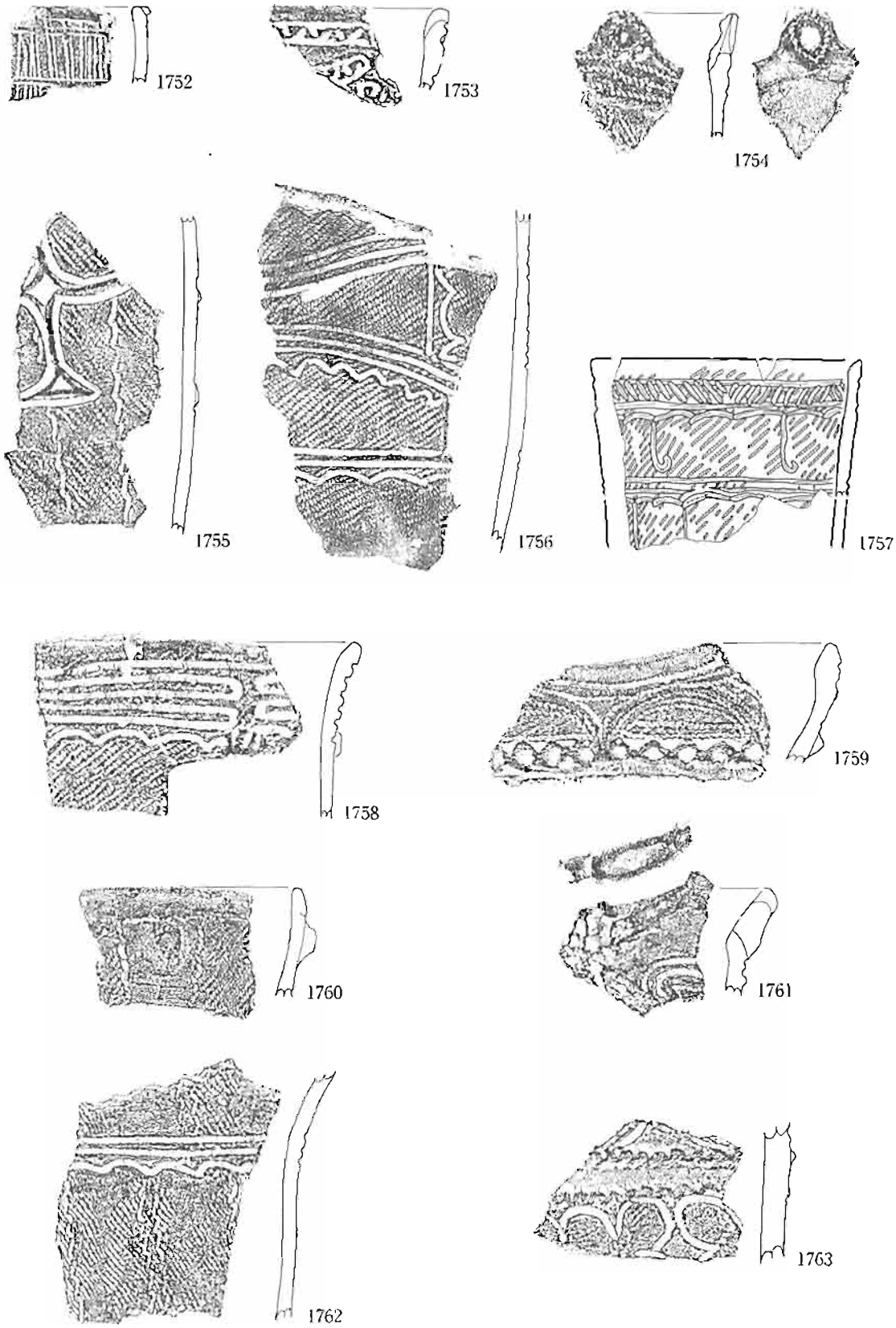




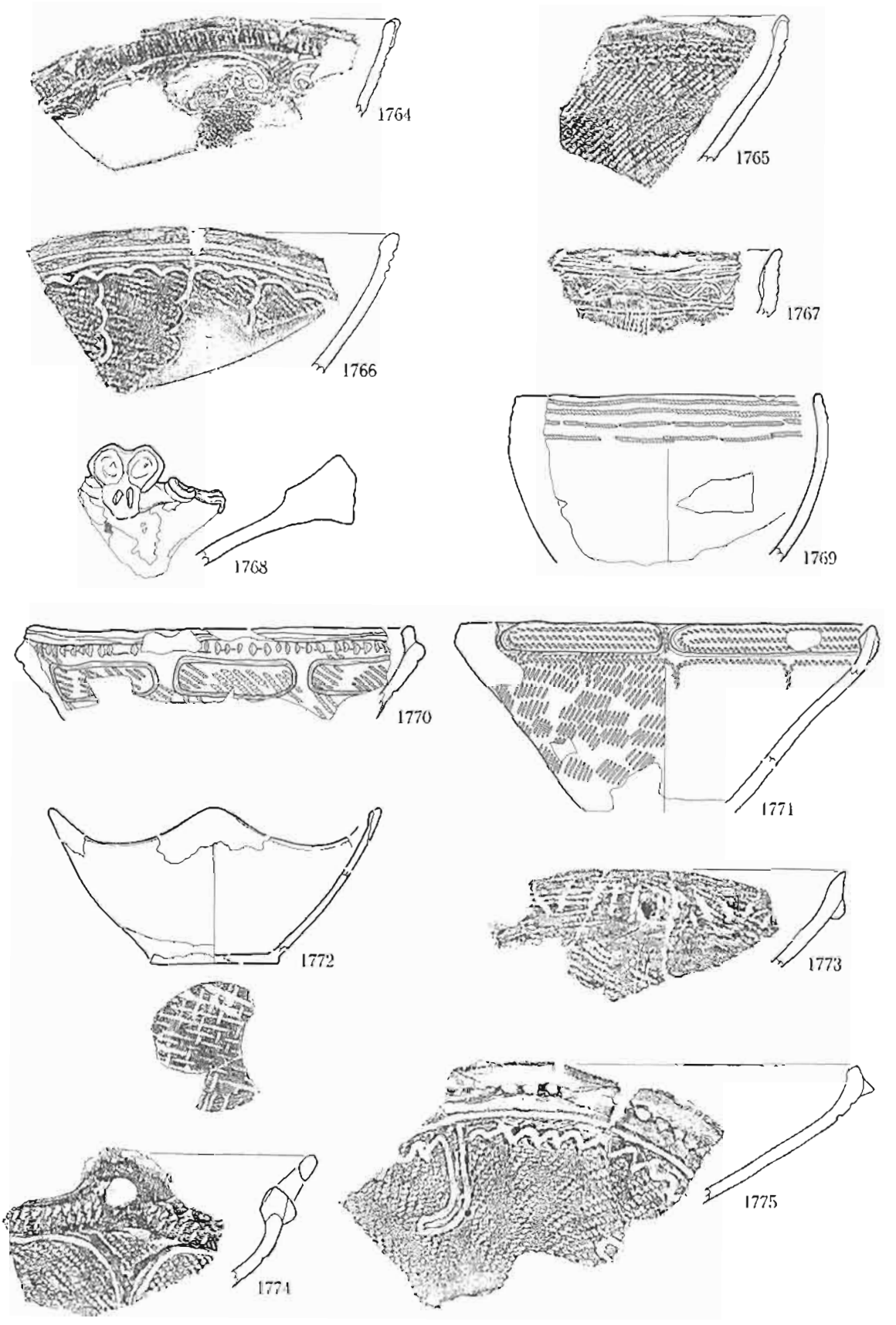
第155図　4層出土遺物(12)



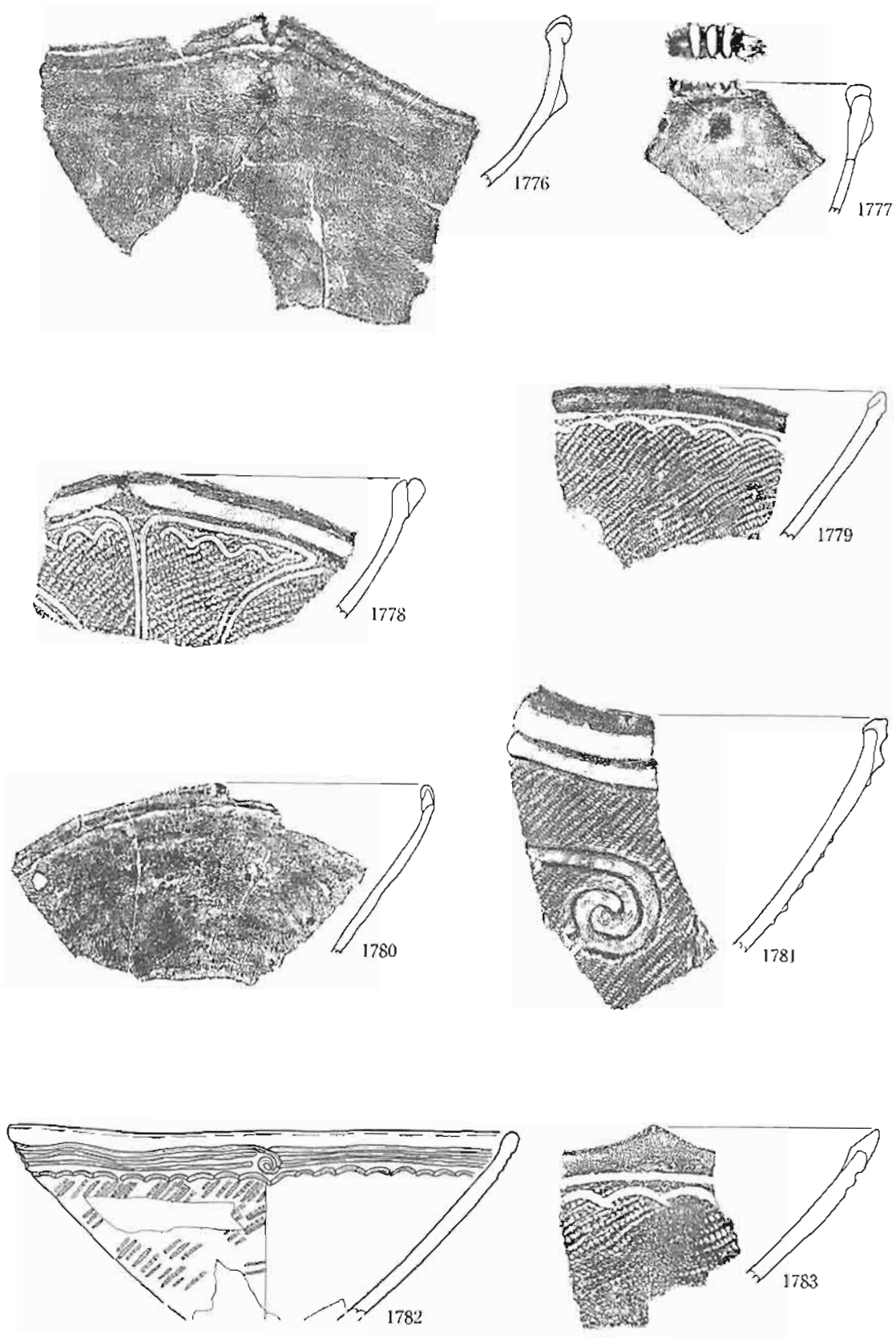
第156図　4層出土遺物(13)



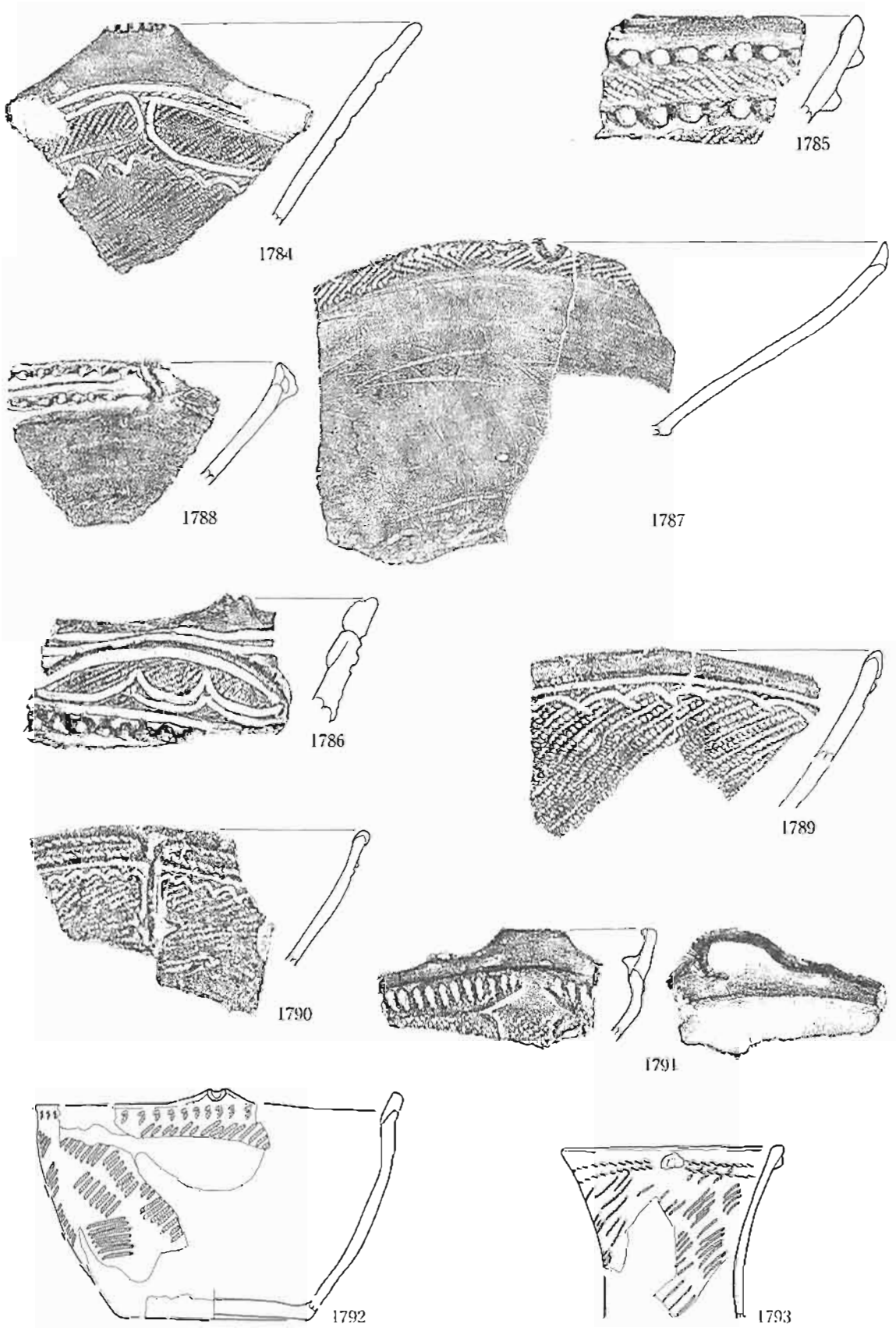
第157図　4層出土遺物(14)



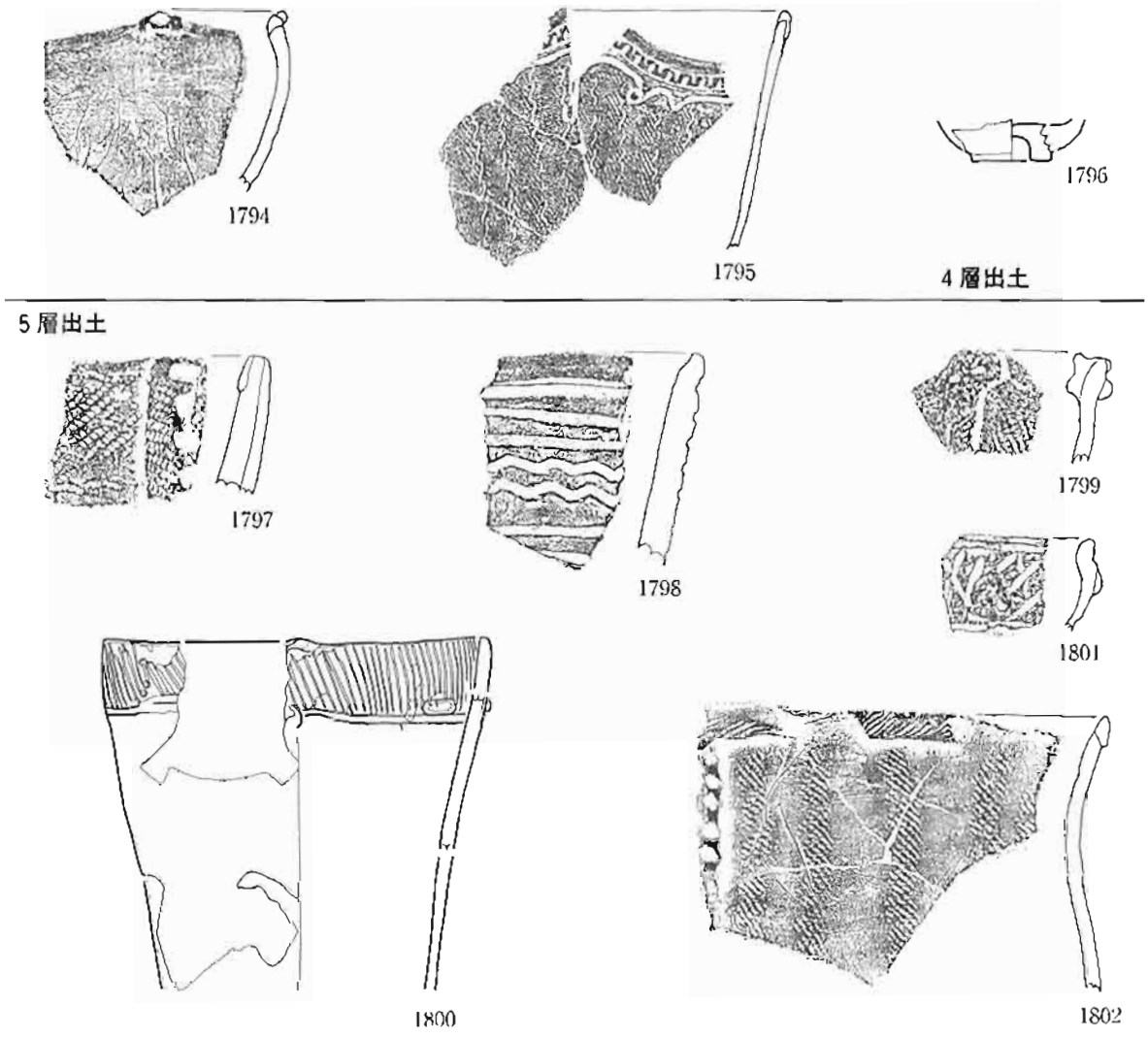
第158図　4層出土遺物(15)



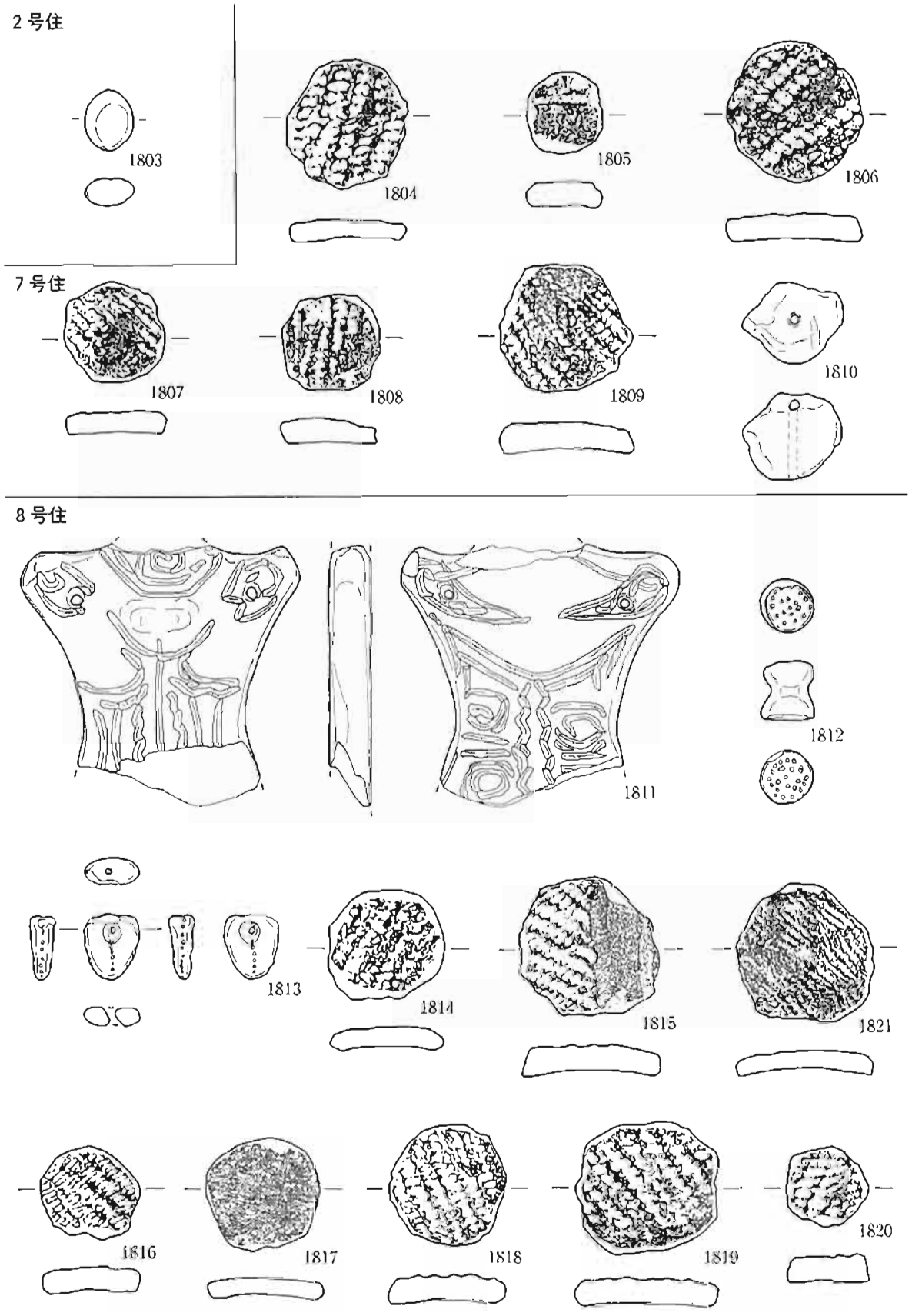
第159図　4層出土遺物(16)



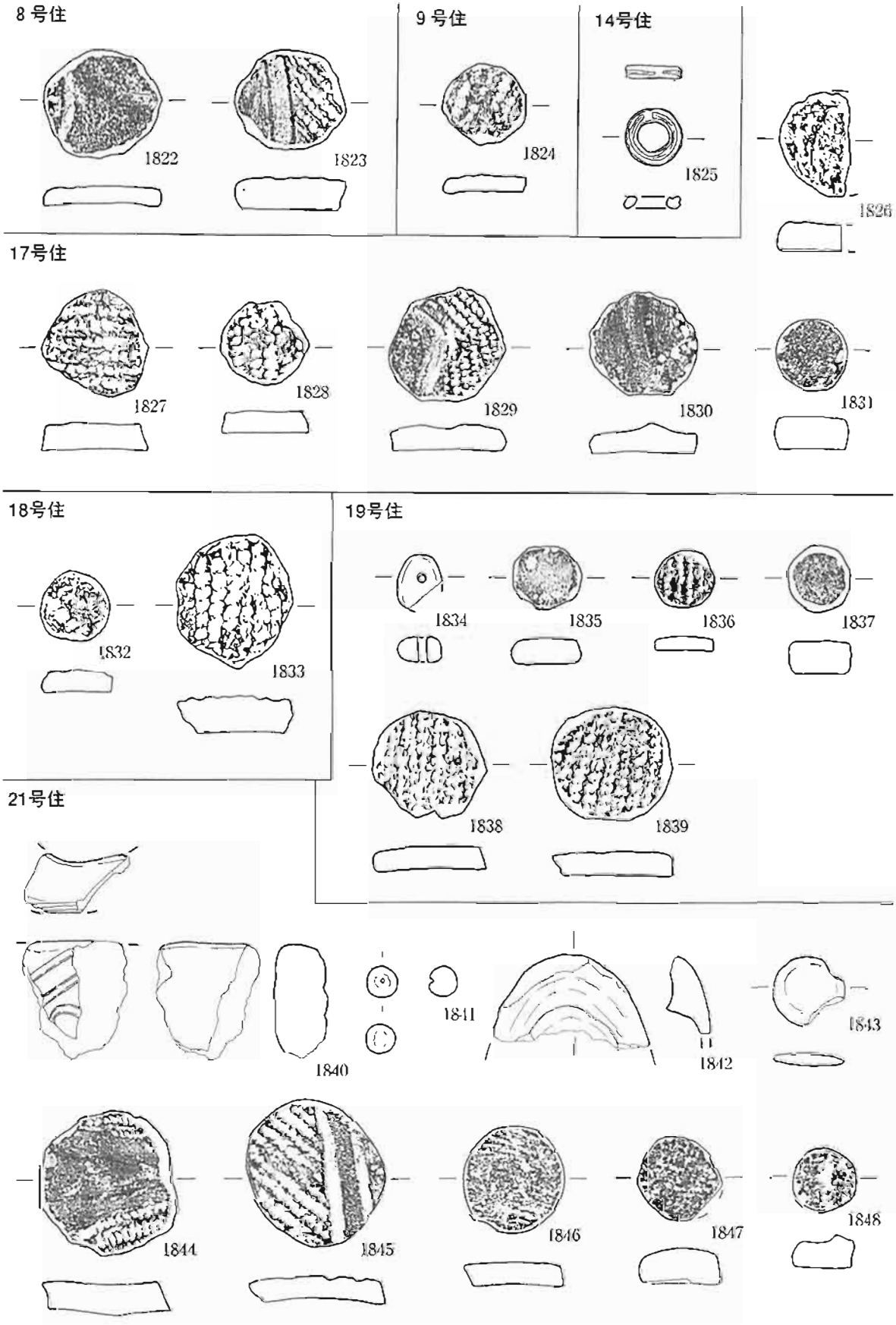
第160図　4層出土遺物(17)



第161図　4 層出土遺物(18)・5 層出土遺物

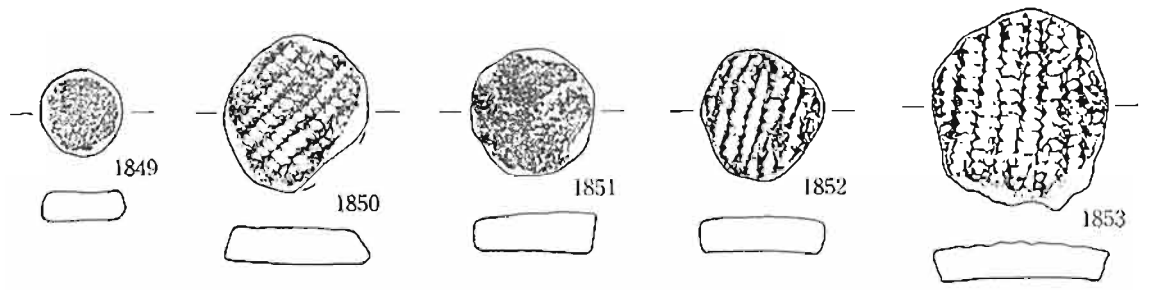


第162図　2・7号住居跡出土遺物・8号住居跡出土遺物(1)

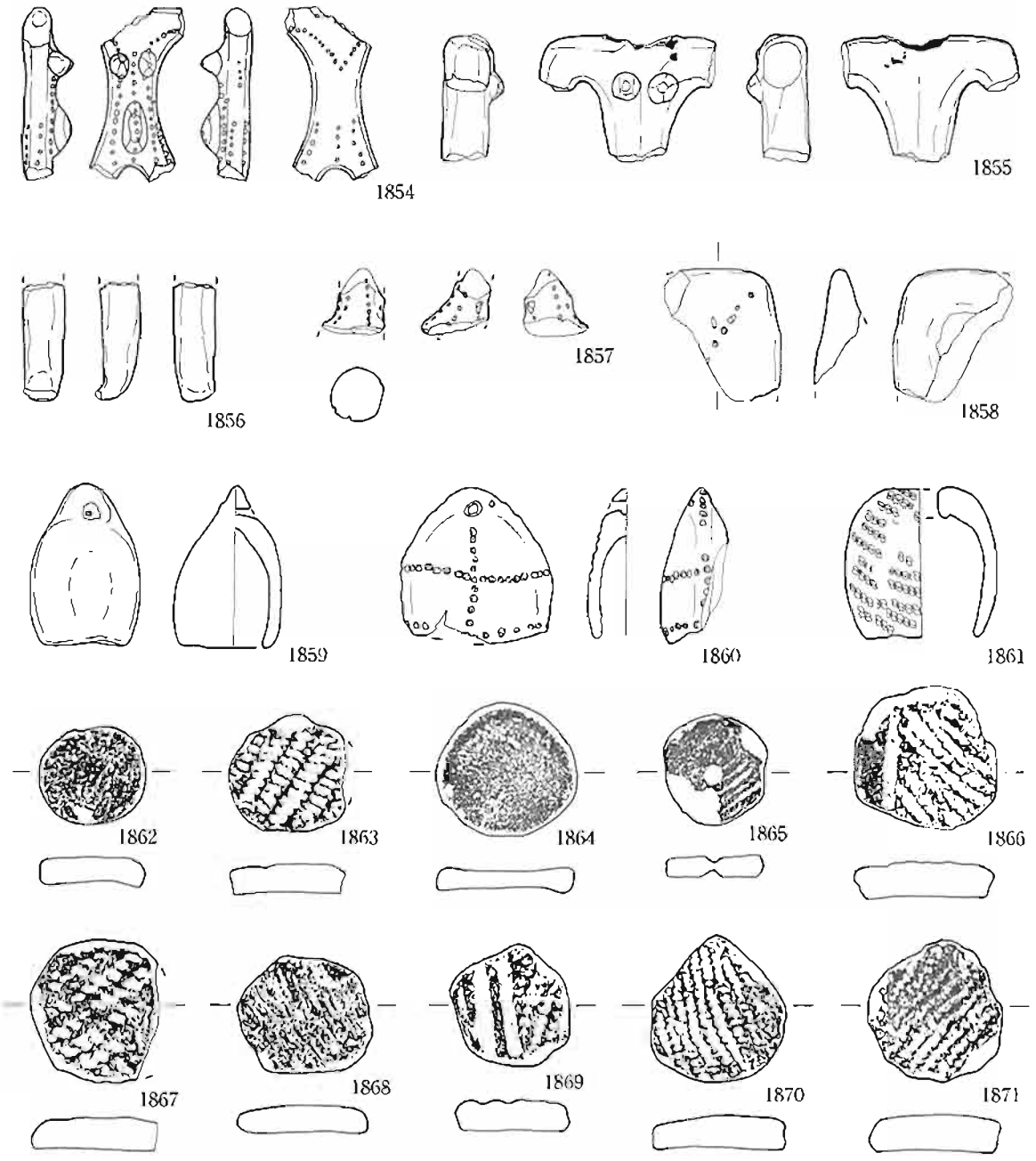


第163図　8号住居跡出土遺物(2)・9・14・17～19号住居跡出土遺物・21号住居跡出土遺物(1)

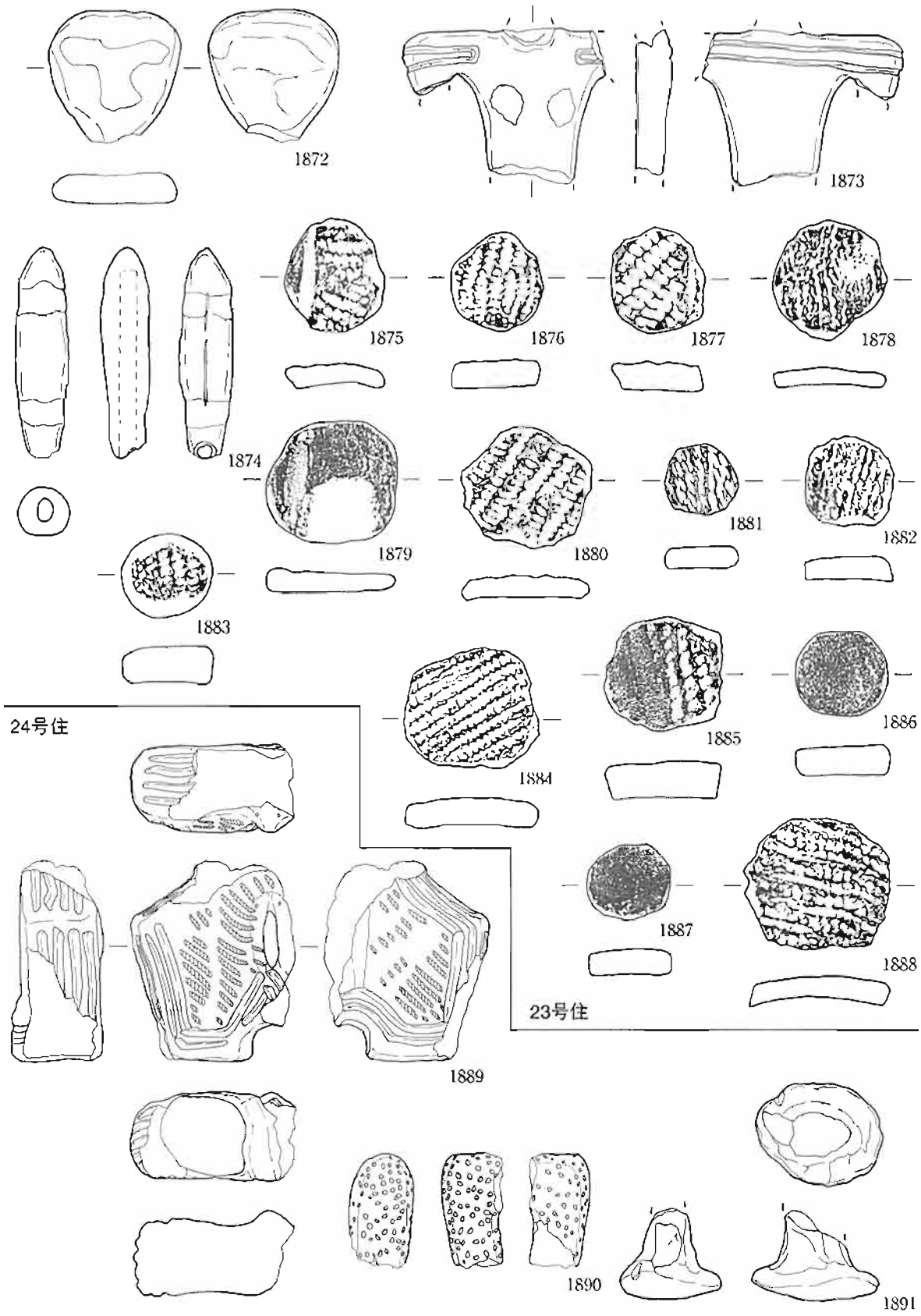
21号住



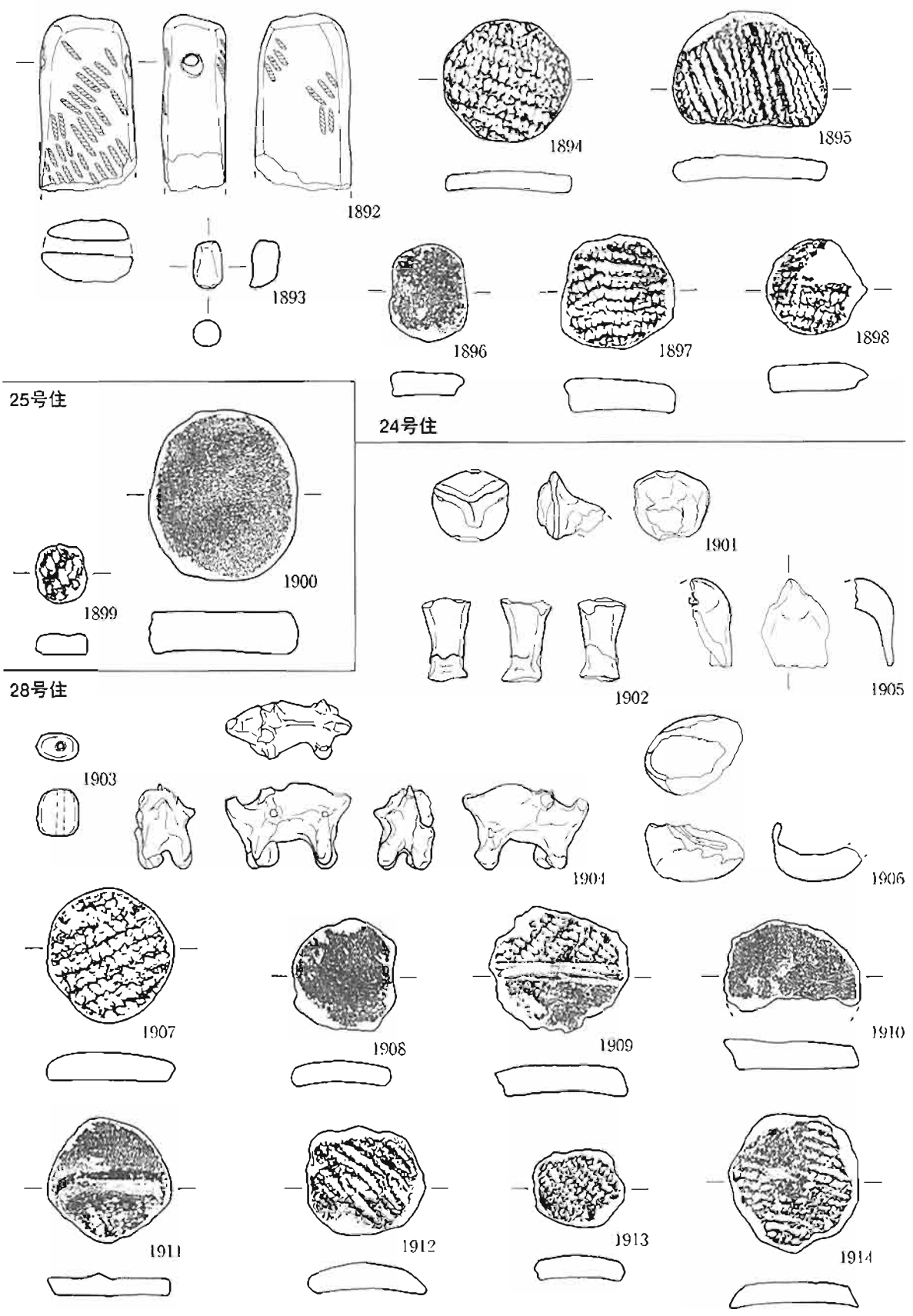
22号住



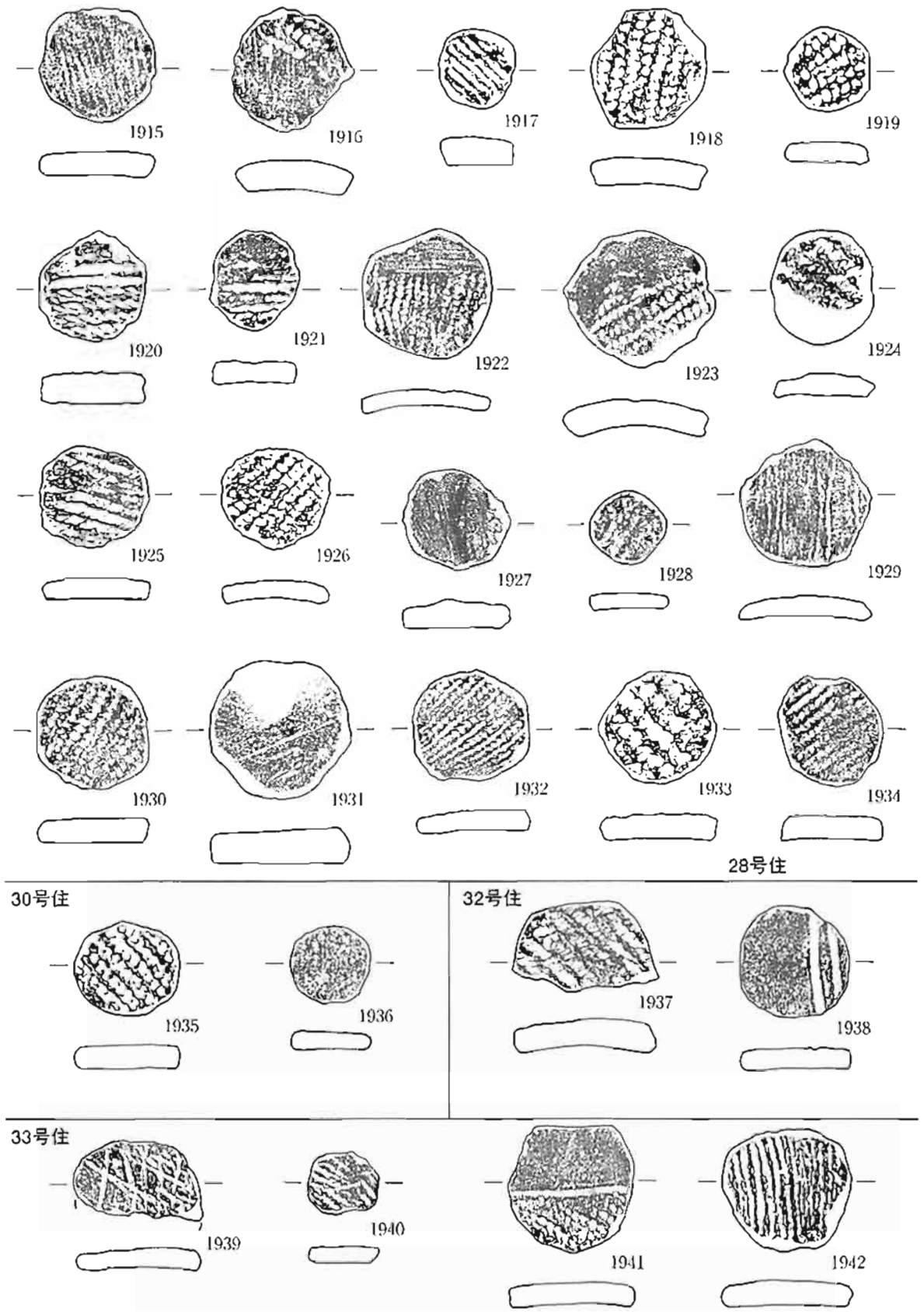
第164図　21号住居跡出土遺物（2）・22号住居跡出土遺物



第165図　23号住居跡出土遺物・24号住居跡出土遺物（1）

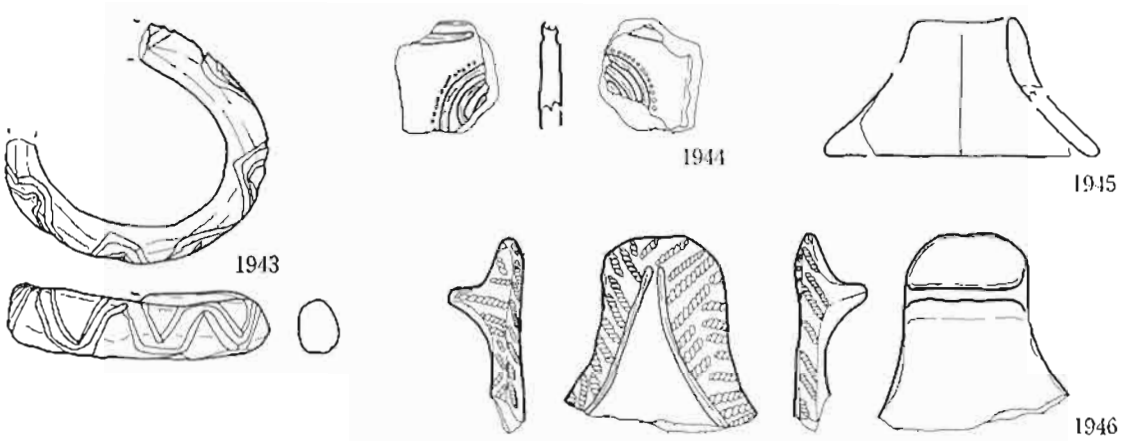


第166図　24号住居跡出土遺物（2）・25号住居跡出土遺物・28号住居跡出土遺物（1）

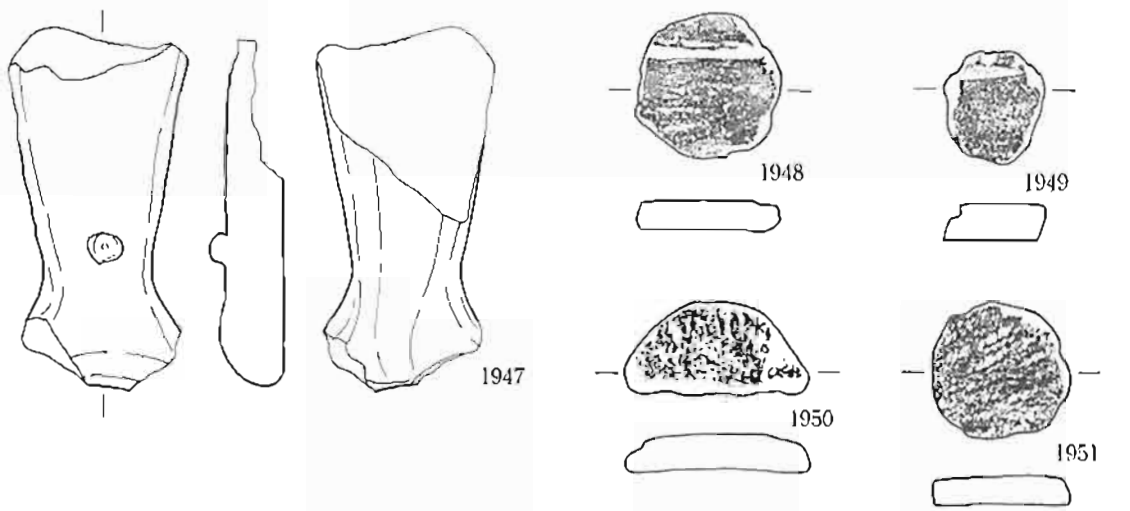


第167図　28号住居跡出土遺物（2）・30・32・33号住居跡出土遺物

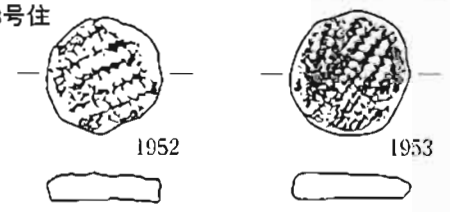
34号住



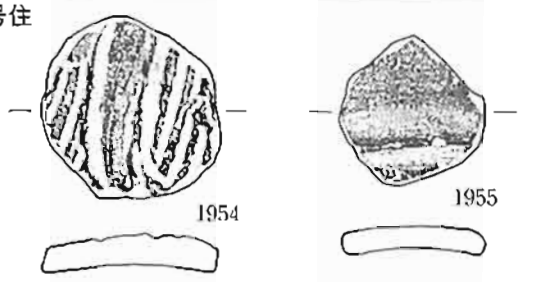
35号住



38号住

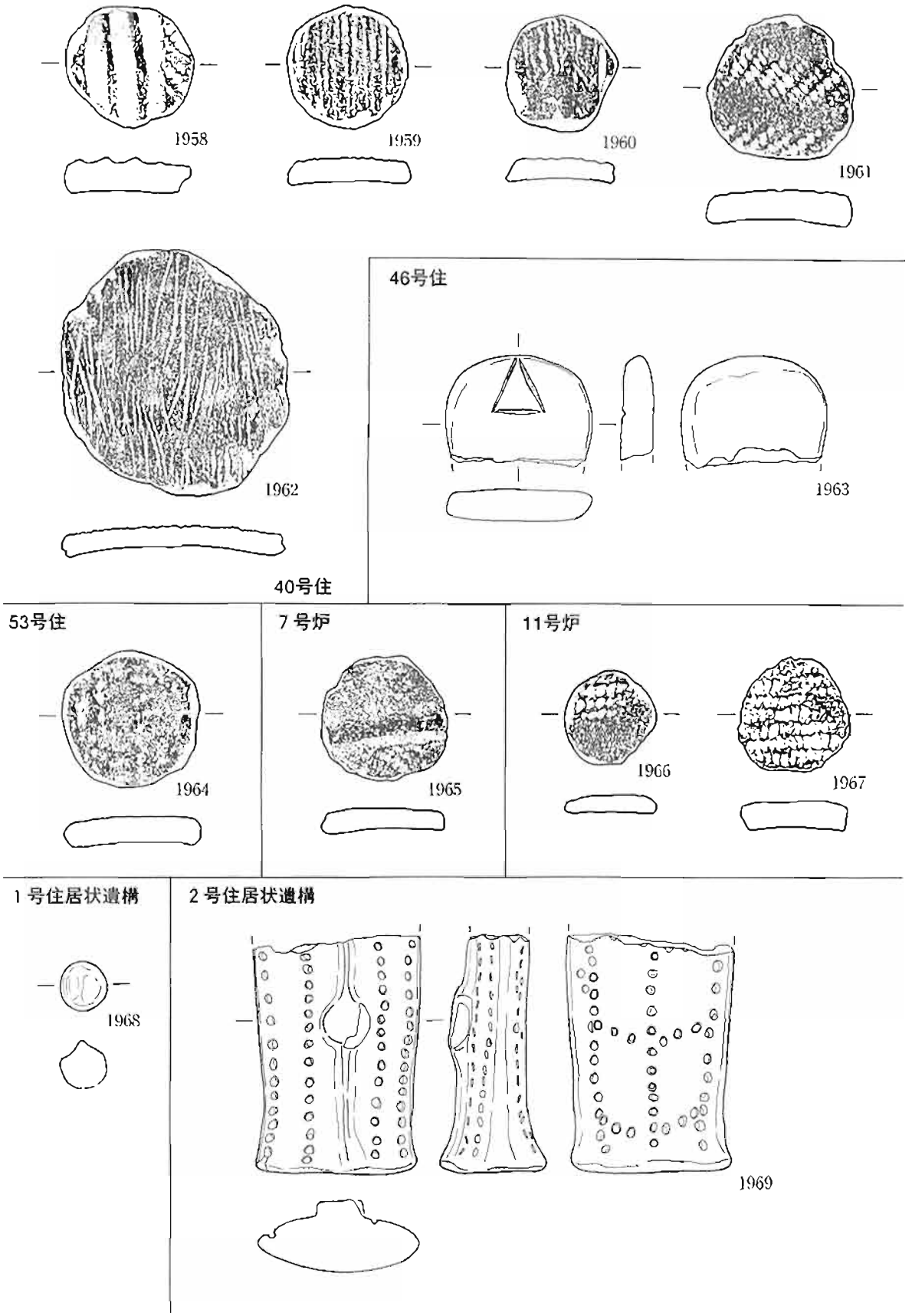


39号住

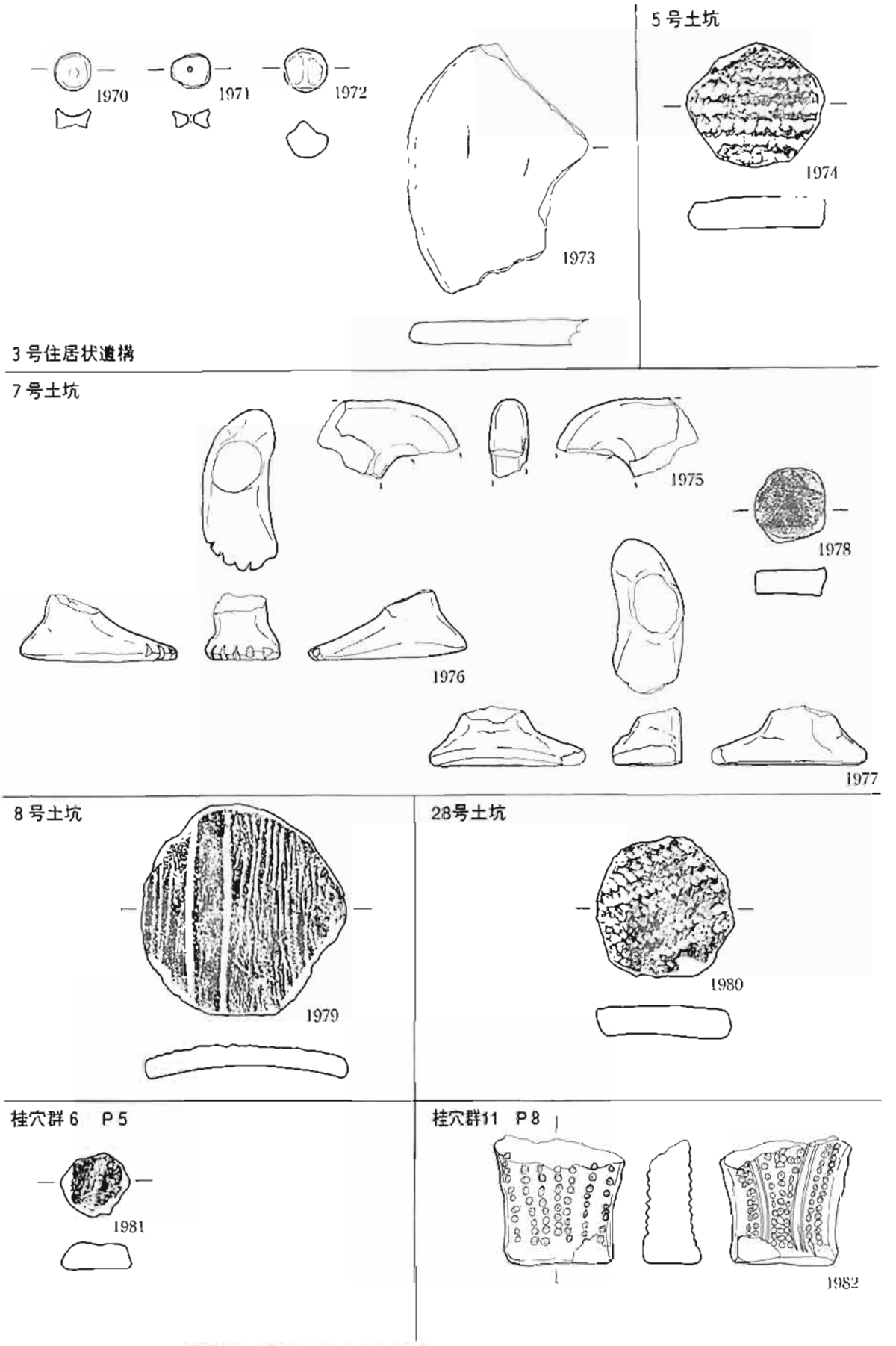


40号住

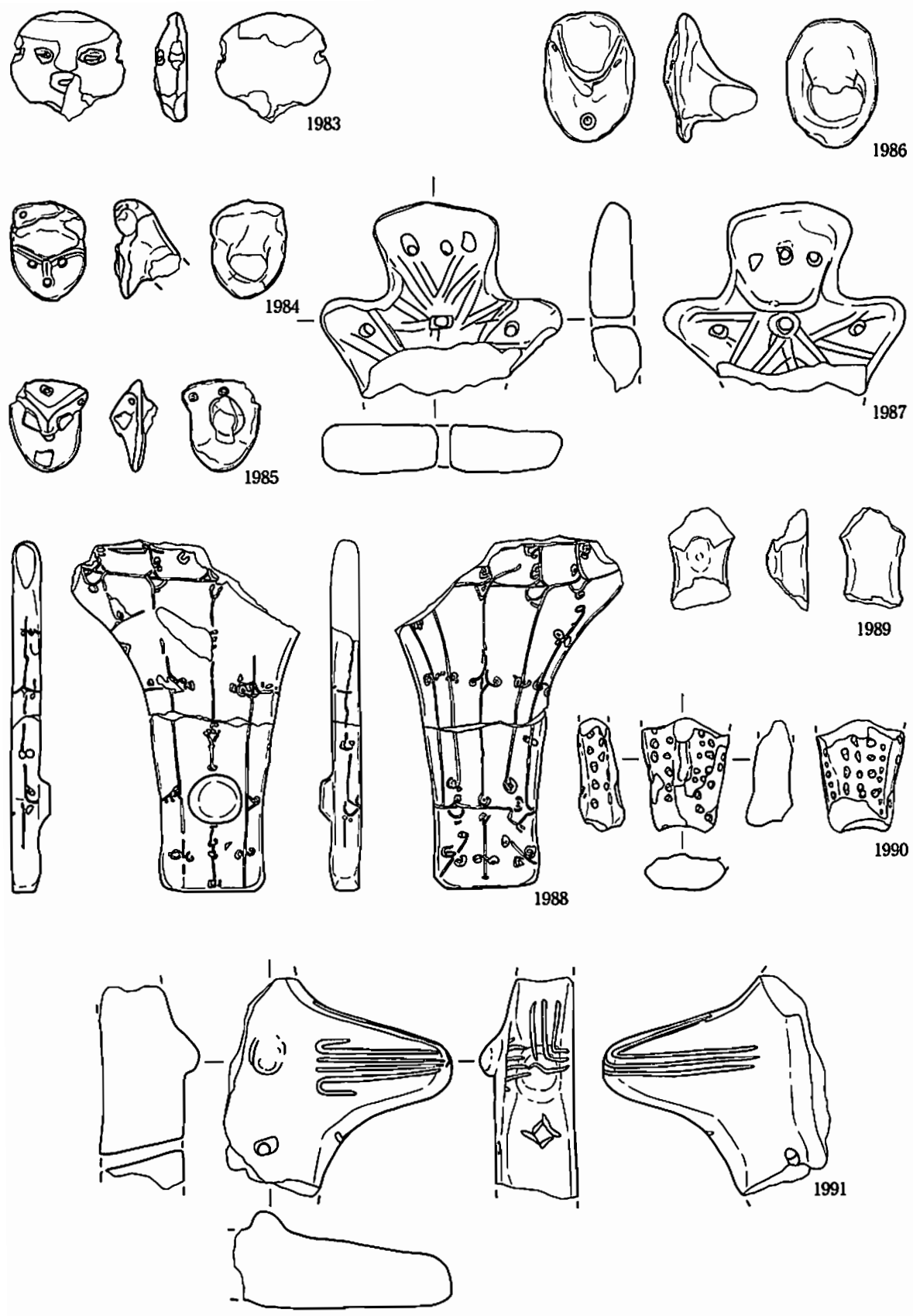
第168図　34・35・38・39号住居跡出土遺物・40号住居跡出土遺物（1）



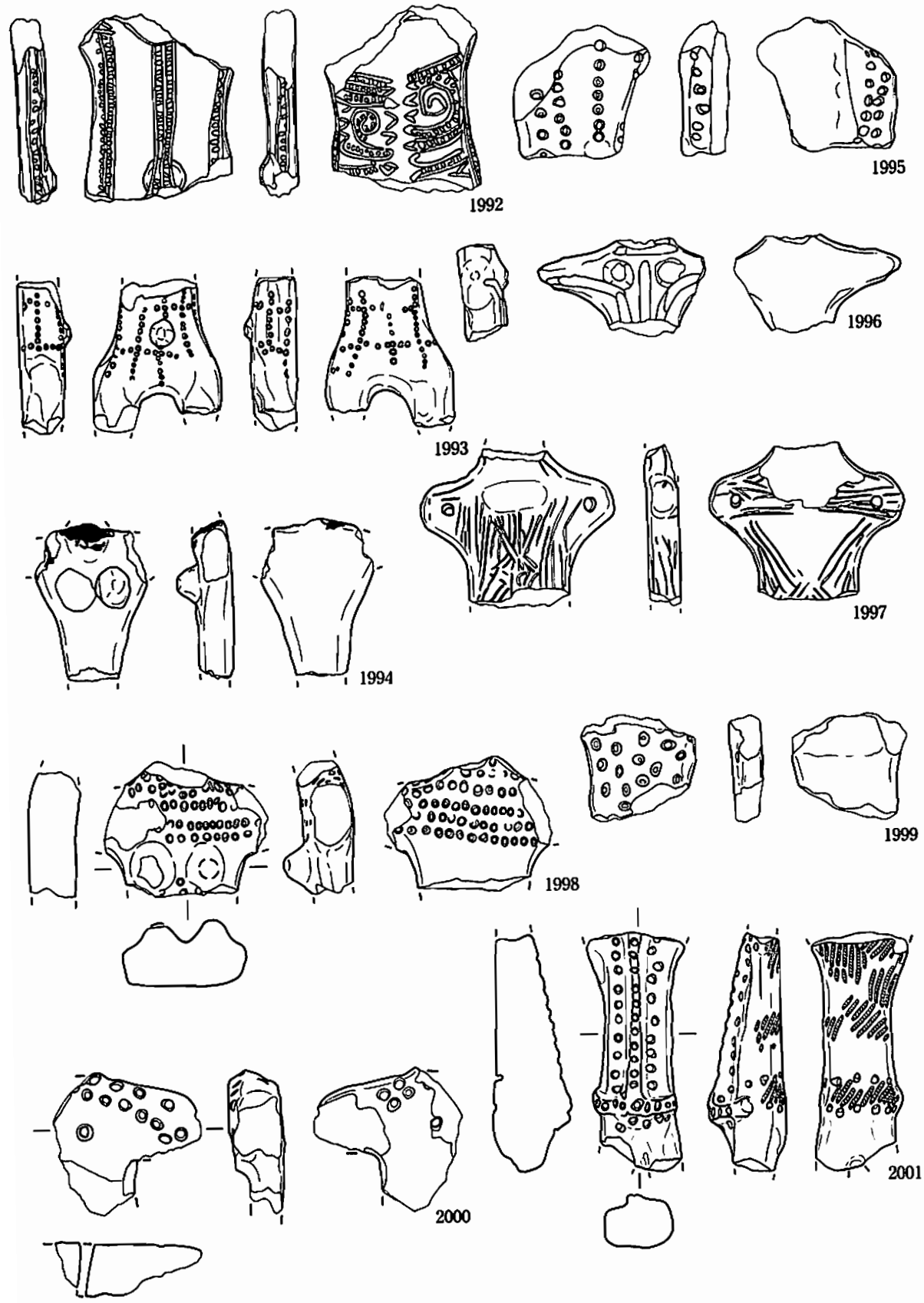
第169図　40号住居跡出土遺物（2）・46・53号住居跡出土遺物、7・11号炉出土遺物、1・2号住居状遺構出土遺物



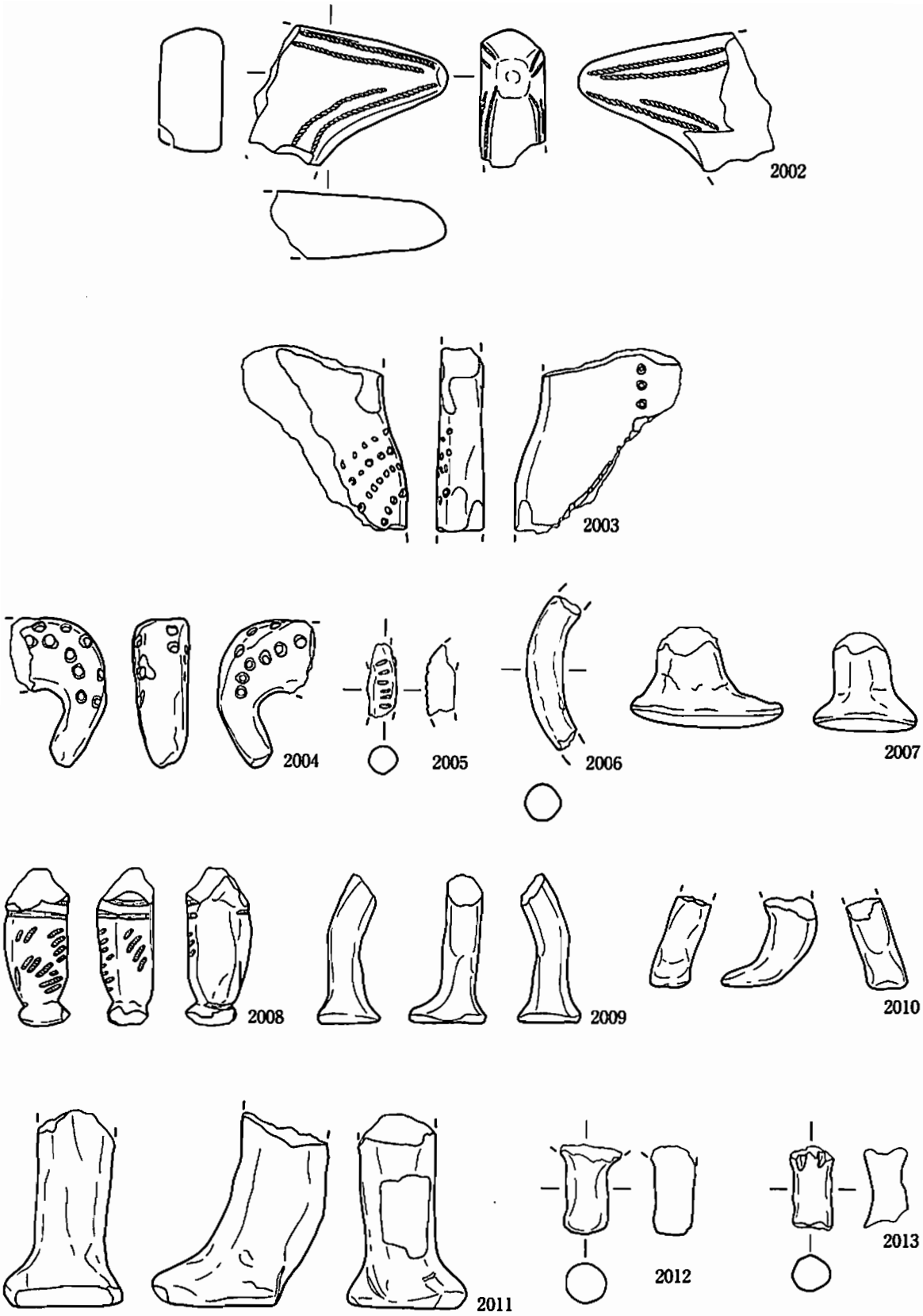
第170図　3号住居状遺構出土遺物、5・7・8・28号土坑出土遺物、柱穴群6P5・柱穴群11P8出土遺物



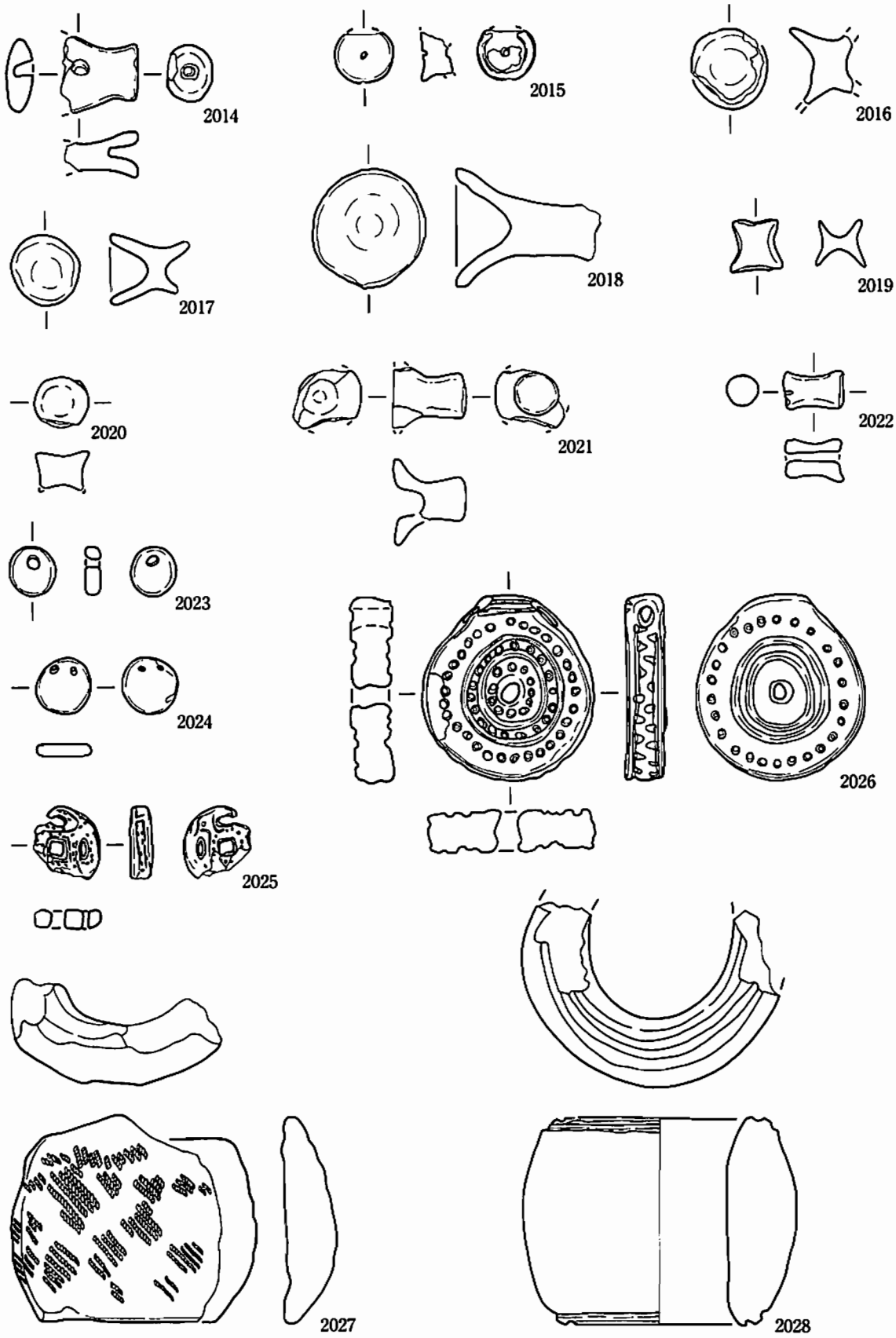
第171図　土偶（1）



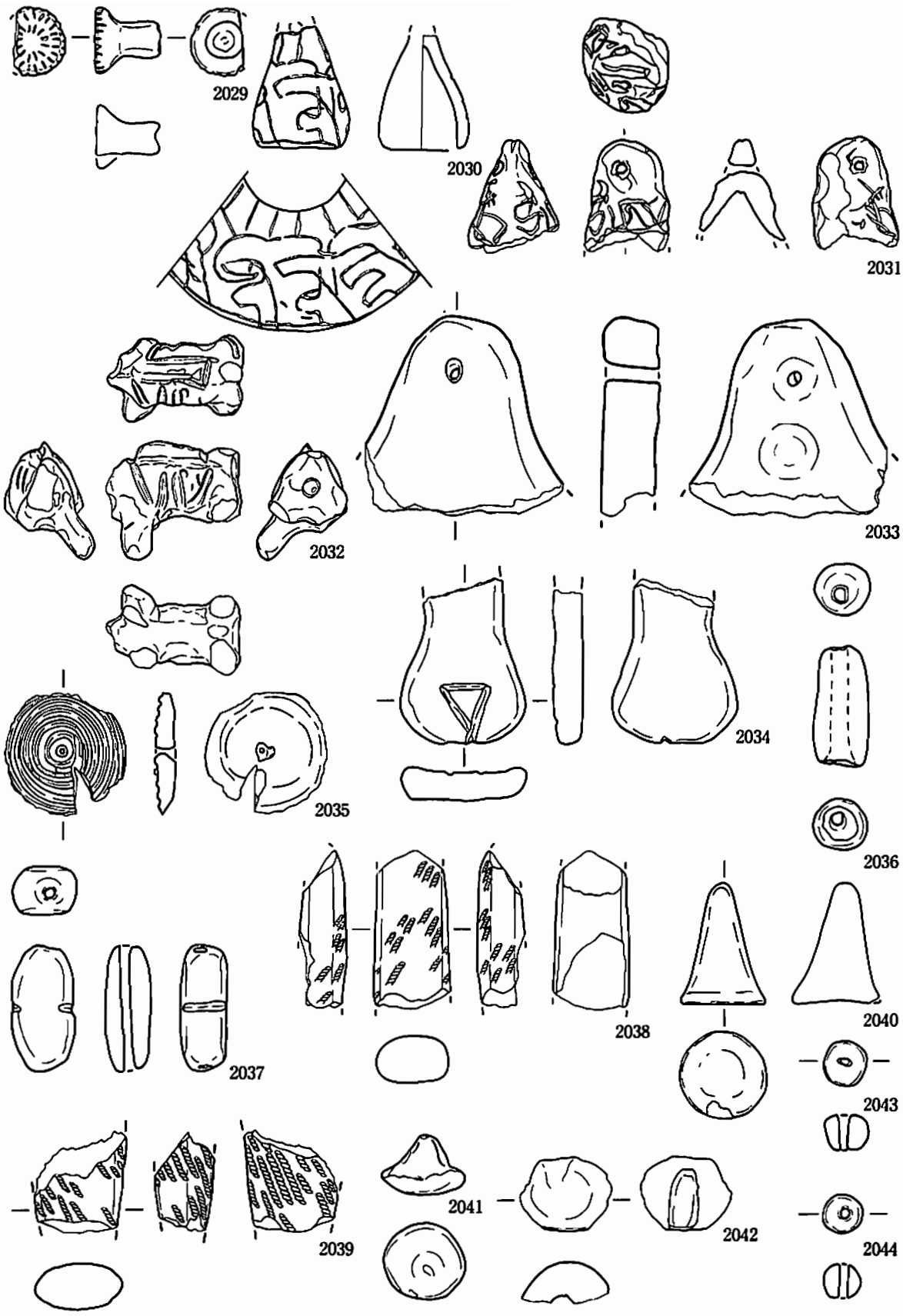
第172図　土偶(2)



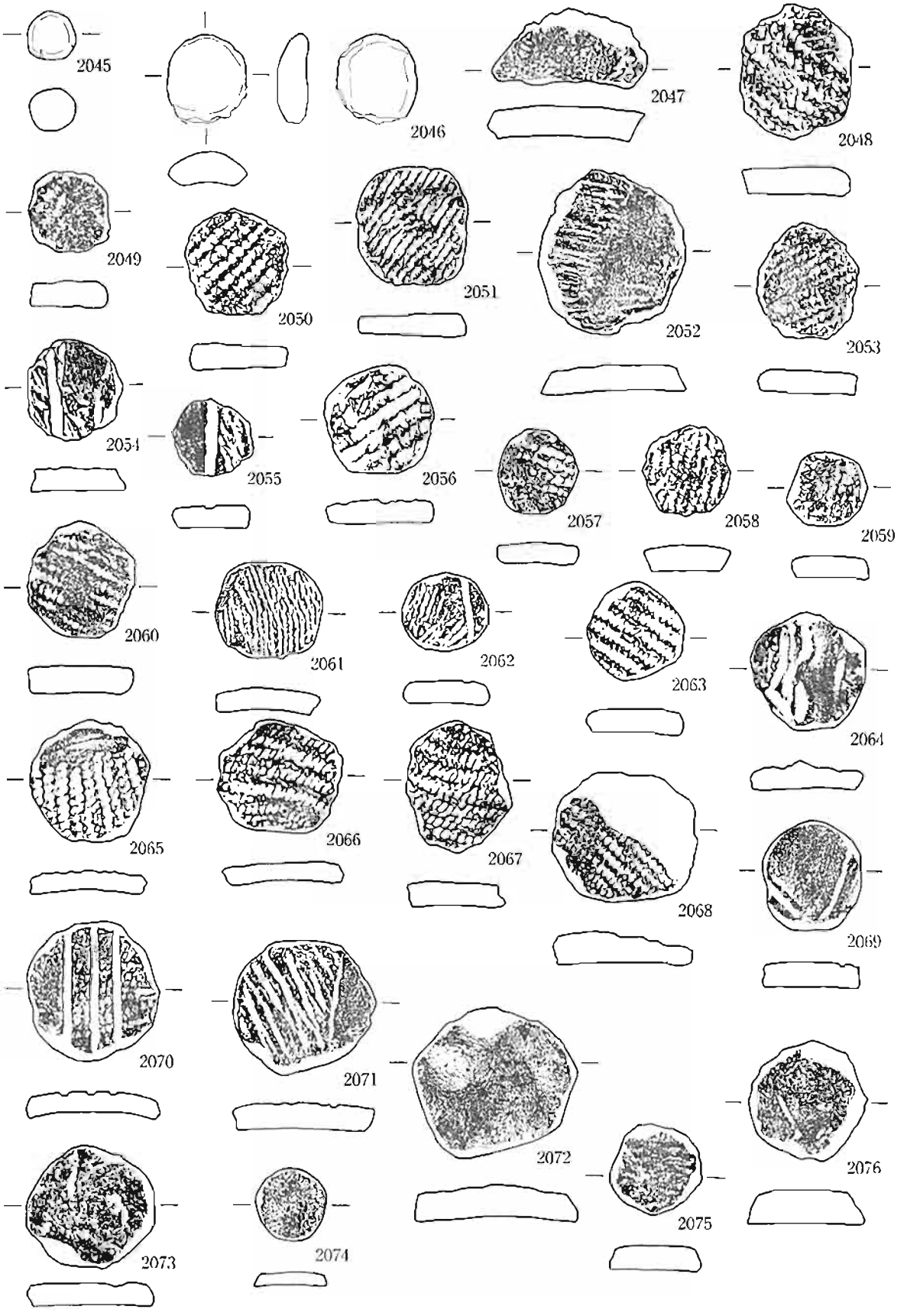
第173図　土偶（3）



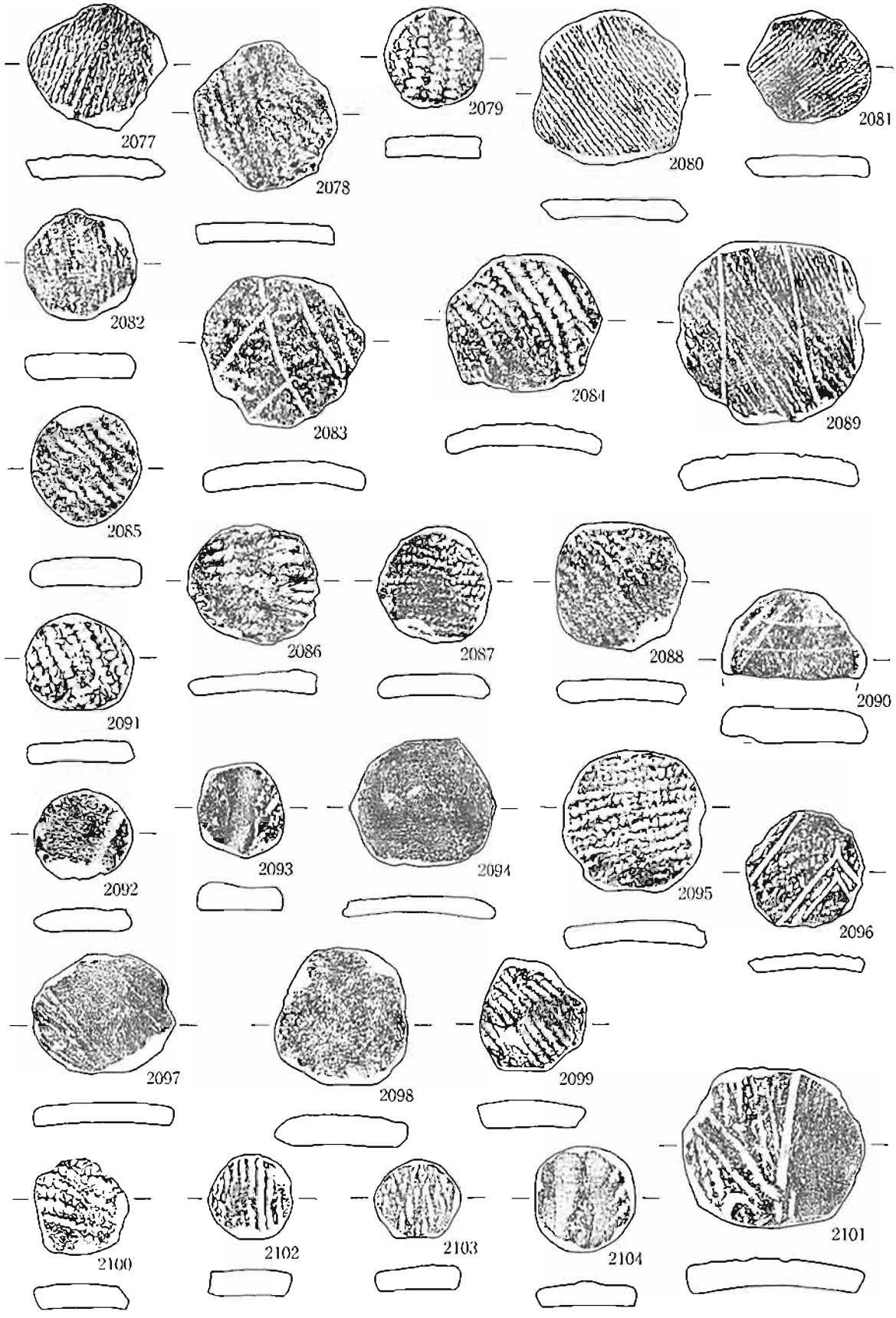
第174図　耳栓、垂飾品、腕輪



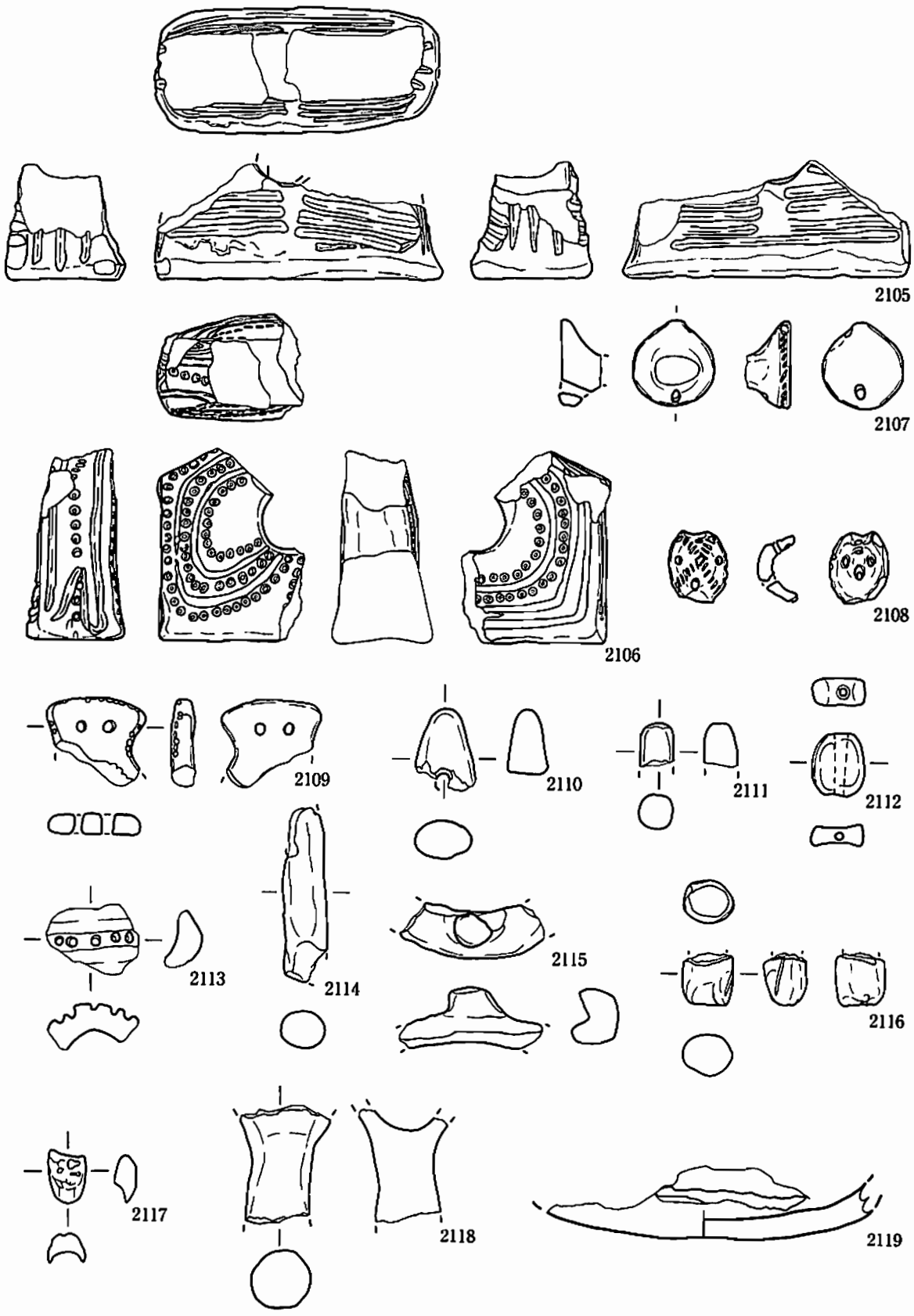
第175図　耳栓、鐸形、動物形土製品等



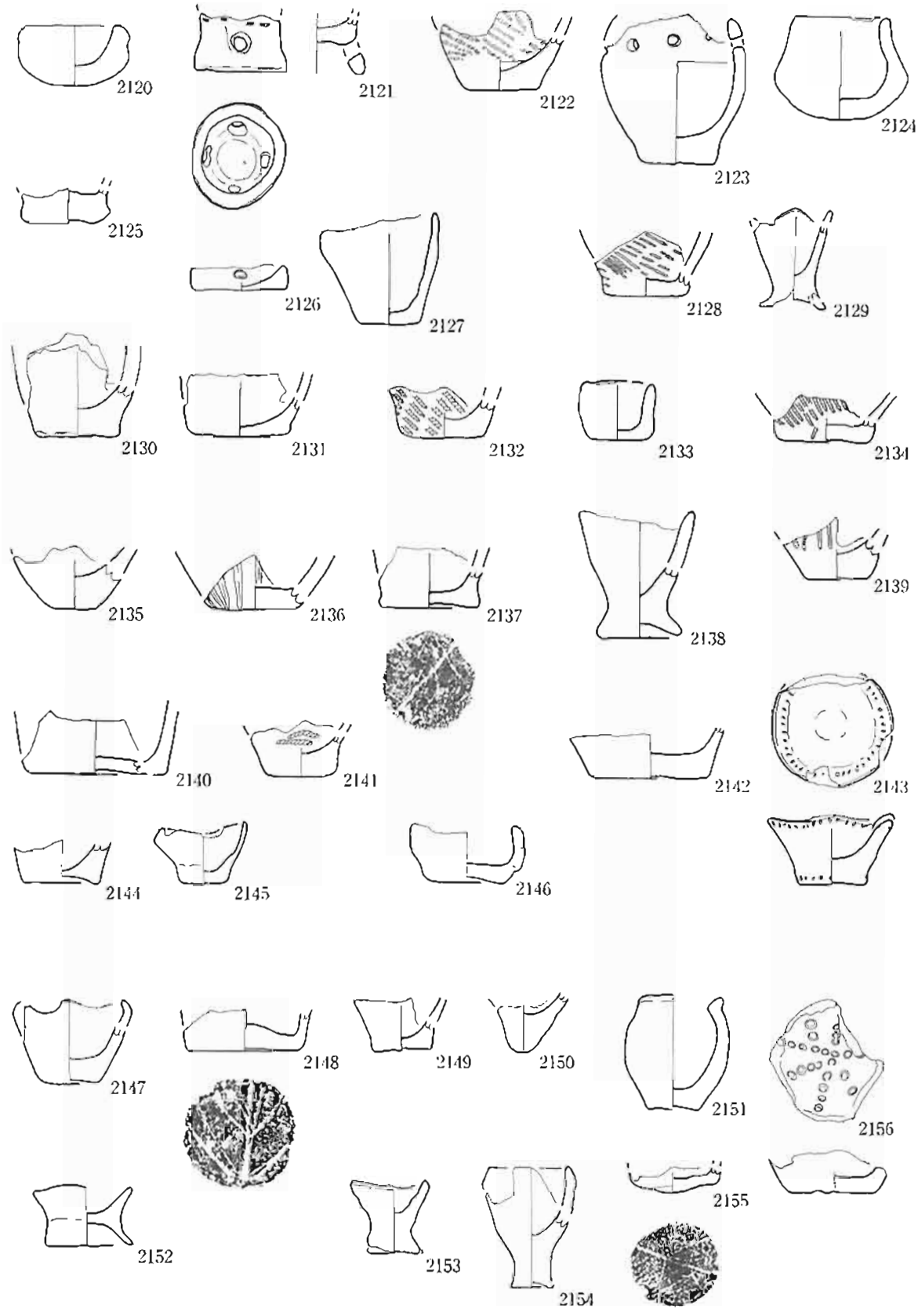
第176図　土玉等、円盤状土製品（1）



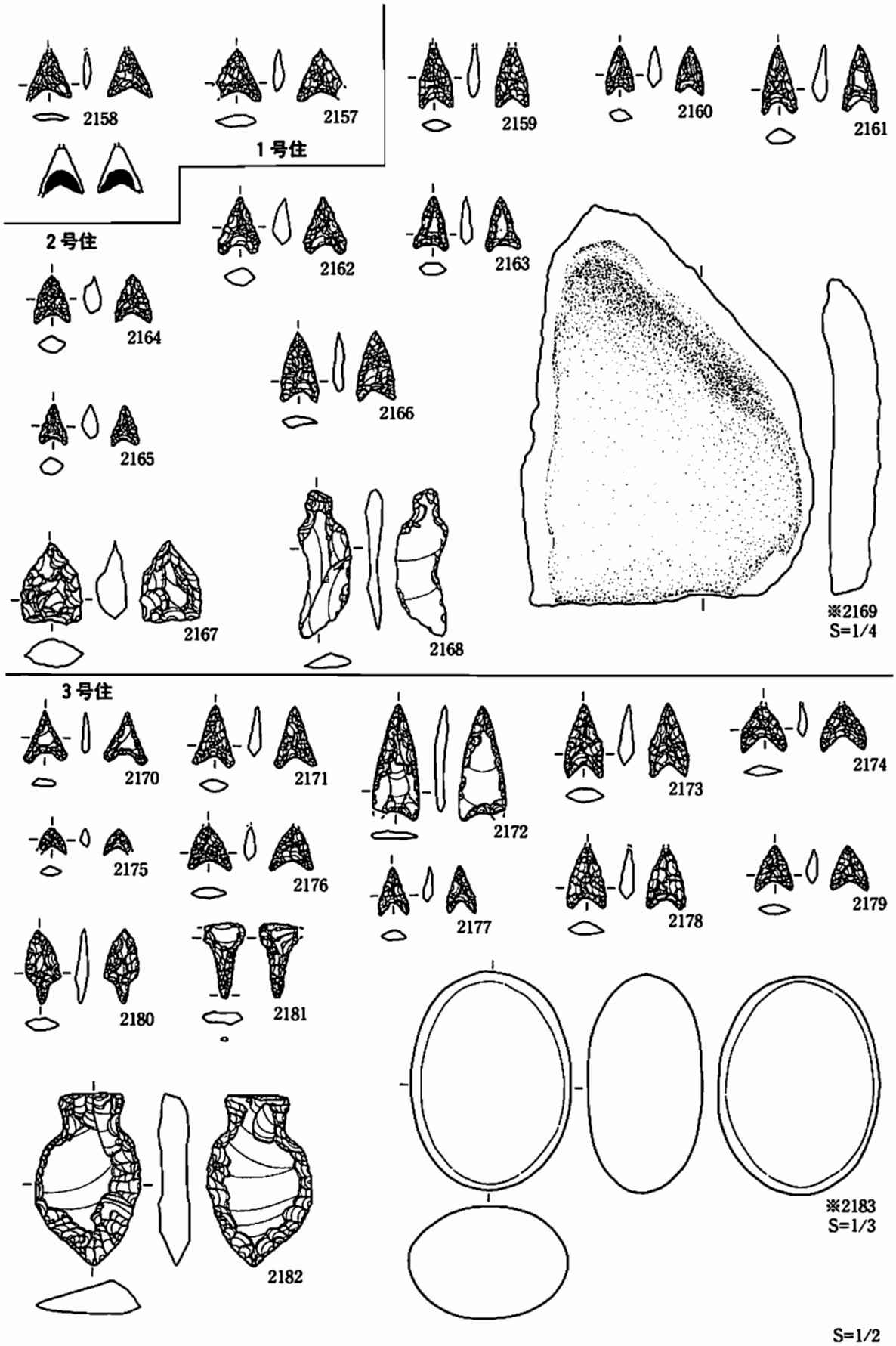
第177図　円盤状土製品（2）


2105
2107
2106
2108
2109
2110
2111
2112
2113
2114
2115
2116
2117
2118
2119

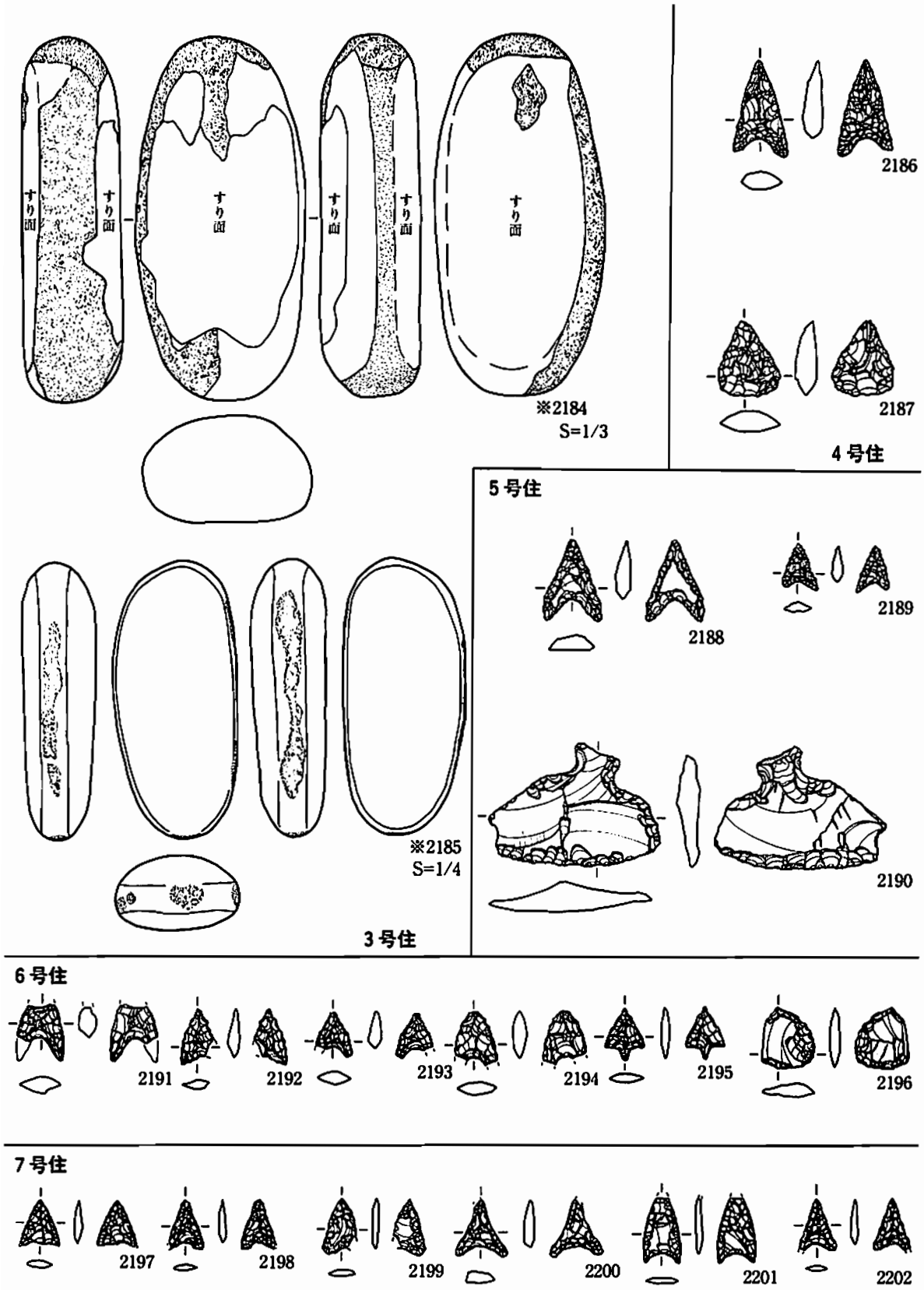
第178図　土製品（不明）



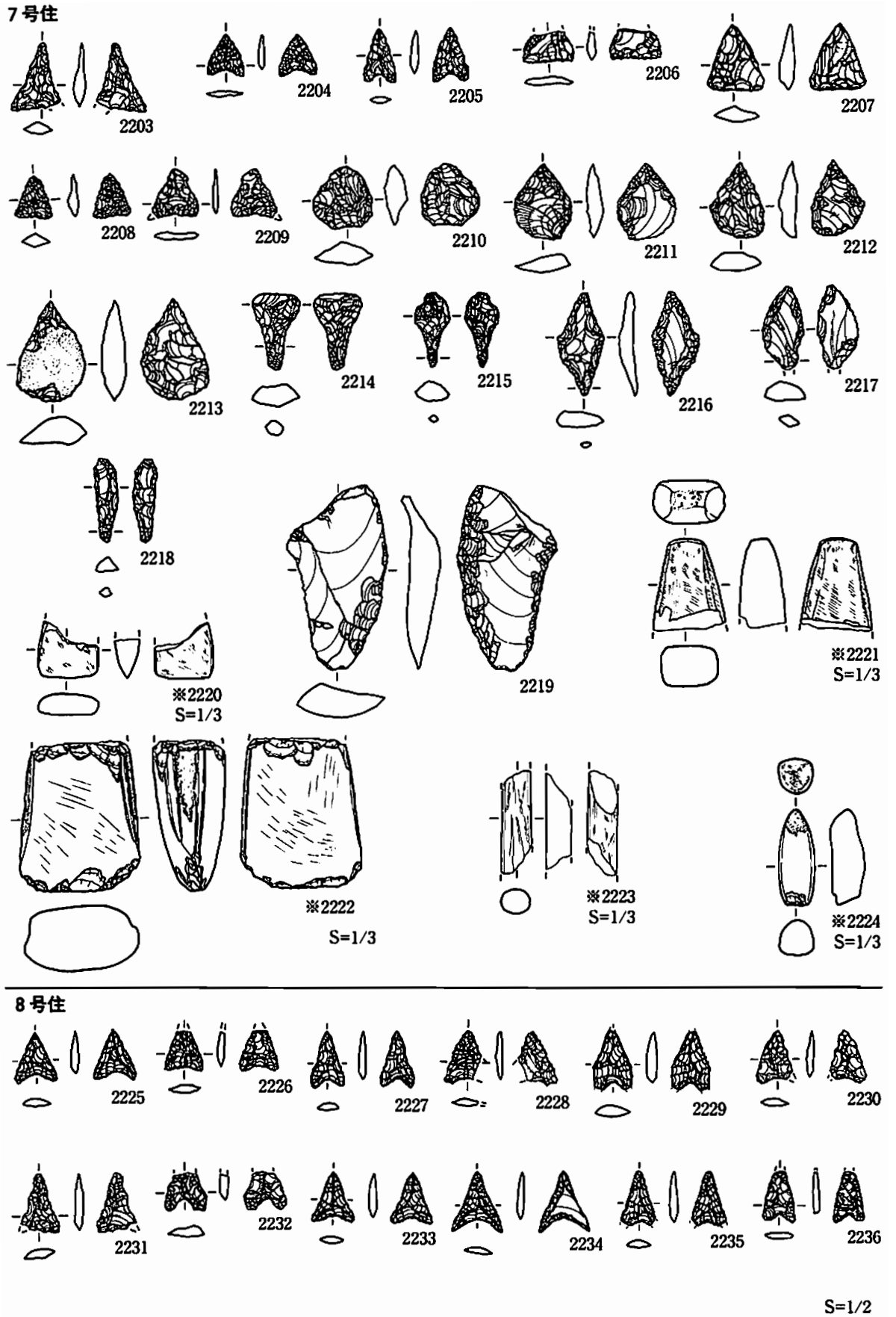
第179図　遺構内外出土ミニチュア土器（1）



第180図　1・2号住居跡出土遺物・3号住居跡出土遺物(1)

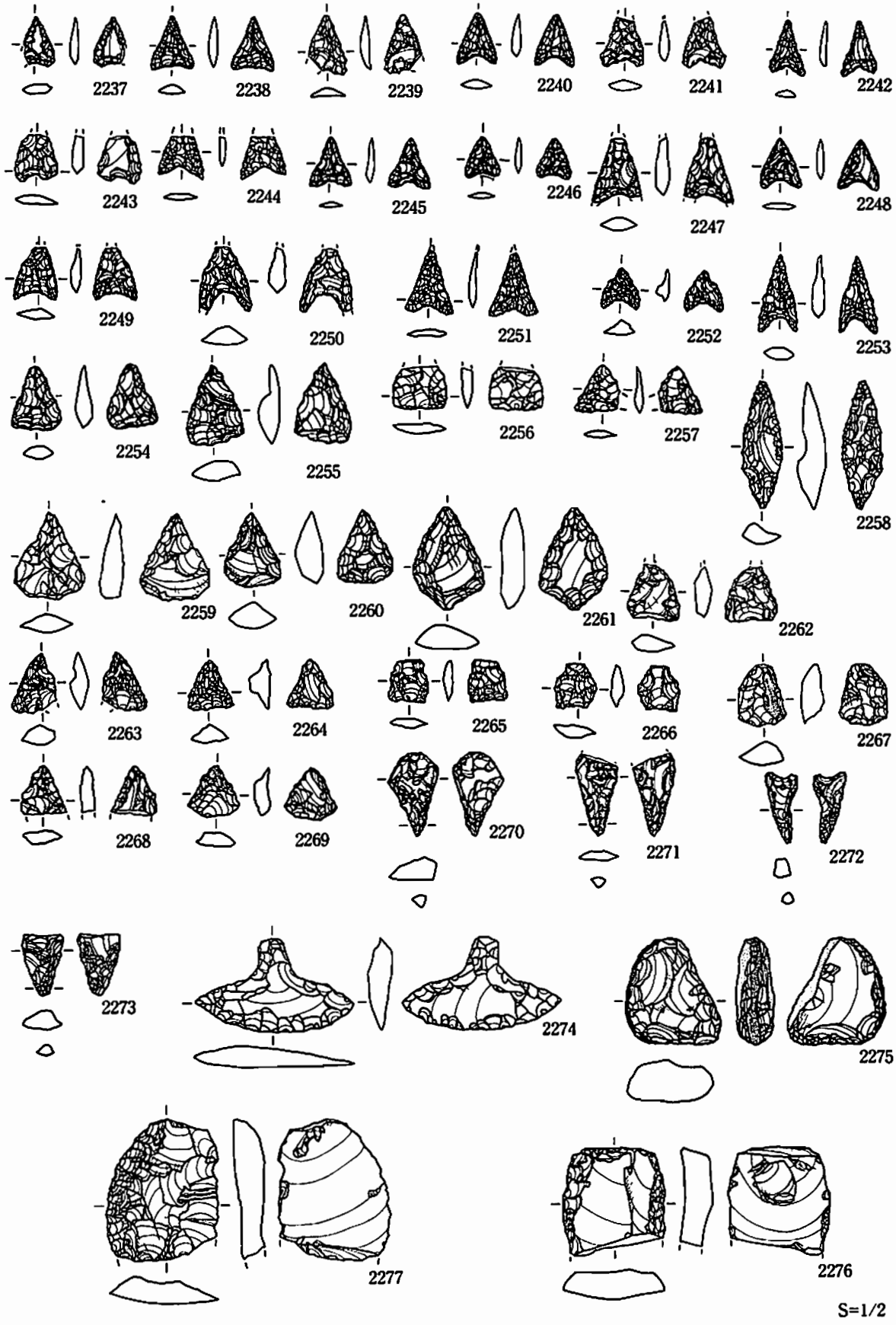


第181図　3号住居跡出土遺物（2）・4～6号住居跡出土遺物・7号住居跡出土遺物（1）



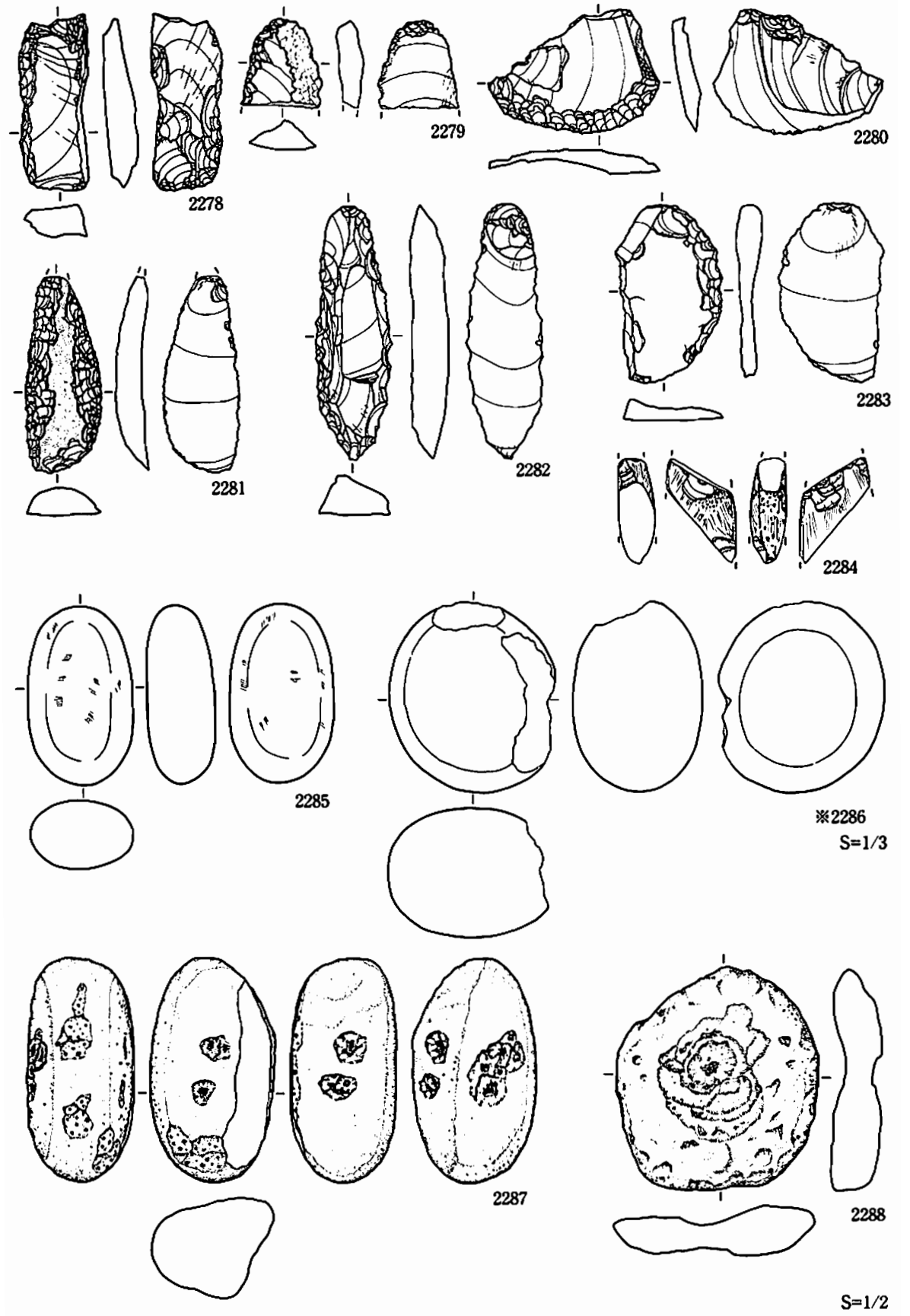
第182図　7号住居跡出土遺物(2)・8号住居跡出土遺物(1)

8号住



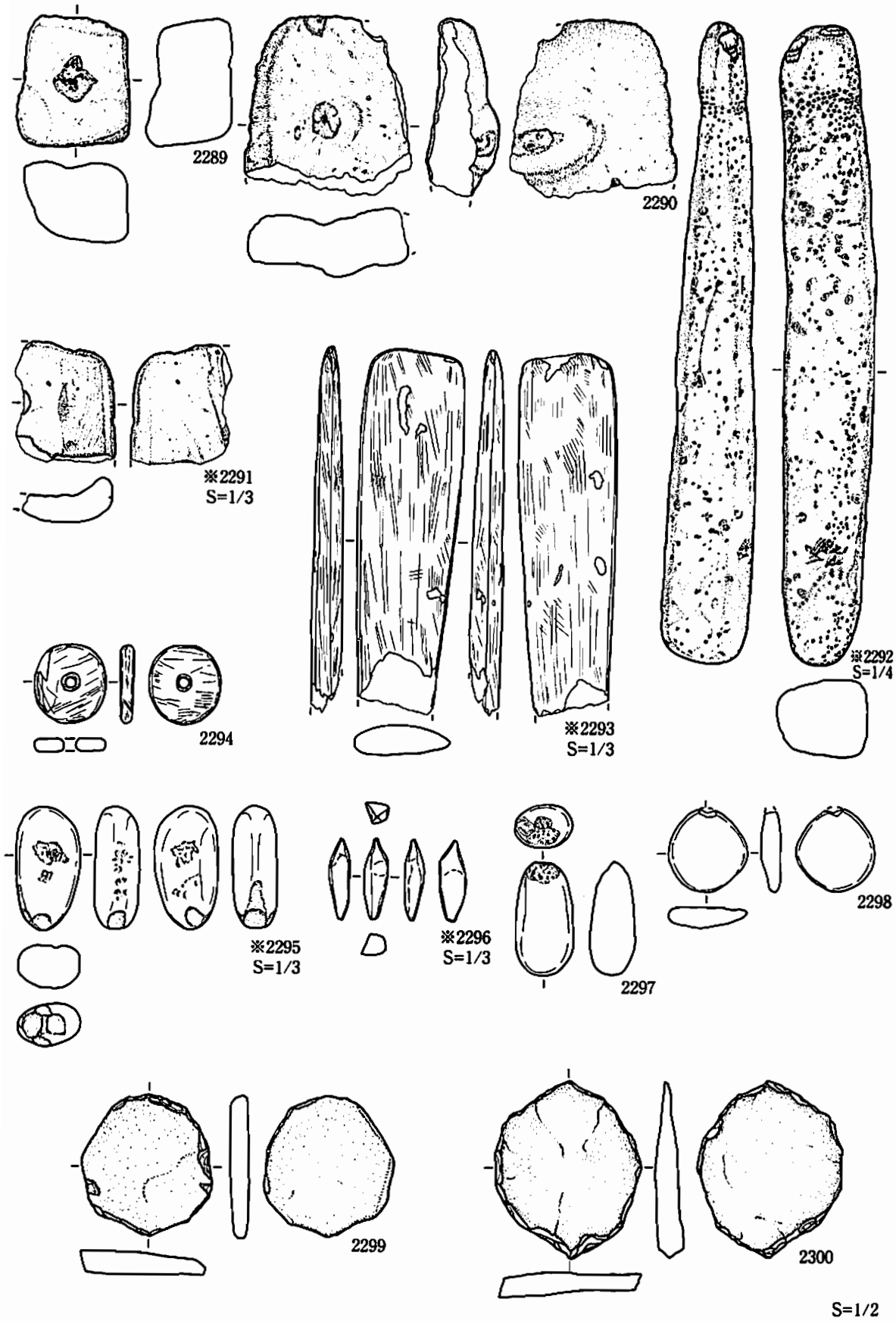
第183図　8号住居跡出土遺物（2）

8号住



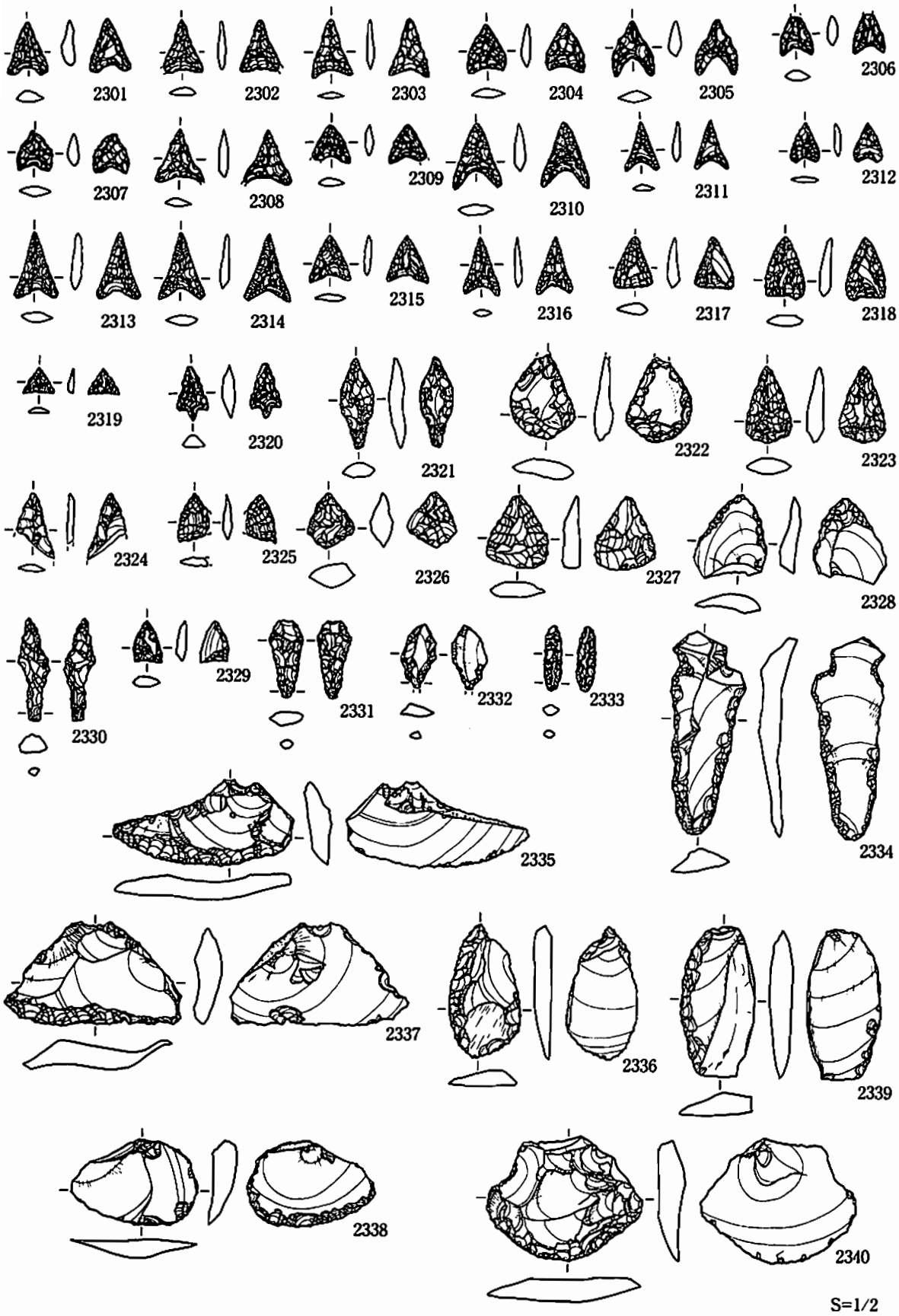
第184図　8号住居跡出土遺物(3)

8号住



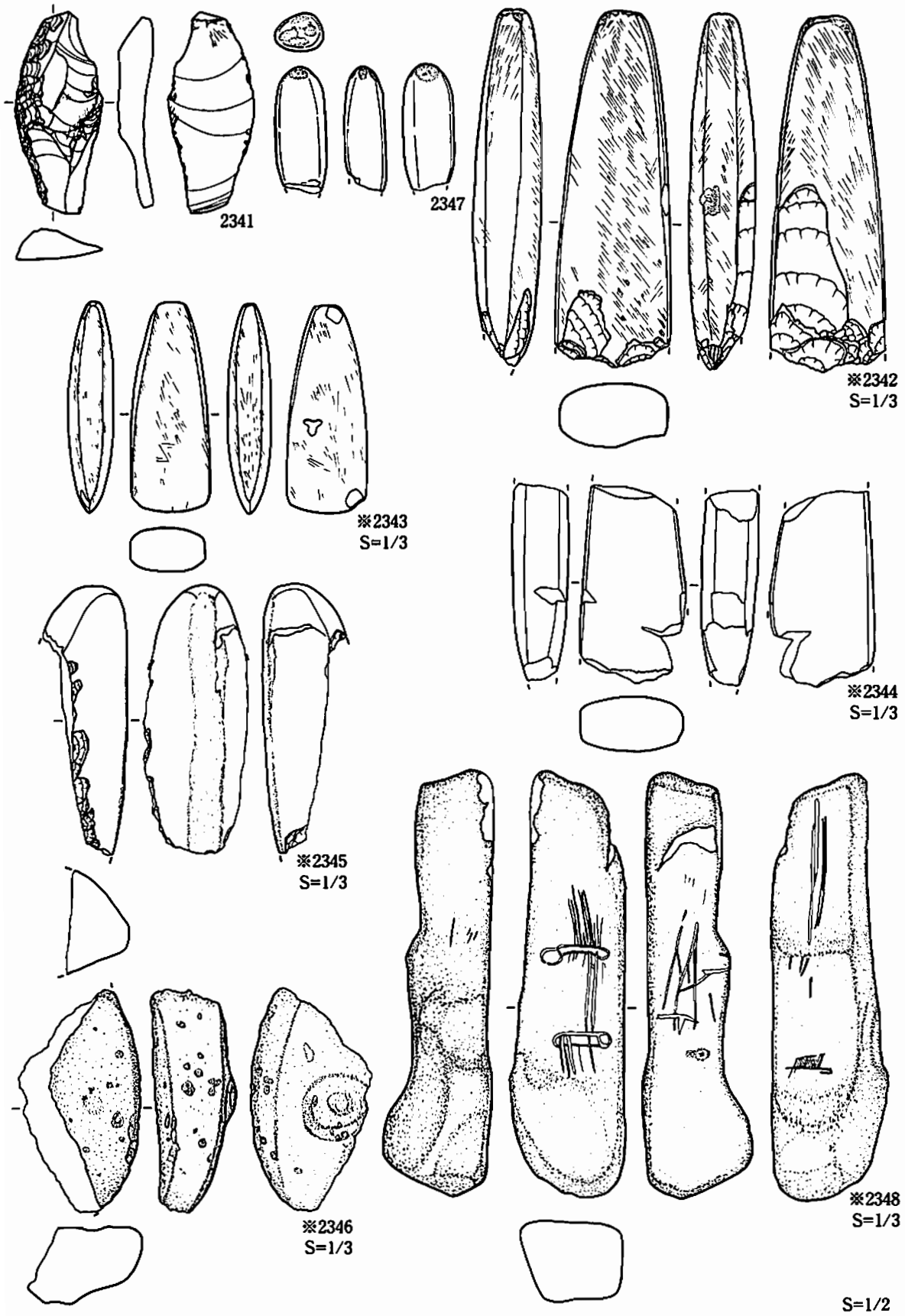
第185図　8号住居跡出土遺物(4)

9号住

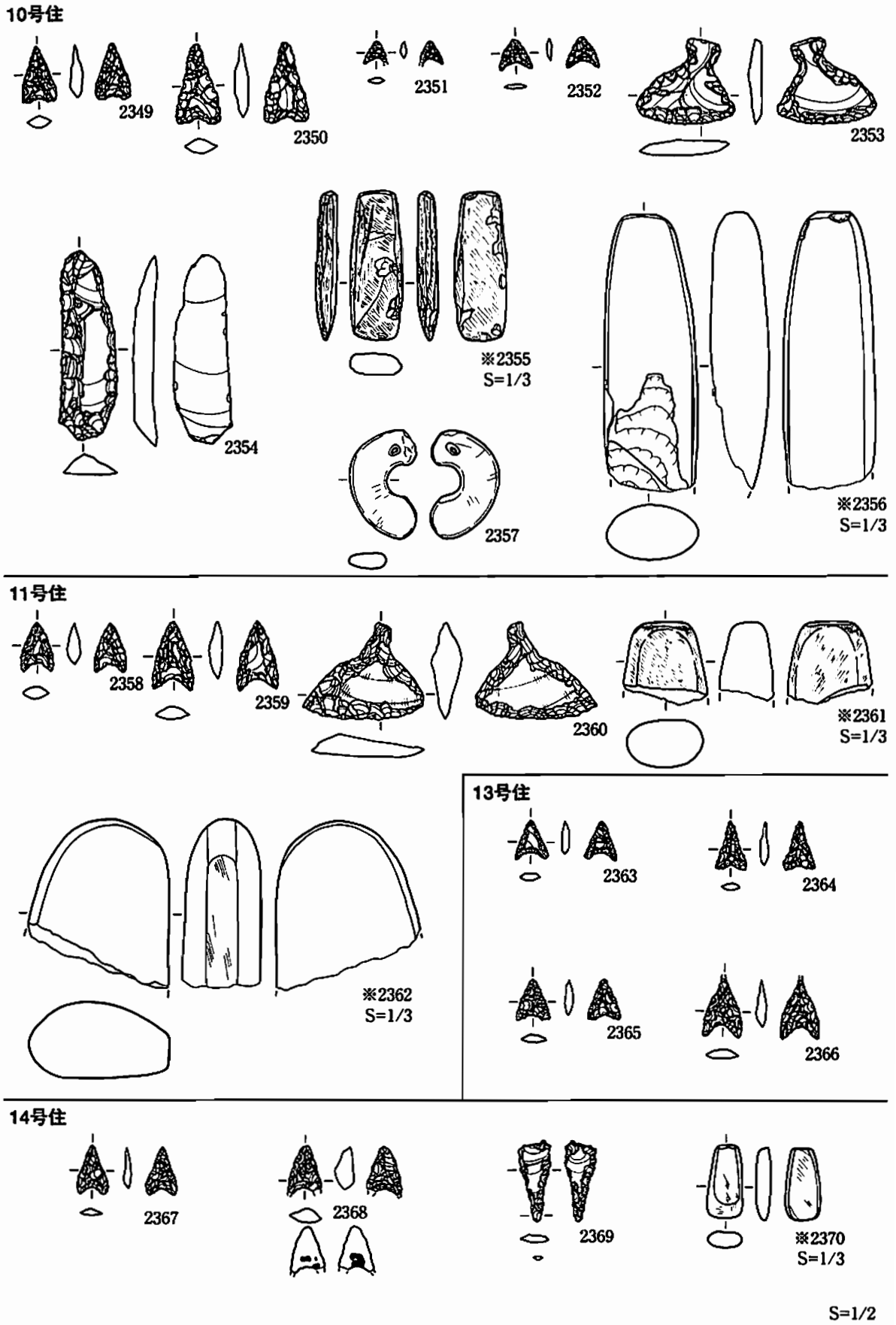


第186図　9号住居跡出土遺物（1）

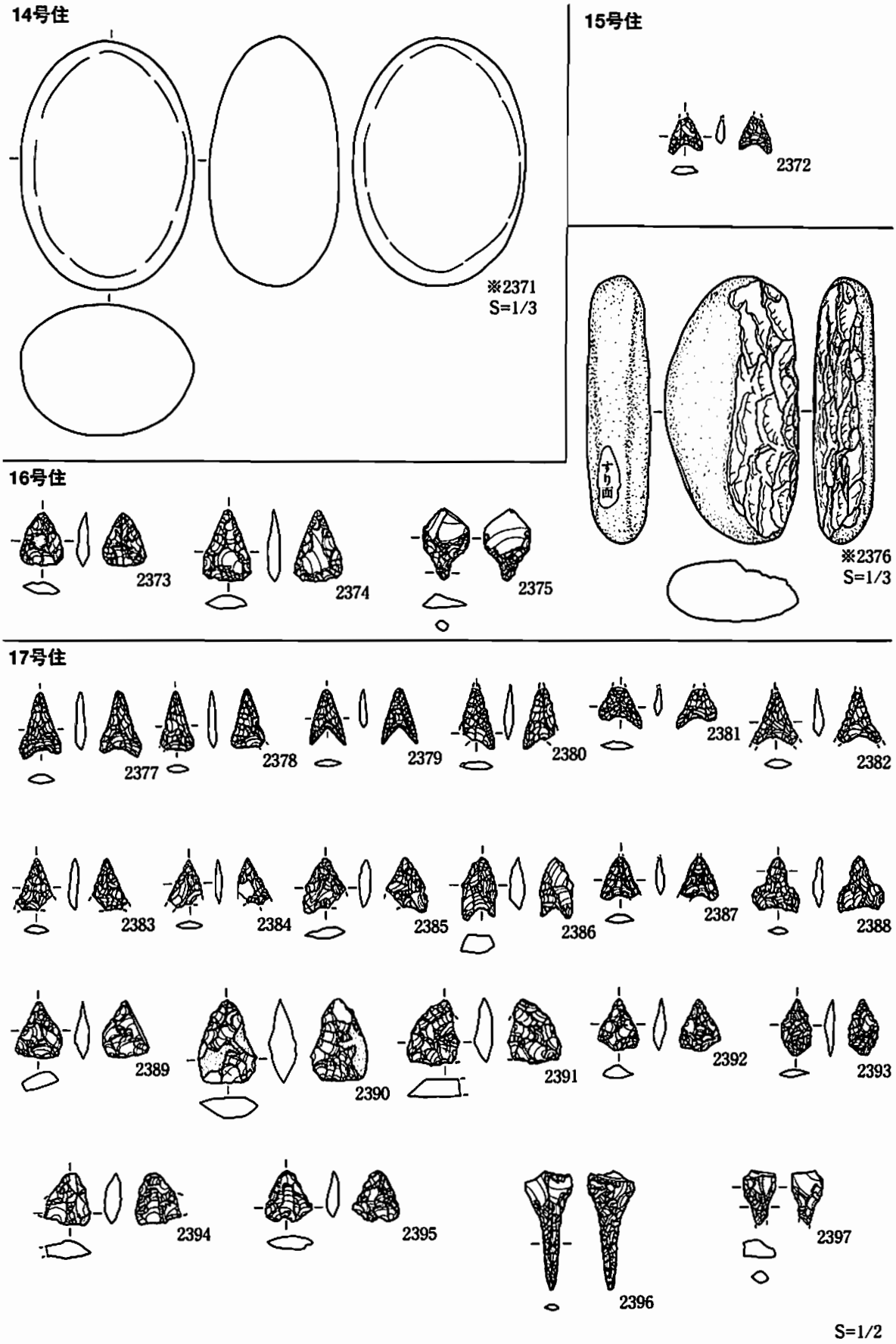
9号住



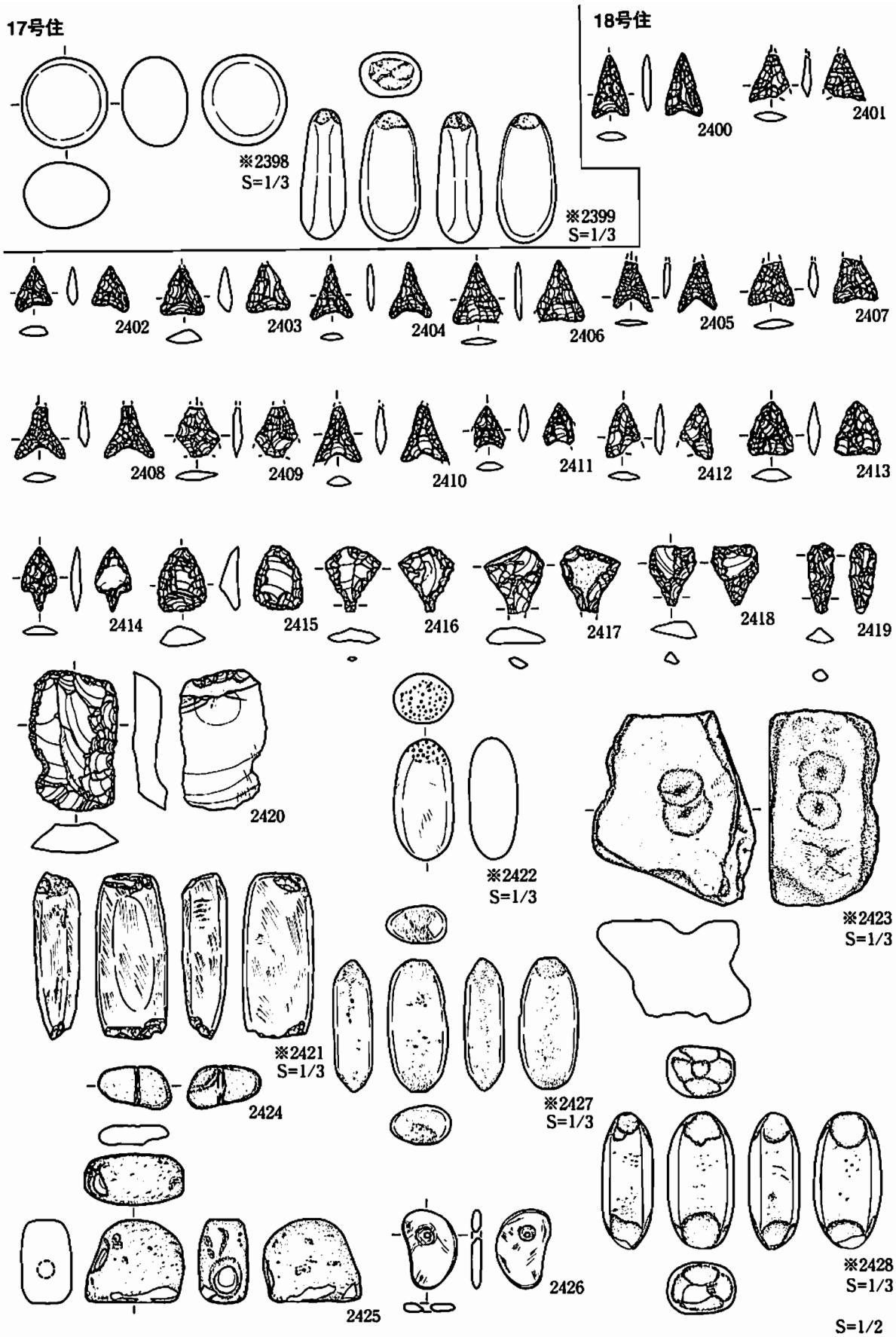
第187図　9号住居跡出土遺物(2)



第188図　10・11・13号住居跡出土遺物・14号住居跡出土遺物（1）

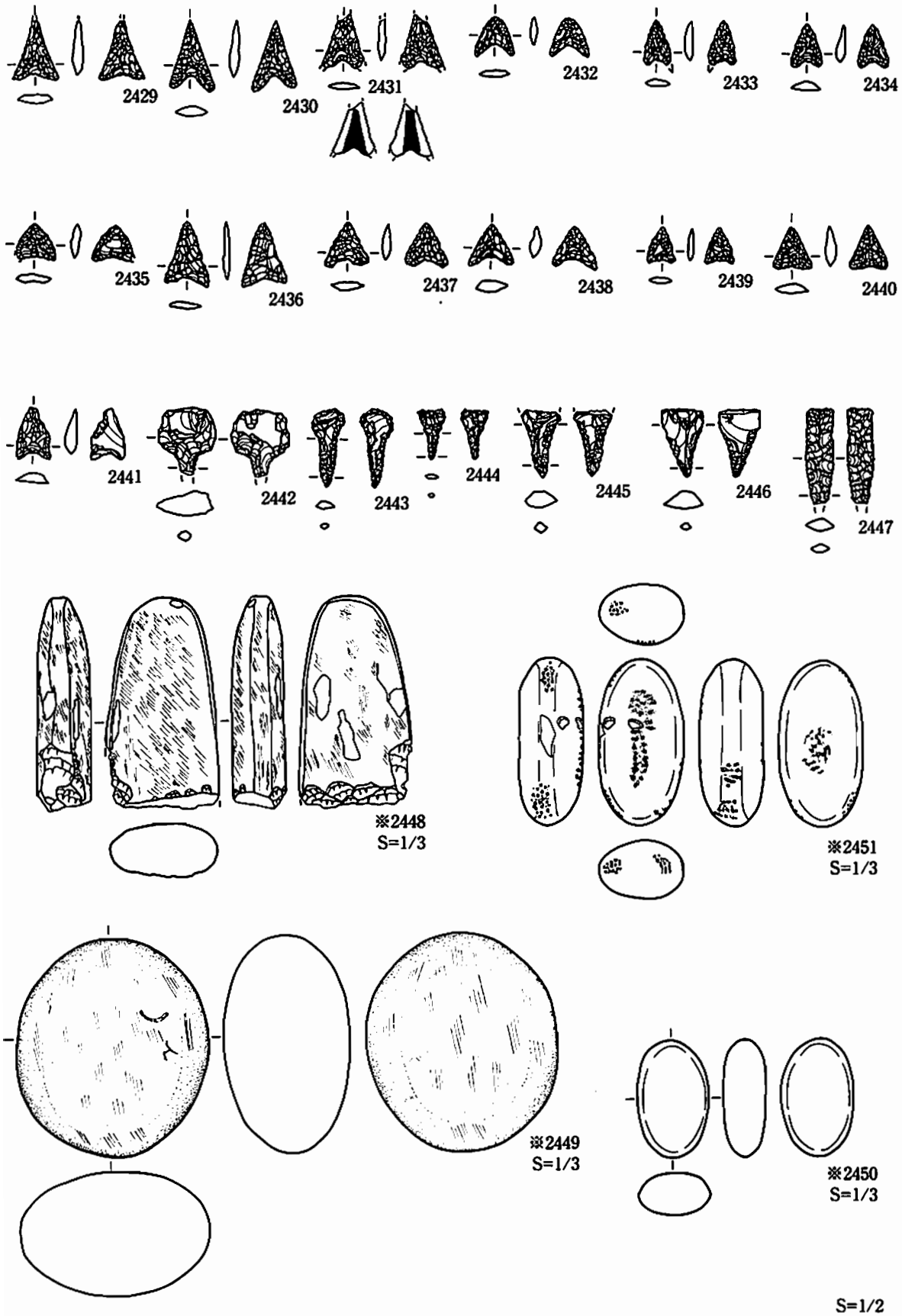


第189図　14号住居跡出土遺物（2）・15・16号住居跡出土遺物・17号住居跡出土遺物（1）

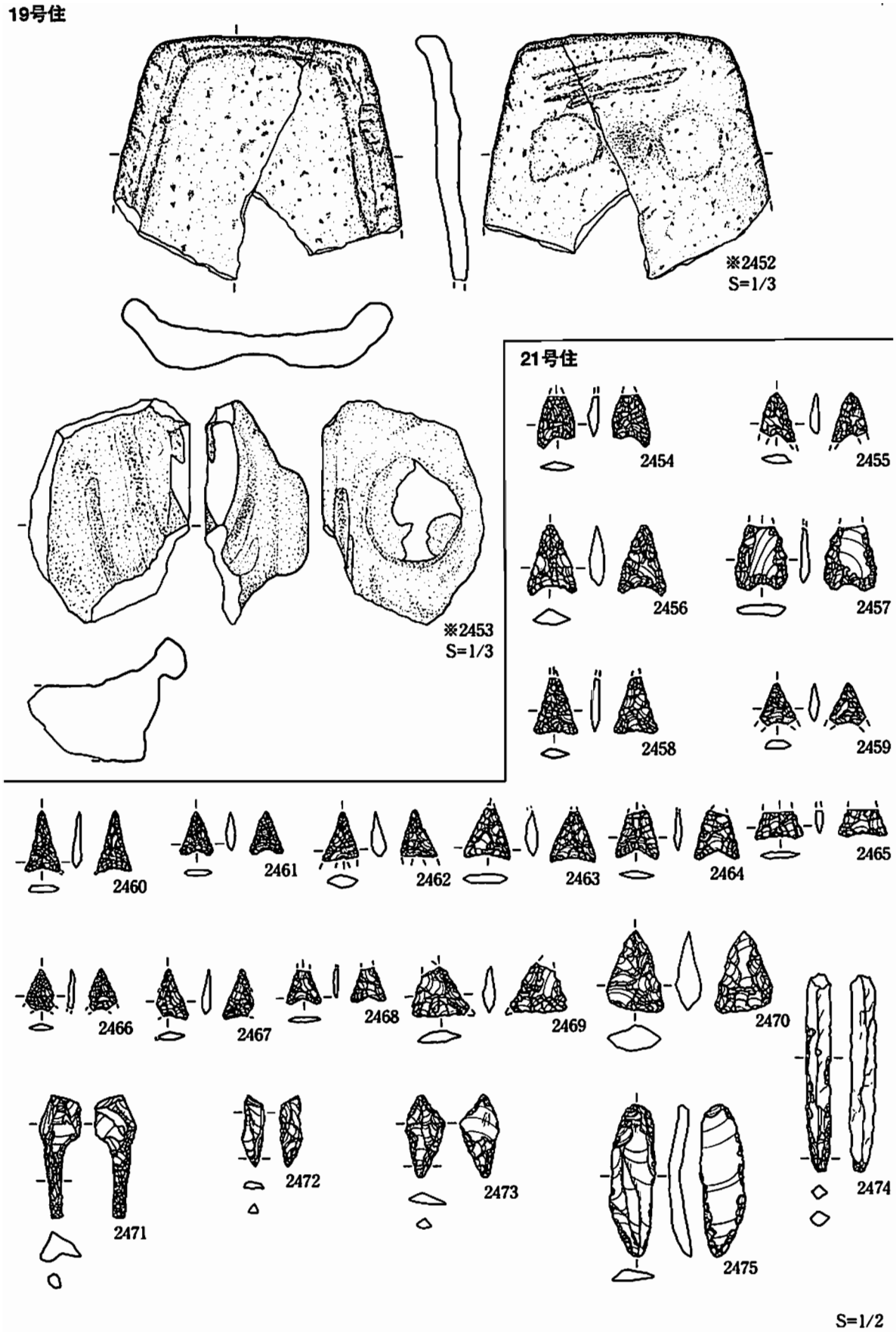


第190図　17号住居跡出土遺物（2）・18号住居跡出土遺物

19号住

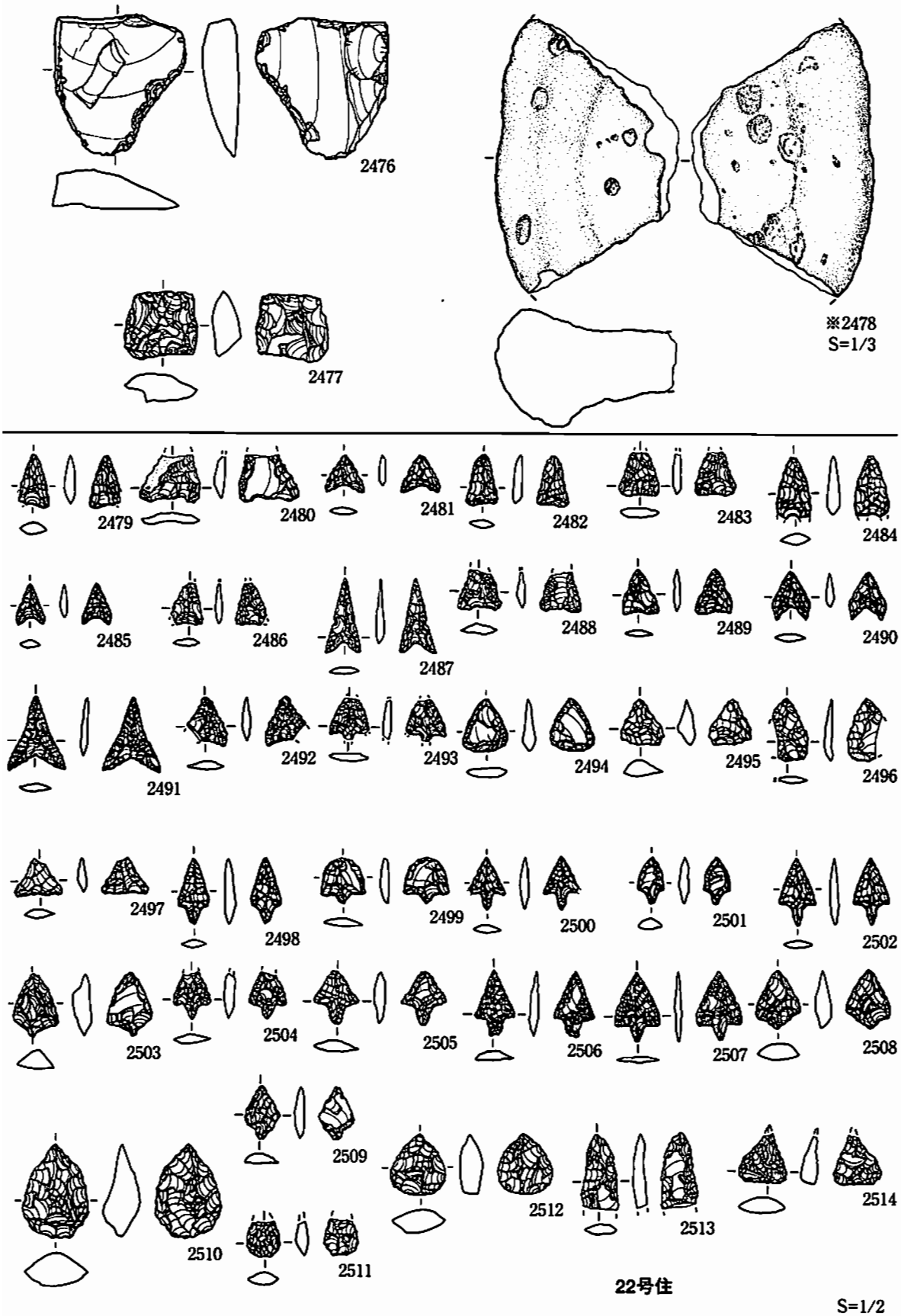


第191図　19号住居跡出土遺物（1）

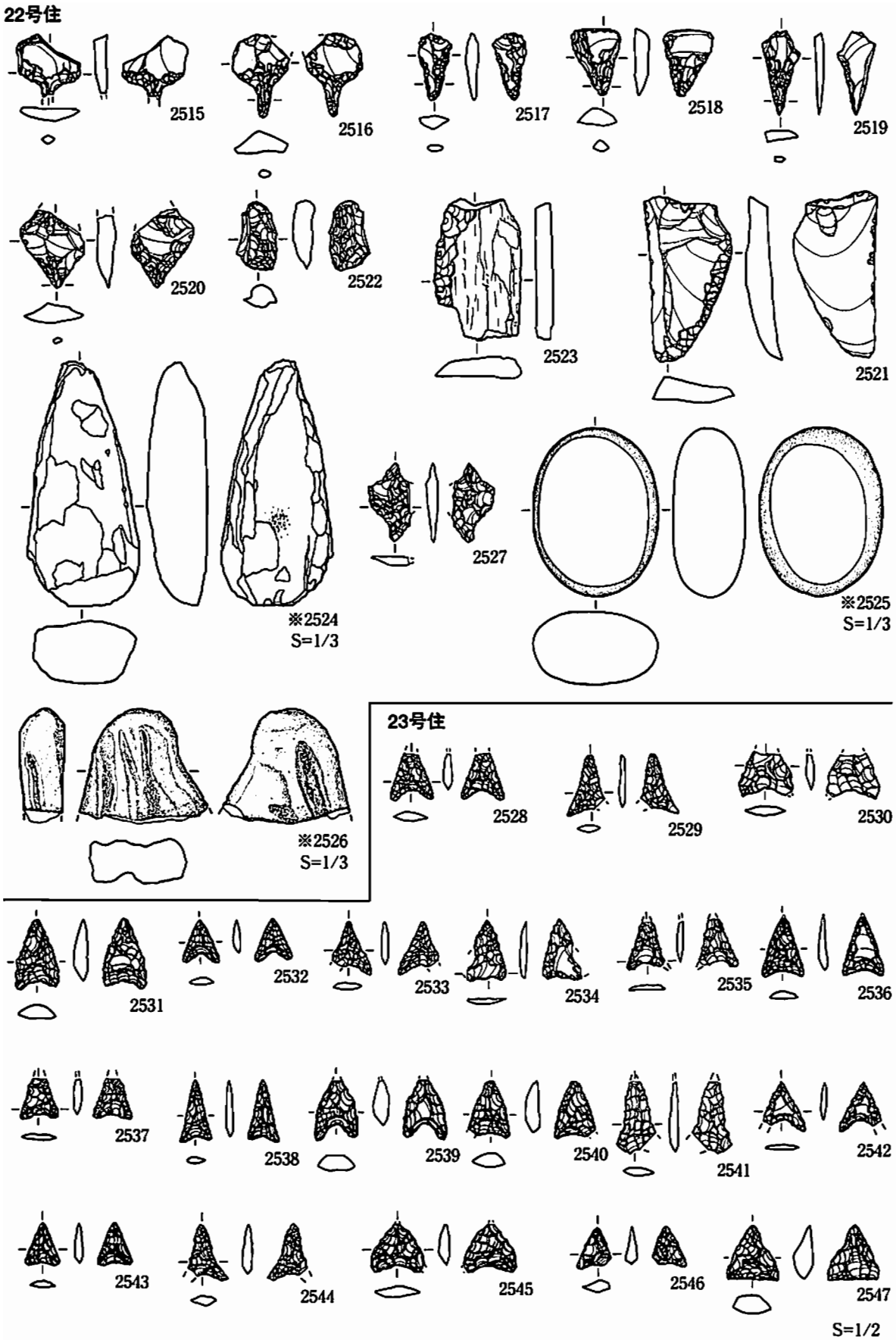


第192図　19号住居跡出土遺物（2）・21号住居跡出土遺物（1）

21号住

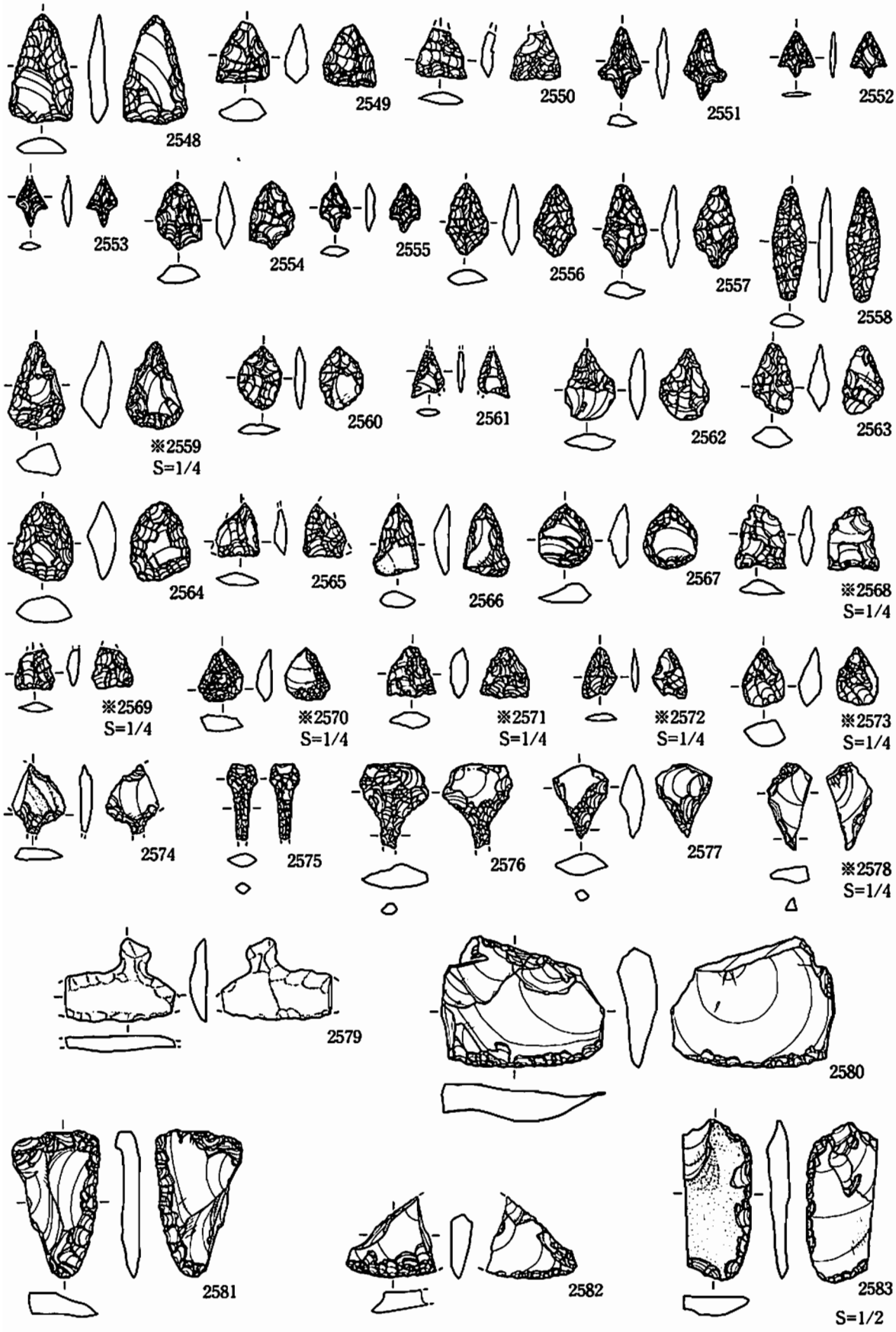


第193図　21号住居跡出土遺物（2）・22号住居跡出土遺物（1）



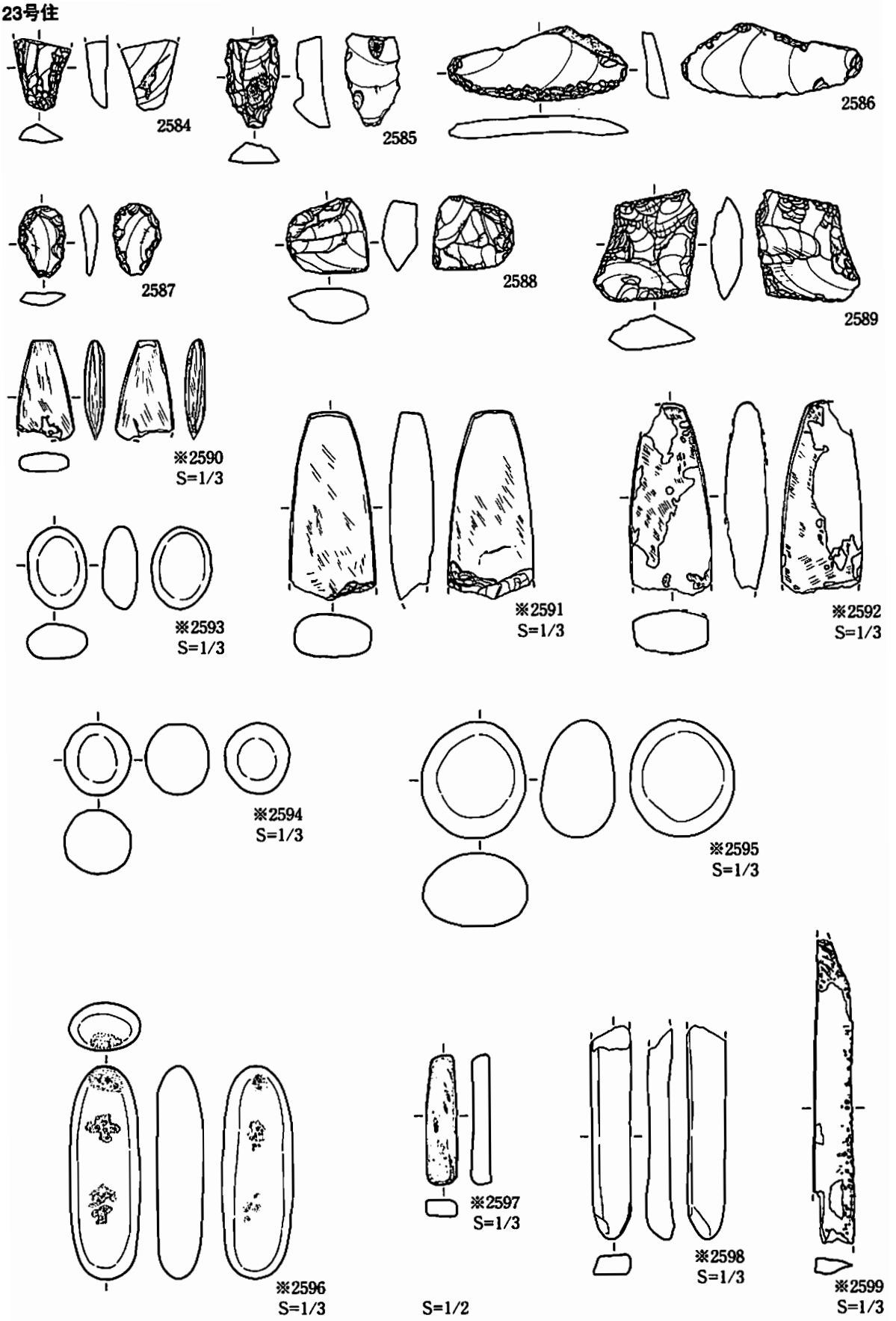
第194図　22号住居跡出土遺物（2）・23号住居跡出土遺物（1）

23号住

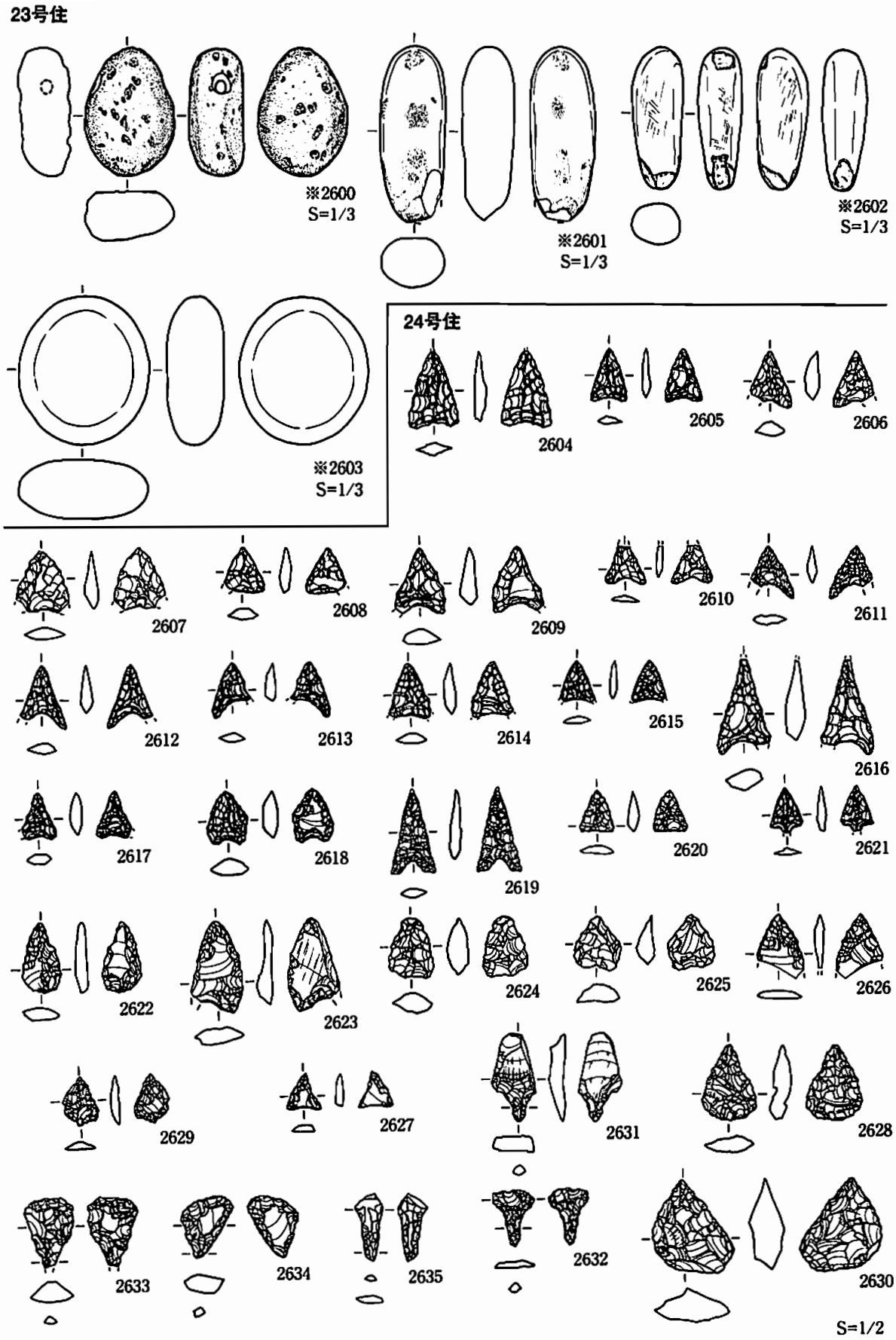


第195図　23号住居跡出土遺物（2）

23号住

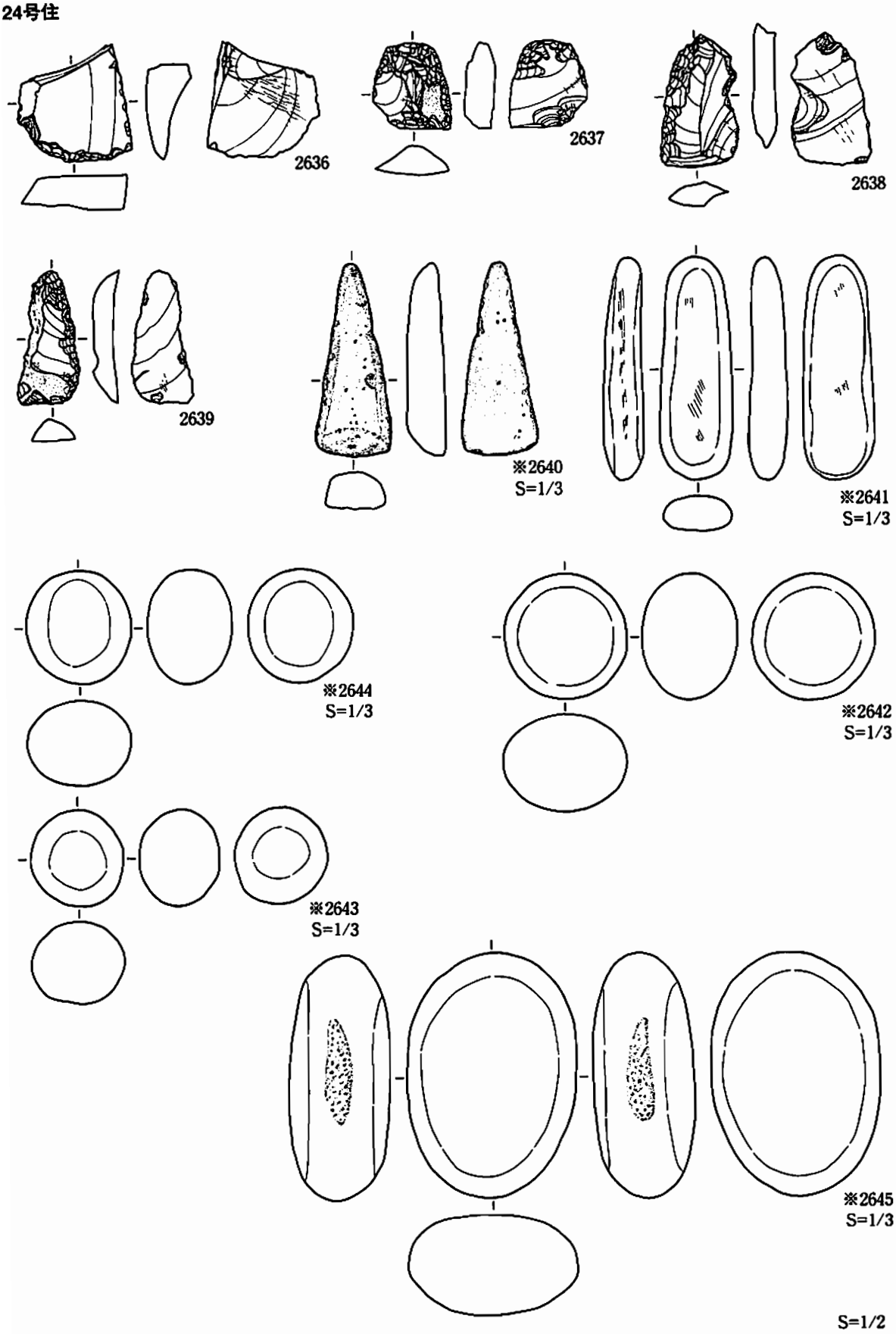


第196図　23号住居跡出土遺物（3）



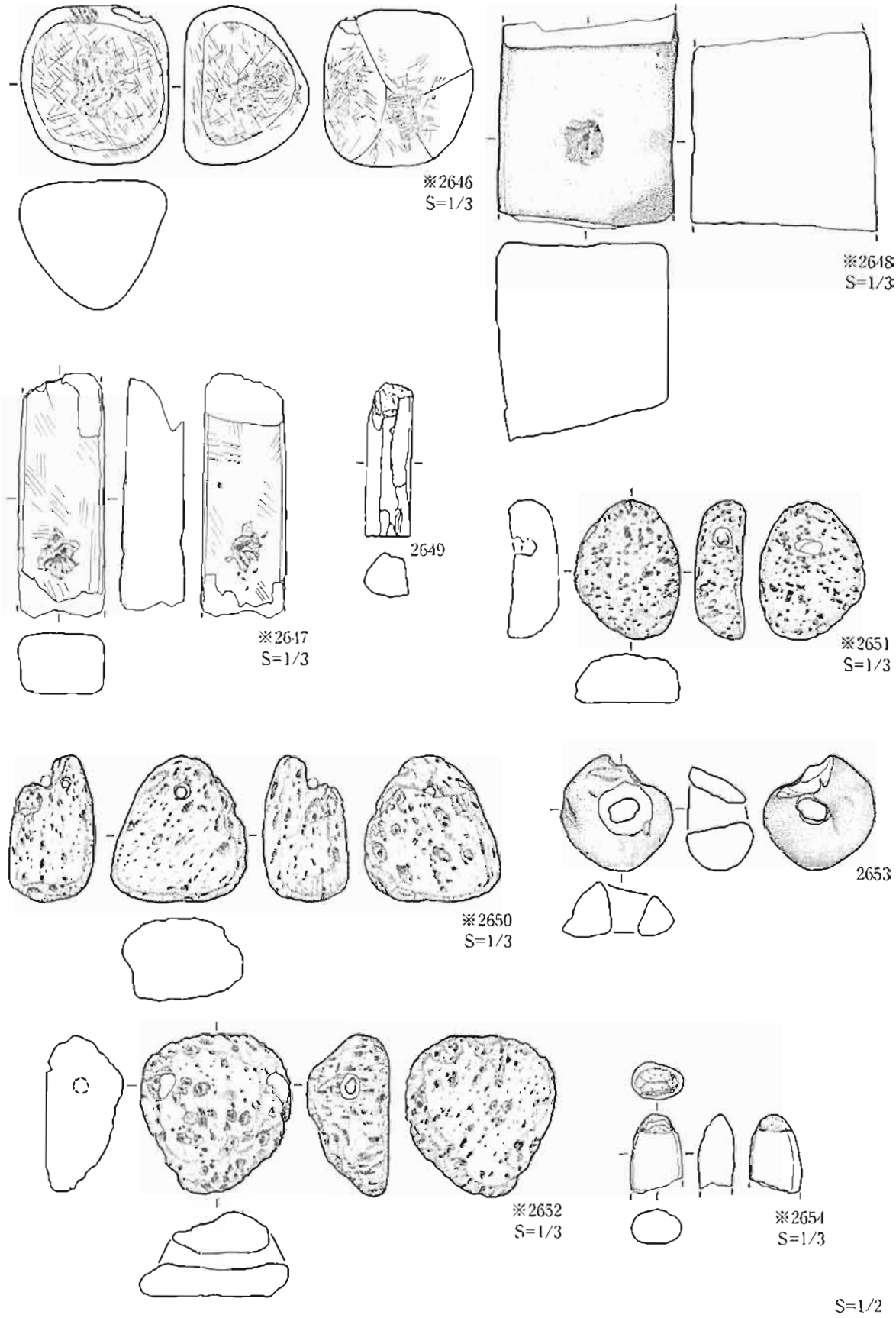
第197図　23号住居跡出土遺物（4）・24号住居跡出土遺物（1）

24号住



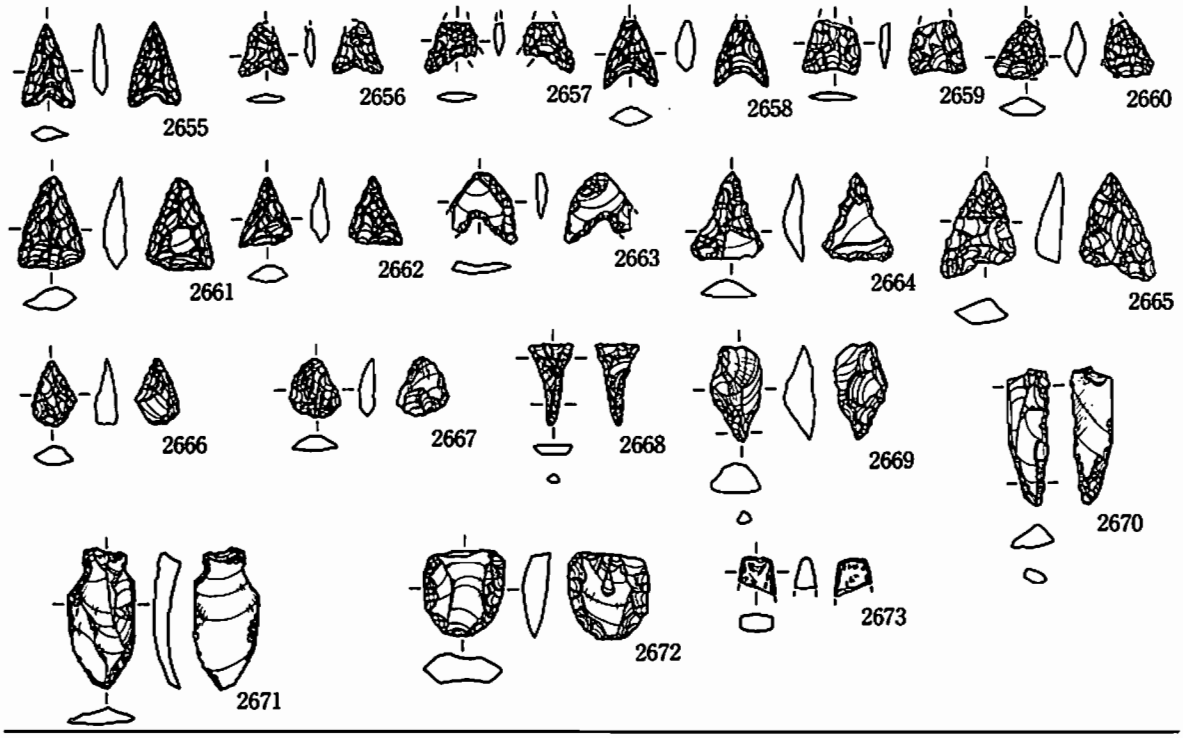
第198図　24号住居跡出土遺物（2）

24号住

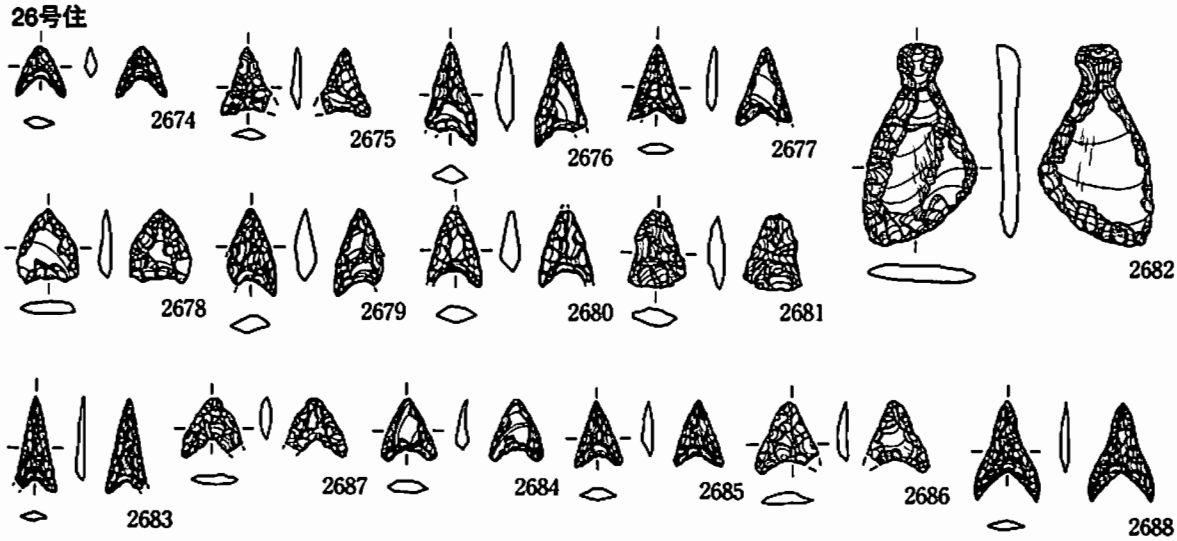


第199図　24号住居跡出土遺物（3）

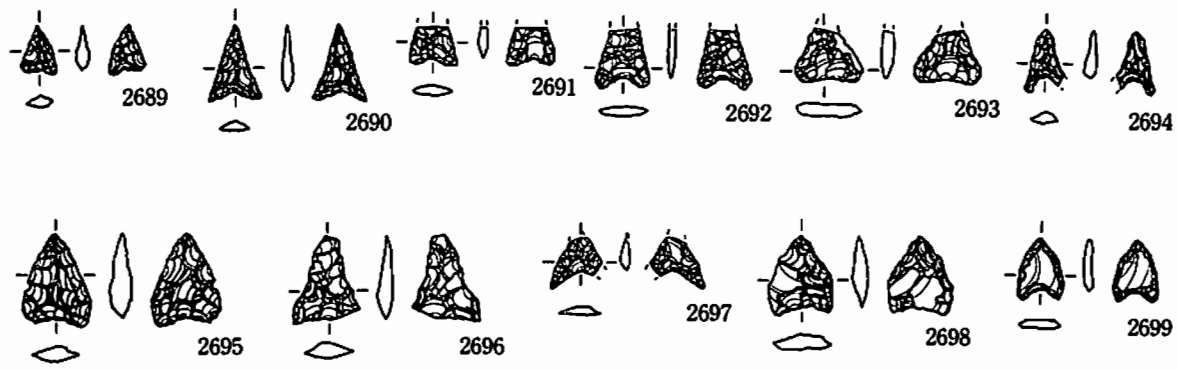
25号住



26号住



28号住



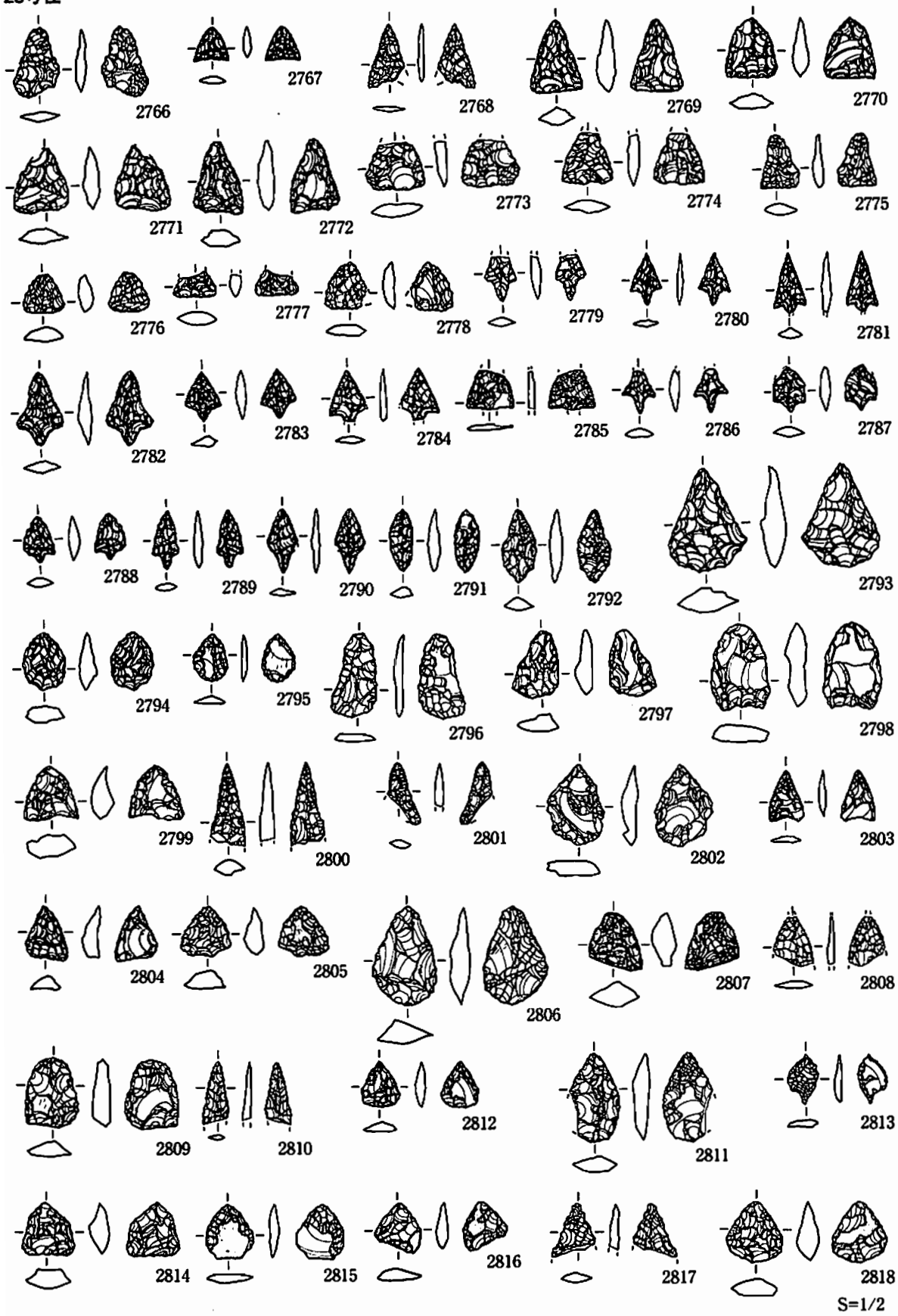
S=1/2

第200図　25・26号住居跡出土遺物・28号住居跡出土遺物（1）

28号住

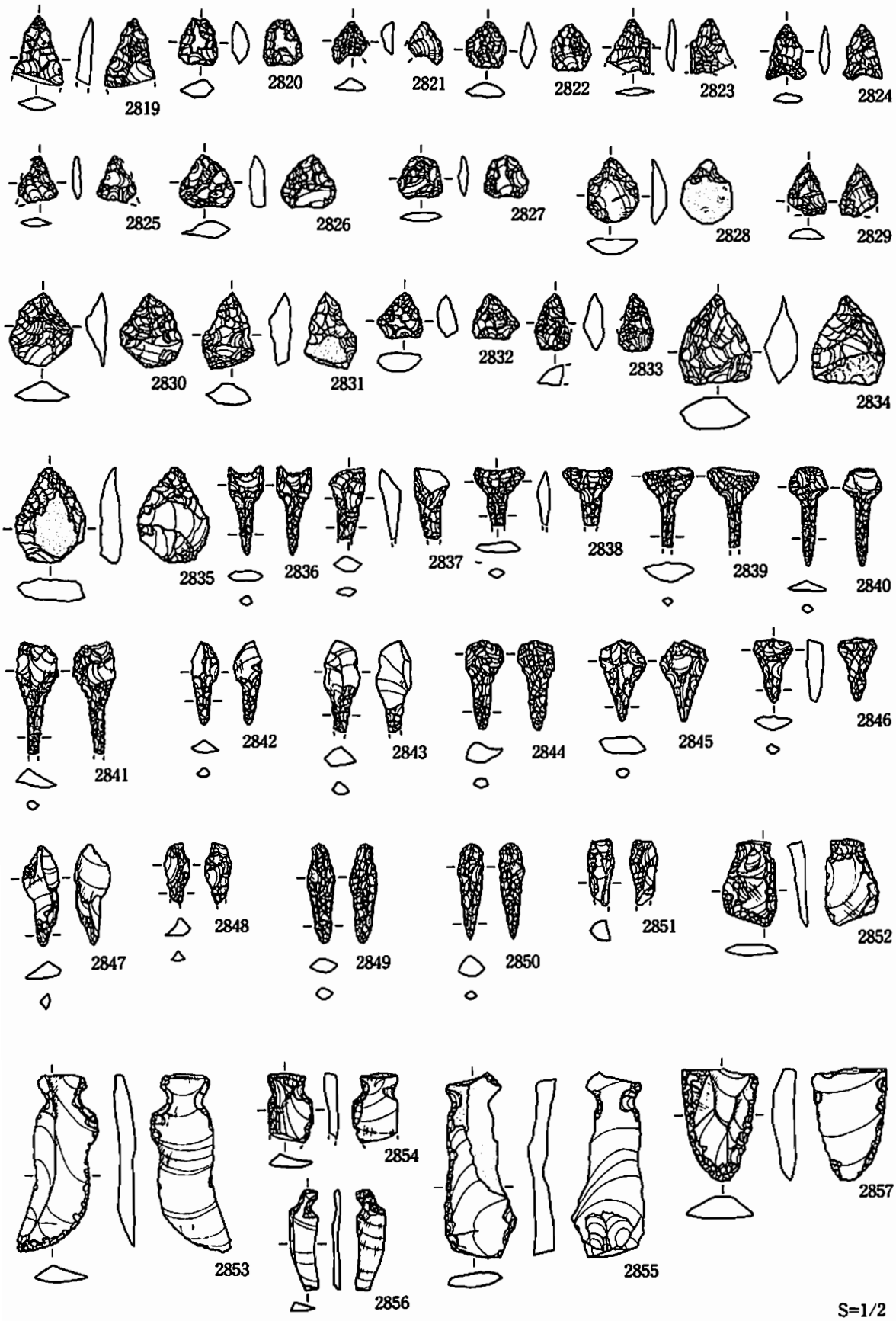
第201図　28号住居跡出土遺物（2）

28号住



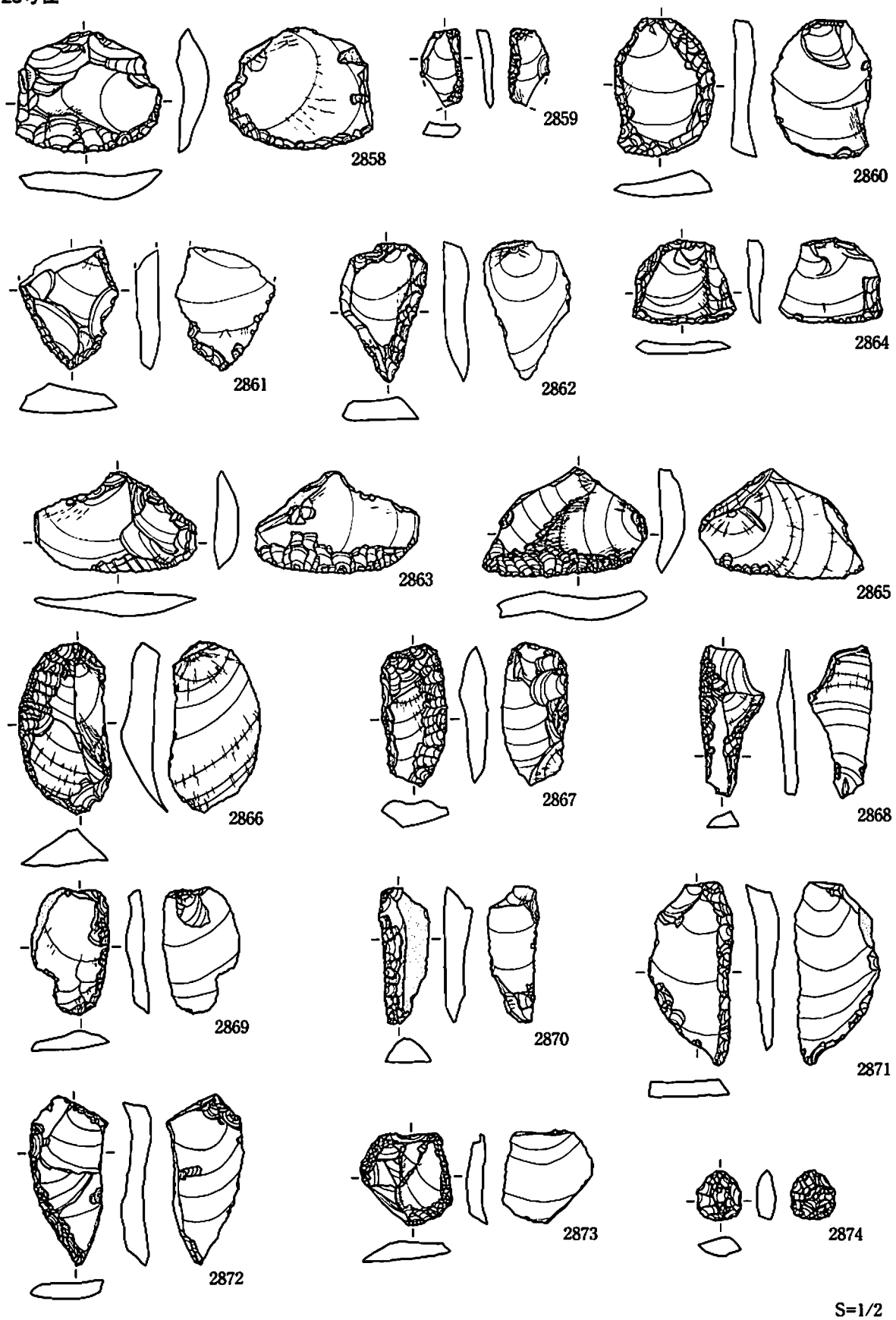
第202図　28号住居跡出土遺物（3）

28号住



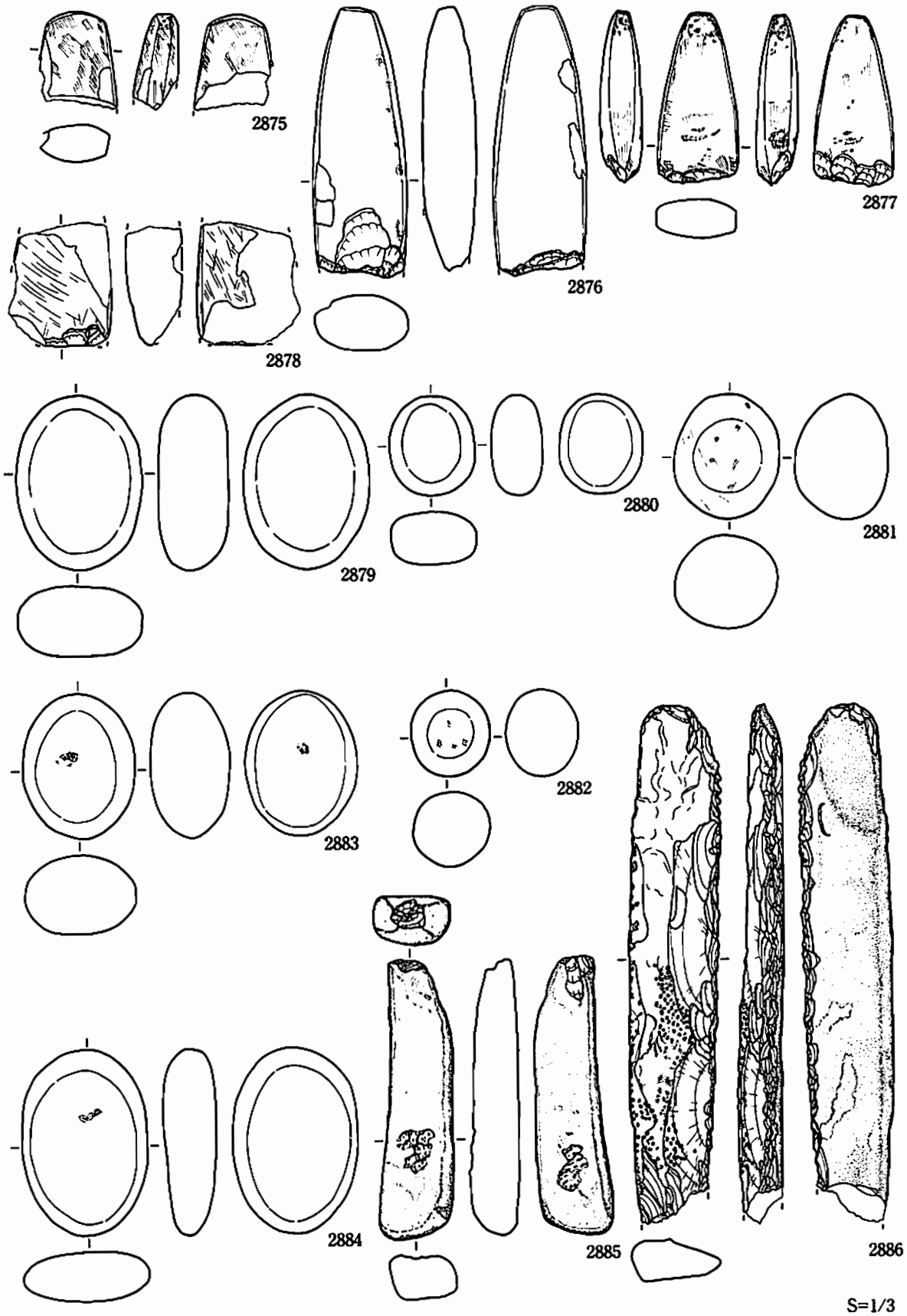
第203図　28号住居跡出土遺物（4）

28号住

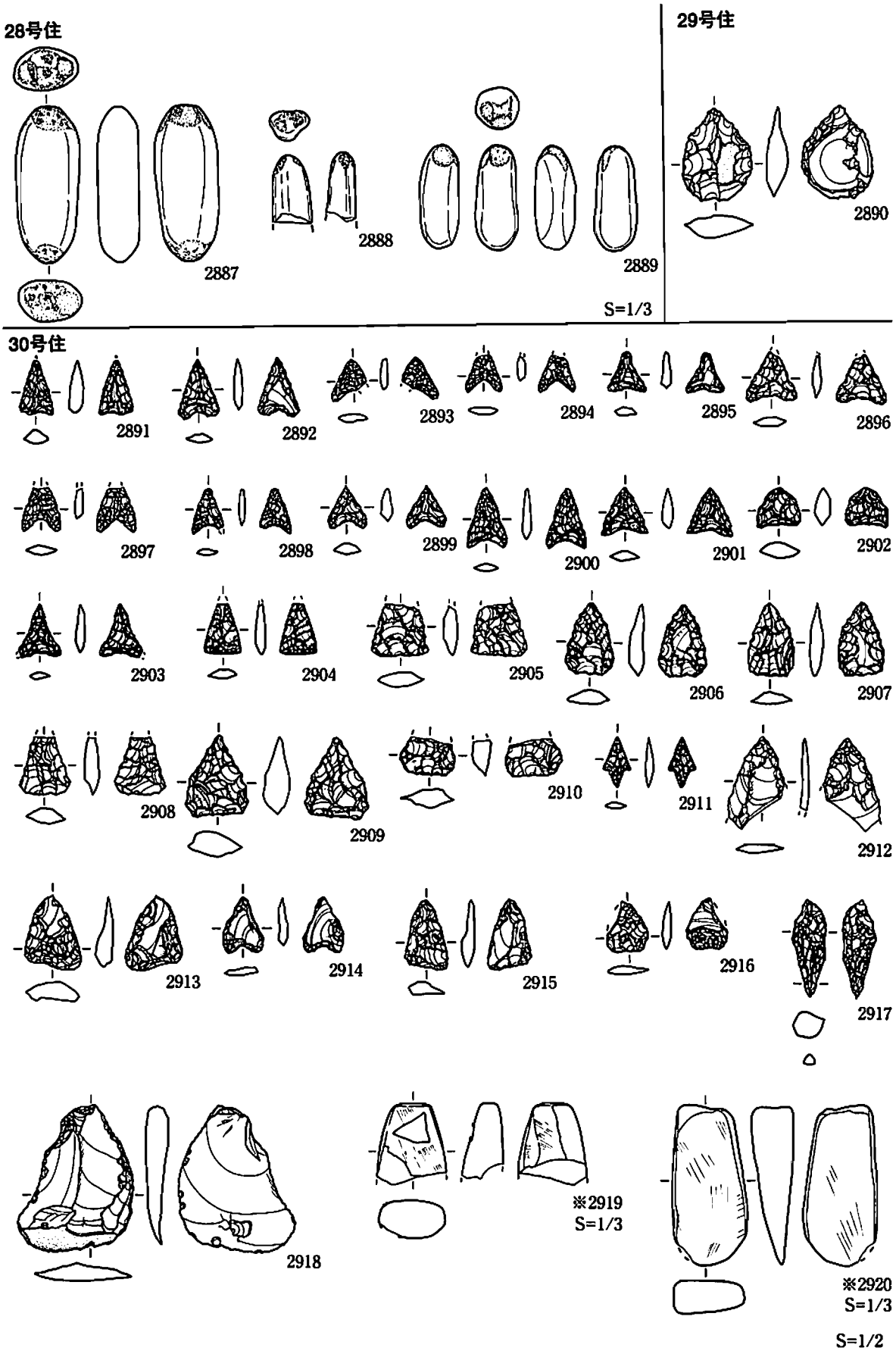


第204図　28号住居跡出土遺物(5)

28号住

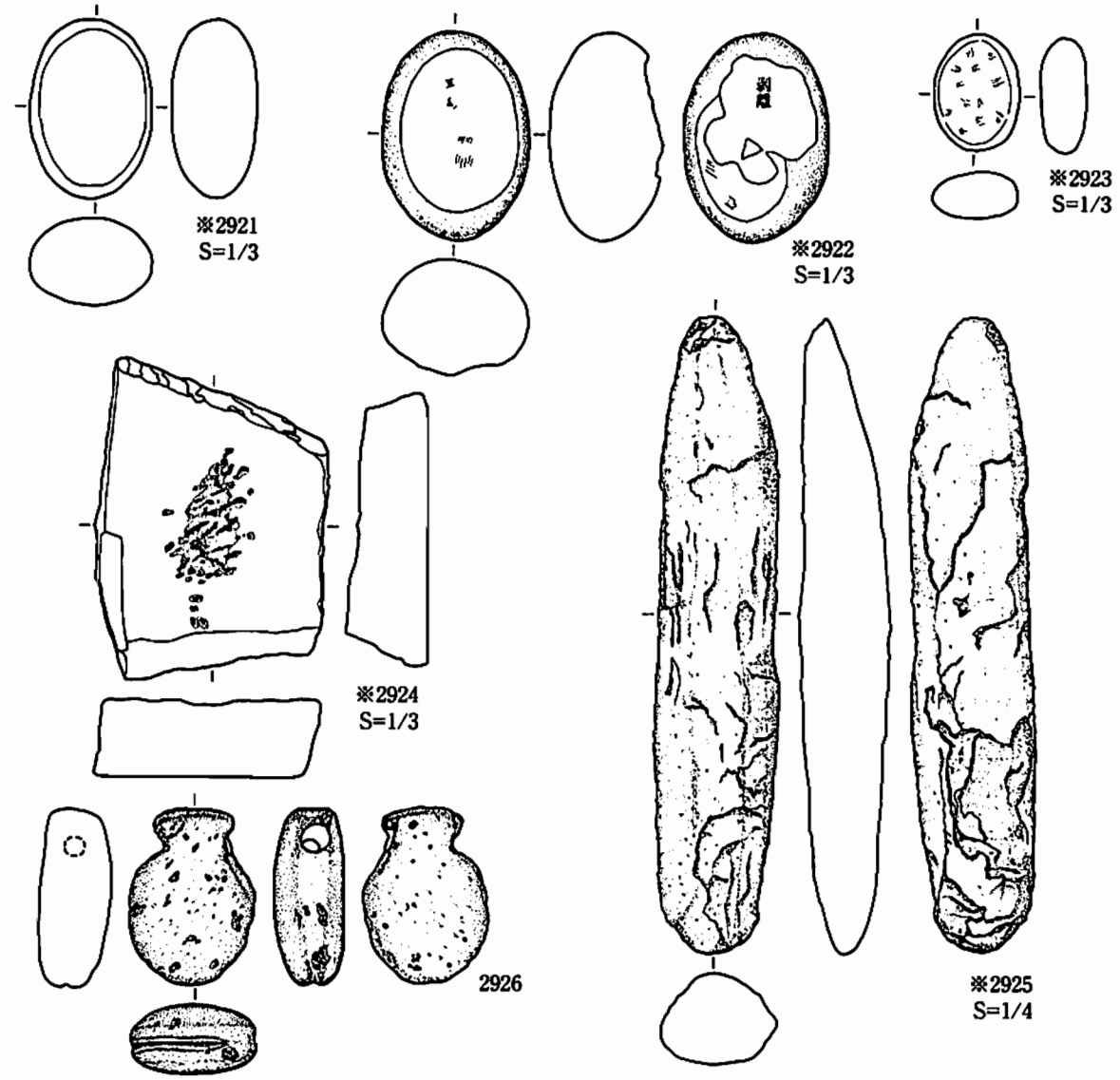


第205図　28号住居跡出土遺物(6)

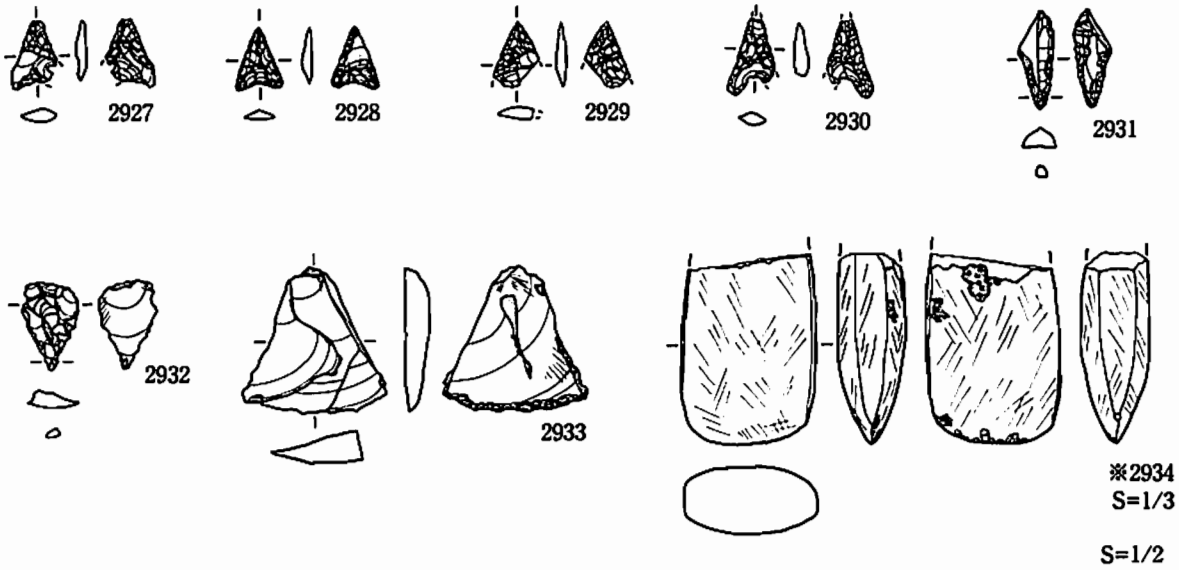


第206図　28号住居跡出土遺物（7）・29号住居跡出土遺物・30号住居跡出土遺物（1）

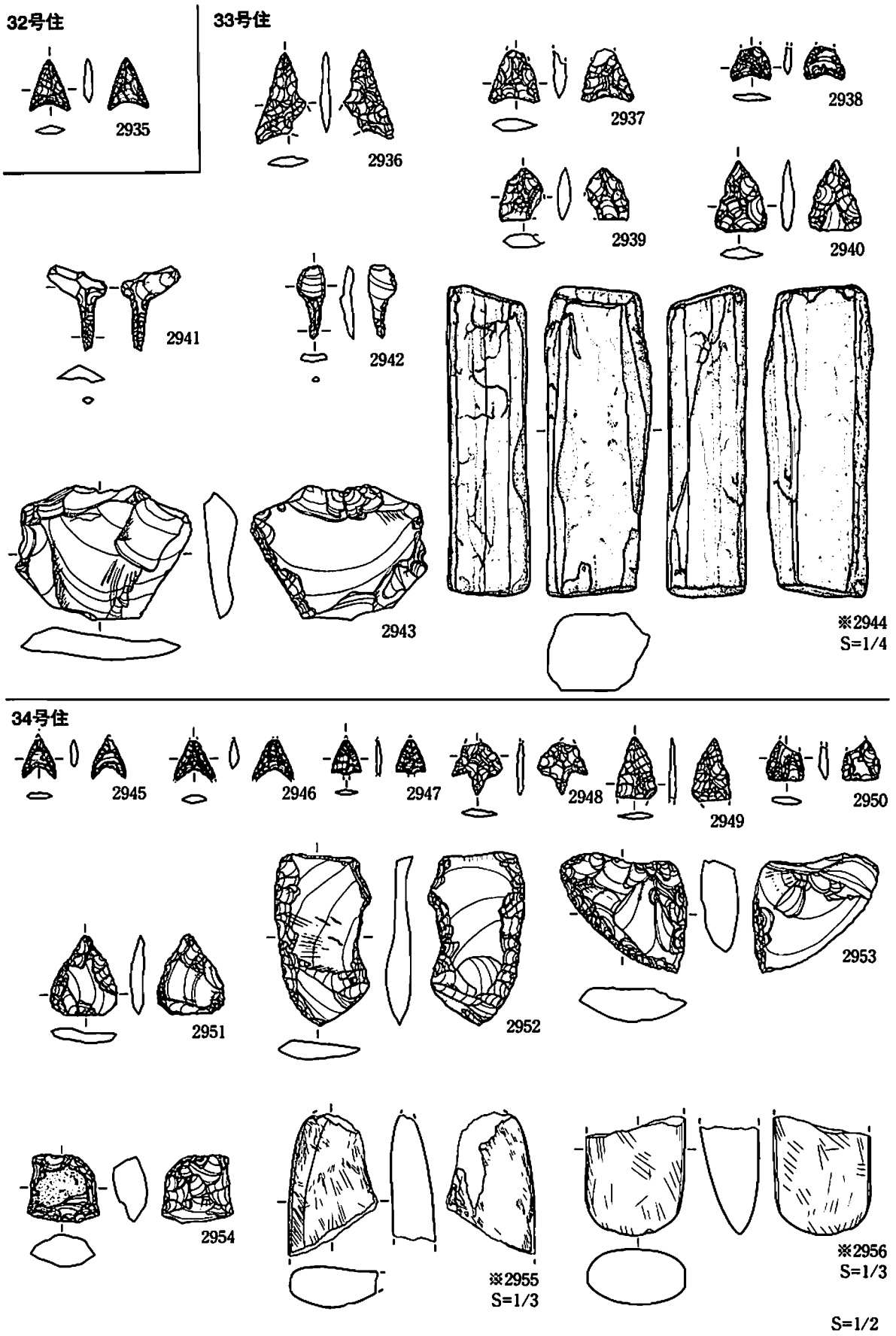
30号住



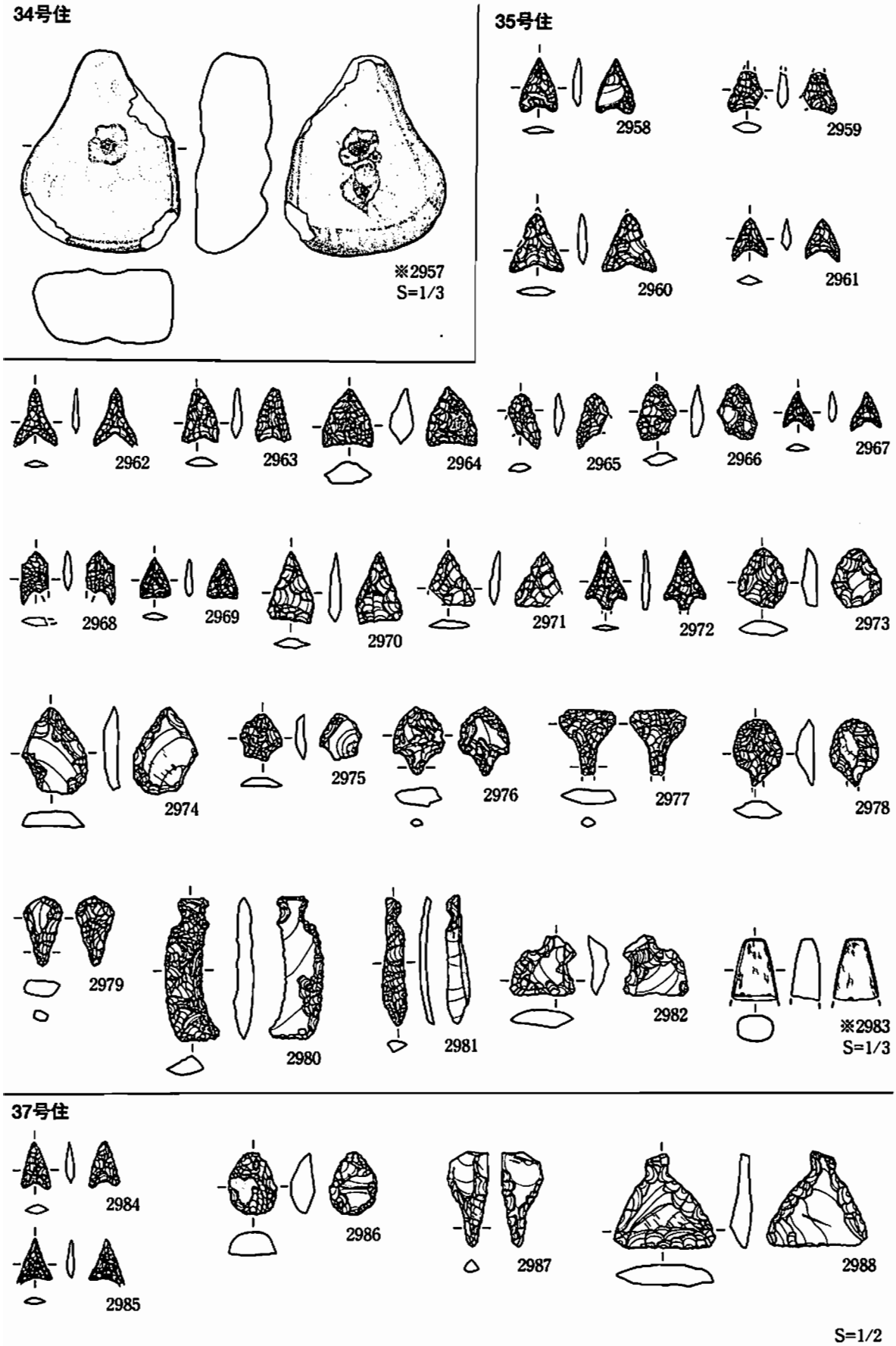
31号住



第207図　30号住居跡出土遺物（2）・31号住居跡出土遺物

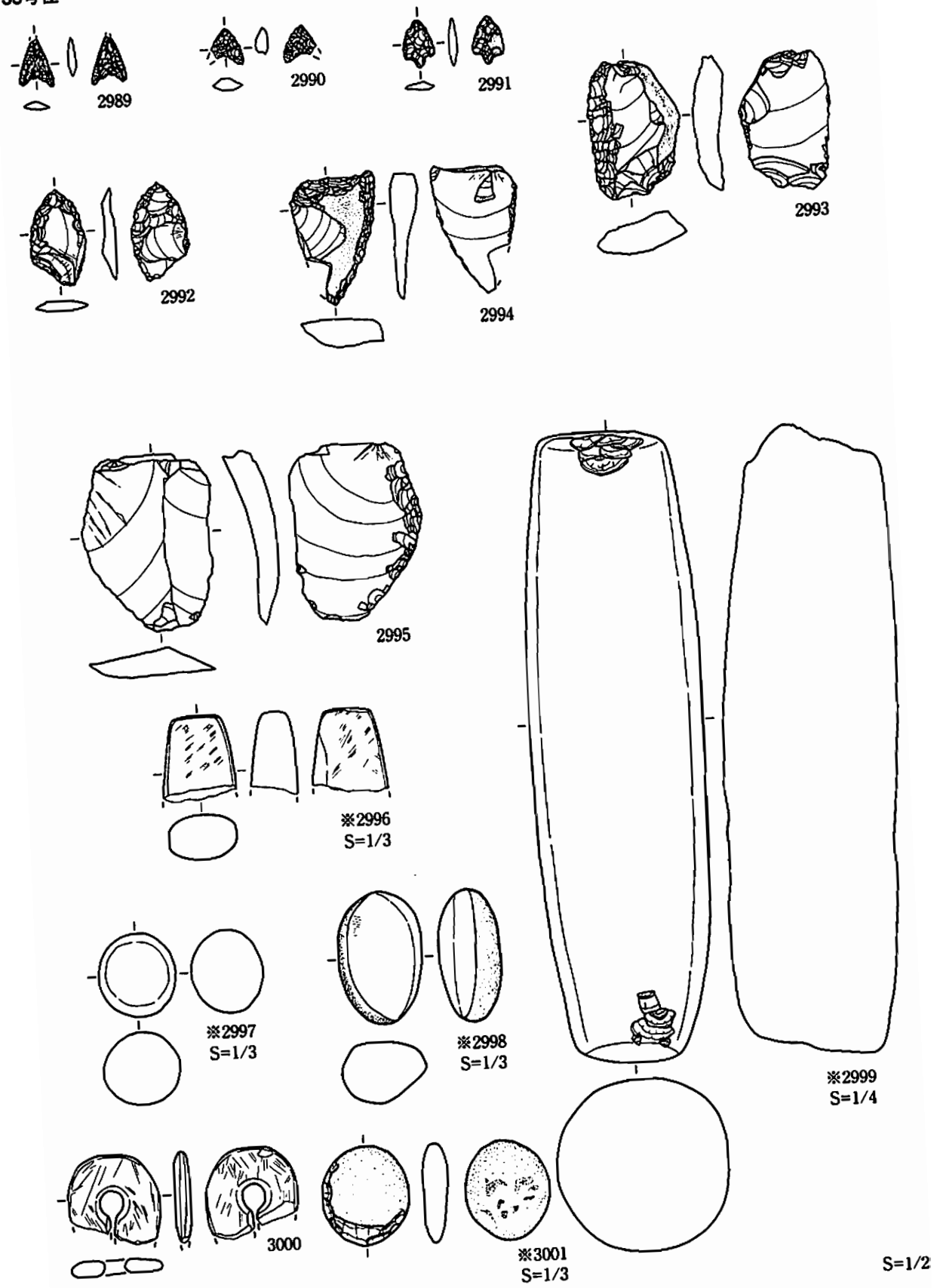


第208図　32・33号住居跡出土遺物・34号住居跡出土遺物（1）



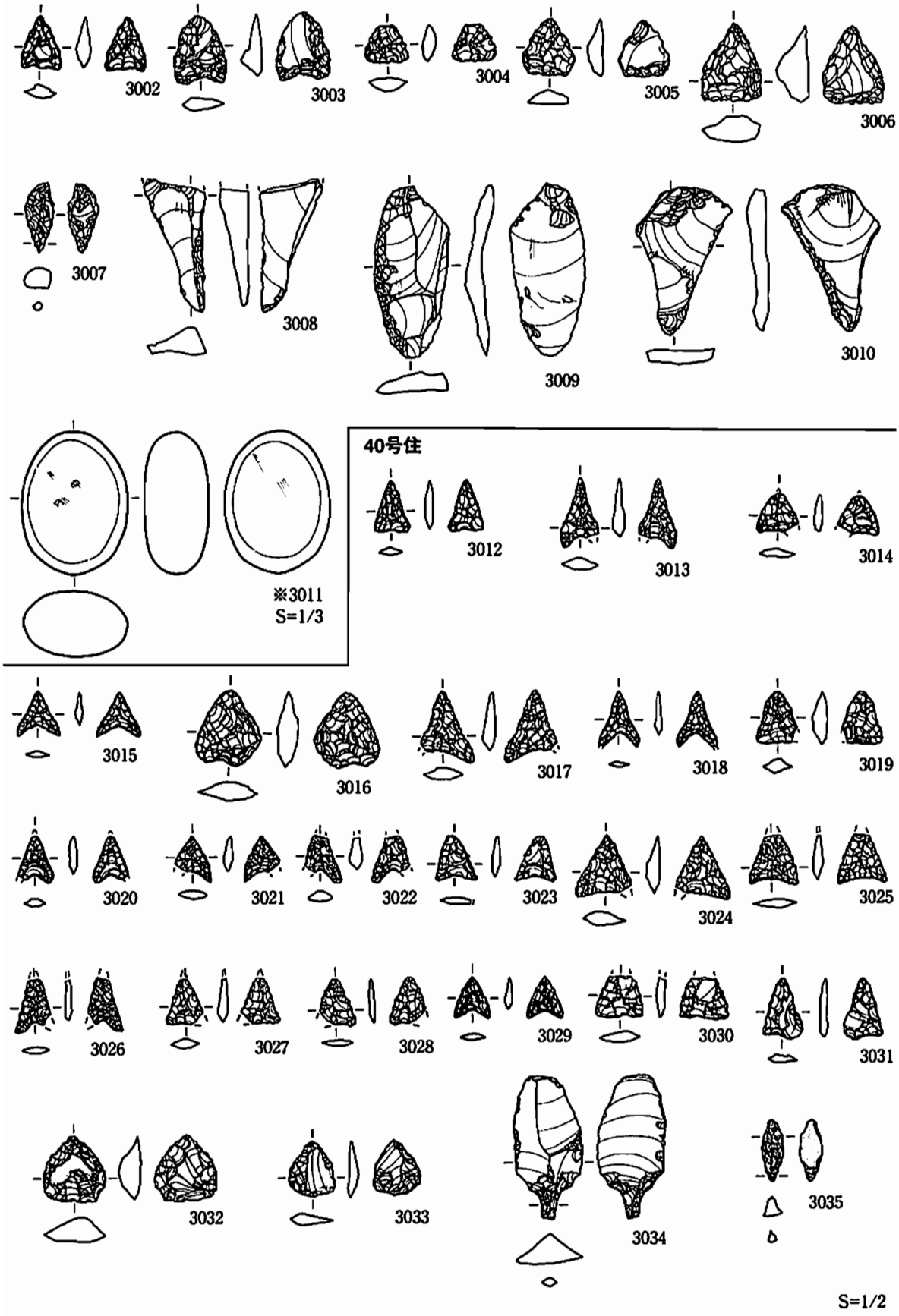
第209図　34号住居跡出土遺物（2）・35・37号住居跡出土遺物

38号住



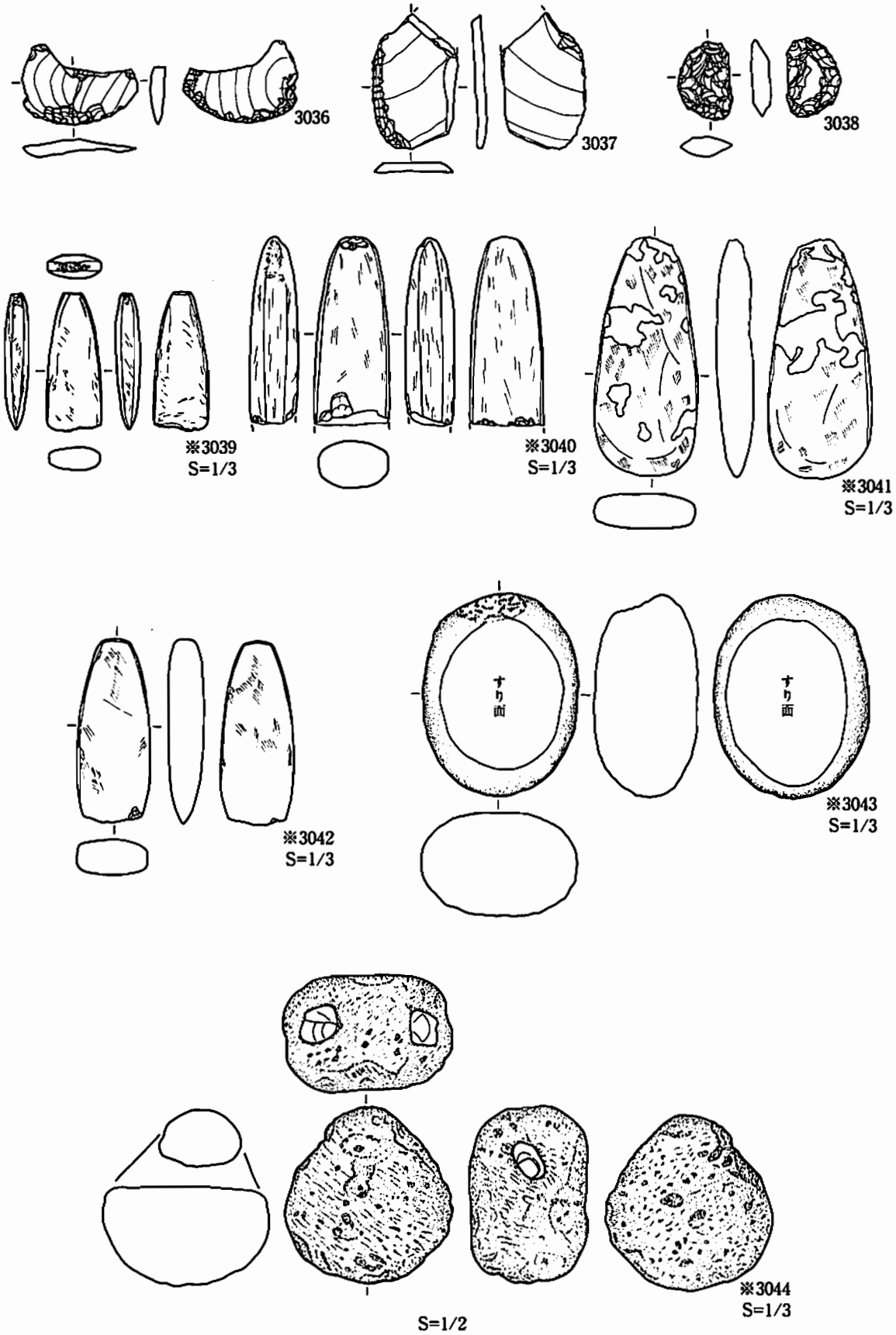
第210図　38号住居跡出土遺物

39号住

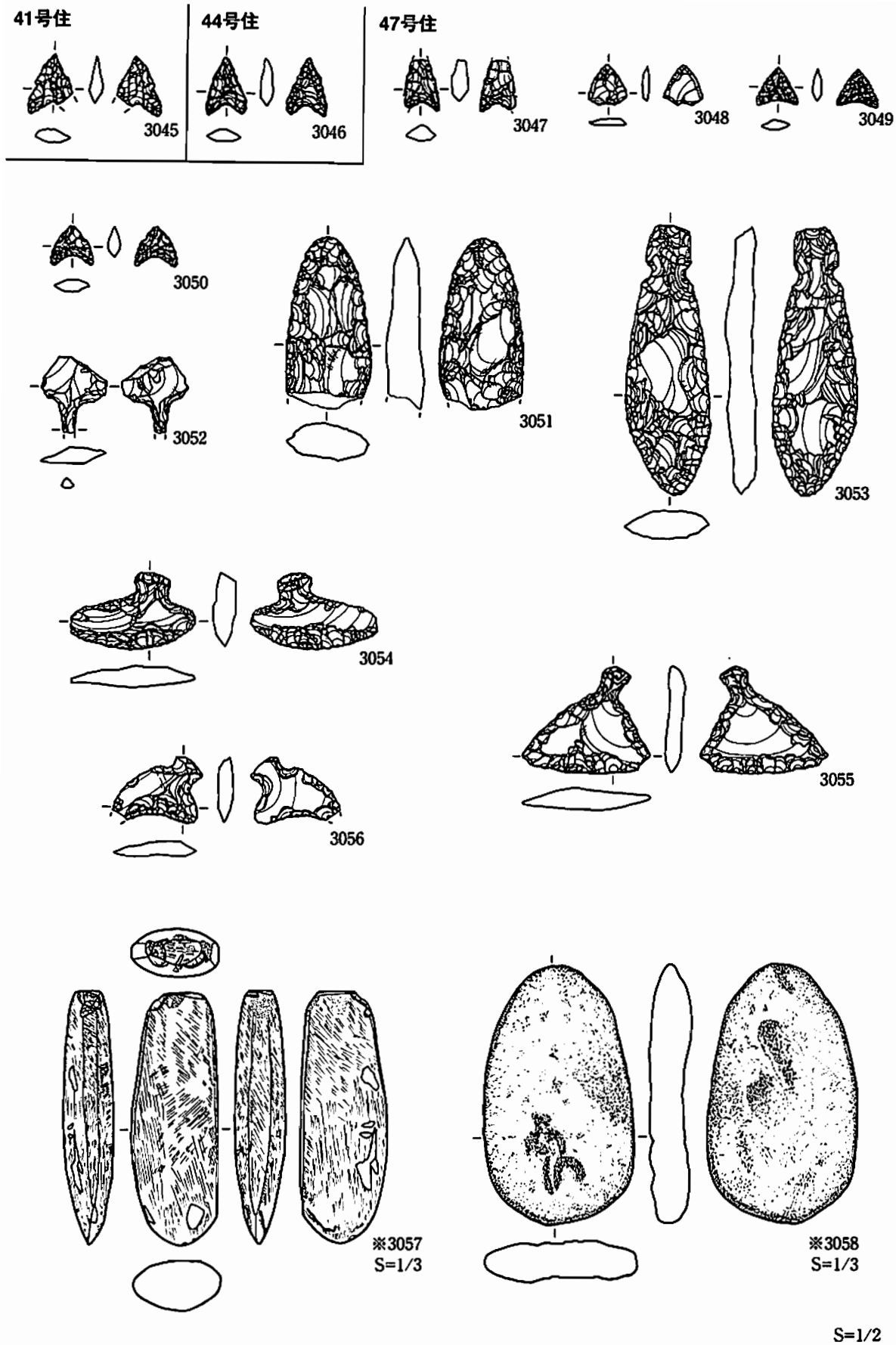


第211図　39号住居跡出土遺物・40号住居跡出土遺物（1）

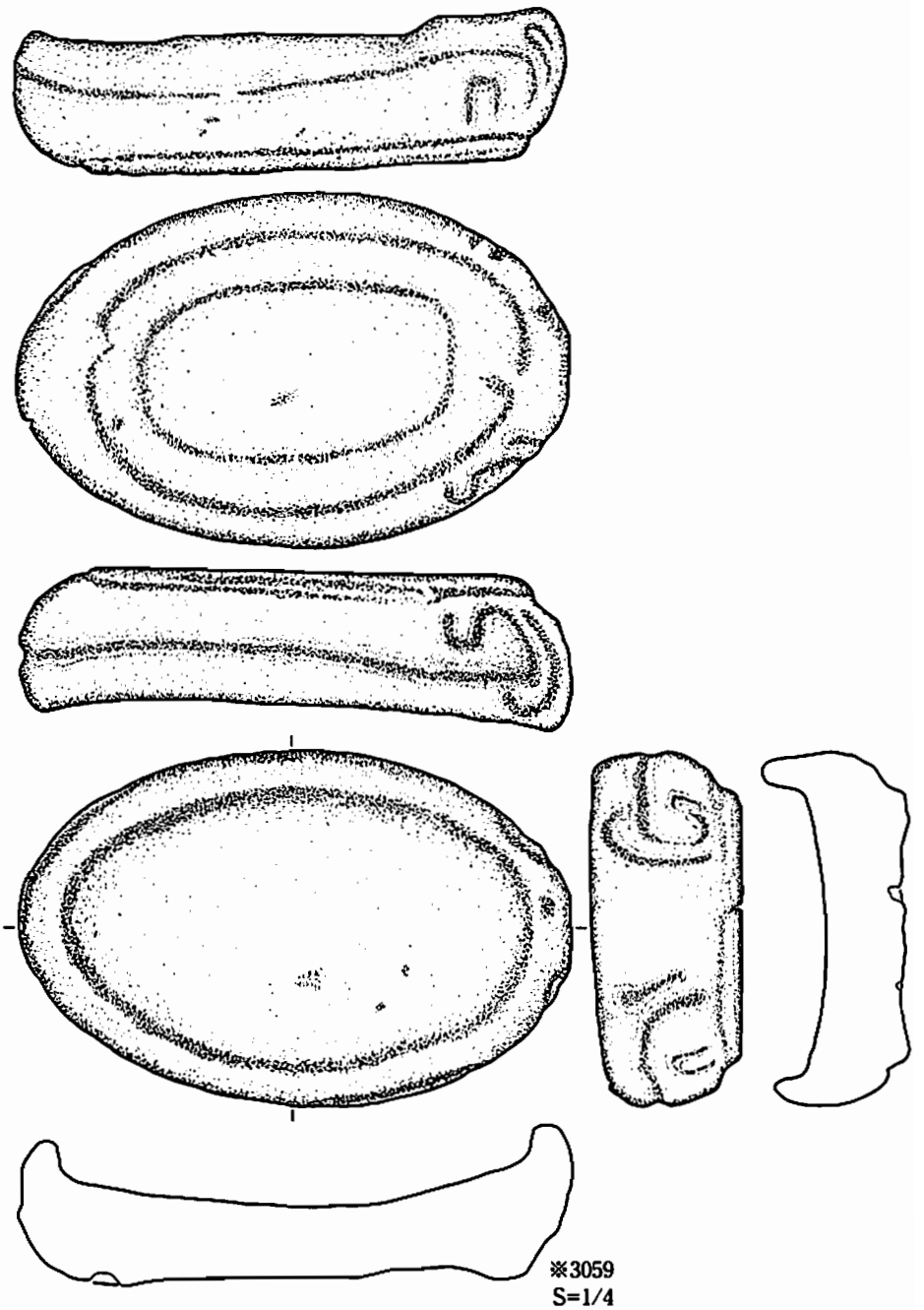
40号住



第212図　40号住居跡出土遺物（2）

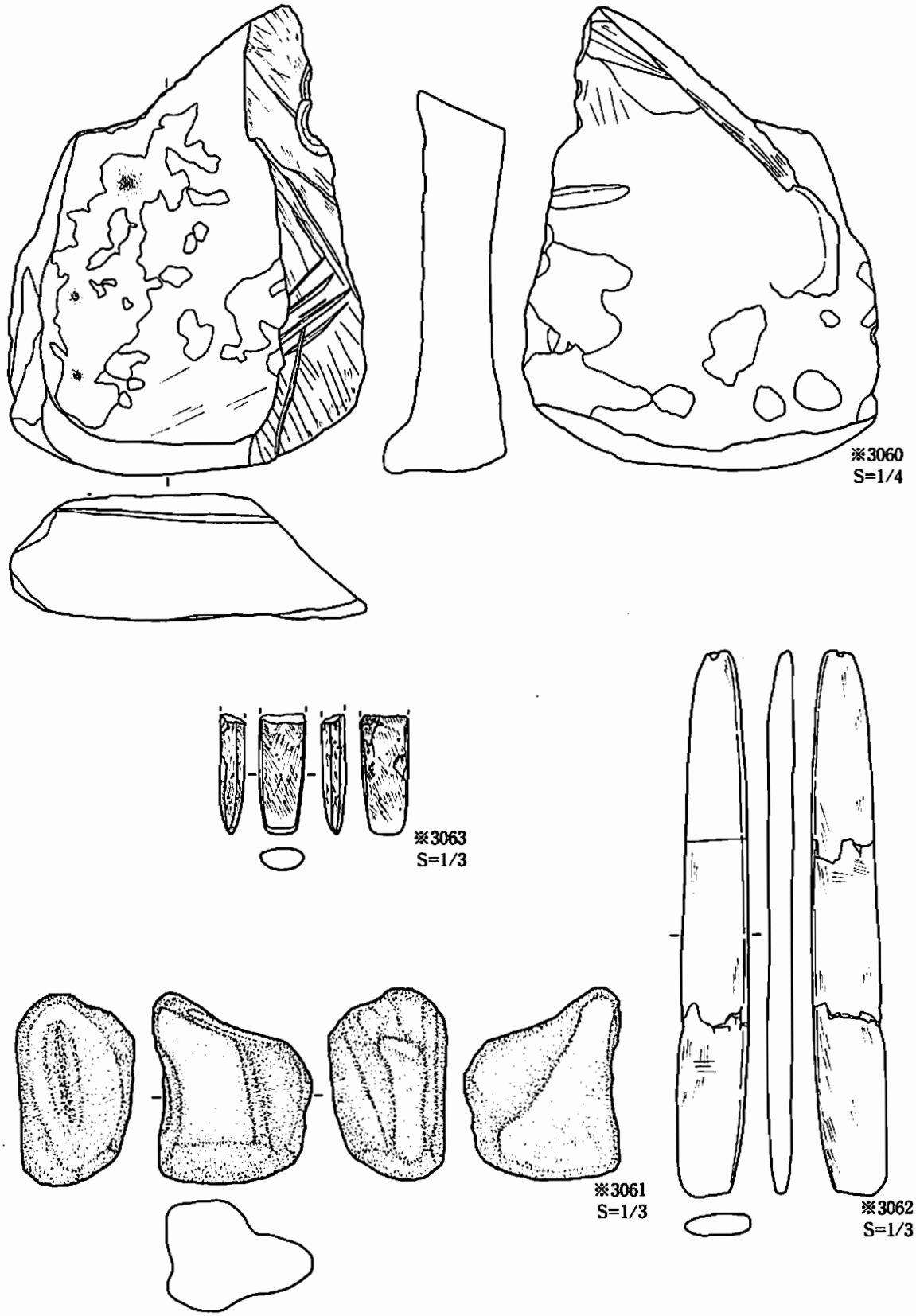


第213図　41・44号住居跡出土遺物・47号住居跡出土遺物（1）

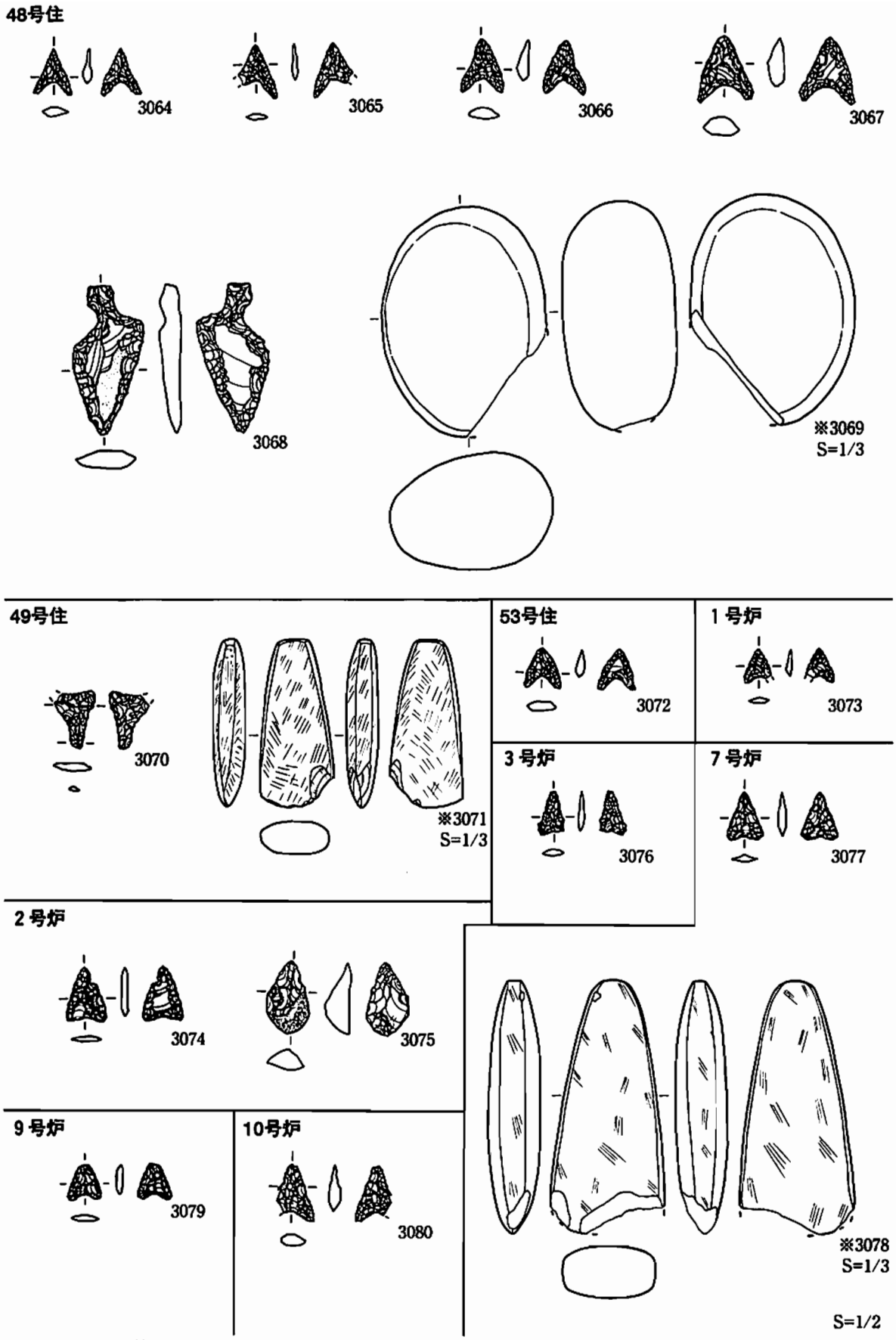


第214図　47号住居跡出土遺物（2）

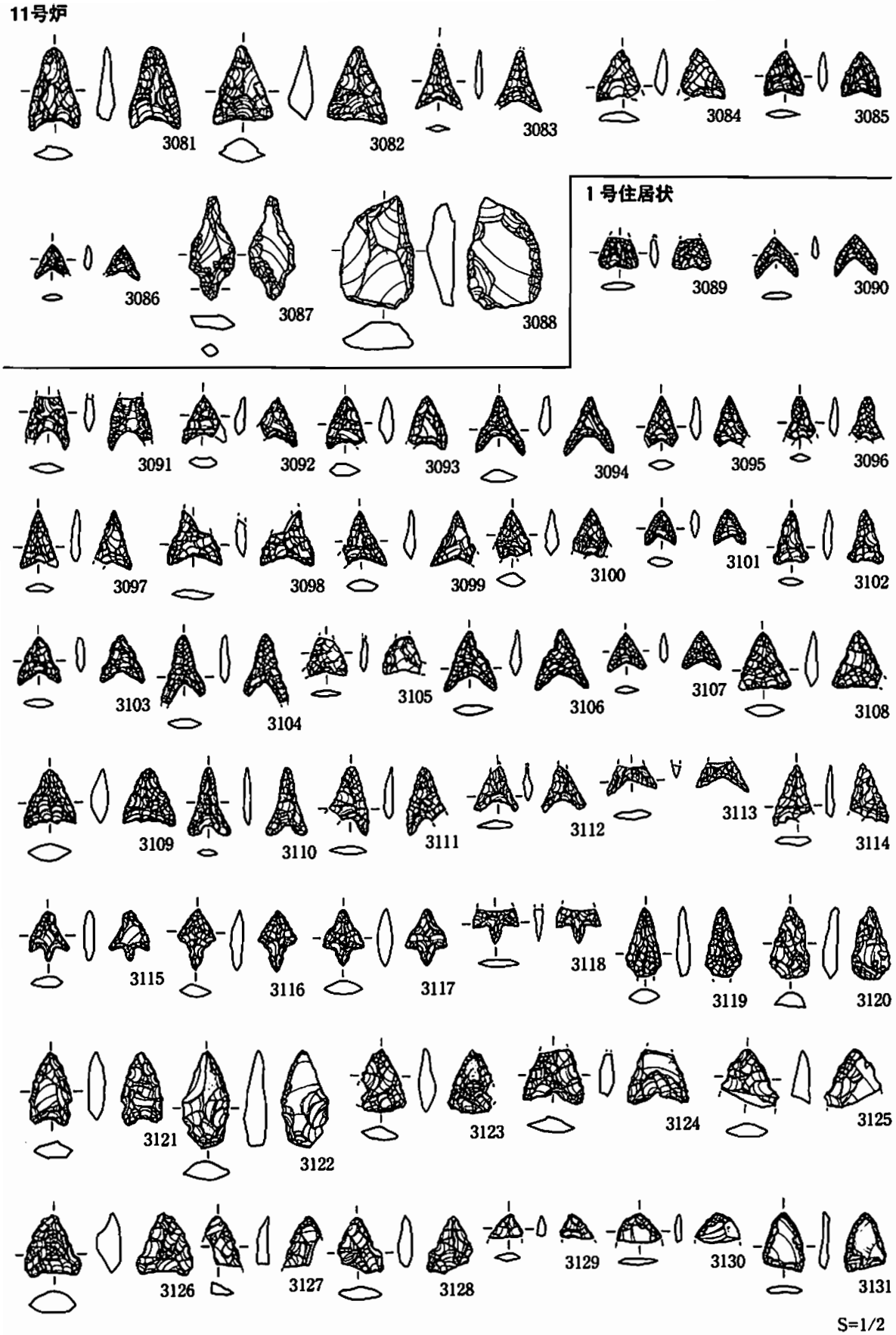
47号住



第215図　47号住居跡出土遺物（3）

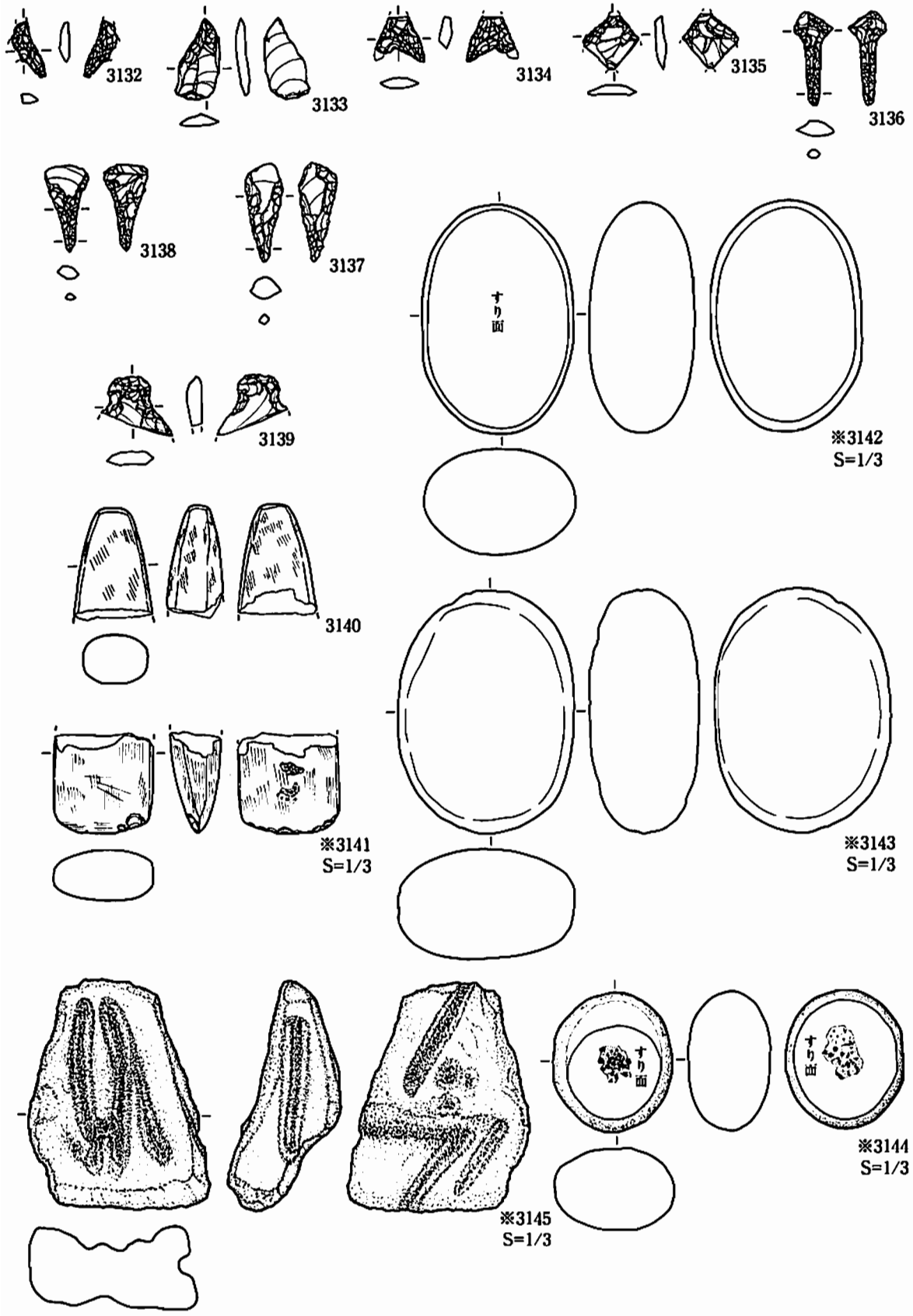


第216図　48・49・53号住居跡出土遺物・1～3・7・9・10号炉出土遺物



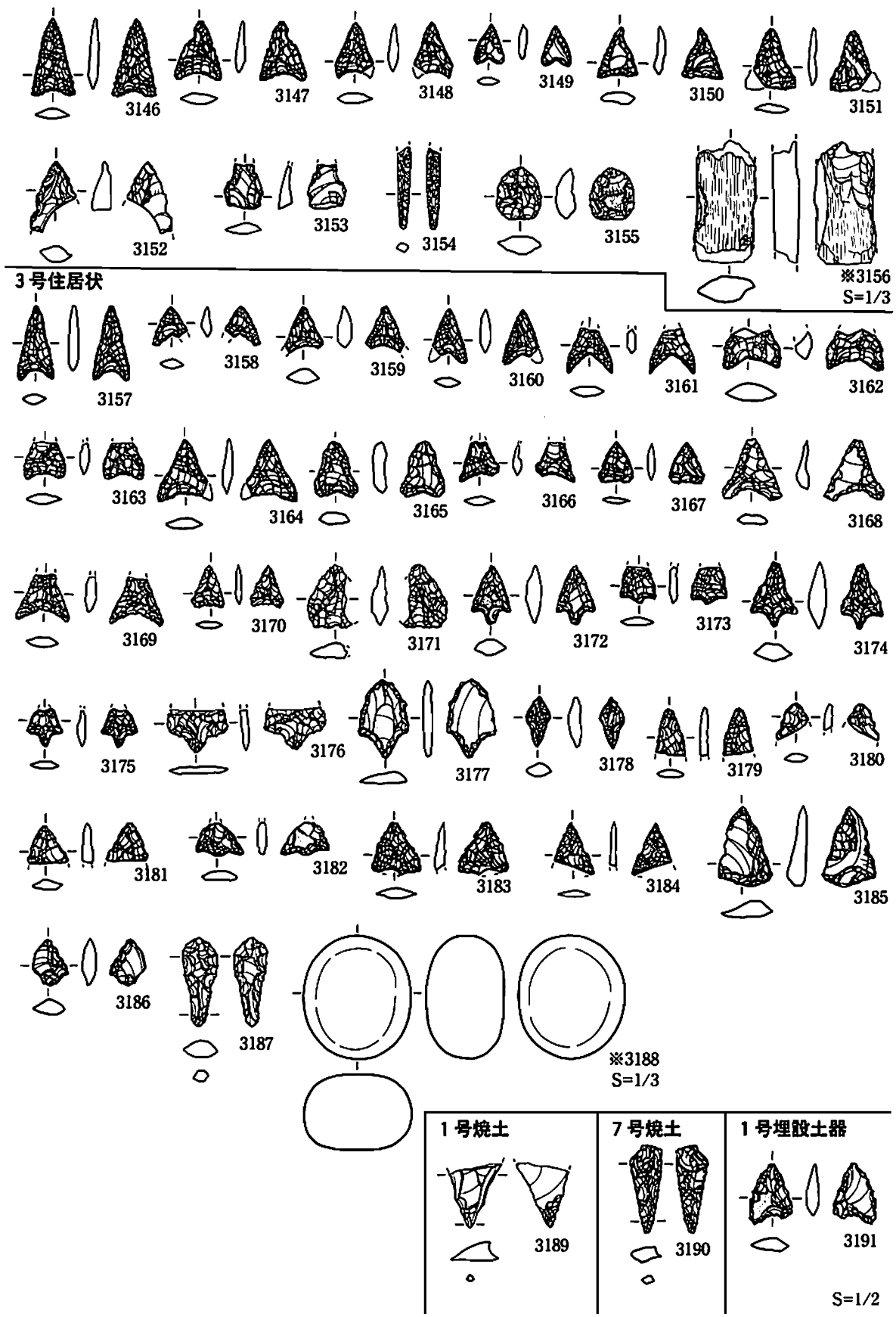
第217図　11号炉出土遺物、1号住居状遺構出土遺物（1）

1号住居状



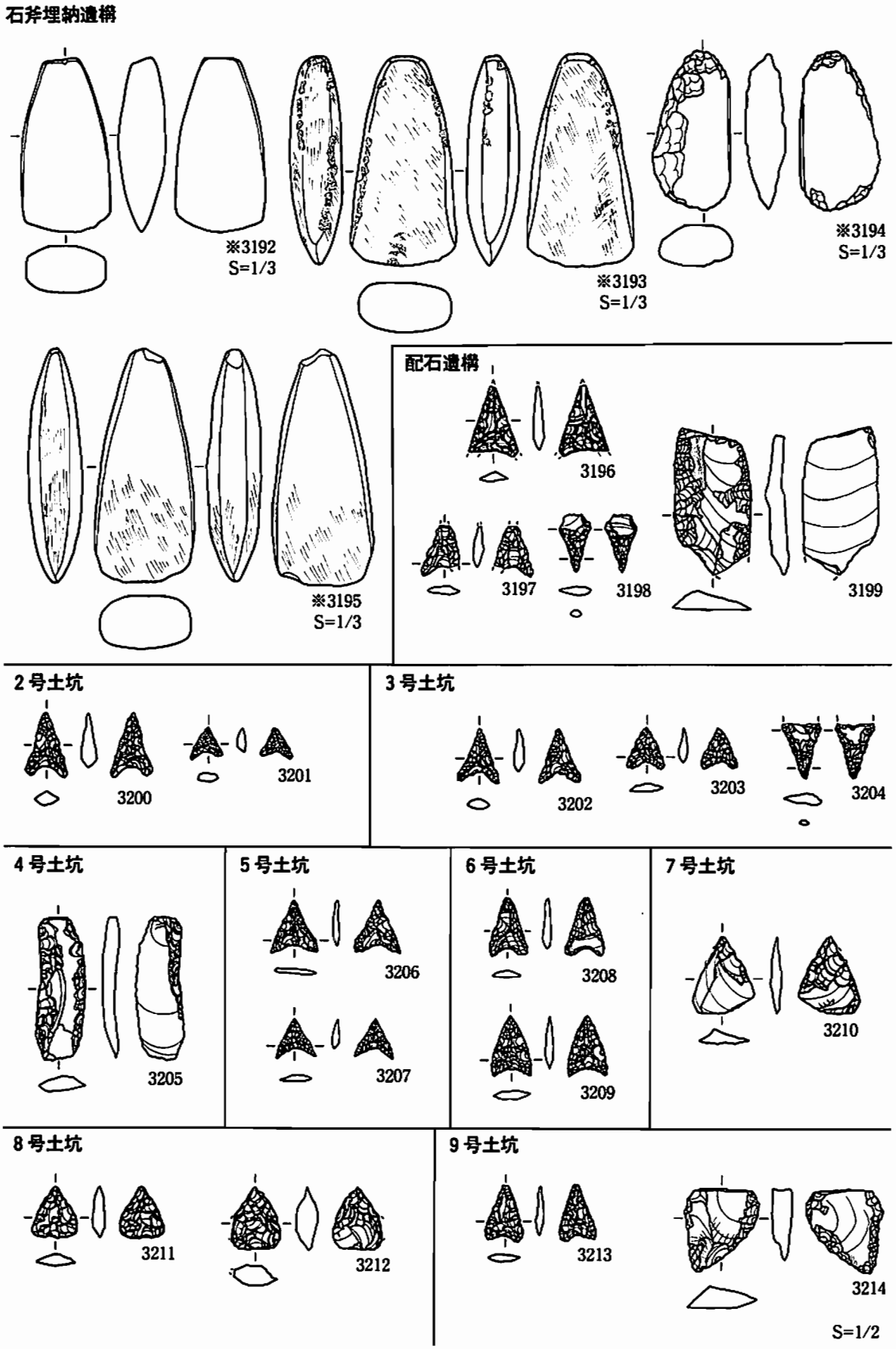
第218図　1号住居状遺構出土遺物(2)

2号住居状

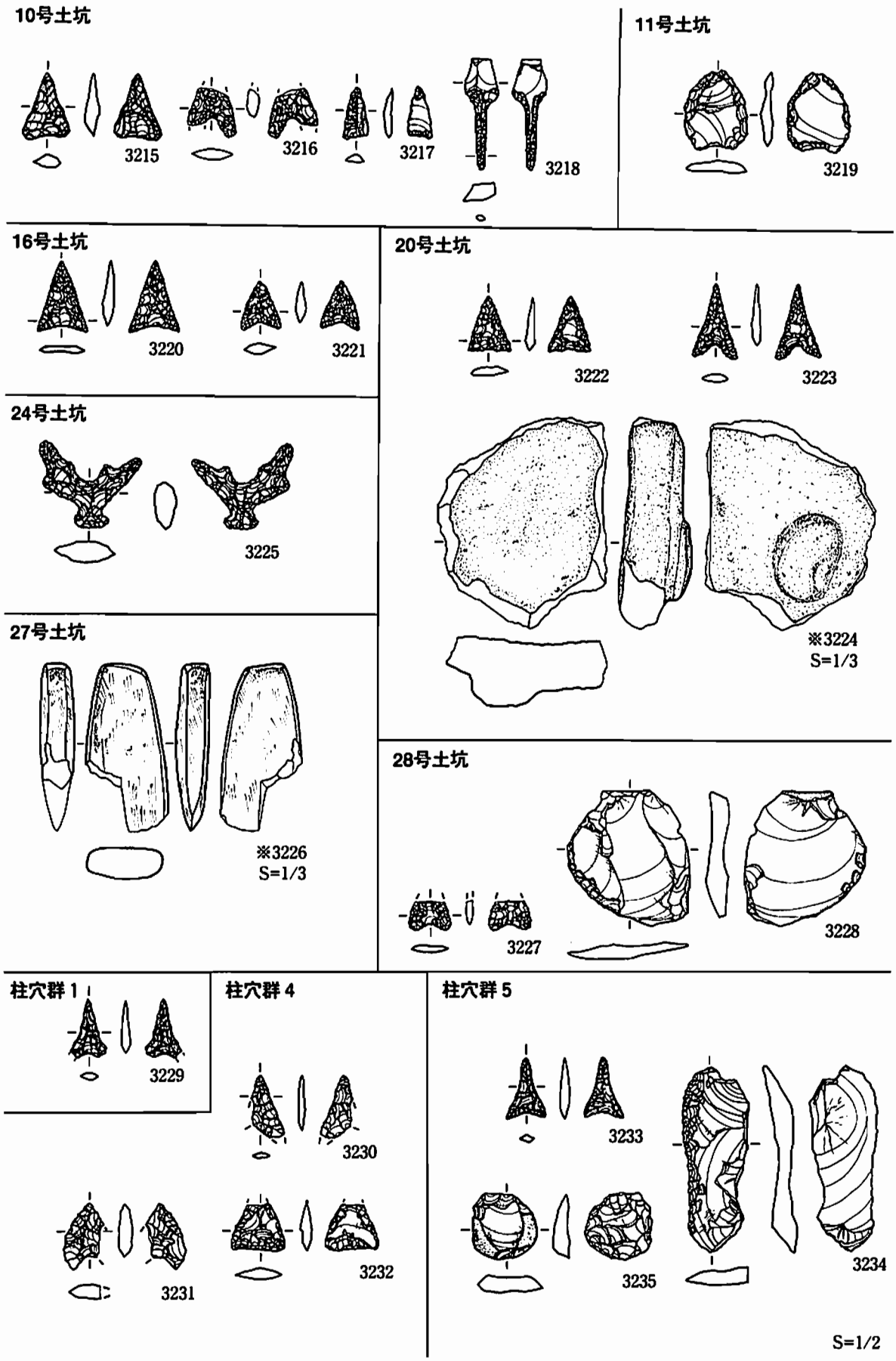


3号住居状

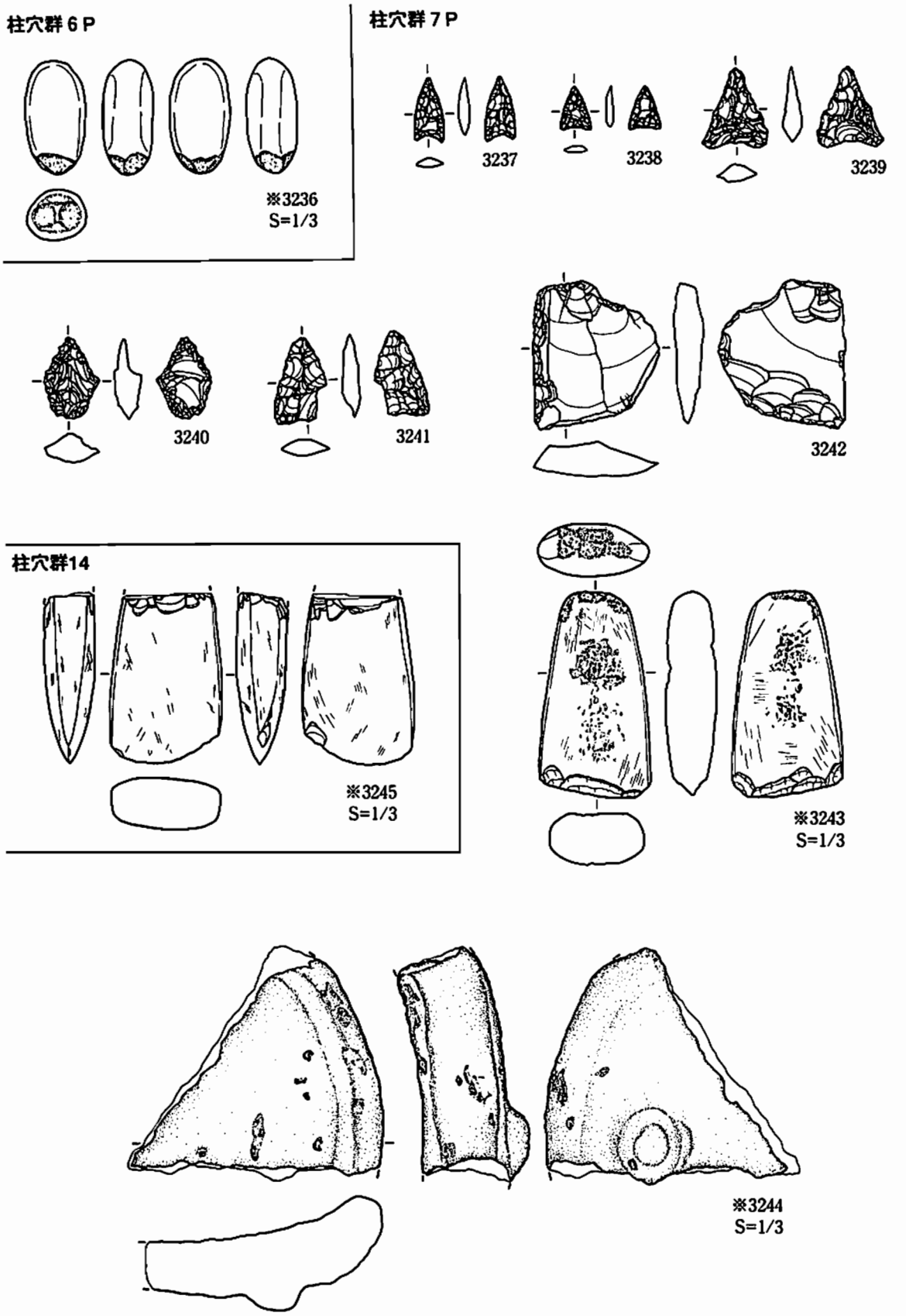
第219図　2・3号住居状遺構出土遺物、1・7号焼土出土遺物、1号埋設土器



第220図　石斧埋納遺構出土遺物、配石遺構出土遺物、2～9号土坑出土遺物



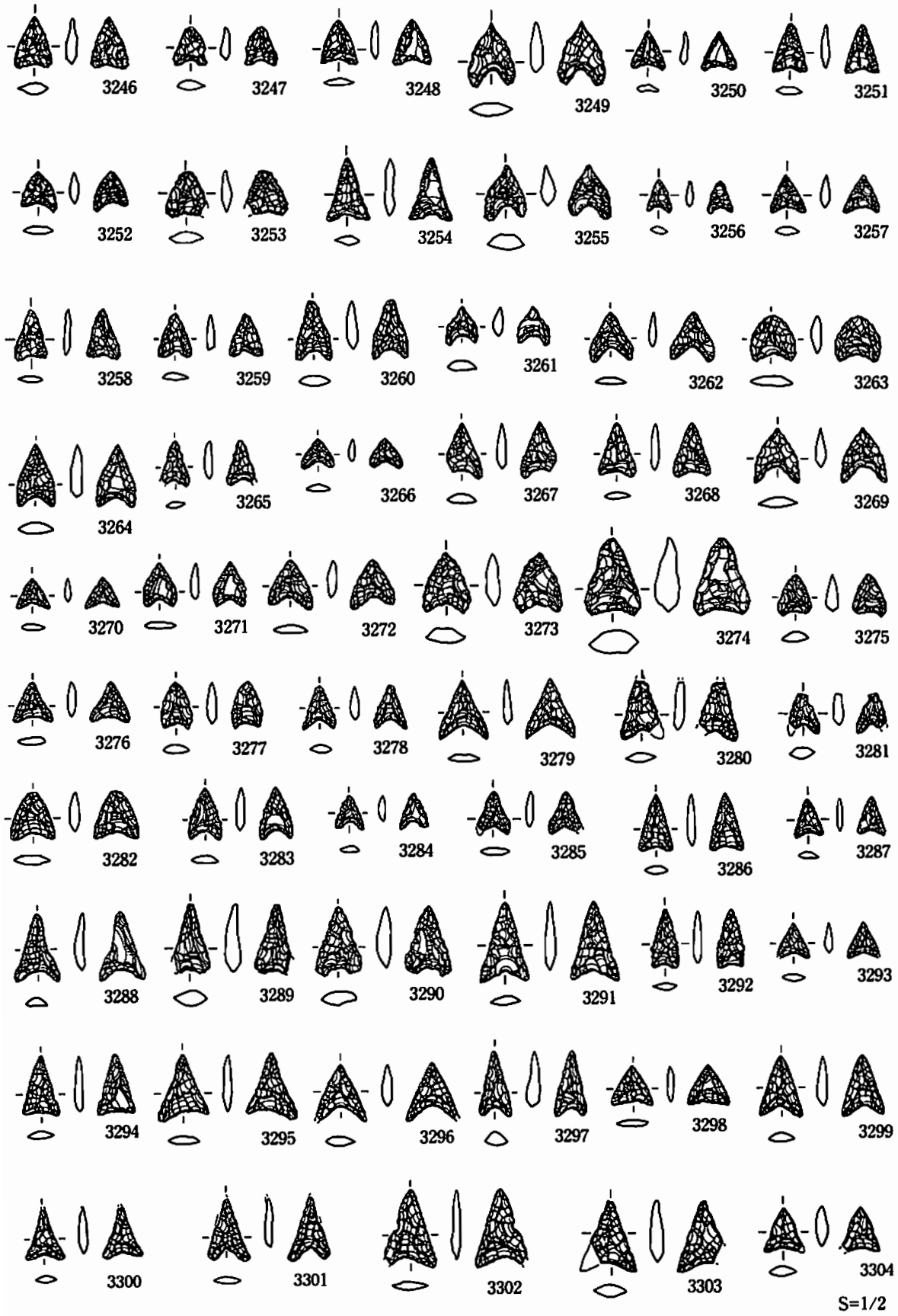
第221図　10・11・16・20・24・27・28号土坑出土遺物、柱穴群1・4・5出土遺物



S=1/2

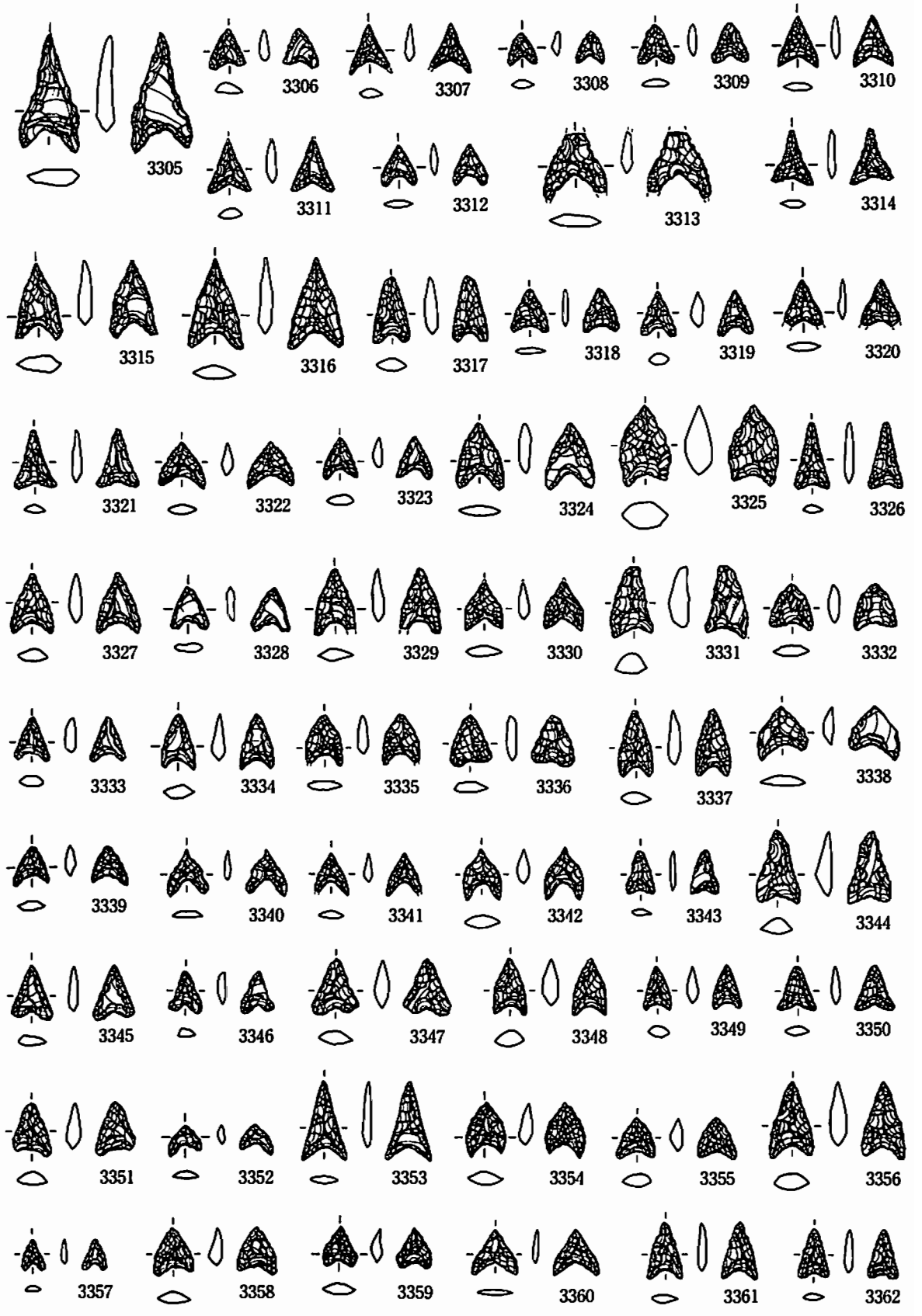
第222図　柱穴群６Ｐ・７Ｐ・14出土遺物

石器(1)



第223図　遺構外出土石器(1)

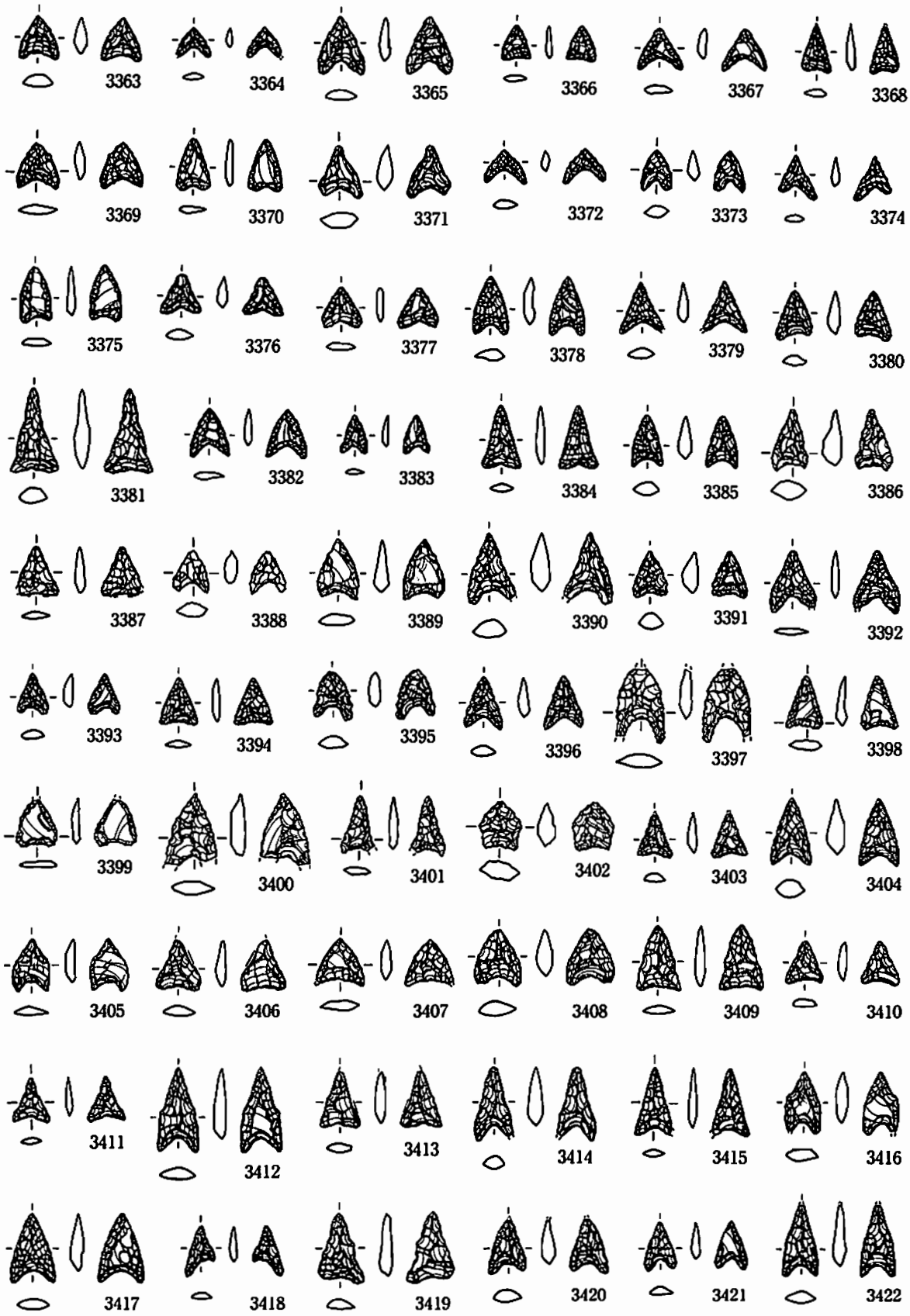
石器（2）



S=1/2

第224図　遺構外出土石器（2）

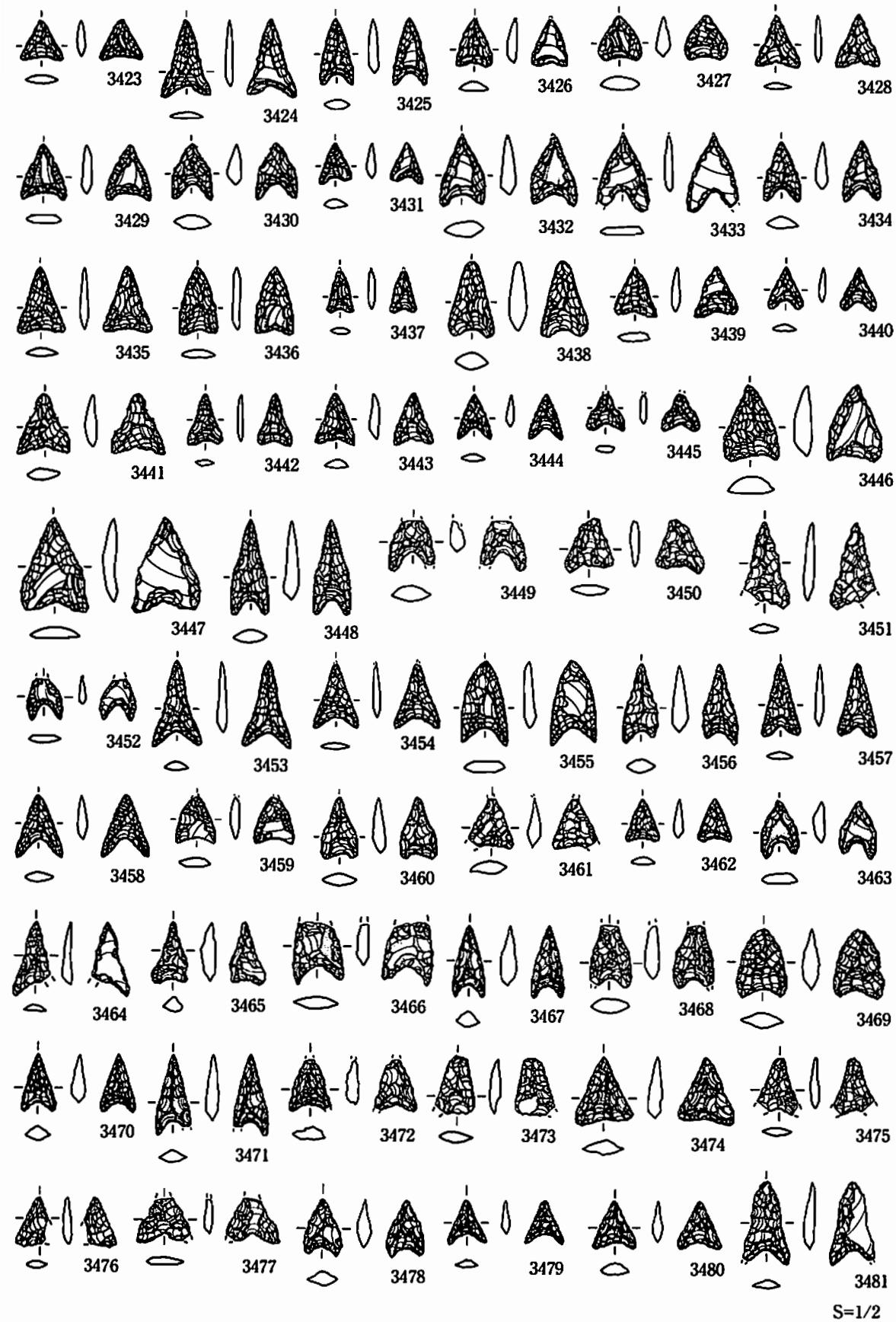
石器(3)



S=1/2

第225図　遺構外出土石器(3)

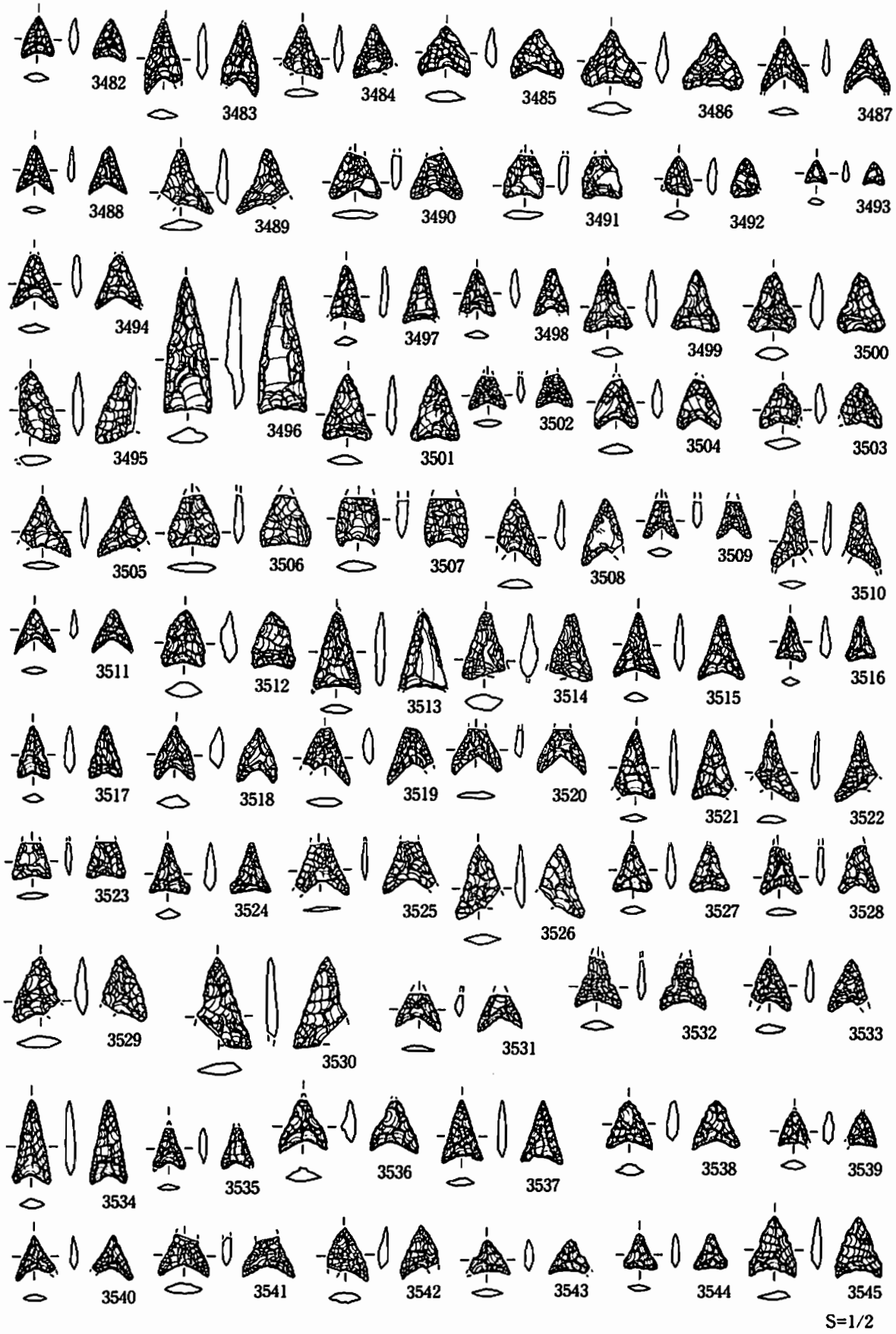
石器（4）



S=1/2

第226図　遺構外出土石器（4）

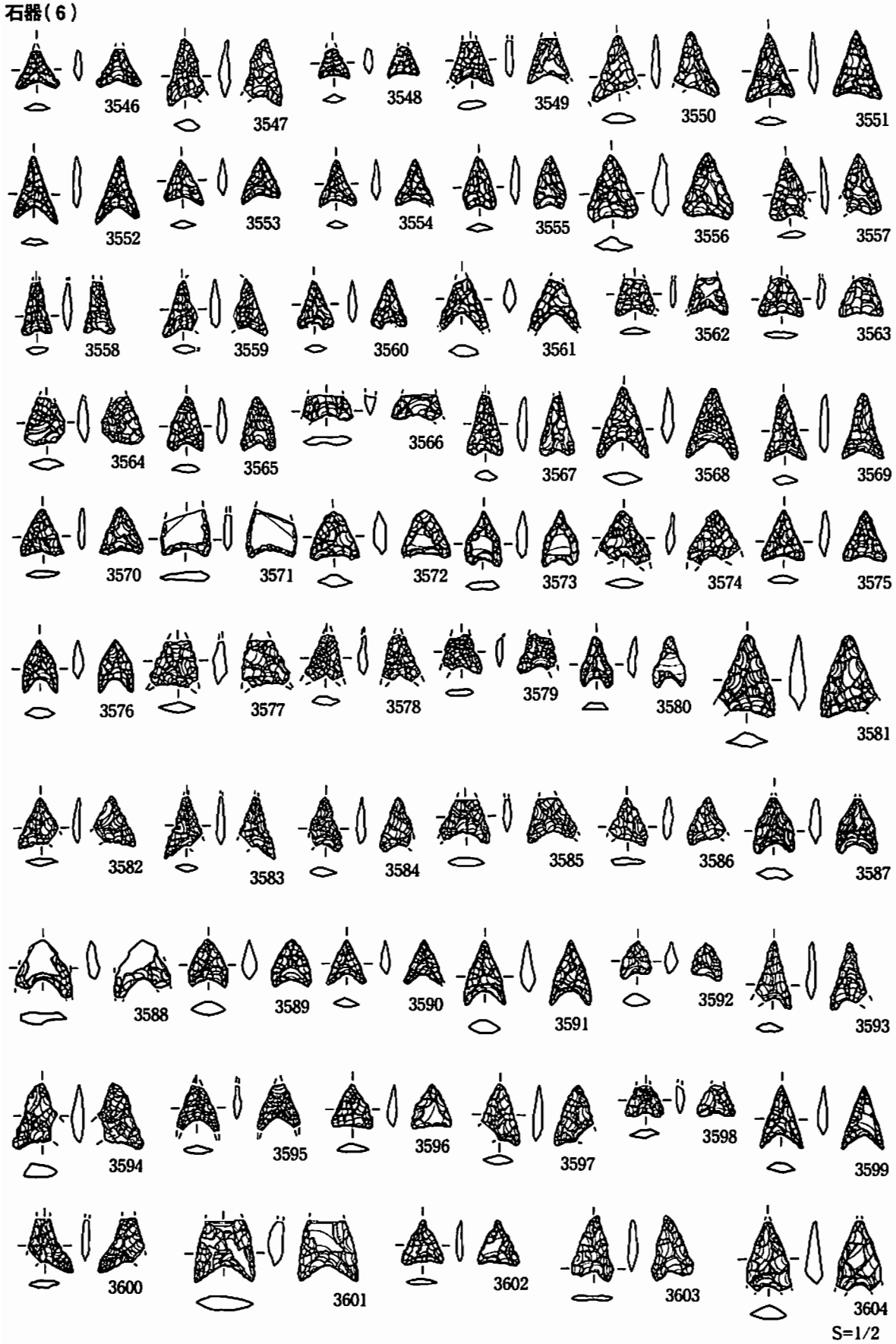
石器(5)



S=1/2

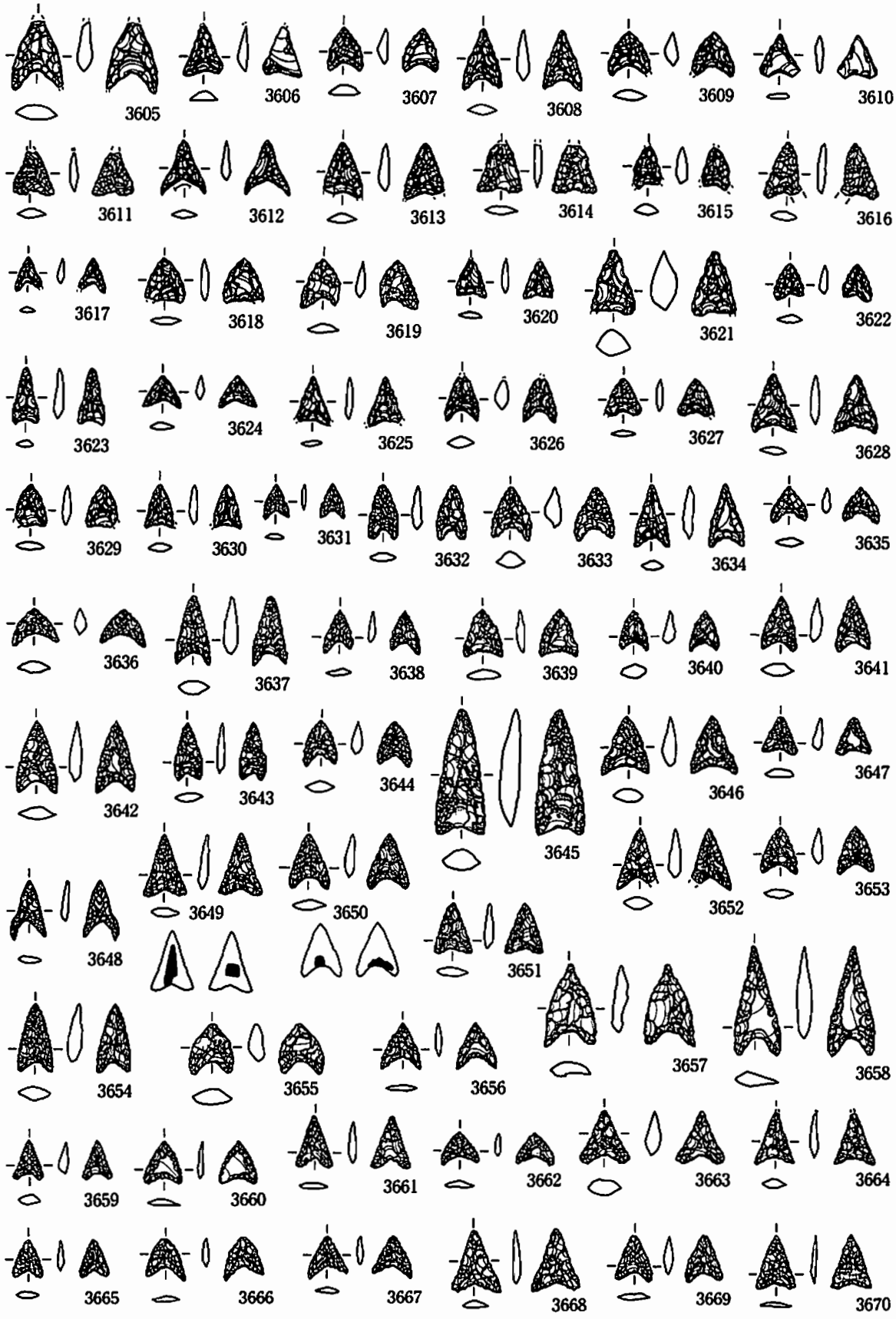
第227図　遺構外出土石器(5)

石器(6)



第228図　遺構外出土石器(6)

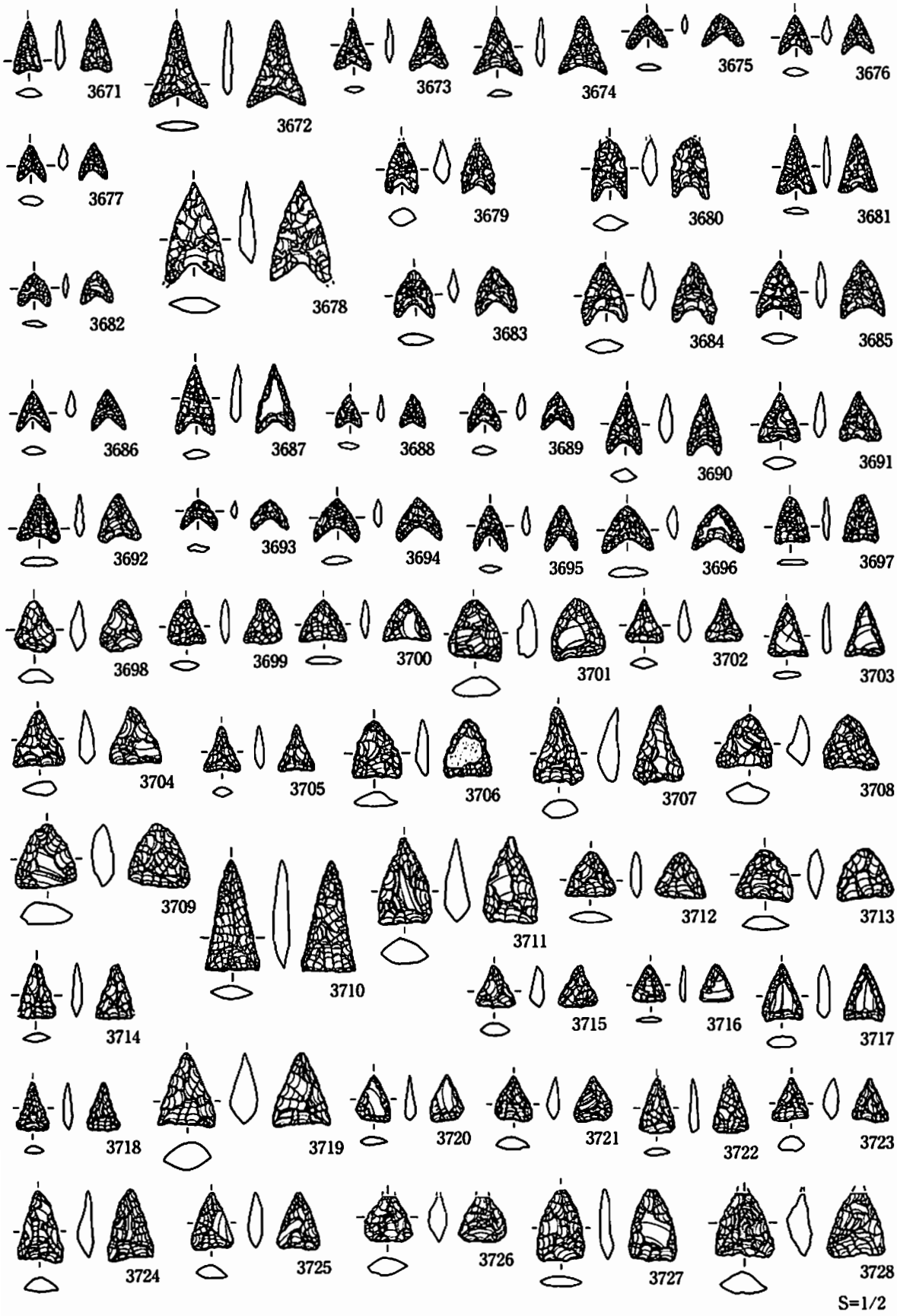
石器(7)



S=1/2

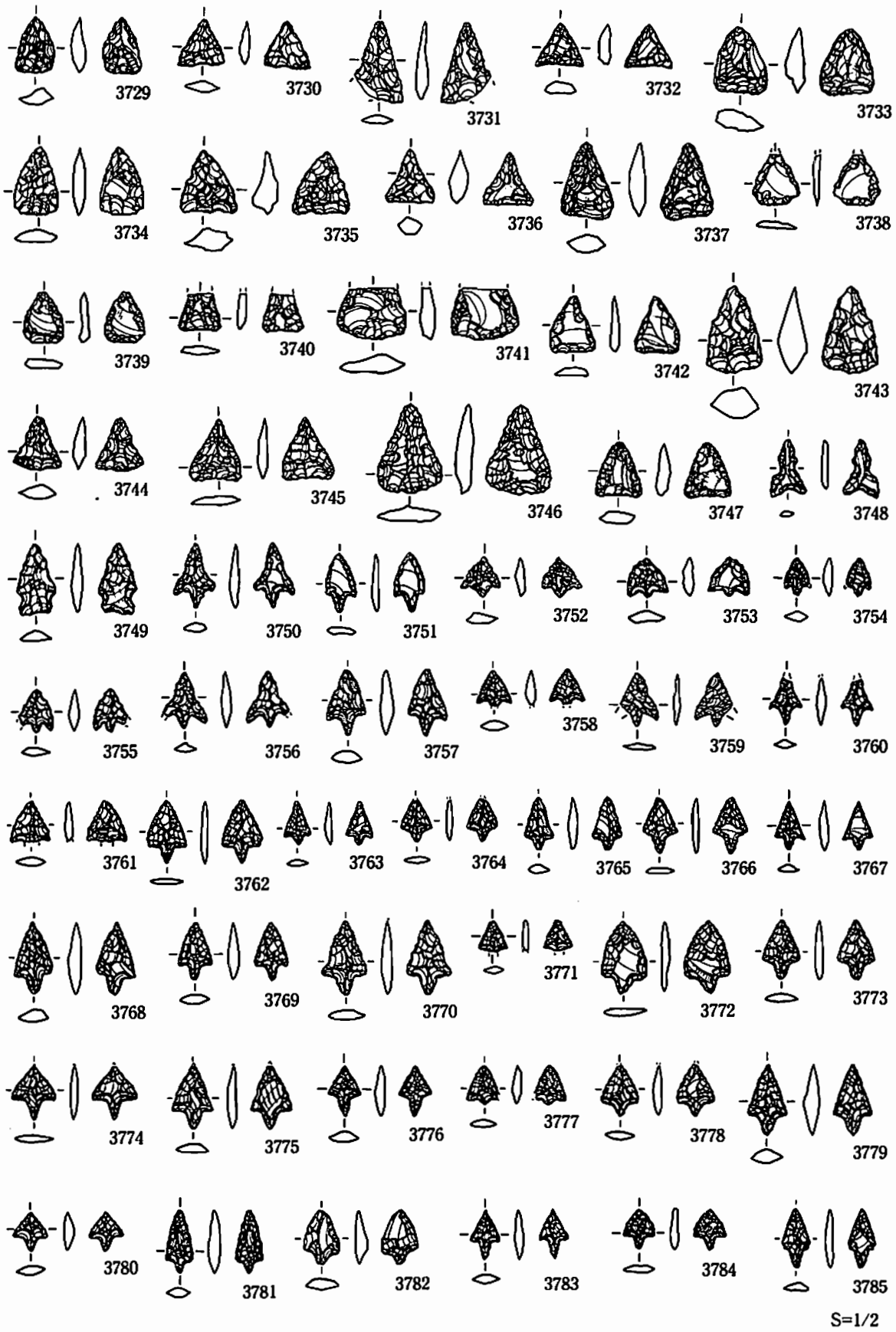
第229図　遺構外出土石器(7)

石器(8)



第230図　遺構外出土石器(8)

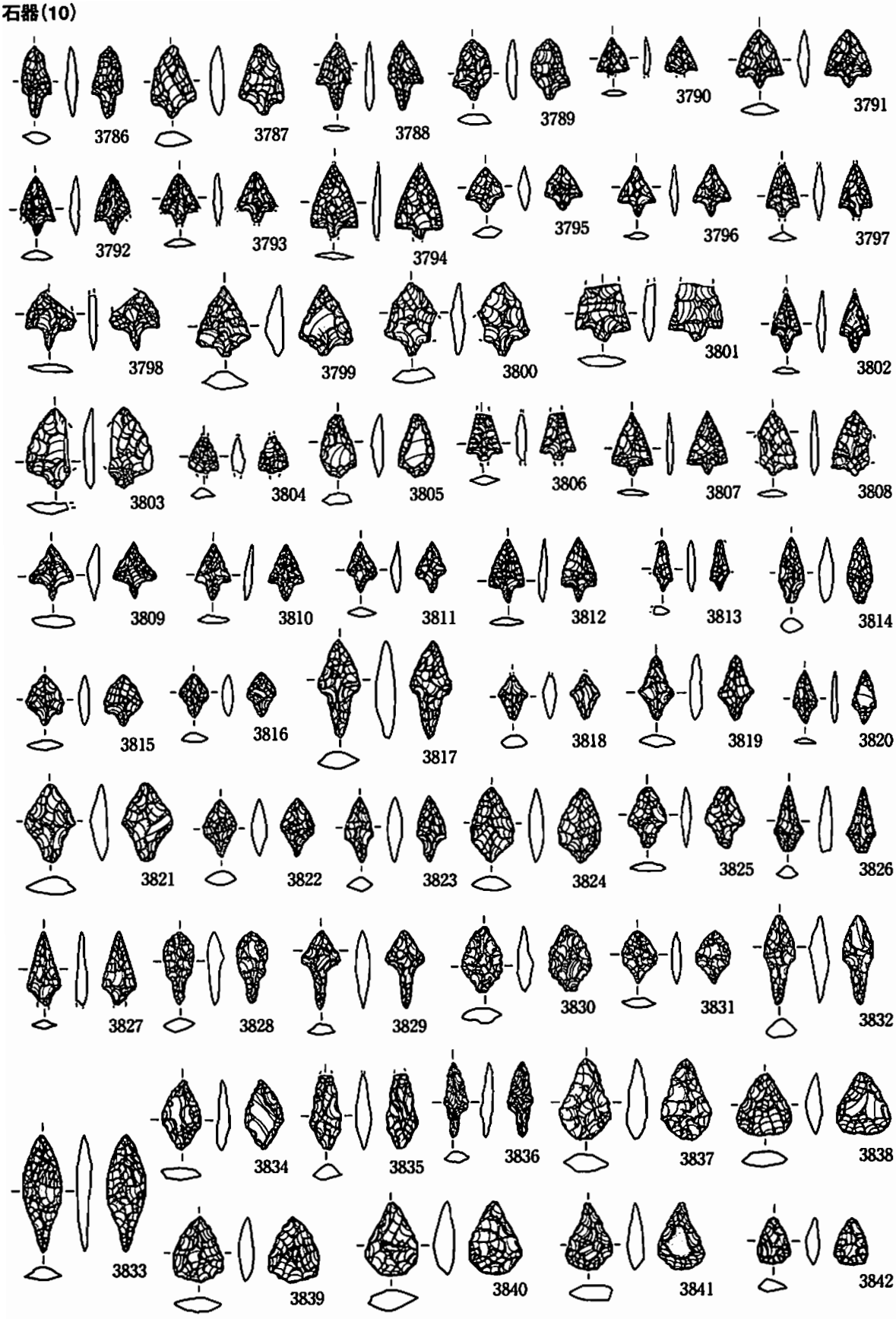
石器(9)



S=1/2

第231図　遺構外出土石器(9)

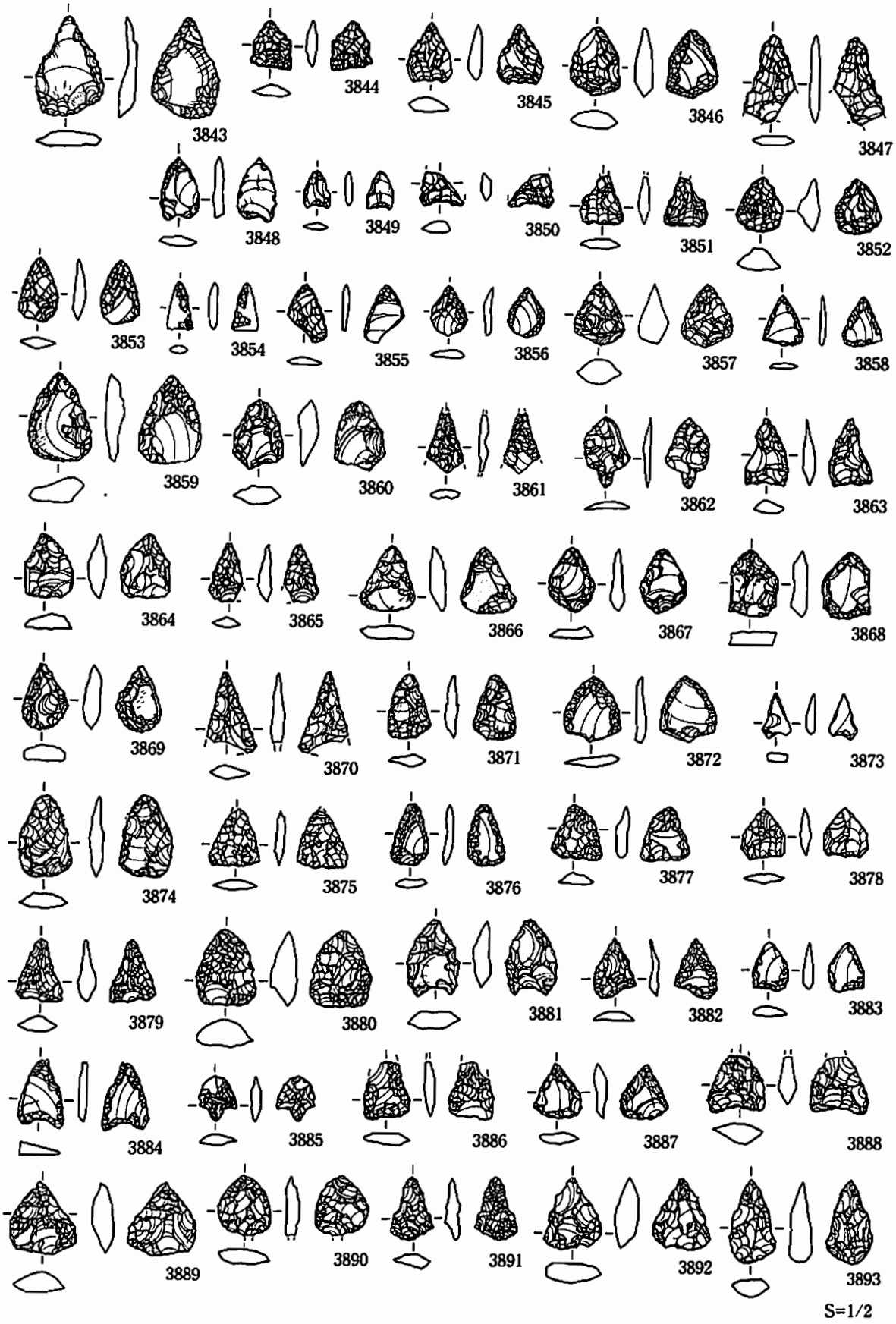
石器(10)



S=1/2

第232図　遺構外出土石器(10)

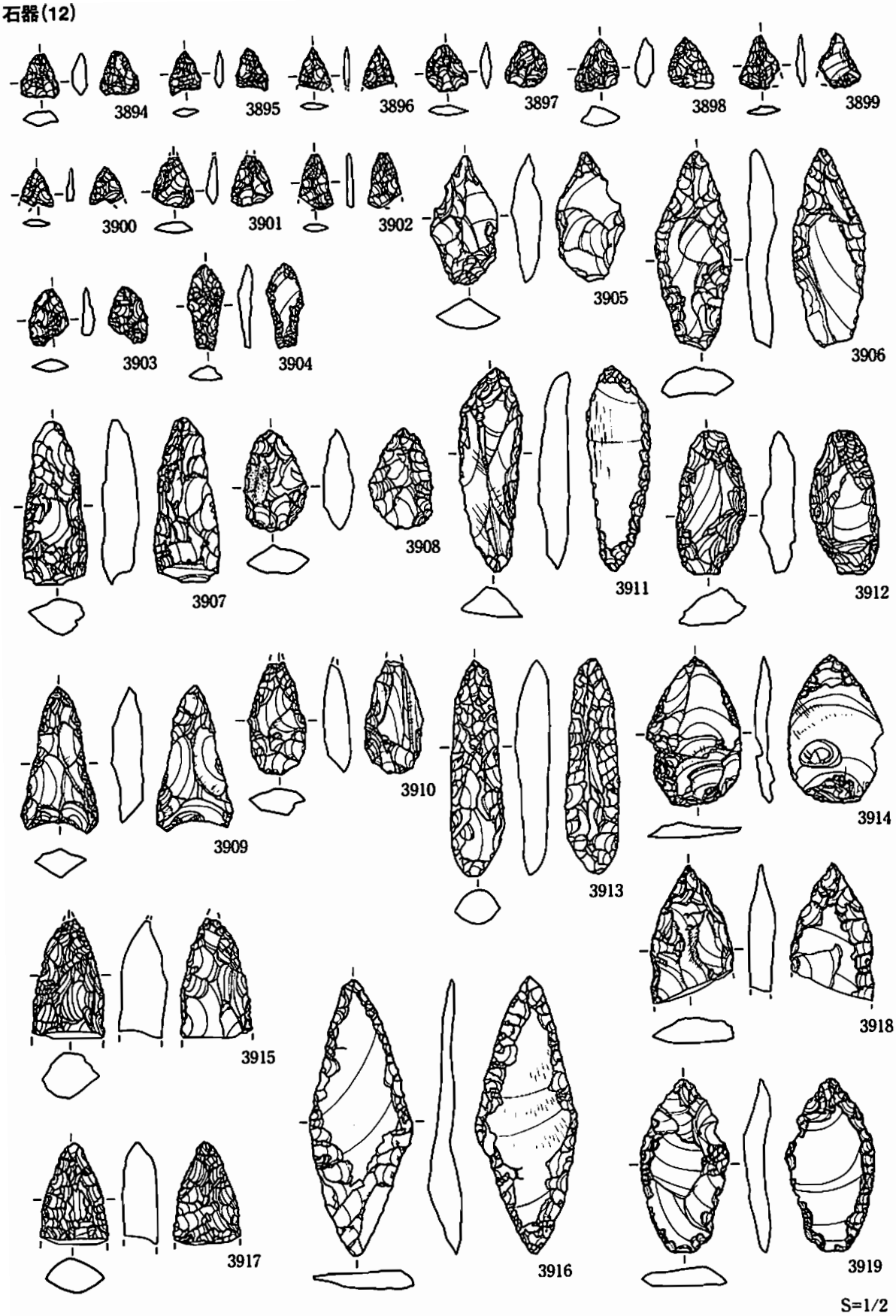
石器(11)



S=1/2

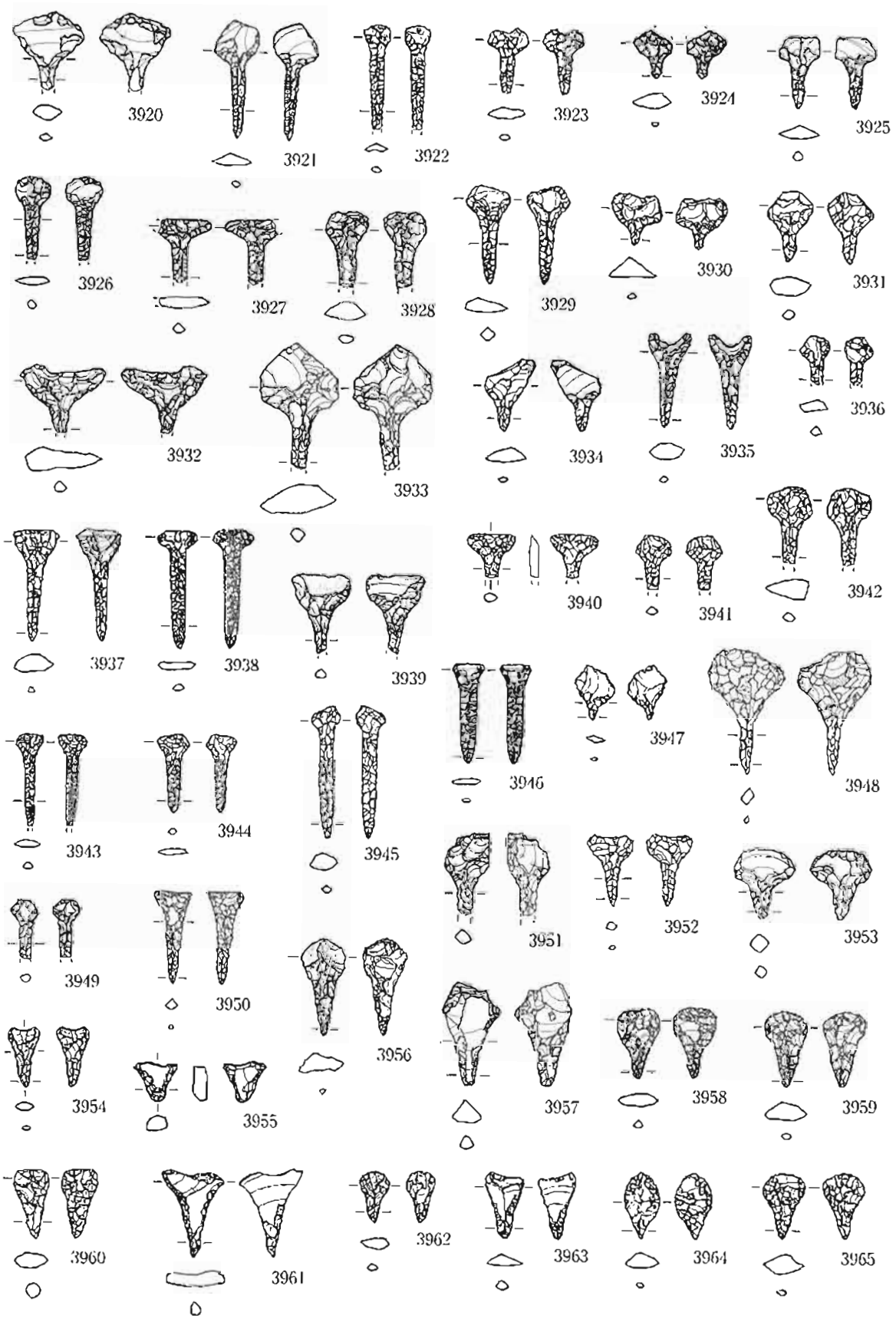
第233図　遺構外出土石器(11)

石器(12)



第234図　遺構外出土石器(12)

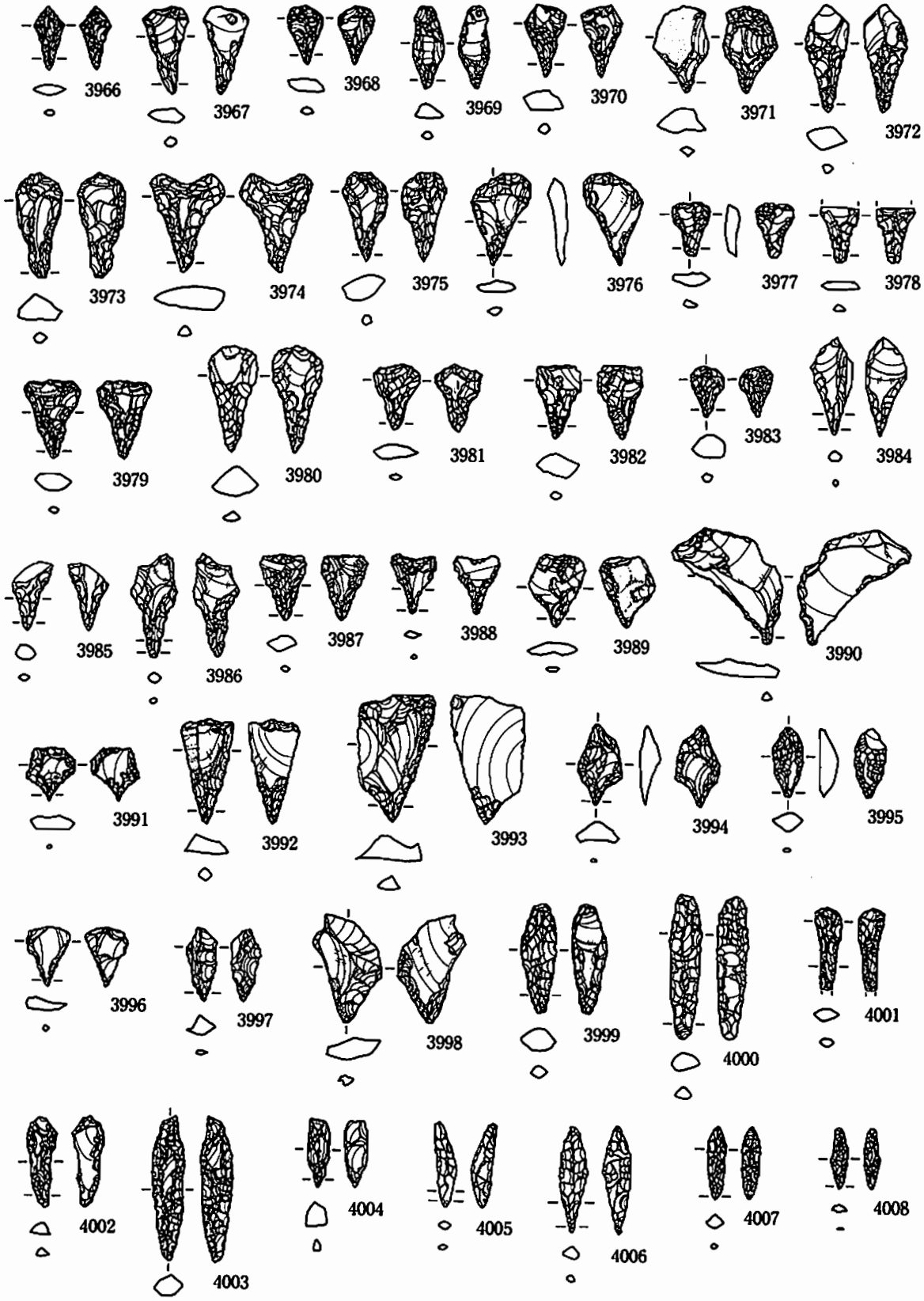
石器(13)



S=1/2

第235図　遺構外出土石器(13)

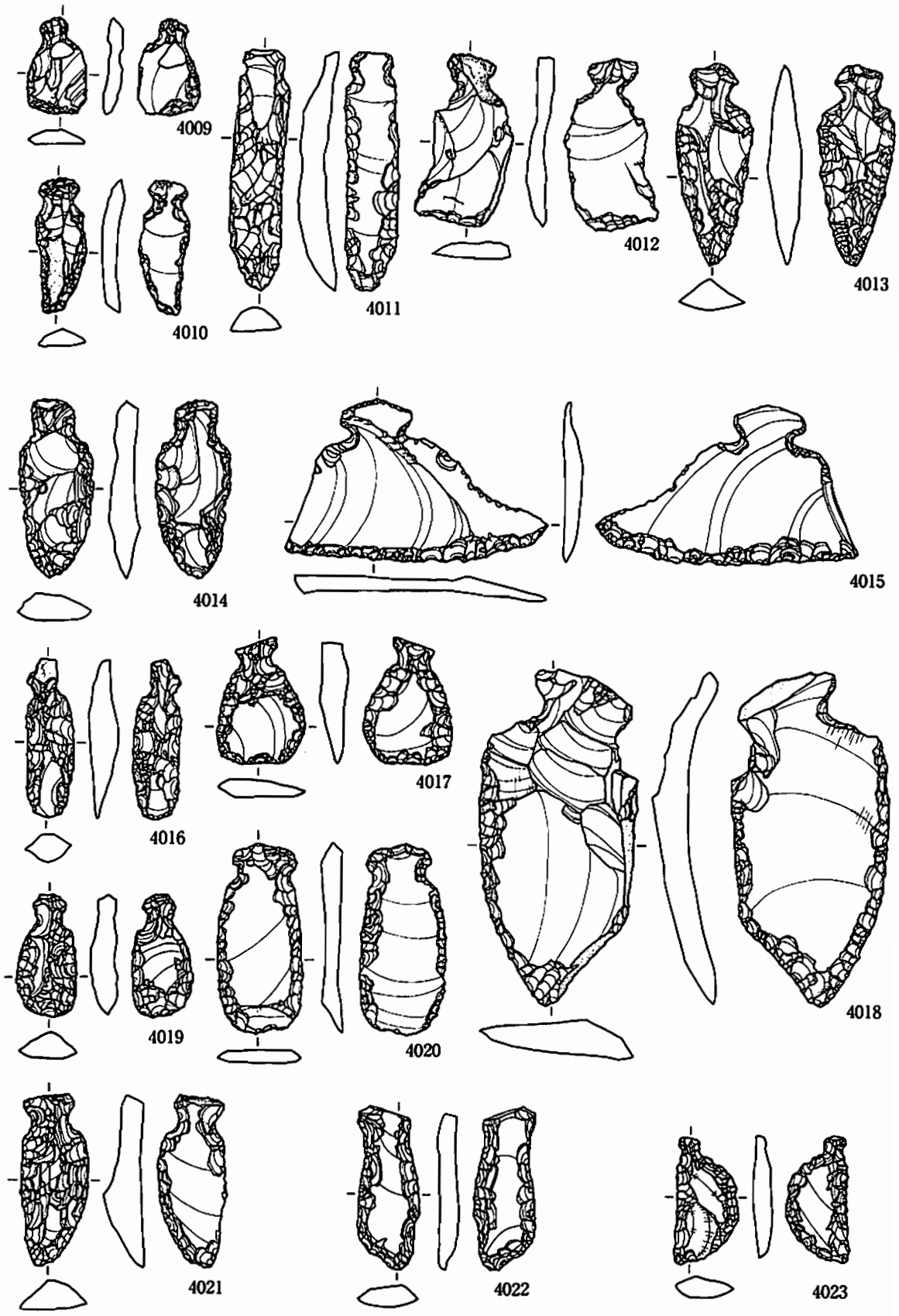
石器(14)



S=1/2

第236図　遺構外出土石器(14)

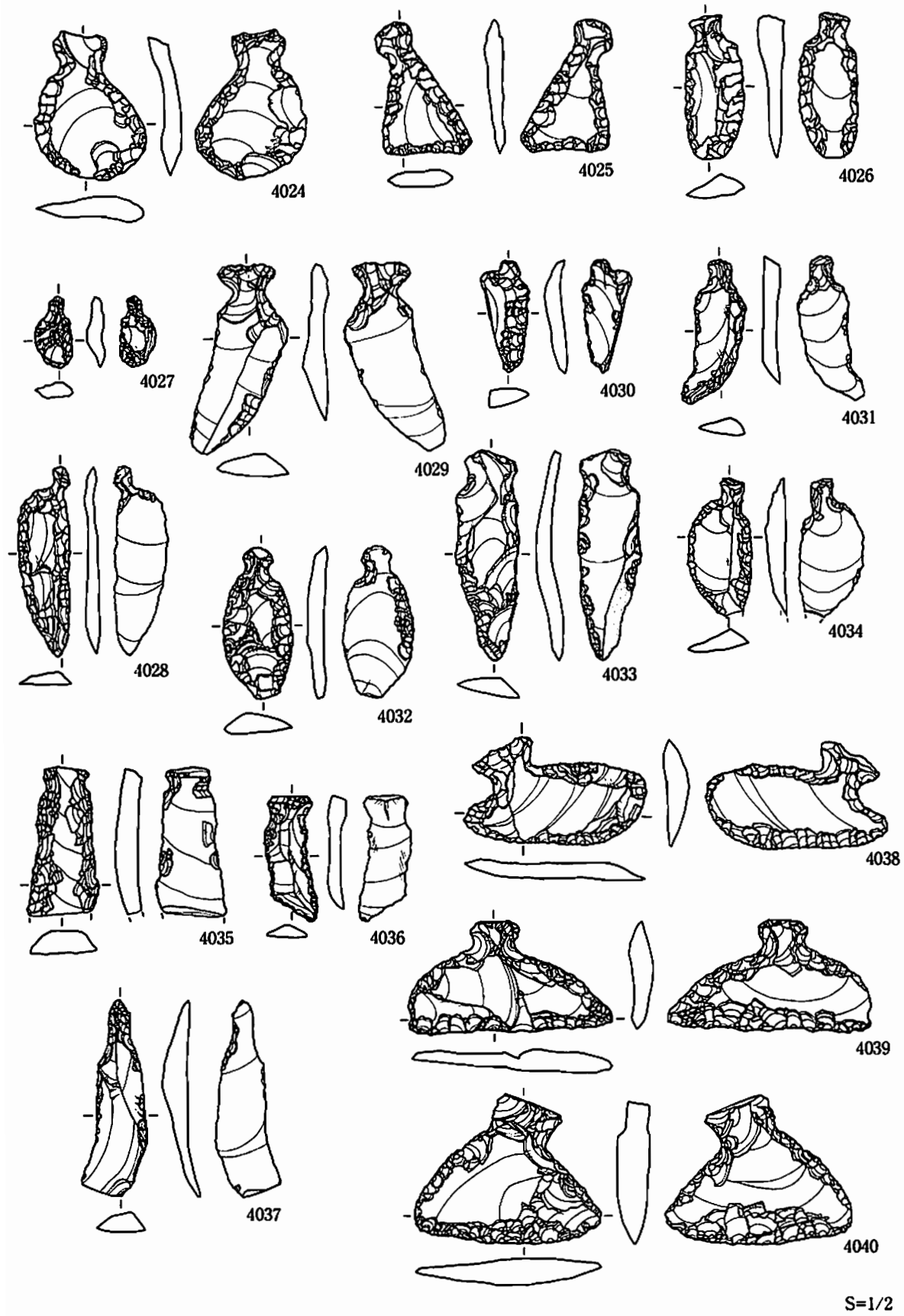
石器(15)



S=1/2

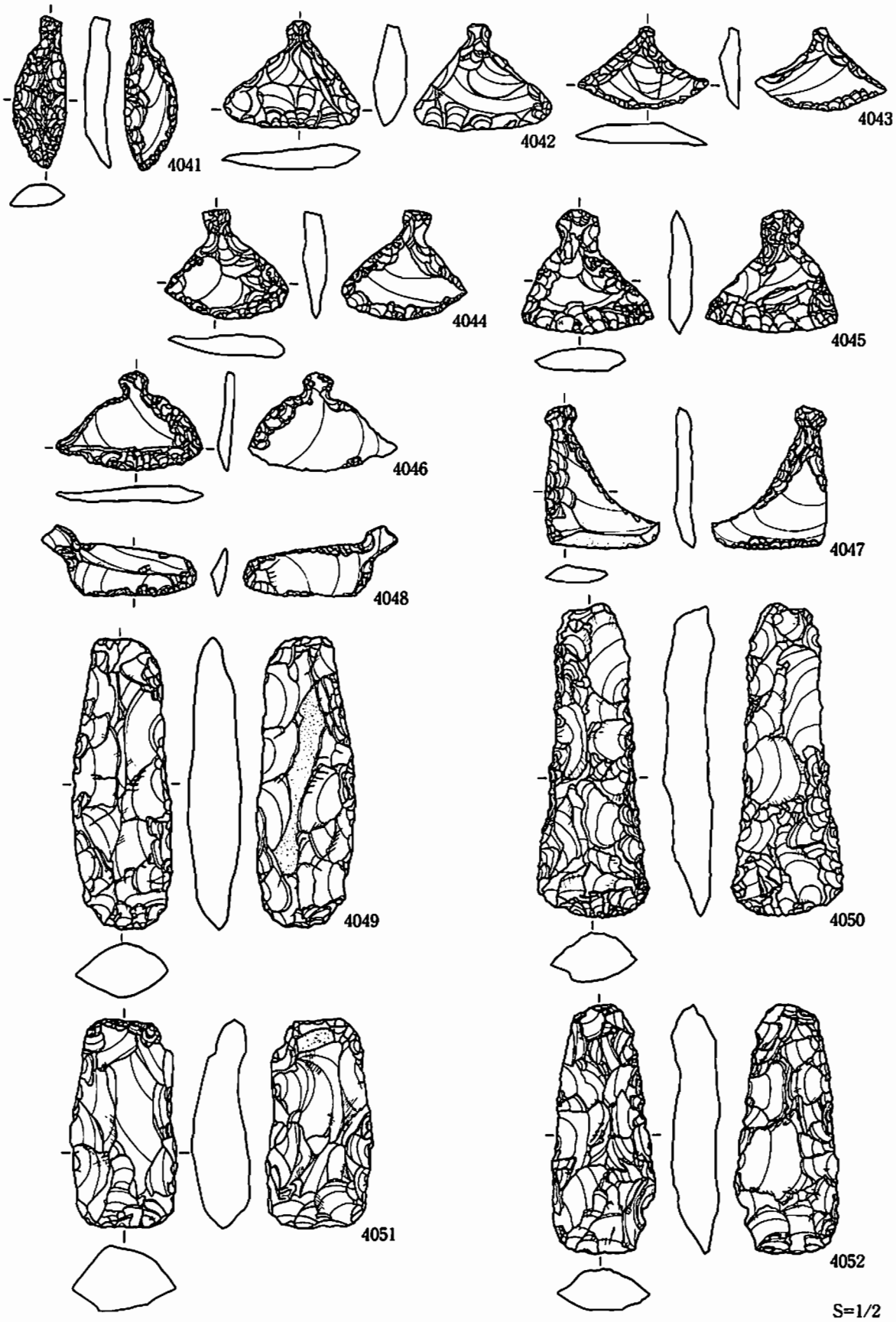
第237図　遺構外出土石器(15)

石器(16)



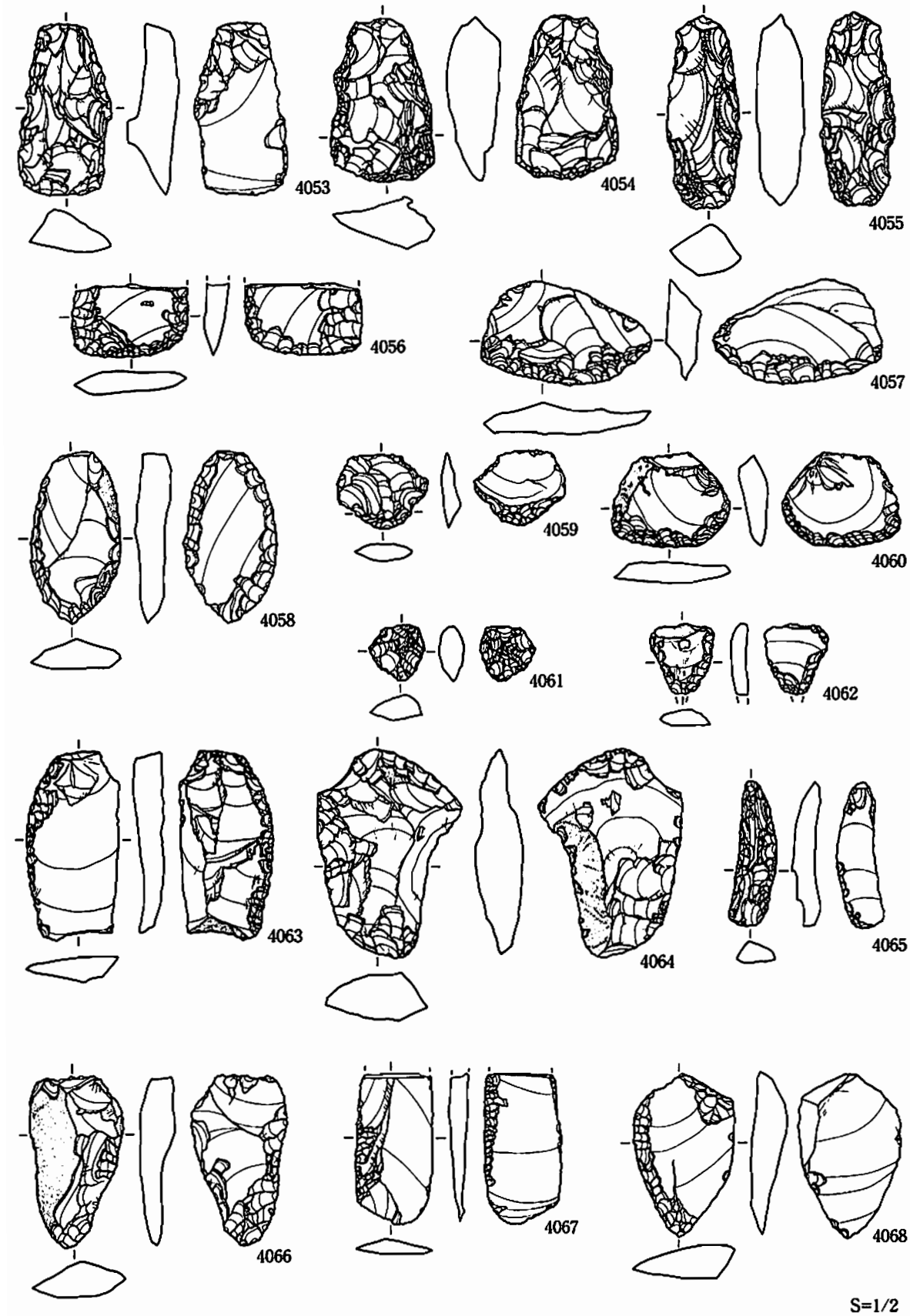
第238図　遺構外出土石器(16)

石器(17)



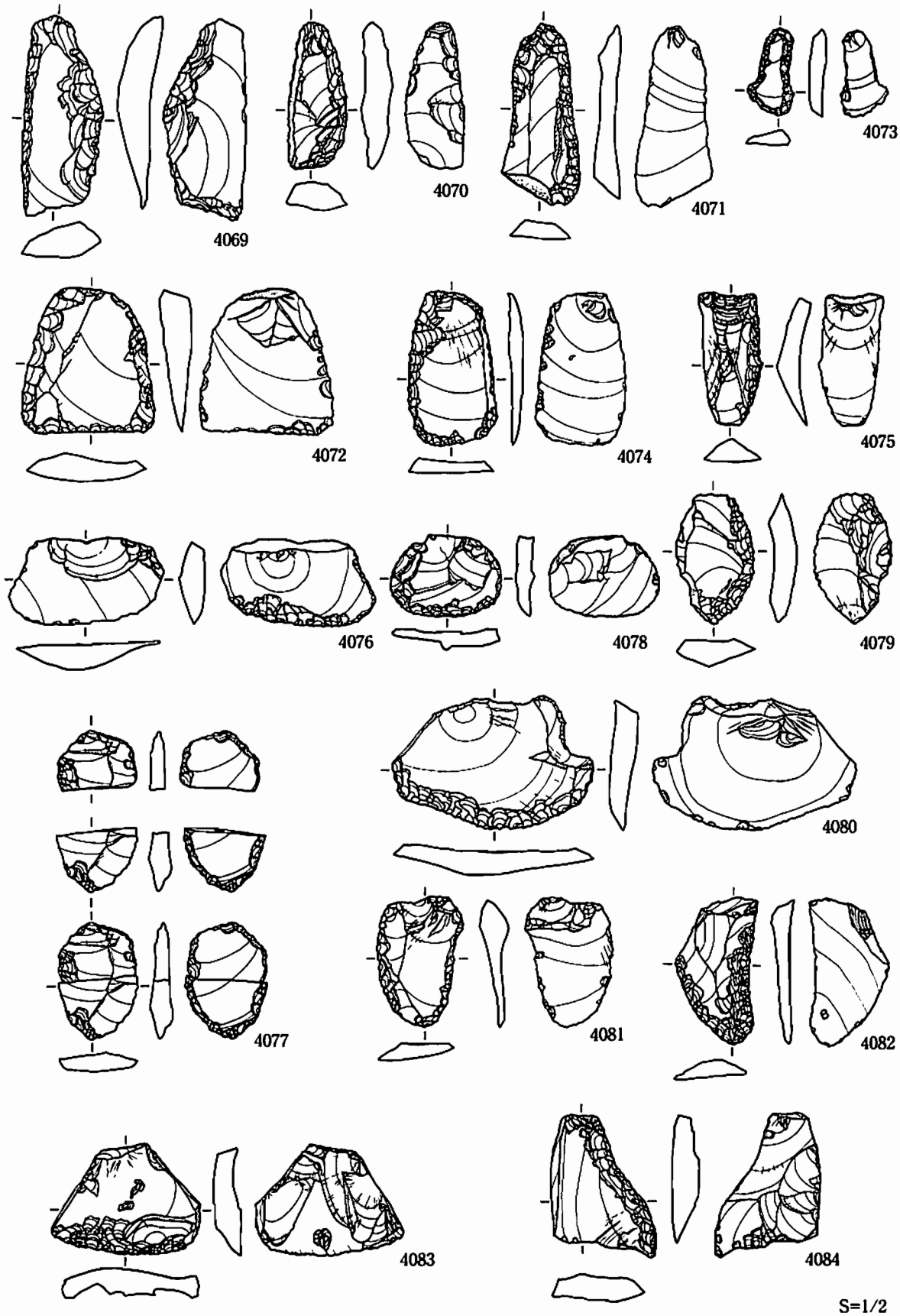
第239図　遺構外出土石器(17)

石器(18)



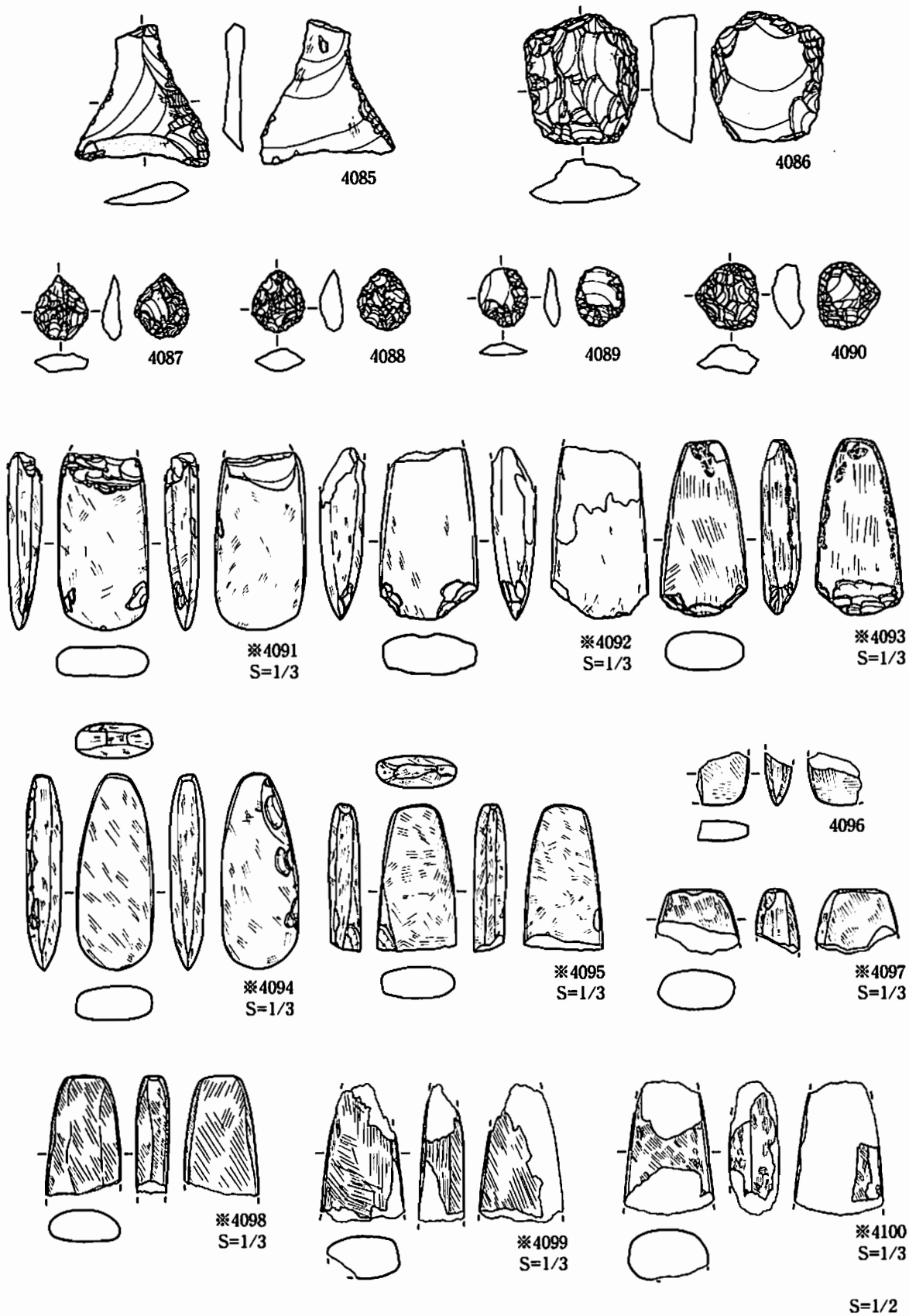
第240図　遺構外出土石器(18)

石器(19)



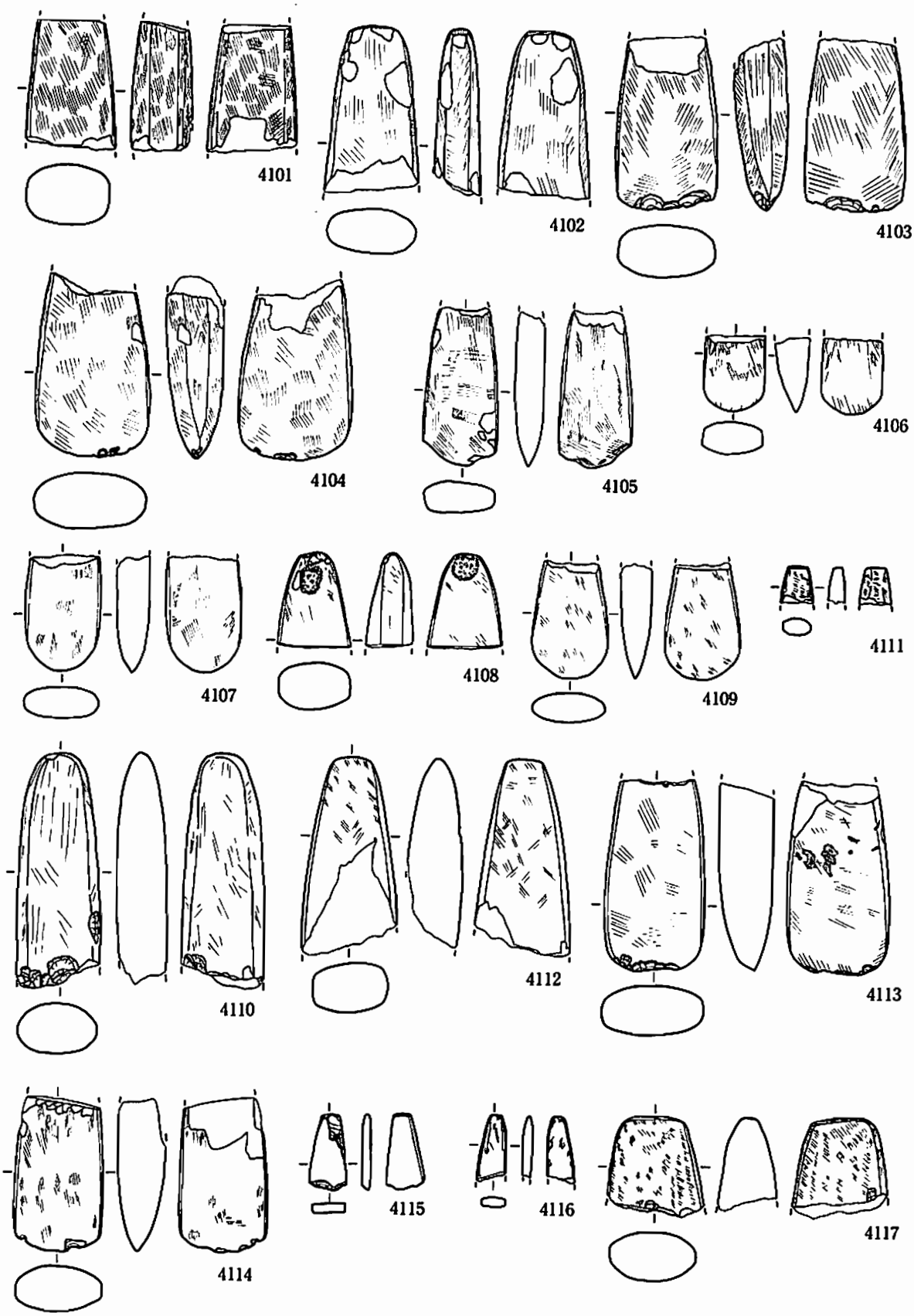
第241図　遺構外出土石器(19)

石器(20)



第242図　遺構外出土石器(20)

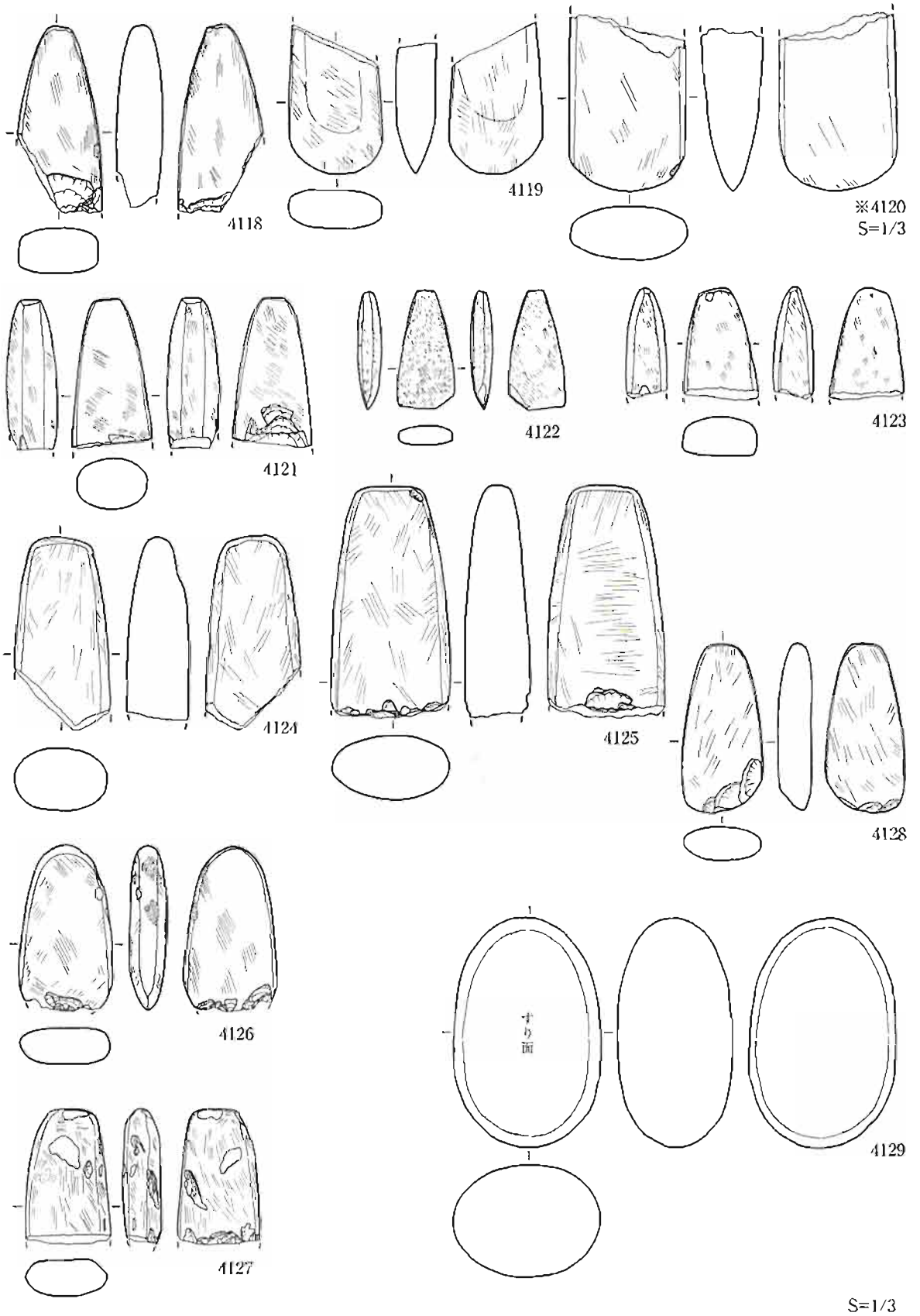
石器(21)



S=1/3

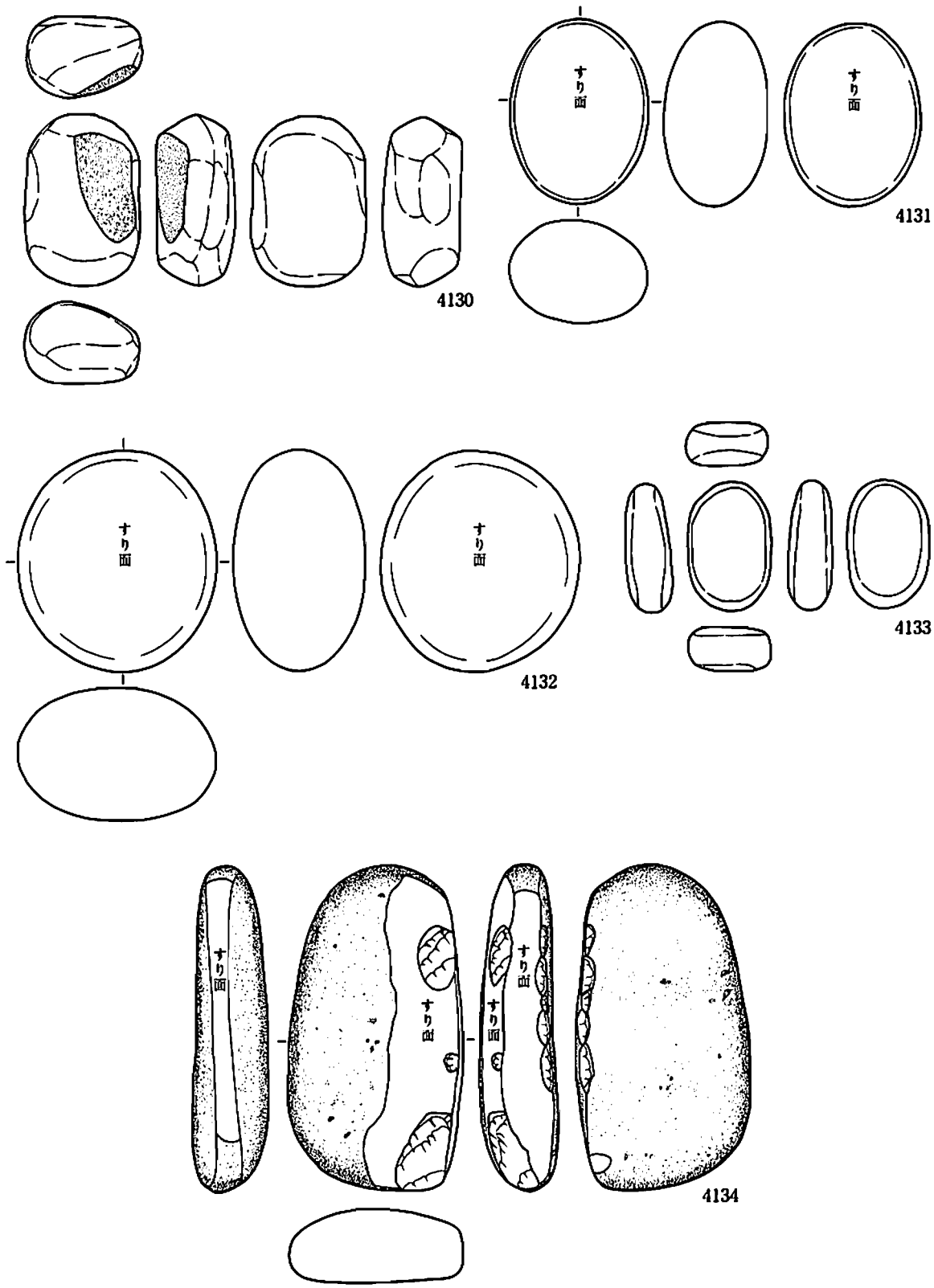
第243図　遺構外出土石器(21)

石器(22)



第244図　遺構外出土石器(22)

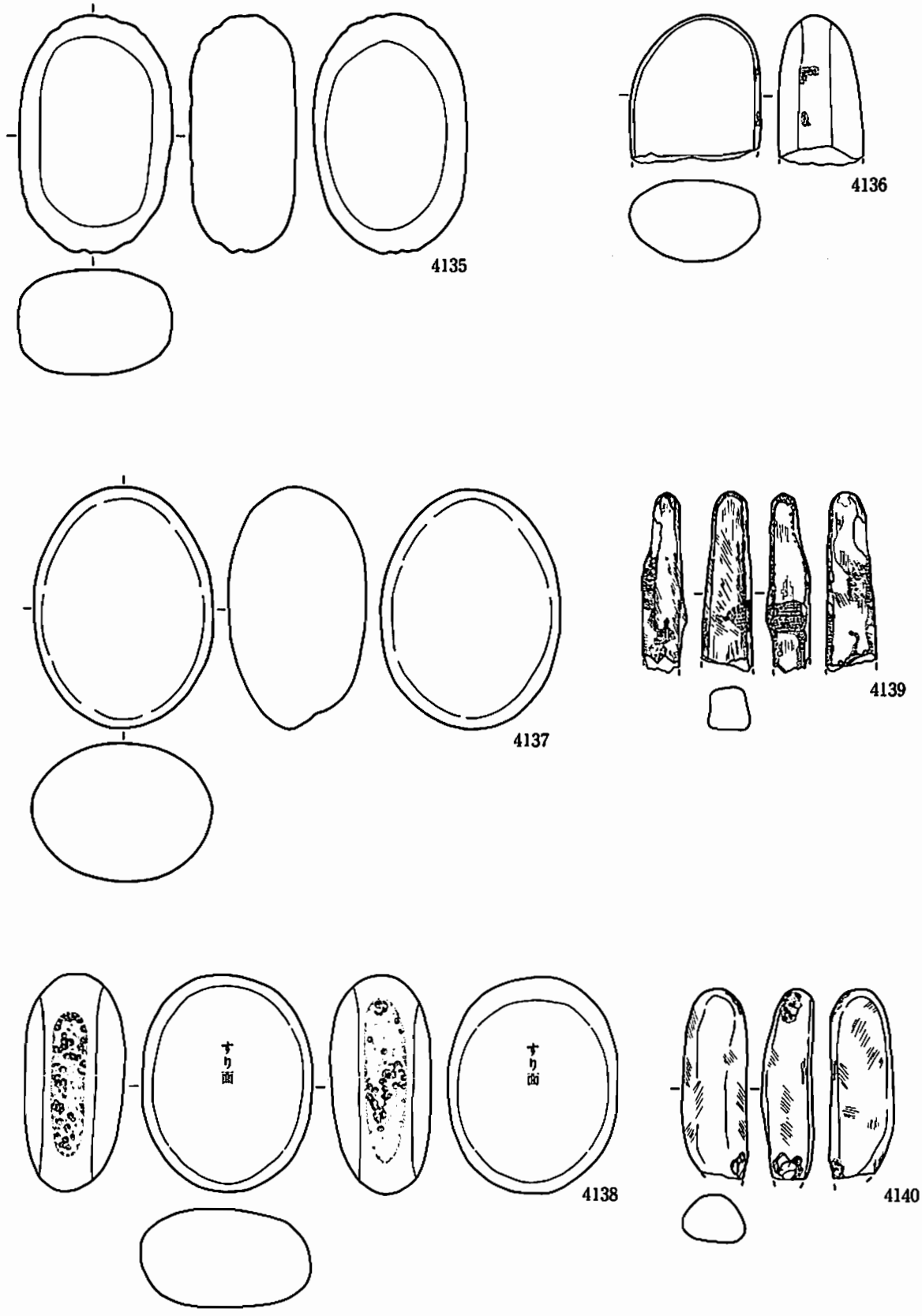
石器(23)



S=1/3

第245図　遺構外出土石器(23)

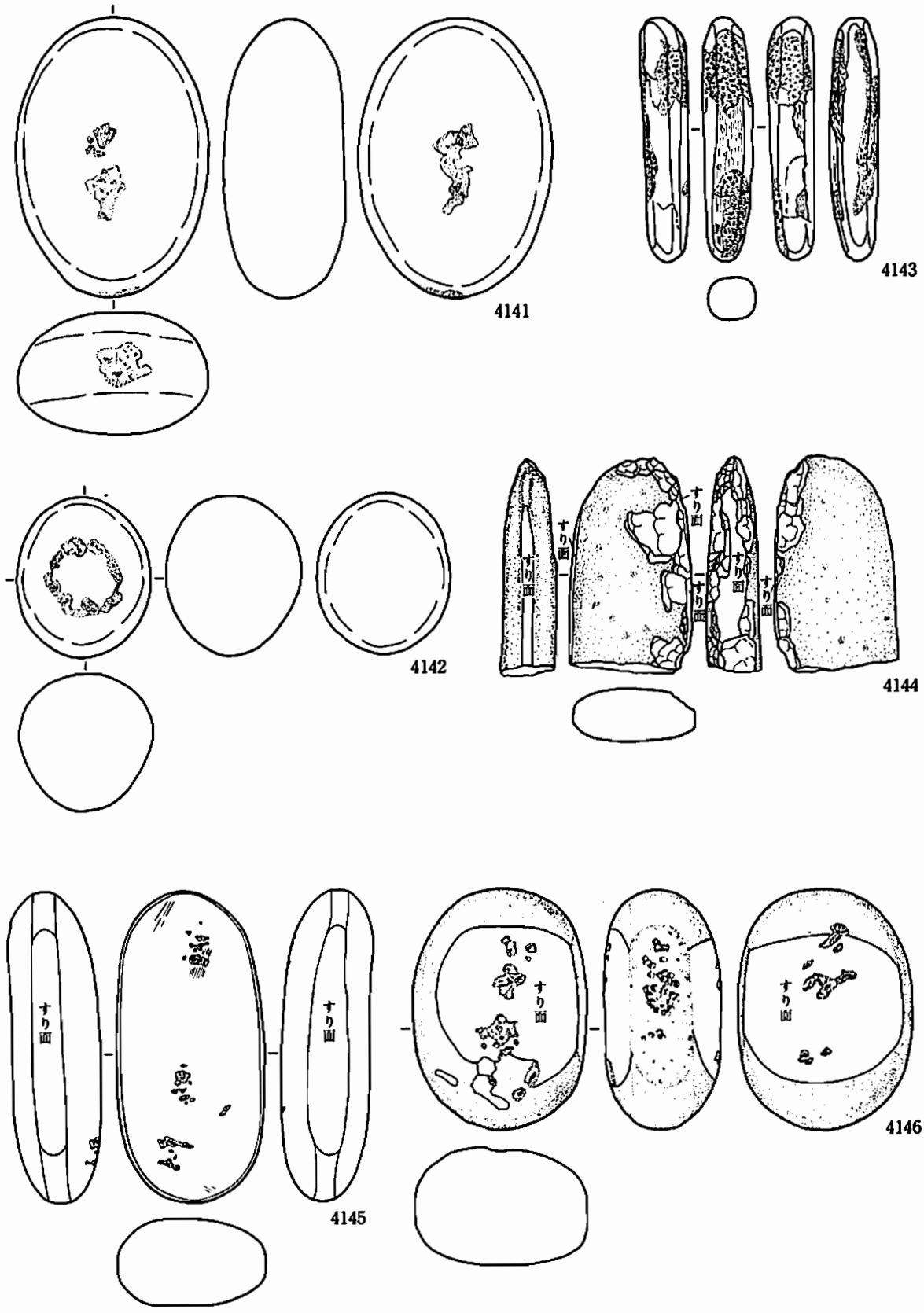
石器(24)



S=1/3

第246図　遺構外出土石器(24)

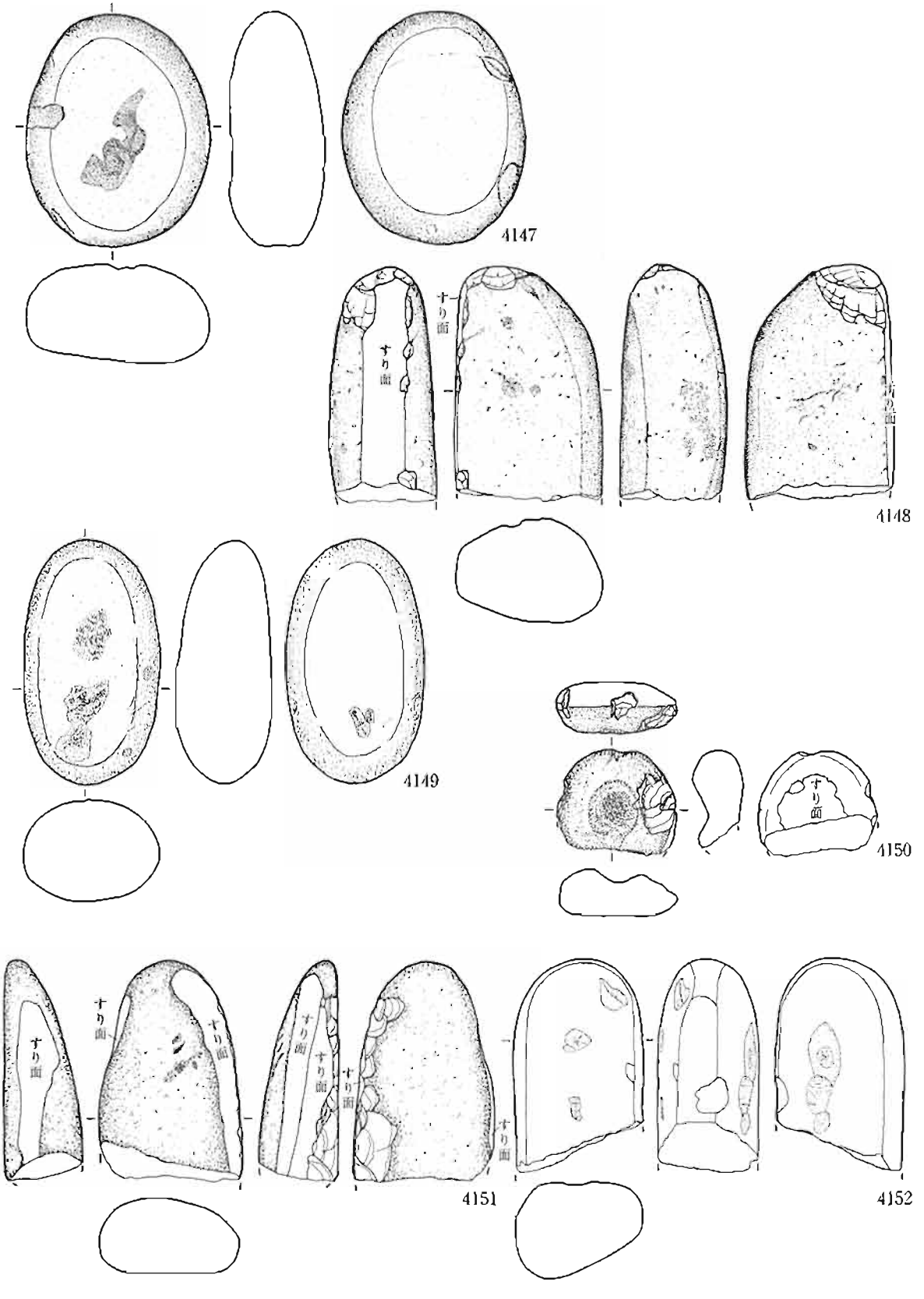
石器(25)



S=1/3

第247図　遺構外出土石器(25)

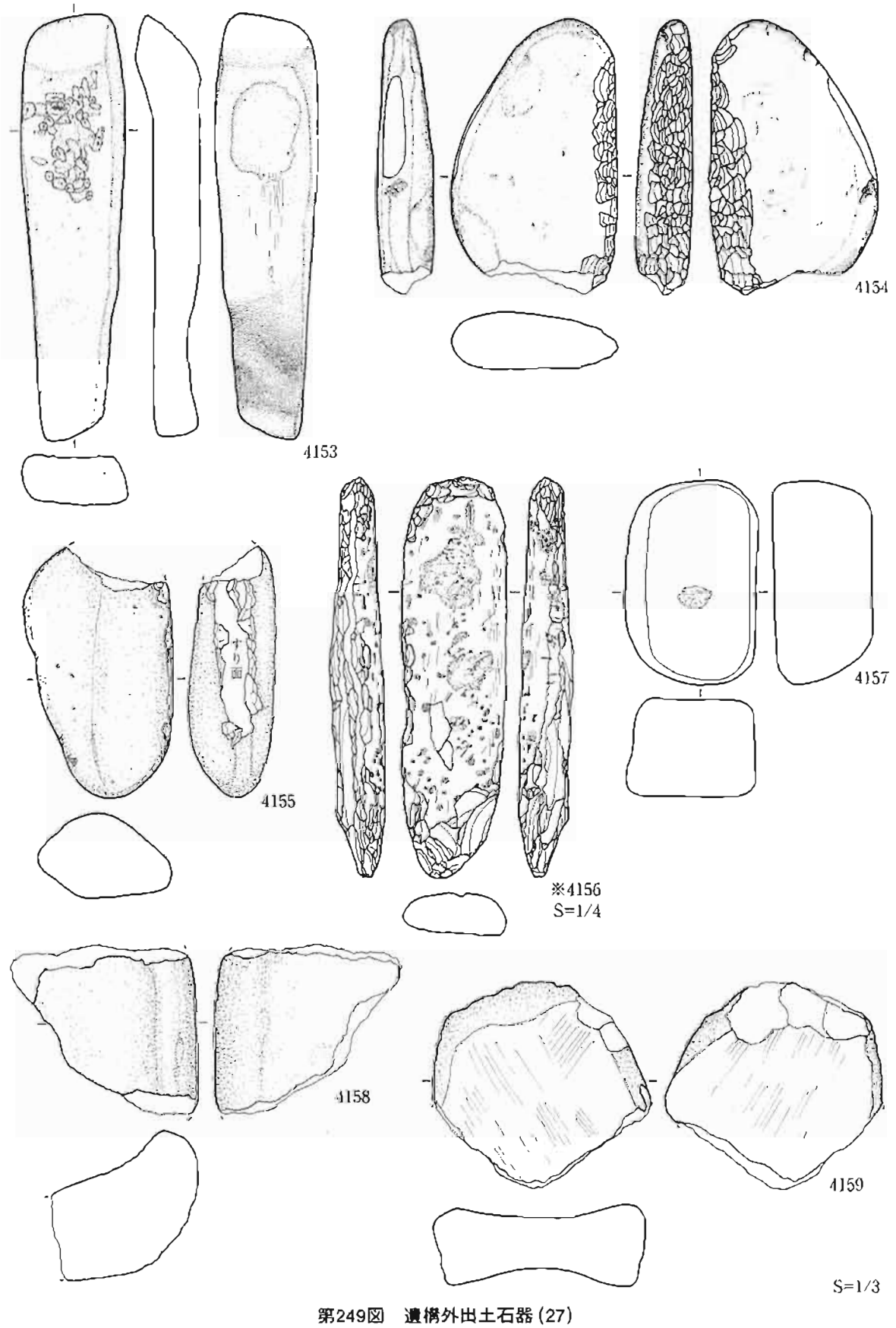
石器(26)



S=1/3

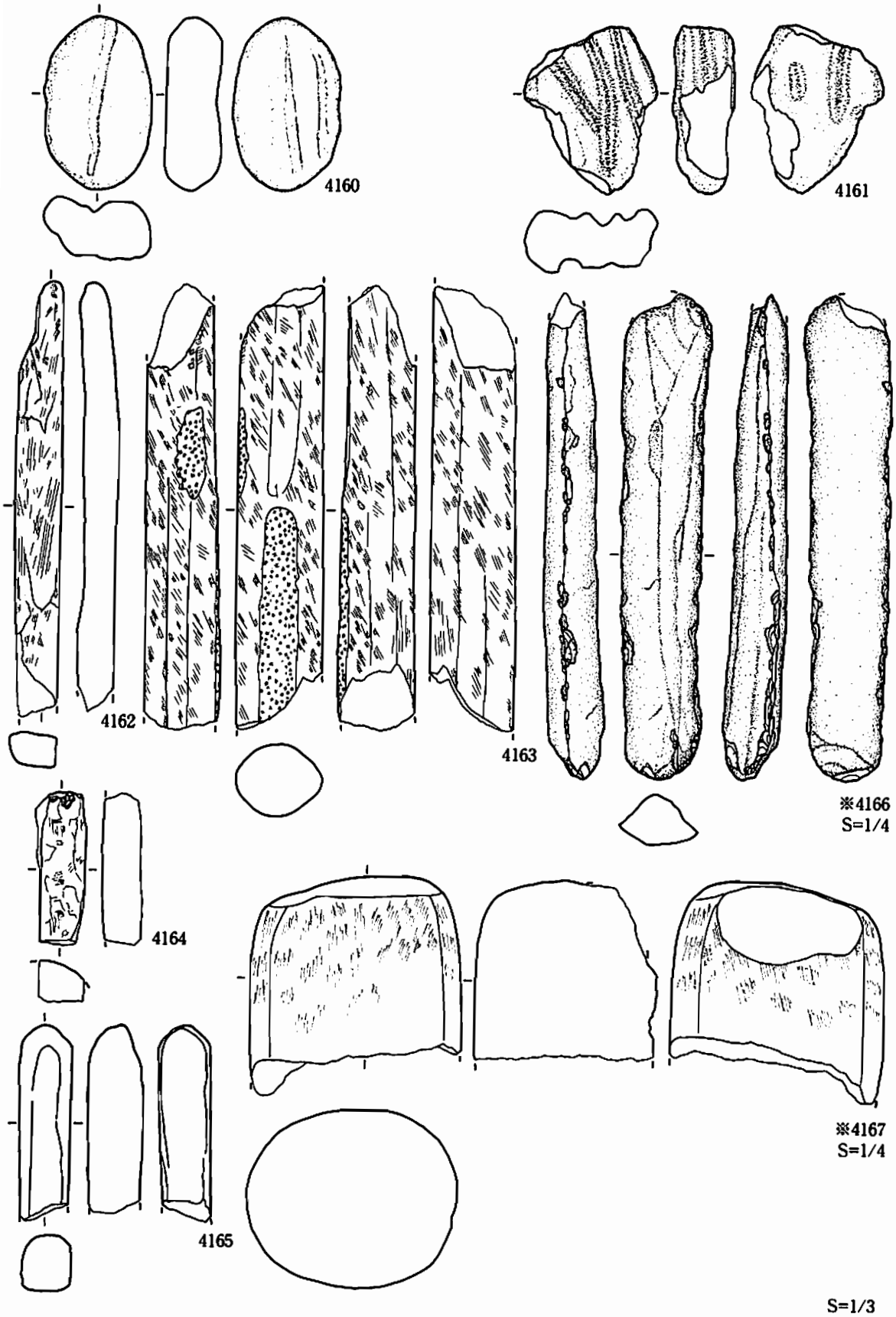
第248図　遺構外出土石器(26)

石器(27)



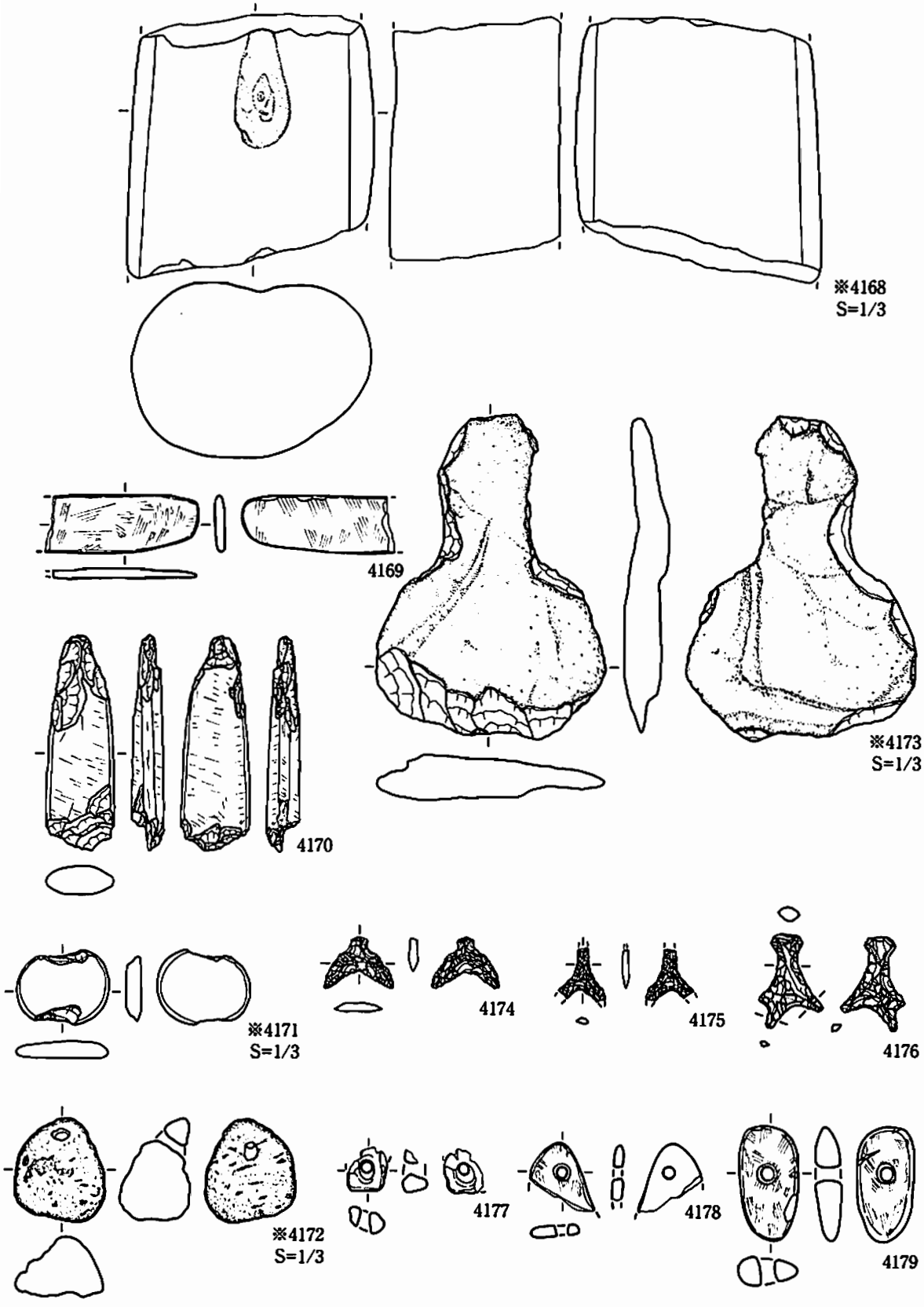
第249図　遺構外出土石器(27)

石器(28)



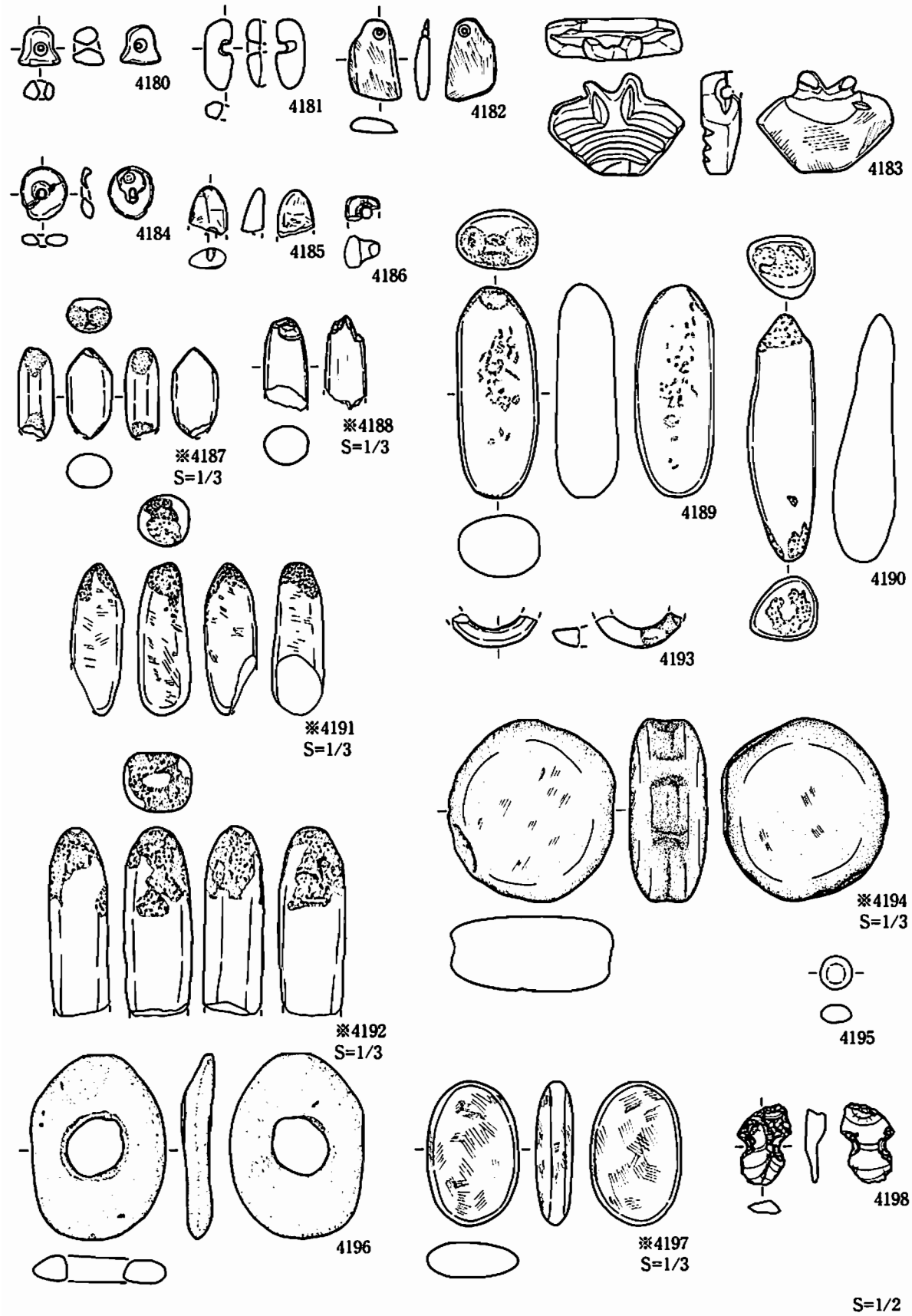
第250図　遺構外出土石器(28)

石器(29)



第251図　遺構外出土石器(29)

石器(30)



第252図　遺構外出土石器(30)

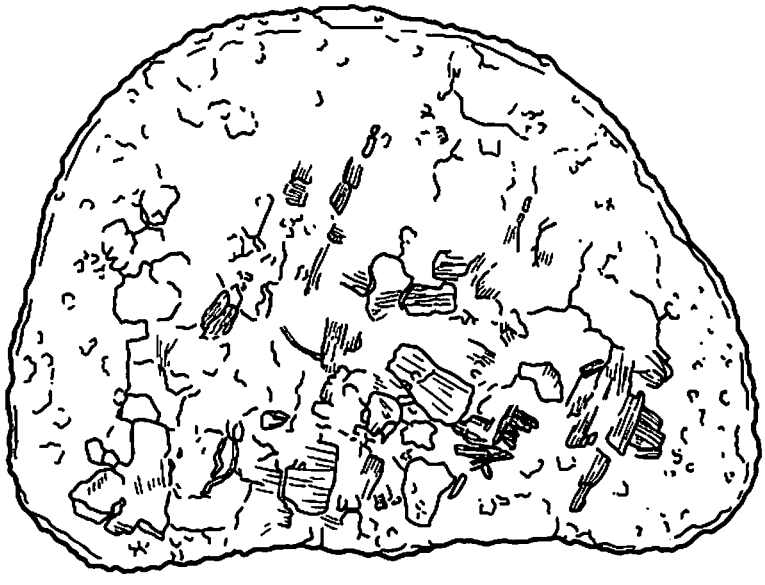
4199

4200

4201

番号	年度	出土地点	材質	特徴	径(mm)	重量(g)
4199	1999	基準杭1周辺　I層	銅	新寛永(文錢)(鋳錢1668～1683年)	25.5	2.93
4200	1999	6区12T中央　II層	銅	新寛永(文錢)(鋳錢1697～1747年、1767～1781年)	23.5	2.07
4201	1999	3区排土	銅	文久永寶(鋳錢1863年)	26.5	3.66

第253図　古錢



原寸

47号住居跡床面

第254図　編物の付着した礫

Ⅱ．まとめ

1．土器

本遺跡から出土した土器は、縄文時代前期後葉から晩期にかけてのものである。中心をなしているのは、中期前葉、大木７b式、８a式の土器である。本報告書の分類では７b式期の出土土器については、原体の側面圧痕及び連弧文或いは波状文の有無で、７a式及び８a式と区別し、８a式の土器については、キャリパー形の器形をもち、沈線或いは隆帯による施文するもの、７b式で目立った原体側面圧痕が消滅するものを分類した。しかし、いずれの分類でも、分類することが不可能な個体も多かった。その中でも1671は口縁部隆帯文に沿って原体側面圧痕を行い、波頂部に方形または菱形の突起をもつものである。この特徴を持つ土器は、県内よりも隣県の宮城県小梁川遺跡、同県中ノ内A遺跡出土の土器に類似しており、南方からの影響を示すものであろう。1333は波頂部にボタン状の貼付、三角形刺突文、沈線による渦巻文をモチーフとする文様が土器底部付近まで広がるものである。同時期の県内の類例はなく、器形や文様は遠く北陸地方新崎式に類似するようだが施文方法が異なるなどの相違点があり詳細は不明である。また、本報告書遺構編のまとめでも述べたが、８a式に相当と見られる47号住居跡出土の台付深鉢についても県内ではあまり類例が無く、福島県、山形県で類例があるらしい（筆者は未見である）。

そのほかに、双口土器が１点出土しているが、県内での出土例は、盛岡市（旧都南村）湯沢遺跡（岩埋文センター調査報告書第66集1977）の１点のみだが、類似した土器としては松尾村長者屋敷遺跡（岩埋文センター調査報告書第77集1984）で三口の土器が１点出土している。両遺跡の双口及び三口土器とも、内部は境目が無く繋がっており、空洞になっている。本遺跡のそれは完形ではないので残存部分で見ると、二つの口がそれぞれ区切られ区切られていたようである。いずれにしても類例が少なく、用途等は不明である。

また、本遺跡で検出された７b式から８a式期に限定された捨て場は、同時期の新旧関係を理解する上で、貴重と思われるが、グリッドによって若干層位のずれがあるのか地点によっては、新しいと見られる土器が下位の層からも出土している問題点がある。そこで層序による土器型式の新旧関係の把握はグリッド毎で留めた。

2．石鏃

石器の内、石鏃が掲載石器（2007点）全体の約68.8％を占める。その内訳は下記に示す。

石鏃（1381点）	A	凹基無茎	895点(64.8%)
	B	平基無茎	106点(7.7%)
	C	入凹基	3点(0.2%)
	D	凹基有茎	13点(0.9%)
	E	平基有茎	94点(6.8%)
	F	凸基有茎	29点(2.1%)
	G	尖基	9点(0.6%)
	H	円基	16点(1.2%)
	I	未製品及び断片（A～Hに分類できない破損品？）	216点(15.6%)

これを見ると凹基石鏃が全体の約64.8％と半数以上を占める。時期毎の形状比較は、遺構の同一箇所での重複が多く、古い遺構を掘り起こして新しい遺構を構築しているため、遺構出土の遺物であっても必ずしも出土した遺構と時期を同じくする遺物ではない可能性があるため、行えなかった。

本遺跡出土の石鏃が他の縄文時代の遺跡に比較して小型のものが多いようなので、時期が異なる３遺跡と重量分布の比較を行った。前期の湯田町清水ヶ野遺跡、前期から中期の盛岡市上八木田Ⅰ遺跡、晩期の北上市九年橋遺跡（第３次～11次）である。資料はそれぞれの調査報告書掲載の観察表を基に、完形品に限定し0.2g毎に点数を計測した。4.2ｇ以上については点数が散在するので一括している。遺跡によって出土数が異なるため、分布は百分率で表した（表１、第255図）。清水ヶ野遺跡については出土点数304点中、掲載が73点と少なくなっているため、若干偏在している可能性もある。

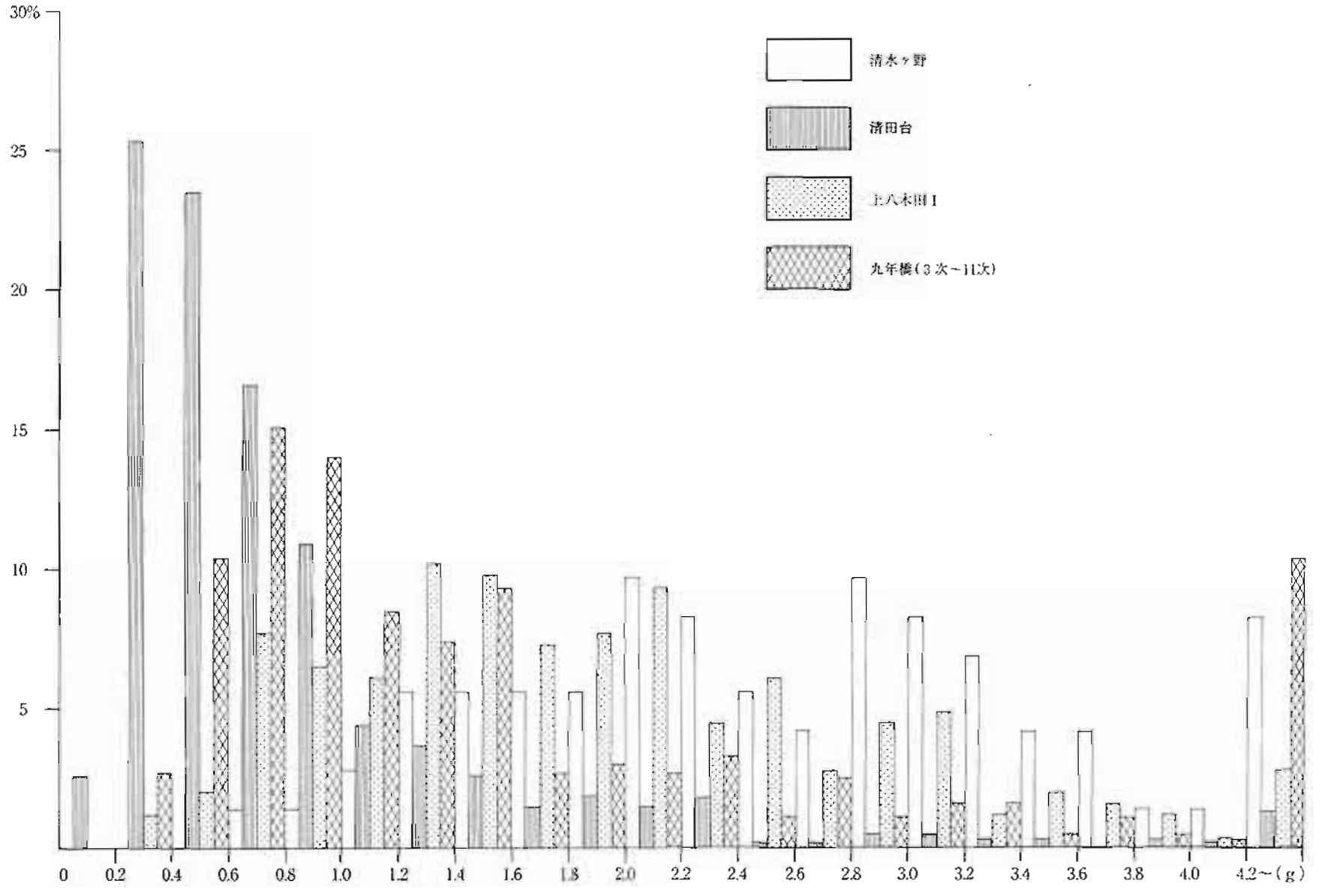
この重量分布図を見ると、清水ヶ野遺跡は2.0～2.4ｇと2.8～3.2ｇの２カ所で多い傾向を見せている。上八木田Ⅰ遺跡では0.6～2.2ｇの範囲が多く、重量に偏りがなく、どの重さの石鏃も出土している。九年橋遺跡では、0.4～1.2ｇと先の２遺跡より軽量化の傾向を示している。清水ヶ野遺跡については前述したように重量分布に偏りがあるが、2.0～3.2ｇと他の遺跡よりも重い石鏃が多いことを表している。また、上八木田Ⅰ遺跡については、その他の遺跡よりも時代幅があるために分布幅も広くなったものと考えられる。

表１　各遺跡の完形石鏃の重量分布と百分率

重量ｇ	点数			
	清水ヶ野	清田台	上八木田Ⅰ	九年橋3次～11次
0～0.1	0	16	0	0
0.2～0.3	0	156	3	10
0.4～0.5	0	145	5	38
0.6～0.7	1	102	19	55
0.8～0.9	1	67	16	51
1.0～1.1	2	27	15	31
1.2～1.3	4	23	25	27
1.4～1.5	4	16	24	34
1.6～1.7	4	9	18	10
1.8～1.9	4	12	19	11
2.0～2.1	7	9	23	10
2.2～2.3	6	11	11	12
2.4～2.5	4	1	15	4
2.6～2.7	3	1	7	9
2.8～2.9	7	3	11	4
3.0～3.1	6	3	12	6
3.2～3.3	5	2	3	6
3.4～3.5	3	2	5	2
3.6～3.7	3	0	4	4
3.8～3.9	1	2	3	2
4.0～4.1	1	1	1	1
4.2～	6	8	7	38
合計	72	616	246	365

重量ｇ	百分率(%)			
	清水ヶ野	清田台	上八木田Ⅰ	九年橋3次～11次
0～0.1	0.0	2.6	0.0	0.0
0.2～0.3	0.0	25.3	1.2	2.7
0.4～0.5	0.0	23.5	2.0	10.4
0.6～0.7	1.4	16.6	7.7	15.1
0.8～0.9	1.4	10.9	6.5	14.0
1.0～1.1	2.8	4.4	6.1	8.5
1.2～1.3	5.6	3.7	10.2	7.4
1.4～1.5	5.6	2.6	9.8	9.3
1.6～1.7	5.6	1.5	7.3	2.7
1.8～1.9	5.6	1.9	7.7	3.0
2.0～2.1	9.7	1.5	9.3	2.7
2.2～2.3	8.3	1.8	4.5	3.3
2.4～2.5	5.6	0.2	6.1	1.1
2.6～2.7	4.2	0.2	2.8	2.5
2.8～2.9	9.7	0.5	4.5	1.1
3.0～3.1	8.3	0.5	4.9	1.6
3.2～3.3	6.9	0.3	1.2	1.6
3.4～3.5	4.2	0.3	2.0	0.5
3.6～3.7	4.2	0.0	1.6	1.1
3.8～3.9	1.4	0.3	1.2	0.5
4.0～4.1	1.4	0.2	0.4	0.3
4.2～	8.3	1.3	2.8	10.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

本遺跡は、0.2～0.8ｇの石鏃が多く他の遺跡よりもより軽量な石鏃が出土している。晩期に石鏃が軽量化する傾向があり、晩期がメインの九年橋遺跡でもそのことを如実に表している。本遺跡は晩期の遺物も多少出土しているが、中期の遺物に比べると微々たるものである。本遺跡の軽量石鏃は晩期に石鏃が軽量になる傾向があるというだけでは説明できない。中期の遺構がメインに存在し、長さが１㎝以下で重量が0.2～0.3ｇ位の石鏃が最も多いことは他の遺跡に比べて特徴的なことである。このような石鏃は、実用の道具というより模造品と考えられる。



第255図　石鏃重量分布

3．特殊敲石としたものについて

本遺跡で特殊敲石としたものは21点出土している。棒状の円礫の先端を敲打によって面取りし、角錐状にしたものである。両端とも或いはどちらか一方の先端だけを加工したものがある。胴部を丁寧に磨いたものもある。破損品や胴部にも敲打痕等が見られるので敲石としたが、形状に特徴があったので、その他の敲石と区別して登録した。同様な例は、宮城県宝ヶ峯遺跡、県内では上野平遺跡、下舘銅屋遺跡などで出土している。中期末葉から後期にかけての遺跡で出土するようである。面取り下部分の使用痕分析も行ってみたが、石器の素材が粒子の粗いものが多いためはっきりしなかったが、敲打によって面取りが行われ、敲く物としての利用よりも、むしろこの石器自身が石製品として製作されたものではないかと考えている。

参考文献

青森県蛍沢遺跡発掘調査団　1979　「蛍沢遺跡」
「青森市新団地造成計画に基づく戸山団地予定地内蛍沢遺跡緊急発掘調査報告書」.

青森市教育委員会　1995　「小牧野遺跡」「青森県埋蔵文化財調査報告書第30集」.

秋田県教育委員会　2001　「江原嶋１遺跡」「秋田県文化財調査報告書第310集」.

岩手県教育委員会　1980　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ｖ－　北館・伝大手門遺跡」
「岩手県文化財調査報告書第54集」.

岩手県教育委員会　1982　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＶ－２　江釣子村鳩岡崎遺跡
遺物・要約・分析鑑定結果編」「岩手県文化財調査報告書第70集」.

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1987　「和光６区遺跡発掘調査報告書」
「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第114集」.

1992　「本郷遺跡発掘調査報告書」
「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集」.

後藤守一ほか　1959「伊豆諸島文化財総合調査報告第２分冊　Ⅳ考古」.

田沢湖町教育委員会　1985　「黒倉Ｂ遺跡第１次発掘調査報告」.

栃木県教育委員会　1997　「浄法寺遺跡」「栃木県埋蔵文化財調査報告第196集」.

宮城県教育委員会　1986　「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ　小梁川遺跡遺物包含層土器編」
「宮城県文化財調査報告書第117集」.

宮城県教育委員会　1987　「東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ　中ノ内Ａ遺跡・本屋敷遺跡他」
「宮城県文化財調査報告書第121集」.

盛岡市教育委員会　1978　「大館町遺跡昭和51年度発掘調査報告書」「盛岡市文化財調査報告第20集」.

Ⅲ．出土遺物の鑑定・分析結果

1．清田台遺跡出土動物遺存体について

陸前高田市立博物館学芸員　熊　谷　　賢

清田台遺跡から出土した動物遺存体は、24×16×9㎝のプラスチックケース1箱分である。遺構からの出土が多く、ほとんどの資料に受熱による色調変化が見られ、灰白色を呈する。比較的保存状況の良好な資料も見られたが、その他は細片が多い。

出土した動物は、すべて脊椎動物で、貝類などの軟体動物の出土は見られなかった。同定できた種は、軟骨魚綱2種・硬骨魚綱5種・両生綱1種・爬虫綱2種・鳥綱1種・哺乳綱5種の計16種である。特に哺乳類ではイヌ科の出土が目立っている。また、焼土を水洗選別したところ、サケ科の椎骨片が量的には多くないが検出されている。魚骨は出土数は少ないが、海産種が出土している。特にもマグロ属と思われる椎骨片の出土は特筆すべきものである。以下出土動物遺存体の種名表を示し、その概要について触れる。出土内容については、第1表に示した。

清田台遺跡出土動物遺存体種名一覧

脊椎動物門 VERTEBRATA

軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

ホホジロザメ Carcharodon carcharias （Linnaeus）

アオザメ Isurus oxyrinchus Rafinesque

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

マアナゴ？ Conger myriaster （Brevoort）？

サケ科の一種 Salmonidae gen.et sp.indet.

アイナメ属の一種？ Hexagrammos sp.indet.？

ウミタナゴ科の一種？ Embiotocidae gen.et sp.indet.？

マグロ属の一種？ Thunnus sp.indet.？

両生綱 AMPHIBIA

アズマヒキガエル Bufo japonicus formosus Boulenger

爬虫綱 REPTILIA

ヘビ亜目の一種 Ophidia fam indet.

ユウダ亜科の一種 Natricinae gen.et sp.indet.

鳥綱 AVES

キジ科の一種 Phasianidae gen.et sp.indet.

哺乳綱 MAMMALIA

イヌ科の一種 Canidae gen.et sp.indet.

キツネ Vulpes vulpes （Linnaeus）

イタチ科の一種 Mustelidae gen.et sp.indet.

イノシシ Sus scrofa Linnaeus

ニホンジカ Cervus nippon Temminck

Ⅰ 軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

ホホジロザメ

ⅡＢ５ｆ－Ⅱ層下位・ⅡＢ９ｈ－Ⅱ層下位No30付近・ⅡＢ９ｉ住－Ｑ４①層下部より顎歯が各１点ずつ計３点が出土している。いずれも歯冠部のみ残存する。ⅡＢ５ｆ－Ⅱ層下位から出土した顎歯は、全体的に擦痕が見られ、加工痕の可能性もある。また、出土した動物遺存体の多くは、受熱による色調変化が見られ、灰白色化している資料が多い中、この顎歯３点には、色調変化は見られない。サメ類の顎歯は、歯根部に穿孔し、垂飾品に用いられる場合が多いが、出土資料は、歯根部が欠損しているため不明である。ホホジロザメの内陸部での出土例は、北上市九年橋遺跡より受熱の痕跡の見られない顎歯１点が報告されている。計測値（現存値）は以下のとおりである。

ⅡＢ５ｆ－Ⅱ層下位　歯冠高 23.7㎜　歯冠長 16.5㎜　最大厚 4.0㎜

ⅡＢ９ｈ－下位No30付近　歯冠高 20.6㎜　歯冠長 19.5㎜　最大厚 3.7㎜

ⅡＢ９ｉ住－Ｑ４①層下部 歯冠高 18.5㎜　歯冠長 15.8㎜　最大厚 3.5㎜

アオザメ

ⅡＢ７ｉ⑤住－炉（東側）埋土より、顎歯１点が出土している。ホホジロザメ同様歯冠部のみ残存する。炉の埋土からの出土であるが、受熱による色調変化は見られない。アオザメの顎歯の内陸部での出土例は、藤沢町十文字遺跡から１点、北上市九年橋遺跡から受熱により灰白色化したもの４点が出土している。本遺跡出土のものは、歯根部が欠損しており穿孔の有無は不明である。計測値（現存値）は以下のとおりである。

ⅡＢ７ｉ⑤住－炉(東側)埋土 歯冠高 10.5㎜　歯冠長 6.8㎜　最大厚 3.4㎜

Ⅱ 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

マアナゴ？

ⅡＢ５ｈ③住－炉４土器内より、マアナゴに近似する腹椎１点が出土している。受熱により灰白色を呈する。保存状況は良好でほぼ完形である。椎体長2.9㎜、椎体後面横径3.6㎜である。

サケ科の一種

ⅡＢ５ｇ②住－炉２・同２号炉土器内・ⅡＢ５ｈ③住－炉１土器内・同炉２ａ土器内・同２ａ土器内土器・同２ｂ土器内・同炉３土器内・同炉４土器内・ⅡＢ７ｉ⑤住－炉（東側）・同炉（西側）から出土している。すべて炉及び炉の土器内からの出土である。出土した部位は非常に細かい椎骨片が多く、すべて受熱による色調変化が見られる。色調は灰白色のものがほとんどであるが、茶色、黒色のものも若干見られた。最も出土数が多いのはⅡＢ５ｈ③住－炉１土器内で椎骨片22を数える。

出土した椎骨片の多くはサケのものと思われるが、ⅡＢ５ｈ③住－炉２ｂ土器内から出土したほぼ完形の椎骨１点は、椎体長0.7㎜、椎体後面横径1.1㎜の小型であり、いわゆるヤマメ・イワナなどの小型のサケ科のものと思われる。

サケは中骨の部分を燃料として用いた可能性が指摘されている。今回出土した椎骨片の多くが受熱により

灰白色化し、すべて炉及び炉の土器内からの出土であることは、そのような利用方法も考えられるが、量的に少ないことや、イワナ・ヤマメと思われる小型のサケ科の椎骨や他の獣骨なども含まれていることから、このような食料残滓と共に炉に廃棄し、焼却されたものと考えられる。

アイナメ属の一種？

ⅡＢ５ｈ③住－炉２ｂ土器内より、アイナメ属に近似する尾椎２点が出土している。いずれも受熱により灰白色化している。椎体長×椎体後面横径は、2.5㎜×2.9㎜、2.0㎜×2.8㎜で、いずれも推定体長20㎝前後の個体と思われる。

ウミタナゴ科の一種？

ⅡＢ７ｉ⑤住－炉（東側）埋土より、ウミタナゴ科に近似する腹椎１点が出土している。
受熱により灰白色化している。椎体長1.5㎜、椎体後面横径2.5㎜で推定体長20㎝弱の個体と思われる。

マグロ属の一種？

ⅡＢ９ｉ住－Ｑ４②層より、マグロ属と思われる椎骨片２点が出土している。受熱により灰白色化している。椎骨片の大きさを観察する限りでは体長１ｍをやや越える程度の個体のものと思われる。

Ⅲ　両生綱　AMPHIBIA

アズマヒキガエル

ⅡＢ５ｈ③住－炉２ａ土器内土器より、右上腕骨近位端が１点出土している。受熱により灰白色化している。また、ⅡＢ５ｈ③住－炉４土器内よりアズマヒキガエルと思われる環椎、椎骨、棘突起、左肩甲骨、腓骨？が各１点出土している。これらの部位骨もすべて灰白色化している。岩手県内におけるカエルの報告例はあまり多くなく、まとまった出土数があるのは岩泉町岩谷洞穴のみである（ヒキガエルが多く出土している）。県内の報告例は現時点で６遺跡６種類がある。以下遺跡名と種名を挙げておく。

＊岩手県内におけるカエル類出土遺跡と種名

岩泉町岩谷洞窟　ヒキガエル（アズマヒキガエル）・・・まとまって出土
　　ヤマアカガエル？
花泉町貝鳥貝塚　ヒキガエル（アズマヒキガエル）
　　トノサマガエル
　　ツチガエル類
大槌町崎山弁天貝塚　カエル類（種は不明）
住田町蛇王洞穴　アカガエル
陸前高田市牧田貝塚　ヒキガエル（アズマヒキガエル）
陸前高田市中沢浜貝塚　アズマヒキガエル

Ⅳ　爬虫綱 REPTILIA

ヘビ亜目の一種

ⅡＢ７ｉ⑤住－炉（西側）焼土より椎骨１点が出土している。受熱により灰白色化している。岩手県内に生息するヘビ類は、ヘビ科７種・クサリヘビ科１種の２科８種が報告されている。ヘビ科は、椎骨での種同定は非常に困難を極め、ヘビ科の一部とクサリヘビ科との区別点はほとんどない。出土した資料は破片であり、科レベルまでの同定も困難であった。

ユウダ亜科の一種

ⅡＢ５ｈ③住－炉４土器内より椎骨２点が出土している。受熱により灰白色化している。
出土した資料は、１点は腹突起が残り、１点は腹突起が折れた痕跡が見られた。ユウダ亜科の特徴として、椎骨全部に腹突起があることが挙げられる。他のヘビ科及びクサリヘビ科の椎骨は、前方の椎骨には腹突起が見られるが、ユウダ亜科のものより板状を呈する。
したがって、出土した椎骨の腹突起の形状からユウダ亜科と同定した。岩手県内に生息するユウダ亜科にはヒバカリ、ヤマカガシの２種がある。

Ⅴ　鳥綱 AVES

キジ科の一種

各部位骨が合計17点出土している。すべて受熱により灰白色化している。最も出土数が多いのは、ⅡＢ５ｈ③住－炉３土器内で７点が出土している。破片資料が多く、関節部の残るもののみを同定したが、同定不可として扱った資料の中には、明らかに鳥類のものと判別できる中間部片も含まれていた。これらの破片資料を観察しても、キジ科以外の鳥類はほとんど確認できなかった。

Ⅵ　哺乳綱 MAMMALIA

イヌ科の一種

本遺跡出土動物遺存体中最も出土数が多く、各部位骨が合計53点出土している。44点がⅡＢ９ｉ住からの出土である。すべて受熱により灰白色化している。破片資料が多いが、比較的保存状態の良好な資料も見られた。受熱により亀裂、変形の見られる資料が多いためイヌ科としたが、これらにはキツネ・タヌキが含まれているものと思われる。また、ⅡＢ９ｉ住Ｑ２－①層中より出土した左大腿骨近位端は、骨頭径が14.5㎜を測り、陸前高田市立博物館収蔵のキツネ（成獣）現生骨格標本の左大腿骨骨頭径が11.8㎜であることから見てもかなり大型であるといえる。オオカミの計測値を持ち合わせていないが、その可能性も考えられる。

キツネ

ⅡＢ９ｉ住より合計13点の各部位骨が出土している。すべて受熱により灰白色化している。前述のとおり受熱による亀裂、変形によってイヌ科として扱った資料には、キツネも含まれている可能性があり、実際の捕獲量はさらに増えるものと思われる。

イタチ科の一種

ⅡＢ７ｉ住－東西ベルト埋土よりイタチ科に近似する左脛骨遠位端が出土している。受熱により灰白色化している。遠位端の現存幅は13.1㎜あり、テンよりやや大きい種（アナグマ？）が考えられる。

イノシシ

25点が出土している。ほとんどが灰白色化しているが、茶色を呈するもの２点、火を受けていないもの３点がある。遊離歯と腰椎を除くと、肢骨特に基節骨、中節骨、末節骨の指骨である。破片資料が多く、同定不可として扱った骨片には、他の部位の破片が含まれていると思われる。若獣のものは１点のみであった。

ニホンジカ

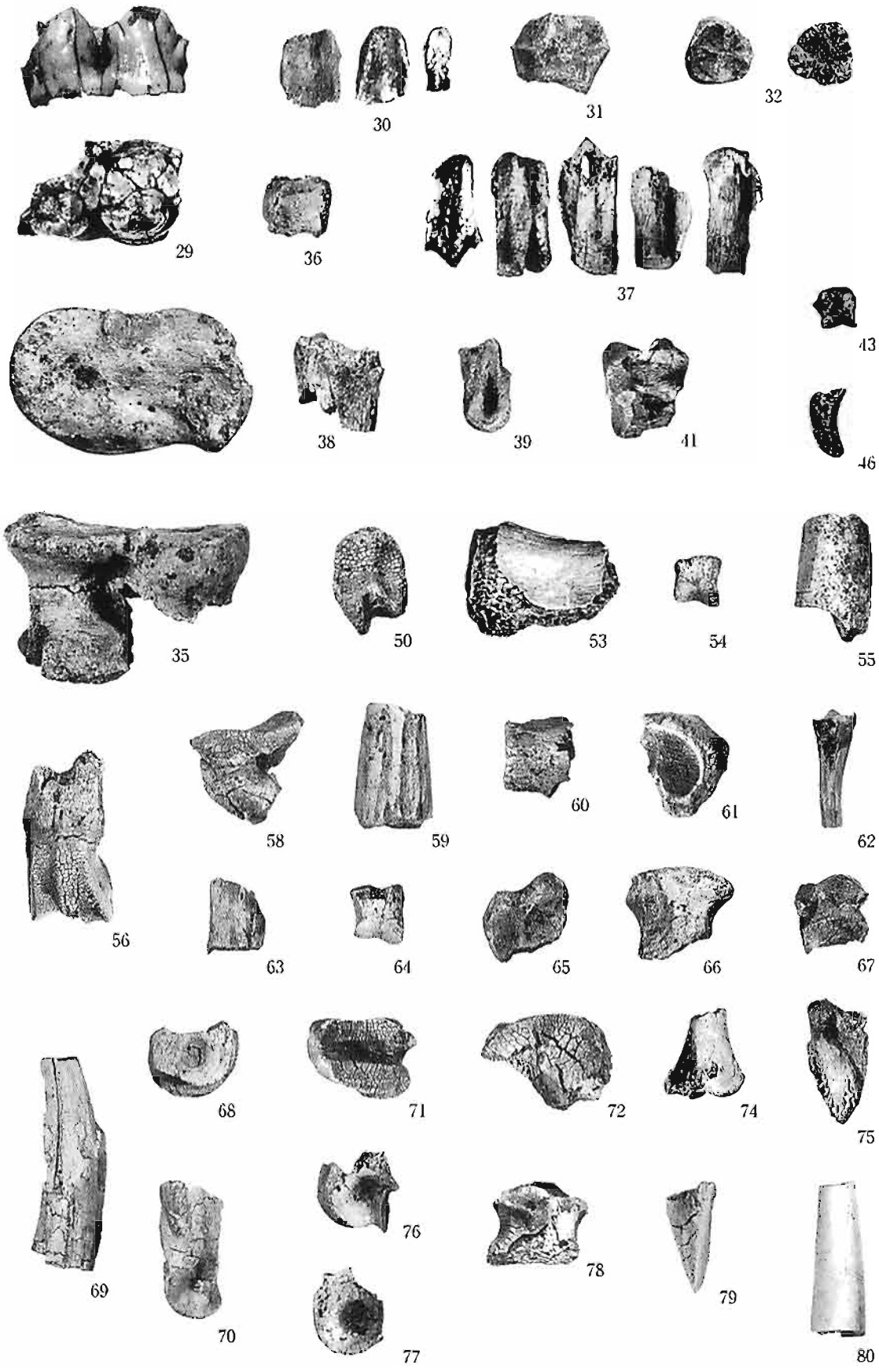
40点が出土している。ほとんどが灰白色化しているが、火を受けていないものも10点あり、その多くは歯片である。出土した部位は、鹿角片、歯片などであるが、最も多いのはイノシシ同様指骨であった。鹿角片には、加工痕と思われる擦痕を有するもの１点が含まれている。破片資料のため同定不可として扱った骨片には、他の部位の破片も含まれていると思われる。また、若獣の資料は見られなかった。

清田台遺跡出土動物遺存体について概要を記載したが、出土した動物遺存体は、捕獲した動物を食料とし、その残滓を炉などに廃棄したことは、多くが火を受け灰白色化していることからも推測できる。内容的には、哺乳類が多いが、イノシシ・ニホンジカ以外ではイヌ科（タヌキ・キツネ？）が多く出土しており、ノウサギなどその他の小型獣の出土は見られなかった。鳥類ではキジ科が比較的まとまって出土しており、周辺環境を考えるとキジ・ヤマドリを対象とした狩猟が行われていたものと思われる。魚類は量的には少ないが７種が出土している。焼土の水洗選別ではサケ科の椎骨片が検出されており、河川を遡上してきたサケの捕獲の可能性を窺わせる。特徴的なものとしては、６種の海産魚類の出土が挙げられる。沿岸性の強いアイナメ属・ウミタナゴ科などの出土に加え、回遊魚であるマグロ属の出土は、内陸部における海産魚類資源の利用を考える上で重要である。

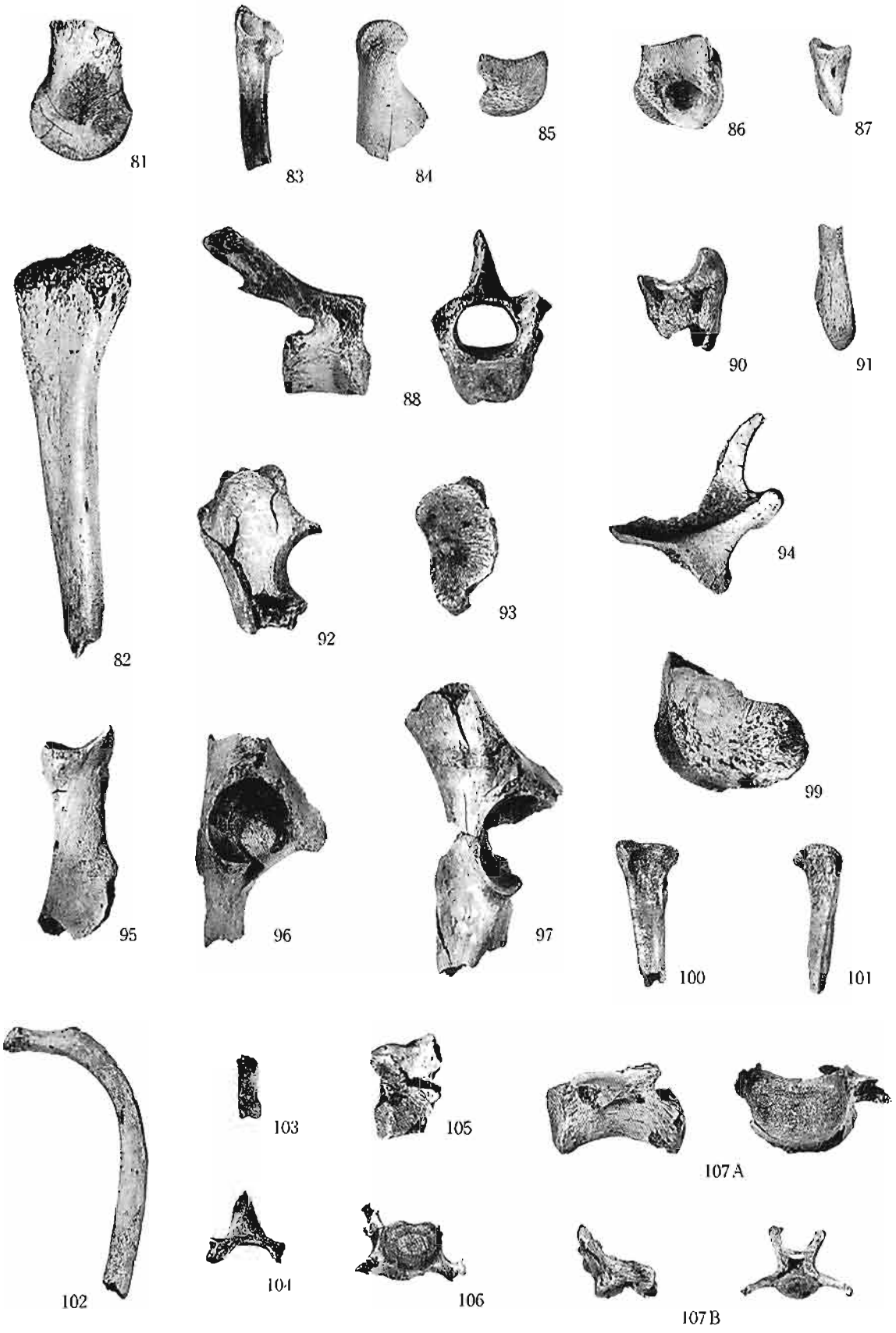
参考文献

日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会 1967 『日本の洞穴遺跡』
及川洵・遠藤勝博・及川千代松ほか 1971 『岩手県陸前高田市牧田貝塚発掘調査概要』
草間俊一・金子浩昌 1971 『貝鳥貝塚』
草間俊一・玉川一郎・鈴鹿良一 1974 『崎山弁天遺跡』
北上市教育委員会 1988 『九年橋遺跡第11次調査報告書』
藤沢町教育委員会 1997 『十文字遺跡発掘調査報告書』
岩手県教育委員会 2000 『岩手の洞穴遺跡』

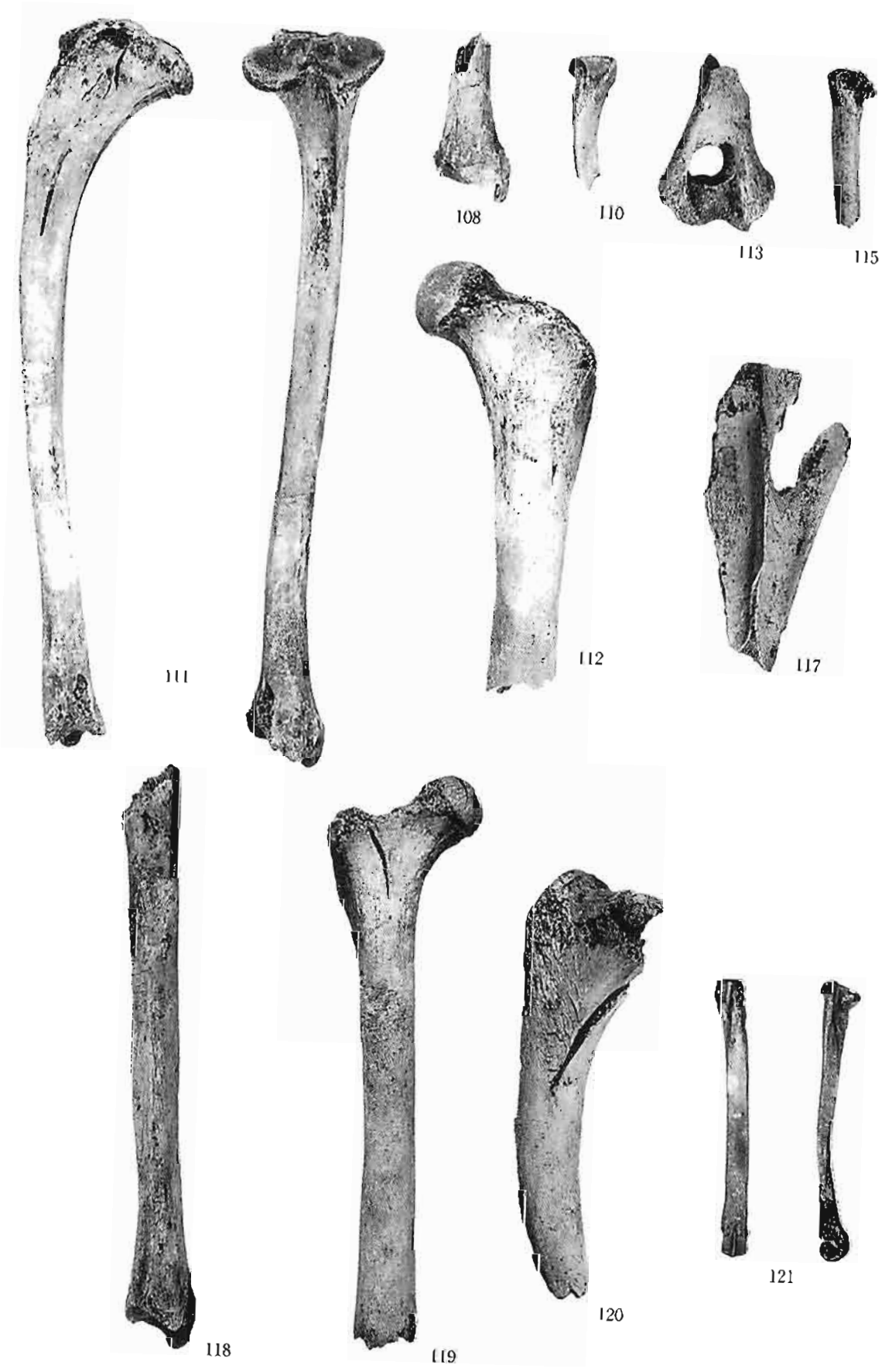
写真図版１　動物遺存体（１）



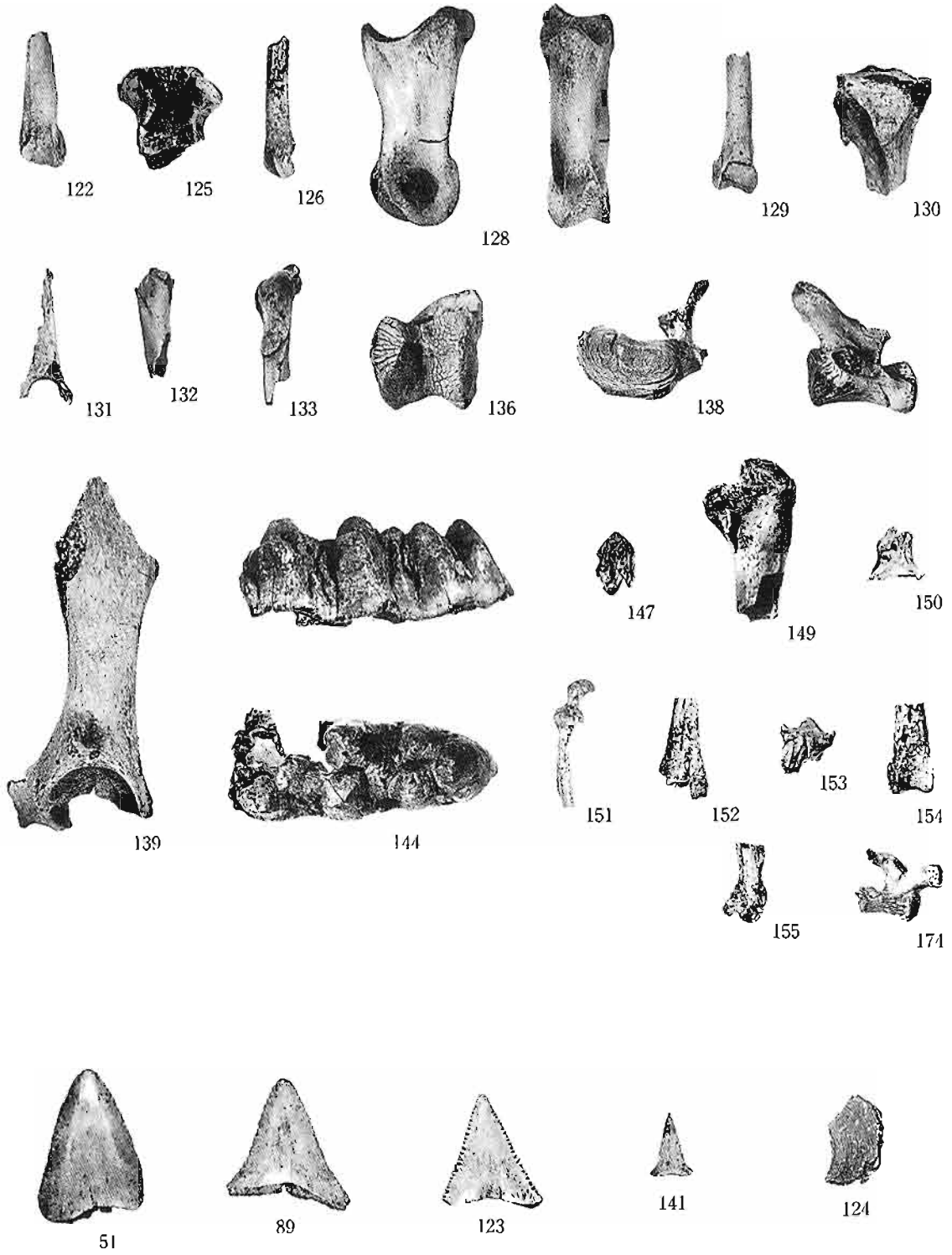
写真図版２　動物遺存体（２）



写真図版３　動物遺存体（３）



写真図版4　動物遺存体(4)



写真図版５　動物遺存体（５）

写真図版６　動物遺存体（６）

表2　動物遺存体（1）

番号	遺構番号	遺構名	調査時出土地	綱名	種　名	部　位	左右	数	年齢	受熱(色)	備　考
1	18	18号住居跡	ⅡＢ７ｉ②住埋土	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	加工痕を有する
2	8	8号住居跡	ⅡＢ５ｈ②住埋土	鳥綱	キジ科の一種	上腕骨近位端	R	1		灰白	
3	8	8号住居跡	ⅡＢ５ｈ②住Ｑ３　２層	鳥綱	キジ科の一種	上腕骨近位端	L	1		灰白	
4	23	23号住居跡	ⅡＢ８ｊ②住埋土(トレンチ)	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	
5	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	踵骨	R	1		灰白	
6	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	踵骨	R	1		灰白	
7	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	大腿骨近位端	L	1		灰白	
8	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	寛骨近位端	L	1		灰白	
9	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	寛骨遠位端	L	1		灰白	
10	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	上腕骨遠位端	L	1		灰白	
11	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	下顎骨片	R	1		灰白	
12	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	肩甲骨近位端	R	1		灰白	
13	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	肩甲骨遠位端	R	1		灰白	
14	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	キツネ	橈骨近位端	L	1		灰白	
15	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	側頭骨頬骨突起	L	1		灰白	キツネ？
16	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	肋骨	L	1		灰白	キツネ？
17	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	肋骨	L	1		灰白	キツネ？
18	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	肋骨	R	1		灰白	キツネ？
19	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	中手骨近位端	R	1		灰白	キツネ？
20	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	中手・中足骨遠位端		1		灰白	キツネ？
21	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	第２・第５基節骨		1		灰白	キツネ？
22	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	第２・第５基節骨		1		灰白	キツネ？
23	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	第２・第５基節骨		1		灰白	キツネ？
24	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	頸椎		1		灰白	キツネ？
25	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	頸椎		1		灰白	キツネ？
26	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	胸椎		1		灰白	キツネ？
27	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層上	哺乳綱	イヌ科の一種	腰椎		1		灰白	キツネ？
28			ⅡＢ３ｇ区Ⅱ層	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨近位端		1		灰白	
29			ⅡＢ３ｈ区Ⅱ層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯		1		無	
30	81	13号焼土	ⅡＢ４ｇ区焼土	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		−		無	
31	81	13号焼土	ⅡＢ４ｇ区焼土	哺乳綱	ニホンジカ	中間手根骨	R	1		無	
32	81	13号焼土	ⅡＢ４ｇ区焼土	哺乳綱	イノシシ	第２・第５基節骨近位端		1	若獣	無	
33			ⅡＢ４ｇ区Ⅲ層上面	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		−		無	
34			ⅡＢ４ｇ区Ⅲ層上面	哺乳綱	イノシシ	中間手根骨	R	1		無	

表3　動物遺存体（2）

番号	遺構番号	遺構名	調査時出土地	綱名	種　名	部　位	左右	数	年齢	受熱(色)	備　考
35			ⅡＢ４ｇ区Ⅱ層	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	R	1		無	
36			ⅡＢ４ｈ区トレンチ	哺乳綱	イヌ科の一種	胸椎		1		灰白	タヌキ？
37	1	1号住居跡	ⅡＢ４ｈ②住埋土１	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		―		無	
38	2	2号住居跡	ⅡＢ５ｇ①住１層	哺乳綱	イノシシ	第３・第４基節骨近位端		1		灰白	
39	2	2号住居跡	ⅡＢ５ｇ①住１層	哺乳綱	イノシシ	第３・第４基節骨遠位端		1		灰白	
40	3	3号住居跡	ⅡＢ５ｇ②住２層	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨近位端		1		灰白	
41	3	3号住居跡	ⅡＢ５ｇ②住３層	哺乳綱	ニホンジカ	第４中手骨	R	1		灰白	
42	5	5号住居跡	ⅡＢ５ｇ②土坑	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		―		無	
43	5	5号住居跡	ⅡＢ５ｇ②土坑	哺乳綱	イノシシ	第２・第５中節骨		1		灰白	
44	5	5号住居跡	ⅡＢ５ｇ②土坑	鳥綱	キジ科の一種	橈骨遠位端	L	1		灰白	
45	3	3号住居跡	ⅡＢ５ｇ②住炉２	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		5		灰白	
46	4	4号住居跡	ⅡＢ５ｇ③住炉	哺乳綱	ニホンジカ	種子骨		1		灰白	
47	4	4号住居跡	ⅡＢ５ｇ③住Ｐ13	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		―		無	
48	4	4号住居跡	ⅡＢ５ｇ③住Ｐ17	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		―		無	
49	4	4号住居跡	ⅡＢ５ｇ③住Ｐ25	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨近位端		1		灰白	
50			ⅡＢ10ｅ区包４層	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨近位端		1		灰白	
51			ⅡＢ５ｆ区Ⅱ層下位	軟骨魚綱	ホホジロザメ	顎歯		1		無	摩滅あり
52	8	8号住居跡	ⅡＢ５ｈ②住２号炉土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		1		灰白	
53	9	9号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住埋土	哺乳綱	イノシシ	腰椎		1		灰白	
54	10	10号住居跡	ⅡＢ５ｈ⑤住Ｐ４	哺乳綱	イノシシ	第２・第５中節骨		1		灰白	
55	10	10号住居跡	ⅡＢ５ｈ⑤住埋土Ｑ１	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	
56			ⅡＢ６ｆ区包含層（褐色土）	哺乳綱	ニホンジカ	中手・中足骨遠位端		1		灰白	
57	56	2号炉	ⅡＢ６ｈ住炉	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		―		無	
58			ⅡＢ６ｈ区トレンチ上位	哺乳綱	イノシシ	中間手根骨	R	1		灰白	
59	11	11号住居跡	ⅡＢ６ｈ①住１層埋土	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	
60	11	11号住居跡	ⅡＢ６ｈ①住埋土	哺乳綱	イヌ科の一種	腰椎		1		灰白	
61	11	11号住居跡	ⅡＢ６ｈ①住Ｐ１５	哺乳綱	イノシシ	第３・第４中節骨近位端		1		灰白	
62			ⅡＢ６ｉ区トレンチ	鳥綱	キジ科の一種	中足骨近位端	L	1		灰白	
63	15	15号住居跡	ⅡＢ６ｉ③住１層	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	
64	16	16号住居跡	ⅡＢ６ｉ④住Ｐ２４	哺乳綱	イノシシ	第２・第５中節骨		1		灰白	
65			ⅡＢ７ｅ区３層	哺乳綱	イノシシ	第３・第４末節骨		1		灰白	
66			ⅡＢ７ｅ区包４層	哺乳綱	イノシシ	橈側手根骨	L	1		灰白	
67	84	1号土器埋設	ⅡＢ７ｇ区No48中	哺乳綱	イノシシ	中心足根骨	R	1		灰白	
68			ⅡＢ７ｆ区包含層（褐色土）	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨遠位端		1		灰白	

表4　動物遺存体（3）

番号	遺構番号	遺構名	調査時出土地	綱名	種　名	部　位	左右	数	年齢	受熱(色)	備　考
69			ⅡＢ７ｆ区包含層（褐色土）	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	
70			ⅡＢ７ｈ区深掘	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨遠位端		1		灰白	
71	17	17号住居跡	ⅡＢ７ｉ住埋土	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨近位端		1		灰白	
72			ⅡＢ７ｉ区Ⅱ層	哺乳綱	ニホンジカ	中心足根骨＋第４足根骨	R	1		灰白	
73	19	19号住居跡	ⅡＢ７ｉ⑤住炉（西側）焼土	爬虫綱	ヘビ亜目の一種	椎骨		1		灰白	
74	17	17号住居跡	ⅡＢ７ｉ住東西ベルト埋土	哺乳綱	イタチ科の一種？	頸骨遠位端	L	1		灰白	
75	128	柱穴群11	ⅡＢ７ｊ区Ｐ３	哺乳綱	イノシシ	第３・第４末節骨		1		灰白	
76	128	柱穴群11	ⅡＢ７ｊ区Ｐ７	哺乳綱	イノシシ	第２・第５中手骨遠位端		1		灰白	
77			ⅡＢ８ｆ区Ⅱ層下位	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨遠位端		1		灰白	
78			ⅡＢ８ｉ区深掘Ⅲ層	哺乳綱	ニホンジカ	中間手根骨	R	1		灰白	
79	21	21号住居跡	ⅡＢ８ｉ住埋土ベルト（南西）	哺乳綱	ニホンジカ	末節骨遠位端		1		灰白	
80			ⅡＢ８ｅ区４層	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片（角尖部）		1		灰白	
81	21	21号住居跡	ⅡＢ８ｉ住ベルト１層	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨遠位端		1		灰白	
82			ⅡＢ８ｊ区Ⅱ層ベルト	哺乳綱	イヌ科の一種	頸骨近位端	L	1		灰白	キツネ？
83	23	23号住居跡	ⅡＢ８ｊ②住Ｑ１埋土	鳥綱	キジ科の一種	尺骨近位端	L	1		灰白	
84	24	24号住居跡	ⅡＢ８ｊ③住Ｑ４埋土	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨遠位端		1		灰白	
85	23	23号住居跡	ⅡＢ８ｊ②住Ｑ８埋土	哺乳綱	ニホンジカ	種子骨		1		灰白	
86			ⅡＢ９ｅ区１層	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨遠位端		1		灰白	
87			ⅡＢ９ｅ区４層	哺乳綱	イノシシ	第２・第５末節骨		1		灰白	完形
88			ⅡＢ９ｆ区Ⅱ層上面	哺乳綱	イヌ科の一種	胸椎		1		灰白	
89			ⅡＢ９ｈ区Ⅱ層下位No30付近	軟骨魚綱	ホホジロザメ	顎歯		1		無	
90			ⅡＢ９ｈ区Ⅱ層	哺乳綱	ニホンジカ	末節骨近位端		1		灰白	
91	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層下部	哺乳綱	イヌ科の一種	尺骨遠位端	L	1		灰白	
92	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ１①層黒色土	哺乳綱	キツネ	尺骨近位端	L	1		灰白	
93	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	肩甲骨近位端	L	1		灰白	
94	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	キツネ	下顎骨近位端	L	1		灰白	
95	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	寛骨（寛骨臼部片）	R	1		灰白	
96	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	寛骨（寛骨臼部片）	R	1		灰白	
97	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	寛骨（寛骨臼部片）	R	1		灰白	９５と同一個体？
98	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	寛骨遠位端	R	1		灰白	
99	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	大腿骨遠位端	R	1		灰白	
100	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	第３中手骨近位端	L	1		灰白	
101	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	第４中手骨近位端	L	1		灰白	
102	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	肋骨	L	1		灰白	

表5　動物遺存体（4）

番号	遺構番号	遺構名	調査時出土地	綱名	種　名	部　位	左右	数	年齢	受熱(色)	備　考
103	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	基節骨遠位端		1		灰白	
104	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イヌ科の一種	胸椎		1		灰白	
105	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ⅱ層上部①層	哺乳綱	イノシシ	第３中手骨近位端	L	1		灰白	
106	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層下部	哺乳綱	イヌ科の一種	頸椎		1		灰白	
107	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層下部	哺乳綱	イヌ科の一種	腰椎		3		灰白	
108	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層下部	哺乳綱	イヌ科の一種	頸骨遠位端	L	1		灰白	
109	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層下部	哺乳綱	イヌ科の一種	中手・中足骨遠位端		3		灰白	
110	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層下部	哺乳綱	イヌ科の一種	第５中手骨近位端	L	1		灰白	
111	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	キツネ	頸骨	L	1		灰白	完形
112	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	イヌ科の一種	大腿骨近位端	L	1		灰白	大型の個体
113	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	イヌ科の一種	上腕骨遠位端	L	1		灰白	
114	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	イヌ科の一種	上腕骨近位端	R	1		灰白	
115	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	イヌ科の一種	第２中足骨近位端	R	1		灰白	
116	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	イヌ科の一種	腰椎		1		灰白	
117	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２①層中	哺乳綱	イヌ科の一種	肩甲骨中間部	L	1		灰白	
118	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ１①層下	哺乳綱	イヌ科の一種	頸骨遠位端	R	1		灰白	
119	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ１①層下	哺乳綱	イヌ科の一種	大腿骨近位端	R	1		灰白	
120	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ１①層下	哺乳綱	イヌ科の一種	上腕骨近位端	R	1		灰白	
121	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ１②層	哺乳綱	イヌ科の一種	第３中足骨	L	1		灰白	完形
122	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ２②層	鳥綱	キジ科の一種	頸骨遠位端	L	1		灰白	
123	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ４①層下部	軟骨魚綱	ホホジロザメ	顎歯		1		無	
124	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ４②層	硬骨魚綱	マグロ属の一種？	椎骨片		1		灰白	
125			ⅡＢ９ｊ区　Ⅱ層上部	哺乳綱	イノシシ	橈側手根骨	L	1		灰白	
126			ⅡＢ９ｊ区　Ⅱ層上部	哺乳綱	イヌ科の一種	中手・中足骨遠位端		1		灰白	
127			ⅡＢ９ｆ区Ⅱ層下位	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨近位端		1		灰白	
128			ⅡＢ10ｅ区包４層	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨		1		灰白	完形
129	30	30号住居跡	ⅡＢ10ｉ住北西ベルト	鳥綱	キジ科の一種	頸骨遠位端	L	1		灰白	
130	30	30号住居跡	ⅡＢ10ｉ住２層	哺乳綱	イヌ科の一種	頸骨近位端	R	1		灰白	
131	30	30号住居跡	ⅡＢ10ｉ住２層	鳥綱	キジ科の一種	寛骨中間部	R	1		灰白	
132	30	30号住居跡	ⅡＢ10ｉ住２層	鳥綱	キジ科の一種	尺骨近位端	R	1		灰白	
133			ⅢＢ１ｅ区　１層	鳥綱	キジ科の一種	烏口骨近位端	L	1		灰白	
134			ⅢＢ１ｅ区　１層	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角片		1		灰白	
135			ⅢＢ１ｅ区　４層	哺乳綱	イノシシ	第３・第４中節骨近位端		1		灰白	
136	40	40号住居跡	ⅢＣ１ａ住　埋土（南）	哺乳綱	イノシシ	中間手根骨	R	1		灰白	

表6　動物遺存体（5）

番号	遺構番号	遺構名	調査時出土地	綱名	種　名	部　位	左右	数	年齢	受熱(色)	備　考
137			5区南端Ⅱ－②	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨近位端	R	1		灰白	
138			8Ｔ西南側Ⅱ－①	哺乳綱	イヌ科の一種	腰椎		1		灰白	
139			8Ｔ西南側Ⅱ－①	哺乳綱	イヌ科の一種	寛骨中間部	L	1		灰白	
140	45	45号住居跡	５０６住居　焼土	哺乳綱	イノシシ	第３手根骨	L	1		灰白	
141	19	19号住居跡	ⅡＢ７ｉ⑤住炉（東側）埋土	軟骨魚綱	アオザメ	顎歯		1		無	
142	19	19号住居跡	ⅡＢ７ｉ⑤住炉（東側）埋土	硬骨魚綱	ウミタナゴ科の一種？	腹椎		1		灰白	
143	85	２号埋設土器	№67中	哺乳綱	イノシシ	第２・第５中足骨遠位端		1		灰白	
144	80	12号焼土	15号焼土中	哺乳綱	イノシシ	下顎第３後臼歯	L	1		茶	
145	47	47号住居跡	２０１住２層	哺乳綱	ニホンジカ	歯片		－		無	
146	19	19号住居跡	ⅡＢ７ｉ⑤住炉（東側）	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		7		灰白・黒	
147	19	19号住居跡	ⅡＢ７ｉ⑤住炉（東側）	哺乳綱	イノシシ	歯片		－		茶	
148	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉２ａ土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		2		灰白	
149	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	上腕骨近位端	R	1		灰白	
150	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	烏口骨遠位端	L	1		灰白	
151	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	肩甲骨近位端	R	1		灰白	
152	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	中足骨遠位端	L	1		灰白	
153	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	中足骨近位端	L	1		灰白	
154	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	頸骨遠位端	L	1		灰白	
155	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	鳥綱	キジ科の一種	中手骨遠位端	L	1		灰白	
156	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉３土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		3		灰白	
157	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内土器	爬虫綱	ユウダ亜目の一種	椎骨		2		灰白	
158	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内土器	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		1		灰白	
159	19	19号住居跡	ⅡＢ７ｉ⑤住炉（西側）	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		8		灰白・黒	
160	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	両生綱	アズマヒキガエル？	肩甲骨	L	1		灰白	
161	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	両生綱	アズマヒキガエル？	棘突起		1		灰白	
162	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	両生綱	アズマヒキガエル？	椎骨		1		灰白	
163	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	両生綱	アズマヒキガエル？	環椎		1		灰白	
164	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	両生綱	アズマヒキガエル？	腓骨？		1		灰白	
165	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		1		灰白	
166	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉４土器内	硬骨魚綱	マアナゴ？	腹椎		1		灰白	
167	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉２ｂ土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		5		灰白	
168	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉２ｂ土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨		1		灰白	小型(イワナ?・ヤマメ)
169	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉２ｂ土器内	硬骨魚綱	アイナメ属の一種？	尾椎		2		灰白	
170	9	９号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉１土器内	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片		22		灰白・黒・茶	

表7　動物遺存体（6）

番号	遺構番号	遺構名	調査時出土地	綱名	種　名	部　位	左右	数	年齢	受熱(色)	備　考
171	9	9号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉２ａ土器内土器	両生綱	アズマヒキガエル	上腕骨近位端	R	1		灰白	
172	9	9号住居跡	ⅡＢ５ｈ③住炉２ａ土器内土器	硬骨魚綱	サケ科の一種	椎骨片　・		1		茶	
174			８Ｔ西南側Ⅱ－①	哺乳綱	イヌ科の一種	腰椎		1		灰白	
175	28	28号住居跡	ⅡＢ９ｉ住Ｑ４②層	硬骨魚綱	マグロ属の一種？	椎骨片		1		灰白	同一個体

2．千厩町清田台遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1．試料

試料は１点で、縄文時代中期中頃のものとされる竪穴住居址（47号住居跡＝201住）の床面から検出されたものである。遺構は焼失住居と見られているが、屋根を葺いていた草本の炭化物と骨組みとみられる炭化材で、試料は骨組みと見られる炭化材である。草本の炭化物は脆く採取できなかった。

遺跡は千厩川の支流金田川に向かう北向きの緩斜面（標高112～120m）に立地している。

2．方法

試料を室内で自然乾燥させた後、実体顕微鏡下で試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（折線断面）３断面を作成しようと努めたが、試料は土に張り付いてその形をかろうじて保っているような状態で、非常に脆く破断面を得ることはできなかった。このため走査型電子顕微鏡での観察は断念せざるを得ず、実体顕微鏡でできるだけ解剖学的特徴を観察することにした。電子顕微鏡写真図版は作成できなかった。

3．結果

大道管があり、小道管が単独で放射方向に配列する、放射組織はほとんど目立たず単列とみられる、などが観察できた。ただ、確実な同定はできなかったためクリ類似種（cf.Castanea crenata)としておく。

3．清田台遺跡出土の植物遺体

東京都立大学人文学部　高瀬克範

1．出土状況

本遺跡では、47号住居跡の床面上3cmの土壌を約20リットル、1・2層土壌を各約40リットル、9号住居跡P47内土壌を約1リットル、16号住居跡埋土土壌を約10リットルサンプリングし、乾燥させたのちフローテーションをおこなった（浮遊遺物は0.5mm、残渣遺物は1mmメッシュの金属フルイで回収）。その結果出土した炭化種子を以下に記述する。なお、未炭化のスギ属・スゲ属・スギナも検出しているが、これらは現段階では発掘時または土壌乾燥時の混入と考えられるため除外した。

清田台遺跡出土植物遺体種名表　List of plant remains from Kiyotadai site

ブナ科 FAGACEAE

　コナラ亜属 Quercus L.

マメ科　LEGUMINOSAE

2．出土植物遺体の概要

コナラ亜属 Quercus L.

9号住居跡P47から完形のコナラ亜属 Quercus L.堅果が2点出土した。16号住居跡埋土からも堅果破片が16点出土している。9号住居跡P47出土資料の計測値はそれぞれ長さ13.34mm、幅7.11mm、3.19mm、および長さ13.62mm、幅6.64mm、4.25mmであり、比較的細長いものが多い。コナラQuercus serrata Thunb.、ミズナラQuercus crispula Bl.、カシワQuercus dentata Thunb.のいずれかと考えられるが、北海道での各種現樓資料の比較では、同種でもきわめて形態の変異が大きいことが指摘されている（吉崎・椿坂2000）。東北地方でもデータも積み重ねてゆく必要があるが、殻斗をともなわない資料が少数出土した場合、現段階ではコナラ亜属Quercus L.という分類レベルにとどめておくのが妥当であろう。

マメ科　Leguminosae

47号住居跡埋土2層より3点が出土した。残存状況はきわめて悪い。1点がかろうじて計測にたえうる。長さ2.52mm、幅2.18mm、厚さ1.79mmである。縄文時代のマメ科植物としては、栽培種としてのアズキやリョクトウ、野生種としてのヤブツルアズキやツルマメなどが知られているが、リョクトウについては明確とはいえなくてなってきている（吉崎・椿坂2001）。本遺跡出土資料は栽培種の形態を呈しておらず野生種と考えられるが、数が少なく資料のダメージも大きいためマメ科という分類にとどめておく。

不明種子

47号住居跡埋土2層より1点出土した。丸みをおびたかぶら形の種子が縦に半分に割れた形態を呈する。側面もやや丸みをおびているが、やや扁平である。計測値は、長さ4.68mm、幅2.95mm、厚さ2.21mmである。

最後に、本遺跡出土植物遺体の同定にあたって御指導いただいた吉崎昌一先生・椿坂恭代氏に感謝申し上げる。

＜引用文献＞

吉崎昌一・椿坂恭代2000「北海道キウス4遺跡Q地区から出土した縄文時代の植物種子」『キウス4遺跡(7)』、pp.347-352、（財）北海道埋蔵文化財センター。

吉崎昌一・椿坂恭代2001「先史時代の豆類について―考古植物学の立場から」『豆類時報』24、pp.1-9。

4．清田台遺跡の石鏃の整理について

株式会社アルカ　角張淳一

整理の方法

石鏃に記載されている注記番号に従い、遺構内と遺構外に区分した。さらに遺構外はグリッドとトレンチに分けた。

以上のように出土地点ごとに石鏃を区分し、次に石鏃の二次加工と石材を観察し所見を作成した。

二次加工の記述について

石器の加工は、従来は記述の方法がみつからなかったが、近年は次の記述方法が有効であることがわかってきた。剥離技術は、石を人工的な面で覆う技術と把握すれば、それは右手の技術と左手の技術に分解される。そして右手の技術は「ハンマーの種類」と「ハンマーの身振り」という属性で構成され、左手の技術は素材の傾きの制御となる。剥離技術はいうなれば、右手の技術と左手の技術の組み合わせによって成り立つのである。

さて、今回の石器は、すべて押圧剥離という二次加工技術で構成される石鏃であった。この場合、薄い剥片の縁辺に並行剥離で刃部を形成しながら形態をつくるのであるから、左手の技術はどの石器でも、ほぼ同じである。ゆえに左手の技術は捨象してもかまわない。

そこで、今回の分析の右手の技術は「ハンマーの種類」と「ハンマーの作法」による。清田台遺跡では、ハードハンマーの押圧剥離（HP）とソフトハンマーの押圧剥離（SP）がみられた。またハードハンマーでも特にコーンの小さな剥離面を形成するものを「狭いハードハンマー」として「nH」と表記した。

これらの加工の記述は『続石器研究の感想』（角張淳一、「東京考古１９号」、2000.）に準拠している。

清田台遺跡の石鏃の所見

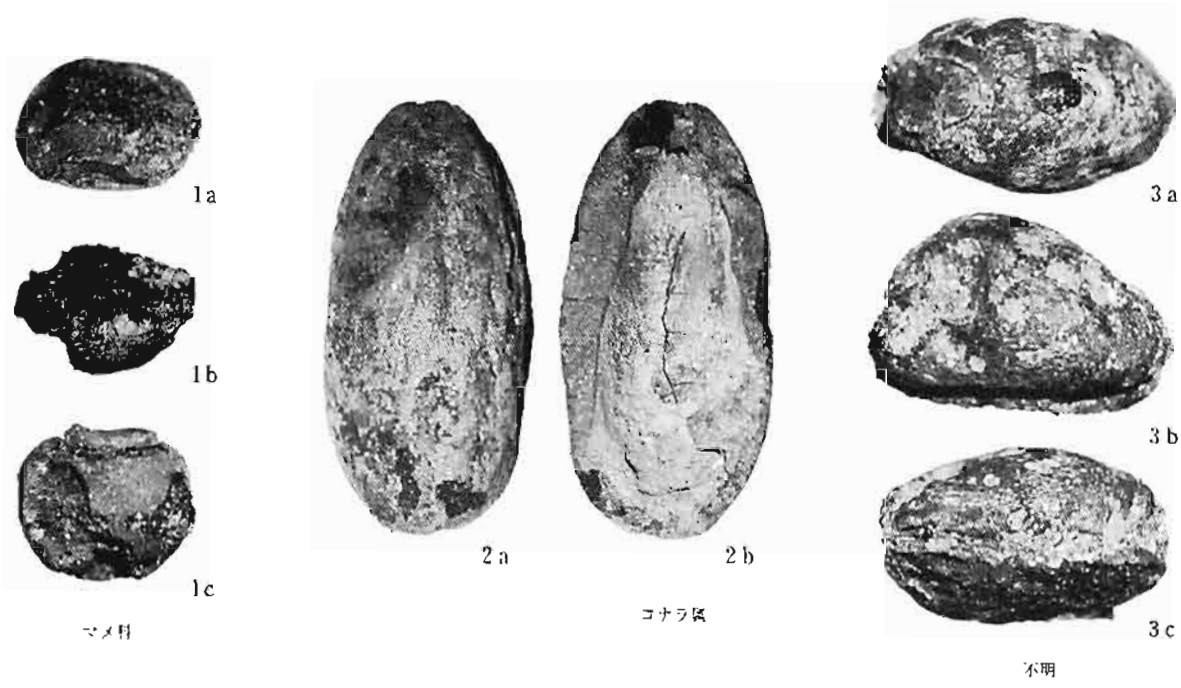
清田台の石鏃は、珪質頁岩とめのうを用い、ハードハンマーの押圧剥離で有茎石鏃と凹基鏃を製作している。石鏃の形態よりも、剥離技術について、きわめて斉一性があるので、ほとんどの石鏃が一時期のものと予想できる。

小形の有茎石鏃には特に色つきのめのうを用い、径の細いハンマーを用いている。この種の石鏃は、中部・関東では大洞Ｃ２以降に出現する特徴的な石鏃である。

また３cm前後の通常の大きさの有茎石鏃の未製品には、間接打撃の剥片を素材にして、尖った基部から加工をしはじめている良好な未製品がある（通番29）。経験的な観点からいえば、この石鏃の製作技法は、円筒上層土器文化から出現し、以後円筒土器・十腰内土器・大洞土器文化に伝統的で普遍的な石鏃の製作技法である。したがって、清田台遺跡の有茎石鏃は、北東北の土器文化にともなう石鏃といえる。

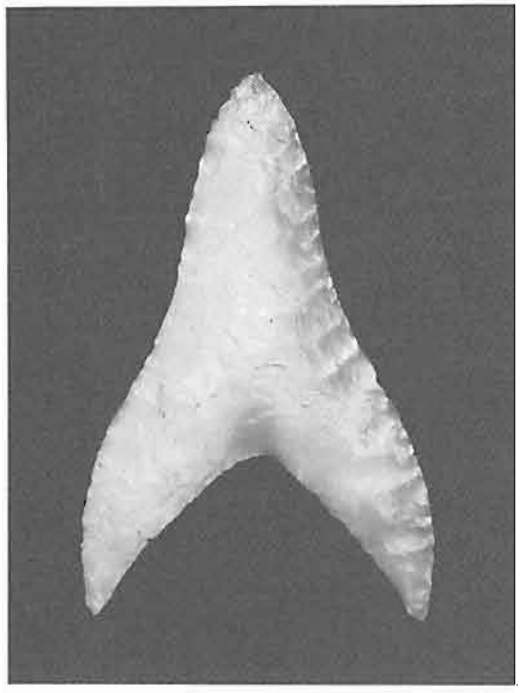
一方本遺跡の凹基鏃の押圧剥離は、有茎石鏃の押圧剥離と同じであることから、これらの凹基鏃が大木式土器文化にともなうのかは、疑問視したい。

数点の石鏃に、幅の広いHPやSPの石鏃がみられるが、これらの石鏃については、中期の土器文化にともなうものとして大過ないと考えることができる。特に、大形で先端に突起の付く通番3249の石鏃、3316の石鏃、さらに丁寧なSPの剥離面でおおわれる通番3710の石鏃は前期終末から中期前葉にかけての大木土器文化にともなうものであろうと考えられる。

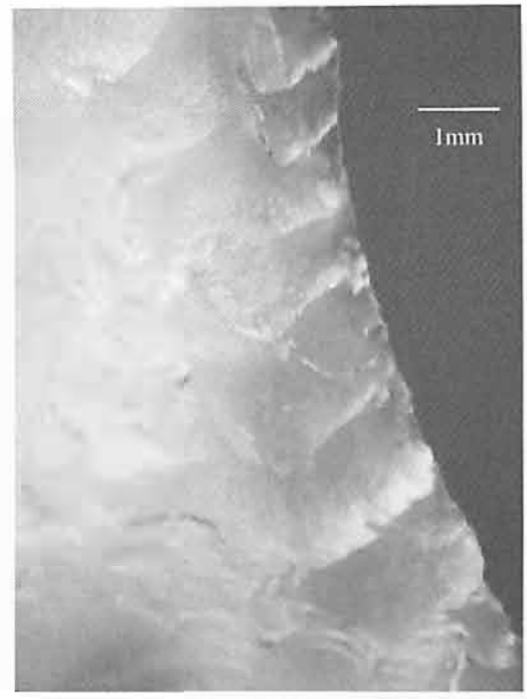


写真図版７　清田台遺跡出土の植物遺体

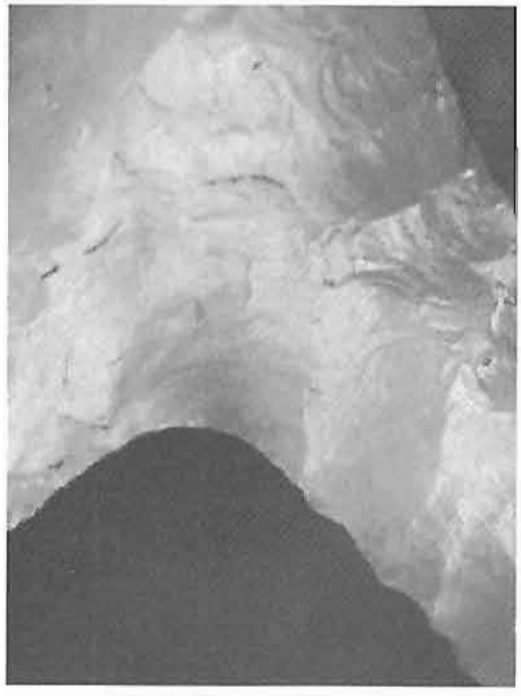
資料No.2688



1



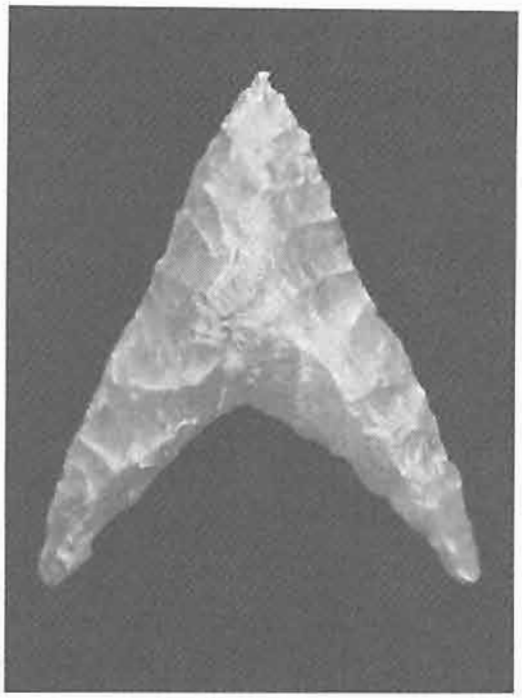
2　右側辺の拡大



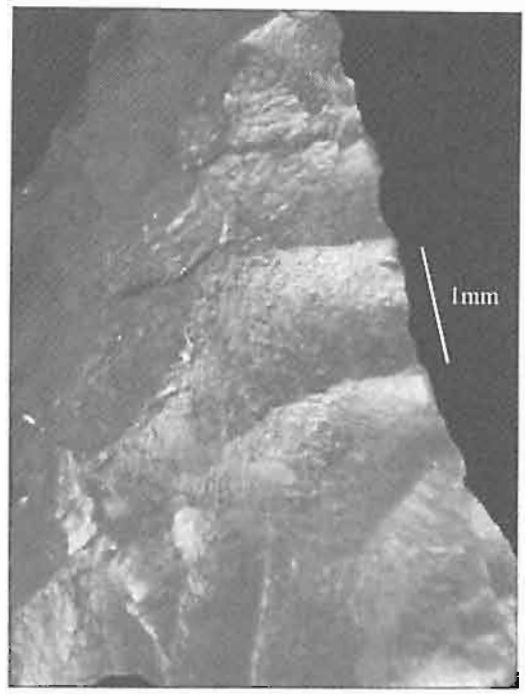
3　表側抉り部の拡大

非常に端正な長脚の凹基鏃である。石材は瑪瑙である。側辺は内湾して鋭い尖頭部を形成する。側辺を形成する剥離面は、打点が明瞭ではなく剥離の開始部が曲げタイプである。一部にコーンタイプが見られるがわずかである（写真２）。剥離幅が約1mm程度と非常に狭く、ハンマーのコンタクトエリアは1mm以下である。剥離の稜線は未発達である。写真３は、抉り部の拡大であるが、中央部の剥離面は打点が見られ、コーンタイプの剥離である。抉り部の最終整形の剥離面である。裏面側を打面に剥離している。以上のようにこの石鏃の剥離技術は剥離面の様相から径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

資料No.2710



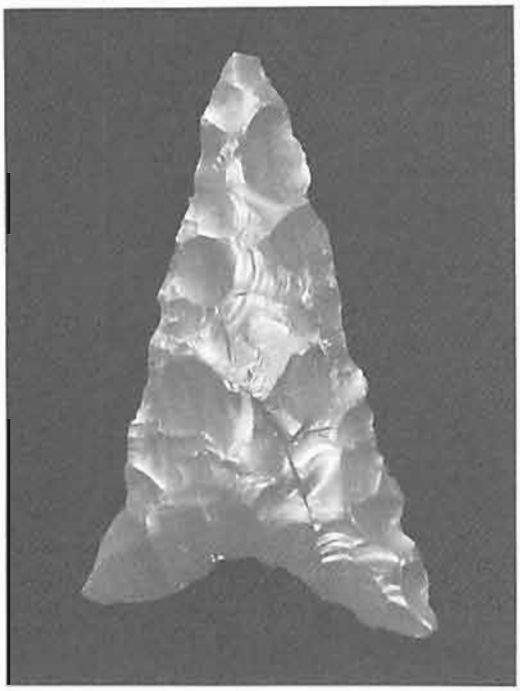
1



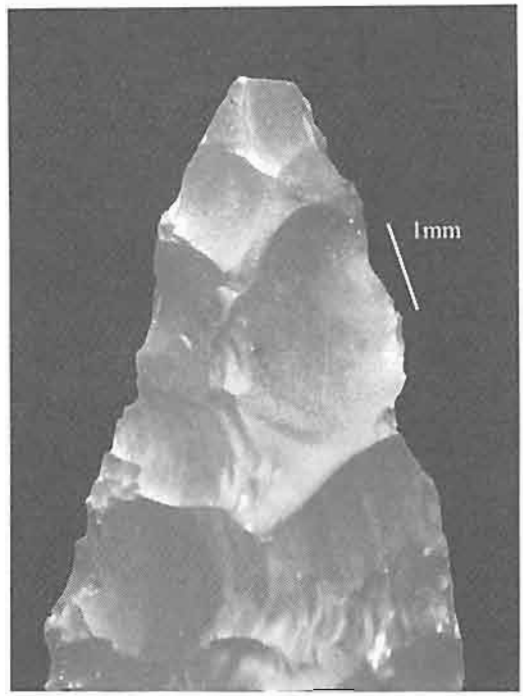
2　右側辺の拡大

長脚の凹基鏃である。石材は鉄石英である。側辺はやや内湾ざみに形成され、鋭い尖頭部を作り出している。側辺を形成している剥離面は、幅が1mm程度で打点が明瞭ではなく剥離の開始部が曲げタイプのものが主体を占める。　一部にコーンタイプも見られる。剥離の規模が非常に小さいことから、ハンマーのコンタクトエリアは1mm以下である。剥離の稜線は、未発達である。剥離の末端はフェザータイプである。
抉り部は、表側を打面にして裏側に剥離している。剥離面の様相は側辺と同じである。
以上のような剥離面の特徴から、この石鏃の剥離技術は径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

資料No.2724



1



2　尖頭部拡大

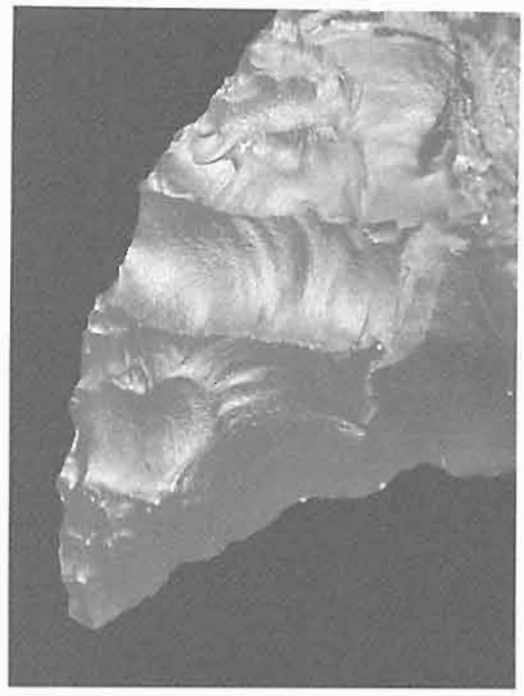
3　裏面側の左側辺拡大

抉りの比較的浅い凹基鏃である。石材は、赤色頁岩である。直線的な側辺によって尖頭部を作り出している。剥離面の特徴は、打点が明瞭ではなく剥離の開始部がコーンタイプであり、稜線がやや発達している。剥離の幅は、1.5～2mm程度どやや広い。剥離末端は、フェザーエンドである。また、写真3のように剥離の開始部がわずかに砕けているが、これはハンマーがこの石材よりもやや硬い場合、あるいは非常に薄い縁辺であるためハンマーのあてる角度によって圧縮の力が強くなると起こりやすい現象である。

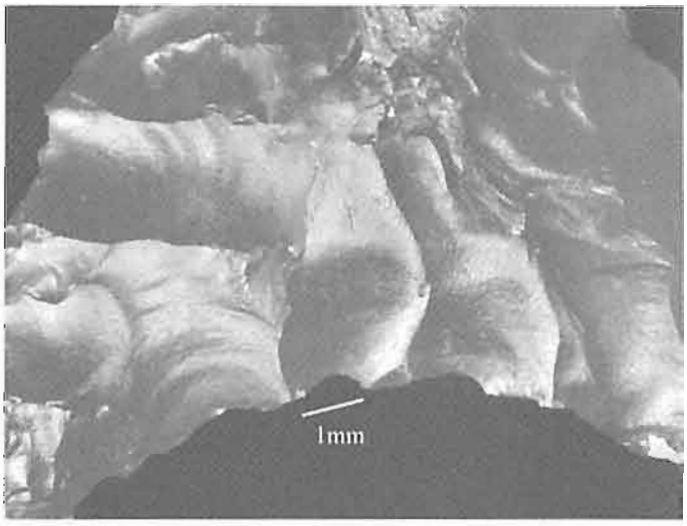
以上のような特徴からこの石鏃の剥離技術はやや硬めのソフトハンマーによる押圧剥離である。

資料No.2735

1



2　左脚部拡大



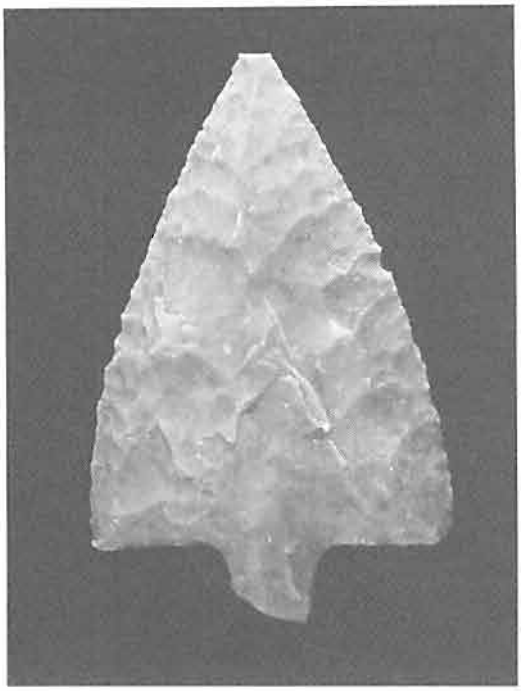
3　抉り部拡大

抉りの浅い凹基鏃である。石材は、玉髄質頁岩とした。側辺は、ゆるやかに外湾しながら尖頭部を作っている。側辺の加工は、打点が明瞭ではなく、剥離の開始部は曲げタイプである。一部にコーンタイプも見られる。開始部の砕けはほとんどなくなめらかである。剥離の末端がわずかに小階段状になっている。これは、器体表面に沿うように力が加わったためと考えられる。剥離の稜線は、やや発達している。剥離の幅は、2mm程度とやや広い。

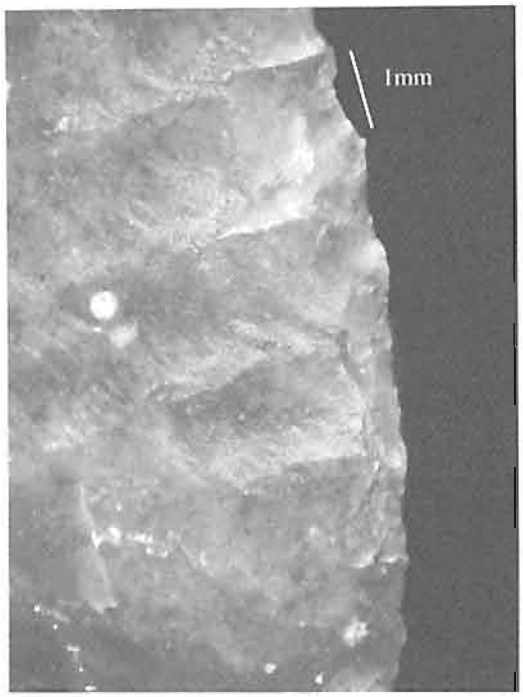
抉り部の加工は、表側に打面となる剥離を施し、裏面側に剥離を入れている。剥離面の様相は、側辺と同じである。

以上のようにこの石鏃の剥離技術は、やや径の広い堅めのソフトハンマーの押圧剥離である。

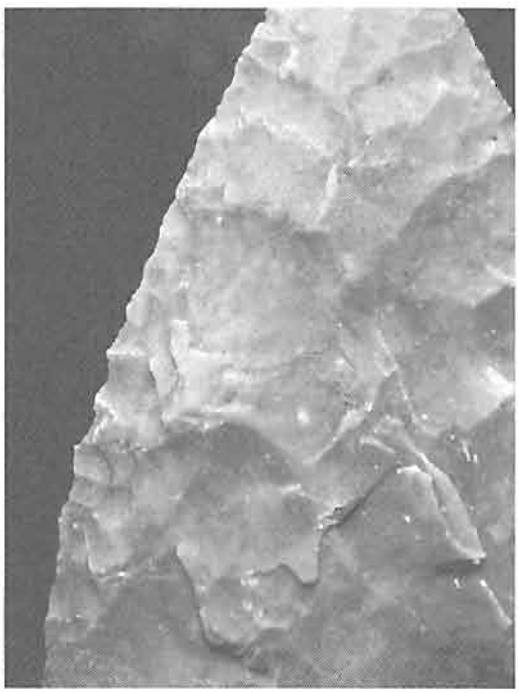
資料No.3794



1



2　裏面側の右側辺拡大

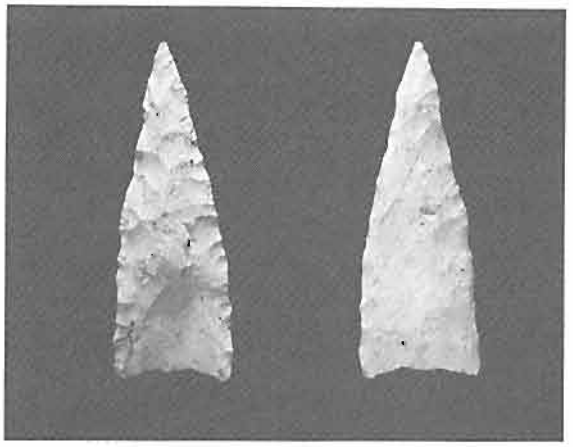


3　表側の左側辺拡大

端正な有茎鏃である。　石材は、頁岩である。側辺は、わずかに外湾して尖頭部を作っている。側辺の加工は、2段階に分かれまず器体中央部にまで伸びるような平坦剥離で整形したあとに縁辺をもう一度細かな剥離で最終調整している。剥離面の様相は打点が明瞭ではなく、剥離の開始部は曲げタイプである。　剥離の稜線は未発達である。剥離の幅は、1～1.5mm程度で狭い。　茎部の加工は、ほぼ直角に抉りを作り細い茎部を作っている。抉りの加工は、右側の抉りは、裏面側から表側に剥離を入れて、左側の抉りは、表側から裏面側に抉りを入れている。

この抉り部の剥離面は規模が大きく、剥離の幅は3～3.5mmあり、側辺を加工しているハンマーとは違う可能性がある。　以上のようにこの石鏃には径の細いソフトハンマーとやや径の広いソフトハンマーの2種類が用いられている可能性が高い。

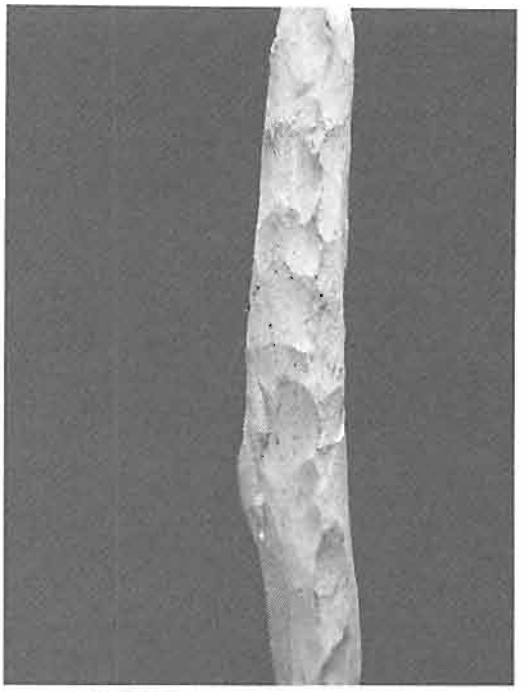
資料No.3496



1

3

4　表側基部の拡大



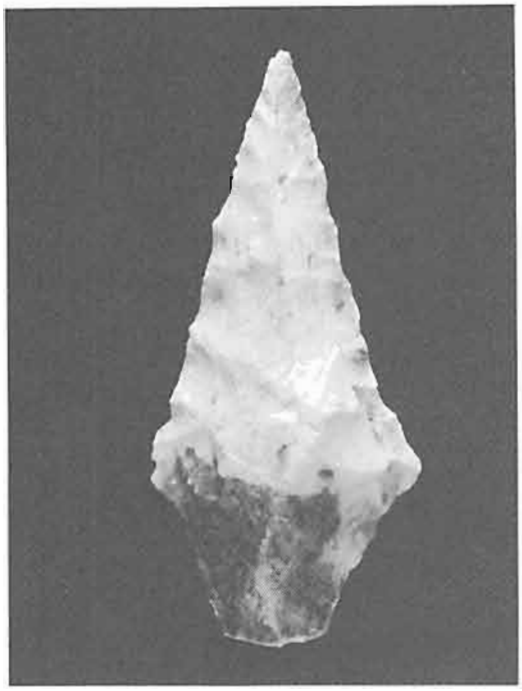
2　右側辺拡大

長身で浅い抉りの凹基鏃である。石材は、凝灰岩？である。裏面側の石器中央部には素材面を残し、周辺部にはやや急角度の短い剥離を施す。この周辺加工は、表側への剥離をするための打面形成の役目があると考えられる。写真2は右側辺の拡大であるが、表側への剥離が裏面側の剥離面の切り合う稜線上にハンマーを当てて剥離されているのがよくわかる。そのために側辺の稜線は、屈曲が連続する稜線になっている。側辺の剥離面の様相は、打点が明瞭ではなく、剥離の開始部は曲げタイプである。一部にコーンタイプも見られる。剥離の稜線んはやや発達している。剥離面の幅は、2～2.5mm程度とやや広めである。

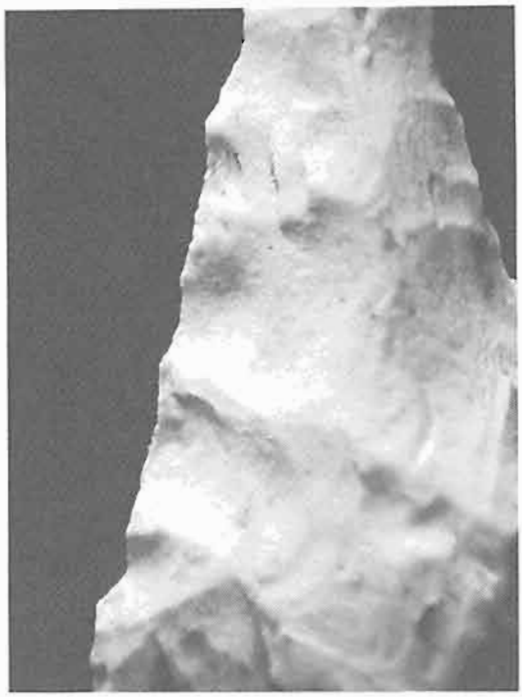
抉り部の加工は、規模の大きな剥離面が表側にあり、その縁辺を打面にして裏側に剥離を施している。最後に一枚だけ表側に剥離を入れているが、出っ張りを取るための補助的な剥離であると考えられる。

以上のうようにこの石鏃の剥離技術は、やや径の広い堅めのソフトハンマーの押圧剥離である。

資料No.3826



1

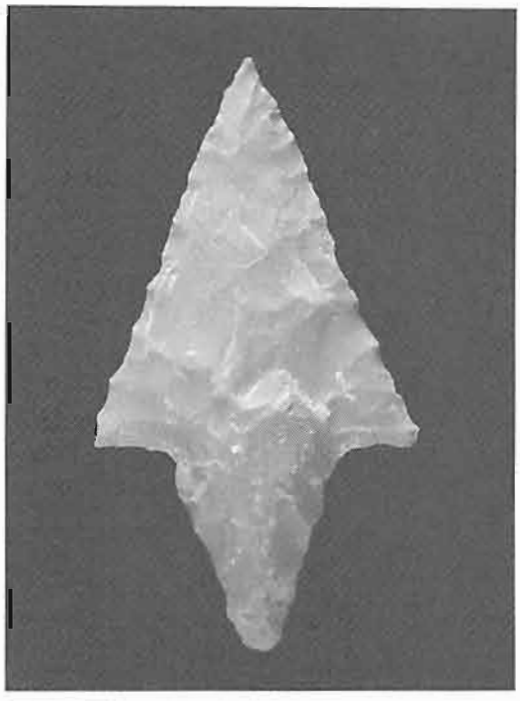


2　左側辺の拡大

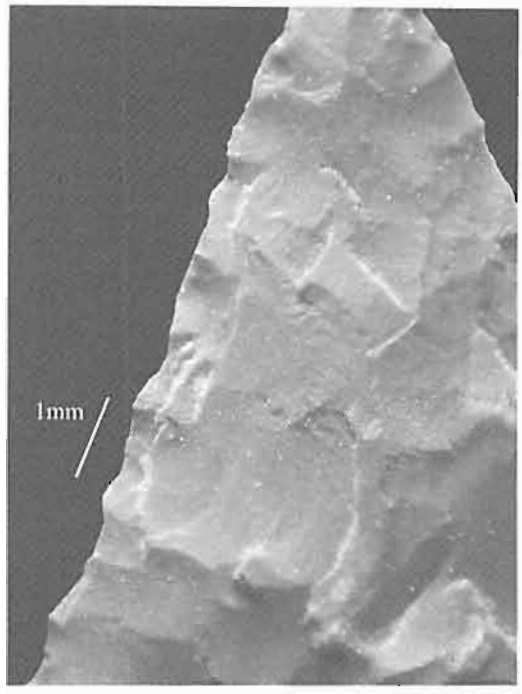
有茎鏃である。石材は、凝灰岩である。茎部には、黒色のタール状付着物観察される。わずかに内湾する側辺を形成し、鋭い尖頭部を作り出している。尖頭部の剥離は、横断面形が菱形状になるようにやや急角度の剥離を施している。このような剥離の結果石器中軸上には明瞭な稜線が形成される。茎部は深い抉りを施さず、ほぼ直線的に逆三角形の茎部を形成している。

身部を形成する側辺の加工は、打点があまり明瞭ではなく、剥離の開始部はコーンタイプである。一部に曲げタイプも見られる。剥離の稜線は、やや発達している。剥離面の幅は、2mm未満である。以上のような特徴から、この石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

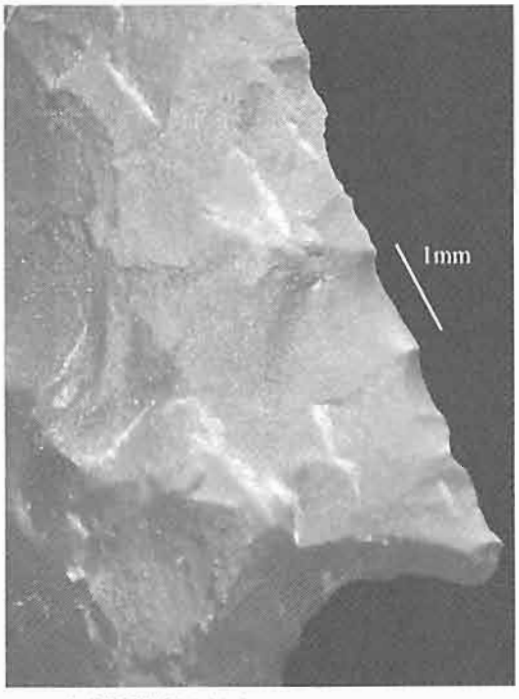
資料No.2911



1



2　左側辺の拡大

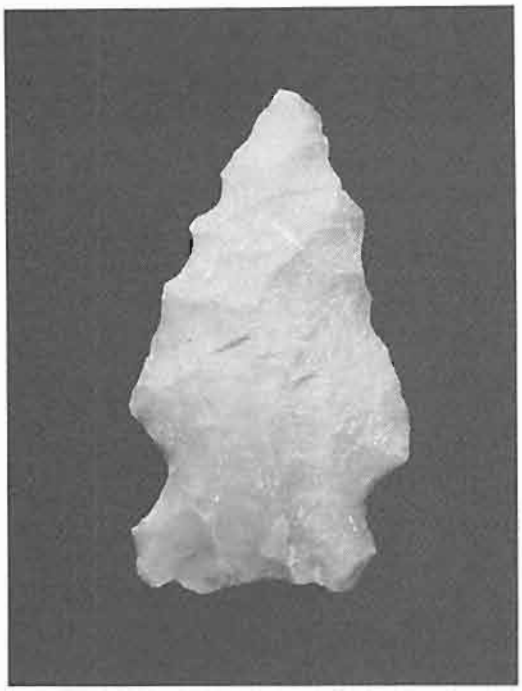


3　右側辺基部の拡大

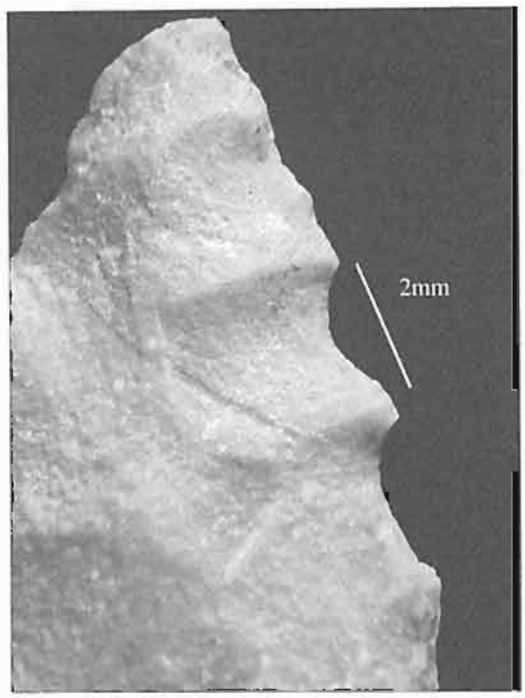
小形の有茎鏃である。石材は、鉄石英である。直線的な側辺によって鋭い尖頭部を作っている。側辺の加工は２段階あり、まず長く伸びる平坦な剥離整形したあと、縁辺を最終的に細かく整形している。写真２をみると小さなコの字状の剥離面が規則正しく縁辺にならんでいる。剥離面の様相は打点があまり明瞭ではなく、剥離開始部は、コーンタイプである。縁辺の砕けはなく、なめらかである。剥離の稜線は未発達である。剥離の幅は、1mm程度と非常に狭い。ハンマーのコンタクトエリアは1mm未満である。茎部の加工は、急角度に剥離が施されているため打点が明瞭で剥離の稜線がやや発達しているが、剥離の規模、打点部分の砕けがないことからハンマーは側辺の加工と同じと考えてよいと思われる。

以上のようにこの石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

資料No.3749



1



2　裏面側の右側辺拡大

3　表側の基部拡大

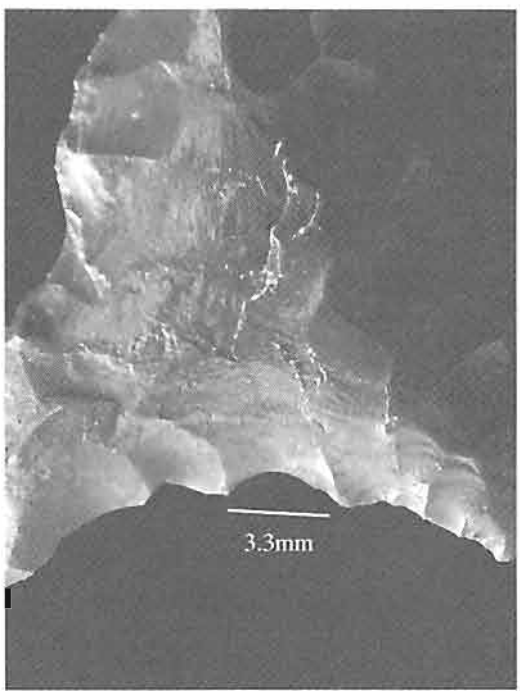
基部付近の両側に抉りが施される抉入凹基鏃である。石材は、頁岩である。側辺の加工は、打点が明瞭ではなく剥離の開始部は、曲げタイプである。剥離の稜線は、やや発達している。剥離面の幅は、2～2.5mm程度とやや広い。剥離の末端がわずかに小階段状になっている。　これは、器体表面とほぼ平行に力が加わったためと考えられる。

抉り部の加工は、裏面側に打面を形成する剥離を施し、表側に急角度に剥離に入れている。基部の加工も裏面側に打面を形成する剥離を施し、表側に長く伸びる剥離を施す。以上のようにこの石鏃の剥離技術は、径のやや広いソフトハンマーの押圧剥離である。

資料No.3545

1

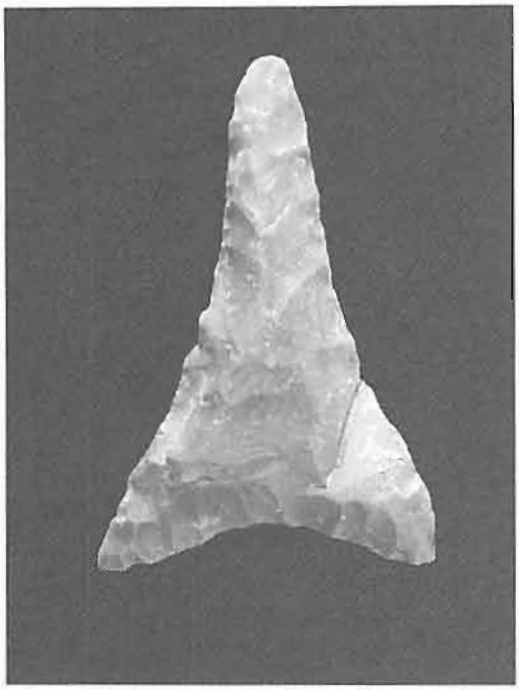
2　裏面側の左側辺拡大



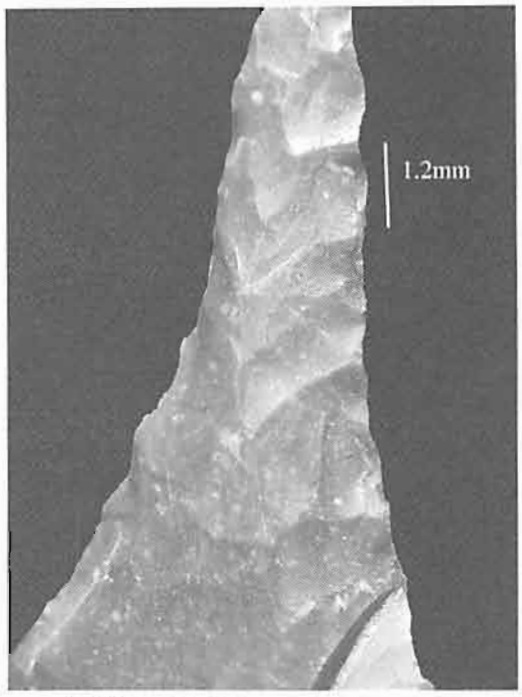
3　表側の基部拡大

抉りの浅い凹基鏃である。石材は、赤色頁岩である。側辺の加工は、打点が明瞭ではなく、剥離の開始部は、曲げタイプである。一部にコーンタイプも見られる。剥離の稜線はやや発達している。剥離の幅は、2～3mm程度とやや広い。写真２の主要な剥離面は石器の中軸を越えて対辺にまで到達するほど伸びている。このような剥離を施すためには、器体表面に沿うような方向に力を加えないと剥離が伸びないため、ハンマーを当てる角度に工夫が必要である。
抉り部の加工は、裏面側に打面となる剥離を施し、表側に剥離を入れている。剥離面んお様相は、側辺と同じである。以上のようにこの石鏃の剥離技術は、やや径の広いソフトハンマーの押圧剥離である。

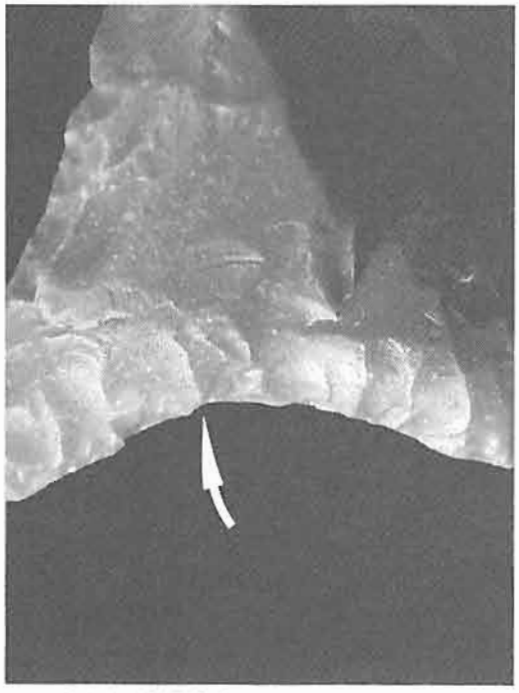
資料No.3233



1



2　表側の右側辺拡大



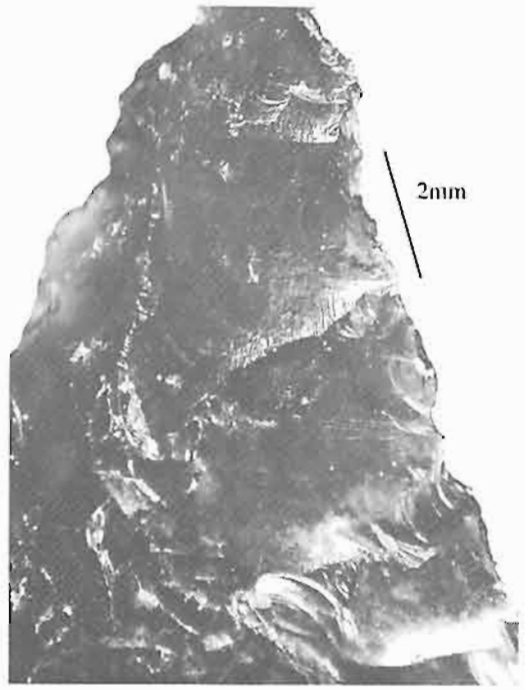
3　表側の基部拡大

抉りの浅い凹基鏃である。石材は、頁岩である。側辺は、内湾して細長い尖頭部を作っている。側辺の加工は、打点がやや明瞭で剥離の開始部は、コーンタイプである。剥離の稜線は、やや発達している。剥離面の幅は、1.2mm程度である。ハンマーのコンタクトエリアは1mm以下で非常に狭い。

抉り部の加工は、裏面側に打面を形成する剥離を施し、表側にやや急角度に剥離を入れている。抉りの中央部については、最終加工で写真3の矢印の部分から裏側へ1枚の剥離を入れている。剥離面の様相は、側辺とほぼ同じであるが、剥離縁辺の砕けが目立つ。この砕けについては、薄い縁辺に細いハンマーで急角度に剥離したためと考えられる。以上のように、この石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

資料No.3575

1



2　表側の右側辺拡大

3　表側の基部拡大

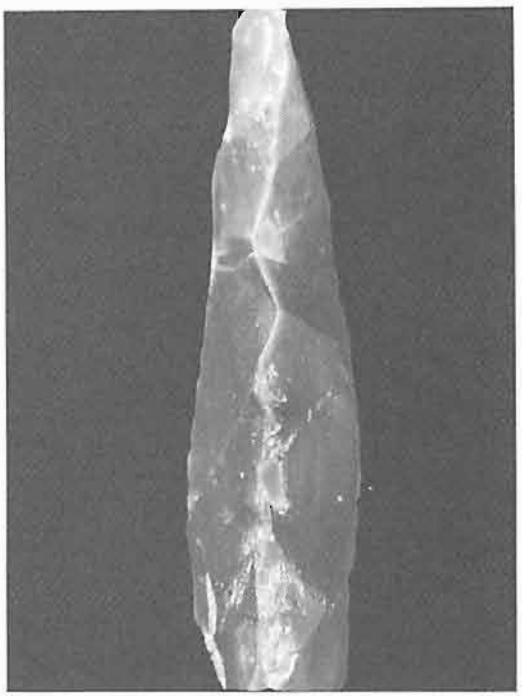
浅い抉りの凹基鏃である。石材は、黒曜石である。ほぼ直線的な側辺によって尖頭部を形成している。側辺の加工は、打点があまり明瞭ではなく、剥離の開始部はコーンタイプである。剥離縁辺の砕けはほとんど見られない。剥離の稜線は未発達である。剥離の幅は、1.5～2mm程度である。

抉り部の加工は、表側に打面を作りだし裏側へや剥離を施す。剥離面の様相は、側辺と同じである。

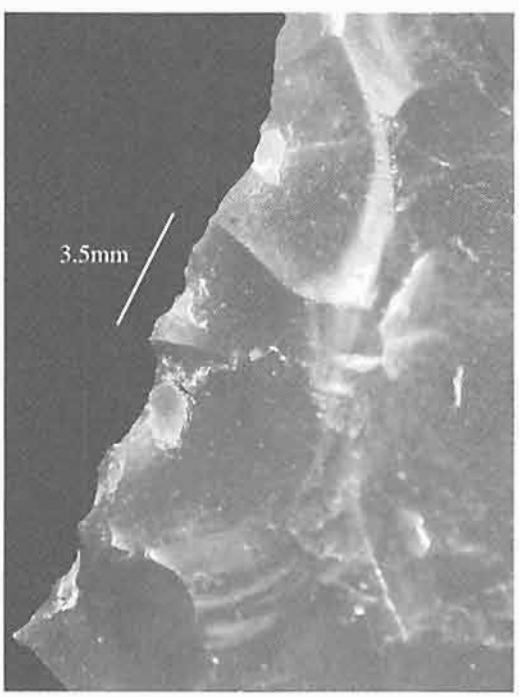
以上のことからこの石鏃の剥離技術は、径の細いハンマーの押圧剥離である。

資料No.3581

1



2　左側辺拡大



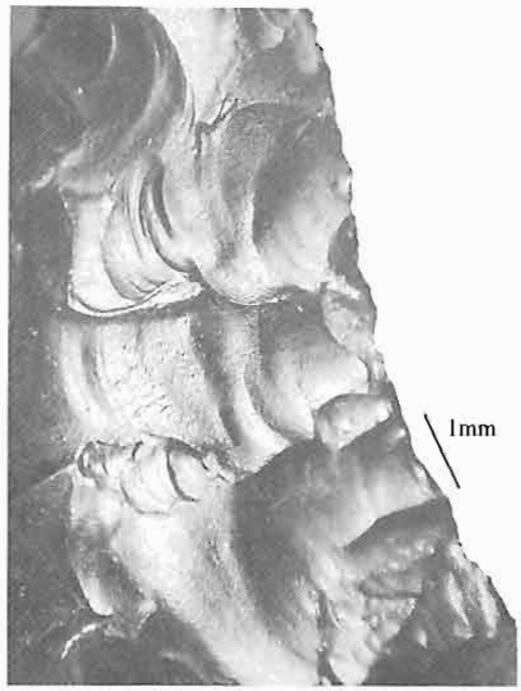
3　表側の左側辺拡大

抉りの浅い凹基鏃である。石材は、頁岩である。ほぼ直線的な側辺によって尖頭部が形成されている。側辺の加工は、打点が明瞭で剥離の開始部はコーンタイプであるが縁辺には砕けがみられない。剥離の稜線は、発達している。剥離の幅は、3.5～4mm程度と規模が大きい。写真2をみると側辺の加工の仕方がよくわかる。まず裏面側に打面となる剥離をほどこし、その隣合う剥離面の稜線の先端部にハンマーを当てて表側へ剥離を施しているのかわかる。その結果側辺の縁辺は屈曲が連続するような稜線が形成される。

抉り部の加工は、側辺と同じく裏面側に打面を作り表側に剥離を施している。剥離の様相は同じである。

資料No.3612

1



2　表側の右側辺拡大

3　表側の左側辺拡大

長脚の凹基鏃である。石材は、黒曜石である。側辺は、脚部が外湾し、尖頭部にいくにしたがって内湾していく特徴的な形態である。側辺の加工は、打点が明瞭ではなく、剥離の開始部がコーンタイプである。剥離の稜線は未発達である。剥離の幅は、1.5mm程度である。ハンマーのコンタクトエリアは1mm程度と非常に狭い。

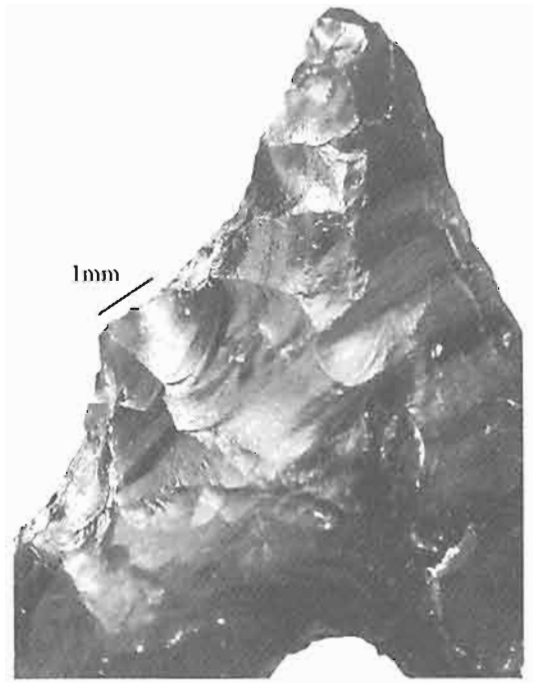
抉り部の加工は、写真4のように縁辺がよく摩耗しており、剥離で整形したあとに、縁辺を擦っているようである。どいう意味があるのかは、不明である。

以上のようにこの石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

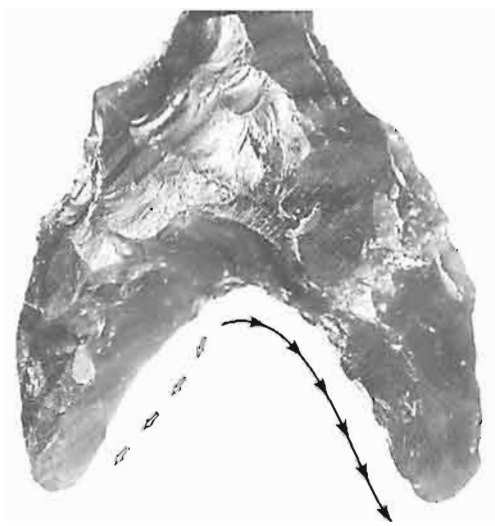
4　抉り部縁辺拡大（摩耗顕著）

資料No.2305

1



2　表側の左側辺拡大



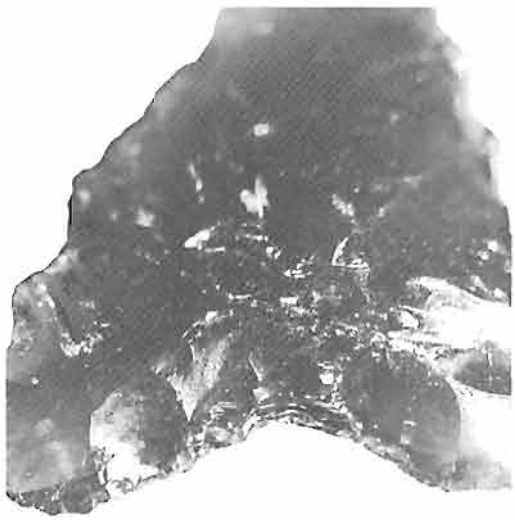
3　表側の基部拡大

長脚の凹基鏃である。石材は、黒曜石である。側辺は、尖頭部で内湾し、脚部で外湾するという特徴的な形態をもつ石鏃である。側辺の加工は、打点は明瞭ではなく、剥離の開始部はコーンタイプであり、縁辺がわずかに砕けている部分もみられる。剥離の稜線はやや発達する。剥離面の幅は1.5～2mm程度である。抉り部については、加工の仕方に特徴がみられる。写真３の赤のラインの部分が表側に剥離が施され、黄色のラインの部分では、裏面側に剥離が施されている。剥離の様相は、剥離の開始部に砕けが見られ、コーンタイプである。この砕けの要因については、もろい縁辺に急角度に径の細いハンマーを当てたためと考えられる。　以上のようにこの石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーであるが、ややハードの様相を持つハンマーの押圧剥離である。

資料No.3622

1

2　表側の左側辺拡大



3　表側の基部拡大

凹基鏃である。石材は、黒曜石である。わずかに外湾する側辺によって尖頭部を形成している。側辺を形成する加工は、打点があまり明瞭ではなく、剥離の開始部はコーンタイプであり、わずかに砕けがみられる。剥離の稜線は、やや発達する。剥離面の幅は、1mm程度と非常に狭い。推定されるハンマーのコンタクトエリアは、0.5～1mm未満である。このことからハンマーの先端は非常に鋭いと考えられる。次に抉り部の剥離面を見てみると、側辺とは違い、剥離開始部の砕けが明瞭であるが、これはハンマーを打面に対して急角度に当てたためで、側辺の加工と同じハンマーであると考えられる。以上のことからこの石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーであるが、ややハードの様相が強いハンマーの押圧剥離である。

資料No.3628

1

2　表側の左側辺と基部拡大

3　裏面側の左側辺拡大

抉りの浅い凹基鏃である。石材は、黒曜石である。直線的な側辺によって尖頭部を形成している。側辺を形成している加工は、打点があまり明瞭ではなく剥離の開始部は、コーンタイプである。一部に曲げタイプがみられる。剥離の稜線はやや発達する。剥離面の幅は、2mm程度である。写真2のスケール部分のハンマーのコンタクトエリアは1mm以下である。この剥離面の場合、ハンマーが打面に対してやや急角度に当たったために打点が明瞭で、なおかつ縁辺が非常に薄いために打点周辺がわずかに砕けた状態になっている。この剥離面よりもさらにハンマーが急角度に当たってやや失敗剥離になってしまったのが、写真3の左側辺中央部の大きく抉れた部分である。抉り部の加工は、表側に打面を形成する剥離を施し、最終調整は裏面側に剥離を入れるものである。剥離面の様相は、側辺と同じである。以上のことからこの石鏃の剥離技術は、径の細いソフトハンマーの押圧剥離である。

5．清田台遺跡出土石器の使用痕分析について

株式会社アルカ　　太田公彦・池谷勝典

はじめに

資料体と観察視点

清田台遺跡出土資料20点の使用痕観察を行った。分析資料は縄文時代中期の大木7a　8bに所属するものである。これらの石器がいったいどのような対象物にどのような使い方をしていたのか、使用痕分析から明らかにすることが今回の目的である。20点の資料中、特殊敲石17点は敲打面の観察を、石匙３点は使用痕光沢の観察を行った。

観察方法

観察は肉眼およびキーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）を用いて行った。
特殊敲石の観察は低倍率ズームレンズ（VH-Z05）を用いた。観察倍率は５倍　10倍である。

使用痕光沢の観察には高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いた。観察倍率は450倍　1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準によっている（梶原・阿子島1981、阿子島1989）。

低倍率による観察は太田が担当し、高倍率による使用痕光沢の観察は池谷が担当した。

なお、観察写真の撮影箇所は、図中に矢印または棒線で示してある。

観察所見

資料2295

楕円礫の下部に敲打面を持つ。写真は敲打面を下から撮影したものである。礫の下端部は自然面が四角く残り、敲打の面はその周囲に四つの面を形成し、全体として角錐状を呈している。四つの敲打の面は平面であり、隣り合った面とで成す稜は明瞭である。この稜をつぶすような敲打は観察されない。敲打の面にはやや摩耗が観察される。

資料2427

楕円礫の上下に敲打面を有する。写真１は上側の敲打面を撮影したもので、資料3087と同じく端部には自然面が残っている。敲打の面は写真１の右側を除く三方に認められ、上面観は角錐状である。写真２は下側の敲打面の様子で、上下に二つの敲打面があり、下端部は自然面が残っている。いずれの敲打の面も平面であり、面同士を画す稜線は明瞭である。敲打痕は非常に小さい。

資料2428

楕円礫の上下に敲打面を有する。写真は上側の敲打面を撮影したもので、上端部は、前の２資料とは異なり、四角い敲打面となっている。その面を頂点として四つの敲打面があり、全体として角錐状を呈している。いずれの敲打の面も平面であり、面同士を画す稜線は明瞭である。下側の敲打面は下端部を欠損するが、様相は上側の敲打面と同じである。敲打痕は非常に小さい。

資料2601

楕円礫の下部に敲打面を有するほか、礫の表裏にも明瞭な敲打痕が認められる。写真１は敲打面を下から写したものである。礫の下部は敲打の面により角錐状となっている。敲打の面は平面で、面同士を画す稜線は明瞭である。本資料では、礫の下端部が敲打により破損している。この破損面は敲打の面に観察される敲打痕に比べてはるかに大きく、敲打の方向とも異なるので、全く違う成因が推測できる。敲打の面に見られる敲打痕は非常に小さい。

写真２は表面下部の敲打痕の様子である。写真１の敲打の面とは異なり、大きめの敲打痕がランダムに礫表面を覆っている。面の敲打痕は非常に小さいが、表面側に観察される敲打痕には、大きさ・形・深さ・密度に斉一性が認められない。台石またはハンマーとして用いた場合に生じるような敲打痕である。

資料2602

楕円礫の下部に敲打面を有する。写真は敲打の面を下から撮影したものである。他の資料と異なり、敲打の面は完全な平面とならず、面同士の境界の稜線も不明瞭である。本資料も資料3104と同じく、下端部に敲打痕が観察できる。敲打痕は非常に小さい。

資料2887

楕円礫の上下に敲打面を有する。写真１は上側の敲打面を撮したもので、頂部はほぼ自然面が残っている。この面を頂点にして四つの敲打の面が角錐状に並んでいる。面と面とを画す稜線は明瞭である。

写真２は下側の敲打面を撮したもので、下端部に残る四角い自然面を取り囲んで四つの敲打の面が角錐状に並んでいる。

資料4187

楕円礫の上下に敲打面を有する。写真は敲打面を上方から撮影したものである。他の資料では敲打の面は４面あるが、本資料では上下両端とも２面ずつで、端部の形状は楔形となっている。敲打の面は平面で、周囲との境界は明瞭な稜線で画されている。敲打痕は非常に小さい。

資料2654

楕円礫の上部に敲打面を有する。下部は欠損しているため、敲打面があったかは不明である。写真は敲打面を上方から撮影したものである。敲打の面は４面あり、全体として角錐状を呈している。下端部は写真の上方と下方の敲打の面を画す稜線となっており、稜線上には敲打痕は観察されない。敲打の面は平面で、周囲との境界は明瞭な稜線で画されている。敲打痕は非常に小さい。

資料2888

楕円礫の上部に敲打面を有する。下部は欠損しているため、敲打面があったかは不明である。写真は敲打面を上方から撮影したものである。礫の上端部には自然面が残っている。写真で見ると敲打の面は下側を除く3面に観察される。敲打の面は写真の左面が平面となっている他は、礫面に沿って丸く広がっている。本資料は敲打の程度が小さく、敲打痕も明瞭である。

資料2347

楕円礫の下部は欠損しているが、下部の一部には敲打痕が観察できる。写真は敲打面を上方から撮影したものである。礫の上端部には自然面が残っている。その自然面を取り囲むように敲打の面が4面観察される。敲打の面は写真の左面が平面となっている他は、礫面に沿って丸く広がっている。

資料2224

上端の尖った礫の上下に敲打面を有する。写真1は上部の敲打を上から撮影したものである。敲打の面は3面あり、礫の上端部にも敲打が観察される。敲打の面は平面とはならずに礫面に沿って丸く広がっている。この部分の敲打は程度が小さく、敲打痕も明瞭である。

写真2は下部の敲打の様子である。礫の左側面に近い位置に敲打痕が観察される他、下端部に衝撃を受けた結果生じた、平らな剥離面が観察される。この平らな剥離面は、礫下端部に垂直に近い打撃が加わったことで生じたもので、末端が階段状もしくはヒンジとなる平らな剥離面を形成している。おそらく、ハンマーを打ち下ろすような動作で用いられた結果であり、使用痕である。

資料4189

楕円礫の上下と表裏面に敲打痕を有する。写真1は上部の敲打を上から撮影したものである。上端部は敲打によって平面となっており、その面を囲むように敲打の面が4面観察される。敲打の面は写真の上側の面が程度が小さくはっきりしないが、他の3面は平面となり、面同士を画す稜線も観察できる。下部の敲打は下端部に認められ、こちらは面をなしていない。

写真2は表面に見られる敲打痕で、丸く深い敲打痕が散漫に認められる。敲打痕の径は上部の面を作る敲打とほぼ同じである。

資料2596

楕円礫の下部と表裏面に敲打痕を有する。写真は下部の敲打を下から撮影したものである。礫の下端部には敲打は認められず自然面となっている。敲打の面は表面側に1面あり、平面となっている。敲打痕の様相は表裏面に観察される敲打痕とよく似ているものの、敲打の密度は大きくかけ離れている。敲打はやや大きめである。

資料2399

楕円礫の下部に敲打痕を有する。写真は敲打を下から撮影したものである。礫の下端部は敲打によって四角い面状となり、その面を取り囲むように敲打の面が4面観察される。敲打の面は写真の右側を除くと平面

となっており、全体として角錐状を呈している。面同士を画す稜線も明瞭である。敲打痕は小さい。下端部を除く4面の敲打の面は表面がやや摩耗している。

資料4190

楕円礫の上下に敲打痕を有する。写真1は下部の敲打を下から撮影したものである。下端部には若干の敲打が観察できる。下部には敲打の面が4面あり、いずれも平面となっている。この部分は全体として角錐状を呈している。写真2は下部の敲打を表面側から撮影したものである。敲打痕はやや大きい。また、敲打の面は全体に摩耗が激しい。

写真3は上部の敲打を左側面側から撮影したものである。上部の敲打は礫の表面に沿って丸く広がっており、平面を形成しない。こちらの敲打の面も全体的に摩耗している。

資料2297

楕円礫の下部に敲打を有する。写真は敲打を下から撮影したものである。写真の中央から下方へ向けて破損が観察される（写真中の白矢印部分)。この破損は下端部に衝撃を受けた結果生じたものである。この破損部を頂点にして、敲打の面が写真の左側を除く3面に認められる。敲打の面は平面をなし、面同士を画す稜線は明瞭である。この部位は角錐状を呈している。写真右側の敲打の面には若干の摩耗が観察される。

資料4191

楕円礫の上部に敲打を有する。写真は敲打を左側面から撮影したものである。上端は敲打によって若干つぶれている。その両脇に2面の敲打の面が広がり、全体形は楔形を呈する。敲打の面は平面を形作らず、礫の表面に沿って丸く広がっている。敲打痕はやや大きい。また、敲打の面は摩耗が激しい。ところで、写真では敲打の面の右側に、敲打の面を切る新しい敲打痕が観察される。この敲打痕は摩耗した敲打の面を明らかに切っており、敲打の面がどのように形成されていったかを示すものとして興味深い資料である。

資料2190

横形の石匙である。石材は珪質頁岩である。素材は、横長剥片を用いて、その末端辺に押圧剥離で刃部を作り出し、バルブのある側に摘み部を作出している石器である。刃部には微細な剥離が観察され、使用痕剥離である。

高倍率使用痕分析

刃部に使用痕光沢が顕著に観察される。実験使用痕研究の成果からこの使用痕光沢はDタイプ（写真1，3）に比定される。推定される被加工物は、骨や鹿角である。光沢の形成方向や線状痕の様子から石器の運動方向は、刃部にほぼ平行するものある。

この石匙は、右側辺を主体的な刃部として用いて鋸引きのように刃部を平行に動作させていたことが推定される。

資料4020

縦型の石匙である。石材は珪質頁岩である。素材は縦長剥片を用いて、バルブ側に摘み部を作出し、両側辺と末端部に押圧剥離で加工を施している。押圧剥離は、縁辺部に限られ両側辺部は両面に加工が入り、末

端部は背面側にだけ加工が施される。両側辺ともに摩耗がみられるが、右側辺のほうがより摩耗している。

高倍率使用痕分析

写真１，３に示したような使用痕光沢が確認された。実験使用痕研究の成果からこの使用痕光沢はＤタイプに比定される。Ｄタイプの使用痕光沢は、特に骨や鹿角に対して使用された時に特徴的に見られる光沢タイプである。したがって、推定される被加工物は骨や鹿角などである可能性が高い。光沢の形成方向や線状痕の様子から石器の運動方向は、刃部にほぼ平行するものある。

この石器は、両側辺を刃部として用いて、刃部に対して平行に動作させていたことが推定される。

資料4048

摘み部が石器の対称軸に対して斜めについており、縦形か横形が迷う石匙である。石材は、珪質頁岩である。素材は、縦長剥片を用いているが、摘み部の作出位置は資料4200とは逆で末端辺に作られている。加工は、摘みの抉り部と端部に明瞭な押圧剥離がみられる。右側辺にみられる微細な剥離は使用痕剥離である。左側辺にはわずかに押圧剥離がみられるがその他の不正な剥離は使用痕剥離の可能性がある。

高倍率使用痕分析

右側辺部に使用痕光沢が顕著に観察される（写真１）。使用痕光沢はＤタイプに比定される。推定される被加工物は、骨や鹿角である。光沢の形成方向や線状痕の様子から石器の運動方向は、刃部にほぼ平行するものある。

この石匙は、右側辺を主体的な刃部として用いて鋸引きのように刃部を平行に動作させていたことが推定される。

まとめ

特殊敲石

17点の特殊敲石を観察した結果、以下のような傾向が見て取れた。

礫の上下端部は自然面を残していることが多く、上下端部が機能面と見なせない資料が多く認められる。

礫の上下部への敲打は、礫表裏面への敲打に比べて程度が著しく、敲打はたいがい平面を形成する。敲打は隣り合った面を越えて行われることはなく、面を画す稜線は切り立っている。

平面をなす敲打の面は、資料により程度のばらつきがあるが、全体的に楕円礫の上下を四面の角錐状に形作っている。また、敲打の面は程度のばらつきの多さや、資料4192の敲打例から、同時に形成されたものとは考えにくい。

礫上下部の敲打の面に、敲打によると思われる摩耗が観察される資料がある（3087・4192など）。これは敲打が長期にわたって行われていたことを示すと考えられる。

以上の観察内容を総合すると、清田台遺跡の特殊敲石の特徴は以下の通りになる。

細長い楕円礫の上下の端部に近い部分を用いて敲打が行われ、表面がつぶれて平面が形成されると、その平面と反対側の面に敲打が行われる。その面も平面となると、今度は礫を90度回転させて敲打が行われる。こうして礫の端部に四つの平面が形成され、結果として角錐状の形態を呈するようになったと考えられる。

敲打は礫の上下端部を用いることは稀である。上下端部を用いる敲打は、上述の敲打とは動作が全く異なるので、二次的な利用、あるいは別の目的で行われた可能性がある。なお、この場合の使用頻度は少ない。

上記のように、清田台遺跡の特殊敲石に見られる敲打は、きわめて特殊な様相を示している。これらの資料では、明らかに使用痕と考えられるものは、端部に観察される破損と、石器の表裏面の敲打痕である。石器の上下に平面を作る敲打については、表面に敲打が原因と思われる摩耗が観察されるものの、使用痕と断定できる積極的な根拠は見いだせなかった。よって、意図的な成形の可能性をも視野に入れて検討していかなければならないだろう。

石匙

3点の石匙を分析したが、使用痕光沢については、すべてDタイプの使用痕光沢が観察された。さらに線状痕と使用痕光沢の形成方向については、ほぼ刃部に対して平行するものである。

以上のことから3点については、形態的には多様であるが、石器の使い方およびその対象物についてはほとんど同じであったことが推測される。それでは、形態差や加工の差はいったい何に起因するのかという疑問がわいてくるが、それについては、今後石器の型式学的分析など総合的に検討していかなければならないと考えている。さらに、定量的な使用痕分析も必要になってくるであろう。今回の分析では、石匙について今後の研究の見通しを得ることができた点で有意義なものであった。今後、分析資料を増やし検討していきたい。

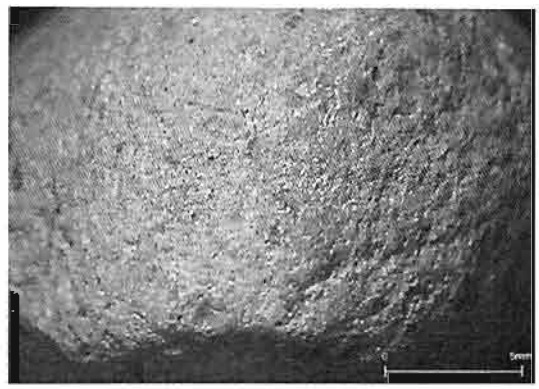
参考文献

阿子島香　1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニューサイエンス社

梶原洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究　ポリッシュを中心とした機能推定の試み」『考古学雑誌』67-1

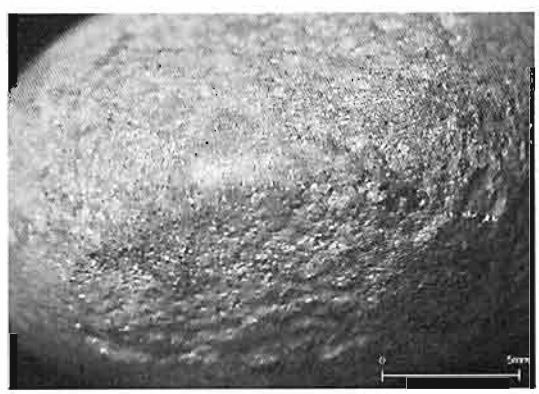
角張淳一　2000　「続・石器研究についての感想」『東京考古』18　東京考古談話会

2295



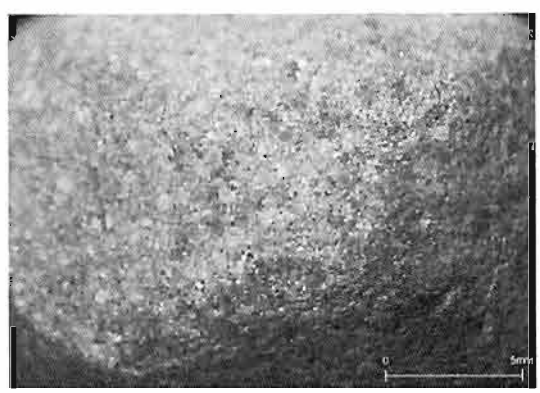
2427

1



2

2428

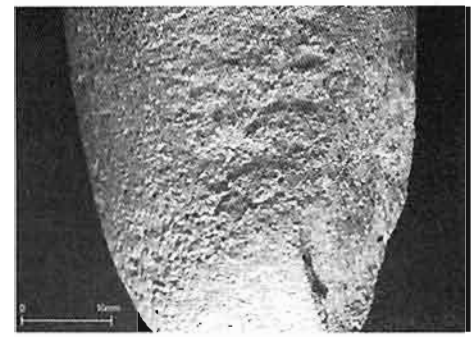


0 5mm

写真図版 8　石器写真（1）

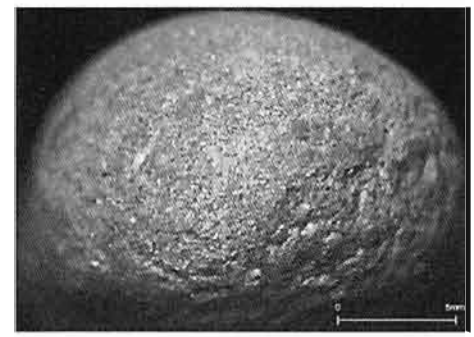
2601

1

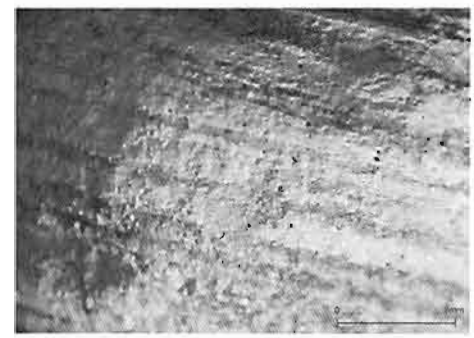


2

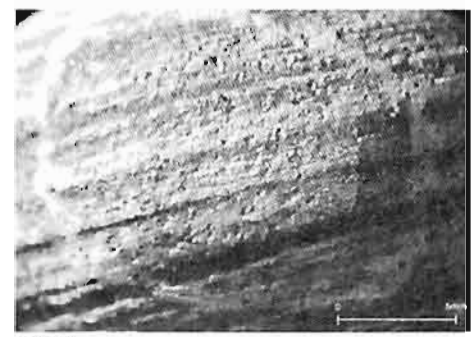
2602



2887



1

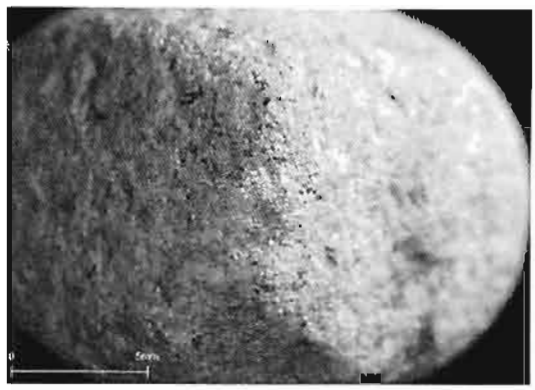


2

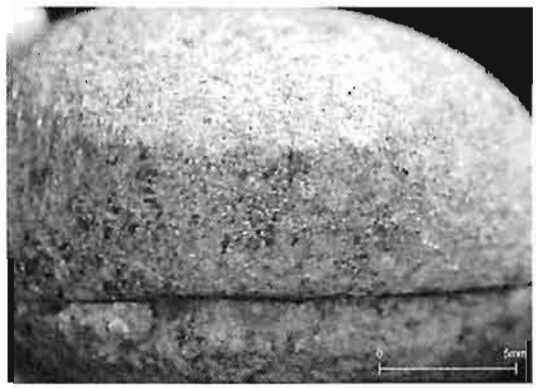
0 5mm

写真図版 9　石器写真（2）

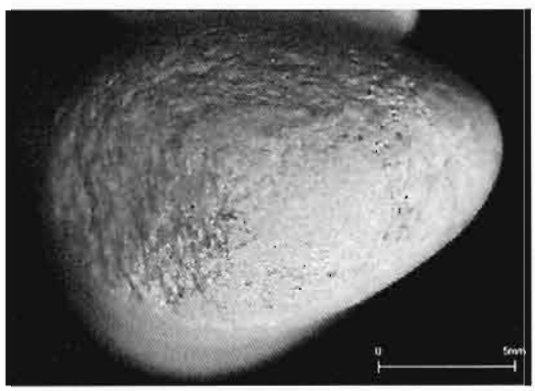
4187



2654



2888



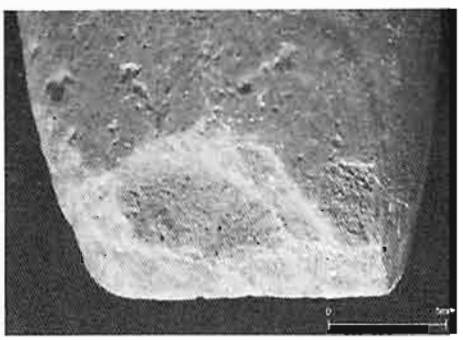
2347

0 5mm

写真図版10　石器写真(3)

2224

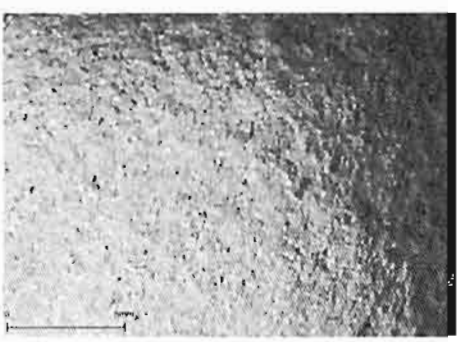
1



2

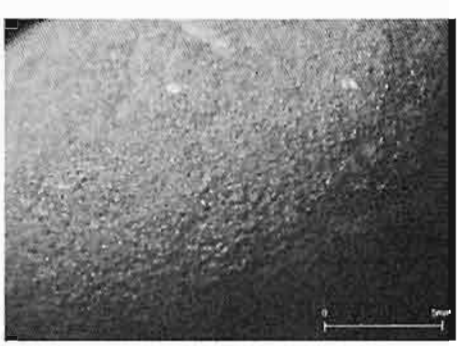
4189

2596



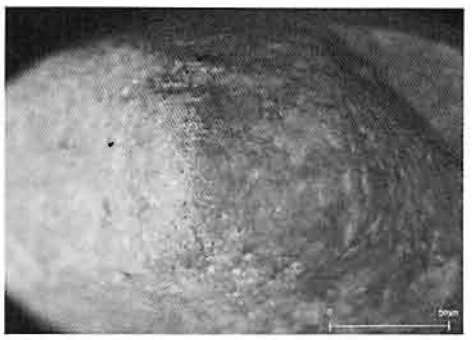
1

2



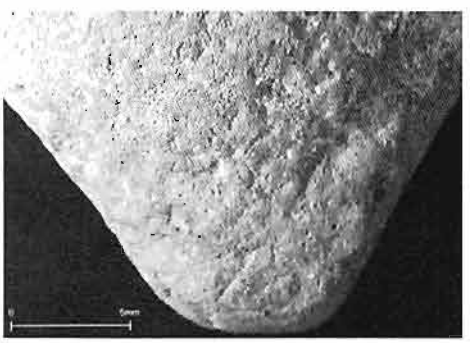
写真図版11　石器写真（4）

2399



1

4190

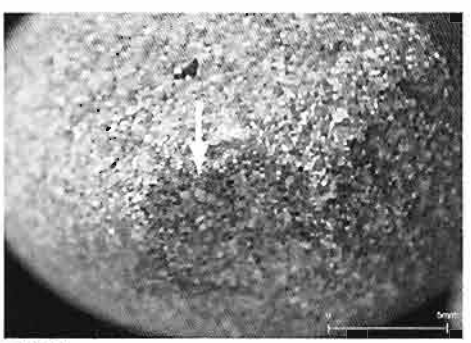


2

3

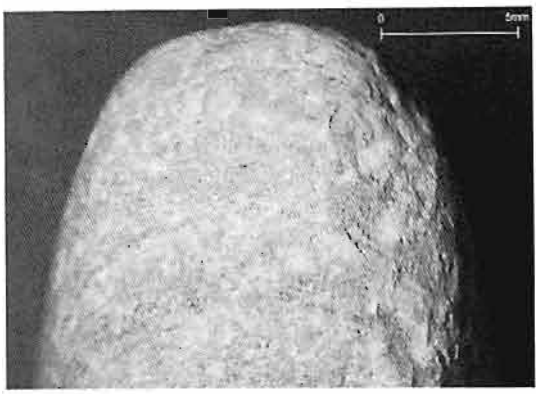
0 5mm

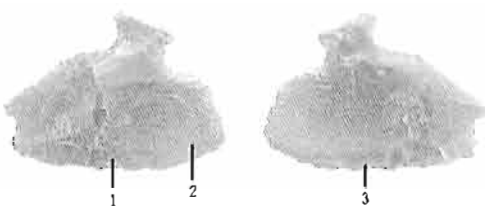
2297



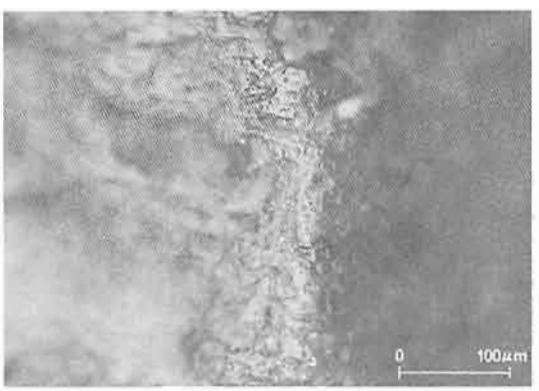
写真図版12　石器写真（5）

4191

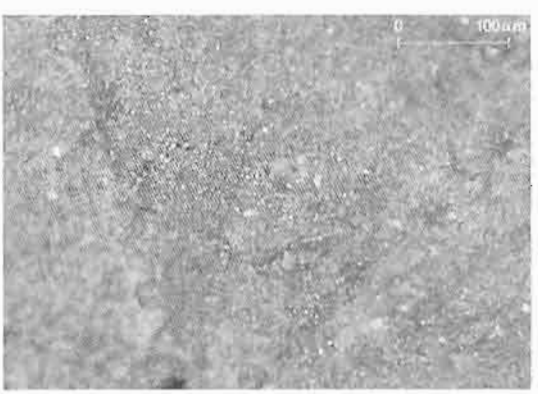




2190



1

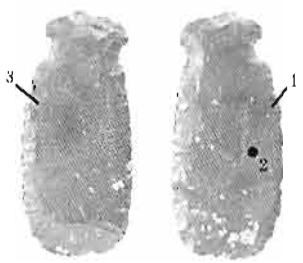


2

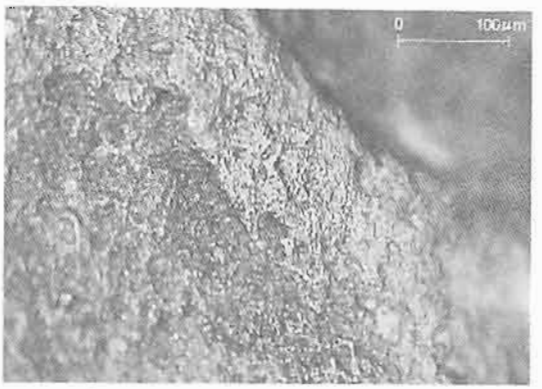
3

0 5mm

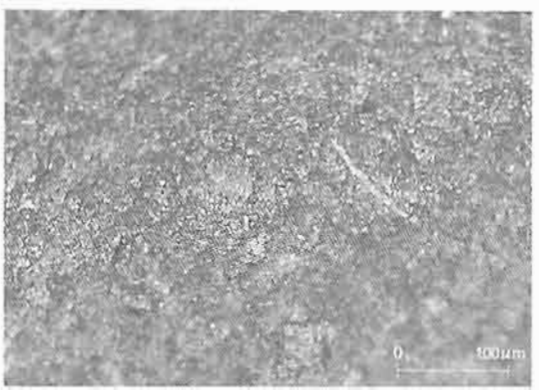
写真図版13　石器写真（6）



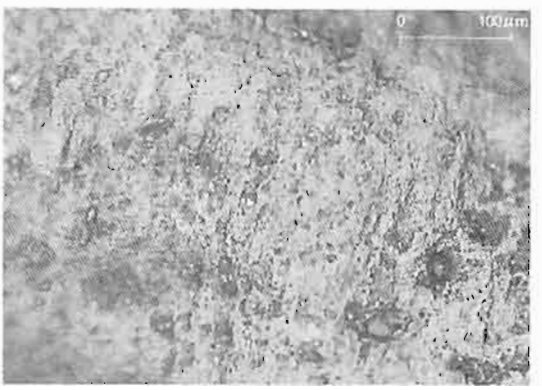
4020



1



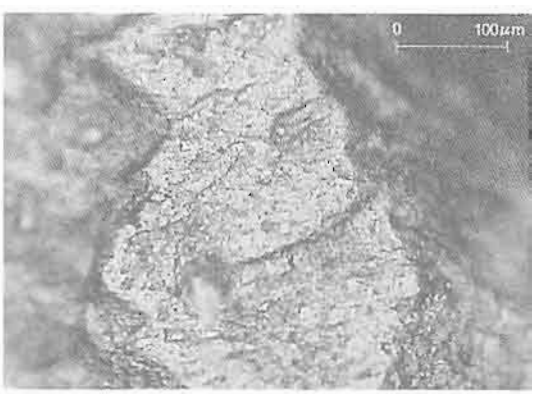
2



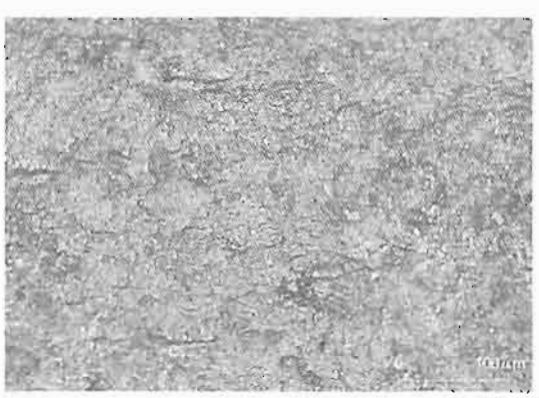
3

0 5mm

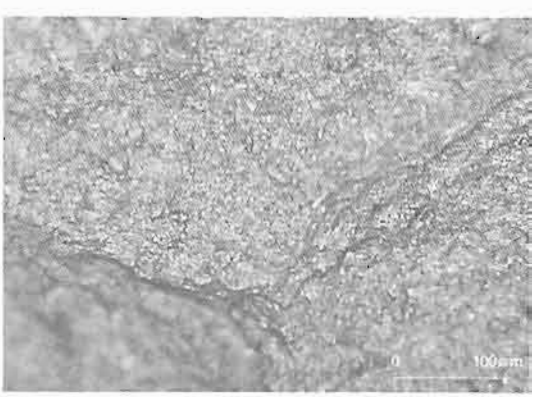
4048



1



2



3

写真図版14　石器写真(7)

6．清田台遺跡出土石錐の使用痕

東京都立大学人文学部　高瀬克範

清田台遺跡出土石錐のうち、肉眼によって錐先部の明確な摩滅が確認できた３点について、高倍率法（Keeley1977）による使用痕観察をおこなった。

１．No.2351

黄褐色の頁岩製で、やや風化が進んでいることもあって顕微鏡下での観察は比較的行いにくかった。先端部には摩滅箇所はみとめられず、明確な使用痕光沢面は確認されなかった。使用痕光沢面と線状痕は先端から２㎜以上奥に入った錐先部の４本の稜線上に認められ、回転運動を示す線状痕と大小多数のピットを伴うにぶい光沢が観察できた。稜線上はいずれも摩滅して丸みをおびており、錐先端から14㎜奥に入ったところまで線状痕と使用痕光沢面がみとめられた。

２．No.2494

黒色の頁岩製である。未使用部の表面は一様に弱い光沢を帯びており、風化が若干進んでいるものと思われる。使用痕は摩滅して丸くなった錐先端部のみに認められ、光沢はにぶく、微少なピットが多数伴う。線状痕は他の２資料に比して明確ではないが、回転運動を示すものがみとめられる。

３．No.2985

赤味をおびた頁岩製で、風化はそれほど進んでおらず観察は行いやすかった。先端から８㎜程度の箇所に稜線上に回転運動を示す線状痕が肉眼で観察可能である。この部分には微弱な光沢面は認められるが、明確な使用痕は確認できなかった。顕微鏡下では錐先の先端部のみに使用痕光沢面と線状痕がみとめられ、摩滅して丸みをおびた部分ににぶい光沢が分布している。線状痕は明らかに回転運動を示唆する方向に走っている。

まとめ

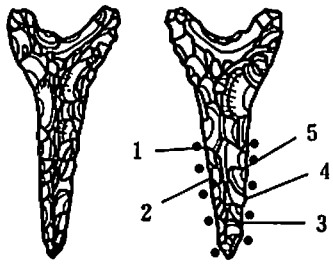
３点の石錐には、分布状態は異なるが、すべてに使用痕光沢面と回転運動を示す線状痕がみとめられた。いずれの使用痕も光沢はにぶく、多数のピットや線状痕を伴っており、微細な凹凸はあるものの全体として摩滅して丸みをおびた面に形成されているといった共通点がある。梶原・阿子島（1981）によるパターン認識ではＥ２タイプにもっとも類似していると考えられ、主たる用途は皮革の穿孔であった可能性が高い。

しかし、個々の光沢面はそれぞれ異なる側面も持ち合わせており、実験石器の使用痕と完全に一致しているわけではない。No.3935の光沢面には、ピットにかなり大きなものがあり表面も荒れ気味のため、Ｄ２タイプにも類似する箇所もある。また、No.2668・2516ではピットの内部も光沢を持っているものがある点などが気にかかる。皮以外の被加工物に対して用いられた可能性や風化程度への配慮も必要であり、また被加工物が皮だとしてもNo.3935のように先端からかなり奥まで使用痕が認められるものについては、その具体的な利用法も決して単純ではなかったことを示しているといえよう。

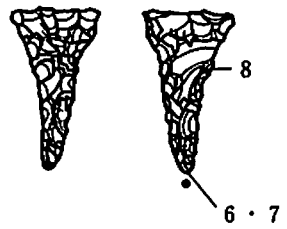
引用文献

梶原　洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究―ポリッシュを中心とした機能推定の試み―」『考古学雑誌』67-1，pp.1-36.

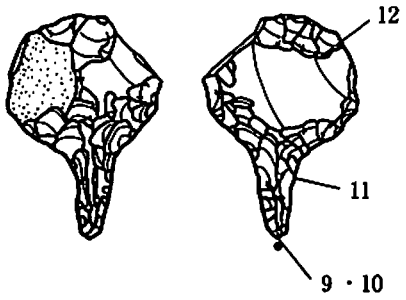
Keeley L.H. 1977 The functions of paleolithic flint tools. Scientific American 237-5, pp.108-126.



No.3935(頁岩)



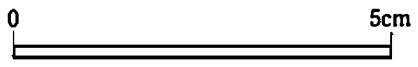
No.2668(頁岩)



No.2516(頁岩)

凡例

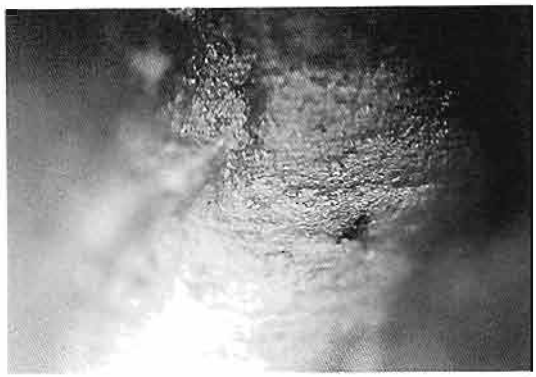
- 使用痕光沢面が観察される範囲



(写真の1～12はそれぞれの拡大写真である)

第256図　石錐拡大写真の部位

1

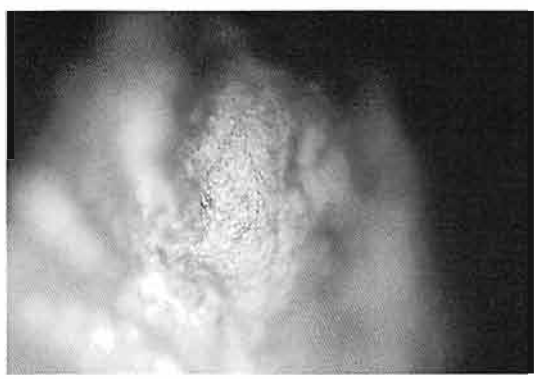


2

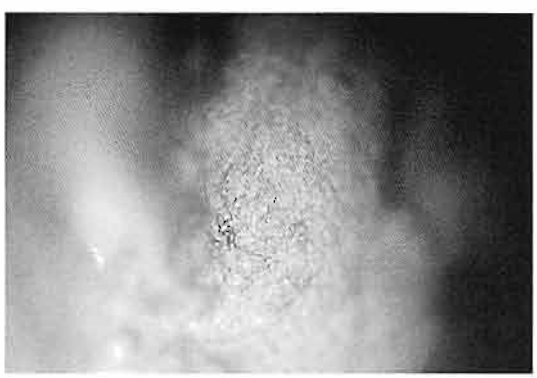
3

4

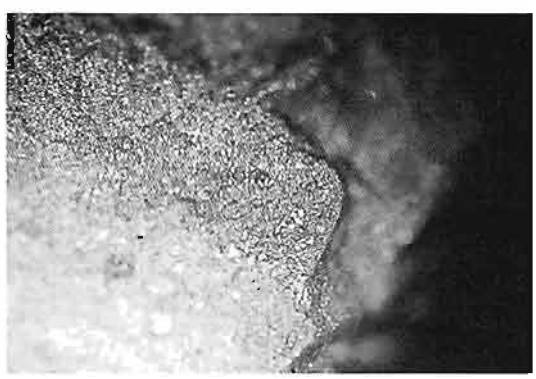
5



6

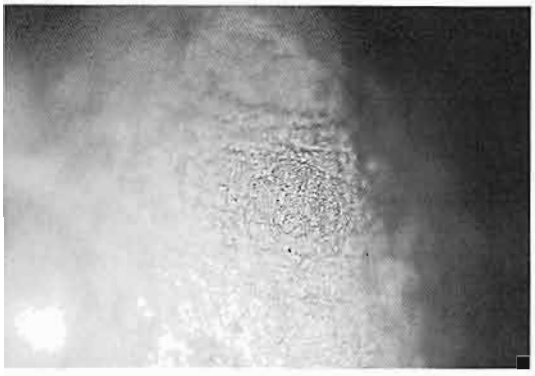


7

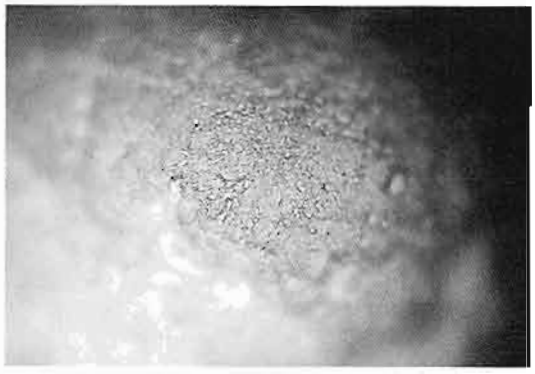


8

写真図版15　石錐の使用痕拡大写真１



9



10

11

12

写真図版16　石錐の使用痕拡大写真 2

7．岩手県、清田台遺跡出土アスファルトの成分分析

株式会社 古環境研究所・小笠原正明（北海道大学高等教育機能開発総合センター）

1．はじめに

天然アスファルトは耐水性に優れ、また接着力に富むため、縄文時代中期から晩期にかけて接着剤として重要な役割を果たしていた1)。しかし、産地は東日本の日本海沿岸にある石油鉱床地帯に限られているので、その他の地域で見つかるアスファルトは原産地から持ち込まれたものということになる。アスファルトは多様な有機物の混合物であるため、長い間分析ができないと思われていたが、1998年にパラフィン成分のマススペクトルのＺ数解析法が開発されてから定量的な分析が可能となった2)。この手法により、縄文時代の原産地として秋田県二ツ井、新潟県新津の二ヶ所が確定され、ここで産出するアスファルトについて詳細な測定が行われている。また、東北や新潟県の遺跡から発掘されたアスファルト数十点についても分析と分類が行われている。

ここでは、岩手県清田台遺跡出土の４点のアスファルトについても同様の手法を用いて分析を行った。

2．実験

各試料から少量をとって元素分析を行った。別に約0.6gずつとり、ベンゼン-メタノール混合溶媒に溶解した。ろ過により不溶分を除いた後、溶液の溶媒部分を減圧蒸留で除き、n-ヘキサンに溶かした。ろ過により不溶分のアスファルテンを除き、減圧蒸留で溶媒を除き、残ったオイル分をHPLCによりパラフィン成分(Fr-P)、一芳香環成分（Fr-M)、二芳香環成分（Fr-D)、極性成分（Fr-PP）に分割した。このうちパラフィン成分について、FI-マススペクトルを得た。質量分析装置はJEOL-JMS-SX102Aを用いた。

3．結果と考察

元素分析の結果を表１に示した。Ｃ原子数に対するＨ原子数の比が１を超えている場合、アスファルトであるとしても矛盾はない。４点の試料はいずれもこの条件を満たしていることがわかる。

得られたマススペクトルの一つを図１に示した。分子量400付近にピークがあるのは他の３点も同様で、これまで分析したアスファルトの特徴と一致する。

これを炭素環の数に対応するＺ数ごとに分割した。Ｚ数とは、パラフィン成分をC_nH_{2n+z}とした時のＺで、分子量とＭ＝14n+Ｚの関係にある。分割したスペクトルのうち、Ｚ＝－６（４環）に対するＺ＝－８（５環）の成分の比をとり、Ｒ値として表２に示した。産地については標準偏差も載せてある。また、各産地のＲ値との差を標準偏差で割った相対偏差も示した。絶対値が３を超えた場合、その産地のものではないとみなしている。いずれも秋田県二ツ井産アスファルトに対して相対偏差が３を超えており、この系統のものではないことがわかる。一方、新潟県新津市産アスファルトとは相対偏差の絶対値が0.0095から1.554となっており、こちらの産地である可能性は残る。

この結果を過去の試料の分析結果と共に地図上に示したのが図２である。清田台遺跡も含め、秋田県中部から岩手県南部にかけて新潟県新津市産の可能性が考えられる試料が分布していることがわかる。その中には付近にアスファルト産出地の存在する昭和町の試料も含まれているため、この産地のアスファルトである可能性も考えられる。ただ、昭和町の試料には秋田県二ツ井に近い性質のものも存在するため、曖昧さは残る。

結論としては、清田台のアスファルトは秋田県二ツ井から持ち込まれたものではなく、今の時点では可能性として秋田県昭和町近辺、あるいは新潟県新津市のアスファルトであることが推定される。

謝辞

この研究にご協力いただいた北海道大学機器分析センター、同農学部ＧＣ-ＭＳ＆ＮＭＲ室、同大学院工学研究科の宮尾晃氏に感謝します。

参考文献

1）我孫子昭二（1986）「アスファルト」『縄文文化の研究』８：205-222頁、雄山閣

2）小笠原正明（1999）「縄文時代の交易―アスファルトがたどった道」『化学』９月号：28-30頁

清田台遺跡出土アスファルト一覧表

No.	遺構名・グリッド名	層位・位置	備　考
1	28号住居	Pit50上の床面	鑑定　　土器の中
2	28号住居	Pit17埋土中	未鑑定
3	25号住居	床面	鑑定
4	26号住居	埋土中	鑑定
5	38号住居	貼り床の土の中	鑑定

表１　元素分析の結果

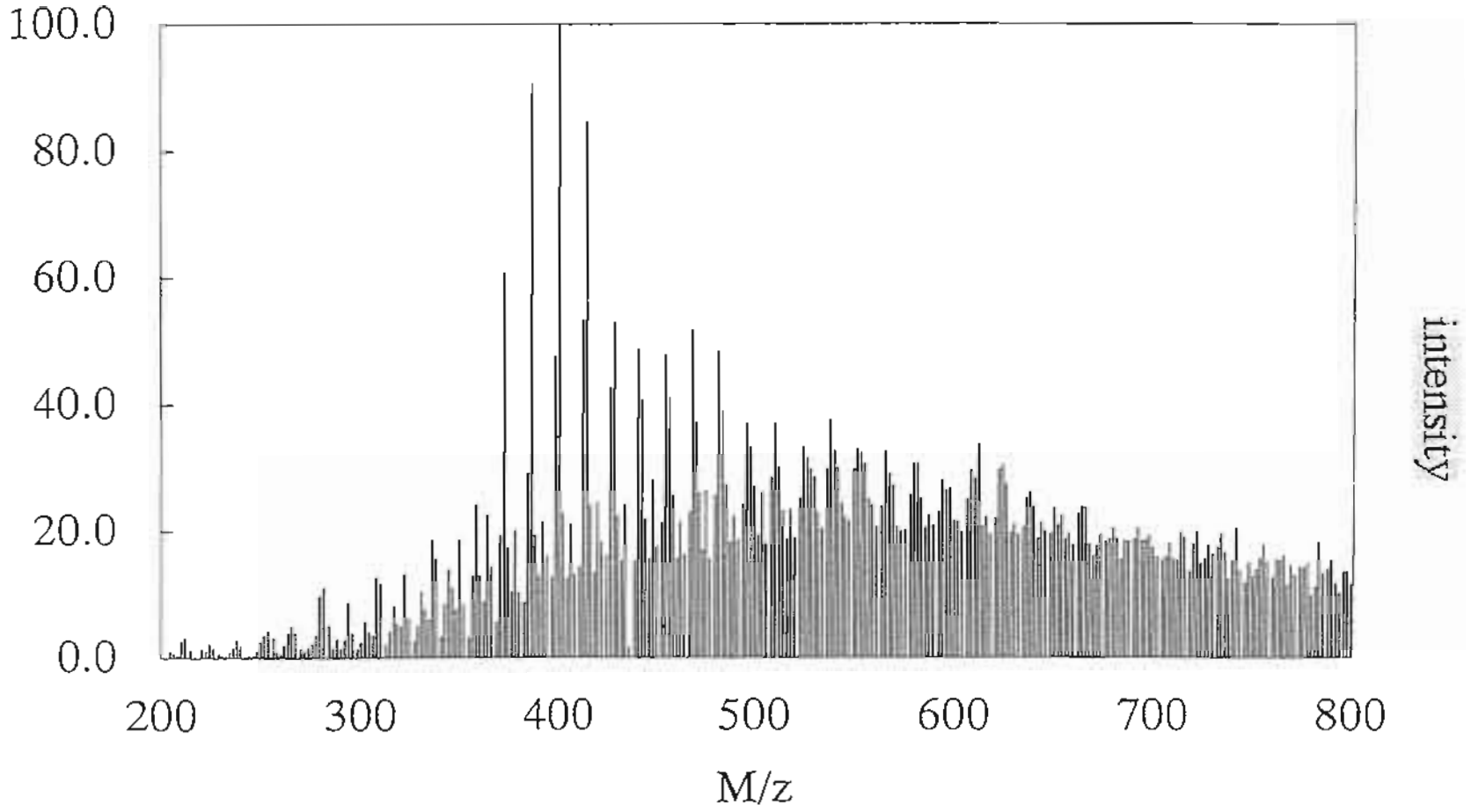
試料名	C（%）	H（%）	N（%）	S（%）	H原子数/C原子数
清田台No 1	81.22	8.69	1.39	0.80	1.27
清田台No 3	71.64	7.67	1.36	1.85	1.28
清田台No 4	54.60	5.99	1.45	0.69	1.31
清田台No 5	62.60	6.44	1.22	0.63	1.23

アスファルトならばC原子数に対するH原子数の比が1以上

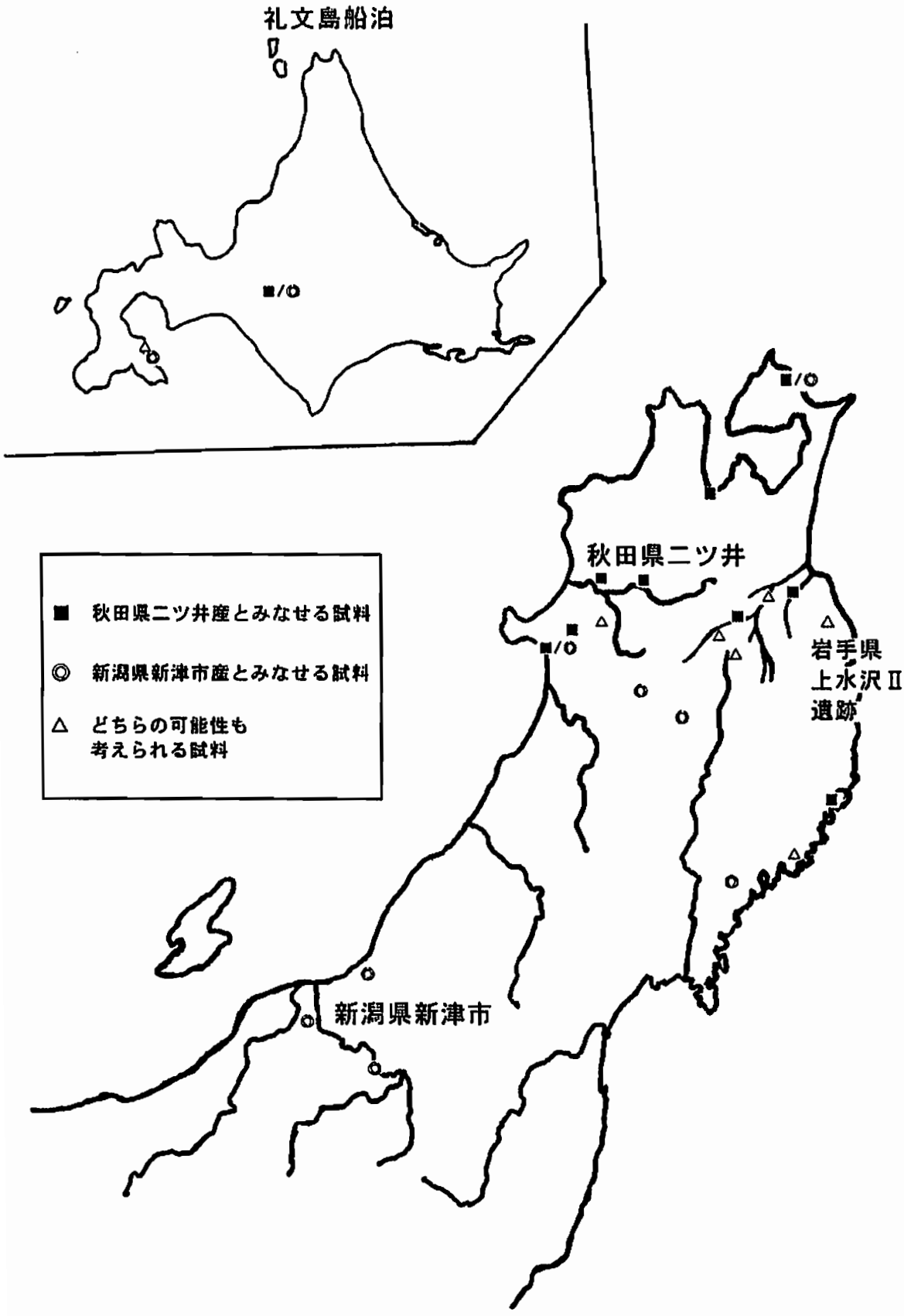
表２　R値と産地の試料に対する相対偏差

県名	遺跡及び原産地名	R値	新潟県新津市試料に対する相対偏差	秋田県二ツ井試料に対する相対偏差
秋田	秋田県二ツ井駒形地区	0.632±0.036	-3.386	-
新潟	新潟県新津市大入地区	0.837±0.060	-	5.275
岩手	清田台No 1	0.831	-0.095	5.468
	清田台No 3	0.760	-1.263	3.530
	清田台No 4	0.743	-1.554	3.048
	清田台No 5	0.807	-0.500	4.797

表中下線部は相対偏差３以上のものを示す。対応する産地のものではないとみなせる

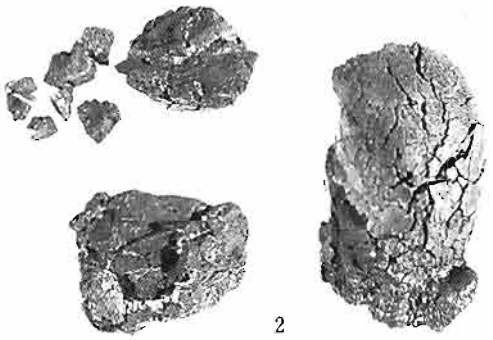


第257図　清田台遺跡No.5のパラフィン成分のマススペクトル



第258図　過去に分析の行われたアスファルトの分布図

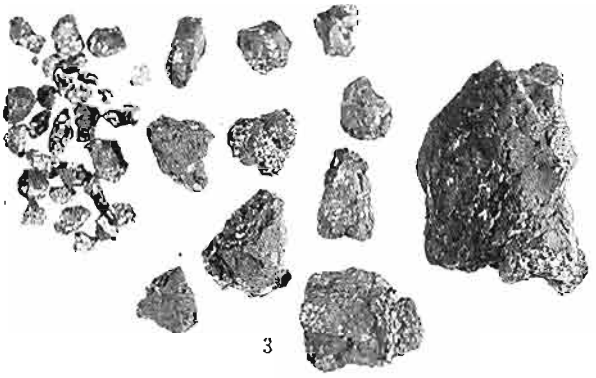
横から



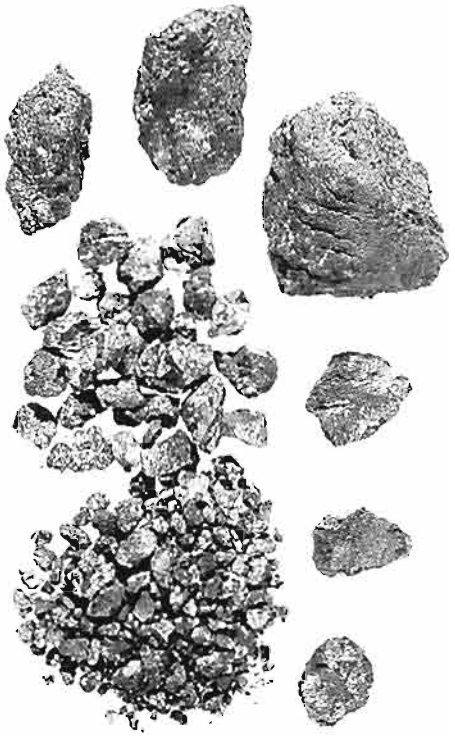
2

1

上から



3



4

表 面

5

横から

S=1/2

写真図版17　出土アスファルト

報告書抄録

ふりがな	きよただいいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	清田台遺跡発掘調査報告書
副書名	ふるさと農道緊急整備要害地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第412集
編著者名	小原眞一
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853 岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL019－638－9001
発行年月日	西暦2003年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
清田台遺跡	岩手県東磐井郡千厩町清田字台2-3ほか	03423	NF91-1291	38度55分34秒～37秒	141度21分53秒～57秒	19990701～19991109 20000717～20001130 20010411～20010706	2,918m² 580m² 797m²	「ふるさと農道緊急整備」に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清田台遺跡	集落	縄文時代	住居跡 53棟 炉跡 11基 焼土 15基 土器埋設遺構 3基 石斧埋納遺構 1基 土坑 22基 配石遺構 1基 土坑 29基 柱穴状土坑 多数	縄文土器前期末・中期・後期・晩期（中期主体） 石鏃・石錐・石匙など	集落の西側に中期中葉の捨て場

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集

清田台遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業要害地区関連発掘調査

（第２分冊　遺物編）

印刷　平成15年３月13日

発行　平成15年３月20日

発行　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853　盛岡市下飯岡第11地割185番地

電話（019）638-9001・9002

FAX（019）638-8563

印刷　株式会社　吉田印刷

〒020-0016　盛岡市名須川町23番27号

電話（019）625-2323

FAX（019）697-7727

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003